機動戦士ガンダム SEED Destiny ～BlumenEinbrecher～

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダム　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

【Ｎコード】
Ｎ１４１５Ｓ

【作者名】
後藤正人

【あらすじ】
　人が人を滅ぼしかけた戦争を経てもなお人々は争いをやめようとはしなかった。人は人の無理解を嘆き、人は人の悪意を恐れる。人の血を糧として、人の争いを土壌に花々が咲き乱れる。人の暗き願いを吸い上げたその花は、互いの美しさを競い合う。これは人々が望んで咲かせた花々の物語。美しくも作為的な花々の物語。＊これは機動戦士ガンダムＳＥＥＤの２次創作であるＢｌｕｍｅｎＧａｒｔｅｎの続編にして完結編です。そのため、ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔ

ｉｎｙの2次創作の形こそ採りますが設定から内容まで大きく異なっています。よって、原作を知っているという方はかえって前作をご覧いただくか、設定資料集を読み済ませることをお勧めいたします。

第1話「戦争と平和」

世界のために戦いたいだとか、もう自分のような人を増やさないためだとか、そんな理想を抱いて軍人になったわけじゃない。

これしか生きていく方法がなかった。ただそれだけのことだった。

そうして俺は、俺から母さんを奪った軍人になった。

暗い。宇宙の暗さをそのまま反映する形ですべてが闇に包まれていた。身の回りで計器の発するわずかな光だけがまるで星のように小さく瞬いている。

操縦桿を握りしめる手。フット・レバーを踏みつける足の感触だけがここがコクピットの中なのだと教えてくれる。

特に意味もなく、ヘルメットの内部電灯のスイッチを入れる。明るい光がヘルメット内に灯され、しかしそれは外の暗さを強調するでしかなかった。フェイズ・ガードに光が反射し、鏡のように作用した。

フェイス・ガードに写されたのは少年の顔である。向かって左側、左の頬に大きな痣があって、どこか目つきが悪い。それは目鼻立ちの特徴というよりも、いつも不機嫌そうに目を細めていることに原因がある。

自分の顔ながら、いつまでも見ていたいものでもない。ライトを

消す。そのタイミングで通信が入った。

「シン・アスカ軍曹、発進準備、お願いします」

若い女性の声である。名前はアビー・ウィンザー。地球上に国土を持たない宇宙の国プラントの軍隊であるザフトの軍人である。少年が所属する部隊の管制員を担当している女性だ。

シン・アスカ。

呼び上げられた少年の名。しかし少年はそれに何の感慨も示すことなく、操縦桿を握る手に力を込めた。

視界の四隅から光が一直線に放たれる。それは四角く空間を切り取って、ここがカタパルトの上であることを知らしめる。光が導く先には宇宙の闇が広がる。暗闇のカタパルトの上では、２０ｍほどの鋼鉄の巨人が姿を見せぬまま腰を屈めた。

そのコクピットの中で、シンは叫んだ。

「シン・アスカ、インパルス２、行きます！」

始まる加速。突き進む機体。シンの体は、混迷極める戦いの空へと投げ出された。

その戦争にまだ名はない。まだ終わりを迎えていないからだ。それを歴史上の出来事と片づけてしまうには、世界はその準備も気構えもできてはいなかった。

コーディネーターと呼ばれる遺伝子を調整され、生まれながらにして麗しい容姿と優れた能力とを約束された人々が建国した国プラント。そこは楽園になると期待されていた。

しかし、楽園は歪んでしまった。

大西洋連邦をはじめとする地球の国々はプラントの完全独立を認めようとはしなかった。

そして、プラントはその理想に毒されていった。

C．E．６１年に発生した、コーディネーター排斥を謳う過激思想組織ブルー・コスモスによる核攻撃によって、プラント、ユニウス市第７コロニー、ユニウス・セブンが破壊された。後に「血のバレンタイン」と呼ばれるこの事件は２０万を超える死者を出し、両勢力の決裂を決定的なものとした。

その４年後、C．E．６５年、プラントは無差別報復を開始する。ニュートロン・ジャマーと呼ばれる中性子ビーム抑制装置を地球全土に警告なしに投下したのである。原子力発電を封じられた地球では慢性的なエネルギー不足に見舞われ、少なくとも１０億の人がその命を落とした。

C．E．６７年。この年に戦争が始められたのは、至極当然の成り行きであった。

当初、１０倍を超える国力差から大西洋連邦軍の圧勝が予期されていた。しかしザフト軍はモビル・スーツと呼ばれる人型兵器を導入、その優れた技術力で戦争を圧倒的優位に進める。

その後3年にわたってザフト軍優位に進むも、国力の差は如何ともしがたいものであった。戦線は膠着。ザフト軍は補給線が伸びきり、大西洋連邦は反撃の糸口を見いだせずにいた。

それを変えたのは1人の技術者の登場であった。

ゼフィランサス・ズール。大西洋連邦に本社を置く軍事企業ラタトスク社の技術者であり、ブルー・コスモスの幹部とも関係の深い才女である。ゼフィランサスが開発した機体群は優れた性能を発揮し、その技術を転用する形で兵器の高性能化、高火力化が進められていくこととなる。

大西洋連邦軍もモビル・スーツの量産化に成功し、ザフト群はビームという破壊力に優れた兵器を手に入れた。

そして、さらなる力が解き放たれる。プラントへ亡命したゼフィランサスは、プラント最高評議会議員であるとともに技術者としても知られるユーリ・アマルフィ議員の協力の下、ニュートロン・ジャマーを無効化するプレア・ニコルの開発に成功。

戦況はさらなる苛烈さを深めることとなる。

大西洋連邦軍は核の封印を解いた。ザフト軍は大量破壊兵器ジェネシスを使用し、あわや地球全土を焼き払う寸前にまで戦いは激化した。

戦いは壮絶な痛み分けとなった。双方が戦力の大多数に深刻な損害を与えられ、なし崩しに休戦へと向かうこととなった。

C．E．７２．２．１４。すべての始まりの地であるユニウス・セブンの残骸の上で両国による休戦条約が締結された。これまでの戦闘があまりに加熱しすぎたことの反省として、モビル・スーツ保有台数の制限などを盛り込んだこの条約は第３国であるスカンジナビア王国の仲介によってとりまとめられた。

戦争がこれ以上不要な犠牲を出さぬよう、戦いがこれ以上続かぬよう淡い期待をかけられたこの条約は、しかし平和を約束するものでは決してなかった。

続く戦争。最前線ではいまだに小規模な戦闘が散見され、休戦の名を借りた兵器の開発競争は苛烈さを極めた。

戦いは決して終わりを迎えてなどいない。

休戦条約から3年を経たC．E．７５年現在でもまだ、人々はナチュラルとコーディネーターに分かれて戦いを続けていた。

ナチュラルはコーディネーターを遺伝子を操作した化け物と蔑み、コーディネーターはナチュラルを劣等種と見下しながら戦いは続いていた。

ゼフィランサス・ズールが生み出した機体群、その名はガンダム。この戦場にさらなる破壊と戦火の種を撒いた機体の名はガンダム。

ガンダムもまた、戦いを彩る主役の座から引きずりおろされてはいなかった。

新造コロニー、アポロン。

大戦勃発以後、宇宙ではコロニーの大規模建造は行われてはこなかった。プラントには領土を拡張するほどの余力はなく、地球連合各国は徒にプラントを刺激することないようその建造を控えたためである。

しかし、まったく行われていないわけではない。

プラント船籍の航路とは関わらない場所に軍事目的に転用不可能な小規模コロニーの建造は細々と続けられていた。

ここアポロンはユーラシア連邦の所轄する建造途中のコロニーである。典型的なシリンダー型コロニーであり、その姿は宇宙に浮かぶ両端が開いた筒である。内部は完全な空洞であり、内壁にはいまだ数えるほどの建造物しか設置されていない。

単なる非軍事コロニーである。たとえ戦争状態が継続されていようと、戦闘とは無縁。作業用小型ポッド、ミストレルが各所に見られる。横倒しにした卵に手足を取り付けたようなミストラルは単なる作業用であり、ここアポロンが単なる民間利用のコロニーであることを印象づけている。

コロニーの中空に、ダーレス級ＭＳ運用母艦が停泊していることさえ除けば。

３年前の大戦でガンダムの運用母艦として活躍したアーク・エンジェル級の設計思想が随所に見られるハッチを前に二つ構えたブロックに戦艦が後ろからドッキングしたような特殊な構造は、このダーレス級がモビル・スーツの運用と戦闘行為を目的であることを顕

示している。単なる民間コロニーであると呼ぶには、いささか不似合いな艦影であった。

周囲にはＧＡＴ－０１デュエルダガーの姿が散見される。簡素化された灰色の装甲に、右手のライフル、左手のシールドとごくありふれた装備を有するこのモビル・スーツは、それぞれが拡散してコロニーの壁にとりついている。

臨戦態勢ではない。警戒態勢をとっているのだ。

ただ、さほど慎重さは感じられない。１機のデュエルダガーはシールドを持つ手を振り、遠くの仲間に合図を送っているような仕草を見せていた。マニュアルにはない、単なる遊びである。

いくら戦闘が散発しているとは言え、このような僻地でまでザフト軍が戦闘を仕掛けてくるとは誰も考えてはいないのだ。

完成したコロニーのように土が盛られている訳でもない打ちっ放しの鉄板の上を、２０ｍにも及ぶ巨人が歩く。いまだ擬似重力の発生はされていないコロニーの内壁は相対的には静止状態にある。

デュエルダガーは推進剤の節約のため、内壁を歩いてコロニーの縁を目指していた。

まだ蓋は閉められていない。コロニーの巨大な円に縁取られた空間には、宇宙の星々が輝いている。その輝きの中に星とは異質な輝きが含まれていることに、デュエルダガーのパイロットは気づけないでいた。

７０ｔにも及ぶモビル・スーツの足が内壁を踏みつけた時、静寂

はあっさりと崩壊した。

赤熱する金属板。形を失って足下から膨れ上がった光が爆発へと姿を変え、デュエルダガーを瞬く間に呑み込んだ。

音を伝えぬ宇宙は静寂を保ったまま、しかし各モビル・スーツの間ではけたたましい警報音が鳴り響いていた。

デュエルダガーの姿は爆煙に包まれ完全に姿を消している。通信にも応じる気配がない。重力がないため好き勝手な方向に四散していく煙を眺めながら、スラスターを吹かせた警備のデュエルダガーたちが集合しつつあった。

何が起きているのか。そう考えるデュエルダガーはすでに行動が後手に回っていた。何かが起きていると行動しなければならなかったのだ。

煙の中から一筋の光が伸びた。戦場に一度でも出たことがある者ならば見たことがないはずなどないビームの輝きが致命的な威力をもってデュエルダガーを目指す。とっさにシールドを構えようと、シールドはビームの一撃に斬り裂かれ、その余熱は左腕を破壊する。続いて煙を裂くビームの一撃は腕を失った胸部ジェネレーターを直撃し、派手な爆発を引き起こした。

敵が煙の中に潜んでいる。デュエルダガーたちは一斉にビームを放つ。量産型のライフルとは言え、従来の兵器の3倍の破壊力を有するビームは煙に突き立てられるなり次々と爆発を巻き起こす。発生した爆煙はさらに大きく視界を覆ってしまった。

これでは敵の姿を確認することさえできない。

止む攻撃の手。爆煙もまた収まる気配がない。

煙が膨らんだかと思うと、それは一直線に柱となってデュエルダガーを目指した。

何かがいる。

煙が引きはがされ、それは姿を現した。

モビル・スーツである。胸部から肩にかけて青が鮮やかで、全体としては白を基調としている。兵器らしからぬその色はパイロットたちを驚愕させた。かつて、その高性能故に広く知られることとなった機体群もまた、独特の色調が施されていた。

何より、額に2対のブレード・アンテナを備え、2つのデュアル・センサーを有するその顔はひどく擬人化されたものであり、その機体群の特徴を如実に示していた。

両手にモビル・スーツの身長ほどもある巨大なビーム対艦刀を装備したそれは、実体の刃の代わりに生じているビームの刃を振るうと、たやすく1機のデュエルダガーをシールドごと胴裂きにする。

生じる爆発。再び姿が爆煙の中に隠れて消える。

しかし、すぐさま煙を抜け出すと、それは次のデュエルダガーへと襲いかかる。

デュエルダガーのパイロットは恐怖のあまり操縦桿から手を離し顔を庇うように手で覆う。スクリーンに目一杯に映し出される顔の

あるモビル・スーツの姿に、パイロットは叫んだ。

「ガ、ガンダム！？」

ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダム。ザフト軍が開発に成功した量産型のガンダムは、しかしガンダムとして定義される機構すべてを備えている。

ビーム兵器を備えること。

２機目のデュエルダガーめがけて頭上から2本の対艦刀を振りおろす。既存の装甲すべてをたやすく破壊するビーム・サーベルは肩からわき腹にかけて2筋の切断面をデュエルダガーに刻み込む。

フェイズシフト・アーマーに守られていること。

生じるモビル・スーツ1機分の爆発力にさらされながらも、損傷が発生したことを伝える警報音はコクピットに流れることはない。衝撃を拡散、吸収するミノフスキー粒子の層――Ｉフィールドと呼ばれる――に包まれた装甲は生半可な攻撃では傷つくことはない。

そして、アリスの加護に包まれていること。

補助システムの名はＡｄｖａｎｃｅｄ　Ｌｏｇｉｓｔｉｃ　＆ａｍｐ；　Ｉｎ－ｃｏｎｓｅｑｕｅｎｃｅ　Ｃｏｇｎｉｚｉｎｇ　Ｅｑｕｉｐｍｅｎｔ、

Ａ．Ｌ．Ｉ．Ｃ．Ｅと呼ばれる。周囲の状況を把握し、パイロットに伝える機構を有している。特に同じガンダム同士では専用の回線

を有し、インパルスガンダムではガンダム同士のより密な連携を可能としていた。

対艦刀を装備するインパルスガンダムが煙から姿を現すと、それに狙いを定めているデュエルダガーの姿がある。

インパルスは慌てることはない。煙に隠されていようと、敵の存在は知っていた。

別方向からの一撃がデュエルダガーの装甲を貫通する。まるで痙攣したかのように体を震わせ、デュエルダガーが爆散する。

攻撃のあった方向には、別のインパルスガンダムが脇に抱えるように大型のビーム・ライフルを構えていた。剣を持つものとは違い、バック・パックはスラスターを構える大型のものを装備している。

「シン、何ぼさっとしてるの？」

この通信はライフルを構えるインパルスから、剣を持つインパルスへと送られてものである。

友軍機の位置はアリスによって正確に伝えられている。位置がわかっていたからこそ、デュエルダガーを進んで破壊する必要はないと判断したのだ。

剣のインパルスのパイロット、顔に痣を持つ少年、シン・アスカは不機嫌そうに声を通信機へと吹き込んだ。

「作戦中は名前で呼ぶなよ、ルナ」

シンはエイブス隊の2号機のパイロットであり、作戦中は主にインパルス2の名称で呼ばれる。シンがルナと呼んだ相手はルナマリア・ホーク。インパルス3である。

コクピットのスクリーンにはシンと同じく赤いノーマル・スーツを身につけた少女の顔が映し出されている。赤い髪をした少女は、戦場のただ中でさえどこか楽しげに笑っていた。あか抜けた様子のルナマリアは、機会をうかがってはシンをからかおうとしてくる。

そのことへの反感は、後に回すべきであるようだ。

スクリーンにはデュエルダガーの姿が映し出されていた。シンの機体から見えてはいない。ルナマリアの機体が捉えた敵機の位置がアリスを通じてシンに伝えられているのだ。

シンはフット・ペダルを踏み込んだ。1対の大剣を所持するインパルスガンダムが加速し、たなびく爆煙を吹き飛ばして進むと、そこには間違いなくデュエルダガーの姿があった。

「こんな旧式ごときで！」

シンは対艦刀を敵へと、真空を断絶させながら叩きつける。

戦闘が続けられるコロニーのその奥に、ダーレス級ＭＳ運用母艦ガーティ・ルーは静かに浮かんでいた。

そのブリッジではコロニー内部で発生した戦闘の様子がモニターに映し出されている。決して広くはないブリッジは、1段高くなっ

た場所に艦長席、及びオブザーバーのための席が用意されている以外、クルーたちは壁際に座っているという簡素な作りをしていた。

クルーと艦長との距離が近く、デュエルダガーが撃墜されているという報告は確実に艦長の耳に届いていた。

地球連合軍の白い軍服に身を包み、軍帽を深々とかぶった男である。如何にも堅物を思わせてその表情は堅く、張り付けた雰囲気を演出していた。

イアン・リーはガーティ・ルーの艦長である。その胸には少佐であることを示す階級章がある。しかし、彼の立場をより強く印象づけるのは、左腕に巻かれた青いスカーフだろう。これは、反コーディネーター思想団体、ブルー・コスモスのメンバーである証であった。

「状況は？」

「ストライクもどきです。数は２です！」

クルーの報告通り、ブリッジのモニターには２機のガンダムが写されていた。２機はコロニーの外れで戦闘を行っていた。

ストライクもどき。それを地球連合軍はストライクもどきと呼称していた。ＧＡＴ－Ｘ１０５ストライクガンダム。Ｃ．Ｅ．７１年に開発されたこの機体は５０近い敵機を撃破し、未だに大西洋連邦軍製モビル・スーツの先駆けとして語られる機体である。その特徴はストライカーと呼ばれる３種のバック・パックを交換することで機体の性質を一変させることにある。これと同じ特徴を持つＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムは単なる猿真似であるとして、スト

ライクもどきの呼称が軍内では好んで使用された。

イアンは目を細める。それは奇襲を仕掛けられたことへの苛立ちではない。単純な疑念である。

いくらガンダム・タイプとは言え、わずか2機。奇襲を仕掛けられたということは、それだけ規模の小さい部隊であるということを意味する。それが正面切って戦いを仕掛けてくるとは考えにくい。

「陽動ということか」

どこかに残りの敵が潜んでいる。索敵を密に。そう指示を出している最中、艦長席後方の扉が開いた。スライド式の扉特有の音がして、イアンの鼻にはすぐに花の香りが届いた。すぐ隣のオブザーバー席の背もたれに手をついて体を止める少女の姿が目に入った。

無重力に漂う髪は波立つ桃色。豪奢に飾り付けられたスカートに隠される足にまで届くほどの長さである。全身をフリルとリボンで装飾された純白のドレスで飾りたてられた人形のような少女である。すでに歳は19を数え、少女から女性へと開花を始めた流麗な鼻梁は、しかしいまだに少女という言葉がよく似合う。

座席の背もたれに手を突いたまま、着飾ったドレスほどには鮮やかでない表情を少女はイアンへと向けた。

「リー艦長？」

戦闘に巻き込まれたご令嬢ではない。少女、ヒメノカリス・ホテルはオブザーバーの席へと慣れた様子で座る。すぐにモニターを立ち上げ、戦いに臨む冷静な指揮官へと変わる。

イアンは戦艦にあまりに不釣り合いな少女の姿に顔色一つ変えることなく、その声音もあくまでも事務的なものである。

「ストライクもどきが少なくとも2。こちらは旧式のデュエルダガーしかありません。ご足労いただけませんか？」

デュエルダガーは休戦条約以前にその生産性の高さから主力を担っていたというだけの機体にすぎない。性能不足もさることながら、新機軸の設計思想が投入された第2世代型モビル・スーツにはあらゆる点で劣っているのだ。

ヒメノカリスは口元に軽く手をやって、何か考えごとをしている風であったかと思うと、おもむろにオブザーバー席に備え付けられたモニターを立ち上げた。総数は3。それぞれに少年少女が1人ずつ映し出されている。

「3人とも、準備はいい？」

「ああ、いつでもいけるぜ」

1人目は少年。尖った髪型に細長の瞳。どこか剃刀を思わせる少年は、しかしヒメノカリスに対してはそのまなざしもどこか柔らかい。

スティング・オークレー。それが鋭い少年の名。

「ヒメノカリス姉ちゃんに見せてやるよ。俺が格好よく敵を倒すとこをさ」

2人目も少年。人なつっこい笑みを浮かべて、スティングとは対照的に柔らかい印象である。甘え上手な微笑みでヒメノカリスの歓心を少しでも引こうとしていた。

スティングとは違う少年は、アウル・ニーダ。

3人目からは反応がない。モニターの奥で少女が小さく不安げな表情を作っていた。年齢の割には表情が落ち着きなく豊かで、どこか子犬のような印象を与える少女である。ステラ・ルーシェ。その名前で、ヒメノカリスは声をかけた。

「ステラ、大丈夫？」

自分を奮い立たせるくらいの間を空けて、ステラはその顔を強ばらせながらヒメノカリスと視線を合わせる。

「大丈夫。ステラも戦える」

自信に満ちたスティングと嬉々としたアウル。ステラは強がりながらも戦士の顔を作っている。

「3人とも無理はしないで。わかった？」

まるで母が子にたしなめるように。

「おう」

「りょーかい」

「うん」

「全機、出撃を許可します」

ヒメノカリスのその言葉に、３人は手慣れた様子で敬礼をしてみせる。その様子にヒメノカリスは口元のほんの少し綻ばせた。

そのことに気づいた者は誰もいない。すぐ横に座るイアンとて気づかぬまま、この艦を預かる艦長として尋ねた。

「ホテル大尉は如何なさいます？」

「たかだかインパルスガンダム程度。私が出るまでもない」

その頃には、ヒメノカリスの顔は表情に乏しい冷徹な指揮官然としたものに戻されていた。

ルナマリアのインパルスガンダムが装備する緑色をしたバック・パック――ブラスト・シルエットと呼ばれる射撃に特化した装備である――に備え付けられた大型ライフルの銃底部分、ちょうどそこに設置された小型ミサイルがインパルスの肩越しに一斉に放たれる。

シールドを構えるデュエルダガーたちはミサイルをしっかりと受け止めると、それでも爆煙に視界をふさがれたはずだ。

シンは一挙に距離をつめる。

ソード・シルエット。それがシンのインパルスに装備されているバック・パックの名前である。対艦刀の台座である以外にも広く横

へ開いた赤い安定翼そのものが輝きながら推進器としても機能する。インパルスは素早い加速でデュエルダガーへ接近すると、シールドで庇い切れていない右腕の側からの攻撃で胸部ジェネレーターを直接斬り裂く。

インパルスガンダムの備えられた3種の換装機構、シルエット・システム。その中でシンは近接戦に特化したソード・シルエットを使うことを好んだ。同僚のルナマリアはブラスト・シルエットを得意とし、2人の相性は決して悪くはない。

射撃機が牽制し、近接戦に優れた機体が強力な一撃を叩き込む。この戦法は現在において最も確立された戦法であるだけに、敵の対応も素早い。

ルナマリア機を警戒しながらも攻撃の目標をシンに絞っている。ビームが次々と飛来し、シンがかわす度、コロニーの外壁が赤く燃え上がる。

かわせないとは思わない。シンのインパルスはソード・シルエットの安定翼を輝かせながらなめらかで迅速な動きでビームの網をくぐり抜ける。

ユニウス・セブン休戦条約以後、モビル・スーツの性能の中で最も発展したのは攻撃力でもなければ防御力でもない。機動力そのものである。旧式のデュエルダガーで第2世代に属する――しかもガンダムである――インパルスを捉えることなどできない。

だが、接近の手だてを封じられてしまったことも事実に他ならない。

「隊長からの連絡は？」

シンは自らの声に焦りが含まれていることを自覚する。このまま決定打もないまま時間を稼がれてしまえば敵方の増援が到着してしまう。いつまでもかわし続けることなんてできるはずがない。

「マッド隊長？　マッド隊長！？　駄目、繋がらない」

ルナマリアが呼びかけているのはマッド・エイブス小尉。シンたちの舞台の隊長である。はじめから別行動の予定であったとは言え連絡さえつかないのは異常である。

そして呼びかけ続けることもできない。

通信機を通してルナマリアの短い悲鳴が聞こえた。見ると、肩の装甲に被弾したらしく、フェイズシフト・アーマーの輝きが見えた。フェイズシフト・アーマーは攻撃を受けた際、そのエネルギーを吸収し、光として拡散放射する。ルナマリアの装甲の発した輝きは強く、深刻ではないにしろ、ビームという大火力兵器の直撃を受けたことを意味していた。

徐々に相手の攻撃の精度が上がっている気がする。どうやら、体勢を取り戻しつつあるようだ。奇襲というアドバンテージは失われつつある。

こうしている内にも際どいところをビームが通り抜けた。

「ルナ、大丈夫か？」

「装甲が少し剥がれただけよ。それより、敵さんも必死ね。単なる

辺境のコロニーだと思ってたけど、隊長の読みが当たったってこと？」

「わからない。ただ、このままじゃまずい」

隊長が少しでも早く任務を達成してくれることを祈るばかりだ。仮に地球連合軍の重要機密がここに隠されているのだとしたら、果たして防備が手薄ということがあるだろうか。

「俺、隊長のところに行ってくる」

「ちょっと、私たちの任務は囮でしょ。まだ作戦時間はすぎてないんだし、行かない方がいいんじゃない？」

ルナマリアのインパルスが再びミサイルをばらまく。煙幕としての効果は十分であるが、相手はシンがいた方向にあたりをつけ、煙があることを構わず撃ち続けていた。偶然の被弾も考えられる十分な牽制であった。

同じ手は使えない。こうしている内にも事態は悪化している。

「敵の対応が想像以上に早い。嫌な予感がするんだ。それに、相手がデュエルダガーだけなら、戦力を集中させない方がいい」

仲間の承諾も聞かずに、シンはインパルスを加速させる。ソード・シルエットの赤い安定翼が強い輝きを放ち、インパルスを押し上げていく。

「まったくもう」

そんなシンに文句らしい文句を言うこともなく、ルナマリアは援護射撃をしてくれた。ブラスト・シルエットの大型ライフルの銃身を下から前へと弧を描いて回転させ、両脇の下に1丁ずつ構える。通常のライフルよりも太いビームの輝きが煙を突き抜けデュエルダガーたちの間を通り抜ける。

敵の関心がそのビームに集中した頃合いを見計らい、シンは彼らの頭上を通り抜ける感覚で煙を突き抜け加速する。

フェイズシフト・アーマー。ミノフスキー粒子と呼ばれる微細な帯電粒子を装甲に塗布し、衝撃の緩和、拡散吸収を行わせることで強固な防御力を獲得した装甲の総称である。ゼフィランサス・ズールなる技術者によって確立されたこの技術は、同じ技師の手によってさらなる発展を見た。

ミノフスキー粒子の膜、Ｉフィールドが帯電する性質に着目し、フェイズシフト・アーマーに用いられているＩフィールドとは反対の電位を有するＩフィールドを噴射。その2層の静電気的な反発力を利用することで装甲そのものを推進器とすることに成功したのである。

ミノフスキー・クラフトと呼ばれる推進器はその特徴としてフィズシフト・アーマーに輪をかけて消費電力が大きいため、それを全身に装備できる機体は限られていることが挙げられる。そのため、この恩恵にあずかりたいと願う機体の多くは一部の装甲にのみ採用するなどして妥協点を探る試みがなされている。

ザフト軍最新鋭の量産機であるＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガン

ダムでも例外ではない。シルエットと呼ばれるバックパックの一部にミノフスキー・クラフトを搭載することで稼働時間の確保と機動力の向上を両立させていた。

ミノフスキー・クラフトを搭載する機体は、まさに飛ぶように移動する。

未完成のコロニーの空に不釣り合いな戦艦が浮かんでいる姿を、マッド・エイブスはその目でとらえた。マッドは今、インパルスガンダムに搭乗し、戦艦の放つ対空砲火のただ中を縦横無尽に飛行している最中であった。

その背にはフォース・シルエット。横に伸びたウイングがミノフスキー・クラフトの輝きを放つ。３態存在するシルエット・システムの中で機動性に優れ、ビーム・ライフルとシールドを常備することかた最も汎用性に長けた装備である。

緑のノーマル・スーツを身につけたマッドは、角張った無骨な顔つきのその上で鋭い眼差しを眼下の戦艦へと向けていた。

「こんな民間コロニーにダーレス級とはな。やはり、ここは疑わしい！」

地球連合軍が使用するモビル・スーツ搭載空母としてありふれたものであるが、工作艦では決してない。

曳光弾の中を潜り、時には真横へと機動するなどスラスター推進ではあり得ない動きを披露しながら、エイブス機は汎用ライフルを向ける。

放たれたビームは一直線に戦艦のバルカン砲に命中し、土台ごと派手な爆発で呑み込んだ。

戦艦でモビル・スーツを落とすことなど、ガンダムを落とすことなどできはしないのだ。

ウイングを輝かせて――ミノフスキー・クラフトが機能している証である――マッドはその場を離れる。戦艦の反撃が殺到する頃には、マッドのインパルスはまったく別の場所にいる。

いつまでもこんなお遊びを続けている暇はない。早くブリッジを破壊しなくてはならない。

そんな決意をくじくように、警報が鳴った。アリスが戦況の変化を察し、そのことをマッドに伝えてきたのだ。モニターにはダーレス級の先端に取り付けられたカタパルトのハッチは開かれていた。

すでに敵のモビル・スーツは出撃している。しかし、その姿はない。アリスが後方からの攻撃があることを告げていた。

インパルスを飛びのかせ、宙返りでもする要領で後ろを向くとともにライフルを放つ。敵の放ったビームの輝きが頭上、先ほどまでマッドがいた場所を通り過ぎるのは見えた。

「新手か！？」

しかし、敵の攻撃に反撃する形で放ったビームが通り過ぎた頃には、そこに敵の姿はない。この機動性は、ある相手を示唆して不気味であった。

敵は素早く、そして足を止めることはできない。自然と相手の姿を正確に把握することができない。

「数は2、いや、3か……」

簡易レーダーを頼りに接近してくる機体を発見する。

それは奇妙な機体であった。緑を薄く乗せたような色をしたモビル・スーツの上に濃緑色をした大きな装甲が被さっている。硬質な質感と装甲の左右にアームで繋がれたシールドが蟹の腕にも見えることから、甲殻類を思わせる。被り物に取り付けられた1対のセンサーが巨大な怪物の目のようにこちらを見つめている。

教本で見せられた機体とよく似ている。その名前さえ思い出す暇もなく、マッドは直進してくる不用心な機体めがけてビームを放つ。

現存する装甲すべてを破壊可能であるビームは、それでも敵のシールドにたやすく防がれた。破壊できなかったのではない。ビームの軌道がシールドの手前でねじ曲げられ、敵の脇を通り抜けてしまったのだ。

驚く暇もなく反撃があった。甲殻類の装甲の両脇に装備されていた開放式の銃身がインパルスを捉える。レールガン。その武装の正体に気づいた時には、マッドは体に強い衝撃を覚えた。

ライフルは撃ち抜かれ、直撃を受けた左肩はフェイズシフト・アーマーの強烈な輝きを放ちながらも損傷はない。

アリスが無遠慮に新たな敵の襲来を告げる。上。今度は猛禽を思わせる姿をした褐色のモビル・アーマーがマッドめがけて急降下し

ていた。まさに鷲の爪を思わせる鋭利な鋼鉄製の爪が光り、その手の平と言える部分に銃口が開いている。

降り注いだ弾丸の雨がインパルスを燦然と輝かせ、フェイズシフト・アーマーに包まれていないシールドが根本の部分を破壊され、インパルスの手を離れる。

落ちていくシールド。まるでそれを追いかけるように猛禽のモビル・アーマーがマッドの脇を過ぎ去る。

武装を失い、しかし敵は一切の手を緩めようとはしない。言葉を失わせるほどの絶望が歩み寄る。

アリスが警報とともに示すモニターの中に、毒々しい緑をした機体があった。

右手にはバズーカ。左手には2連装の銃身を備えるシールド。バックパックから伸びる長大な火砲は左右の肩越しに一対。一見しただけでも5門の重火器を備える破壊力の怪物のような出で立ちである。

そして、ガンダムであった。特徴的なV字のアンテナに擬人化の施された顔。

インパルスと同じガンダムである。最強のモビル・スーツの代名詞たるガンダムがガンダムへと向けて、その破滅的な力を向けようとしていた。

「後少しでお前たちの元に帰ってやれる。後少しだ……」

プラント本国においてきた妻と娘。マッド・エイブスは2人の姿を思い浮かべる。

「だから、みんなで暮らそう……」

残してきた2人に必ず叶えると約束していた言葉を口ずさみながら、マッドの体は輝きに消えた。

「エイブス隊長！」

シンがミノフスキー・クラフトの輝きとともに到着した頃には、すべてが遅かった。

マッド・エイブスの搭乗するインパルス1号機は上半身を撃ち抜かれ、下半身だけが綺麗に残されていた。コクピットは腹部。生存は絶望的と言えた。

隊長機を撃墜した敵の姿はすでにここにはない。ただ、1機を除いて。

隊長機の残骸を写していたモニターに入り込むように蟹の化け物が割り込んだ。緑色の装甲を輝かせて直進してくる。

「こいつもミノフスキー・クラフトを装備してるのかよ！」

要するに休戦条約以後に開発された新型ということになる。デュエルダガーと同じようにはいかない。

シンもまた、ソード・シルエットを輝かせて直進する。こちらから敢えて間合いを崩すことで相手の攻撃のタイミングを奪う。左右の手に握られた対艦刀を並列に並べて叩きつける。

蟹から伸びるシールドごと斬り裂いてしまうつもりであったが、それどころか、シールドを破壊することさえできずに防がれてしまった。シールドの表面でビームが弾かれている。これではビームがシールドに届かず、単に金属の棒を叩きつけたにすぎない。

両者が衝突の勢いを殺すために必要な間を空けて、シンは急いでインパルスを飛び上がらせた。銃口は蟹の装甲の中央に1門、両脇に2門ついているだけである。それならば、正面にさえいなければ捉えられることはない。

このとっさの判断は、単なる急場しのぎの浅知恵でしかなかった。敵は素早く反応し、執拗に追いすがってくる。敵が蟹の装甲を引き倒した。モビル・スーツの背中に背負われる形で移動すると、それでようやく覆われていた顔が明らかとなる。

それは、インパルスとよく似た顔をしていた。

「連合のガンダム……！？」

敵対勢力に同名、同質の機体が存在する事実――それが既成のこととはいえ――は、思いの外シンの意識を奪う。

敵のガンダムは蟹を脱いだことで自由になった両手で、長柄の鎌を振るった。ビームではない単なる実体剣が、こともあろうに火花を散らしながらインパルスの足に食い込むと、フェイズシフト・アーマーなど構うことなく斬り裂いた。

片足を失いバランスを崩したこととすでに飛び上がる勢いをつけていたことが災いし、インパルスの体は不規則な軌道を描いた。

この不測の事態に、シンは反応できず、ただ声をあげているほかない。

やがて、コロニー内壁に設置されていた鉄筋に森に墜落したことでようやく機体の動きが止まる。

右足は完全に破壊されている。ソード・シルエットが鉄筋に絡めとられてしまったらしく、インパルスは動かすことができない。落下の衝撃に定まらない視界が、それでも死神のように鎌をもって迫りくる敵の姿と、そして下半身だけが残された隊長機の姿を目敏く捉えていた。

「隊長……」

地球連合のガンダムは3機。残りの2機はシン・アスカとは別の場所にいる。

コロニーの隅で派手な爆発が繰り返されていた。

ブラスト・シルエットを装備したルナマリアのインパルスが両脇の大型ライフルからビームを放つと、コロニーの内壁をえぐるように爆発を引き起こす。

全身に重火器を装備した敵のガンダムは背負ったビーム砲を放つ

と爆発が生じる。それでも構うことなく放たれた右腕のバズーカの巻き起こした爆発は以前のものを巻き込みながら大きく膨れていく。

「こんなところにガンダム・タイプがいるなんて、聞いてないわよ！」

火力に特化した2機のガンダムの戦いは互いの破壊力を比べ合うかのように炎と破壊をまき散らす。

民間コロニー、アポロン近郊の宙域。それは外壁から目と鼻の先の位置であった。

ここに、ザフト軍ローラシア級ＭＳ搭載艦バーナードがデブリに紛れて停泊していた。宇宙戦艦らしい航空力学を無視した独特の形状の戦艦で、下部に比べ上部が大きく張り出した構造が特徴的であった。

シン、ルナマリアの母艦であり、帰るべき場所である。ここに、第3のガンダムの手が迫りつつあった。

褐色の翼を持ち、鷲のような爪を構えたモビル・アーマーが突如その身を起こした。爪は腰部にまとめられ、体に寄り添わせていた腕を展開するとともに組み合わせれていた足が左右に開かれた。それだけで、鷲は人へと、ガンダムへと姿を変える。

ガンダムの特徴である顔を見せつけるように、それはウイングを輝かせながらザフト軍バーナードへと迫った。

人は楽園を探し続けています。それは理想を追求する熱意の姿と言えるのでしょうか。それとも、いつまでも現実を受け入れられない弱さの現れかもしれません。理想への渇望と現実への失望。ただ、どちらにしても確かなことがあります。

それは、人は誰1人として楽園を見つけた人がいないということ。だから探しているのです。

それは、誰も楽園に足を踏み入れたことがないということ。だから夢想するのでしょう。

現実の楽園がどのようなものか知りもしないで。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「楽園喪失」

ユートピア。それはどこにもない国を意味します。

第2話「楽園喪失」

ソード・シルエットはコロニー内壁の鉄筋に噛まれ動かせる気配はない。すぐ目の前に敵が迫っているにも関わらず、シン・アスカの視線は下半身だけになってしまった隊長機の姿を探していた。

コクピットのモニターの中にその姿はあった。

上半身を消し飛ばされ、腰から上は残骸がこびりついている程度の有様である。ただ足だけが無重力の空に漂っていた。

「隊長……」

墜落の衝撃にいまだ落ち着きのないシンの瞳。マッド・エイブス隊長の死を悼んでいるようでありながら、しかしその腕には力がこもる。

「レッグ・フライヤー、お借りします！」

その眼差しが力強さを取り戻すとともに、敵が、連合製の緑のガンダムが斬りかかってくる。フェイズシフト・アーマーの強固な装甲さえ易々と斬り裂く鎌が振り下ろされる。

迫りくる死を前にしながら、シンはしっかりと鎌の軌道を見据えている。そして、浮き上がる感覚。シンは鎌の上を飛び越えた。

鎌は、鉄筋の網に残されたソード・シルエットとＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムの下半身を切断した。放たれるフェイズシフト・アーマーの輝きの中に、だがインパルスの上半身の影はない。

ただ下半身だけを残して、上半身は飛んでいた。正確には、1対の対艦刀を所持したままの上半身と、コクピット・ブロックを有する戦闘機が軽快に飛行していた。

インパルスガンダム固有の分離合体機構である。上半身のチェスト・フライヤーに、腹部を構成する戦闘機コア・スプレンダー、そして下半身のレッグ・フライヤーのそれぞれが合体することでインパルスガンダムは1機のモビル・スーツとして完成する。

もはや戦闘機のコクピットと化したコア・スプレンダーの中で、シンは必死に操作を続けていた。敵の放ったレールガンがすぐそばを通り抜けるも、小さい戦闘機にそうそう当てられるものではない。

チェスト・フライヤーは無事。コア・スプレンダーは言うまでもない。ソード・シルエットは破壊されたが、レッグ・フライヤーにはあてがあった。

命を失った亡骸が動き出す。

シンの部隊の隊長である撃墜されたマッド・エイブスの機体は下半身がほぼ無傷の状態で残されている。そう、シンは隊長機と利用して機体を完全な状態へと戻そうと企んでいた。

エイブス機のレッグ・フライヤーが腰の上に残されていた残骸を排出し、コア・スプレンダーと同様に飛行を開始する。

合体シークエンスを発動する。

コア・スプレンダーが大きく形を変えていく。ウイングと垂直尾

翼を機体内部へと折りたたみ、機首が１８０度回転して全体が箱のように四角くまとまる。ガイド・ビーコンに導かれた上半身、下半身がコア・スプレンダーを挟み込むように上と下から。腰部でレッグ・フライヤーとドッキングし、チェスト・フライヤーがコア・スプレンダーを覆い隠すように合体を終える。

ソード・シルエットこそ失ったものの完全な姿を取り戻したインパルスガンダムは、すぐそこにまで迫っていた敵へと対艦刀をすぐさま叩きつけた。

ビームを弾くシールドに防がれ、ミノフスキー粒子に還元されるビームが光を発して暴れ回る。

「伊達に量産機乗ってないんだよ！」

この程度の緊急事態への対処など、これまでにも何度も経験した。

シンは勢いに任せ両手の対艦刀を交互に叩きつける。ビームから放出される光と熱が、しかし次々と防がれてしまう。

敵のガンダムは甲殻類様のバック・パックにアームで繋がれたシールドを器用に動かし、対艦刀をたやすくとめてしまうのである。おまけに表面に何らかのビームを弾く処理がされているらしく、ダメージはまともに通る気配がない。

ソード・シルエットを失い、ミノフスキー・クラフトを使用できない今のインパルスでは単調な攻撃しか行うことができない。

しかし、敵は大型のバック・パックを輝かせている。通常推進ではミノフスキー・クラフトに遠く及ばない。敵のガンダムは突然横

に飛んだかと思うと、普通はあり得ないほど繊細な動きでインパルスの後ろへと回り込んだ。

急いで振り向こうとアポジモーターを働かせるも、その振り向きに合わせるようにして鎌が振るわれた。鋭い切っ先がビームの刃を対艦刀の刀身に突き立てられるなり、一息に切断した。

破壊されたのは左腕の対艦刀。残された刀を両手に持ち変え力任せに振り下ろすが、シールドが何の遠慮もなく止めてしまう。

シンの動きは完全に読まれていた。

「腕はあいつの方が上なのかよ……！」

こいつは弱っちい。

それがアウル・ニーダの抱いた感想である。蟹の被りものを身につけたようなガンダム、ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型のコクピットの中、少年特有の人懐っこい笑みの中に残酷な色を含ませてアウルは笑う。

「あっはは！　ごめんね、強くってさあ！」

インテンセティが鎌を振り下ろすと、ザフトのガンダムはその象徴たるブレード・アンテナの片側が切断される。致命傷にはほど遠いが、敵パイロットもこれでわかったことだろう。勝てる相手ではないと。

ただ少し脅かしすぎたかもしれない。

敵のガンダム――インパルスとか言っただろうか――は胸部脇に装備されたバルカン砲をでたらめに撃ち続けると無理矢理距離を開けようとする。フェイズシフト・アーマーに包まれるインテンセティをそんなもので傷つけられるはずがない。強引に接近しようとして、すると敵は対艦刀を投げつけてまできた。

シールドを手軽な操作で動かして壁を作る。鋭い実体剣の切っ先を向けて飛んできた対艦刀はそれだけで簡単に防ぐことができる。

敵はこちらに後ろ姿を見せて飛び去っていた。どうやら、完全に逃げを決めたらしい。

「逃げんのかよ」

ミノフスキー・クラフトのない機体に追いつくことは簡単だ。フット・ペダルを踏み込もうとして、アウルは1人の女性を思い浮かべた。

桃色の髪をした、その名前の通り花のような女性を。

インテンセティガンダム汎用型がインパルスガンダムを追いかけることはない。

「まあいいや。ヒメノカリス姉ちゃんから深追いはするなって言われてるしね」

アウルは嬉々とした様子で敵の後ろ姿を見送っていた。

インパルスガンダムの３つのシルエットの内、最も射撃力に優れるブラスト・シルエットを装備したルナマリア・ホークの機体が対峙するのは、同じく射撃に特化した機体であった。

上半身の持てるところいっぱいに大砲を担いだような厳つい風貌のガンダムは、近すぎず遠すぎず、適度な距離を保って攻撃を続けていた。

腕は敵の方が一枚上手であるらしい。直撃こそされないものの、装甲は端々が削ぎ落とされていた。だが、敵は綺麗なものなのである。

「いい加減、しつこい！」

脇に構えた２丁の大型ライフルが２筋のビームを撃ち出す。狙いは敵ではなくコロニーのむき出しの大地。ほぼ垂直に落とされたビームは爆煙を外部にまで放出させる。たかがモビル・スーツの一撃がコロニーの外壁を破壊したのである。

まだ煙も治まらない中、ルナマリアはコロニーの穴へと向けてインパルスガンダムを加速させた。

煙の中に飛び込んだインパルスの姿を、スティング・オークレーは黙って見守っていた。搭乗するＧＡＴ－Ｘ１３３イクシードガンダム・バスターカスタムも同じようなことはできるが、追いかけるつもりはないのだ。

ただし、敵が逃げたのだと確認はできていない。

スティングはその細長の目を油断なく動かし様子をうかがう。機体の位置を変えたのは奇襲を警戒してのことだ。

敵の反応はない。爆煙は落ち着き始めていた。

どうやら逃げたようだ。

入ってきた通信――アウルからのものだ――はあちらでも敵が退避を決めたことを告げていた。

「ああ、こっちも逃げた。ステラにもそろそろ戻るよう言っとけ」

姉と慕うヒメノカリスの願いは敵の殲滅ではないのだから。

緑色の重厚なバック・パックを背にしたインパルスガンダム3号機。ルナマリアの機体である。

新造コロニー、アポロンの壁を突き破り、強引な脱出を果たしたルナマリア・ホークを出迎えたのは煙を上げる母艦、ローラシア級ＭＳ宇宙母艦バーナードの姿。

そして、輝くウイングを背負ったガンダムであった。

ＧＡＴ－Ｘ３７０ディーヴィエイトガンダム特装型。ステラ・ルーシェの機体である。

「敵は、倒す！」

まだ幼さの目立つ顔に鬼気迫る気迫を乗せて、ステラは機体をインパルスへと加速させる。

ディーヴィエイトの左腕には2連装ビームガン。小刻みにビームを撃ち出し、1発1発のビームの威力こそ低いものの、手数でインパルスを翻弄する。必死にかわそうと動くが、機動力ではディーヴィエイトが上である。うまく先回りするとインパルスのフェイズシフト・アーマーの端々が強烈な輝きを放つ。

ビームが命中したのだ。

動きを止めた敵へと、ディーヴィエイトは思いもかけない兵器を使用する。右手に細い鉄線で繋がれたそれは、まさに鉄球であった。鈍い複数の棘を輝かせて、底に取り付けられたスラスターがインパルスへと鉄の塊を突き進ませる。

インパルスガンダムは左腕に申し訳程度につけられた小さな盾で防ごうと構えた。フェイズシフト・アーマーはあくまでも装甲にしか取り付けられていない。

盾はひしゃげ、装甲が輝く。そしてフレームが破断した。鉄塊の質量に耐えきれなかったフレームは肘を維持こそしているものの、肘から先は力なく垂れた。

腕に攻撃力の大部分を依存するモビル・スーツが片腕を失った。

それでもなお、ステラは攻撃を続行しようとコクピットの中で吠

えていた。

遠くで見えるのは曳光弾とビームの輝き。

それが母艦が隠れているはずの場所であると、シンは機体を急がせた。

目に見えてデブリが多くなっていく中で、母艦の姿が明らかになっていく。ところどころに被弾の痕が残り、黒煙が不規則に立ち上っていた。

その周りを褐色のガンダムが自在に飛び回っている。ミノフスキー・クラフトの輝きを軌跡として描きながら。

バーナードの上でルナマリアのインパルスが応戦している。しかし、すでにミサイルを撃ち尽くし、左腕を損傷しているためだろう。右の大型ライフルだけでその弾幕は薄い。

もとよりミノフスキー・クラフトを搭載した機体を射撃で捉えること自体が難しいことなのだ。

荒鷲のガンダムがビームガンを照射する度、バーナードに1列の火の手が上がる。

「何なのよ、こいつ」

十分に接近することで通信がルナマリアの声を拾う。聞くまでもなかったことだが、焦りようが伝わってくる。

「ルナ、無事か！？」

焦っていることはシンも同じことである。声は自然と上擦った。

「シン！」

「アスカ軍曹……！」

ルナマリアからの通信に混ざり込んだのは管制のアビー・ウィンザーの声。しかしそれもすぐに別の男の声に上書きされる。

「シン・アスカ軍曹、こちらアーサー・トラインだ。バーナードはこれから加速に入る。緊急着陸で構わない。何としてでも帰還してくれ」

インパルスの加速を続けながら指示に聞き入る。その視線の先ではローラシア級が加速しようとブースターに火を入れている光景があった。

「アスカ軍曹、現在、緊急用ハッチは使用できません。通常のルートで帰還してください」

管制であるアビーの指示は、要するに加速する戦艦の前に回り込んで相対速度を合わせてから着陸しろというものであった。

「了解」

シンは覚悟を決める必要があった。息を飲み込む。その一瞬の隙に眼前を光が通り抜けた。

敵のガンダム。直感がそう告げ、インパルスは両腰に備えられたダガー・ナイフを抜く。

褐色のガンダムの姿を捉えることはできない。ミノフスキー・クラフトのもたらす機動性はモビル・スーツ戦術を根幹から揺るがせてしまうほど絶大なものである。深追いはするなと命令されているのだろう。敵は逃げ出すバーナードではなく、完全にシンに狙いを定めたようであった。

インパルスの周りを飛び回りながら敵機は弾丸をばらまいてくる。嫌なことに後ろから。フェイズシフト・アーマーに守られている場所ならともかく、スラスター内部に被弾でもしようものなら最悪内部爆発の可能性がある。インパルスの向きを必死に変えて敵に背中を見せないよう絶えず動く。

インパルスのところどころが輝き、フェイズシフト・アーマーの被膜が強烈な輝きを放ちながら徐々に削り取られていく。

完全に相手に主導権があった。こうしている内にもバーナードは徐々に加速している。

「こんなところで……！」

このままでは悪くて撃墜、よくても取り残されてしまう。

シンはインパルスガンダムを加速させた。スラスター推進のみの加速であり、そして敵はシンが目指す方向を知っている。

ウイングを持つガンダムがバーナードの姿を隠すように立ちふさ

がった。

しかし、シンもまた、敵がこの行動に出ることはわかっていた。

チェスト、コア、レッグ。三態で構成されるインパルスの合体を解除する。上半身であるチェスト・フライヤーが手のナイフを突き出した姿勢で飛んでいく。目標は敵ガンダム。３０ｔ近い質量をまともに浴びればいくらガンダムでも何らかの破壊は免れない。

フライヤーを質量兵器として使用する正規マニュアルにはない。シンの奇策は、しかし相手の珍妙な武器によって防がれる。

相手は冷静にハンマーをまっすぐ前へ射出すると、鋼鉄の塊は正確にチェスト・フライヤーを打ち付け、インパルスの首がもげた。目標を失いチェスト・フライヤーはそのまま付近を漂っていたデブリへと衝突する。

まだ終わっていない。チェスト・フライヤーの影に隠れるようにしてレッグ・フライヤーがさながら弾丸のごとく敵を目指していた。

２段構えの攻撃である。さすがのガンダムもこれには反応できなかったらしい。インパルスの下半身はまっすぐにガンダムを目指し、衝突する。

正直いえば、これでガンダムを撃墜できるとは考えてはいなかった。しかし、予想通りの光景にでも、人は落胆できるものらしい。

ミノフスキー・クラフトの特徴として、柔軟な方向への機動というものが上げられる。敵のガンダムは機体を後ろへと下げながら衝突の衝撃を吸収し、腰に展開していた爪一一モビル・アーマー形態

で鷲の爪になる部位だ――でレッグ・フライヤーを掴みとっていた。

攻撃は失敗。戦闘機の姿に変化したコア・スプレンダーの中でシンは敵の脇を抜けるようにバーナードを目指す。

確かな焦りがあった。敵はこちらを攻撃する機会が最低でも一度はあると確信している。戦場で培われた経験を保障するように、コア・スプレンダーが激しく揺れた。短い悲鳴を呑み込みながら眺めたモニターの中には、左翼に被弾したことが示されていた。

ウイングは大気圏内を飛行するためのもので、宇宙空間では飾りでしかない。飛行そのものは可能である。狂ってしまった重心のバランスを立て直そうと操縦桿を握りしめる。ＯＳが重心位置を補正してくれるまでの間、操縦桿をやや右に倒して機体を水平に、左に曲がってしまわないよう保つ必要があった。もちろん、バーナードの格納庫の床に対して。

幸い、敵からの攻撃は続かない。コア・スプレンダーは順調に加速を続け、ローラシア級バーナードの脇を通り過ぎた。

ローラシア級の格納庫は艦体下部に取り付けられている。突き出した上部構造を頭上に眺める形でコア・スプレンダーをその前に回り込ませる。後方ではすでにハッチが開いている。後はゆっくりと速度を落として、バーナードよりもやや遅いくらいを維持する。そうすることでコア・スプレンダーは加速を続けながらも端から見ればゆっくりとバーナードの格納庫へと近づいているように見えることだろう。

後少し。後少しの間この体勢と速度を維持すればいい。腕が震える。不自然な位置に操縦桿を固定していたため、腕に軽い痺れが起

きていた。だが、後少し。

体力は保つという確信は、しかし悪い形で裏切られた。ＯＳが重心位置の補正を完了し、操縦桿を水平に保っていても機体を安定させるよう修正してしまった。このタイミングで。

コア・スプレンダーが右へと傾く。シンが操縦桿を右に傾けているため、それは当然なことだった。

機体が右へそれ、その分だけ相対速度が引き離される。操縦桿を戻すとともに車輪を展開。スラスター出力を一気に絞る。機体が右に傾いたまま補正する時間もなく、コア・スプレンダーはバーナードの格納庫の床に不時着同然で車輪を叩きつける。右翼が床を擦り、ブレーキがかけられた車輪が火花を散らす。減速用――相対速度を考えるなら、加速用と言えなくもない――のネットがコア・スプレンダーを受け止め、加速を続けるバーナードからの加重を、シンは体中で感じていた。

うめきが声にならない。機体を襲う振動と衝撃に、声を出すと舌を噛む恐れがある。ただ耐えるほかなかった。

やがて揺れが治まった――バーナードとコア・スプレンダーの相対速度が一致した――時、シンは自分が軽い脳震盪を起こしていると判断した。視界がぼやけ、その判然としない視界の中に斜めになった床が見えている。コア・スプレンダーそのものが格納庫に対して斜めに傾いているのだ。そして、風防を白く染めているのは消化剤の泡。どうやら、翼の燃料に引火することもなくすんだようだ。

「何とか、生きてるな……」

今日1日を、また生き延びることができたらしい。

敵が逃げていく。ディーヴィエイトの映し出すモニターの中に、急速にこの宙域を離れようとしているローラシア級ＭＳ搭載艦の姿が見えている。まさに遁走である。消火作業さえ完全ではない。煙をたなびかせている有様である。

このままでは逃げられてしまう。

ステラは極度の興奮状態にあった。呼吸がいつまで経っても落ち着かず、瞬きの回数が極端に少なくなっている。ザフト軍へと向けられる眼差しからはいまだに敵意が抜け落ちてはいない。

「敵は、倒す！」

ディーヴィエイトガンダムのウイングが強い輝きを放つ。今にも背中を見せる敵に襲い掛かろうとするステラを押し留めたのは、通信機から聞こえた少女の声であった。途端にステラが落ち着きを取り戻す。

「うん。わかった、お姉ちゃん」

その様子は気弱ささえ感じさせるほどしおらしい。その目にはまだローラシア級戦艦の姿を捉えてはいても、敵意は完全に消失している。

普段の様子を取り戻したステラに見送られるようにして、ローラシア級バーナードは傷だらけの体に鞭打って命がけの敗走を続けて

いた。

ローラシア級ＭＳ搭載宇宙空母にはブリーフィング・ルームというものは存在しない。ブリッジ後方に様々な図面を映し出すことができるテーブル型のモニターが置かれ、作戦会議はそこで行われる。

艦長であるアーサー・トラインをはじめとする主立った面々がそこには集まっていた。

「前回の作戦で確認された３機は、連合で運用されているガンダム・タイプのカスタム機であると思われます」

モニターにはお世辞にも映りがいいとは言えない映像で３機のガンダムが映し出されている。インパルスガンダムの映像から直接引っ張ってきたものである。写真写りは期待する方が酷であった。

説明しているのはアビー・ウィンザー。まだ若い女性である。乳白色の髪が特徴で、お洒落を楽しみながら、それでも軍務に支障のない髪型にまとめられている。若い女性の容貌で、しかし軍人として事務的な口調でアビーは３機のガンダムの説明を行う。

トライン艦長の他、パイロットであるシンとルナマリアがそれに聞き入る。

シンが遭遇した蟹の被りものをしたようなガンダム。それは地球連合軍が所有するＧＡＴ－２５２インテンセティガンダムとよく似ていると説明される。ただし、細部の武装が異なり、カラーリングにしてもインテンセティガンダム本来の青ではなく緑系統であると

いう違いが見られた。

ルナマリアと戦った重装型のガンダムはＧＡＴ－１３１イクシードガンダム。ただし、本家本元のイクシードガンダムは格闘戦に特化した機体である。カラーリングも赤。こちらはずいぶん違う。

最後にバーナードを強襲した可変機はＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムと鉄球などの極端な武装さえ除けばカラーリングは褐色か水色かの違いしかない。

どのガンダムも正規量産型とは違いが見られた。

艦船クルーであることを示す黒い軍服を身につけたアーサー・トライン艦長が難しい顔をしていた。こちらも、艦長をしていると思えるほどの歳にはなっていない。いい歳してアイドルが好きという一面があるらしいが、激務の連続で、少なくともシンはそんな艦長の顔を見たことはない。

「実験機ということかな？　そうなると、あのコロニーは極秘実験施設だということになる」

「わかりません。ただ、そうにしてはコロニーの設備があまりに貧弱です」

まだ建造途中であるのならそこに実験機が運び込まれている理由が説明できない。筒の両端がいまだ閉じられておらず、内部が外から簡単に見渡すことができる。それでは極秘も何もあったものではないだろう。

設備の貧弱さから軍事設備とは思えない。だが、それにしてはガ

ンダム・タイプが3機というのは不自然であると言えた。名前はアポロン――どこかの神話の太陽の神の名前だ――とか言うのだそうだが、謎のコロニーを何かと判断するには材料が少なすぎる。

シンの関心は自然と眼下の3機のガンダムに移っていた。どれも高性能で、ずいぶん宙間戦闘に慣れている様子だった。万全の状態であっても、果たして勝てるだろうか。

「これが、連合のガンダム……」

これまでガンダムとの戦闘経験はない。つい見入っていると、アーサー艦長は目を瞬かせた。

「アスカ軍曹、君は軍学校で敵の機体について学ばなかったのかい？」

単純な疑問だろう。そこにシンの浅学を責める気持ちは含まれていない。それでも自然と口の端がつり上がり、自嘲じみた笑みが顔の痣を歪める。

「軍学校じゃ、必要最低限のことしか学んでません。本当は1年卒業のところを半年とちょっとで追い出されました」

成績優秀と認められ、赤服とＺＭＧＦ－５６Ｓインパルスガンダムを与えられたところで、シンは正規の軍人とは同列とは扱われない。

「俺、アブディエルですから」

アブディエル。この言葉を使うだけで、アーサー艦長もアビー・

オペレーターもそれ以上のことは聞こうとはしない。2人ともばつが悪そうに目をそらして、アーサー艦長は自然な様子で話題を変えた。

「今後の作戦について説明しよう。あの襲撃の後、コロニーから敵の戦艦が3隻移動を始めたことが確認されている。ガンダムも、恐らく一緒だ。そこで、僕らはこの艦隊に追撃をかけることにする」

バーナードただ1隻で攻撃を仕掛ける。こんな無謀な作戦に対して、驚きを示したのはシンとルナマリアだけであった。アビーも、話は聞こえているはずのクルーたちでさえ反応は薄い。

「ちょっと待ってください！　たった1隻で勝てる相手じゃありません！　エイブス隊長だってもういないんですよ」

「危険すぎます。援軍を要請するか、戦力を整えてからでないと」

「いいや、作戦は決行する」

アーサー艦長は普段と同じ沈んだ調子で、しかし強い言葉でパイロット2人の意見を黙殺する。シンは、つい戸惑いを覚えた。しかし食い下がろうと息を吸い込んだところで、思いも寄らないところから声が挙がった。

「アスカ軍曹、ホーク軍曹、わかってください！　私たちも、アブディエルだと言うことを……」

アビーはこちらを見ようともしない。うつむいたまま、わずかに見える瞳に決意というものは感じられない。アーサー艦長にしても同じだ。2人は、ここにいるクルーたちは信念だとか決意によって

動かされているわけではない。

アブディエルという言葉に、今度沈黙せざるを得ないのはシンの番であった。

作戦は決定した。わずか旧式の戦艦1隻、モビル・スーツ2機で敵の艦隊に攻撃を仕掛けるのだ。子どもだってこれがどれほど無謀なことかわかりそうなものだ。

シンは壁を強く殴りつけた。別に八つ当たりのつもりはない。

ここはパイロットに与えられる寝室である。2人部屋であるため、ある程度の広さはあるが、シンがいる反対側のベッドは整然としていて生活臭というものを感じさせない。戦死した同僚が使っていたものだ。

よって、ここはシンの1人部屋である。

シンはもう一度壁を殴りつける。決して八つ当たりではない。

このローラシア級という戦艦そのものがシンの、アブディエルの境遇を如実に著しているからだ。

本来、合体機構を有するインパルスガンダムは専用の設備を持つ母艦を必要とする。だが、アブディエルにはそのような贅沢な艦は与えられず、装置を増設してご誤魔化しただけのこんな戦艦で満足しろと言ってくる。

何も八つ当たりではないのだ。

もう1度殴りつけてやろうか。シンが拳に力を込めると、部屋のインターホンが鳴った。誰がこんな時に。壁を離れ、無重力を漂いながら扉横のボタンへと手を伸ばす。スライド式の扉が開き、そこには赤い髪をした同僚の姿があった。

シンと同じく赤い軍服――ただし、相手のは女性用である――に、艦長たちに比べればまだ明るい表情で手を振って見せるのはルナマリア・ホークである。

「何だ、ルナか……」

拍子抜けした。そんな気持ちがつい口を出た。

「何だはないでしょ、何だは」

ルナマリアは怒った様子を見せながらシンを押し退けて部屋に入ってくる。すぐにベッドという座りやすいものを見つけたらしく、そこへと腰掛けた。

どうやら話があるらしい。シンもまた、ルナマリアとは反対側、自分のベッドに腰を下ろした。

話を促すまでもなかった。

「艦長、本気みたいね」

やはり話題はそのこと。ルナマリアが少し声を潜めたのは、あまり他の人に聞かせたい話ではないからだろう。

「もうこれ以上危険な戦場をたらい回しにされるのが嫌なんだろ。みんな、そろそろ任期が切れてもおかしくない頃だから」

現在、ザフトは形式的には志願制を採用している。休戦条約以後、階級が登場するなど軍隊としての性質を一段と強めたが、それでも義勇兵出身という名残は残されている。

それは、徴兵制が敷かれていないということを意味しない。

シンは自分の境遇が自然と思い出された。

「俺も艦長たちも、アブディエルだからな……」

シン・アスカ。コーディネーターではあっても出身はプラントではない。オーブ首長国と呼ばれる地球の国家である。休戦条約以前に大西洋連邦への協力を拒み侵攻された国であり、現在主権を回復したとは言え傀儡でしかない。

シンはそんな国に生まれ、そして、国を出るしかなかった。自分たちを見捨てた国にはいたくなかった。母を殺した大西洋連邦に行くことなんて考えもしなかった。まさに流れ着くように、シンはプラントに移住した。

コーディネーターの国は、しかしすべてのコーディネーターのためにあるわけではなかった。

移民の多くは市民権を与えられず、様々な制約が課せられる。それに加えて、市民権の獲得には多大な労力を必要とする。プラント政府は救済策を用意していた。ザフト軍として1年の任期を戦い抜

けば無条件に市民権を与えるとしたのだ。シンのように身よりもあてもない移民は入隊するしか選択肢はなかった。

事実上の徴兵である。そうして、プラントは戦争で失われた人員の補充に務めている。軍学校を期間短縮で放り出されることなどそんなプラントの熱心な活動の１つだ。

マッド・エイブス隊長が戦死したのも、早く家族の下に帰りたいという思いに焦ったからではないだろうか。

シンはまだ半年近く任期を残している。しかし、アーサー艦長をはじめとするほかの移民たちはそろそろ任期が切れる。しかし、それが軍役からの解放を約束するとは限らない。あくまでも噂だと思いながらも、なかなか頭から離れない。シンがつい顔をしかめていると、ルナマリアも同じことに考えが及んでいたようだ。

「除隊は本国でしか行えないから、任期切れが近い部隊は補給も前線基地でさせられるっていう噂、本当かな？」

ルナマリアがわかりやすく眉をひそめる。

「さあね。トライン艦長たちは信じてるみたいだけど。勲章ものの活躍して、本国に戻りたいって気持ちもわかるよ。いつまでも汚れ仕事や危険な戦場にばかり回されるなんてごめんだろ」

こんな噂話には事欠かない。他にも、シンのような移民がガンダム・タイプを与えられているのは戦力として期待されているからではなく、単に実力主義のプラントの正当性を主張するための宣伝でしかないなんて話もある。

何にしろ、移民の扱いなんてこんなものだ。

アブディエル。このプラントの移民を指す名前もプラントのコーディネーターが如何に移民を馬鹿にしているかよくわかる。

ミルトンの『失楽園』に登場する天使の名前なんだそうだ。天使の王が神に反逆すると表明したその場で、創造主である神に勝てるはずがないとただ1人その場を離れた天使、それがアブディエル。これはコーディネーターの創造主を騙るナチュラルへ、そして、これまでそんなナチュラルにおもねっていた国外コーディネーターに対する2重の皮肉なのだそうだ。

自分たちが人類の未来を守るために戦っている間、貴様等は何をしていた。今更仲間に加えてくれなんて虫が良すぎるんじゃないか。これはシンが実際、軍学校でプラント出身のコーディネーターから聞いた言葉だ。

自然と顔が険しくなる。

それを、ルナマリアは地球での生活を思い出していると勘違いしたらしい。

「ねえ、シン。私はアブディエルじゃないけど、地球って、やっぱりひどいところなの？」

「ひどい？　いや、そんなことはなかったよ。ただ、3年前のジェネシスだっけ、あれはやっぱり印象悪かったな。あれで一気に反コーディネーター思想が台頭してさ、政治家が公の場でブルー・コスモスのメンバーだって宣言することも珍しくなくなったくらいだ」

休戦条役が締結されるきっかけになったのは、両軍が次第に殲滅戦の様相を呈してきたからということが大きい。ザフト軍はジェネシスと呼ばれるガンマ線照射装置で地球全土を焼き尽くそうとした。そのことを原因として地球では反プラント、反コーディネーターの流れが決定的になってしまった。

終戦ではなく休戦条約に留まったのも、地球の各国が市民感情を考慮してのことだ。

「みんな、そうして地球から逃げてきたのかな？」

「アブディエルの間で地球での話なんてしないけど、ルナはどうして何だ？」

言ってから、ルナマリアが自分はアブディエルではないとつい先程言っていたことを思い出す。実際、ルナマリアがプラント出身のコーディネーターであるということは聞いたことがあった。しかし、外人部隊に配属されているのだ。まさかプラントの正規市民とも考え難い。

思わず顔を見ると、今度乾いた笑みを見せたのはルナマリアの方だった。

「オナラブル・コーディーターって知ってる？　ナチュラルだけど、コーディネーターとして扱ってやるっていう意味なんだけど、私、それなの」

目の前の同僚が実はコーディネーターではなかったと聞かされて、シンは少なからず動揺した。

「驚いた？」

「少し。プラントって、みんなコーディネーターの国だと思ってたから」

シンを出し抜けたことでどこか楽しげに笑っていたルナマリアは、しかしすぐに表情が沈んでしまう。

「実際、プラント国内に潜在ナチュラルは大勢いるわ。遺伝子調整にはお金がかかるからね。でも、時々私みたいにコーディネーターの中でもやっていけるようなナチュラルが現れると、名誉コーディネーターなんて呼んじゃったりしてくれるわけ」

もう1つの徴兵制のことが自然と思い出された。

休戦条約後、プラントでは軍事費確保のための増税が行われた。ただし重税に耐えられない人には救済処置がつく。所帯の誰かがザフト軍に志願した場合、免税処置が施される。早い話が金がないなら命を差し出せということだ。富裕層は税金を支払い兵役を逃れ、貧困層ばかりが戦地に送られる。

プラントはこうして、軍事費と兵隊を手早く集めている。

「うち貧乏だったから」

最後にルナマリアの心からの笑顔を見たのはいつだっただろうか。思い出せない。もしかするとなかったかもしれない。

「俺たちって、2人とも何か目的があって戦ってるわけじゃないんだな」

もちろん、市民権を得る、免税など理由はあるが、それはあくまでも副次的なものでしかない。戦わなければ得られないものではないからだ。

戦死したルーム・メイトは、軍人であることを決して話題にしようとはしなかった。きっとわかっていたからだろう。結論はどうせ暗くて、無為なものになってしまうことが。

人は、気が沈むとどうしても視線も沈んでしまうらしい。もう1つの理由として、何も話し出せないままルナマリアの顔を見ていることが辛かった。

「でも、アブディエルの人たちのこと、少しでも聞けてよかった」

「ルナ？」

顔を上げると、ルナマリアは努めて笑っているようだった。手まで叩いて無理に明るさを演出しているように見える。

「ほら、これで目標ができたでしょ。アーサー艦長やアビーさんの任期を終えさせてあげようって」

「そうだな。みんなにはお世話になってるし、少しくらい恩返しでもしなきゃな」

ルナマリアの努力を無駄にしないためにも、シンはそれに乗じることを決めた。明るく振る舞うことなんてできなくても、意見に賛同するくらいならできる。同じ境遇の仲間が1人でも多く救われてほしいというのは嘘偽りない気持ちである。

「じゃあ、私行くね」

立ち上がって、扉へと向かうルナマリア。まるで、明るい雰囲気を持続することができなくて、ボロを出すまいとするように。

2人の微笑みが無理に作られたものであることが証明される。2人とも、顔を合わせなくなった途端、それ以上笑顔を作ることはなかった。どこか空虚な表情だけが取り残される。

ルナマリアは出ていった。シンと話でもして不安を取り除きたかったのかもしれない。では、その望みは叶えられただろうか。

シンは上体を倒してそのままベッドに寝転がる。見慣れた天井は、どこかくたびれていて、外人部隊の母艦にふさわしい。

「人類の未来を切り開く理想郷か……。看板倒れもいいところだな……」

金と権利を餌に移民と貧者を戦地へと送り出す。それが、今のプラントの現実に他ならない。

ダーレス級ＭＳ運用母艦ガーティ・ルーの艦内に不釣り合いな歌声が染み渡っていた。

発振元はラウンジ・ルーム。休憩室として壁には森の映像が映し出され、備え付けられた円形のソファーが等間隔に並べられている。

その椅子の1つで、少女は歌っていた。波立つ桃色の髪が少女の膝枕で寝ているもう1人の少女の体を柔らかく撫でている。

歌われる歌は子守歌。

ステラ・ルーシェという妹を、ヒメノカリス・ホテルという姉が優しく寝かしつけている。

その様子を、イアン・リーは遠巻きに眺めていた。艦長席に座っていないにも関わらず、軍帽を目深にかぶり威厳ある艦長の印象を崩そうとはしない。

「美しいものだ」

まさに森の精がさえずっているかのように幻想的とさえ思える。

イアンとてそれを邪魔するほど不躾ではない。気づかれぬよう身を翻し、通路を引き返そうとする。すると、すぐに2人の少年と鉢合わせする。

どちらも軍服を着崩してだらしがない。壁に背をつけた少年、スティング・オークレーは鋭い眼差しをそのままイアンへと向けた。

「姉貴のこと、やらしい目で見んなよな、おっさん」

スティング少年が姉と慕うのはヒメノカリス大尉。イアンは少佐である。どちらにしろ、姉貴だとかおっさんと呼んでよいわけではない。

「私は君たちの直属とは言えなくとも上官にあたる。少しは言葉遣

いを選べんのかね？」

「俺たちの階級なんてお飾りだろ。そもそも軍人してるつもりなんてねえしな。で、姉貴に何の用だ？」

少年の言葉はある意味では正しい。ヒメノカリス大尉をはじめとする４人は正規の軍人というよりは戦闘行為への参加を正当化するために軍籍を有しているに面があることは事実だからだ。

イアンにしても、彼らを軍籍というもので不必要に縛り付けようとは考えていない。

「今後のことについてミーティングがしたかったのだが、急ぐことではない。またの機会に回すことにする」

スティングの脇を通り抜けようとすると、妙にすばしっこい動きでアウル・ニーダ――こちらも少年である――が前へと回り込んだ。

「姉ちゃんをやらしい目で見てたこと、否定しなかったけど、やっぱ気があるのか？」

姉と慕う女性をとられてしまうようで嫌なのだろう。こんなところは子どもである。もっとも、そのような事実はなく、単なる杞憂にすぎない。

「小娘に興味はない」

「何だよ、姉ちゃんに魅力がねえって言うのかよ！？」

アウルは急に激昂すると身長差も考えずイアンの胸ぐらにつかみ

かかる。その上まだ騒ぐことをやめようとしない。

思いを寄せていると言えば反感を買うことだろう。否定してもこの有様である。

「どう言えばいいのだ、私は？」

イアンは片手を額に当てながら騒ぐアウルに呆れた様子を隠すことができないでいた。

自分は特殊な軍人の扱いに苦慮しているのではなく、子どもの扱いに苦しめられているのだと、イアンはようやく気づかされた。

得難い宝が欲しいですか。誰もに賞賛される栄誉が欲しいですか。差し上げましょう。上げましょう。でも、代わりに対価をお払いください。得られるものに比類するほどの代償を支払ってくださいな。それでも宝があなたを満足させてくれるとは限りません。

だって人は満足を得ると、そのために失ったものを惜しむようになりますから。

だから人はいつだって後悔し続けます。失ってしまったものへの未練ばかりが募ります。

次回、ＧＵＮＤＡＭＵ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「金色の羊」

フォイエリヒ。少年の慟哭こそが、あなたを得たことの対価なのでしょうか。

第3話「金色の羊」

格納庫はいつも暗い。外人部隊として危険な単独行動を行うことが多いザフト軍ローラシア級ＭＳ搭載艦バーナードは隠密性を優先するために極力光を外に漏らさない態勢がとられることが多い。

普段からコクピット越しに見える光景は黒一色に尽きた。

コクピット内のわずかな光の他、見えるものは何もない。それなのに耳にはおかしな曲が届いていた。通信から漏れ聞こえているのだ。

綺麗な歌声なのだが、コーディネーター賛美の歌詞が鼻につく歌である。

「何だよ、この歌？」

シン・アスカはヘルメットの上から耳を塞ぐようにして手を当てる。独り言ではない。こんな曲を好き好んで聞いている同僚へと尋ねたのだ。

暗くて視認はできない――モビル・スーツには暗視機能も備わっているため見ようと思って見えないことはない――が、シンの搭乗するＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムのすぐ横にはルナマリア・ホークの機体がある。

「知らないの？　『自由と正義の名の下に』のテーマ・ソングよ」

鼻歌交じりの返事が聞こえた。

『自由と正義の名の下に』。プラントで2年前に封切られ、社会現象にまでなった映画のタイトルだ。シンもプラントに居住する以上、見ないわけにはいかなかった。以前の大戦で如何にザフトが勇敢に戦い、どれほど地球軍が愚かであったかという内容の作品で、地球出身のシンには噴飯ものの内容であった。

「ああ、あのプロパガンダ映画か」

ため息を交えながら応える。

「シン、私がこの映画の大ファンだってこと、知ってる？」

こめかみに力を込めているであろうことは声だけでわかる。このミーハーな同僚は、この映画の主役のモデルとなった軍人の信者であることを公言してはばからない。

「アスラン・ザラのファンなんだろ。ザフトの騎士。ラクス・クライン議員の婚約者で、ヤキン・ドゥーエの戦いを勝ち抜いた英雄で、気高い戦士。対艦戦からモビル・スーツとの格闘戦まで何でもできるエース・パイロット、だろ」

すらすらと出てくるのは、それだけルナマリアに聞かせられていたからだ。戦死したマッド・エイブス隊長と一緒にアスラン・ザラの話を延々と聞かされた時は、幼い娘さんのいるマッド隊長に同情してしまったほどである。将来、あなたの娘もこんなのになるかもしれませんよと。

「わかってるじゃない」

「何度も聞かされたからな」

返事からはすでに機嫌をよくした様子が見て取れる。どこかこう、恋する乙女のようだ。

「1度でいいからお会いしてみたい」

要するに、1度も会ったことがないのだ。そんな相手によくそこまで好意を寄せられるものだと、シン浅くため息をついた。

アスラン・ザラはザフトの英雄である。現在のプラントでギルバート・デュランダル議長に並んで有名なラクス・クライン議員――元歌手で、この映画の主題歌は本人が歌っているそうだ――の婚約者で、ザフトでも指折りの戦士。インパルスガンダムのような量産品ではなくてゼフィランサス・ズールが直接開発したオリジナル・ガンダムに搭乗していたのだそうだ。

最高の環境に最高の装備。シンがどれほど羨んでも手に入れることのできないものを生まれながらに持っているような人だ。

シンがこの映画が嫌いな理由の1つに、絶大な貧富の格差を人類の可能性というあやふやな憧憬に置き換えて強要するプラントの現状が見えて仕方がないことが挙げられる。君たちも努力すればアスラン・ザラのようになることができると人々を必死に説得しているだけだ。現実は、そんなこと決してないのに。

英雄が華々しい活躍をする画面の隅で爆散する名もなき兵士。それがシンの現実であった。

格納庫に弱い明かりが灯される。それは四隅を切り取り宇宙へと

一直線にカタパルトの道筋を示す。

作戦開始時刻になった。そのことはオペレーターであるアビー・ウィンザーの声でも告げられる。

「出撃準備、お願いします」

インパルスの足を1歩前進させる。ルナマリアの様子をうかがうと、僚機に動き出す気配はない。

「お先にどうぞ」

これから戦いに行くというのに、ずいぶんと軽い調子である。もっとも、そうでもしなければやっていられないのが本音だろう。

比我戦力差は3倍を優に超える。援軍要請はすでに行ったと聞かされているが、そんなものを本当に期待しているのなら、援軍を待たずに作戦を開始する理由はない。

インパルスはシンの操縦の下、普段と変わらない足取りでカタパルトに足を乗せ、腰を屈める。

「シン・アスカ、インパルス2、行きます！」

７０ｔもの機体が加速し、シンにのしかかる加重。

どのような危機的状況をも覆す知恵は、映画の中の英雄のようには思いついてはくれない。

わずか1隻。わずか2機のモビル・スーツによる艦隊攻撃が始まった。

不意をつきバーナードの砲撃でまず1隻を撃沈する。その後、混乱に乗じてインパルスが追撃。一気に形勢をこちら有利に傾けるという作戦は、初手からつまづきを見せた。

相手も馬鹿ではない。こちらの攻撃が当たるまで待っていてはくれない。ミノフスキー粒子の電波障害が周知されたいる現在、ただでさえ、艦砲による遠距離射撃の命中精度の低下は著しい。当たるはずのない攻撃は、敵艦の脇を通り抜けていった。

すべてが成功することが前提の作戦は、こうして脆くも瓦解した。

ソード・シルエットを装備したシン機のすぐ後ろにブラスト・シルエットを背負ったルナマリア機が続く。

その前方にはダーレス級ＭＳ運用母艦からモビル・スーツが次々と出撃する様子があった。

「ルナはバーナードを離れるな。俺が敵艦を叩く」

「了解」

ミノフスキー・クラフトによる加速を続けるシンと、加速をやめたルナマリア。2人は急速に離れていった。

インパルスのモニターには次々と敵機を認識するカーソルが表示される。数は概算で１０程度。大半はデュエルダガーのようだが、

シンの意識はすぐに1機の敵へと集束された。

蟹の甲羅を背負った緑のガンダムである。ＧＡＴ－２５２インテンセティガンダムの特殊型。ビームを弾くシールドを持つ難敵である。

互いがミノフスキー・クラフトを持つ機体同士、振り切ろうとして振り切れるものではない。敵艦に近寄ろうとすると、その前に周り込む形で、フェイズシフト・アーマーさえ斬り裂く鎌をこれ見よがしに構えている。

こいつを倒さなければ撃沈どころか近づくことさえできない。

シンは覚悟を決める必要があった。ソード・シルエットから肩越しに大剣を1対、両手に握りしめる。現存するすべての物質を破壊するはずのビームの輝きが刃を構成し、しかし、そこには以前感じたほどの信頼感はない。

そして、時間もない。

加速するインパルス。敵はバック・パックにアームで繋がれたシールドを前面に2枚展開すると、余裕な様子で待ちかまえる。ビームの光を発しながら叩きつけられた対艦刀は、しかし強烈な輝きを放つばかりでシールドを破壊することはない。

通常のビーム・サーベルでは破壊できることが保証されない防御構造を一瞬の会敵で確実に破壊することが期待されたのが対艦刀である。そのため、こんなにも大型でとり回しの悪い武器が使用されているのだ。

「何のための対艦刀だよ！」

対艦刀がその存在意義をまるで果たせない現実に、シンは苛立ちを隠すことができなかった。

ブラスト・シルエットの2丁の大型ライフルから太いビームがまっすぐに伸びる。直撃さえできれば時にはシールドを一撃で破壊することができるこの大火力も当たらなければ意味がない。

ルナマリアを取り囲む敵は、明らかに防御に専念していた。決して無理な攻撃はせず、盾にうまく胴体を隠しながらこちらの動きを注視している。

敵は4年前にもすでに性能不足が指摘されていたＧＡＴ－０１デュエルダガー。現在は追加装甲が開発され、性能の底上げがなされているとは聞いているが、それでも今ルナマリアを取り囲んでいるのは通常型のデュエルダガーである。ビーム・ライフルとシールド。そんな最低限の装備しかないような機体に、ルナマリアは翻弄されていた。

こちらは1機。敵機は6機。こちらが1撃放つと2機が避ける。すると4機が撃ち返してくる。直撃をくらえばフェイズシフト・アーマーとて破壊されてしまう。

アスラン・ザラならこんな時どするだろうか。きっと颯爽と敵の攻撃をかわして、敵がまるで止まっているように撃ち抜くのだろう。

いくらミノフスキー・クラフトの恩恵を受けているとは言え、今

のルナマリアに高機動中に敵を狙い撃てるほどの技量はない。

攻撃されたものは回避に専念し、攻撃されなかったものが反撃に転じる。この完璧な連携の前に、ルナマリアは自由に動き回ることさえできないでいた。

徐々にバーナードから引き離されつつあるのである。

モビル・スーツを母艦から引き離し、まず艦を落とす。このセオリーをまずは敵が実践しようとしていた。

「このままじゃバーナードが……」

すでにザフトの戦艦は対空砲火が甚大な損害を受けている。曳光弾の輝きは疎らで、戦艦はモビル・スーツのように向きを変えて死角を補うということもできない。

顎で蠅を追うとは、まさにこのような有様であるのかもしれない。

2機のガンダムが易々とローラシア級バーナードの射程内へと入り込む。アポロンでの戦闘で被弾した砲塔は修復が施されていない。外部から防御網の死角は容易にうかがいしれた。

先を行くのはＧＡＴ－Ｘ１３３イクシードガンダム・バスターカスタム。体中の至るところに重火器を担いだこのガンダムは甲板の上空を飛行しながら正確に砲塔を1つずつ破壊していく。目に見えて曳光弾の輝きが減っていく。

イクシードガンダムのコクピットにて、スティング・オークレーはモニターの１つに映し出された僚機を確認する。

「ステラ、道は開けてやった。例の場所に穴を開けろ」

「うん！」

ステラ・ルーシェの搭乗するＧＡＴ－Ｘ２７０ディーヴィエイトガンダム特装型がモビル・アーマー形態でスティングのイクシードを頭上を通り抜ける。

いくらフェイズシフト・アーマーが強固とは言え、艦砲の直撃は避けるに越したことはない。高速で飛行するディーヴィエイトを捉えるにはすでに砲塔は数を減らしすぎていた。

スティングの思惑通り、ステラはローラシア級の後部。長大な上部構造の奥深くにまで飛び込んでいた。

ブースターがすぐ前にメイン・エンジンが存在し、下部に格納庫を配置する構造上装甲を十分に厚くすることができない。１０年近くも前に初号艦の進水式を終えたような型落ちした戦艦がその構造上の欠陥を今の今まで知られてないはずがない。

薄い弾幕の中、ステラはあっさりと領空を侵犯する。ディーヴィエイトがモビル・スーツへと変形し、ガンダムの顔がローラシア級を捉えた。

通信機越しにステラの吠える声を聞きながらスティングはディーヴィエイトの後を追う。

ディーヴィエイトガンダムの右腕に装備された鉄球が撃ち出される。それ自体が推進器を備える鉄球はローラシア級の装甲へと深々と食い込み甲板がいびつに隆起する。左腕の2連ビームガンが装甲の隙間に次々と撃ち込まれ、ビームのもたらした膨大な熱量は装甲を内側から吹き飛ばす。

「上出来だ」

ローラシア級を離れるステラのディーヴィエイトと入れ替わるようにしてイクシードガンダムが装甲に開いた穴を見下ろす。

右腕にはバズーカ。左腕には2連ビーム・ライフル。両肩に加え、胸部にもビーム砲が装備されている。まさに火力の怪物と言えるイクシードガンダム・バスターカスタムはそのすべての火器のロックオンを終えた。

モニターには煙で覆われ下を見透かすことのできない穴。そのすぐ下にはすでに最低限の防備しか残されていないエンジンがあるはずだ。

「くたばれよ、旧式！」

イクシードの火力のすべてがローラシア級へと巨大な火の柱を打ち立てる。

「機関部に、火災発生！」

ローラシア級バーナードのブリッジに報告とは思えない悲痛な叫

び声が響きわたる。

「消火作業急げ！」

「駄目です！　間に合いま……！」

指示を飛ばすアーサー・トライン艦長の声も、涙さえ流すアビー・ウィンザーの姿も、ブリッジ後方の壁から吹き出た炎がすべて包み込み、焼き尽くす。

機関部から発生した火災が艦全体に類焼する形でローラシア級が焼け落ちていく。その様はダーレス級ＭＳ運用母艦のブリッジに克明に映し出されている。

敵の母艦を撃沈するという戦果にも、イアン・リー艦長は眉１つ動かすことはない。いつも通りに唇を固く結んでいた。

「まるで問題にならんな」

わずか１隻。護衛となるモビル・スーツも満足に持たぬ戦艦など現在の戦術では物の数に入らない。戻るべき場所を失ったモビル・スーツだけでどれほど戦えるものでもない。

イアンの顔に油断の色はない。それは普段からの心がけばかりではない。レーダーがこちらに接近中である艦隊を捉えていた。信号はない。味方以外の何か。敵の援軍と考えた方が妥当というものであろうか。

クルーから報告があった。

「ミノフスキー粒子濃度上昇異常です。索敵、行えません！」

ミノフスキー粒子は乱暴な言い方をするならビームの原料である。エネルギーを失ったビームがミノフスキー粒子に還元されることは確認されている。それだけにしてはミノフスキー粒子濃度の上昇が著しい。

レーダー攪乱のために意図的に散布されているのだとしても少々大げさと思える。

「2番、3番小隊を防御に当たらせろ。今のうちに艦の向きを合わせておく！」

イアンの指示に、クルーたちは即座に反応する。体に横からのしかかる重みは艦が方向転換を始めたことの証である。

ミノフスキー粒子上昇前に感知された敵はさほど大規模というほどではない。しかし先に撃沈されたローラシア級の援軍であるとすれば増援を待たずに行動を起こしたことの説明がつかない。偶然遭遇したにすぎない。それではできすぎている。

不気味さがないわけではない。イアンは、しかしすべて予定調和の範疇であるかのように振る舞う術を知っている。

艦長席の横で人形が動き出す。そんな事態にも表情一つ変えることなく対処する。

白いドレスを身につけた桃色の髪の塊がオブザーバー席の背もた

れを乗り越えていた。ただでさえ髪が長く、波立っていることから無重力では髪の毛が大変多く見える。

「私も出ます」

姉を気取って弟たちの遊んでいる姿を眺めていた。しかしやはり気になって混じろうとするような。そんな気軽さでヒメノカリス・ホテルは自らの出撃を宣言する。

「わかりました。しかし……」

言葉に詰まる。そんな指揮官にあるまじき姿をさらしてしまったとしても許されるのではあるまいか。

「まさかそのお姿で？」

お人形を飾るようなドレスのままモビル・スーツを操縦するのだと聞かされたなら。

イアンの唇がおかしな形で結ばれる。その目は無礼にならない程度にヒメノカリスの姿を眺めていた。

愛するお父様以外の人物には微笑みさえ浮かべることはない。それがヒメノカリスというお人形である。表情に乏しいまま、その青い瞳はイアンを見る。

「ドレスは女性の戦闘服だから」

そう言い残し、ヒメノカリスはブリッジを後にする。冗談なのか本気なのか、どちらとも判断できないイアンを残して。

バーナードが爆沈され、トライン艦長たちは絶望的であると言えた。決して長くはないとは言え、ともにいくつもの死線を乗り越えた仲である。何にも感じない訳がない。悲しいとさえ思えた。

シンの搭乗するインパルスのすぐそばをレールガンの弾頭が通り抜けた。まともに視認できる速度ではないが、インテンセティガンダムの特殊な奴が放ってきたものであることくらいはわかる。

これが現実である。悲しんでいる暇などない。生き延びる術さえわからない。

母艦が撃沈された。バーナードを落とした2機のガンダムがインテンセティの加勢に参上しようとしていた。ルナマリアにしても6機もの敵機を相手に満足な戦いができずにいる。

「どうすれば、どうすればいいんだよ……」

声はかすれ、涙さえ浮かんでいることを自覚する。

ガンダムに勝てるほどの実力はない。たとえこの戦いをくぐり抜けたところでインパルスガンダムの航続速度では友軍と合流する前に酸素が尽きてしまう可能性の方が高い。そして、この戦いさえ逃げ出せるだろうか。

インテンセティが鎌を構え接近してくる。ほとんど自棄になって対艦刀を振り回す。ビームを弾くシールドはたやすく対艦刀を受け止めると、鎌が振り下ろされるだけの隙がインパルスの正面に生じ

ていた。

ありとあらゆる実体剣を防ぐフェイズシフト・アーマーに包まれていることも構わず鎌がインパルスの頭部を斬り裂いた。左目が縦に斬り裂かれ、モニターの一部が不鮮明となった。

その朧気な視界の中に、シンは光を見つけた。

「光る、ガンダム……」

この戦場にいる者はみなすべて、それに視線を奪われていた。

それはガンダムである。純白の装甲に、黄金の帯がかけられた姿をしている。その手には武装らしいものは何もなく、明らかに武器と思われるものは一切所持していない。

その背には環状の構造。正面からも見えるほどの大きさのリングが背負われていた。

そして、全身を淡く輝かせている。ミノフスキー・クラフトの発する光であることは誰の目にも明らかであった。それがガンダムであることは顔を見ればわかる。

だがそれは果たして兵器なのだろうか。それならば武器はどこに。完璧な円をなす光を背負い、純白の体にところどころ黄金の帯を巻き付けたその姿は神々しくさえあった。

「何だよ、あいつ？」

アウル・ニーダの関心先程まで戦っていたインパルスガンダムからすでに純白の機体へと移っていた。インパルスから離れ、新手のガンダムを見やすい位置にまで機体を移動させている。

そのすぐそばではスティングの乗るイクシードガンダムが付近への警戒を怠らぬ動きをしていた。ステラのディーヴィエイトも純白のガンダムへの関心を隠そうとはしない。

「見たことない機体だ。ゲルテンリッターか？」

「あんな機体、ない」

「7機全部見たことあるわけじゃないだろ」

スティングとステラは相手の正体を把握できていない。その脇でアウルはすでに戦いの準備を始めていた。

インテンセティガンダムが重厚なバックパックで頭部を覆い隠す。それ自体がミノフスキー粒子に包まれるバックパックは甲殻類を思わせる形状で、鋏の代わりにシールドが腕の先には取り付けられている。細長のデュアル・センサーが1対で隠された頭部の目の代わりをしていた。

「味方じゃないなら……」

アウルの目には、モニターに映し出されるインパルスガンダムの姿が映る。ローラシア級に搭載されていたものとは違う。新たに目

算で6機のストライクもどきが白いガンダムの後ろから接近している最中であった。

ストライクもどきを率いる奴が味方であるはずがない。アウルは確信を持って引き金に指をかける。

「敵だろ！」

蟹の口に当たる部分に設置された大型ビーム砲からビームが一直線に放たれる。直撃のコースである。それは、動かれなければ。

純白のガンダムは動いた。全身を包む輝きを強め、滑るように滑らかな動きであっさりと射線上からその機体を逃がした。

全身をミノフスキー・クラフトで包み込む。それが意味することを誰もが知っている。アウルのインテンセティガンダムのような量産型ではない。真の意味でガンダムと呼ばれるべき機体であるのだと。

純白のガンダムが動いた。何かをしているわけではない。ただ背部のリングを動かして、それは頭上に飾られた。後光のごとき輝きが頭上から溢れ、その荘厳とさえ形容できる雰囲気に拍車がかかる。

とても攻撃とは思えない動きに、アウルは極度の緊張を強いられた。ガンダムがガンダムよりも弱いはずがない。シールドを前面に展開し、実弾もビームにさえも十分な防御力を発揮する鉄壁の守りで固める。それほど警戒すべき相手であった。

ガンダムという機体と対峙するということは。

それから、何かが起きたわけではない。それは認識にすぎない。アウルは確かに、敵が何かしたということを確認したわけではなかった。

それでも、光が満ちた。

シールドの内側。シールドと機体の間に位置するアームを突然光が包み込んだ。それは明らかにビームの輝きを放ち、フェイズシフト・アーマーが悲鳴のように強烈に輝いた。

そして、アームが破壊される。爆発の衝撃が機体を叩き、アウルはうめいて後ろへと弾きとばされる。アームを破壊されたシールドは勢いよくインテンセティから離れた。

何をされた。何があった。

まったく理解できない。わかっているのはシールドを1つ、見えない攻撃で破壊されたということだけ。

「何だよ、これ!?」

逃げるように機体を動かすと、ついさきほどまでインテンセティがいた場所に突如光の玉――明らかにビームによるものだ――が発生した。虚空からいきなりビームが出現したようにしか思えない。

声に明らかな焦りの色を含ませて、スティングがバズーカを発射する。

「魔法かなんかだろ!」

弾速が決して誉められたものではないバズーカの弾頭が、突然現れた光に絡めとられて爆散してしまう。

白いガンダムは輪を頭上にかざしたまま動こうともしない。動くこともなく、ステラたち3人を追いつめていた。

機動力に秀でるディーヴィエイトとて、見えない攻撃はかわしようがない。いつ攻撃されるかもわからない恐怖は、ステラの幼い心をたやすく蝕む。

「お姉ちゃん……」

瞳に涙さえ溜めて、ステラは最も頼りにする人物の名前を挙げる。ディーヴィエイトのコクピットに光が飛び込んできたのは、まもなくのことであった。

眩しくはあっても熱はない。思わず閉じた瞼をゆっくりと持ち上げた時、そこには黄金が巨大な存在感を放ちながら立っていた。明らかにステラを狙っていたと思われるビームがそれのわき腹の当たりで爆ぜた。黄金の輝きは損なわれることなく、ステラを守るようにディーヴィエイトの前に在り続ける。

それは、黄金のガンダムであった。

「お姉ちゃん！」

姉と慕うヒメノカリスの参戦に、ステラは破顔する。モニターには、ほんのかすかではあっても微笑もうとするヒメノカリスが映し出されていた。普段通りに着飾った姿のままで。

ヘルメットの奥で、さすがのステラも瞬きを繰り返さざるを得なかった。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダム。この機体は、ムルタ・アズラエルを名乗ったブルー・コスモスの3人の幹部の1人であるエインセル・ハンターが搭乗したことから反コーディネーターの象徴として認識されている。

全身を黄金の装甲で包み、その全長は通常のモビル・スーツの1.5倍ほど。細く長い手足に、バックパックは大型のものが取り付けられ、シルエットだけでもほかのモビル・スーツとは一線を画す。

存在そのものが存在感を主張してやまない。そんな美しくも異形の姿であった。

シンとルナマリアも、果てには地球軍も増援のザフト軍でさえフォイエリヒから目を離すことができない。ただ唯一、白いガンダムだけが動いた。装甲を輝かせ、すべるように機動を開始する。

フォイエリヒもまた、一層黄金を輝かせた。２５ｍにも達する機体が、やはりすべるようになめらかに動く。

互いのガンダムは淡い光に包まれたまま戦闘を始めた。

黄金が、フォイエリヒが動く。バックパックが腕を伸ばした。メイン・スラスターを取り囲むように配置されたユニットが多節アームに持ち上げられるように起きあがる。その様は蟹の被りものをしたインテンセティガンダムのシールドを彷彿とさせる。ただし、フ

ォイエリヒは４機。そのすべてが黄金の輝きに包まれ、先端部分には銃口が開いていた。

各ユニットから一筋のビームが伸びる。モビル・スーツ４機から同時に攻撃されているにも等しい猛攻を、白いガンダムは軽々かわしてく。

突然フォイエリヒの行く先にビームの塊が発生する。ビームを弾く黄金の装甲はビームを弾くはずだが、フォイエリヒはうまくその身を翻すとその姿勢のまま腕を伸ばした。表現ではない。先端に大型のビーム・サーベルを発しながら、腕が明らかに伸びて白いガンダムへと向かう。

白いガンダムは腰から取り出したビーム・サーベルで迎え撃つ。ぶつかり合う２本のサーベルは、ビームを包むＩフィールドの損傷によって互いにビームを垂れ流す。その輝きは極めて強く、両者の出力が尋常ではないことを物語る。

機動性。攻撃力。防御力。そのすべてをとってもインパルスガンダムでは遠く及ばない。そしてこんな戦闘でさえ、まだ互いの探り合いの段階である。

そんな前哨戦は、人々の意識をたやすく奪う。戦闘中であるというのに、戦っているのは２機のガンダムだけであり、ほかの機体は制止したまま――信じられないことに――その戦闘の様子を見守っていた。

輝く２機が信じられない性能と反射を見せて互いに一歩も譲らない。

「すごい……」

シンの耳にはルナマリアの声が届いていた。あまり裏表のないルナマリアらしく素直に驚きを表現している。しかし、それをシンが認識することはない。

「あんたが……」

暗い声。小さくともそこに含まれる陰惨な抑揚ははっきりと聞き取れる。

「シン……？」

シンはルナマリアの心配げな声など聞いてはいなかった。すべてが耳に届いてなどいない。

ただひたすらガンダムの戦いを見守っていた。正確には、黄金のガンダムの姿を、見ていた。

「あんたが！」

ペダルを思い切り踏み込み、シンは舌を噛む危険さえかまわず吼えた。左目を失ったインパルスがスラスターと、わずかなミノフスキー・クラフトを頼りに加速する。

白いガンダムなど問題にはしていなかった。ただただひたすらにフォイエリヒを目指してスラスターが火を噴く。この程度の機動力で追いすがることができたのは、幸運か、それとも意地か。

インパルスは対艦刀を力任せにフォイエリヒガンダムめがけて叩

きつけた。

「あんたが母さんを殺した～！」

ビーム・サーベルはビーム・サーベルで防がれる。目を焼かんばかりの輝きが奔流となってインパルスとフォイエリヒの間に流れた。

シンの眼差しは閉ざされることはない。光を浴びていることも構わず、その瞳は怒りに蝕まれたまま、フォイエリヒへと向けられていた。

突然の乱入。そもそも、予定された乱入などないのではないだろうか。ヒメノカリス・ホテルは、あくまでも冷静であった。

がむしゃらに対艦刀を叩きつけてくるインパルスの攻撃は単調で、フォイエリヒの両腕から発生させたサーベルで防ぐことができる。同じガンダムとは言え、ゼフィランサス・ズールが直接手がけたフォイエリヒと単なる数うちとでは性能に雲泥の差があるのだ。

そして、パイロットの腕前も。

ヒメノカリスは隙を的確に捉え、つま先から発生させたビーム・サーベルを敵インパルスの左肩へと下から突き立てた。フェイズシフト・アーマーの強烈な閃光が収まった時には、インパルスは左腕を根本から失っていた。

それでも、勢いそのものはまるで減じることがない。

「このインパルス、私を狙ってる」

ただ加勢に訪れたにしては攻撃が執念じみている。左腕を失い、よく見ると左目も破壊されている。それなのに一向に衰えることのない気迫は、ヒメノカリスにとある人物を思い出させた。

左半身の目と腕を失い、それでも前に進むことをやめようとはしない男をヒメノカリスは知っている。

「どこかの馬鹿に似てる」

すると不思議と情もわく。

片手だけで対艦刀を降り下ろす一撃を、ヒメノカリスは、フォイエリヒはすり抜けた。正確には、端からはすり抜けたとしか思えないほどの近距離で攻撃をかわし、接触する限界の距離でインパルスの脇を通り抜けたのだ。

2機のガンダムは互いの位置を交換し、背中合わせの状態にあった。

ミノフスキー・クラフトによる微細な機動と、卓越した操縦技術がなせる限界の見切り。ハウンズ・オブ・ティンダロスと呼ばれる、世界で数えるほどしか体得者のいない絶技である。

そしてヒメノカリスはその1人に数えられない。これでは不完全なのだ。攻撃を完全に回避し、同時に反撃を行ってこそハウンズ・オブ・ティンダロスは完成する。回避はあくまでも手段でしかなく、攻撃こそ本懐。

ヒメノカリスでは、せいぜいすれ違いざまにインパルスの左足を斬り落とすくらいであった。

それでも、相手のパイロットは足を斬り落とされたことさえ気づいていないかもしれない。たとえ不完全であったとしても、凡夫には果てしない領域である。それに、インパルスは何事もなかったかのように残された対艦刀を勢いよく薙ぎ、フォイエリヒへと追撃を続けようとしていた。

「あんたが殺したんだ。あの日、あの場所で！」

傷だらけのインパルスの中でシンは声がかすれるほど大きな声を上げていた。ヘルメットの中で反響し、自らの耳を痛めても構わず。

フォイエリヒは、このガンダムの初陣をシンは知っている。

今から4年前のC．E．71年。大西洋連邦軍がオーブ首長国へと侵攻した際、フォイエリヒガンダムは投入されたのだ。

オーブの空に悠然と禍々しいまでの美しさをさらす姿を、シンは1日たりとも忘れたことはなかった。

「あんたが！　あんたが～！」

右腕にだけ残された対艦刀をどれほど振り回そうとも、フォイエリヒは完全な回避でかわしてしまう。しかし、今のシンの冷静な戦力分析など行う余裕はない。声を上げたまま攻撃繰り返す。

対艦刀の大きな一撃がフォイエリヒをようやく捉えた。それは認識であり、現実とは違う。攻撃したのはシンであるはずが、しかし傷ついているのはインパルスの方であった。

フォイエリヒのサーベルが右半身を直撃し、その熱量はシンに激痛としてコクピットにまで届くほどである。

薄れていく意識。それでも敵意の眼差しは辛うじて生き残ったモニターに映し出されるフォイエリヒの姿を捉えて離さない。

「あんたが母さんを……！」

怒りと憎しみの中で、シンの意識は途絶えた。

C．E．７１年に行われた大西洋連邦軍によるオーブ侵攻は、現在においてもまだその明確な理由は明らかではない。

当時大西洋連邦はパナマ基地、及びオーブ侵攻と同時期に行われたジブラルタル攻略作戦において軍事目的に耐えうるマスドライバーを2基確保していた。オーブの所有するマスドライバーの必要性は必ずしも高くはなかったと分析されている。

では何故国際的信用を失う危険性を犯してまで中立国オーブへと侵攻したのか、それは諸説分かれている。

反コーディネーター思想結社であるブルー・コスモスの代表を当時務めていたムルタ・アズラエルが軍需産業ラタトスク社の代表を兼任していたことから、新兵器の実験に使われたのではないかとの

説は根強い。

確かに当時最新機であったＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーが大体的に投入された事実はそれを裏付けるが、それが国際世論を敵にする危険を冒すほどの価値があるものかとの反論には有効な対抗手段を打てないでいる。

マスドライバーの確保がやはり目的であったのではないかとする説は諸手を上げて肯定するほどでもないが、否定することもできない。

当時ジブラルタル基地はザフト地上部隊の中で最も戦力が集中した場所であり、陥落は難しいとされていた。では何故オーブ侵攻と時期を合わせて行われたのか。戦力の分散は、しかし軍が当時の内情を明らかにするはずもなく正確な戦力分析を行うことはできないでいる。

一番荒唐無稽とされる説で、しかし大西洋連邦が主張している学説が存在する。

オーブが裏でプラントと手を組んでおり、大西洋連邦軍が反撃に打ってでた際には背後から奇襲をかけると密約で決まっていたとされる説である。

この説は明確な証拠はなく、またザフト軍が行ったニュートロン・ジャマー降下によって多大な犠牲が生じた地球の国家がその首謀者に肩入れすることはありえないという国際世論の流れと逆行している。

ただし、中立を謳うはずのオーブが大西洋連邦の技術を盗用する

形でモビル・スーツの独自開発を進めていたという事実や、マスドライバー及び技術力に優れたモルゲンレーテ社本社を自爆させるという大西洋連邦に技術を渡さない、プラントを利するとも考えられる行動があったことがこの説を論争の座から引きずり落とすことはないとされている。

そして、たとえ政治学者が何を言おうとも変わらない事実がある。

多数のオーブの市民が犠牲になった。この事実だけは何も変わらない。

あの日、シンは走っていた。爆音の中を、撃墜された戦闘機が頭上をかすめるような低空で煙をまき散らしながら通り過ぎて行った。

シンは走っていた。戦場のただ中を、母に手を引かれて。

これは夢。母とどんな会話をしたのか覚えていない。ただ必死な顔であったことが朧気ながら思い出される。

母は仕事一筋の人だった。優秀で、熱心で、オーブの中でも指折りの大企業モルゲンレーテ社に務めるほどの人である。家にいる時でもいつも横に細長い眼鏡をかけて、厳しい表情で携帯電話にまくし立てている姿しか見たことがない。

そんな母が幼いシンの腕を引いて必死に走っていた。

政府が突然避難命令を出した。理由なんてわからない。戦場を突っ切って逃げ出せと命令してきた。子ども心に民間人に戦場を走ら

せることのおかしさはわかっていた。

周りにはシンの他にも大勢の人が着の身着のままで走っていた。道路は損傷がひどくて車は支えない。思い出した。だからシンは走っていた。

陥没し、破壊され、瓦礫の山ができた道路をただ走っていた。

大きな音がする度、避難民が一斉に横を向く。道路自体が高台にあって、やや下に見える森ではモビル・スーツが戦闘を続けていた。

２０ｍほどもある機体が巨大な剣をぶつけ合いながら戦っている。間合いを変えるために出された足にかすめられただけでも人なんてひとたまりもない。

流れ弾のビーム――当時はビーム兵器のことをよく知らなかった――がシンの後ろの道路へと着弾した。熱風に背中を押され、シンは思わず前のめりに倒れた。

シンを気遣う母の声。母に支えられながら擦りむいた膝を庇うように体を起こす。夢の中の自分へ、シンは叫びたかった。後ろを振り向くな。

それでも、記憶は継続される。

シンは後ろを振り向いたのだ。クレーターのように陥没した爛れた穴と、その周りに残された何か。穴から離れるほど、それは人の形を残していた。はっきりと見えるほどシンの近くともなると、全身が爛れた、それでも死にきれない人のうめき声と白濁した眼球が見えてしまった。

それからどうしただろうか。確か、狂乱して、母にしがみついたような気がする。マユ母さん、マユ・アスカ、母の名前を呼びながら。

それも長いことではなかった。胴を両断されたＯＲＢ－Ｍ１　Ｍ１アストレイ――当時のオーブ軍の主力モビル・スーツで、技術盗用の噂がある機体だとは後から知った――が道路の方へと崩れてきた。機体そのものは直撃はしない。ビームの熱量が破壊された機体内部から一気に吹き出し、炎の波となって道路を襲ってきたのだ。

何がどうなったかなんてわかるはずもなかった。熱くて痛い。それがシンの率直な感想であった。

炎がくすぶり、焦げ臭い。ビームほどの熱量はない炎は人々を焼き焦がした。人が焼ける臭いの中で、シンはゆっくりと立ち上がった。

無傷ではなかった。全身が熱にやられ、軽い火傷になっていた。左頬の痣はこの時のものだ。４年経った今も決して消えてはくれない。

頬を伝う涙が火傷に染みた。こぼれ落ちる涙は、全身を焼かれた母を湿らせる。

「母、さん……」

まるで頬の涙を拭うような風が上空から落ちた。思わず見上げると、そこには太陽があった。人の形をした太陽があった。

太陽が燦々と降り注いでいるにも関わらず構いもせず空に漂う姿は傲慢。太陽を騙りながら、本物を前にしても自らの偉大さを誇示するかのようで。

太陽へと挑む偽りの黄金は、オーブの空を蝕んでいた。

熱に喉を焼かれ、声が声にならない。血を吐くような思いで、それでもシンは黄金のガンダムへと慟哭の限りを、憎悪の塊をぶつけずにはいられなかった。

人を幸福にすることは難しくても、人を不幸にすることは簡単です。それは何故でしょう。それは、人の周りにあまりに災いが多いことに起因しています。人を嘆き、悲しませるものはあまりに多いのに、人を幸福にしてくれる出来事はあまりに少ないからです。結局、選択肢の多寡にすぎません。

だとすると、望んで特定の不幸になることも難しいのではないでしょうか。どんな不幸でもいいなら別として。

それは堕落とて同じこと。意図した堕落は幸福ほども選択肢が限られてしまいます。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「堕落論」

プラント。意図した堕落を、人は狂信と呼ぶのではありませんか。

第４話「堕落論」

「だから寝るのは嫌なんだ……」

あれから４年も経つのにいまだにこの夢にうなされることがある。母を失った夢にも慣れたもので、以前のように飛び起きることはなくなった。自分でも意外なほど冷静に瞼を開いた。

ここはどこだろうか。見慣れない形をした照明が見えた。どこかに寝かせられているようだが、自室でないことだけは確かだ。ローラシア級ＭＳ搭載艦バーナードは撃沈されてしまった。シン・アスカが帰る場所はもうない。母を失った時と同じだ。胸に膨らむしこりは肺を圧迫する。起きあがる気にはなれなくてシーツの感触を背中で確かめていた。すると、照明の光を遮ってのぞき込んできた誰かがいた。

これだけは見慣れている。赤い髪に少女特有の丸い瞳。ルナマリア・ホークだった。

「お目覚め、シン？」

「ルナ、ここは？」

シンが上体を起こすと広がった視界には医務室特有の光景が広がっていた。様々な薬品がしまわれている棚や、空のベッド。普段はカーテンで仕切りが作られているのだろうが、ルナマリアが閉め忘れたのか、大きく開かれたままでシンの観察を助けてくれた。椅子についた白衣の男性がこちらを見ていることにも気づくことができたのもそのためだ。

「ラヴクラフト級ミネルヴァの医務室だ。君は戦闘中に気を失ってここに運ばれてきた」

船医なのだろう。椅子を回して、体をシンの方に向けていた。その言葉の中に聞き慣れない単語を見つけると、シンがつい頼ったのはルナマリアの方であった。

「ラヴクラフト級？」

少なくともローラシア級とは違う。そもそもここはどこなのだろうか。

シンには記憶がない。戦闘で母を奪ったモビル・スーツの姿を見つけて攻撃を仕掛けた。返り討ちにされて気を失った。それだけだ。

「シン、ついてきて。歩きながら説明するから」

ルナマリアが手を引いてくる。無重力であるため簡単に体が浮き上がる。船医にはルナマリアが軽く会釈して、シンは医務室から連れ出された。

部屋の外には小綺麗な通路があった。いつも人手不足で薄汚れていたバーナードとは違う。

あれからどれくらい意識を失っていたのかわからないが、ノーマル・スーツを着せられたままであったので大して時間はかかっていないだろうと判断した。ルナマリアはすでに軍服に着替えている。赤い軍服であることから、どうやらこの艦にはルナマリアの他にも赤服の女性兵士が乗艦しているらしい。ルナマリアの軍服はバーナ

ードとともに沈んだはずだから。

シンの先を行くルナマリアは体ごと振り向いた。無重力の中、前も見ずに漂っている。危なっかしいこの上ない。

「あの戦いの時、援軍が来てくれたこと覚えてるでしょ」

「ああ。見たこともないような白いガンダムがいた」

リング状のバックパックに、白い装甲には黄金の帯が巻かれ、すべてがミノフスキー・クラフトの淡い輝きに包まれていた。

「そのガンダムの母艦がこのミネルヴァなの。私たちはそこに収容されたってわけ」

「トライン艦長たちは？」

この同僚は大変わかりやすい。ちょっと撃沈されてしまった仲間たちのことを挙げただけで表情を曇らせた。覚悟を決めるにはちょうどいい間をおいてから、ルナマリアは答えた。

「駄目だったって……」

あの爆発だ。わかってはいた。理屈と感覚はやはり別物であるらしい。頭を曇らせる不快感はなかなか消えてはくれない。

後少しだった。後少し戦い抜けば除隊が許可されたはずだ。ザフトが外人部隊の扱いを少しでも真っ当に対応してくれていたならみんな焦る必要なんてなかった。家族の下へ帰ることができたはずだ。つい目を細め、表情が険しくなってしまったのは、通路を抜けて広

い空間からの強光にさらされたからばかりではない。

気づくと、シンは格納庫に足を踏み入れていた。格納庫なんてどこも大差ないのではないだろうか。それはシンの浅慮な思いこみでしかなかった。

多数のＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが並んでいる。その脇には合体や変形を助けるためと思われる頑丈そうなガントリー・クレーンが１機に１台用意されていた。ローラシア級のように物資運搬用のクレーンを無理矢理使っているものとは違う。

シンは否応なしに思い出さざるをえなかった。ラヴクラフト級は、インパルスガンダムを運用するために開発された専用艦なのだと。要するに、外人部隊には与えられなかった戦艦である。この艦がないからこそシンたちは苦しめられ、その艦がいてくれたからこそシンとルナマリアは救われた。

何とも皮肉ではないだろうか。同じはずのインパルスさえ、正規軍のものの方が立派なものに思えてならない。見比べてやろうかと自機を探していた時、例の機体を見つけることができた。

向き合ったインパルスの列の先にあったのは、白いガンダムである。改めて見るとザフトが量産しているＺＧＭＦ－５６ＳインパルスガンダムともｚＧＭＦ－２３Ｓセイバーガンダム－－実物を見たことはないが－－とも共通点が見いだせない。まったく異質な機体だった。

「ほら、シン、あの人が白いガンダムのパイロット」

ルナマリアの突然の声に前を向く。廊下から格納庫へと通じる通

路は、格納庫内をまっすぐに伸びて壁にへばりついてた。モビル・スーツの丁度胸くらいの高さの通路の先、ガンダムを眺めるように手すりに体を預けた少女、いや、男性だろう。

その横顔は中性的で、髪は滑らかな金髪。歳のほどはシンたちと同じくらいか、少なくとも年下には見えない。赤い制服はその力のほどを証明している。そしてその実力に見合った静かな自信というものが、その顔から感じ取れた。

ルナマリアの声に気がついたのか、ザフトの赤服はこちらへと向き直る。表情に乏しい顔は無感情というより、感情を冷たく押し殺しているかのような顔だ。シンたちが近くで止まったタイミングで、彼は敬礼をした。

「レイ・ザ・バレル大尉だ」

敬礼を返すルナマリア。つい反応が遅れているとルナマリアが小声で注意してきた。

「ほら、シン……」

「シン・アスカ軍曹です……」

軍学校で何度も習ってきたことなのに、なかなか敬礼は体に馴染まない。辛うじて形だけ取り繕っておくことが精一杯だった。

その理由の１つは、バレル大尉の階級だろう。まだ１０代と思える少年の階級にしては高すぎるように思えた。シンとてまだ軍曹だ。軍学校では主席の成績を維持していたが、カリキュラムをすべて終えるまでに放り出された。そのため、赤服を与えられても卒業扱い

にはされず、階級も新兵同然から始まった。

そんな反感があったのだろう。それとも正当な抗議だろうか。バレル大尉の左の襟元には翼を模したエンブレムがあった。間違いなく、正規兵の証である。

「どうしてですか……？」

敬礼の手が力なく落ちる。まるで、その力もひっくるめて激情に向かってしまったかのように、シンは自分が抑えられなくなる感覚を覚えていた。

「どうしてもっと早く助けに来てくれなかったんですか！？　そうすればトライン艦長たちも死なずにすんだかもしれない！」

一体何のためにピカピカの制服を着て、豪華な戦艦に乗って、本物のガンダムに乗っているんだ。

ルナマリアが心配そうに見ているのは気づいていたが、今は怒りが先立つ。シンが怒鳴り散らしてもバレル大尉は気味の悪さを覚えるほど冷静だった。

「こちらの到着を待たずに動いたのはそちらの判断だ」

「それもこれも、あなた方正規軍のしわ寄せじゃないですか！　これまで艦長たちがどれほど正規軍に要請を断られてきたか、あんたは知ってるのか！？」

「どうして欲しい？　まこと残念だ、このことは決して忘れはしないとでも言えば満足するのか？」

何なんだ、この男は。何かが違う。まるで別世界の住民でもあるかのように目の前の出来事への当事者意識が欠落している。シンのことなど相手にもしていない。

殴りかかることなく踏みとどまることができたのは、ルナマリアが強引にシンの腕を引っ張ってくれたからだ。ただ、それだけのことだった。

「ちょっと、シン！」

怒りが晴れたわけではない。それでも、ルナマリアを突き飛ばすところまで冷静さを失っているわけではない。もちろん、冷たい静かさなら、バレル大尉にかなうはずもないが。

「艦長に顔を見せておけ。グラディス艦長なら、今は艦長室にいるはずだ」

ただそれだけだった。バレル大尉はまた手すりによりかかり、例の白いガンダムを眺めている。

この男をどうすればいいのかわからない。すぐさま目をそらしてしまのは癪で、それでも、もう殴ってやろうという気持ちも起こらない。ルナマリアに促されたことをきっかけにして、シンは歩き始めた。つい気になって振り向いても、バレル大尉は前を見たまま、すでにシンへの関心を失っているようだった。

シンはこの艦の構造を知らない。ルナマリアが前を行く形は継続されると思いきや、ルナマリアはシンの横に並んだ。

「どうしたのよ、急に……？」

「何でもない」

話してもきっとルナマリアは理解してくれない。いくな同じ外人部隊とは言っても、アブディエルとオナラブル・コーディネーターではやはり壁がある。

「でも……」

「何でもないって言ってるだろ」

お偉い方はいつも自分が正しいようなふりをして民を踏みつける。かつてシンがオーブで政府に対して抱いた反感を、エリート兵士と外人部隊の関係に置き換えてしまった。このことを理解してくれる人は、恐らくここには誰もいない。

シンとルナマリアは気づいていないようであったが、2人は思いの外格納庫の関心を集めていた。整備士も手を止めて拾われたパイロットの様子を眺めている。シンがバレル隊長に食ってかかった時も、パイロットの何人かはその様子を目撃していた。

開かれたままのインパルスのコクピット・ハッチ。その縁に腰掛けるのは赤いノーマル・スーツを着た少年であった。ヘルメットはつけていない。橙色の髪が鮮やかで、その顔にはあどけなさが強く残る。いつ閉まるかわからないコクピット・ハッチという危険な場所に座っているところからも、この少年からは老練だとか経験というものは深くは感じ取れない。

「あれがアブディエルの赤服なんだろ、ヨウラン？」

少年はシンたちが去っていった方向を眺めたまま、すぐ側に漂っている別の少年へと話しかけていた。

少年の名はヴィーノ・デュプレ。話しかけられた方はヨウラン・ケントである。

ヨウランは褐色の肌をしているせいばかりではなく、表情をうかがうことはヴィーノのように簡単ではない。どちらかと言えば落ち着いている方で、軽率な様子は見られない。

「女性の方はオナラブル・コーディネーターだ。言葉は正確にな」

大して変わらないだろ。そんな軽い調子でヴィーノは返す。その様子はやはり表情豊かで変わりやすい。

「でも大丈夫なのかな？　結局どっちもコーディネーターの出来損ないみたいなものなんだろ」

ヴィーノがシンたちへと送る瞳には、軽い猜疑が含まれる。ヨウランはどちらかと言えば友好的な眼差しをしていた。

「人はどう生まれるかじゃない。何をするかだ。あの2人だって、プラントと人類の明日のために命をかける仲間だろ」

しかしヨウランがシンのことを理解しているのかと言えば、その限りではなかった。

「ルナマリア・ホーク、シン・アスカ軍曹を連れて参りました」

敬礼するルナマリアの横で、シンもまた敬礼をする。

艦長室は、広く、寝室を応接間を隔てる扉があるほどであった。ここは応接間。ローラシア級の艦長室に入ったことはあまりないため、比較こそできないが、無駄に立派な机なんて少なくとも置かれてなかった。そんな無意味とも思える豪華な机を挟んで、バレル大尉がグラディス艦長と呼んでいた女性が座っている。

ザフト軍において指揮官やその部隊の代表者が着る白い軍服で、同じく白い軍帽は机の上に置かれている。年齢は３０代前半だろうか。厳しい眼差しの似合う人で、シンはふと母親のことを思い出していた。母であるマユ・アスカも、同じような顔をよくした。

「楽にしてちょうだい」

事務的と日常の間のような声である。不必要に堅苦しくはないが、だからと甘えが許される雰囲気はない。

シンとルナマリアは休めの姿勢へと手際よく体勢を変える。

「この艦の艦長を務めるタリア・グラディスです」

グラディス艦長は明らかにシンのことを見ていた。ルナマリアの紹介はすでに終えているのだろう。休めの姿勢に敬礼はあわないと、そのままの姿勢で声を上げる。

「シン・アスカであります」

「アスカ軍曹、少しは状況も飲み込めてきたものと思いますが、あなたたちの所属する母艦は撃沈され、また我々にはあなた方をどこかに降ろしている余裕はありません。よって、あなた方にはこの艦にパイロットとして乗艦してもらうことになります。おって正式な命令が届くことでしょう。異論はありませんね」

「はい！」

軍隊において他に言える台詞などない。あるとすれば、了解です、わかりました、何にしろ、上官に逆らうことはできない。

「この艦のモビル・スーツ部隊隊長はレイ大尉が務めています。今後、レイ隊長の指揮下で戦ってもらいます」

グラディス艦長は手元の資料に目を落とし、こちらを見ることはなくなった。これで話は終わりということだろうか。あのバレル大尉の指揮下に入ると言うことについ嫌な感覚を覚えた。

「グラディス艦長、お聞かせ願いたいことがあります」

艦長はシンの方を一瞥だけしてすぐに資料へと視線を落とした。決して好意的とはいかないまでも拒否されたわけでもないらしい。ルナマリアはどこか心配そうな様子だが、想像されてるようなことを聞くつもりはない。

「この艦は私の見た限り単独で行動しています。その理由は作戦内容と関係しているのでしょうか？」

正直、これが質問であったのか疑わしい。特殊なガンダムに、バレル大尉のエンブレムを見ればこの部隊が特殊任務を帯びていることは容易に想像がつく。

翼のエンブレムはフェイス、プラント最高評議会議長にのみ選任が許可されたエリート・パイロットにのみ与えられる紋章である。見たことは初めてだが、軍学校ではフェイスがどれほど偉いのか耳にたこができるほど聞かされた。以前は最高評議会議員なら誰でも選任できたそうだが、ある議員が子息を選任するという公私混同をやらかした挙げ句、息子の部隊から離反者を出すなどの問題を生じたことから議長特権になったのだそうだ。驚くべきことに、その議長は未だに最高評議会の議席を有している。

フェイスについての話を一通り思い出せるほどにグラディス艦長の反応は遅かった。今度は一瞥さえない。

「レイ大尉はギルバート・デュランダル議長に選任されたフェイスです。この意味がわかりますね？」

要するに、それほど重要な任務をたかがアブディエルごときに話す謂われはないということだ。君には知る資格がない。正規軍の決まり文句だ。

「話は以上です」

この艦が正当な期待に応えてくれる可能性を、シンは見いだせずにいた。

プラント最高評議会は設立当初から変わらないことがあった。議会には必ず円卓を用い、全12市からそれぞれ1名ずつ選出された議員が平等であることを示す。そして、その輪が露骨な形で砕けていることも。

かつては地球との戦争を主張する急進派と戦争反対を謳う穏健派、そしてそのどちらにも属さない中道派の3派に別れていた。

現在ではギルバート・デュランダル議長派とそれ以外の議員とに分けられている。

ギルバート・デュランダル。ユニウス・セブン休戦条約を取りまとめたアイリーン・カナーバ暫定議長から議長の椅子を譲り受けた若い男は、完全なダーク・ホースであった。議員ではあっても必ずしも政局に有利ではない地方議員の1人でしかなかった。そんな男が――プラント最後の砦であるヤキン・ドゥーエ防衛戦にて主要議員の多くが失脚、あるいは命を落としたとは言え――プラント最高評議会議長の椅子を手に入れるとは誰も想像していなかったのである。

デュランダルは絵になる男であった。まだ30を超えたばかりのその顔は若々しく、長く伸ばされた髪型と相まって巧みな弁舌をふるう様はプラント市民の熱狂的な支持を集めた。議長席に座る姿勢1つとっても、如何に自身をよく見せる術を知っている。自信に溢れ、理想の指導者の姿がそこにはあった。

最高評議会の9名はデュランダル議長率いるデュランダル派である。残りの議員とて中立こそ謳いながらも迎合する気配を見せている。仮に議長の政策に真っ向から異を唱える者を挙げるとすれば、それはただ1人であった。

かつて急進派と穏健派で議会が2つに割れている際にも中道派を貫き通した偉大な臆病者は、今なお議会に残された良心であり続けた。

タッド・エルスマン議員。デュランダル議長と同じく髪が長い。しかしすでに老年にさしかかった姿に議長のような覇気は感じられず、代わりにしなやかな強かさを感じさせた。議長が堅牢な盾ならば、エルスマン議員は柳。どちらもそう簡単に打ち伏せることはできそうにない。

好対照な2人は対角線上に向かい合わせで座っていた。

「デュランダル議長、あなたは現在、危うい綱渡りの上にいる。私にはそう思えてならない。戦費拡大に予備役含めた兵員の増員。それを移民や貧困層を利用する形で補っている。戦時中とは言え、これはやりすぎではないかね？」

答えたのはデュランダル議長本人ではなく、その右隣に座る別の議員であった。アリー・カシム。アイリーン・カナーバ暫定政権において副議長を務めたこの議員は、現在も副議長の役職についている。最年少はあくまでもデュランダル議長だが、アリーも若い部類に入る。ただし、議長と違い、若さは未熟さをも含んでいるようにも思えた。

「エルスマン議員、何故おわかりになられないのです？　現在、プラントは未曾有の危機にさらされています。綺麗言ばかりでは立ちゆかないのです」

「そう言って持ち出されたジェネシスは危うく地球を滅ぼしかけた」

ここにはエルスマン議員の2重の皮肉があった。

休戦条約以前のヤキン・ドゥーエの決戦において巨大なガンマ線照射装置であるジェネシスが地球へと発射されようとした。地球の全生命の9割を死滅させるとの予測は、プラント国内ではあまり知られていない。それどころか、地球を救ったのが実はブルー・コスモスの幹部であることは意図的に伏せられている。

そのジェネシスを極秘に開発していたのは2代前の議長、穏健派筆頭であるシーゲル・クラインであった。そしてギルバート・デュランダル議長を初めとする現在の主流派はその穏健派の流れを汲んでいるのである。

穏健派であるという事実を思い出させることは戦費を拡大させることへの、ジェネシスの存在は敵の存在を盾に正当性を主張することへの皮肉である。

アリー副議員はすぐに言葉に詰まり、助けを求めるような視線でデュランダル議長を見た。デュランダル議長は副議長の視線には応えず、ただ真っ直ぐにエルスマン議員を見ていた。

「タッド・エルスマン議員。あなたは大変素晴らしいお方だ。かつて戦地に送った息子が行方しれずになろうとも決して志を曲げようとはしなかった。まさに議員の鑑のようなお方だ」

最高評議会では息子の戦死を契機として穏健派から急進派へと転身してた悲劇の議員、ユーリ・アマルフィ議員がいた。アマルフィ議員はその後大西洋連邦へと亡命してしまった。アマルフィ議員の行動は、子を愛する父のなせる業であったのか、政治家としてある

まじき愚行であったのか、現在でも評価は定まっていない。

エルスマン議員の場合、子息――フェイスが議長特権となったのはこの息子の選任がきっかけである――は無事帰国したが、安全が確認される前から中道派としての態度を曲げようとはしなかった。

皮肉ではないが、政治家の言葉を額面通りに受け取ることはできない。エルスマン議員は特に反応を示すことはない。

「私もそう易々と考えを変えるつもりはない。私には議長としてこの国を守る義務と責務がある。もちろん、私とて今していることすべてが正しいとは言わない。しかしだね、無限に使える予算などなければ、無尽蔵に湧き出てくる戦力なんてものはどこにもない。どこかで何かを犠牲にすることも必要だろう。そして、それが政治というものだ。こんなこと、エルスマン議員には釈迦に説法とは思う。私とエルスマン議員の違いは、所詮どこまでの犠牲を看過できるか、その線引きの違いでしかないのではないだろうか」

議長の笑みは妖しくともこ惑的でさえあった。

「戦争は悲しいかな、1人で始めることはできても1人で終わらせることはできない。我々がどれほど平和を求めようとただ1人の悪意で戦争は起きてしまう。私はね、その火の元を早く払ってしまいたいと考えている」

「議長。あなたはそうしてブルー・コスモスへの危機感を煽り続けた。とにかくブルー・コスモスが悪いとして。だが、油が燃え盛る中にそうと気づかず水を注ぎ続ければ類焼を招くだけではないかね？　そして足下にくすぶる火の粉から目をそらし続けている」

現在、最高評議会は2分されていた。ギルバート・デュランダル議長、そしてタッド・エルスマン議員の2人によって。

急進派、穏健派はともに筆頭を戦死という形で失っている。加え、急進派はエザリア・ジュール議員が政界を引退し、ユーリ・アマルフィ議員が亡命するなど主力議員を失い事実上瓦解した。穏健派議員はギルバート・デュランダル議長のカリスマ性に引きずられる形で徐々に発言力を吸収される形で低下させていった。今、議長に真っ向から意見するのはエルスマン議員だけであり、議会はこの2人の男の対立によって運営されていた。

議長室に過度な調度品や演出の類は必要とされていない。フローリング張りの床は黒一色。執務用の机の上には必要最低限のものしか置かれておらず、応接用の向かい合わせのソファーがある程度。

そこには生活臭というものが一切なく、議長が堅持する有能なリーダーというイメージを一切崩すことはない。

床を響かせる足音の1つにまで気を使っているのではないか。そう思わせるほど整然とした歩きで、ギルバートは議長室を歩く。知らされぬ来客の存在に気づいたのは、まもなくのことであった。

ギルバートに背を向けて、桃色の髪がソファーの背もたれの向こうに見えていた。笑いを含んで、議長は来客の正体を看破する。主なき議長室にいることを誰に見咎められることなくいられる人物。それは自然と限られる。

「やあ、ラクス。来ていたのか」

わざわざ確認はしない。ソファーを回り込み、反対のソファーに座るまでギルバートは相手の顔をわざわざ見ようとは考えなかった。向かい合って座ることで初めて、ギルバートは相手と顔を合わせた。

誰もが認めるほど美しい少女である。その容貌の美しさはさることながら、柔らかくも力強い瞳は大層魅力的であった。人としての強さを持ちながら、それでいて男に守ってあげたいと思わせる、そんな二面性がほどよく共生している。

この少女を、ギルバートはラクスと呼んだ。

ラクス・クライン。かつての議長にして穏健派筆頭であったシーゲル・クラインの愛娘にして現在は自らも首都アプリリウス市選出の議員を務めている。

単なる議員の1人でしかないにも関わらず、議長を前にするその態度に物怖じした様子はない。強がりでないことを示すように、その微笑みはあくまでも自然である。

「如何でした、議会の方は?」

「エルスマン議員は人として尊敬できる人物だ。ただ、少々潔癖性がすぎるね」

ラクスはすぐに話題を変える。聞きたかったのは議会の内容ではなく、ギルバート議長がどのような人物にどのような印象を抱いているのか。ただそれを確かめたいだけであるかのように。

「どうして神は人に余りあるほどの富を与えてはくれなかったので

しょう。そうすれば、争わずともすみましたのに」

「それならそれで、きっと人はさらなる富を求めて争うことになる。人々が際限なくその欲望を解放し続ける限り、争いは決してなくなりはしないよ」

ギルバートもまた、ラクスの話に応じる。

「人は皆平等であることを求める。問題は、誰と平等にありたいかという問いに対して、自分よりも上の人と平等でありたいと願うのです。世界のあり方を理解せず、学ぶこともできず、ただよりよい世界を、よりよい生活を求め続ける。それが人にとっての不幸なのでしょう」

「世界とはこういうものだ。そのことを、我々はみんなに教えてあげなければならない」

それはプラント最高評議会会議とよく似た構図であったのかもしれない。発言力を持つ議員が対面して座り、他から雑音が漏れ聞こえることはない。唯一違いを上げるとするなら、エルスマン議員ほど意見に対立は見られない。

「それが、わたくしたちのお父様の願いです」

「私の願いでもある。君はそう考えて、田舎議員であった私を議長にまで引き上げてくれたんだろう」

「このプラントはそのための礎とならなければなりません」

「私はね、ラクス。君たちこそがそんな新世界を導く天使だと考え

ているよ」

この場にいるのはプラント最高評議会議長とただの議員が1人。2人がどのような顔で、どのような意図で言葉を交わしたのかを知る人物はだれ1人としていない。

ここは議長室。プラントの最高意思決定を担う者がいるべき場所である。

ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァでシンに与えられたのは個室であった。士官待遇というよりも、隔離されたような感覚で、シンは椅子に座っていた。ベッドが大半を占めるような狭い部屋が、しかしシンには唯一落ち着くことのできる部屋になっている。

どちらかと言えば社交的なルナマリアとは違って、シンは正規兵と顔を合わせることさえ苦痛に感じていた。そのため必要な時以外はどうしても部屋に籠もりがちで、ルナマリアが訪ねてくる時以外誰とも口をきくことさえない。

よって訪ねてくるのはルナマリア。ルナマリアが訪ねてくる時は決まってシンが椅子、ルナマリアがベッドに腰掛けて簡単な話をする。この構図は、ローラシア級ＭＳ搭載艦バーナードの頃と何も変わっていない。

「何だか、よくわからないことになったな」

外人部隊として危険な戦場をたらい回しにされ、命の危機に瀕したと思えばいつの間にかラヴクラフト級なんて新鋭艦に乗っている。

ただそれで、何が変わるとは思えない。外人部隊の扱いも、仲間が命を落としたという事実も。

ルナマリアとて部屋の外では明るく振る舞っているようだが、この部屋では心なしか表情が沈んでいる。

「仲間を失う時って、嫌なくらい呆気ないから……」

仲間との死別はいくども経験してきたことである。その度思い知ることは、自分には何もできないこと、死神はドアをノックなどしてくれないということ。いつも突然で、思いがけない。そして残されるのは空虚な感覚。

「俺たち、これからどうなるんだろうな」

気分を沈めたいわけではないが、自然と声は暗くなる。椅子に寄りかかって天井を見上げてみても、それで気分が上向くことはない。

「ねえ、シンって、家族はいる？」

「どうしたんだよ、急に？」

首を水平に戻しながら疑問が口を出た。これまで1度も家族のことについて話したことなんてなかった。

「何となく。私にはお父さんにお母さん、それに妹がいるの。こんな戦争なんてなかったら、私は今頃どうしてるんだろ。普通に学校に行って恋人でも作って、妹に自慢でもしてるのかな？」

ルナマリアに恋人がいたとしたら、それはどんな男だろう。勝手

にどこかろくでもないような男ではないかと想像してしまう。別にルナマリアの男を見る目がないとは言わないが、想像は勝手にそんな人物像を結んだ。

シンは自分の家族を思い出してから、戦争に関わらない自分というものを思い描いてみた。

家族は母1人に子1人。戦争のない自分は、どうしても想像できない。

「俺には母さんがいたよ。でも、4年前戦争で死んだ」

「もしかして、悪いこと聞いた？」

こんなところで声を潜めても仕方がないだろうに、ルナマリアは口元に手を当てる。

「別に。ただ、戦争を意識してた時間が長すぎて、戦争がない自分を想像できないんだ」

もうあれから4年。人生の実に25%を戦争に関わって生きてきたことになる。さらにこの内の半分が軍学校なり、軍隊なりで直接戦争と関わってきた時間である。戦争に参加していない自分がいたとしたら、果たして何をしているのかどうしてもわからない。

あるいは戦争が終わってくれるとしたら、そんなことを考える余裕もできるのではないだろうか。

「ルナ。絶対に死ぬなよ」

こんなところで死んでほしくない。そんな気持ちが素直に出た。

ルナマリアは呆れたように笑う。

「馬鹿。何縁起でもないこと言ってんのよ」

一応、それもそうだと笑いながら答えておく。どれほど努力したつもりでも、心からの笑いというものは取り繕いようがない。どこか乾いたものになりがちで、そして持続しない。シンの顔はすぐに表情に乏しくなる。

悪い奴から死んでいって、いい人が助かる。そんな綺麗な戦場なんて、どこにもなかった。

真剣な表情で向き合う2人。休憩室のテーブルを挟んでアウル・ニーダとスティング・オークレーが睨み合う。

アウルは真剣であった。あどけない表情を、それでも賢明に凄ませてその手には5枚のトランプが扇状に広げられている。その視線は反対側に座るスティングと手元のカードとを行き来する。スティングはトランプを片手で広げ、椅子から半身を乗り出すほどの余裕を見せている。

相手の表情を読みとろうとするアウル。目元には緊張が現れているが、口元からは笑みがこぼれた。カードを相手に見えるように倒す。スリーカードとワンペア。ポーカーで言うところのフルハウスが完成していた。

「フルハウスだ。俺の勝ちだな」

フルハウスは極めて強力な役とは言いがたいが、作り易さとの兼ね合いから安定した役である。アウルは勝利の自信を深めた。

スティングはあくまでも余裕のある様子を崩さず、もったいぶった様子でカードを見せる。そこにはスリーカードと1枚のジョーカー。

「残念だが、俺はフォーカードだ」

すべてのカードの代わりとして使うことができるジョーカーが使用されているとは言え、同じ数字のカードを4枚揃えるフォーカードはなかなか作ることのできない役である。フルハウスよりも難度が高く、無論強力である。

「5連敗かよ！」

テーブルに放り捨てられるフルハウス。アウルは力なく背もたれに寄りかかった。5連続の敗退である。ここでやめてしまうか、それともつきが戻るまで耐えるか、そんな岐路にアウルは立たされていた。首を背もたれに乗せるようにして頭を逆さまに後ろを向く。すると、髪の毛の塊が浮かんでいた。

瞬きを1度。すると、それがヒメノカリス・ホテルであるとわかる。着ているドレスにしろ髪型にしろ、モビル・スーツの操縦どころか無重力空間で生活すること自体適していないのだ。完全にヒメノカリスの父の趣味である。

「何してるの？」

テーブルのそばにまで来たヒメノカリスが一言。上体を前に戻す手間があるアウルに代わり、スティングが片手を振りながら対応する。

「ポーカー。姉貴もやる？」

その手を、ヒメノカリスは素早い動きで掴みとった。すると、その袖口から数枚のトランプが飛び出し、中空を漂い始めた。アウルが目を丸くする。

「ポーカーって、袖にカードを入れて行うもの？」

姉と呼ぶヒメノカリスに手を掴まれたまま、スティングはばつの悪そうに笑う。尖った印象を与えるスティングだが、ヒメノカリスの前では丸い表情を見せることがある。

反対に、アウルの雰囲気が棘を持つ。

「全部イカサマかよ！」

「おい、ちょっと待て。確かに俺はイカサマをしようとしたことは認めてやる。だが、今初めてしようとしただけだ。それとも、これまでもイカサマだったって証拠でもあるのか？」

あくまでも既遂ではなく未遂と主張するスティング。すでにヒメノカリスの手は掴んでいない。スティングは余裕な様子で散らばったトランプを集めては手慣れた様子できり始める。

アウルは5連敗をイカサマをしていたからだと証明することがで

きない。

「死んだ親父が言ってたぜ。イカサマはばれなきゃイカサマじゃないってな」

「俺の母さんは誠実こそ美徳だって言ってたんだよ！」

やってられるか。アウルはそう言い残して席を立つ。残されたスティングはトランプを片づけ終えた。アウルを怒らせたことに特に感慨はないらしい。同僚が離れていった方向に目をやるよりも、ヒメノカリスが歩きだそうとした方に関心は向けられていた。

「姉貴はどこへ？」

「格納庫」

簡潔な姉らしく一言で。それでも、無愛想なのではなくて立ち止まって話に応じてくれるところも、スティングは姉らしいと考えていた。

「俺も行く」

トランプをテーブルの上に放置してからスティングは席を立つ。ヒメノカリスはすでに歩きだしていたが、別に拒否されたわけではない。その証拠に、適度に追いつきやすい速度で移動していた。休憩室を離れ、長い通路を抜ける。するとスティングはちょうど追いついた頃、2人は格納庫の扉をくぐり抜けた。まさか計算していたわけではないだろうが。

ヒメノカリスが何故格納庫に用があるのか。それは訪ねてみるま

でもなかった。確かな足取り――無重力であるため語弊があるが――で目指したのは、黄金のガンダムの前であった。

こうしてみるとその大きさがよくわかる。通常のモビル・スーツの1．5倍の大きさは伊達ではない。何より洗練されたデザインは高尚で、スティングのＧＡＴ－Ｘ１３３イクシードガンダム・バスターカスタムのように武器を全身に担いだような無骨な姿とは違う。一言で言うなら格好がいい。

「これ、ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムだろ。ゼフィランサス・ズールが3人のムルタ・アズラエルのために開発したゼフィランサス・ナンバーズと呼ばれる機体群、その初号機、だろ」

「そう。お父様の機体」

ブルー・コスモスの代表を務めた3人はムルタ・アズラエルと名乗った。3人のムルタ・アズラエルがいたのである。その内の1人、エインセル・ハンターこそがヒメノカリスの養父であり、フォイエリヒガンダムの正式なパイロットである。

今エインセルがこの場にいない理由をヒメノカリスは知っている。ついスティングの横顔を眺めたのは、どうして年端もいかない子どもが戦場にいなければならないのか。その責任の一端はヒメノカリスの父であるエインセルにある。

「スティングもアウルもステラも、本来は戦闘要員じゃない。戦うことは怖くない？」

戦うということは、あくまでも3人の持つ特殊な能力からの派生的な作業にすぎない。戦うためにいるのではなくて、戦うこともで

きるとする方が正しい。

「別に。コーディネーターどもと戦えるなら俺は何だっていいさ」

スティングはフォイエリヒを見上げたまま答えた。ヒメノカリスも父の機体へとその視線を戻した。

「あなたたちはお父様とてもよく似た感じがする」

ヒメノカリスはその訳を、父とスティングたちに共通する能力のためだと考えた。

現在格納庫は閑散としている。整備士の姿も疎らであり、少なくともスティングたちの周りに人影はない。そのためであろうか。スティングが見せた顔はアウルほども人なつこいものであった。

「ならさ、俺にもいつかこの機体使わせてくれよ！」

口元を少し持ち上げる。そんなささやかな笑みを見せたヒメノカリスは、それでもきっぱりと弟の頼みを拒絶した。

「それは駄目。お父様の機体を使っていいのは私だけだから」

部隊長として戦術面からの判断だとか兵器を玩具にしていいという判断ではない。純粋に私欲と個人的事情のみで依頼を拒否されたスティングは、呆れたような笑みを見せた。

「何だよそれ」

「フォイエリヒなどどうでもいい。所詮あれは旧式のゼフィランス・ナンバーズに過ぎない。ゲルテンリッターではないのだからな」

手すりに体を預けながら、しかしレイの周りに人影の姿はない。レイ・ザ・バレルの視線は己の愛機である純白のガンダムを捉えたまま、そしてその口ぶりは決して独り言ではないとの実感を伴う。

レイは誰もいないにも関わらず、見えない誰かに話しかけていた。返事はない。姿さえない。そんな誰かの様子に、レイは視線を冷たく鋭く尖らせる。

「そうだ。それでいい。お前はただ俺の言うとおりにしていればいい」

神は森羅万象あまねくすべてをお創りになられた。病も災いも嘆きと悲しみもそのすべて。でも、悪いのは神ではありません。そんな災いを人へと振りかける悪魔のせいです。悪いのはみな悪魔です。すべてみな悪魔のせいです。

神は悪くはありません。悪いのは悪魔です。

私たちは何も悪くありません。悪いのは私たちに悪意を向けてくる悪魔です。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「神の雪」

フィンブル。この悲劇は決して誰のせいでもありません、そうですよね。

第5話「神の雪」

大西洋連邦首都、ワシントンD．C。この都市に地球最大国家の政治の中心は置かれている。大統領制を採用するこの国では記者会見の場で大統領の姿を見かけることは珍しいことではない。記者たちも慣れたもので大統領の姿を前にしても今更体を固くすることもない。

しかし、今回ばかりは例外であった。

後ろに国旗が掲げられた会見台にはジョゼフ・コープランド大統領の姿があった。薄い色をしたスーツのごく普通の中年男性、それがまず初めの印象であろう。会見台の前に並ぶ記者たちの視線を一身に集めながらも気後れした態度は見せない。大統領は、あくまでも大統領であった。

「昨日の１５時３７分、小惑星が地球への衝突軌道に入っていることが確認されました。小惑星の名称はフィンブルとなりました。直径は約７ｋｍ。衝突予測日時は約１０日後であると予想されています」

これは映画ではない。堅物で知られるコープランド大統領にしては珍しい話し出しであった。

そう、冗談でもなければ映画でもない。隕石が地球に衝突しようとしている事実は紛れもない現実であった。

会見場に詰めかけた記者たちから戸惑いの声が漏れる。コープランド大統領はあくまでも冷静に事実を並べる。

「現在政府では被害を受けると思われる地点への避難命令を発令しており、迎撃準備を行っている最中であります」

どのような地区にどのような対策が講じられているのか。また、どのように軍が動いているのかが一通り並べられた後、記者による質問が許可された。並ぶ記者の中から手が上がる。コープランド大統領はその内の1人を手で指し示した。

立ち上がったのは禿げ上がった頭髪の代わりに豊かな顎鬚を蓄えた壮年の男性である。

「エブリデイ誌のルクス・クーラーです。現在まで発表が遅れた理由をお聞かせください」

「まず、この小惑星の由来がはっきりとしていないこと。また、その軌道がプラント領空をかすめると予測されることから、地球の観測では発見が遅れてしまったことが原因と考えられます」

突然現れ、そしてプラント政府を刺激しないようとの配慮から監視の緩い地点を小惑星が通過しているために発見が遅れた。戦争の弊害はこのようなところにまで及んでいた。

続いて質問を許可されたのは髪を後ろに書き上げた若い男性である。とは言えスーツは上物、やり手の記者を思わせる。

「リードバイ通信社のアダム・ヴァミリアと申します。被害はどの程度と予測されていますか?」

「現在、試算中です」

食い下がろうとするヴァミリア記者に対してコープランド大統領は算出中とだけ繰り返す。根負けしたのは記者の方であった。

次は若い男性である。ここにいる以上記者であることは間違いないのだろうが、メモをとることもなく、またジャケットを羽織った姿はスーツを着込んだ周りの記者とは明らかに違う雰囲気を醸し出していた。どこか溌剌と、堅苦しい雰囲気に包まれる職業記者とは違っている。

「モーニングサン誌のジェス・リブルです。現在、どのような対策を立てられているのでしょうか？」

「出撃可能な戦艦を動員し、破砕作業を開始する予定です」

「プラントとの連携はどうなっていますか？」

「現在、協議を打診しております」

「もし協力が得られない場合、衛星軌道内で破砕活動を行うということも考えられますか？」

矢継ぎ早に質問を繰り返すジェスに対して、コープランド大統領は表情こそ変えないものの疎ましさを覚え始めたらしい。

「失礼ですが、質問は1人1つまでと区切らせていただきます」

ジェスの声を無視する形で大統領は次の質問者を指名する。新たな質問者が起立したことで、ジェスも座らざるを得ない。まだ若いが故か、口元を歪ませて残念さを隠そうとしない。

その隣に座るのは少女であった。桃色の髪を首の後ろで束ね、スカートは長くあまり肌を露出させないその姿はあか抜けていない様子を示している。瞬きを繰り返すその顔は素直に驚きを表現してジェスを見ていた。

「いいんですか、ジェスさん？　モーニングサンの記者なんて言っても。私たち、ただの外注ですよね」

「これくらいしないと会見場にだって入れてもらえないよ。でも、これから忙しくなりそうだ。これからいつでも出られるようにしていてくれないかい、アイリス」

現在、地球は隕石衝突の危機に瀕している。その情報はダーレス級ＭＳ運用空母ガーティ・ルーにも届けられた。誰もが地球が一夜にして危機的状況に置かれてしまったことを知らされたのである。

スティング・オークレーもその報告を聞いていた。

普段であれば同じ仲間であるアウル・ニーダかステラ・ルーシェとともにいるのだが、現在はただ1人である。そして、普段の尖った雰囲気はなりを潜め、落ち着きなく通路を漂っては、その瞳は震えながらある人物を探していた。

狭い船内である。探すことが難しい訳ではない。何より、目的の相手は目立つ姿をしている。

桃色の塊が動いている姿は長い通路の先に確認できた。

ヒメノカリス・ホテルの姿を見つけたスティングは明らかな安堵の表情を見せると、すぐに駆け寄ろうとした。

スティングに気づくには遠い距離でありながら、ヒメノカリスは誰かに気づいたように首を回した。スティングに気づいた訳では、やはりなかった。

脇の通路からイアン・リー艦長が飛び出してきた時、スティングはつい近くの通路へと身を隠した。イアン艦長も、そしてヒメノカリスもスティングのことに気づいた様子はない。

そうして2人は話をしだした。何か報告があるにしてもどうして艦長がわざわざ伝えにくるのだろう。そんな疑問は反感へとすり替わり、スティングを苛立たせた。

2人が話している様子を盗み見ながら、スティングはその場を離れることを決めた。

通路にて、イアン・リーは1つの幸運に恵まれていた。普段少年少女3人の誰かが一緒にいることでなかなか話ができないヒメノカリス・ホテル大尉が、今日に限って1人でいたのだ。

相変わらず、桃色の髪の毛が塊となって浮かんでいるようである。

無重力の中、音もなく近づこうともヒメノカリス大尉はこちらに気づいたようだ。髪の毛が動き、コーディネーターらしいというべきか、澄んだ色を持つ青い瞳がイアンを見る。

「ヒメノカリス大尉。命令が下りました。我々は破砕作業に参加します」

「私たちまで？」

「我々は密命を帯びています。しかし、地球の大事に動かない船隊があるとザフトに気取られることを、上層部としても危惧したものと」

破砕作業に参加できながらしない艦が存在することをザフトに気取られる危険だけは避けなければならない。まるで艦隊がふるいにかけられているような気味の悪るさがあった。

だが、小惑星の落下は単なる偶然にすぎない。由来不明、プラント宙域を通り抜け、そして地球へと落ちてくる。出来すぎと言えば出来すぎの事件ではあるのだが。

「わかった」

ヒメノカリス大尉は頷くことはなく、しかし了承する。

「今しばらく、彼らの力を借りることになります」

スティングたち3人のことである。彼らも言っていたが、あの3人は元々正規の軍人ではない。シミュレーター訓練では非常に好成績を記録したが、実戦経験には乏しい。そんな子どもたちを2度に渡って戦場に駆り出したことに、ヒメノカリス大尉は相変わらず、表情乏しく落ち着いた様子を変えることはない。

「準備を怠らないように言っておく」

その理由をイアンは知っていた。ヒメノカリス・ホテルはかつてブルー・コスモスの代表を務めたエインセル・ハンターの養女であり、この部隊はそのエインセル・ハンターの意向によって創設された。ヒメノカリスは養父の意志を優先しているのだと。

地球では落着が予想される東アジアを中心に住民の避難が進められていた。津波の発生が懸念される海岸線からは人々が離れ、シェルターへと避難する。

雨降り仕切る中、昼間だというのに薄暗い。人々は最低限の荷物を背負いレインコートを目深に被りながら列をなす。そのすぐ横では過密渋滞で立ち往生した車が並び、混乱をさけるために派遣された兵士の声が雨音に混ざり辛うじて聞き取れる。

そんな人々の流れと逆行する人の姿があった。ただし、正確には人ではない。人の形をした巨人、モビル・スーツたちが地響きを響かせながら避難民とすれ違う。

ＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーと呼ばれる機体である。ＧＡＴ－０１デュエルダガー同様ＧＡＴシリーズと呼ばれるガンダムの量産機に当たるこの機体は簡素ながらもオリジナルであるＧＡＴ－Ｘ１０５ストライクガンダムに近い明確に凹凸を持つ装甲が採用されている。その背には休戦条約以後に開発されたジェット・ストライカー――ストライカーというバックパックを換装することで機体性能を変更するのはストライクガンダムから受け継がれた性質である――を装備し、大型の水平翼が左右へと飛び出ていた。右手にラ

イフル、左手にはシールドが保持される。

避難民は見上げていた。振動が届かないほど遠くを歩くモビル・スーツは、それでもはっきりと武装している様子が見て取れる。避難誘導だとか、災害救助を任務としていないことは誰の目にも明らかであった。

混乱に乗じた暴徒の制圧。あるいは、ザフト地上軍との戦闘を視野に入れているのかもしれない。

また大規模戦争が始まるのだろうか。

人々の見上げる顔に、雨はただ降りしきる。

衛生軌道を周回中であった艦船が隕石の予想航路へと移動を開始した。

ダーレス級ＭＳ運用母艦を中心とした艦隊が、それでも最大船速とはほど遠い速度で運行を続けていた。

現在、地球連合軍は明確な目標地点を絞り切れていない。本来、地球から遠い地点で迎撃を始めることができるのが理想である。しかし、地球から最も遠いラグランジュ・ポイント一一月の裏側にある一一にはプラントが存在し、軍を進める範囲には限界がある。

大西洋連邦のジョセフ・コープランド大統領の言葉通り、政府はプラントとの協議が進められている。一時的に軍をプラント宙域にまで進めることは許されないだろうか。さらに言うなら一時的にユ

ニウス・セブン条約を凍結し、核ミサイルの使用が許可されないかと打診しているのである。

艦隊の歩みが遅い理由はここにある。プラント宙域にまで移動が許されないのであれば時間的猶予は十分すぎる。月と地球の間、小惑星が衛星軌道内に入るまでの約３０万ｋｍの間に迎撃しなければならない。

艦内ではモビル・スーツが整備を終えている。ストライクダガーの他、ガンダム・タイプが積載量ギリギリまで搭載されている。艦体に横付けされる形で左右２機ずつメテオ・ブレイカーの名を持つ小惑星破砕用の大型重機が抱えられている。モビル・スーツの倍の高さを持つ３脚の形をしており、軸に円柱状のドリルが取り付けられている。

地球軍はこのメテオ・ブレイカーによって小惑星を破砕、大気圏突入の際の熱で破壊されてしまうほど細かく砕いてしまう作戦を想定していた。

政治面においても様々な対策が講じられている最中であった。

プラント最高評議会が緊急召集され、ザフト軍の動向が今まさに決定されようとしていた。

ギルバート・デュランダル率いる議長派とも呼ぶべき一派は形式的な議論を続けていた。

「地球軍がプラント宙域への進軍を求めるのはわからないではあり

ません。しかし……」

「だがそのようなことを許せば……」

それぞれ各市から選出された議員であり、そしてプラント最高評議会の議席が円卓を構成しているように対等な権限を与えられている。しかし、それぞれの議員はデュランダル議長の様子をうかがうばかりで建設的な議論を成しているとは言い難い。

現在、議題は2つに集約されている。

地球軍のプラント周辺宙域までの進軍を許可するか否か。許可すれば小惑星迎撃にあてることができる時間が増えることになる。ただし、地球軍が本国周辺にまで進むことを快く思わない市民も多いことだろう。

ユニウス・セブン休戦条約を一時的に凍結し、核ミサイルの使用を許可するか否か。条約にはプレア・ニコルの兵器への搭載が禁じられている。それを一時的とは言え効力を停止できるとすれば、小惑星の破壊、あるいは軌道の変更に大きな力となる。

同じ派閥の議員がお飾りの議論を繰り返す様子を、ギルバート・デュランダル議長は目を閉じ、静かに聞き入っていた。議論が一段落する頃合いを見計らって目を見開くのではなく、議長が目を開いた途端、議論が一挙にその熱を失った。

そして、風のような声が聞かれる。

「熟議を重ね正しい結論を出すことも大切だろう。だが、貴重な時間を浪費することもできない。決をとろう。我々はプラント本国を

危険にさらしてまでもナチュラルの進軍を許すべきだろうか」

デュランダル議長が首を回す。一通り眺めた後、その視線は正面に戻る。ただ首をなおしたのではない。正面に座るタッド・エルスマン議員を見たのだ。

この中で唯一議長に反対する議員がいるとすればそれたエルスマン議員、ただ1人に尽きた。

「勘違いはしないでほしい。我々は地球がどうなってもいいと言っているのではない。破砕作業には軍を参加させるべきだろうとも考えている」

それは議会全体へと向けられた言葉であるようでありながら、しかしその眼差しはエルスマン議員ただ1人へと向けられている。

エルスマン議員は椅子に深々と腰掛けたまま、その視線を重畳に受け止めていた。

議会は2人の議員の対立に支配されている。

「しかし核を使わせてはならないことは明白だ。違うだろうか?」

他10名の議員などものの数にはいることはない。デュランダルとエルスマン。2人の間に流れる沈黙は、司会役を買ってでたアリー・カシム議員の言葉によって中断させられる。

「では、地球連合の申し出を拒否することに賛成される方はご起立願います」

次々と立ち上がる議員たち。票決は、たとえ12名と少人数とは言え、集計をとるまでもなかった。

議長を含め議員はことごとく立ち上がり、ただ1人が座っているだけである。デュランダル議長は反対を表明した議員を探すまでもなかった。真正面に座るタッド・エルスマン議員の姿があったからだ。

「賛成11。反対1」

カシム議員が形式上、票決の結果を伝える。

ただ1人異を唱えながら、エルスマン議員は自らの行動に何ら負い目を感じてなどいない。唇を堅く結び、しかし敵意を露わにすることもない。ただ目の前の事実を平然と受け入れていた。

デュランダル議長はさも演説でもするかのような手振りをエルスマン議員へと示す。

「これでいい。これでいいんだよ。考えてもほしい。ナチュラルは……」

「ナチュラルは地球を救うことをやめてプラントを攻撃してくるかもしれない。緊急事態から核の封印を解く前例を作ってしまえば、次はプラントとの戦争を緊急事態と勝手に解釈されてしまうかもしれない」

ここは最高評議会ではない。議長室である。応接間を兼ねる簡素

な部屋に、少女の清らかな声が染み込んだ。

その言葉は議長が議会の場で発した言葉をいち早くなぞるものであった。

少女は主なきはずの椅子に座る。桃色の髪と青い瞳。かつては歌姫としてプラントの民から賞賛を集めた少女の名はラクス、ラクス・クライン。

主なき議長の椅子に座り、机上に映し出されたディスプレイを通して会議の様子を見守っている。その顔は普段と変わらず、上品で、人々に安心感を与える笑顔で包まれている。その目は、票決に唯一反対票を投じた議員の顔を眺めていた。

「堪えてください、エルスマン様。あなたの苦悩と犠牲は、人々の未来を守る礎となるのですから」

今度、ヒメノカリスの姿は格納庫にあった。アウルとステラ、この2人を前に何か話をしている。

その様子を、スティングは格納庫のキャット・ウォークの上から眺めているしかなかった。手すりを両手で掴み、体重を預けるように下を覗き込む様子は、普段のスティングらしさというものが感じられない。

格納庫の床、3人はＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムの巨体を前に何やら深刻そうな様子である。フォイエリヒが直接関係しているのではない。小惑星のことに決まっている。

スティングはヒメノカリスとも、アウルともステラとも気心しれた仲である。

どうしても話に混ざるつもりにはなれない。そして、そのまま時間だけがすぎていく。

「なあ、姉ちゃん、隕石が地球に落ちるって本当か？」

「私たちも戦う？」

慌ただしい格納庫の中、ヒメノカリスは手元の資料に目を落としながら2人の弟と妹の話し相手をしていた。資料には合流部隊からの補給物資の一覧が記載されている。

モビル・スーツの補充はない。

すなわち、まだアウルとステラには戦ってもらわなくてはならいことを意味している。

資料から目を離し、ヒメノカリスの青い瞳は少年少女を見る。

「すでに破砕用のメテオ・ブレイカーの準備は始まってる。簡単な使い方くらいは目を通しておいて」

メテオ・ブレイカーはガンダム・タイプだけで4機がひしめく格納庫に置いておくことのできる大きさではないが、すでに補給物資としてガーティ・ルーの船側に取り付け作業が開始されているはず

である。メテオ・ブレイカーは自走式ではないため、モビル・スーツで運ぶ必要がある。

地球連合とプラント政府の交渉は破綻したと聞かされている。作業にあてられる時間的猶予は決して潤沢ではない。

ほんの紙切れ1枚に書かれた作業マニュアルを手渡すと、アウルとステラは額をつき合わせて覗き込む。

「スティングは？」

姿を見かけない3人目の弟の姿を探そうとして、ヒメノカリスが首を回そうとする。そのタイミングにあわせたように声をかけてきた少女がいた。ヒメノカリスととてもよく似た声が、ヒメノカリスのことを呼ぶ。

「お久しぶり、かしら。ヒメノカリス姉さん」

首は自然と声のした方向へと吸い寄せられた。格納庫にひしめく多くの人もまた、この光景に目を奪われていた。桃と黒、白と赤。異なる髪と色をして、それでも同じ顔をした少女が互いに向き合っている光景を。

黒い髪にロールを巻いて、身につける衣服は赤。しかし、それでけである。ヒメノカリスと少女との違いは。着ているのは色違いでありながら、デザインは同じドレス。その顔さえ、ヒメノカリスと同じである。違いは、色と髪型。敢えて付け加えるならば表情は相手の少女の方が豊かと言えた。

少女の後ろには大西洋連邦軍の制服を身につけた少年がつき従う。

そろそろ２０を超えると思われる年齢に似合わず、表情が幼い。少年はどこかあどけないステラと似た面があった。そのためではないのだろうが、少女に一番早く反応したのはステラであった。

まるで子犬がじゃれるような様子で、少女へと駆け寄った。無重力であることを忘れ、つい浮き上がってしまった体を少女に抱き止めてもらわなければならないほどである。

「ニーレンベルギア！」

明らかに嬉しそうなステラの頭を撫でる少女の名はニーレンベルギア・ノベンバー。ヒメノカリスの２つ下の妹に当たる。だが同い年であり、その顔は驚くほどよく似ていた。

「ステラはとても元気そうね」

資料を眺め続けていたアウルは、ステラの嬉々とした声にようやく顔を上げた。その目がニーレンベルギアを捉えるなり、まるで苦いものでも噛んだかのように口が歪む。

「げ！」

「げって何かしら、アウル？」

ニーレンベルギアが寒気をもたらす微笑みを向けると、アウルはアウルらしく大袈裟に警戒を露わにする。

「だってよ、ニーレンベルギアの出すものみんなまずいもんばかりだったから」

「人を料理下手みたいに言わないの」

ここで言うまずいものとは薬品の類であって、手料理のことを意味してはいない。そう、とりあえず、ニーレンベルギアが料理できないことを示してはいない。

ステラはニーレンベルギアに抱きついたまま、その顔を上げた。

「料理、得意なの？」

何故か、ニーレンベルギアから返事はない。そしてステラと目を合わせようともしない。気のせいか、こめかみには悪い汗が光っているようである。

皆の疑惑が確信に変わりつつあった頃、ニーレンベルギアの後ろにいた少年が明るいというよりも幼い微笑みを見せながら言った。

「ニーレンベルギアは、サラダが得意だよ」

切って盛りつけるだけじゃないか。その場の誰もが言外に語っていた。ニーレンベルギア本人でさえ表情を固めていた。少年だけが事態を理解できないように微笑んでいた。

「フォローありがとう、サイ」

皮肉ではないにしろ、お礼とも言い難い。しかしサイと呼ばれた少年はそのことに気づくことはない。年齢に不釣り合いというよりも、何らかの傷害の結果であると思わせる。その証拠に、サイの、サイ・アーガイルの額には鼻に及ぶほどの大きな傷跡があった。

その傷の訳をヒメノカリスは知っている。４年前の戦闘で、サイは瀕死の重傷を負った。その命を救ったのがニーレンベルギアの人体改造の技術である。サイはその技術の実験台として命を救われ、そして副作用からくる記憶障害から心を壊してしまった。

もうサイは元のサイ・アーガイルに戻ることはできない。

ヒメノカリスの瞳は、そんなサイを眺めた後、瞬きをはさんでニーレンベルギアへと向けられる。

「こんな時に何？」

気を取り直すようにニーレンベルギアは笑う。

「ちょっとお話があって。私、プラントに帰ることにしたわ」

ニーレンベルギアとヒメノカリス。２人は姉妹であり、しかし同じ場所で生まれ育った姉妹とは思えないほど面識に乏しい。立ち話をするつもりにはなれず、休憩室に移っても、ニーレンベルギアは一体何から話していいものかわからないでいた。

話したいことは決まっている。ただ、物事には順序というものがある。

ニーレンベルギアとヒメノカリスはテーブルに座り、離れたソファーではサイたちがトランプに興じていた。サイはそろそろ２０にもなる年齢だが、心は幼いくらいでステラやアウルとは気が合うらしい。ヒメノカリスも相変わらず乏しい表情ながらも３人の子ども

たちの様子を眺めている。

まるで子どもの遊んでいる様子を眺めながらおしゃべりをする母親のようだと考えるのは、少々所帯じみすぎている。それでも、ニーレンベルギアにとって3人は子どものようなものである。見ているだけで気分が落ち着いてくることも事実であった。

ヒメノカリスはどのような気持ちで子どもたちを見ているのだろう。そう横顔を盗み見ると、青い瞳が器用に動いてニーレンベルギアを捉える。

「話って？」

この人を相手に取り繕うことは余計なだけかもしれない。ため息をつきながら、それでもつい笑ってしまう。

「私、プラントに戻ることにした。元々研究のために大西洋連邦に籍を置かせてもらってただけだし、それに、私の技術は批判も大きくて。やっぱり、人体改造なんてするものじゃないわ」

ブーステッドマン。それがかつてニーレンベルギアが研究していた技術の名前である。志願者を中心に薬物や外科手術によって肉体を強化し優れた兵士を生産する技術。ただしそれは、人に不自然に手を加えることの危険性に警鐘を鳴らすように副作用が続発し、その結果がサイのような重度の記憶障害に始まる様々な悲劇を生じた。

「私のしたことって何だったのかしら？　人の枠を壊してしまったら、それは人以外の何か。それなら機械を使った方がよほど優秀。卵を暖めて孵ることを早めることはできても、茹でてしまったら目玉焼きにしかならないでしょ」

記憶を失っていてもサイは楽しそうに見える。アウルとトランプ――ポーカーだろうか――をしている様子は、見ていて微笑ましい。

「ポーカーって、手には5枚で、袖には何枚持つの？」

「スティングが前してた。それ、イカサマ」

どうやら、袖口にカードを隠し持っていたことをサイに見つけられてしまったようだ。アウルがばつが悪そうにカードを袖から取り出す。慣れないことはするものではない。このことはニーレンベリギアにも当てはまった。

「ニーレンベルギア、卵を茹でたらゆで卵」

料理のたとえ話なんてするべきではなかった。ヒメノカリスは普段通りに表情に乏しく、それがかえって皮肉がきいている。これでヒメノカリスが料理上手なんてことであればいたたまれない。機会があれば一品作ってもらおうか。それも、当分先の話になるのだが。

「ところでね、アウルやステラたちの名前だけど、エクステンデッドなんてどうかしら？　あくまでも人としての枠を壊さないでその枠を拡張した、なんて意味合いなんだけど」

「名前なんて関係ない」

「そうね。ヒメノカリス姉さんはあの子たちのこと、弟や妹のようにかわいがってくれてるみたいだし。私も、安心してプラントに帰ることができる」

ヒメノカリスは表情に乏しくなかなか気持ちを読み解くことができない。それでも先程からニーレンベルギアから目をそらそうとしないのは興味の現れだろうか。

「私は、非人道的なことをしてきた。辛いことも悲しいこともたくさんあったけど、それもお父様のためだと思えば耐えることができた。でも、もうお父様はいない」

3年前、父であるシーゲル・クラインは戦死した。娘たちに夢と理想だけを残して。

「もうわからなくなっちゃって。自分のしていることは、本当にお父様の望まれることなのかって。単に嫌なことから逃げ出す口実にお父様のだしにしてるだけかもしれないけど」

雰囲気が暗くなっていることを自覚して、無理に冗談を交えてみても自分さえ騙すことはできない。結局無理をしている部分だけが目立つだけであった。

「この3年の間、ヴァーリはみんな悩んでるみたいだった。絶対者であるシーゲル・クラインを失って、同じ方向こそ見てはいても同じゴールは見えてないみたいに」

お父様のことを呼び捨てにしてしまえる。ヴァーリとしてはあるまじき光景に、つい意識をとられてしまった。

ヒメノカリスもニーレンベルギアも同じヴァーリ。それでも、ヒメノカリスはみんなとは違う。絶対的な主として崇拝すべきお父様という存在は、ヒメノカリスにとってはシーゲル・クラインではない。そんな事実がいまだにあまりに奇異な出来事のように思われて

ならない。

ヴァーリはお父様に、シーゲル・クラインに逆らうことはできない。そんな絶対前提がヒメノカリスには通用しない。父との関係に悩むニーレンベルギアとはあまりに異なっている。

ニーレンベルギアはつい笑いだしてしまった。きっと誰も理由を理解できないだろう。ヴァーリという存在を知らない人には話の内容からして理解できないことだろう。

でも、話したところで理解してもらえるだろうか。プラント最高評議会議長まで務めたシーゲル・クラインに娘が２６人もいて、そのすべてがそれぞれ別々の遺伝子調整が施されたクローンであるという事実を聞かされてどれほどの人がすんなりと受け入れることができるだろう。

この呪われた姉妹のおとぎ話を誰が聞いてくれるのだろう。

花の慰め方は、花が一番よく知っている。

同じヴァーリに聞いてもらったためか、ニーレンベルギアは不思議と気が和らぐ思いを感じていた。

ヒメノカリスはニーレンベルギアがひとしきり笑っている間、やはり表情を変えることなくこちらを見ていた。気を遣ってくれたのか、それとも単に呆れているだけか。２６人姉妹の１２女である姉は、１４女である妹をただ眺めていた。

「ありがとう、ヒメノカリス姉さん」

姉はやはり表情を変えず、ただ2回だけ瞬きをした。

シン・アスカは再びノーマル・スーツに袖を通した。外人部隊にいた頃から一一現在も境遇は改善されていないが一一着用していたノーマル・スーツは体に馴染む。自然とこれから戦いが始まると心が引き締まる。

今回の任務は小惑星破砕作業の支援である。戦闘になることはない。ただ破砕計画の詳細を聞かされていないことへの不安が、かすかに頭をよぎる程度のことだ。

何も心配はないはずだ。

シンはパイロットたちが集まる待機室へと向かう足を早めた。

すぐ後ろにはルナマリア・ホークが続いていた。外人部隊に所属するとは言え正規のプラント市民であるルナマリアは、シンとは別のことに不安を覚えているようである。

「ミネルヴァで初めての出撃だけど、うまく連携とれるかな?」

人当たりのいい性格ですでにミネルヴァにとけ込んでいるように思えるルナマリアのことだ。言葉ほど心配している訳ではないだろうと勝手に判断しておく。

振り返ると狭い通路の中を漂うように歩くルナマリアの姿を確認できる。

「なあ、ルナ。バレル隊長の機体って、何て名前なんだ？」

シンたちの救援にかけつけたリングを背負った白いガンダムの名前を、よくよく考えてみると一度も聞いたことがないとふと気づいた。ルナマリアが口を軽く膨らませたところを見ると、タイミングが悪かったらしい。

「私の相談は無視？　まあいいわ。バレル隊長に聞いたけど、確かローゼンクリスタルだったかな」

やはり、聞いたことのない名前である。そもそも、シンがガンダムという名前を知ったのは軍学校に入ってからであり、モビル・スーツのこともそれ以前はロボットと呼んでいた。一体どんな機体があるのかなんて知りようがない。聞いたところであのレイ・ザ・バレル隊長が教えてくれるとは思えない。

シンは首を前に戻した。話に興味がなくなったのではなく、単に目的地が近くなっただけだ。扉の前でうまく体止めて、スライド布きの扉を開いた。

中には2個モビル・スーツ小隊、合計6人のパイロット――全員が全員赤服である――が思い思いのやり方で時間を潰していた。緊張感なんてものは感じられない。ずいぶんと和やかな様子で、シンたちのことを気にとめる者もいない。

その中で、シンはつい一番近くのパイロットの言葉を拾ってしまった。

2人のパイロットが立ち話をしている。どちらもまだシンと同じくらいで、調子の軽い少年が一方的に話しかけ、褐色の肌をした少

年が静かに聞き役に回っていた。

名前は1度聞いたはずだが、どちらも思い出せない。ルナマリアに聞いてみる気にもなれず、その脇を抜けて部屋の真ん中へと進もうとする。

その時のことだった。言葉が聞こえたのは。

「隕石か、面倒なことになったよな」

少年の口調が事態の深刻さに反して余りに軽いものであったことに、シンの意識はさらわれた。

「いっそこのっまま落とせばいいんじゃないか？　そうすればナチュラルなんてみんないなくなって問題みんな解決するだろ」

こっちを向け。そう考えた時にはすでにシンの腕は少年の胸ぐらを掴んでいた。無重力下でつり上げることなんてできなくとも、間近で相手の顔をのぞき込むくらいできる。

「もう一度言ってみろ」

シンの視界一杯に広がる少年の顔は明らかに狼狽えていた。その瞳には目を見開いたシンの顔が写っている。

「もう一度言ってみろ！」

どうして地球なんて滅んでしまえばいいなんて言うことができる。それも、1度は危うく地球を滅ぼしかけたプラントの民が。

「シン！」

ルナマリアの声がした。しかし、体を引きはがしにかかったのは明らかに男の力である。待機していた他のパイロットが2人がかりでシンの体を少年から引き離していた。少年は苦しそうに首をさすっている。これ以上暴れるつもりもないが、パイロット2人はシンを離そうとしない。

息苦しいのは、少々興奮し過ぎてしまったからだ。他の人が話し出さないのは、どうしてだかは知らないが。

空気を破って、ずいぶんと落ち着き払った声があった。

「何をしている?」

バレル隊長が扉のところにいた。状況がわからないとはおもわないが、まるで気にした様子はない。

シンを押さえていたパイロットたちの力が弱ったことを気にふりほどく。隊長の前でなら危険はないと判断したのか、再び抑えようとはしてこない。

あの少年は曖昧な笑みを浮かべて、シンをなだめでもしているかのような仕草を見せた。

「冗談だよ、冗談……」

「状況を考えろ、ヴィーノ」

少年の頭を軽く叩いた褐色の少年はヴィーノと呼んだ。ヴィーノ・

デュプレ。これが少年の名で、もう1人は確かヨウラン・ケントだったろうか。思い出したところで何の意味もなかったが。

隊長を前に隊員が整列する。訓練を受けた軍人たちはさきほどの騒ぎなどなかったように整然と列を組んだ。バレル隊長もまた、動じることなく話を始める。

「作戦内容を説明する。我々は破砕活動を支援する」

共同戦線を張る交渉自体は決裂したらしく、プラントは自国宙域への地球軍の進行を認めようとはしなかった。これはせめてもの支援ということなのだろう。何にせよ、ザフト軍にいても地球のために戦うことはできる。

シンが密かに心奮い立たせているその目の前で、現実は冷たい否定を含んでいた。

「ただし、作業中に地球軍と遭遇した場合、これを優先的に撃破する。以上だ」

皆が返事をしながら敬礼する中で唯一シンだけが了解どころか敬礼の手を上げることさえできないでいた。

周りのパイロットたちは指示された内容の意味を本当に理解しているのだろうか。つい周りの様子をうかがうと、誰も何の疑いもなく前を向いていた。

声を上げるのは、結局シンしかいなかった。

「ちょっと待ってください。作業中って、遭遇しないわけがないじ

ゃないですか！　それじゃ、手伝うどころか、妨害だ！」

小惑星の直径はわずか７ｋｍ。そんな中でまさか半分ずつ破砕活動に参加するわけではないだろう。地球軍が均等に張り付き、そこにザフト軍が行くことになれば確実に遭遇する。破砕準備に集中している地球軍に対してザフト軍は通常装備、言ってしまうなら戦闘用の装備で襲撃をかけることと同義である。

プラント政府は本当にそんな命令を出したのか。あくまでも冷静なバレル隊長の瞳は、あまりに冷たく思えた。

「ナチュラルは奇襲と騙し討ちが得意なようだ。当然の処置だ」

この人はいつも同じだ。まるで別世界の住民であるかのように他人事で、まるで関心を払おうとしない。

「俺は反対です。そんな戦い方、地球の足を引っ張るだけだ」

「お前は作戦に意見できる立場にはない。嫌なら今回に限り作戦への不参加を許可する。臆病者は必要ない」

口を開いても適切な反論なんてできそうになかった。痛くなるほど歯を強く噛み合わせる。シンが悔しさを噛みしめている間、バレル隊長はあくまでも職務遂行を続けていた。

「各員、機体へ乗り込め。出撃の合図は追ってする」

部屋を出ていく隊長に続いて隊員たちが次々と待機室を後にする。シンはなかなか動き出すつもりになれず、つい動くことが遅れた。すると、部屋にはシンとルナマリアだけが残された。

「シン……」

心配そうに話しかけてくるルナマリア。ではルナマリアが心配してくれているのは地球の危機だろうか。それとも、上官非服従で査定が悪くなることを心配してくれているのだろうか。どちらにしろ、ルナマリアに心配をかけてしまっている事実に変わりはない。

「わかってる……」

ただこれだけ。これ以上話しても何もいいことはない気がして、シンは格納庫へと向かうことにした。

地球の危機を冗談と片づけてしまえる仲間と肩を並べて戦うために。

地球に小惑星が落ちるということを聞いた時、スティングは自分が自分でなくなる感覚、正確には地球軍に参加する以前の自分に戻ってしまったような気がしていた。

ジェネレーターに火が入れられていないにも関わらず手は操縦桿を握り締めて離さない。どんなことをしても愛機であるＧＡＴ－Ｘ１３３イクシードガンダム・バスターカスタムは動き出すはずもない。

動かそうとしているわけではない。ただどうしても気が急いて落ち着かないのだ。

空が落ちてくる。

またあの日の光景が繰り返されようとしている。

目が乾き、喉が渇く。コクピットの暗闇の中、瞬きをすることさえ怖い。小惑星の報告を聞いてから何も口にしていなかった。

怖いから求めて、時を惜しんで探し回った。こんな気持ちを和らげてくれるかもしれない人の姿を。桃色の髪に青い瞳。静かな表情をたたえたあの人はイアン・リー艦長と、アウルやステラたち、そしてニーレンベルギアとともにいた。スティングが求める度、手をすり抜けて行ってしまう。

「ちきしょう……」

ただ話がしたいだけなのに。話を聞いてもらいたいだけなのに。

当たり前だったものが突然得られなくなってしまう。こんなこともあの日の光景とよく似ている。あの日とまったく同じだ。

突然目の前の光景が明るさを増したのは、瞳孔が拡散したから、目を一杯に見開いているから。鼓動が自分の耳にさえ届いて、開け放たれたコクピット・ハッチから差し込むわずかな光さえ眼球を焼き尽くすのではないかと言うほどに眩しい。

そんな光が突然和らいだ。

「こんなところにいた」

見上げると、そこには光を遮って立つ人の影。そんなわずかな光

の中でさえ、波立つ桃色の髪はその色を主張してやまない。

「姉貴……」

ヒメノカリス・ホテルがそこにはいた。

森は人を惑わせます。しかし人を誘いません。森の中で道に迷ってしまうことはあっても、森が人をその中へと誘うことはありません。入るかどうかを決めるのはあくまでも人です。森に迷ったことを嘆くより、どうして森に入ると決めたことを思い出すべきではないでしょうか。

災いと呼ばれる多くのものを招くのは、人だと思い出すべきかもしれません。

それでも、後悔は災いを乗り越える助けになることは決してありません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「今宵、碧い森深く」

エイプリルフール・クライシス。森は入れても、抜け出すことはできません。

第6話「今宵、碧い森深く」

C．E．６５年某日。大西洋連邦ラスベガス近郊。

乾いた大地に覆われた、なだらかな山岳帯を夜の闇が包み星明かりだけが地上を照らす。疎らな低木以外には何もない荒野の中、星に対抗できるはずもない小さな灯火が見られた。

テントが張られている。荒野の片隅にひっそりと。そこから漏れてくる明かりが、地上で唯一見られる光である。

そのテントの中では2人がランプの明かりを挟んで座っている。ランプの小さな明かりでさえ満たせるほどにテントは小さい。

「ほら、ファイブ・カードだ」

1人が手に持った5枚のカードを見せながら言った。無精髭を生やした口元を自慢げに歪ませた男性の手にはジョーカーと残り4枚のカードすべて同じ数のトランプがあった。

ポーカーをしているのだろう。

ハート、ダイヤ、スペード、クラブの同じ数のカード4枚に加えジョーカーを揃えることで完成するこのファイブ・カードは制作難度が高く滅多に見ることのできない役である。

相手――こちらはまだほんの子どもである――は髭など望むべくもない幼い口元を尖らせてカードを見せた。カードは数字、種類ともバラバラで役は揃っていない。

「どうやったらそんなに役を揃えることができるの、父さん？」

少年はしょぼくれた様子で父を仰ぎ見る。

「種を教えてやろうか」

父はそう言うと袖をめくり上げた。すると、何枚かのカードがそこにはあった。

「初めから袖にカードを何枚か仕込んでおくんだ。手札からいらないカードと袖のカードを入れ替えると役が作りやすくなる」

「僕にも教えてよ！」

少年は父への反感よりも裏技への興味がたやすく上回ったらしい。大きな瞳をわかりやすく輝かせて父のそばに這うように近寄る。テントが狭く、立ち上がるほどでもないのだ。父は息子にも見やすいよう身を屈めた。

「言っておくがこれはイカサマだぞ。絶対ばれないようにな」

「うん！」

素直な息子の額を撫でてから、父は悪巧みを息子に仕込まんとその手口を語り始める。

「まずはこうしてだな。コツとして……」

袖に仕込む方法から、仕込むべきカードの選び方、カードを入れ

替えるタイミングの読み方まで一通り話終えたところで、時間を告げるアラームが鳴り響いた。

「お、時間だな」

父と子。2人は揃ってテントの入り口から身を乗り出した。すぐ外にはなかなか立派な天体望遠鏡が夜空へと向けられていた。こんな寂しい場所に親子2人でいるのは息子を悪の道に誘うためではない。街の明かりに邪魔されないこの場所が天体観測にはうってつけなのだ。

まずは父が望遠鏡をのぞき込む。いつものことで、まず父が目的のものを見つけ、そしたらすぐに息子に譲ってくれる。父に導かれ星を眺めることを、息子は心待ちにする。

いつまで経っても、父は望遠鏡を息子に譲ろうとはしない。

「父さん……？」

父は望遠鏡をのぞき込んだまま、子どもにもわかるほど深刻な表情をしていた。

「あれは、何だ……？」

息子が空を見上げると、星が喰われていた。満天の星空の所々が欠け落ち、黒くくり貫かれていた。目に見えない何かが落ちてくる。

空が落ちてくる。

小惑星フィンブルはプラントの脇を抜けるようにして月軌道内へと侵入を果たした。地球まではわずか３０万ｋｍ。地球の直径わずか０．０２％の岩と氷の塊が巨大な尾を引いて宇宙を駆ける。

地球全体から見れば石ころ程度でしかない小惑星とて甚大な被害をもたらす。かつて恐竜を滅ぼしたとされる小惑星とて、その直径はわずか１０ｋｍ程度とも言われている。

決して地球に落としてはならない。

地球軍は行動を開始していた月面基地を離れた艦隊が加速し、小惑星との相対速度を合わせた地点で接触しようとしていた。小惑星は絶えず地球へと向けて落ちている。そのため、破砕作業を行うものも同じ速度で落下していなければたやすく取り残されてしまう。

月を利用したスイング・バイによって加速した艦隊が小惑星と横並びになりながら徐々に接近していく。艦からは次々とＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーが出撃する。ジェット・ストライカーがミノフスキー・クラフトの輝きを放ち、後ろからストライクダガーを押し上げていた。

現在、換装機構とミノフスキー・クラフトの搭載はモビル・スーツの基本設計と化している。ミノフスキー・クラフトによって十分な加速を得たストライクダガーは横滑りしながら宇宙に浮かぶ岩の塊へと接近していく。中にはモビル・スーツよりも大きな三角錐型のフレーム、メテオ・ブレイカーを数機がかりで運び入れようとする光景が見られる。

メテオ・ブレイカーでフィンブルを破砕。大きいままの破片を艦

砲で順次砕くという計画である。そのためにはモビル・スーツ部隊が少しでも早くフィンブルを砕かなければならない。

モビル・スーツ部隊を運んできた母艦の艦長は、アガメムノン級宇宙母艦の狭苦しいブリッジの中で祈るような気持ちで小惑星へと降りていく幾筋もの光を見つめていた。

たるみ、染みの目立つその顔は壮年の男の哀愁というものを漂わせていた。しかしそれとは対照的とも言えるほど確かな眼差しが輝くユーラシア連邦軍少将である。

男の名はウィラード。

禿かかった頭頂を隠すように軍帽をしっかりとかぶり、その目は小惑星フィンブルへと向けられている。

モニターに映るフィンブルは細長い形に、いくつものクレーター跡をつけた典型的一一人がよく想像するようなものとして一一な小惑星であった。決して大きなものではない。長いところでせいぜい数ｋｍほどしかない小惑星を、しかし見つめるウィラードの眼差しは鋭い。

「ウィラード艦長、ザフトの艦隊が接近中です！」

「気にするなという方が無理とは思うが、我々の任務は小惑星の破砕活動だ。ザフトのことは無視して構わん」

「了解！」

オペレーターからの言葉を言葉少なに返事する。その間、ウィラ

ードはモニターから目を離すことはなかった。しかしその目は小惑星からザフト軍へと狙いを変更していた。

現在の主力艦であるナスカ級高速戦闘艦を中心としてローラシア級ＭＳ搭載艦の姿もある。どちらも宇宙戦闘を前提とした航空力学を無視した奇妙な形をした戦艦である。地球軍の戦艦は宇宙戦艦でさえ旧暦の洋上戦艦を思わせる形状をしたものがいまだにあるというのに。

このような些細なことにさえ、ウィラードはザフト軍というものの異質さを覚えずにはいられなかった。

それは、ウィラード自身コーディネーターであることに起因しているのかもしれない。最初期に遺伝子調整を受けたウィラードは、それでもプラントに加わろうとはしなかった。理由は詳しくは覚えていない。ただ、あくまでも人の枠から外れることのないコーディネーターが新たな人類を名乗る姿に覚える違和感はいまだに払拭されていない。

中には地球に降りたこともないコーディネーターもいると聞く。そんなプラントの民にとって、地球とは一体どのような場所なのだろうか。

ウィラードの眼差しの中で、突然光が瞬いた。そして、艦を揺らす激震。

「何事だ!?」

艦長席の手すりに必死に掴まりながらウィラードは声を張り上げる。

「ザフトからの攻撃です！」

「ドレイク級被弾！　航続不能、離脱します！」

「ザフト軍、モビル・スーツの出撃を確認！」

「各機散開！　迎撃にあたれ！」

矢継ぎ早に伝えられてくる状況の悪化は、ついには戦況報告へと姿を変えていた。そう、ここはすでに戦場である。ウィラードはすぐさま迎撃の指示を飛ばさざるを得なかった。

回頭する地球軍艦隊。その間にも敵の攻撃は続いている。戦艦からの砲撃に加え、敵モビル・スーツが接近を許してはならないほどの距離にまで近づきつつあった。

「モビル・スーツ隊を引き戻せ！」

「しかしまだメテオ・ブレイカーの設置が！」

「構わん！　起動は後続の部隊にさせればよい！　今はザフトを抑えねばならん！」

ウィラードの決断は早く、オペレーターの行動に迷いはなかった。小惑星にとりついていたいくつもの推進剤の輝きが一斉に飛び立った。

地球を知らぬ国。

「それがプラントだということか」

ユニウス・セブン休戦条約では、１０の項目が制定された。この中で最も非難された一文は、両国の戦犯を国際法廷に委ねることなくそれぞれの国で裁きにかけるというものであった。

犯人自らに判決文を書かせるに等しいこの決定は、それでは戦争の反省を促すこともなければ抑止にも繋がることはないと非難の声があがった。しかし、地球連合、プラント両国の指導者にとっては都合がよく、ユニウス・セブン条約はこのままの形で締結された。

血の責任を誰も支払おうとはしなかった。

そして、この休戦条約そのものがすでに形骸化の兆しを見せ始めていた。

国力に合わせてモビル・スーツの保有台数を制限する。この取り決めは一見過剰な戦闘の抑制に繋がるものと期待された。しかし、軍事費については一切取り決められることはなかった。

これまで３００機を製造に当てられていた資金が生産保有台数を半分にしろと言われれば、１５０機を製造できるだけの資金がまるごと浮くことになる。その使い道を条約は一切規制しなかったのである。

その結果、国々のモビル・スーツ開発競争は激化した。

これまでコスト・パフォーマンスを考えなければならなかった機

体が、突然1機あたりにかけられる額が跳ね上がったとすれば当然である。とある試算では、モビル・スーツ1機あたりの開発費を含めた資金は条約以前の3倍以上に跳ね上がったまでする説さえ存在している。

そうして量産されたのがガンダムであった。

希代の技術者であるゼフィランサス・ズールが開発したガンダムと名付けられたシステムの唯一とも言える欠点が高コストであった。条約はその最後の鎖を解いてしまったのである。

1本の高い槍よりも10本の安い槍の方が役に立つ。ところが槍を5本しか持てないのだとすれば、多少値がはろうとも高い槍を求めるようになる。

そして、高い槍はガンダムとして示されていた。

地球軍、ザフト軍はこぞってガンダムの量産化を目指した。

地球軍は3機のガンダムの開発に成功。ザフト軍はZGMF－56Sインパルスガンダムの他、ZGMF－23Sセイバーガンダムの2種の量産している。

ユニウス・セブン休戦条約以前と以後のモビル・スーツの違いを上げるとすれば換装機構の普及、ムーバブル・フレームの搭載、大電力バッテリーの開発、ミノフスキー・クラフトに由来する飛行能力など挙げれば切りがないが、その最たるものが、ガンダムが戦いの空を席巻する光景であると言えた。

敵対する勢力に同名、同じ特徴を持つ機体が存在する事実は、開

発者であるゼフィランサス・ズールへの敬意と、この戦争の特殊性を如実に示していた。

フィンブルを巡る戦いは、まさに現在の戦争の縮図であった。

地球軍はストライクダガーを出撃させる。その背中には新型ストライカーであるジェット・ストライカーの他、旧式のランチャー、ソードなど同一の機体でありながら多様な性能を実現している。

限られたモビル・スーツで可能な限りのことを。これも、ユニウス・セブン条約以後に見られる設計思想である。

対するザフト軍はＺＧＭＦ－１０００ヅダを多数放っていた。ザフト軍特有のモノアイ型のデュアル・センサーを持ち、その全身は緑色の甲冑に包まれている。初期型のＺＧＭＦ－１０１７ジンが鎧を着た巨人なら、後継機にあたるＺＧＭＦ－５１５ゲイツは騎士。巨人から騎士を経て、ヅダは戦士の如き屈強の体つきをしていた。その背にはミノフスキー・クラフトに輝く様々なバック・パックを装備していた。

地球軍、ザフト軍がともに同系列の技術を発展させてきたのである。

地球軍はＧＡＴ－Ｘ１０５ストライクガンダムより培われてきたストライカーと呼ばれる換装機構によって同種の機体がまるで異なった性能を見せつける。

ザフト軍はインパルスガンダムのシルエット・システムとヅダの

ウィザード・システムという換装機構の間に互換性こそないものの、優れた技術力では新型量産機の配備に手間取る地球軍に溝を開けている。

量産機が汎用性を担い、ガンダムが性能で他を圧倒する。

これこそがこの戦争の縮図である。

フィンブルを巡る戦いにおいても、それは現れていた。

フィンブルは地球へと突き進む。迎え撃つ地球軍はその戦力の大半をザフト軍の迎撃に使わざるを得ない。また、フィンブルの軌道上に戦力を展開することはできない。そのため、フィンブルの周囲で交戦が繰り広げられ、その中心部たる小惑星は静かなものである。

ブレイズ・ウィザードを装備したヅダが加速する。インパルスガンダム同様、バック・パックがミノフスキー・クラフトの輝きを放ちながらその推進力を保障する。

2機のヅダが編隊を組んで飛行する。ブレイズ・ウィザードは細長い2本の推進器を並べた構造をしており、その先端部分が並んで開いた。ウィザードの内部には小型ミサイルが多数並べられており、2機が同時に撃ち放つ。ミノフスキー粒子によって電波障害が恒常化している現在、ミサイルと呼ぶよりもロケットのようにでたらめに放たれた弾頭は一定距離飛翔したところで一斉に爆発する。

立ちこめる爆煙。それを引き裂くようにシールドが突き出され、煙の中からジェット・ストライカーを装備したストライクダガーが飛び出した。

それを待ちかまえるのは3機目のヅダ。ウィザードはスラッシュ・ウィザード。バック・パックには扁平な構造が一対取り付けられ、ミノフスキー・クラフトにとって必要な表面積の確保に努めている。その輝きに押し出され、その手には長柄の戦斧。三日月型の発振器からビームの光が刃を描く。

ストライクダガーは反応することさえできなかった。ライフルを向ける間もなく、辛うじてシルードを突き出す。

ヅダは一息に斧を振るった。光の戦斧が一瞬の躊躇を見せてシールド表面で踏みとどまる。それは気の迷いとビームはすべてを溶かし、シールドごとストライクダガーを引き裂いてみせた。

ビームを防ぐことができる材質はいまだ開発されていない。

それはヅダにも当てはまる。

飛来するビームが勝利の余韻に浸る間もなくヅダを襲う。飛び退くヅダに追いすがり、ビームは肩を直撃する。ヅダのシールドは両肩に小型のものが取り付けられてる。ビームを受けた表面は爛れ、あとビームの直撃を2度、3度と受け止められる保障はない。

この事実がヅダのパイロットを不必要に焦らせた。無理に加速し、余計な慣性に囚われてしまったのである。これでは動きを読まれるばかりか機動が大きく制限される。

その隙を見逃してくれるほど敵も甘くはない。

ソード・ストライカー？――以前から用いられているソード・ストライカーにミノフスキー・クラフトを搭載したものである――を

装備したストライクダガーの手には対艦刀が握られている。モビルスーツの身の丈ほどもあるビーム・サーベルが振り下ろされると、ヅダの強固なはずの装甲がたやすく斬り裂かれ、巨大な火花へと変わる。

戦況は一進一退の様相を呈していた。

フィンブルへと近づきたい地球軍に対して一切攻撃の手を緩めることのないザフト軍。両者の戦力は拮抗し、フィンブルに近づくことができないでいる。

外から見たなら戦況はマーブル模様を呈していることだろう。中心にはフィンブル。それを取り囲むストライクダガーとヅダの群。そして量産機の織りなす円環は内側に行くにつれその雰囲気を色調を変えていく。

そこは選ばれたものの戦場である。混戦模様の外周部を力付くで通り抜ける者しか踏み入ることはできない。それはすなわち強者を意味し、この時代、この戦争で強者とガンダムとは同義である。

中心部に向かうに連れ、ガンダムの姿が増えていく。

フォース・シルエットを装備したインパルスガンダムが持ち前の機動力で僚機とともに敵を追いかけ回す。ビーム・ライフルから放たれる輝きが宇宙空間に光の筋を描く。

2機のインパルスが放つビームを、GAT－333ディービエイトガンダムは背部のウイングを輝かせながら軽快な動きで回避していく。ステラ・ルーシェの使用する特装型とは違い薄い水色の機体がモビル・アーマー形態のままビームの軌跡の間をすり抜ける。

別の場所ではＧＡＴ－１３１イクシードガンダムが２本の、ソード・シルエットを装備したインパルスガンダムが１対の対艦刀を互いに構え斬り結ぶ。

異なる勢力に属する同じ顔を持つ機体同士が戦いを繰り広げる。

この異常とも思える光景こそが、まさにこの戦争を象徴していた。

そしてさらなる内側。フィンブルの上空にまで至ると、やはり光景は一変する。ここに来るために必要なことは力だけでは物足りない。

必要なのは確たる意志。フィンブルへと到達するという強い意志に他ならない。

ここは戦場である。力と思いを持つ者のみがたどり着ける聖域である。

フォース・シルエットによって加速するインパルスガンダム。これが今のシン・アスカの機体である。普段使い慣れているソード・シルエットの使用は足並みを乱すとして許されなかった。

モニターにはすでにその全貌を捉えきることができないほどに大きくフィンブルの姿が映し出されていた。全体が太陽の光を反射し、その白さは眩しくさえある。

その眩しさの中に傷だらけのストライクダガーの姿があった。左

腕を失い、首から上がすでにない。どんなストライカーを装備していたのかわからないほどに破壊されている。

それでも向かってくる。シンへと挑みかかってくる。

「待ってくれ！」

聞こえるはずなどない。届くはずなどない。それでもシンは声の限りに叫ばずにはいられなかった。破砕活動の邪魔がしたいわけではない。それを伝える術がない悔しさが歯と歯を強く噛み合わせる。

ストライクダガーは傷だらけの体をおしてライフルを向けてくる。量産機でも十分な攻撃力を発揮するビームが際どい場所を通り抜けた。

数打ち――インパルスガンダムもその1種だが――のモビル・スーツでこんな戦場の奥地にまで来たパイロットが力と何より意志を兼ね備えていないはずがなかった。

武器だけを破壊するような、そんな甘えた戦いができる相手ではなかった。

ソード・シルエットを使用していた時の癖からついアクセルを強く踏みしめる。急速に接近していく中で相手のビームがシールドを捉えた。元々何度か被弾していたシールドはビームの膨大な熱量をさばききれない。ビームの輝きがシールドの裏でさえ確認でるほど表面が溶融する。

これだからシールドは。元々、ビームの攻撃力を完全に防ぐことができる材質など存在しない。攻撃は最大の防御。この言葉が今ほ

ど効力を持つ戦場もざらにはないだろう。

シンはやむなくやむなくライフルを向けた。

できることなら無力化したい。やや甘めに標準をつけたビームを発射すると、思いの他損傷の激しかった敵機はかわすこともできずにジェネレーターを抱える胸部に直撃してしまう。

何度も見てきたモビル・スーツの爆発。

地球を命がけで守ろうとした誰かが死んでしまった。

「ちくしょう！　ちくしょう！」

殺したかった訳じゃない。地球にこんな石ころを落としたい訳じゃない。

ただでさえ不機嫌そうに見えると言われるシンの眼差しは、すでに憎しみさえ思わせてフィンブルを睨みつけていた。

そのエネルギー効率の高さから戦術から戦略まで一変させてしまったビームの破壊力を、今はフィンブルへと向ける。ビームの輝きはほぼ垂直に小惑星の白い地面に突き立てられ、爆発を引き起こす。

確かに大きなクレーターはできた。だが、それは直径７ｋｍの小惑星を破壊するにはあまりに微力である。

「人を殺すことはできても人を救うことはできないのかよ！　ガンダムは～！」

コクピットの中で引き金を引き続ける。あまりに引き金を引きすぎてライフルが連続発射できる間隔を無視した発射指示にインパルスが抗議の声を上げた。そんなに命令されてもライフルの冷却、エネルギーの充填に時間がかかる。そう、アラームが聞こえていた。

普段は気にならないほどの間隔がずいぶんと冗長に感じて、ビームは次々と爆発を引き起こし、それでも内部にまで破壊は進まない。

先程からアラームが鳴りやまない。ライフルの使いすぎで銃身の冷却が追いついていないと怒鳴りつけてくる。その警告の中に別の意味合いが含まれることに、つい気づくことが遅れてしまった。

アラームは、敵機の接近を告げていた。

上半身のあらゆる場所に火器を備えたガンダムが驚くほどの速さで近づいてくる。反応するには完全にタイミングを逃している。これまで2度交戦したイクシードガンダムの特殊型はなんと蹴りを繰り出してきた。

胸部へと直撃する攻撃。フェイズシフト・アーマー同士の接触は激しい光輝をもたらし、比例する衝撃がインパルスを揺らす。

叫び声さえ上げられないまま、シンは体が吹き飛ばされる感覚を感じていた。７０ｔもの機体が軽々と後ろへと投げ出されていた。

「こいつ……！」

これまでとは何かが違う。直接交戦したことはないが、戦ったルナマリアの話ではとても距離を選んだ冷静な戦い方をすると聞いていた。それなのに射撃に特化した機体であるにも関わらずの突撃で

ある。

これまでとは何かが違う。

それが何なのか、考える余裕などない。

体勢を整えられないインパルスへ、イクシードガンダムはバズーカを撃ち放つ。シールドで辛うじて防ぐも、ただでさえ劣化していたシールドは脆くも崩壊してしまう。

このままでは押される。反撃として無理な姿勢であること構わずライフルを放つ。

イクシードは上に飛び上がることでビームをかわすと、宙返りの姿勢でそのままインパルスめがけて蹴りを放つ。相手のすねが頭部を直撃し、コクピット内のセンサーが一気に乱れた。どんな追撃があったのかさえ確認できない。ただ、インパルスが弾き飛ばされる衝撃がシンの体を駆け抜けた。

もはや気迫としか言いようがない。この敵は、あまりに必死に地球を守ろうとしている。

「シン、聞こえる？　シン！」

ルナマリア・ホークの声はシンに届いてくれない。

ミネルヴァ隊――ルナマリアを含む7機のインパルス――はシンの突出に引きずられる形で戦場の奥深くにまで進出せざるを得ない

状況であった。

周りはすべてガンダムだらけである。地球軍製のガンダムの中で唯一可変機構を有するディーヴィエイトたちがモビル・アーマー形態のままミネルヴァ隊の周囲を飛び交っている。

積極的に攻撃してくることはない。まるで何かを待っているかのようにディーヴィエイトはインパルスを取り囲むように旋回を続けていた。

たとえるなら、獲物が息絶えるのを上空で待ちかまえる禿鷲のよう。

ルナマリアはこれを単なる焦りの現れであると判断した。レイ・ザ・バレル部隊長のガンダムの姿は見えない。シンはフィンブルへと単独で行ってしまった。隊長不在の不安と仲間への心配がディーヴィエイトの群を禿鷲に豹変させているのだと判断したのだ。

バレル隊長なら1人でも大丈夫だろう。それでも、シンは放っておくことはできない。

「私、シンの支援に向かいます。援護してください！」

仲間の返事も待たずにルナマリア機はフォース・シルエット――ルナマリアもまた、使い慣れたブラスト・シルエットの使用を許されなかった――のウイングを輝かせた。

「勝手なことをするな！」

ヨウラン・ケントの声を聞きながら、それでもルナマリアはディ

ーヴィエイトの群を強引に突破しようとする。禿鷲がその爪に当たる場所からバルカン砲を放ちながらルナマリア機の側を通り抜けた。

逃がすつもりはないということか。ルナマリアは背筋に覚えた冷たいものの感触を敢えて無視する必要があった。

無理に機体を進ませようとすると、別のディーヴィエイトがより速い動きでインパルスを捉える。背中から突き出た機首部分のビーム砲の銃口をモニターで確認すると、ルナマリアはとっさに機体を引く。インパルスのすぐ前を駆け抜けて行ったビームはシールドの表面をなぞるように溶かした。ビームを放ったディーヴィエイトがやはり通り抜けていくと、続いて別の機体が接近してくる。

隼に弄ばれる雀になった気分である。

向かってくる機体へと向けてライフルを向ける。すると、敵は突然方向を変え逃げ出した。

別にルナマリアの気迫に押されたわけではない。仲間のインパルスたちが援護射撃をしてくれたのだ。ルナマリア機との間にいくつもの光の筋が通り、敵機は接近を断念した。

「早く行ってやれ。ここは俺たちが引き受けるからさ」

普段お調子者のヴィーノ・デュプレの軽薄とも思える声もこんな時は頼もしく思える。援護してくれるのは、もしかするとシンとトラブルを起こしたことへの負い目を感じているからかもしれない。

「ありがとう！」

仲間がつき崩してくれた包囲網の穴を、ルナマリアは一気に駆け抜けた。

「作戦行動中に勝手な行動を許すのか？」

ヨウランはルナマリア機の背中を見送りながらヴィーノと通信をつないでいる。その口振りは辛辣なようでありながら、援護にはヨウラン自身も参加している。

「隊長だって俺たちほったらかしてどっか行ってるだろ。それに……」

「それに？」

「シンて奴、アブディエルなんだよな。それなら、やっぱり地球に仲間や友達がいるってことだよな」

調子に乗って口走ったことを悔やむくらいなら始めから言動に気を使うべきではないだろうか。ヨウランは不器用な仲間についため息を聞かせてしまった。

「少しでも軽率だったと思うんだったら、後で謝っておくことだ」

囲みを狭めようとしていたディーヴィエイトにライフルを放つ。当たりはしないが、攻撃された分だけ、敵は距離を開けた。完全にこちらを封じ込めようとしているのだろう。

こちらは6機。敵機は4機。無理に打ってでてもよいが、ここで

功を焦る理由はない。アブディエルには酷なことだが、たとえ小惑星が地球に落着しようと、プラントが被る被害――地上にはいくつかの軍事施設を所有するとは言え――は比べるまでもなく小さいからだ。

では何故、敵機は攻撃を仕掛けてこないのだろうか。青い猛禽の群は、不気味な旋回を続けていた。

そんなヨウランの不安をよそに、ヴィーノは気楽なものである。

「よし決めた。やっぱり俺、この戦いが終わったらあいつに謝る」

もう1度、ヨウランはため息をついた。

小惑星フィンブルの表面に三角錐の骨組みをしたメテオ・ブレイカーが3機設置されている。先発隊が残したものでまだ起動されてはいない。

斜めに傾いた骨組みの外側部分に起動装置が取り付けられており、それはモビル・スーツの手によって起動させられる。

メテオ・ブレイカーの1機にモビル・スーツが取り付いていた。骨組みに手をかけ足を乗せ、その指が器用に骨組みに設置されたボタンを押している。

ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型である。戦闘時には鎌を縦横無尽に振り回す機体が、１つ１つ丁寧にボタンを押していく様子はひどく人間じみている。もっとも、ボタンは人が扱う

ものの１０倍ほどの大きさがある。

「え～と、パスワードを入れて、システムを立ち上げてって、何で直接入力なんだよ！？」

インテンセティのコクピットの中で、アウル・ニーダはマニュアルを投げ捨てた。本来は無重力に引かれ漂うはずが、明らかに重力の影響を感じさせて紙は下へと沈んだ。それだけ地球が近いことを意味している。

仕方なく、アウルは作業に戻る。いつもなら鎌を握らせてさえいればいいマニピュレーターの人差し指が再びパスワードを入力していく。

「元々戦闘中に使うものじゃないから」

ステラ・ルーシェのＧＡＴ－Ｘ３７０は別の場所でメテオ・ブレイカーの起動にあたっていた。モニターで直接確認することができる。小惑星は決して大きなものではないのだ。

こんなちっぽけなものが落ちただけで地球には甚大な被害が発生してしまう。

何としてもこのままの落着は阻止しなければならない。アウルは子どもなりに使命感を抱く顔をする。

手順通りにパスワードを打ち込み起動開始のスイッチを押すと、メテオ・ドライバーの各所に取り付けられたライトが点灯しわかりやすく起動を示した。

「よし、動いた！」

インテンセティの腕を通して伝わる振動はメテオ・ブレイカーが採掘を開始した合図である。メテオ・ブレイカーは3本の足でしっかりと地表を捉えると軸部分から採掘用のドリルが堅い岩盤を削り少しずつ深く深く潜っていく。ドリルの先端が所定の深度に達したところで爆薬が炸裂し、小惑星を内部から破壊するのである。

本来ならば１０本単位で細かく破砕する予定であったが、ザフトとの戦闘中にメテオ・ブレイカーを持ち込むことなどできはしない。大気圏突入で燃え尽きてくれるほど細かくは破砕できない。

どうすればいい。苦悩を解消する方法をまず外に求めるあたりに、アウルの未熟さが現れていた。

「ヒメノカリス姉ちゃんは？」

「警戒してる。ゲルテンリッターが来るかもしれないって」

ゲルテンリッター。ゼフィランサス・ズールが直接手がけた7機のガンダムのことだ。アウルたちが搭乗しているような量産機とは違う。コスト、操縦性、整備性そのすべてを考えず徹底した高性能が約束された機体は、ガンダムのインフレ化が進んだ現在でさえ圧倒的な性能が約束されている。

アウルとステラ、それどころかスティングを加えた3人がかりでさえ相手にさえならないのではないだろうか。

量産機ではガンダムに溝を開けられ、ガンダムではゲルテンリッターには勝てない。

ガンダムは大人しくガンダムの相手をしておくべきだろう。

混沌とした戦場を飛び抜けてきた1機のインパルスガンダムがあったのだ。外周部に比べればフィンブル上空は驚くほど静かなものだ。接近にはすぐに気づくことができた。

「ステラ、お前戦いになると変に興奮する癖がある。注意した方がいいぞ」

「うん……。わかった」

返事はあったが、すでにステラは恐怖を感じているようであった。元々、ステラは戦いに向く性格ではないのだ。

かばい立てするつもりはなかったが、アウルはステラよりも一足に小惑星から飛び立った。何もスラスターを全開にする必要はない。インテンセティそのものが今地球へと向けて落ちているのである。ほんの少し逆制動をかけるだけでガンダムの体はフィンブルの地表を離れた。

その腕には鎌が握られ、甲殻種を思わせるバック・パックがガンダムの顔を覆い隠す。

こちらに気づいたインパルスがライフルを放つ。ビームは効かない。バック・パックにアームで連結されたシールドの表面にビーム化寸前のIフィールドが張られ、ビームを弾くのだ。

敵の攻撃を無効化したアウルはすでに普段の調子を取り戻して笑っていた。

地球へと向かうフィンブル。遙か先に見える地球の方が優に大きく、このようなちっぽけな小惑星がそれでも甚大な被害を生み出すという事実が滑稽に思えるほどである。

滑稽と言うなら、まさに目の前の状況そのものであるかもしれない。

フィンブル上空では戦いの光があまりに疎らである。恐らく両軍揃えても数えるほどの部隊しか参加していないのだろう。残りの大部分の戦力は外周で使い潰されているのだから。

これが地球の命運をかけた戦いの姿であろうか。

詮無いことだ。この光景を見下ろす者、レイ・ザ・バレルはすぐに関心を失った。

現在でも珍しい全天周囲モニターには敵機の接近を告げていた。音声は切ってある。元より、お喋りな方ではないが。よって、モニターにはただ敵の存在がカーソルで示されているだけである。

「来たか」

こうも絶対速度が速くてはあの機構は使えない。ＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルが背負う輪環を輝かせ、ついで純白の体を光らせて振り向く。その両手にはビーム・サーベルを構える。

飛来する機体もまたガンダムである。

赤い。全身を血で染めたように赤く輝かせている。バック・パックは大型水平翼を備え、細身のシルエットは兵器とするよりは彫像。ガンダム特有の美しさを兼ね備える。かつてザフト軍が開発したＺＧＭＦ－Ｘ０９Ａジャスティスガンダムとひどく似た印象を与える機体である。

そして、大いなる裏切り者であった。

「いらんのだよ、使い道を違えた力など！」

普段表情に乏しいレイが歯を剥き出し、憎悪を露わにさえする。

赤いガンダムがその両手にビーム・サーベルを構えた。

今、真紅の剣と純白の環とが激突する。

青いガンダムが来る。

その姿は優雅とさえ言えた。４対の翼を持ち、白と青とで整えられた色調は兵器らしからぬ鮮やかな色を見せた。両手にビーム・ライフルを構え、完全な左右対称の姿は、ミノフスキー・クラフトの輝きに包まれる。

迎える黄金の輝きの中で、ヒメノカリスは新たなガンダムを確たる敵と認識した。

「ヤーデシュテルン。アスラン！」

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムが全身を輝かせ動く。

今まさに滅びを与えられようとしている星を背景として、黄金の炎と青の翼が向かい合う。

そして、地球へ落ちようとたくらむ星の上でガンダムは戦っていた。

ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダム。ザフトの主力となることを期待された機体に搭乗するのは、アブディエルと蔑まれる少年である。

少年はフィンブルを破壊してしまいたいと考えていた。

ＧＡＴ－Ｘ１３３イクシードガンダム・バスターカスタム。ストライクガンダムの正当な後継機として開発されたイクシードガンダムに同じ１００系フレームを採用したＧＡＴ－Ｘ１０３バスターガンダムのデータを反映させた機体である。この機体にはかつて空が落ちる光景を目撃した少年が搭乗している。

少年はフィンブルを落としたくないと願っていた。

２人は共に等しく地球のことを思い、そこに生きる人のことを思い描いていた。

そして、２人は殺し合う。

イクシードが右腕のバズーカ、左腕の2連ビームを交互に間断なくうち続ける。途切れない射撃が雨となって降り注ぐ。インパルスはフィンブルの地表すれすれを滑空しながら爆発をかいくぐる。その回避の合間に、インパルスは機体を素早く１８０度回転させライフルを上空のイクシードへと向ける。

交差する2筋の閃光。イクシードを狙ったビームは虚空の彼方へ。インパルスの破壊をもくろんだ攻撃はフィンブルの地表を吹き飛ばす。

上空へと逃れるインパルス。立ちふさがるイクシード。互いに銃を向け、射線が幾度となく交差する。それらは決して交わることなく、滅びの空の上、ただただ浪費されていく。

「まだ空を落としたいのか！　お前たちは！」

イクシードガンダム・バスターカスタムのコクピットで、スティングはいつになく感情を露わにしていた。

もう2度とあんな光景は繰り返されてはならない。あんな、空が落ちてくる夜は見たくない。

そう、父に誓い、姉と約束したのだ。

スティングは姉との、ヒメノカリスとの約束を思い出していた。

フィンブル落着の危機を知らされスティングはどうしようもなく

助けを求めた。それが叶えられず失意の内にコクピットに籠もっていたしかできなかったスティングに、救いはあちらから訪ねて来てくれたのだ。

暗いコクピットの中。それでもヒメノカリスの視線を確かに感じながらスティングは１０年も前の昔話をぽつりぽつりと話し始めた。

「姉貴は知ってるだろ。俺の親父はエイプリルフール・クライシスで死んだ。俺、見てたんだ。ニュートロン・ジャマーが落ちてくるところ。不気味な光景だった……」

父と２人で荒野、星を見ていた。街の明かりの届かないその場所は満天の星空が広がる特等席だった。バケツ一杯の星々を一気にぶちまけたみたいに粒状の光がところ狭しと並んでいる光景は何度見上げてもその度にスティングに新たな発見と驚きを与えてくれた。

あの日は、あの日だけは違った。

思いだそうとして、スティングは手を握りしめ、脇を絞めた。こうしておかないと、何かに襲われそうな錯覚に憑かれる。

「星が見えなかったんだ。空がえぐれて落ちたみたいに闇が蠢いてた……」

今ならその正体がわかる。プラントが降下したニュートロン・ジャマーの影が星の光を遮ったのだ。スティングは父とまさに災厄が落ちてくる光景を目撃した。

「まず街が死んだんだ。暴動の鎮圧のために軍が出てくると民衆との間に小競り合いが起きて一転大混乱さ。俺は親父に手を引かれて

嘘みたいな真っ暗闇の中を必死に逃げたんだ。銃声や悲鳴ばっかりでさ、聞こえてきやがるのは……」

街に明かりが1つも灯ってはいなかった。燃える炎の明かりだけが混乱と無秩序のただ中に放り出された街を彩っていた。

「そんな時、親父とはぐれた。手が離れて、もう見つけようがない。結局、親父がその日に死んだことを知ったこと自体、数ヶ月後の話だった」

戦争孤児のお決まりとして施設に入れられた。特殊な才能があるとニーレンベルギア・ノベンバーのプロジェクトに志願することが認められ、軍籍やガンダムという力まで得た。

それでもあの日の光景はいまだに頭から離れてくれない。頭を両手で抑えるのは、こうでもしないと空が落ちる光景が吹き出してきそうで手を離すことができない。

「俺怖いんだ。また空が落ちてくるって。またあんなことが地球全体で繰り返されるんだって考えると、怖くて怖くて仕方がないんだ」

意識は現実へと戻ると、目の前にはすでに大気の熱にあてられ徐々に赤みを帯びつつある小惑星の姿。そして、滅亡を助長しようとするザフト軍の機体があった。

ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダム。シールドをなくし、それでもフィンブル上空から離れようとしない姿に、スティングは憎悪の限りでもって伝わりもしない声を、届きもしない思いを叩きつける。

「お前らは！　そんなに空を落としたいのか！」

フィンブルは、次第に着実に確実に地球へと落ちようとしていた。

滅びの光景が繰り返される。

太陽も月も掛け替えのないもの。この世に１つしかない人類の宝です。では、人はどうでしょう。その人という個人は世界に１つしかありません。それでも、人はそこに唯一無二の価値を見いだすことはできません。個性は１つでも、同様の性質を持つ個人ならいくらでもいるからです。

太陽と月の喪失は大いなる損失。でも、個人の喪失はいくらでも換えのきくものでしかありません。

では問題です。太陽ほど希少なものではなくて、それでも月ほども尊いものとは何でしょう。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「ＬＯＳＴ　ＣＨＩＬＤ」

スティング。あなたは答えそのものなのかもしれません。

第7話「ＬＯＳＴ　ＣＨＩＬＤ」

小惑星フィンブル。この名前の由来を、ご存知だろうか。

スカンジナビア王国の地方神話に語られる人類を滅ぼす冬、その名前である。

フィンブルは3つに分けることができる。

まず訪れるのは風の冬。世界に吹雪が吹き荒れ、人類の3分の1が死に絶える。

続いて剣の冬。人々は互いに剣を取り殺し合う。そして、また3分の1の人々が死に絶える。

最後に狼の冬。この世界に潜み、隠されていた悪意が目を覚ます。死者の船を駆り、その体躯は世界さえ包み込み、すべてはその顎の奥へと消える。

この名前は、スカンジナビア王国事務次官、マリア・リンデマンの提案によって命名された。

純白は光環を背負い、真紅は血塗られた剣にまみれる。

フィンブルの落着は決定的なものとなっていた。衛星軌道はとうに突破されている。それは、地球の重力自体が明白にフィンブルを引き寄せ始めたことを意味する。次第に視界の中で大きさを増して

いく地球の青さの中で、それでもミノフスキー・クラフトの輝きは激しさを増す。

ＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルは純白の体に黄金の線を引いた機体である。その特徴として背中に環を背負い、光の剣を構える姿は神々しくさえある。

対し、敵は神々しさとは無縁であった。

ＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンは真紅の体をしていた。その背には翼と呼ぶには無骨なウイングを備えたバック・パックを備え、それは勇ましい闘士を思わせる。

神像と闘士。両者の戦いはあまりに現実離れしたものであった。人の視認速度を超えているほどに速く、しかしどちらもともにその速度に対して明らかに反応してみせた。

ローゼンクリスタルがサーベルを振るった。そう判断した頃にはすでにその攻撃は捌かれ、ラインルビーンが反撃に転じている。その反撃を確認した頃にはやはり両機は次の行動に移っていた。

フィンブルのその上で、２機のガンダムが距離を開ける。その動きは驚くほど速く、そして、全身をミノフスキー・クラフトの輝きが包んだと思うと、両者は再び目が回るほどの速さで剣戟を打ち鳴らした。

ラインルビーンが薙いだ一撃をローゼンクリスタルが受け止めるとともに押し返す。するとその反動を利用してラインルビーンは上体をひねると、反対側からウイングが横一文字に振るわれる。ウイングの縁にはビーム・サーベルが発生しており、ローゼンクリスタ

ルは先程とは反対のサーベルで受け止める。

純粋なる紅玉は、まさに全身が刃の塊であった。すでに足、つま先と膝の発振器を挟む形でビーム・サーベルが発生していた。蹴り上げる動作とともにサーベルがローゼンクリスタルを襲う。純白のガンダムは飛び上がるとともに体を回転させ、宙返りの要領で回避する。体がちょうど1回転した時、ビームの輝きを伴う脚撃がローゼンクリスタルの顔面すれすれを通り抜けた。同時に、ローゼンクリスタルが反撃としてつきだしたサーベルの切っ先は、ラインルビーンの顔、わずか数ｃｍ横を突き進んだ。

外したのではない。外れたのでもない。互いが互いの間合いを完全に見切っていた。モビル・スーツのような巨体が行うにはあまりに卓越した絶大な回避術。

ハウンズ・オブ・ティンダロスを体得している両者は再び距離を離した。

コスト、操縦性、整備性、生産性、果てには人が扱うことさえ想定されているかさえ疑わしいガンダムは兵器としてのあらゆる常識を超越する。

黄金は炎と名付けられた。蒼は翼を羽ばたかせる。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダム。かつてゼフィランス・ズールがブルー・コスモス3幹部の1人であるエインセル・ハンターのために開発したゼフィランサス・ナンバーズの初号機である。エインセル・ハンターのために開発された機体である以前に、

この機体はエインセル・ハンターの事実上の専用機であった。

通常のモビル・スーツの1．5倍近い大きさを持ち、可変機構によってモビル・スーツ形態、モビル・アーマー巡航形態、モビル・アーマー形態の3態を備える。また、時には8本ものビーム・サーベルを同時に展開するなどパイロットに要求される技術がすべてのガンダムの中でも群を抜いていた。こんな機体を完全に操ることができる者など、エインセル・ハンターを除いて存在しないのである。

エインセル・ハンターのために造られた、エインセル・ハンターにしか扱うことができない機体。それがフォイエリヒガンダム。

黄金は決して錆び付くことはない。しかし、その価値は永遠のものではない。

フォイエリヒガンダムは明らかに劣勢を強いられていた。これまでこの黄金の機体と対峙したことがあるすべての者が決して感じたことなどなかったもの。それは、大きさ故に愚鈍さ。

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンは速い。４対の翼を輝かせ、その輝きに比例して速度を増していく。フォイエリヒガンダムの後ろをあっさりと奪うと、振り向いてきたフォイエリヒへと両手に構えたライフルを掃射する。

フォイエリヒの表面はＩフィールドに包まれ、ビームを通さない。ヤーデシュテルンから発射されたビームはすべて表面の装甲を滑り通り抜けていく。

これは防御に成功したというよりは回避に失敗したとする方が近い。

かつて両手足、バック・パックにアームで連結されたユニット４機からなる８本のビーム・サーベルで近接戦最強を誇ったフォイエリヒが両手足、わずか４本のサーベルを発生させただけでヤーデシュテルンへと斬りかかる。

それでも通常の格闘戦と比すれば極めて高い攻撃力を有しているはずが、ヤーデシュテルンはたやすく剣の網をかいくぐる。ハウンズ・オブ・ティンダロスの眼差しが完全にフォイエリヒの太刀筋を見切っていた。

離れるでもなく、しかしサーベルをかすらせしか――それがハウンズ・オブ・ティンダロスという回避術の真骨頂である――しない。

ヤーデシュテルンがビーム・ライフルを腰部へと設置する。同時にその手には抜き放たれたビーム・サーベルが握られていた。フォイエリヒのものとは真逆の方向へと突き出されたサーベルは、ビームの輝きをかいくぐり、黄金の光をかき分ける。

対ビームの性能を有する黄金の装甲の隙間へと、ビーム・サーベルが突き立てられた。

左腕の、肘に当たる部分である。関節部はどうしても装甲を開放せざるを得ない。そして、フレームはＩフィールドに包まれてはいないのである。

黄金の輝きに混じり、内部からビームの輝きが漏れだした。熱そのものが装甲さえ焼いて、フォイエリヒの左腕は肘から先が切断される。

大きな体のフォイエリヒが目に見えて傾いた。その隙を逃さず、ヤーデシュテルンは左腰からレールガンを展開する。サイド・スカートのように足にそう形で下に向けられていた銃身が９０度持ち上がり、銃口が前を向く。肉眼では捉えられないほどの速度で発射された弾丸は、対ビームに特化した黄金の装甲をたやすく引きちぎり、左足を失ったフォイエリヒは地球の重力に引かれるままフィンブルへと落ちていく。

事態は、すでに深刻なほど進行していた。フィンブルが成層圏に差し掛かり、猛烈な速度で落下してくる小惑星に逃げることのできない大気が圧縮され、膨大な熱量を赤々と発生させていた。

フォイエリヒが落ちていく後ろで、フィンブルが突然砕けた。メテオ・ブレイカーが予定されていた深度で爆薬を炸裂させたのだ。亀裂が斜めに走りそのから細々とした破片が飛び散る。やがて大気の圧力に屈した小惑星は大小２つの塊へと分かれた。

フィンブルがようやく崩壊を始めた。しかしまだ足りない。これでは大きな破片が燃え尽きることなく地表を直撃する。残されたメテオ・ブレイカーは２機。１機の価値は今や１０万の人命にも等しい。

「地球はやらせねえ！」

スティング・オークレー搭乗するＧＡＴ－Ｘ１３３イクシードガンダム・バスターカスタムが肩越しに２門のビーム砲を放つ。モビル・スーツが搭載する火器の中で最大に近い火力を誇るビームは、しかし敵モビル・スーツを捉えることはできずフィンブルに巨大な

火花を上げた。

敵機、ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムはシールドを失い、しかし回避を続けることで戦闘を継続していた。

攻撃の命中率を少しでも上げたいスティングと、中距離では――ビーム・ライフルを所持しているとは言え――決定打を持たないインパルスのパイロット。両者は次第に距離を詰め、射撃に特化しているバスターカスタムが接近戦をしなければならないほど距離は近づいていた。

そこまでしてこいつを地球に落としたいのか。

決して引かず、フィンブルの落着が決定的になった今でもインパルスは決して諦めようとしない。戦闘に挑む覇気というものが他のザフトとは違っている。

２連ビーム・ライフルのビームがインパルスの左足を捉えた。フェイズシフト・アーマーが輝き、足がちぎれ飛ぶ。

それでも、インパルスは戦うことをやめようとはしない。攻撃が命中した瞬間さえ怯むことなく前へと進む意欲を見せていたほどだ。

インパルスは止まらない。あいている左腕はバック・パック――フォース・シルエット――からビーム・サーベルを抜き放ち、ミノフスキー・クラフトの加速を最大限に利用して接近してくる。インパルスに基準を置くと、周囲の風景にまともに焦点を合わせることができない。

それほどの速度でインパルスガンダムは一気に距離を詰めた。

スティングから見て右側、肩を狙って斜めに振り下ろされる一撃を、イクシードを後退させてかわそうとする。しかし、速度が維持されているインパルスは執拗に追いすがり、サーベルがイクシード右手のバズーカを切断する。余熱が残弾に引火し、爆発がモニターを一気に覆い尽くした。

問題ない。見えてなどいないが、スティングはまったく問題とは考えていない。場所は覚えている。位置は掴めている。空間把握における絶大な認識能力。それが、認められた力。

バズーカは破壊されたが、フェイズシフト・アーマーに包まれた右腕は無事である。爆煙の中を、インパルスの頭部があるはずの位置へと右腕を突き出す。

腕を通して感じる振動。インパルスの勢いを受け止めた腕の装甲の輝きが薄くなりつつある煙を通して見えた。イクシードの腕がインパルスの頭を鷲掴みにしているのだ。

メイン・カメラを覆い隠され、それでもインパルスは冷静にサーベルを振り上げた。右腕が切断され、肩越しに覗かせていたビーム砲の銃身までもが両断される。

腕がインパルスの頭を離れた。すでに爆発は落ち着いていた。腕を破壊されたことの爆発の規模は小さい。これで、奴は目撃したことだろう。イクシードガンダムの胸部に搭載されているビーム砲が今まさに発射されようとしているということを。

煙が晴れた先には死が広がっていた。

悪意を持って例えるなら、まるでカビでも生やしたような青緑色をしたイクシードガンダムの胸部、四角い発射口の中心に銃口が覗く。その一点を中心として熱源反応がモニターに映し出されていた。

「俺は……」

ビームに焼かれもしないうちから左頬の痣が焼けるように痛んだ。オーブで植え付けられた炎の記憶が呼び覚まされる。

シン・アスカという人間の消滅にひどくあらがう意識が体を動かしてつき動かす。

回避する時間はない。どちらの方向へ逃げようと、敵の射線はインパルスのほぼ中心を捉えている。下に逃げれば頭部と、悪ければジェネレーターを撃ち抜かれる。上ではコクピットを直撃だろう。横に逃げたところでジェネレーターに甚大な被害が及ぶ。

それでも、シンの意識はあくまでも死を拒絶する。

「俺は、死ぬわけにはいかないんだ！」

マニュアルにはない。引いたレバーは、ドッキングの強制解除。

インパルスの上半身、チェスト・フライヤーが上へと浮き上がり、その反動がコクピット有するコア・スプレンダーとドッキングしたままの下半身のレッグ・フライヤーを下へと押し下げられる。

この両者の間に開いたわずかな隙間の中を、イクシードのビーム

は通り抜ける。ビームの輝きが解放されたコクピット一杯にその眩しいどころではない輝きで満たし、シンは全身に熱を感じたほどである。

目を開いていることなんてとでもできない。そして、その必要はなかった。

インパルスにはすでに指示を出している。ドッキング解除の寸前、シンはライフルのトリガーを引いていた。下半身と離れたチェスト・フライヤーは敵のビームの上で、満足に狙いをつけることなくライフルを発射する。

ビームはイクシードの左肩に命中し、その爆発は背負っていたビーム砲一一先程斬り裂いたのは右側で、これは左側のものだ一一を根本から吹き飛ばした。

わずか1秒にも満たない時間の中で。

ジェネレーターが熱にさらされたイクシードはフィンブルへと落ちていった。大した高度ではない。小惑星に叩きつけられたイクシードの姿は思いの外はっきりと見えている。

再びドッキングを果たしたインパルスは左足を失い、動作途中で無理矢理ドッキング解除したためかシステムが不安定になっていた。若干スラスターの出力に影響が現れていた。

仰向けに地表に倒れたイクシードガンダムは右腕を失い、ビームのあたりどころから考えるなら左腕さえ満足に動かせるか疑わしい。ジェネレーターにダメージがあるならジェネレーター直結式と思われる胸部ビーム砲を使うこともできないだろう。

見た目ほど両者にダメージの違いはない。どちらも満身創痍であった。

それ以上に、シンはこれ以上戦う意味を見いだせないでいた。

フィンブルの縁から赤い霧が揺らいでいた。すでに大気圏降下が始まっているのだ。

シンが何も言い出せないのは、ビームの熱にさらされたことの疲労故ではない。結果として、シンは消極的ながらフィンブル落着を助けてしまったことになる。地球を必死に守ろうとした誰かを傷つけてまで。そんな無力さが、染み込むようにシンの意識を支配していた。

「もういい……。戦う必要なんてない……」

第2のメテオ・ブレイカーが炸裂し、再びフィンブルに大きなひびが走る。それでも、フィンブルは割れないまま、その大きさを維持していた。大小2つのフィンブルは、いまだにその力を残していた。

戦いはすでに終息の兆しを見せ初めていた。フィンブルはまだ落着をしていない。それでも、すでに成層圏に足を踏み入れ、離れた場所でさえ重力を感じるほど地球に近づいていた。

ラヴクラフト級特殊戦闘ミネルヴァのブリッジで、タリア・グラディス艦長は久しぶりに体の重さというものを感じていた。

赤熱する地獄の釜にくべられたフィンブルは次第に地球へと引き寄せられている。すでに降下は免れない。戦闘が静まりつつあるのもそのためだ。

モビル・スーツはユニウス・セブン休戦条約以後目覚ましい発展を見せたが、大気圏への単機突入が可能な機体は限られる。高熱に耐えられるだけの装甲、フェイズシフト・アーマーに包まれたガンダムでなければ機体に深刻な被害が生じ、何よりパイロットが耐えられないのだ。

ガンダムが支配していた戦場は、やはりガンダムがその終わりを飾ろうとしている。

艦長席の上で、タリアは白い軍帽――ザフト軍内において指揮官を意味する色である――を膝の上においていた。本来頭に乗せておかなければならないが、考えごとをする際、帽子は気分として邪魔である。

では帽子の内側で考えようとしていたことは何なのか。それは上層部からの指示であった。フィンブルを地球へ落着させよ。

地球の混乱と破壊を狙った極秘指令を受けていたのである。

現在フィンブルは2つに割れたとはいえ、そのどちらも十分な大きさを持つ。大気圏突入で燃え尽きることはない。成果としては十分と言えた。

それでもタリアを決断させたのは受けているもう1つの任務ゆえであった。

タリアは帽子を頭へと戻す。軍人としての体裁を取り戻した艦長はブリッジに響きわたる高らかな声を上げた。

「アリスを発動させなさい！」

このミネルヴァに副艦長はいない。３人のオペレーターが実質的な副艦長の役目を果たし、こんな場合に指示をブリッジ全体に伝えるのもそのオペレーターたちの仕事である。

その内の１人が振り向かず、そしてあくまでも事務的な口調で疑問を投げかけてきた。

「しかし、アリスはまだ完全なものでは。それに、新たに加わった機体もあります」

「やりなさい。これは命令です」

優秀なオペレーターはこれ以上口答えしようとはしない。ただ艦長が意志を貫くという姿勢を見せただけで、ブリッジの意志は統一された。

「ミネルヴァはこのままの距離を維持し、フィンブルとともに降下。作戦時間、２０分に設定。目標、敵戦力の消失。アリス、発動！」

タリアの声は、宇宙の真空にさえ響きわたると思わせるほど、高らかで明瞭なものであった。

ルナマリア・ホークは不慣れなフォース・シルエットに軽い苛立ちを覚えながら声を通信機へと送り込む。搭乗するインパルスのモニターにはシン機の姿が映し出されていた。今、2機のガンダムから狙われている状況にある。声は自然と早口となる。

「シン、聞こえているんでしょ。そろそろ限界よ。帰還……」

帰還しましょう。

ルナマリアがこの言葉を最後まで続けることはできなかった。何か明白な原因を見いだすことはできない。ただモニターが突然これまでになかった光り方をしたかと思うと、ルナマリアの意識は混濁した。

意識を失ったわけではない。いきなり夢現の中に放り込まれたように目の前の現実が現実味を失い、当事者としての意識だけが欠落していく。

ルナマリアは焦点の定まらない瞳で、まるで人形のようにパイロット・シートに座っていた。それでも、操縦桿を握りしめる力だけは損なわれていない。

ガンダムを操る人形と化していた。

「こいつら、急に動きが！」

目の前のストライクもどきの動きが突然変わったことに、アウル・ニーダは驚きを隠すことができないでいた。アウルはそれほど戦闘

経験のないあくまでも新兵にすぎない。突然の事態に対応できないでいる。

混乱したこと。しかしそれだけでは説明がつかない。

大したことのない奴らだ。このアウルの評価を一気に覆して、インパルスガンダムは明らかに動きが洗練されたものとなっていた。

アウルのＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型の放ったレールガンを、まるで初めから予期していたかのように無駄のない動きでかわすと、その反撃として放たれたビームはシールドで防がざるを得ないほど際どい狙いであった。

それどころかすぐさま次の攻撃が、シールドの脇をすり抜けるようにしてアームを直撃する。それ自体にはビームを弾く力のないアームはあっさりと破壊され、シールドが弾き飛ばされる。

アウルは声もなかった。あまりに不気味な攻撃であった。

正面のインパルスの攻撃ではなかった。ビームが横というあり得ない方向から飛来したこと自体は特筆することは何もない。ただ敵の援軍が合流しただけの話である。左足を失い、シールドさえなくした別のインパルスが横からアームを撃ち抜いたのだ。

問題はそのタイミングである。まるで正面の１機が攻撃し、それが防がれることを前提として放ったとしか思えないほど間断のないタイミングで正確にアームを狙い撃ったのである。たとえ同じ人間が別々の機体に同時に搭乗していてもここまでタイミングを合わせられるものではない。

「アウル！」

ステラ・ルーシェのＧＡＴ－Ｘ３７０ディーヴィエイトガンダム特装型がビームをばらまきながら接近してくる。

「ステラ、来るな！　こいつらおかしい！」

斬りつけてくるのは無傷な方のインパルス。サーベルを無事な方のシールドで受け止めると、その瞬間にはシールドの下を通り抜けたビームの１撃がインテンセティの右足を吹き飛ばした。

目の前のインパルスの真後ろに左足のないインパルスがいることはわかっていた。そのインパルスが仲間のすれすれの場所めがけてビームを放ったのだ。

仲間に当たる危険性を考えなかったのか。仲間に危険な攻撃をされたことによる怒りはないのか。

左足のないインパルスは躊躇など示さなかった。サーベルをもつインパルスとて、この攻撃を好機としか捉えていない。強引にサーベルを振るうと、残されたシールドでは庇いきれない左腕の肘から先が切断された。

全身をミノフスキー・クラフトで包むガンダムが傷つくということ。それは思いの外深刻な事態を招く。推進力のバランスが崩れてしまう。アウルの叫び声さえ飲み込むほどの勢いでインテンセティが投げ出される。赤く熱を帯びた大気に包まれ、地球へと引かれて落ちていく。

余計な横やりが入った。レイ・ザ・バレルは乗機であるガンダムローゼンクリスタルをただ漂わせていた。

先程まで戦っていたガンダムラインルビーンは現在、レイの部下たちが搭乗するインパルスと交戦している。数は4。すでに2機が撃墜されていた。

お前たちにかなう相手ではない。そう言ったところで、今の彼らは聞き入れはしても受け入れることはない。

「アリスか。余計なことを」

レイが冷たく見つめる先で、インパルスたちは機械のごとき完璧な連携を見せていた。

ガンダムラインルビーンの動きは人の常識というものを超越していた。

インパルスガンダムが正面から接近してくるラインルビーンへとビームを放つ。相手の動きを予測するまでもない。ただ一直線に接近してくるのだ。ビームはまっすぐに紅いガンダムの芯を捉えた。

そして直撃する。ビームは何事もなかったかのようにラインルビーンを通り抜け、ラインルビーンには傷一つない。

再びビームを放とうとも、ビームはラインルビーンを通り抜けた。

これがハウンズ・オブ・ティンダロスを体得した者の動きである。敵に近づくためには一直線に加速し、敵の攻撃を最低限度の動きでかわしさえすれば瞬く間に接近することができる。そんな単純明快な絵空事を現実に体現する。

それがハウンズ・オブ・ティンダロス。

インパルスにできることなど何1つとしてなかった。ラインルビーンのサーベルがたやすく胴を斬り裂くと、まずフェイズシフト・アーマーの放つ強烈な輝きが、それから爆発が続いて。

この光景を、ヨウラン・ケントはコクピットの中で目撃していた。

今撃墜されたのは友人でもあるヴィーノ・デュプレの機体である。そのことをヨウランは認識している。しかし、それがヨウランの行動に変化を与えることは一切ない。

モニターから放たれる光を浴びたまま、ヨウランは焦点の定まらない目をしたままでラインルビーンへと攻撃を仕掛ける。

ビームが素通りする。敵は見る間に距離を詰めてくる。それでもヨウランは行動を変えない。力なく、表情のない顔は目の前の現実を、現実として認識しているかさえ疑わしい。

ビームの輝きがコクピット・ハッチを突き破り吹き出してきた時でさえ、ヨウランはただ前を向いたまま、表情を変えることさえなく光に沈んでいった。

屍の戦士が戦う。

そんな形容が似合うほど、インパルスの戦い方は不気味とさえ言えた。

シンもまた生気を失い、黙々と作戦に従事していた。

モニターにすでに爆薬を炸裂させ終えたメテオ・ブレイカー――1機目のものはフィンブルを砕いた際に中空へと投げ出されているため、満足な破砕ができなかった2機目のものである――の姿を確認した。

それはフィンブルを砕くために大切なものであるとシンは認識した。しかし理解してはいない。脳裏に敵性施設という言葉が浮かんだ。

シンは躊躇どころか何の感慨を見せることなくロックオンし、引き金を引く。ビームはメテオ・ブレイカーに膨大な熱量を浴びせかけるとたやすく爆発させる。

続いて、シンは3機目のメテオ・ブレイカーを確認する。これが地球を守る最後の砦である。そうシンにはわかっている。しかし、その事実は現実離れしたものとして受け止められ、シンの行動に何ら制限を加えるものではない。

敵性施設。任務は敵戦力の消失。

すでに大気の影響を機体が覚え始めるほどになっても、シンは任務の達成を至上課題であると認識していた。

ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが突き進む。地球最後の希望を破壊するために。

優しい女性の腕が、悲嘆にくれるスティング・オークレーの体を包み込むように抱いた。狭いコクピット一杯に広がる波立つ桃色の髪が寄り添った。

姉は、スティングが姉と慕うヒメノカリスは花のような香りとともにスティングを抱きしめてくれていた。

「無理しなくてもいいなんて励まして欲しい？」

普段から表情に乏しくて、口数も少ない。ただそれがヒメノカリスの冷たさを意味するものではないということをスティングは知っている。

「怖いなら戦わなくてもいいって言ってもらいたい？」

手と言葉で優しく撫でてくれた。言ってもらいたいことを言ってもらえた。

逃げ出したい訳ではない。それなら大西洋連邦軍になど、軍人になどならなかった。逃げ道が欲しいわけじゃない。戦いから逃れたいわけじゃない。

ただ一言の言葉が欲しかった。

「一緒に地球を守りましょう」

自分を奮い立たせてくれる言葉が。

「ありがとよ、姉貴……」

泣いているでしかなかった自分に力を与えてくれた言葉を思い出しながら、スティングはイクシードガンダムを動かす。フィンブルへと叩きつけられていた機体が起き上がり、その足が強く地面に立つ。

機体が重い。もはやどんな力を使っても小惑星を離脱させることなどできないだろう。破壊するしかない。

イクシードの状態は劣悪であった。右腕を失い、左肩は満足に動かない。胸部ビーム砲はジェネレーター出力の不安定から動きそうにない。背部に背負った2門のビーム砲はそもそも銃身がいかれている。

スティング自身、落下の衝撃で額を切ってしまったらしい。フェイス・ガードに付着した血の跡を見て、ヘルメットを脱ぎ捨ててしまった。

メテオ・ブレイカーが残り1機。完全な破壊など望むべくもないが、少しでも被害を低減できるはずだ。

敵のインパルスがこちらへと、正確にはイクシードの後ろにあるメテオ・ブレイカーへと向かっている。先程まで交戦していた機体で、その証拠に左足がない。

スラスターに火を入れ、イクシードガンダムを飛び上がらせる。

武器は左手に残された2連ビーム・ライフルのみ。放つと、細長い2筋のビームがインパルスの方へと駆け抜けていった。

命中はしない。やはり肩がだいぶいかれているようだ。ロックオン・サイトとは別の場所に弾が行くほか、狙いを変えた後の追従性にも甘いものがある。まさかゼロイン処理をさせてもらえるとは思わない。

こうしている内にもインパルスはスティングへと標的を変え、攻撃をかわしながら接近してきていた。

装甲な破損が機動力の低下に直結する――破壊された分だけミノフスキー・クラフトが機能しなくなる――という矛盾に苛立ちを覚えながら、ヒメノカリスはフォイエリヒガンダムをスティングの元へと向かわせようと急ぐ。

目の前にはインパルスが1機。ヒメノカリスには知る由もないが、ルナマリア機である。

普段なら問題にもならない相手だが、今のフォイエリヒには楽な相手ではない。左腕を失ったことによる重心位置の変化に加え、推力の偏重がより深刻で速度を上げることができない。ハウンズ・オブ・ティンダロスを行いうるほどの機動力も確保できず、敵の攻撃を、ビームを弾く黄金の装甲を頼りに強引に突き進む。

インパルスは恐怖など感じていないように攻撃を続けるだけで動かない。距離を詰めたところで腕から発生させたビーム・サーベルを一息で振り抜く。

やはり狙いが甘いらしく、1撃で撃墜してしまうつもりがインパルスの両足をまとめて切断する程度でしかない。それともかわされたのか。仕方なく、重量差を頼りに体当たりをくらわせる。

フェイズシフト・アーマーではないフォイエリヒの装甲が損傷したことを告げるアラームが聞こえた。それでも、インパルスの体勢を崩し強引に道を開けさせることに成功する。

後少しで、後少しでスティングの元に行くことができる。

「スティング……」

撃ち抜かれた左腕が2連ビーム・ライフルごと爆発した。その衝撃はコクピットを揺らし、開いた額の傷から血が目に入る。赤く染まった視界が、それでも接近してくるインパルスの姿を明瞭に捉えていた。

イクシードのすぐ後ろにはメテオ・ブレイカーが、人々の命そのものがある。

慌てることはない。焦る必要もない。するべきことは決まっている。

そして、立ち向かうだけの力はすでに与えられている。

一緒に地球を守りましょう。

空は落とさせない。もう2度とあんな、暗闇が世界を包み込む光景なんかあってはならない。

引くわけにはいかない。この後ろにはメテオ・ブレイカーがあるのだから。

アクセルを踏み込むと、イクシードはスティングの思いに応えてくれるかのように素直に機体を加速させた。

「お前たちなんかに……！」

もはや正真正銘最後の手段である。イクシードは蹴りを突き出した。

ガンダムを捉えるには、ガンダムは傷つきすぎていた。イクシードの蹴りを、インパルスガンダムは軽やかにかわすと左腕のビーム・サーベルをしならせた。

光の剣がイクシードのわき腹へと食い込む。フェイズシフト・アーマーを構成するミノフスキー粒子がビームの熱量を吸収し、それを光として目映い輝きを放出する。そして、フェイズシフト・アーマーがまかないきれない熱量がチタン合金製の装甲を溶融していく。

まだコクピットに達していないにも関わらず、スティングの体はビームに近い方から立ち上る白煙に包まれつつあった。

「光を、返せ……」

まるで少年の心を象徴するみたいに傷だらけの姿をしていた。両手を失い、顔の半分は焼けている。

それでもイクシードは戦うことをやめようとはしなかった。メテオ・ブレイカーを最後の最後まで守り抜こうとした。

インパルスのビーム・サーベルがイクシードガンダムの体を横に分けた時、ヒメノカリスは声にならない叫び声を上げた。

ヒメノカリスは普段感情の機微に乏しい。それは父として愛するエインセル・ハンター以外の人物に興味や関心を示せないというだけであって、無感情であるということを意味しない。

この時ヒメノカリスが示した反応は明らかに激昂であり、その青い瞳には込められた思いは怒りに他ならない。

斬るのではなく叩きつける。それほどの勢いでフォイエリヒのサーベルは振り下ろされる。最強の機体の名を欲しいままにしたフォイエリヒのサーベルはインパルスのサーベルをへし折ると、そのまま左半身を焼き払う。腕が砕けフォース・シルエットのウイングが消し飛び、不躾な乱入者は姉と弟の間から弾き飛ばされる。

ヒメノカリスの目の前には、無事な場所など残されていない傷だらけのイクシードの体があった。

「スティング……」

こんなにも近い距離なのに、通信は繋がらない。ミノフスキー粒子による電波障害であるはずがなかった。

それでも諦めきれない思いがフォイエリヒに手を伸ばさせる。イクシードを取り戻そうと手を伸ばした。

その腕に、一筋のビームが突き立てられた。半身を破壊されたインパルスがビーム・ライフルを向けていた。

フォイエリヒガンダムの装甲はビームを弾く。しかし、フレームはその限りではない。肘関節に正確に撃ち込まれたビームはフォイエリヒの腕を引きちぎる。

弟を掴む手を失い、その機会さえ永遠に消失しようとしていた。

第3のメテオ・ブレイカーがようやくその役割を果たそうとしていた。予定深度で炸裂し、その力は2機目のメテオ・ブレイカーによって傷ついていたフィンブルを一気に崩壊へと導く。

フィンブルという盾を失い、高熱を帯びた大気が一気にあたりに吹き荒れる。モニターが赤く染まり、大気の圧力は機体の自由をたやすく奪った。

ヒメノカリスが見つめる先で、イクシードの体は遠く、遠く離れていった。

「スティング……！」

今のヒメノカリスには、弟のために伸ばす手さえ残されてはいなかった。

戦場において戦艦はもはや戦力に数えられることはない。特に、モビル・スーツがその真価を発揮するような戦場ではなおさらである。

ダーレス級ＭＳ運用母艦のブリッジでは渋い顔をしたイアン・リー艦長がクルーたちの視線を集めていた。誰もが口惜しそうな顔をしている。

今まさに小惑星が地球へと落ちようとしている光景を前に、何もできないことが歯がゆくて仕方がないのだろう。それはイアンとて同じである。

だが、同時に皆が知っている。皆が知っていることを、敢えて口にすることもまた、艦長としての務めである。

「ダーレス級に大気圏突入能力はない。残念だが撤退せざるを得ない」

わかりきっていたことを、しかし渋々と受け入れたクルーたちが視線を前に戻す。

イアンは軍帽を深く被りなおした。たとえ誰も見てはいないとは言え、この艦長席の上で不安げな表情を見せることはできない。ガーティ・ルーに搭載されていた各機ガンダムはそのどれ１つとして帰還してはいなかった。

「ヒメノカリス大尉、どうかご無事で」

誰にも聞こえぬほどの声で、イアンは地球へと落ちていく赤い塊の群を見送った。

損傷の激しいインテンセティガンダムを庇うようにモビル・アーマー形態に姿を変えたディーヴィエイトガンダムの背中に乗っていた。赤熱する大気をディーヴィエイトのフェイズシフト・アーマーが光に変えることで受け止め、また、かき分けることでインテンセティを守る。

「アウル？」

「俺は大丈夫だ……。それより、姉ちゃんやスティングは？」

「わからない……」

「そうか……」

寄り添う2機は、それでもこれ以上の会話を交わすゆとりもなくゆっくりと地球へと降りていく。

機動力の要であるフォース・シルエットには深刻な被害が及んでいる。加えて機体そのものの損傷が激しく、シンの乗るインパルスは燃える大気を纏いながら降りるのではなく落ちていく。

「くそ、メイン・スラスターもアポジ・モーターもやられてる！」

戦闘中も意識はあった。しかし目の前で起きていることを現実と、夢ではないという確信を持てぬまま、いつの間にか敵のガンダムを

撃墜していた。気づいてみる――これもおかしな表現だが――と突然自分が如何に危機的状況におかれているのかが鮮明となった。

推進力を担う大半の機器が破損するなどして使用できなくなっている。このまま減速なしで大気圏に突入すれば燃え尽きる可能性があるとアラームが警告を発している。

発しているだけだ。何かしてくれるわけではない。

幸い、コア・スプレンダー本体は無事であるらしい。燃料も残っていれば、大気圏内での飛行も想定した造りとなっている。問題はフェイズシフト・アーマーを持たないコア・スプレンダーがこの高熱に耐えることができるのかと言うことである。

だが、このままでも高熱に焼かれるか、でなければ地表に激突してバラバラになるだけだ。シンは覚悟を決める必要があった。ドッキング解除用のレバーを握り、決意を再確認するために深呼吸をする。

レバーを引こうと深呼吸をした時、突然通信が繋がった。

「インパルスのパイロット、ドッキングを解くなです！」

「女の子……？」

明らかに聞こえたのは女性、それも若い少女の声であった。シン自身、まだ16という年齢で戦場に出ている身だが、やはり子どもの声が聞こえたということには違和感を禁じ得ない。

モニターに、インパルスのすぐ前にどこからともかくモビル・ス

ーツが飛来している姿があった。

インパルスと同じガンダムの顔をしている。青と白を基調とした落ち着いた色合いの機体で、印象は「自由と正義の名の下に」で主役のアスラン・ザラが搭乗していたＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａフリーダムガンダムに似ている。前の前の機体もフリーダムガンダムと同じように剣のように鋭い翼を何対も持っていた。

「聞こえるか？　幸いそのインパルスはフェイズシフト・アーマーが作動している。こちらで支えるからこのまま十分に減速がすむまでこのままにしておいた方が得策だ」

今度聞こえてきたのは凛とした雰囲気を持つ若い男の声。複座式のモビル・スーツは大変珍しい。そうなると、先程聞こえてきた少女の声は一体何だったのだろう。

今は返事をする方が先である。

「り、了解です」

つい敬礼をしてしまった。なかなか馴染まないと思いきや、慌てた時にはついこの動作をしてしまう。軍学校で培った経験は一一半年とちょっとだったとは言え一一どうやら無駄ではなかったらしい。

「少し暑くなると思うが、我慢してくれ」

翼のガンダムがインパルスを後ろから抱えるように保持してくれたことで、温度上昇が許容範囲内に落ち着き始めた。パイロットの言葉通りフェイズシフト・アーマーが熱を吸収してくれているとは言え、熱がコクピットの温度を上げていた。

まるで、地球を苛むことに荷担してしまったシンのことを苛んでいるように、大気は高熱をインパルスへと浴びせ続けた。

フィンブルは大小９つの破片となって地球へと降り注いだ。最も大きなものは１機目のメテオ・ブレイカーによって破砕されたものであり、赤道同盟の都市、上海を直撃し甚大な被害をもたらした。

２機目、３機目によって砕かれたフィンブルは８つに分裂。さらに細かい破片は大気との断熱圧縮によって燃え尽きた。

結果として想定されていたほどの被害にはならなかったとは言え、破片は大平洋西岸からインド洋にかけての広い地域に落着。４つの国と地域に渡って多大な被害をもたらせた。

ユーラシア連邦、赤道同盟、東アジア共和国。そしてオーブ。

オーブを除いてどれも皆反プラントを政策に掲げている国である。そしてオーブもまた、中立とは言えその立場は反プラントの急先鋒大西洋連邦に近い。

プラントに理解を示す国が被害を受けなかったことは、確率的に不自然ではない――プラント寄りとされている国は全１１カ国中２カ国しかない――とは言え、誰もに暗い予想を強いた。

ザフト軍が露骨なほどの妨害工作を行ったという事実は地球の反プラント感情をさらに悪化させるという結果を招いた。

プラントとの関係は悪化の一途をたどり、誰もがフィンブル落着ですべてが終わったと考えてはいない。

フィンブル。世界を滅ぼす長い冬は、その名の通り風の冬を終え、そして人と人とが殺し合う剣の冬を迎えようとしていた。

最愛なる魔王さま。あなたはとても誠実なお方です。誰かを欺こうとするおつもりがないからです。嘘しか言わぬ者のようにあなたは誠実です。誠しか述べない者のようにあなたさまは誠実です。どちらも人を欺くことはできません。

だからあなたは魔王です。ご自身の悪意と力をを偽ろうとされないから。

だからあなたさまは愛されます。時には殺してしまいたいほどに。

次回、ガンダム　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「最愛なる魔王さま」

自らを狩りたてる者。それが、魔王が自らに定めた名。

第8話「最愛なる魔王さま」

赤道同盟、旧ベトナム地区ソンミ市。

フィンブルの落着によってもたらされた被害が最も大きな場所の1つである。元々大きな街ではなかったが、そのほぼ中央に欠片の1つが落下、そのため高層ビルが数基に渡ってなぎ倒され判明した死者だけで5000、行方不明者はその数倍に達するものと予測されている。

瓦礫の山の中、中腹で胴裂きにされたビルの亡骸が冷たい雨に打たれていた。雨粒は瓦礫を濡らし、人の死を嘆く涙のように滴となって落ちる。

人々は郊外に張られたいくつもの簡易テントの下で雨をしのいでいた。寒さに震える者、傷の痛みを訴える者が時折散見されるだけで、多くの人は小さく座り、狭いテントの中で肩を寄せ合っている。

その多くが必死に何も考えまいとしていた。フィンブルが、小惑星の欠片が落下してきてからまだ半日と立っていない。

空を切り取って落ちてくる小惑星の塊がソンミ市最大の高層ビルを貫通して、街をえぐりとった。ちょうど横腹を喰い取られたように変わり果てたビルはまもなく倒壊。大量の土煙と瓦礫をまき散らしながら街を破壊した。

この光景を誰もが思い出さないよう努めていたのである。

立ち上がれるはずなどない。顔を上げることができるほどの余裕

もない。

そんな中にあって、その声は風のように人々の間を吹き抜けた。

「痛くなったらすぐに言ってください。包帯を取り替えましょう」

それは青年であった。丁寧な手つきで幼い少女の手に包帯を巻いている。身を包む純白のスーツは袖口が血に汚れ、背中は水に塗れていた。高級スーツを汚すことを厭わないほど、この青年が多くのテントを周り、怪我人の応急手当に当たっていたことを物語る。

「うん、ありがとう、お兄ちゃん」

少女の屈託のない微笑みに、青年は微笑み返す。

雲に遮られたわずかな光にさえ、その黄金の髪は豊かな光沢を放つ。その肌は透き通るような白であり、瞳は澄んだ青。その微笑みは描かれた絵画のように完成されていた。

周りに座っている人々はまるで心奪われたように青年の行動に注目せざるを得ない。青年は少女の額を優しく撫でると立ち上がり、雨を構うことなく歩き出す。その様子に、人々の視線は引きずられ一斉に動く。それでも少女だけは視線を落とし、青年が巻いてくれた包帯に何か特別な意味でもあるかのように愛おしげに撫でている。

「いい人に治してもらえてよかったね」

すぐ隣にすわる女性は、恐らく少女の母親であろう。本人もまた頬に血の跡を残しながらも少女が少しでも元気を取り戻した様子に安堵しているようである。

「天使さんて、もしかしたらお兄さんみたいな人なのかな」

そこは群衆に埋め尽くされていた。屋外の広場である。格式高い建物に囲まれたその場所は、まさに隙間が見えないほどの人々ーその多くが若者であるーが、しかしざわめきの1つなく同じ方向を見ている。

ここはプラントの首都であるアプリリウス市。そして人々が見つめる先には、この国の王が控える。

高くなった会場。その上に演説台が置かれ、設置されたマイクの多さは王の言葉を余すことなく拾いあげんと待ち構えている。そして王は立つ。

ギルバート・デュランダル・プラント最高評議会議長が聴衆の目にその姿を現したのである。

物音1つない会場。しかし、それが冷めた空気を演出することは決してない。それどころか集まった若者たちの眼差しは瞬きさえ忘れ議長の一挙手一投足を見逃すことはない。

デュランダル議長は演説台に両手をついた。それは今すぐにでも飛び出してしまいそうな自身の体を抑えているかのように力強く、瞬く間に聴衆の歓心を掴み取る。

「小惑星落着は悲劇だった」

議長の声が広く深く染み渡る。

「しかし敢えて言おう。その悲劇はナチュラルの愚策によって引き起こされたものであると。我々の平和への切なる願いを、彼らはユニウス・セブンの大地で、たった1発の核によって奪い去った」

手振りを交え抑揚豊かに、そして、その声は耳に心地よい。

「その時我らは知った。ナチュラルはコーディネーターを心の奥底では妬み、そして嫌っているのだと！　よって私はナチュラルの進行を許さなかった、許すことができなかった。これ以上、諸君らに血のバレンタイン以上の悲劇を目の当たりになどして欲しくなかったからだ」

途切れる言葉。ギルバート議長はさも聴衆の1人1人と視線を合わせるように首を回す。

「信じよと言うのか？　委ねよと言うのか？　かつて我らを縛り、命さえ呵責なく奪う者どもに何を任せることができるものか！」

机を叩く力強い音が響き、議長のお言葉は次第に熱を帯び始める。

「だから私は武器の使用を許した。結果として小惑星の落着という悲劇が起きようとも、私は兵に死を強要することはできない！　我々は忘れない。ナチュラルの蛮行と血のバレンタインの悲劇を！」

ざわめきさえ起こることのない聴衆は、意志の統一が果たされているにも等しい。すべてが議長の言葉に耳を傾け、自らの正当性を、相手の非を、議長の正しさを確認する。

「諸君らの平和への切なる願いは重々承知している。だが、今一度諸君らの力を貸して欲しい。私に奮い立つ勇気を与えてもらいたい。悪魔と戦うために！　そしてそれを打ち破るために！」

何故地球に小惑星が落ちなければならなかったのか。それは結果として妨害してしまったザフトの責任ではない。仲間にそのような手段を取らせてしまった敵のせいである。

ブルー・コスモスが血のバレンタインなど、２０万を超える同胞の命を奪わなければこんな悲劇は起こるはずもなかったのだ。

そして悲劇はまだ終わりを迎えていない。世界を蝕む毒素は取り除かれてなどいない。戦わなければならない。たとえ、どれほど平和を希求しようとも。

ギルバート・デュランダルの後ろにはラクス・クラインが、かつて平和を望みながらも散っていった穏健派代表シーゲル・クラインの愛娘の姿がある。デュランダルこそが平和の正当なる後継者であることが示される。

「気高きコーディネーターの英知と力は決して潰えてはならない。ブルー・コスモス、エインセル・ハンターの魔手に潰されてなどならない」

議長から贈られる言葉は未来を担う重責と誇り。

「心折れそうな時は思い出せ。血のバレンタインに散った同胞の慟哭を！」

それがすべての始まりであった。そして、それを引き起こしたの

はブルー・コスモスに他ならない。

「正義は我らとともにある」

コーディネーターを率いる最高評議会議長は高らかにその右手をかざした。

「勝利を我らに」

もはや限界であった。堰を切ったように人々の声が広場を埋め尽くす。ある者はギルバートの名を高らかに呼びながら、議長を真似てその右腕をかざした。プラント万歳。そんな人々の声が響き合う中、次第に人々の声が重なり、寄り合わせられていく。

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！！」

プラントの王は静かに、しかし誇らしげに群衆の熱意を全身で受け止めていた。

コーディネーターの、コーディネーターによる、コーディネーターの国は、コーディネーターのためだけに立つのである。

世界安全保障機構。かつて地球に見られた国際連合よりも北大西洋条約機構に近いこの組織は多数の国と地域によって構成される世

界規模の軍事同盟である。ユニウス・セブン休戦条約以後、プラントという共通の脅威に対抗すべく８つの国と地域によって結成されている。

本拠地を大西洋連邦旧アメリカ地区ニューヨークに構え、ここに集められた各国代表が今後の地球のあるべき姿を占うのである。

参加国の特徴として、無論であるがその大半を反プラントを明確にしている７カ国が名前を連ねている。唯一の例外はユニウス・セブン休戦条約の仲介にあたったスカンジナビア王国である。

よって、中立を表明しているオーブ首長国、また、比較的プラントへのシンパが多いとされる汎ムスリム同盟、アフリカ共同体の３カ国がこの椅子を並べてはいない。

各国が平等――たとえ形式的であったとしても――であることを示す円卓が置かれ、壁には参加各国の国旗とともに世界地図がかけられている。

ここが世界安全保障機構本部であり、並ぶ者の議題は決まりきっていることであった。

椅子から身を乗り出し熱弁を振るうのは赤道同盟代表ソル・リューネ・ランジュ。まだようやく３０になった程度の若者であり、赤道同盟内で確たる影響力を有するロームフェラー・グループの御曹司である。着こなすスーツと短くそろえられた髪は上品さを印象づけるが、それは同時にソル代表の若さを強調してもいた。

エイプリルフール・クライシスの際にはカオシュン国際空港を破壊され、この度のフィンブル落着では甚大な被害を受けた国らしく

その鼻息は荒い。ただそれは、まだ実績の伴わない若造が必死に声を荒げていると見えなくもない。

「今回のプラントの行動は許しがたい。このことに異論を挟む者などいないことだろう」

協力を拒んだばかりか、あからさまとさえ思える妨害工作さえ行った。その結果被害の桁が跳ね上がってしまったことを言っている。

「東アジア共和国をはじめ、オーブ首長国、ユーラシア連邦、我が赤道同盟を中心として甚大な被害が生じている。死者行方不明者合わせて１００万を超える未曾有、この言葉は聞き飽きたたかもしれないが、それほどの被害が生じている」

エイプリルフール・クライシスでは約１０億の人命が、ザフトが使用しようとしたガンマ線照射装置ジェネシスは試算では地球全土の生命の９割が死滅するとされている。

赤道同盟代表の主張に一切の誇張はなく、反対意見を述べる国はない。もとより、反プラントを謳う国の集まりであるのだから。

「所詮プラントのコーディネーターどもは地球のことなど何とも思っていないのだ。もはや残された道は一つしかない。戦争だ！」

しかし、いざソル代表が戦争という言葉を口にした途端、各国の反応は分かれた。フィンブルによる被害の大きい国は難色を示し、かねてからプラントとの戦争を主導してきた大西洋連邦、ユーラシア連邦の２カ国が意欲的である。

赤道同盟ほどの勢いはなく、どの国も立ち上がろうとはしない。

ソル代表のみが取り残されたように起立していた。

続いて発言した国は東アジア共和国である。フィンブル落着の被害が大きくはないが、決して国力潤沢とは言えない国である。その発言は、どこか一歩身を引いたものであった。

ラリー・ウィリアムズ首相。完全に禿げ上がった頭が特徴的な形をしている初老の男性である。不機嫌そうに顔をしかめ、しかしそれが普段の表情であるらしい。聞こえてくる声は静かに抑揚に乏しいものであった。

「しかし、現在地球の国は程度の差はあれ被害を受けています。まずは被災地への救援と復興が肝要ではありませんか？」

「そうしている内に今度はプレア・ニコル・キャンセラーとやらでも落とされるかもしれませんな」

皮肉を言い放つのは南アメリカ合衆国代表、エドモンド・デュクロ。礼装が似合わないほど無骨な顔に、隠しきれない屈強の肉体を持つ。明らかに武人を思わせるこの中年男性は南アメリカ軍准将の肩書きをもつ軍人である。

現在の地球ではプレア・ニコルによる原子力発電を再開している。ニュートロン・ジャマーの影響から解放され、慢性的なエネルギー不足解決を目前にしたフィンブル落着である。

エドモンド将軍の言葉に、意見するものはおらず、将軍はいつも剛毅な笑みを絶やすことはない。

意見が意見を潰し合う。

赤道同盟のソルの代表はいつの間にか着席を果たしている。それをよいしきり直しと捉えたように、大西洋連邦が動く。

最大国家大西洋連邦からはいくら本部が置かれた国であるとは言え、ジョセフ・コープランド大統領が参加していた。対プラントへの力の入れようが伝わるというものである。

コープランド大統領は、フィンブル落着の危機を告げた時と同様、どこか凡庸としながらもまるで動じることのない態度で会議の様子を見守っていた。

「どう対処するにしろ、プラントは地球にとって脅威に他ならない。それだけは忘れてはなりません」

誰もが理解した。これは釘をさしているのだと。プラントへの抵抗の構えを崩すことは許さない。この静かな恫喝は、発言の少ない厭戦派の国々の動揺を招いた。

しかし、必要以上に威嚇することはない。それが、ジョセフ大統領のやり方である。表情を変えぬまま、しかし攻撃の手は緩まない。

世界地図を背にした場所に座る男がいた。それは、この男が国を代表している訳ではないことを意味している。色素の薄い髪と肌。ベージュ色をしたスーツが男の細面と相まって紳士的ながらひ弱な印象を演出している。

コープランドはその男へと声を発した。

「ブルー・コスモスとしては、本件をどうお考えですか？」

現ブルー・コスモス代表、ロード・ジブリールへと。

かつてブルー・コスモスには3人の代表が立っていた。しかし、ムウ・ラ・フラガがジェネシスと引き替えに命を落とし、ラウ・ル・クルーゼは体調不良を理由に代表職を退いた。また、最後の1人であるエインセル・ハンターはアラスカ基地における味方の犠牲を省みない作戦の責任者――ユニウス・セブン休戦条約によって戦犯として扱われてはいない――として自ら代表を退いた。

自らモビル・スーツを駆り戦場に出向く前任者に比べたなら、ロード・ジブリールは物足りない指導者として受け入れられている。

その下馬評正しく、ロード代表はネクタイを直す、そんなありふれた動作から話を始める。

「休戦条約からわずか3年。現在でもまだ宇宙戦力は十分とは言えません。復興をしつつ、プラントの様子に目を光らせておくべきでしょう」

この言葉は正しい。ジェネシスの2度の照射によって宇宙軍は壊滅的な被害を受け、月面のプトレマイオス基地は破壊された。復興にも時間と予算をとられたため軍の再編は必ずしも十分ではない。フィンブル落着に対して十分に宇宙軍が活躍できなかった理由の1つはその絶対数の不足である。

冷静で、正しく、しかしどこか物足りない。

武闘派で知られる南アメリカ合衆国代表エドモンド将軍は大仰なほどに嘆いてみせた。叩かれた机が大きな音を立てる。

「何と弱気な。英雄エインセル・ハンター殿が代表を務めていた折りには、かような発言が聞かれることなどなかった！」

文民であるロードにエインセルほどの覇気を期待することはできない。しかしロードとて世界的な思想団体ブルー・コスモスの代表を務める男である。威圧できぬということが、だがたやすく折れるということではない。

「ブルー・コスモスとは元来ＮＧＯにすぎません。私としては武闘派としてではない、正規の思想団体であるブルー・コスモスのあり方の周知を望んでいるのです」

ロード・ジブリール代表とエドモンド・将軍の争いは、角を生やした羊と大熊の戦いにも似ている。

確かに先代の3者が代表を兼任しているラタトスク社の資金面、人材面でも支援によってブルー・コスモスが影響力を拡大していった経緯は否定することはできない。

同時にブルー・コスモスは元々遺伝子操作を否定する思想団体であり、武力集団として見られていることには違和感を覚えるメンバーも少なくはない。

ロードにとってエインセル・ハンターという偉大な先達は、時に厄介な存在である。ブルー・コスモスとエインセル・ハンターの印象が強く結びつきすぎて新しい一歩が踏み出しにくくなっているのである。無論、エドモンド将軍のようにエインセルの強力なカリスマ性の再臨を求める者が多いこともその一因である。

それぞれプラントを野放しにできないという事実認識において共通していようと、その意見は決して一枚岩ではない。国力、あるいはプラントへの敵対感情が大きい大西洋連邦、ユーラシア連邦、南アメリカ合衆国などは徹底抗戦を主張するが、フィンブル落着の被害激しい地区は割れている。赤道同盟などは抗戦派であるが、発言の少ない東アジア共和国は現状維持の弱腰の姿勢が透けて見える。そして、フィンブル被害が少なく、国力も弱い南アフリカ統一機構、大洋州連合の姿勢は東アジア共和国の立場に近い。

結果、元から中立であるスカンジナビア王国を除いた国々の反応は抗戦派と現状維持派とで4対3とほぼ半分に割れていた。

この状態は1国でも主張を変えればたやすく情勢が定まる危うい数である。では、スカンジナビア王国はどのような反応を示すのか。各国を代表する7名の視線が自然と円卓の一角へと集中していく。

それを待ちかまえていたように、スカンジナビア王国代表、マリア・リンデマン。事務次官であり、あまり外には知られていないが、スカンジナビア王国の王女でもあるこの人物は、その静かな物腰を保ったまま、その眼差しを瞬かせる。宗教上の理由からブルカを被り、その全身の内、瞳しか露わとされているところはない。しかしその視線だけでも、マリア・リンデマンがまだ若く、若くともこの場にいることのできる胆力を併せ持つ人物であることはうかがいしれる。

「皆様ご存知の通り、地球は大変な被害に見舞われました。ここで戦線を拡大することは地球にさらなる損害を与えかねません。こんな時こそ、私は引き締めが必要と考えます。ユニウス・セブン休戦条約は守られなければなりません」

単に条約の仲介国としてユニウス・セブン休戦条約の形骸化を警戒しているだけなのだろうか。事実、モビル・スーツの開発数などすでにその効力を疑問視する向きがある。

だが、単に自身の功績に拘泥しているだけにしては、マリアの眼差しは確かな光をたたえている。物怖じせず、どのような反論さえ受け入れる構えを見せていた。

この場の誰もが思い出さざるをえない。このマリア・リンデマンこそが、リンデマン・プランと呼ばれることがあるユニウス・セブン休戦条約の起草者であるということを。

ソンミ市上空の雨がやんだ。しかし、それは何ら救いを意味する比喩ではない。空が晴れ渡り、瓦礫の山を赤く染めている。昼に流された血が惨状をを染め上げていた。

下を向く人々は涙をこらえ、見上げる人々は不安におののいた。眼下には血に染まる瓦礫。上空にはヘリの一団が編隊を組んでいる。その一団もまた、夕日を浴びた赤。その色合い以上に、分厚い装甲を張り付けた明らかな軍用ヘリという出で立ちは、人々を不安がらせるに十分であった。

避難民の詰めかけるテント群の脇には救援用のヘリの白く、どこか優しげとも思える丸みを帯びたシルエットがあった。そのすぐ脇にエインセル・ハンターが手当をした少女が、その白い包帯が巻かれたままの手で強く隣に立つ母親の手を掴んでいた。

人を殺す兵器という存在に、少女をはじめとして誰もが恐怖さえ

覚えて見上げている。

そのヘリの中、場違いな椅子が置かれていた。木目さえも計算された見事な細工の施された椅子は、軍用どころかどのようなヘリにあっても不似合いなものであろう。椅子にはスーツ姿の男が腰掛け、すぐ脇には血のように赤いワインがグラスに注がれていた。

男はエインセル・ハンター。隣には妻である女性、メリオル・ピスティスを侍らせている。エインセルとは異なり、大西洋連邦の軍服を身につけたメリオルは手元の資料を読み上げながらエインセルのすぐ側に立つ。秘書もかねるメリオルは、ただし単なる秘書以上の視線を、時折夫であるエインセルへと向けている。

「物資も医薬品も足りていません。この度の支援で届けた物資も、長くは保ちません……」

メリオルは眼鏡の奥で、それでもわかるほどに表情を曇らせた。エインセルが穏やかな表情を崩さないことと対照的に。

「香港空港の輸送機を使用してください、メリオル」

「しかし、それでは防衛力に問題が……」

「構いません。今は、1人でも多くの命を救うことが先決です。メリオル」

ヘリの駆動音が響く。だが、メリオルの声が聞こえなかったのはそのためではない。この2人の関係なのあ。エインセルは常に正しく、メリオルはそれにつき従う。

そこには、1人でも多くの人を救いたいというエインセルの切なる願いが込められている。

エインセルが構わないと言った以上、メリオルもそれに構うことをやめた。資料のページをめくり、話題は次へと移っていた。

「各隊攻撃準備、整ったとのことです。ザフトの降下部隊を捕捉したと」

「では攻撃を始めてください。今は、一滴でも多くの血が見たい」

そう、エインセルはワインを口に含んだ。

血の色をした液体が、彫像のように美しい男の喉を潤す。人が夢想した夜の貴族が夜闇を待ちかまえているようにも錯覚させられる。

避難民のためにいち早く駆けつけた天使の姿はそこになく、魔王と呼ばれ恐れられた男の姿がそこにはあった。魔王が飲み干した美酒は、いつだとて血の香りが漂っている。

ここはどこなのか誰も知らない。

不気味なほどの静謐さが空間を占有し、金属の板が張り付けられた壁と床は時折冷たく鳴った。モビル・スーツが左右に3機、合計6機たたずむほどの広さを持ちながら、居並ぶ人々は誰1人として声を発しようとしない。

ここは格納庫であるということは要として知れた。

機体はＺＧＭＦ－２３Ｓセイバーガンダム。それですべて統一されている。

何より赤い機体である。バック・パックには長大な銃身が１対、さも折り畳まれた翼であるかのように取り付けられ、地球軍のＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダム同様の可変機である。

仮にディーヴィエイトを猛禽と表現するなら、セイバーは禿鷲。死肉を求める赤い禿鷲であった。

格納庫へと並ぶ人々とセイバーガンダムへと、奥から突然声が投げかけられた。高くなったキャット・ウォークの上にザフトの軍服を着た軍人が右手を高く上げ、その声を張り上げていた。

「我々は危険な降下をくぐり抜け、今こうして敵の奥深くに潜むことに成功した！　これはまさに運命と言わざるを得ない。世界は我々による変革を期待しているのだ！」

ここは地球である。誰も知らぬ海の中なのだ。

ザフト軍はフィンブル落着の混乱に乗じる形で、多数の部隊を地球へと降下させた。ある者はアフリカ共同体の砂漠地帯に降下し、またある部隊は大量の物資を東アジア共和国の友軍へと届けた。そして、この部隊はボズゴロフ級潜水艦を直接海へと降下させ、そのまま戦力として戦うことが期待されている。

フィンブルの落着はまさに好機であったのだ。フィンブル迎撃に地球軍軌道艦隊の多くは出向かざるを得ず混乱し網に穴が開いた。その隙間を降下した部隊がいることに地球側が気づくのはいつにな

ることだろうか。多くはフィンブルの破片として片づけられてしまうに違いない。

降下のために必要な敵部隊の部隊の排除と攪乱をフィンブルは同時にしてくれたのである。

これを運命と言わず何とすべきか。

演説する男は声が枯れんばかりの力を腹に込める。

「デュランダル閣下は言われた。正義は我らにあるのだと！　我らが立たねばならん！　未来を担う我らコーディネーターこそが唯一世界に正しき未来をもたらすことができるのだ」

そこにギルバート・デュランダル議長ほどの熱狂は感じられない。しかし、演説者が高らかに決まり文句を口にした途端、格納庫は興奮の坩堝に投げ落とされた。

「勝利を我らに」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！」

初めは誰かが同じ文句を続けただけであった。しかし次々と声が続き、やがて大きな波となってこの空間を支配する。自らの意志と力を示すため、誰もが右腕を高く掲げ、仲間と同じ志を共有することを確かめ合う。

静寂とは、まったく音のないことではなく、数少ない音しか聞こ

えないことであるのとするならば、ここは静寂に包まれている。ただ己の正義と力を賛美する声しか聞こえてこないのだから。

その静寂が、突如として破られた。

格納庫全体を大きな揺れが襲う。手を掲げ立ち尽くしていた人々が倒れるほどであり、演説者はキャット・ウォークの手すりに掴まり、耐えなければならなかった。

「何事だ!?」

「敵襲です!」

どこからともなく聞こえてきた報告を確からしめるように、格納庫の天井が裂け、膨大な水が文字通り堰を切ったように流れ込み始めた。

水が人々を、その声ごと押し流す。中には気丈にもセイバーガンダムを目指し、コクピット・ハッチ備え付けのロープにしがみつくようにして機体へと乗り込む赤いノーマル・スーツのパイロットの姿もあった。

ハッチの閉鎖。システムの立ち上げ。暗いコクピット内に明かりが灯り、モニターは床一面がすでに水没してしまった格納庫の様子を捉える。その中には溺れまいと貨物に必死にしがみつく整備士や、仲間を助けようと敢えて水の中に飛ぶ込むパイロットの姿を確認できる。

だが、確認などしてはならなかった。

一際大きく水が格納庫へと流れ込む。その水は輝く眼を持っていた。深海の暗い水が悪意を持って動き出したような深い青をした何かがそこにはいる。そのことに気づいた瞬間、モニターが割れた。モニターばかりではない。ハッチも、装甲も、それからモニターが砕かれ、何かがパイロットを通り抜けるとセイバーガンダムを串刺しにする。

その光景を、周りのザフト兵は目撃していた。格納庫に突如現れたガンダム――GAT-252インテンセティガンダム――がその全身を青く染めた体で三叉戟を突きだし、セイバーを貫いた。

突然で、そして致命的。そんな凄惨な光景に人々は水に弄ばれている現状さえ忘れ、目を見開いていた。

表情のないガンダムの顔が、しかし血に酔ったような残酷な笑みを浮かべたように見えた。

インテンセティガンダムは背中の甲殻類を思わせるバック・パックを被ることもなく、ただ槍だけで殺すことを決めたようだ。セイバーの腹部から槍を引き抜くと、無造作に隣のセイバーの胸に突き立て、そのまま下へと撫で斬りにする。臓物でもまき散らすかのように内部部品がすでにガンダムの膝にまで溜まった水へと落ちた。

ガンダムとて兵器にすぎない。パイロットのいない兵器を破壊することほどたやすいものはない。そして、頼みの綱のパイロットたちは今水にまみれ、生き抜くことだけで精一杯であった。

演説者は壁に備え付けられている通信機へと手を伸ばす。すでに水はキャット・ウォークの高さにまで達しようとしていた。

「ブリッジ、何をしている！」

しかし、通じているはずの通信機から返事が来ることはない。最悪の予感が、演説者の手から力を奪い、通信機が床に落ちるとともに水音をたてた。すでに水が乗り越えてきていた。

「私の部隊が……、馬鹿な、そんな馬鹿な……」

この場所から、先程まで精兵たちが居並んでいた精悍なる光景を目の当たりにできた。

しかし今はどうだ。水が兵たちを押し流し、全身を青く染めたガンダムが腰まで水に浸かりながらもなお水は天井から押し寄せている。

インテンセティガンダムがバック・パックで頭部を覆い隠す。怪物のように大きな頭部のちょうど口に当たる部分にビームの発射口があった。そこが熱を帯びている様子に、演説者は床に溜まった水の中へと腰を落とした。

しかしその目が恐れているのはビームそのものではない。バック・パックにアームで繋がれた2つシールド、その表面に描かれた紋章であった。

1輪の青い薔薇が描かれた紋章が見えた。いまだに各国に対して強い発言力を持つブルー・コスモスが軍部に対して認めさせた特設部隊が存在する。それはすべてのパイロットに対してガンダムの使用が認められ、権限は正規部隊の1階級上に等しいとされる。何より軍上層部ではなく、ブルー・コスモスの意向を受けて動くとされる私兵にも近い。

その名はファントム・ペイン。

コーディネーター排斥を謳うブルー・コスモスの力そのものである。

青い薔薇を掲げるインテンセティの放ったビームが、強烈な輝きでもって演説者を包み込んだ。

海面に落ちた残骸を分け進み、燃え立ち上る煙を道しるべに、大西洋連邦軍ステイガラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦は海上を進んでいた。

残骸とはＺＧＭＦ－１０００ヅダのものである。そのすべてが破壊され、総数は明らかではない。煙の柱の数から、両手でも数え切れぬほどであることは明らかである。

ステイガラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦はモビル・スーツ開発以前から使用されていた空母らしく、戦闘機の運用を意識した作りとなっていた。正面カタパルトの他、左右にサブ・カタパルトがＶ字に取り付けられている。そんな独特の形状を持つ甲板へと、モビル・スーツが次々と降り立つ。

薄い青をしたＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダム。モビル・スーツ形態のまま、足を甲板へと下ろす。高い機動力で知られるディーヴィエイトをゆっくりと眺めることができる機会などそうはない。その背中にあるウイングに青い薔薇の紋章が描かれていることを目にできるのは、合計４機ものディーヴィエイトが直立不動のま

ま甲板に弧を描くように並んでいなければそうそうゆっくりと眺めることなどできない。

そんな弧の中央部分へと降り立つのは、はっきりとした赤であった。青薔薇の紋章こそないものの、それはガンダムである。単なる雑兵に与えられるものではない。

ＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーン。それが撃墜したザフトの機体を鑑みたなら、それがファントム・ペインか否かなど大した違いには思われないことだろう。

飛行するコア・スプレンダーの中で、シン・アスカは様々な不安感を拭えないでいた。大気圏内を飛行すること自体初めてのことである。久しぶりに帰ってきた地球は、相変わらず広大な海という水たまりを持っていた。その上を、シン飛び続けている。

果たして母艦であるラヴクラフト級ミネルヴァと合流できるだろうか。降下したことは確認したはずで、その地点もわかっている。それでも不安感が拭えないのは、帰艦することそのものが初めてという不慣れの現れだろう。

そして、得体の知れない事実がひどくシンを困惑させていた。

フィンブル落着の際、シンは自分が自分でなくなるような、言葉にすることは難しいが、世界から現実感が損なわれる感覚を味わった。

少しでも被害を抑えるためにはメテオ・ブレイカーは壊してはな

らないことはわかっていた。それなのに、シンは自らの意志で引き金を引き、それを破壊したことを認識していた。

意識はあったのに現実味がない。夢で奇妙な事実をそのまま受け入れてしまえるみたいに、シンは意識してメテオ・ブレイカーと、ＧＡＴ－１３１イクシードガンダムの特殊な機体を破壊した。

あれは一体何だったのだろう。材料不足。考えても仕方がないとは思いながら、考えることをやめることができない。

無理に中断させてくれたのは、コア・スプレンダーのすぐ横を飛ぶ機体からの通信である。

「君の母艦はミネルヴァなのか？」

返事よりも先についい横を向く。

青い８枚の翼を持つガンダムが全身を輝かせながらコア・スプレンダーの速度にも楽に併行している。ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムのようなガンダムをシステムで真似ただけの機体とは違う、正真正銘のガンダムなのだろう。

眺めていて、返事をしていないことに気づかされた。慌てたように声が上擦る。

「は、はい……」

まさかここでアブディエルであること、ミネルヴァには単に乗り合わせているだけであることを教える必要もないだろう。

「じゃあレイの部隊だな。レイに会うのは久しぶりだ。やっぱり、どこかぶっきらぼうなままかな？」

「ええ。バレル隊長は、その、口数の少ない人ですから」

そんなに人となりを知っているわけではないが、嘘もついていない。

そうしていると、ミネルヴァが肉眼でも確認できるようになっていた。

よくよく考えてみると、ミネルヴァを外から眺めたのはこれが初めてではないだろうか。初めは気絶している内に収容された。初めての出撃の際は前ばかり見ていたから。

他のザフトの艦船にはない優美な姿をしていた。槍の穂先を思わせる細く長い印象で、艦体前部からは大きなウイングが広げられていた。赤が縁取り、基調となる色は灰色。大気圏内での使用も想定されるラヴクラフト級らしい、人がよく想像する空母のような甲板はなく、空力を考えた流線型の構造がシルエットを形作っている。

ミネルヴァは海上に浮かんで制止していた。

通信で、着艦許可と、その場所が告げられる。艦体脇のハッチ一一左右対称の構造で、両側にある一一の片方が開き、カタパルトが伸びる。

青いガンダムが道を譲るように体を引いたことを確認して、シンは速度を落としながらカタパルトを目指した。

コア・スプレンダーは垂直離着陸が可能である。うまく速度を落とせば、後は機体をそのままカタパルトの上に置くことができた。車輪を頼りに格納庫の内部へ進む。整備士の指示するとおりにコレ・スプレンダーを停止させると、ヘルメットを取るなり風防を開く。

格納庫の中とは言え、潮風を感じたのは久しぶりのことだ。その匂いの元を確かめるように首を回すと、格納庫は、ずいぶんと殺風景であった。バレル隊長のガンダムを含めて9機もあったのに、今は2機しか並んでいない。バレル隊長の機体と、そしてインパルスが1機。

一体何があったのか。考えがまとまる前に、聞き慣れた声がした。

「シン！」

格納庫の床を鳴らす足音の方を見ると、赤い制服を着た女性、ルナマリア・ホークが駆け寄って来ていた。

「ルナ！」

いくら気が急いても、まさかコクピットから飛び降りるわけにはいかない整備士がかけてくれた短い梯子を降りる必要があった。

床に足を着けると、重力というものを感じて膝が軽く折れた。まだ不慣れなだけだ。ルナマリアの方も無理に走ったせいか、バランスを崩し、シンが手を出して支えなければならないほどである。

だが、それ以外に傷らしい傷を受けた様子はない。あっさりとシンの助けを振り払うくらいである。

「無事だったんだな」

「うん。私はね。ただ、他の人たちはみんな戦死したって……」

出会ったばかりの仲間の死なら動じることはない。そんなことはなかった。突然の消失というものは、いつになっても慣れることができない。閑散とした格納庫が、もの悲しさに虚しさを含ませた。

ヴィーノ・デュプレとは出撃直前に揉めた間柄である。戻ってきたら地球は無事だ、残念だったなとでも皮肉の1つでもかけてみたかったが、それはもう永遠に無意味な計画になってしまった。

図らずもヴィーノの言っていた、もめ事の当事者が死ねばすべて解決するという理屈のままになってしまった。

「あいつも満足かな……」

もっとも、死ねば何もかも終わりだ。本当にヴィーノが満ち足りているとは考えていない。

小声でつぶやいたため、ルナマリアはシンの話題をつなごうとはしない。

「本当は地球に降下した時も地球群に襲撃されたんだけど、これはバレル隊長がやっつけてくれたから」

どれほどの数に襲われたのかは知らないが、バレル隊長の実力は本物だ。本当は自分1人だけで十分、周りの助力なんて必要としていないのではないだろうか。

そう考えると、あの当事でありながらどこか1歩引いてみているような態度の説明が、少しはできるような気がする。

当事者でありながら当事者でない。この言葉は思いの外シンの意識を捉えた。まるで、戦闘中に体験した現象そのままであったのだから。戦闘がもたらせた一種の興奮状態であると説明できなくもない。それならルナマリアは同じ体験をしてはいないはずである。

「それよりルナ……」

尋ねようとして、その声を足音が遮った。ルナマリアの軽快な音とは違う。７０ｔもの重さを持つ機体が歩いている。その音は人の声など容易にかき消してしまう。

翼持つ青いガンダムが、バレル隊長の白いガンダムの横へと並んだ。慣れた様子で、コクピット・ハッチはすぐに開かれる。見上げていると、赤いノーマル・スーツを来たパイロットがハッチ備え付けの乗降用ロープに足をかけ、ゆっくりと降りてきた。

そのノーマル・スーツの胸元には、当然のように翼を模した紋章があった。議長直属の正規兵の証である。

彼はフェイスだ。

そのことについ反発心が芽生えたが、それは押さえ込むことにした。

フェイスのパイロットはシンの方へと落ち着いた足取りで歩いてくる。

「君だな、無茶なインパルスのパイロットは」

通信機越しに聞いた時と同じく、覇気というものを感じさせるほどこえは力強い。自信に満ちてはっきりと聞こえてくる。

「あ、危ないところをありがとうございました。俺はシン・アスカって言います」

とりあえず敬礼をしておくことにした。

相手はまずヘルメットを脱ぐ。思っていたよりも若い。シンと背丈はさほど変わらず、若干高い程度。年齢も同様で、まだ２０歳にもなっていないのではないだろうか。とても2、3歳の違いとは思えないほど確かな眼差しをした人で、凛々しさだとか落ち着きだとか、シンが持ち合わせていないものをみんな持っているかのような人だった。

敬礼の仕方一つとっても堂に入っている。

「俺は……」

その人の声を、ルナマリアが突然遮った。

「アスラン！　アスラン・ザラさん、ですよね！？」

見ると、ミーハーな同僚は、これまで見たこともないほど目を輝かせていた。相手の人がついたじろいでしまうほどだ。

アスラン・ザラ。この言葉をシンは知っている。映画、「自由と正義の名の下に」の主人公のモデルとなった人物で、いまだに最前

線で活躍する歴戦の勇士。

この人がアスラン。ルナマリアを見ていたシンの視線は途端フェイスのパイロットに向けられた。

「ああ、俺はアスラン・ザラだ」

ルナマリアの熱狂ぶりに困った様子で、しかしその名乗る声はしっかりとした強さを持っていた。

この人がアスラン・ザラ。ユニウス・セブン休戦条約以前の戦いを誇り高く戦い抜いた、ザフトの英雄。

牙をむく子猫より、寝息をたてる獅子の方が恐ろしい。それよりももっと怖いものを知っていますか。それは起きている獅子です。牙をむき、爪を光らせる獅子です。人の歴史はいつも眠れる獅子とのお付き合いでした。大きな災いに見舞われ、そうでない時はそれでも、また獅子が目覚めてくると怯えているしかできない。

戦後という言葉などなく、すべての時が結局戦前でしかありませんでした。

戦いの後は戦いが、その戦いの後には戦いが。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「眠れる城」

オーブ。どれほど震えようと怯えようと、脅威はまだ目覚めてさえいません。

第9話「眠れる城」

「感激です。まさかアスランさんにお会いできるなんて！　あ、サイン、もらえませんか？　妹の分もお願いします」

そう、ルナマリア・ホークは一体どこで手に入れたのかわからないサイン色紙とサインペンをアスラン・ザラへと押しつけた。

その様子を、シン・アスカはどこか呆れたような様子で眺めていた。

格納庫から休憩室に移って以来これなのだ。小さな丸テーブルに3人で等間隔で座っているはずが、ルナマリアがアスランの方に妙に体を乗り出すため、シンは1人孤立させられた気分であった。

シンがジュースを啜る目の前で、ザフトで最も著名なパイロットは手慣れた手つきで2枚のサイン色紙にサインを書き上げた。その後握手に応じる様子など、サインを何度も手がけてきたことをうかがわせる。

「ありがとうございます、映画、もう30回以上見てます！」

書いてもらったサイン色紙を、それは大切そうに抱きしめるルナマリア。ミーハーだとは知っていたが、そんな人が実際アイドルを前にすればこんなものなのだろうか。

アスランは見ようによってはどうとでもとれる微笑みをしていた。言いようによっては、上品な笑い方だと言えなくもないが、愛想笑いとだとも思える、そんな笑みだ。

「それは嬉しいな。まあ、あの映画は少々極端な演出が多いところが難点だから、あんな活躍は期待しないでもらえるとありがたい」

「そ、そうなんですか？」

ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａフリーダムガンダムがその１０枚の翼を広げ、合計５門の重火器で迫りくる１０機を超える敵機を１度に撃墜する。これは「自由と正義の名の下に」の中でも屈指の名場面として知られている。もっとも、少しでも戦争に詳しい者なら、ロックオンされた敵機が回避もせずに直進してくるなど、噴飯ものと片づけてしまうようなシーンだ。

シン自身、映画のあのようなただ派手なだけの演出の仕方には首を傾げざるを得ない。

アスランもまた、そのことを認めていた。

「いくらガンダムでも、映画の中のように１度に１０機の敵機を撃墜なんてさすがにできないよ」

さて、ルナマリアは失望するだろうか。そんなことを考えながら、シンはジュースの缶を飲み干した。

「でも！　ジブラルタル基地で脱出する仲間を助けるために最後まで残って戦う場面、私感動しました」

今度はジブラルタルの黄昏とファンの間で言われる場面だ。大西洋連邦軍の大群に襲撃されたジブラルタル基地では仲間を逃がすために多くのザフト兵が地上に残り、そして全滅した。この場面はそ

れだけを専門に扱うファン・サイトがあるほど反響が大きかったらしい。

本当に、ファンと言うものは引き出しが多い。

「ああ、あの時は本当に死にかけたよ。それに、結局俺は誰も助けることができなかった」

アスランは乾いた笑みを見せた。ようやく、本当の表情を見せた。何となく、そんな気がする。

「失望させてしまったかな？　英雄なんて呼ばれてるけど、実際はこんなものだ。目の前でたくさんの人に死なれて、それでもたくさんの人に救われて、それでも戦い続けていたらいつの間にか英雄に祭り上げられていた」

映画でアスランを演じていた俳優よりも実物の方がよほど男前で、それに演技力もあるのではにだろうか。

アスランはいつの間にか仲間の死を悲しむ英雄の顔に戻っていた。憂いを帯びた顔も、時折見せる弱さは女心をくすぐるものらしいから。

「そんなことありません。私、尊敬します！」

「ありがとう」

何故か力強く敬礼するルナマリアに対して、アスランはさわやかな笑顔で返す。ルナマリアはとても嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、それでもトークは止まることがない。

「でも、キラ・ヤマトってひどい奴ですよね。何て言うか志がなくて、いろんな勢力をふらふらしちゃって。あいつさえいなかったらアスランさん、ムルタ・アズラエルに勝てたのに！」

今度はアスランのライバル・キャラ、キラ・ヤマトの話がしたいらしい。作中では自主性がなく、ちょっともっともらしい言葉をかけられれば考えを変えるような節操のない男として描かれている。モビル・スーツの腕こそ確かだったが。結局最後の最後まで状況に流されるばかりで主義や主張というものとは無縁であった。

ルナマリアが言っているのは、アスランと敵の総大将ムルタ・アズラエルとの戦いで、敵の甘言にほだされたキラが突如意味の分からない理屈を持ち出し戦闘に仲介したことにある。そのせいでアスランはムルタ・アズラエルを取り逃がしてしまった。

「もし見かけたら私がぎったんぎったんにしてみます！」

アスランはルナマリアの熱狂に荷担こそしないものの、理解を示して微笑んでいた。ファンというものの扱いが、本当にうまい。

ジュースは飲んでしまった。空き缶をテーブルの上において、つい手持ちぶたさになる。

「アスランさんは、いつもガンダムに乗ってるみたいな印象ありますけど、やっぱり始めからガンダムをもらえたんですか？」

量産機とはまるで無縁のエリートお坊っちゃんだったんじゃないのか。とまでは聞かないことにする。

「いや、始めはジンからだった。そもそも、ガンダムは実戦投入されて5年と経っていない新しい機体だ。元々は大西洋連邦軍が開発していたんだが、それを鹵獲して、それからずっと縁がある」

ＺＧＭＦ－１０１７ジン。これに映画でも、冒頭のわずか数分だけ今ではほとんど使われていない機体をアスランが使用していた場面がある。もっとも、それからは全部ガンダムで、要するに、そういうことであるらしい。

「映画、俺も見ました。ジャン・カローロ・マニアーニでしたっけ？　ガンダムの開発者の名前って？」

「それは映画の中でのお話だ。実際はゼフィランサス・ズール、女史が開発した。まあ、基本的にしていることは変わらない」

何故か妙なところでアスランは区切った。まるでゼフィランサス・ズールと呼び捨てにしようとして、しかしそれはおかしいと女史とつけなおしたみたいに。

「初めは大西洋連邦にいた癖にプラントでもガンダムを開発した。典型的な死の商人ですよね」

おまけにプレア・ニコルのデータを手土産に大西洋連邦に戻った。そのせいで地球軍は核の封印を解き、人類は滅亡1歩手前まで追い込まれた。そんなどうしようもない奴だ。

そんなことを考えるシンを、アスランはただただ見つめていた。笑うことをやめ、その視線は伽すまされた鋭さを持つ。

「ずいぶん挑発的な口振りだな、アスカ軍曹」

「あ、いや、すいません」

ほとんど反射的に謝罪してしまった。

シン自身、自覚と無自覚の間に、フェイスであるアスラン・ザラへの反感が顔を出していたらしい。

こちらが謝ったとみるや、アスランはすぐに表情を笑顔へと戻す。先程の雰囲気はすでに微塵もない。

「君も知っているとは思うが、ミネルヴァの任務はとてもゼフィランサスに縁の近いものだ。もしかするといつか出会う機会があるかもしれない。ゼフィランサスは、君が考えているほど悪い人じゃない。ただ周りの人すべてが彼女の力を求めて、彼女はそれから逃れる術を知らなかった。それだけなんだ」

ミネルヴァの任務など知っているはずがない。それでもアスランがシンたちが知っていて当然と判断しているのは、アブディエルとオナラブル・コーディネーターだと言うことを知らないからだ。

シンは努めてそれ以上考えないことにした。また、正規軍エリート・パイロットへの反感が芽生えるだけだからだ。極力発言しないようにしていると、放っておいてもルナマリアが引き継いでくれる。

「じゃあ、ジャンみたいに悪い奴じゃなくて、ってことですか？」

いまだにサインが書かれた色紙を大切そうに抱きしめているままで。

「映画化される際、複数の人物を1人の性質や行動として集めたから。ゼフィランサスの場合、ラタトスクやブルー・コスモスの幹部と混ぜ合わせられたことであんな守銭奴の嫌なおじさんにされたんだ」

映画では、キラを唆したのもジャン・カローロ・マニアーニだった。何故わざわざ女性を男性として登場させたのかわからないが、ジャンのモデルとなった人となると、どうしても意地の悪そうなおばさんくらいしか思い浮かばない。

だから、アスランのたとえ話には強い違和感を抱かざるを得なかった。

「だが実際は花のような人だよ。どれほど綺麗でも、摘み取られることにあらがう術を知らような」

「補給は望めない」

ラヴクラフト級ミネルヴァの艦長室の雰囲気は、レイ・ザ・バレルの端的な一言が象徴していた。

備え付けの机が置かれているだけで、他に調度品の類はない。せいぜい写真立てが飾られている程度の机には艦長であるタリア・グラディスがつき、その前、明らかにどこかから持ち込まれたようなパイプ椅子にレイ・ザ・バレル大尉は腰掛けていた。

どちらも特に表情を変えるようなことはせず、非常に事務的である。

タリア艦長も、かつてシンが初めてミネルヴァを訪れた時と同様、声音に抑揚をつけようとはしない。

「元々インパルスを操縦できるパイロットの数は十分ではないわ。それに、ザラ隊と合流することが決定しているから、不都合は起こらないでしょうね」

あのアスラン・ザラの部隊と合流する。現在のザフトにおいてそのことを不満と感じる者はいるはずもない。タリア艦長の声にわずかながら自信がにじんだ。

「当面、あの2人がミネルヴァの戦力として使うことになるわ。それとも、あの2人では不満？」

アブディエルとオナラブル・コーディネーターに偏見を示す正規市民は少なくない。それも無理のないこととは言え、同じ部隊に非正規の市民が含まれることを露骨に拒否する向きさえある。

「シン・アスカ軍曹の方は性能に劣るインパルスで地球軍のガンダムとの戦闘を乗り切っている。アリスの力があったとは言え、撃墜さえ果たした」

要するに戦力として不満を覚えてはいないということだ。レイは乏しい表情ながら、そこにわざわざアブディエルへの皮肉を見いだすことはできない。

「あなたには、移民への偏見はないようね」

「興味がない。俺はただ、サイサリスの願いが叶えられるならそれ

でいい」

ここにいながら、しかしどこか別の場所からここを眺めているような。レイはそんな独特の雰囲気を纏いながら、そして言葉通り移民というものへ関心を示すことはなかった。

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルン。

格納庫の中で、その姿は静かにたたずんでいた。ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａフリーダムガンダム、かつて英雄アスラン・ザラが駆った機械仕掛けの天使とよく似た姿をしたそれを、シンは一言も発することなく見上げていた。

ルナマリアはアスランを相手にいまだに映画の話に花を咲かせていることだろう。聴きたいことがあったが、機会はどうしても訪れなかった。

戦闘中に感じた違和感のことだ。自分が自分でなくなるような感覚は、極度の緊張状態に対するある種の脳の防衛反応であったのだろうか。それなら、２人以上の人が同時に体験しているとは考えにくい。そのことを、ルナマリアに確かめてみたかった。

思えば、シンのようなアブディエルがミネルヴァのような特殊部隊にいること自体、不思議なことなのかもしれない。

単に使い潰される駒で終わるはずが、本物のガンダムを２機も目にしている。それこそが不思議なこととすべきかもしれない。

ふと視線を下げて、ヤーデシュテルンの足下――とは言っても視線を人間にとってごく普通の高さに戻しただけだが――へと移した。

すると、そこには小さな少女が浮かんでいた。

しかし瞬きの間に消えてしまう。ほんの一瞬のことで、ろくに姿なんて確認できなかった。ただ、大きさが明らかに小さかった――せいぜい2、３０ｃｍだろう――ことと、足が地面にはついていなかったこと、そして、瞳が際だって赤いことくらいは確認できた。

確かに見たはずなのに、しかし今はもう姿が見えない。

「妖精……？」

とりあえず思いついた少女の正体を口にしながら、シンは瞬きを繰り返した。

大西洋連邦軍ステイガラー級ＭＳ運用強襲揚陸艦アケルナルの格納庫にて、声だけで明らかにお調子者であると感じさせる声が響いていた。この声の大きさも、推測を確からしめている。

「まさかあのフォイエリヒがこんな姿になっちまうなんてな」

「兵器なんだから壊れて当たり前でしょ」

男の声に、あっさりと返ってきたのは冷静な女性の声。

並ぶ１組の男女の前に黄金の巨人が横たえられていた。壁際に並

ぶ４機のＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムと、ＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンは格納庫中央の仲間を見守り、取り囲んでいるようである。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムは、傷だらけであった。両腕は損壊し、片足も破壊されている。芸術品とさえ捉えられた黄金の装甲は大気圏突入の際の高熱に爛れ、いびつに輝きが曇っていた。

かつて最強のモビル・スーツと呼ばれた機体のこの有様を、大げさに嘆いて見せたのは男の方である。

名はシャムス・コーザ。

自身の肌の色と近い薄いサングラスの奥に見える瞳はどこか軽薄そうな笑みをたたえている。珍しい黒い――通常は白である――軍服を着込み、肩には中尉の階級章。歳のほどはまだ２０歳を超えたばかりだろう。軽薄さと若さとがほどよく適合している。

「でもよ、何か憧れない？　扱いきれるのがたった１人の実質的な専用機って奴」

「少なくともあんたにはそんな機体、造ってもらえないと思うけど」

シャムスが何かを言う度に茶々を入れているのはミューディ・ホルクロフト。歳のほど、着ている軍服の色などシャムスと共通点が多い。その顔はどこか不機嫌に思えるほど視線が鋭いが、それは単に同僚の言葉に飽き始めているだけかもしれない。

「釣れないな。どうせ俺はネオ隊長の足下にも及ばないさ」

シャムスという男は何かとリアクションが大きい。お手上げといった様子で両手を胸の横で開いてから、その上ため息をつくほどである。

ミューディの方はそろそろ本気で相手にすることをやめたいと考えているようである。首を回し、何か逃げ道を探っている様子を見せた。そして、それは絶好のタイミングで転がってきた。

格納庫の固い床を踏む足音が聞こえていたのである。

それは男性である。シャムス、ミューディと同じ黒い軍服に、しかし肩の階級章は大尉であることを示している。何より、迂闊に表情を見せまいとするように、その口元は固く結ばれていた。シャムスのように表情豊かでもなく、しかしミューディのように不機嫌さを漂わせてもいない。

「スウェン。隊長たちは？」

ミューディの言葉に、言葉少なに、しかし必要な言葉を惜しむ様子はない。

「アーノルド副隊長の結婚相談だ」

スウェン・カル・バヤン。それが大尉の名であり、ネオ・ロアノーク少佐率いる部隊の平隊員のまとめ役である。

隊長のネオ・ロアノーク。まだ若干１９の最年少少佐であり、ガンダムラインルビーンのパイロットである。副隊長の名はアーノル

ド・ノイマン大尉。そろそろ３０になるこの隊の最年長であり、まじめな堅物として部下たちからは認識されている。

こんな２人の上司の姿を思い浮かべながら、シャムスは嘆息する。

「またか、あの２人は」

「アーノルド副隊長、結婚に本気で悩んでるみたいだから。何でも、恋人は１０歳も年下なんだって」

「犯罪だな。堅物に見える人ほど何とやらだな」

ミューディの言葉に、シャムスは相変わらずである。ただ、それをスウェンが拾い上げることはなく、寡黙な大尉は同僚に並ぶ形で横たわるフォイエリヒを見上げた。

「ところでスウェン、このフォイエリヒどう思う？」

「兵器は壊れるものだ。それ以外の感慨はない」

「おお、スウェン、お前もか」

やはり、シャムスは頭を抱え極端に嘆いてみせた。

物置にソファーを向かい合って並べて、応接間としての一応の形式だけは整えたような、そこはそんな雑然とした部屋であった。宇宙空母とは違い、絶えず重力の恩恵にあずかることができる洋上空母の床には様々なものが不規則に置かれている。

そんなことを、ソファーに対面して座る2人の男は気にした様子はない。2人とも黒い軍服を身につけ、若い方が少佐、もう1人は大尉の階級章を見せている。

若い男性、ネオ・ロアノークはくつろいだ様子でソファーに座っていた。サングラスをかけ、その眼差しを見通すことはできない。生真面目な青年のようでありながら、その態度はどこか自信に満ち、気弱という評価とは無縁である。一語一句はっきりと淀みない。

「アーノルド。僕は君の結婚を反対していない。それどころか応援したいくらいに考えてる。でも、君はなかなか踏み切れないでいるんだね」

「私は軍人です。それ以外でも、それ以上でもありません」

アーノルド・ノイマン大尉は反対に生真面目さが前面に現れていた。神経質なほどに切り揃えられた前髪から覗く顔は真剣そのものである。ネオは不真面目な表情ではないにしろ、副官よりは余裕が感じられる。

軍人である以上、危険な任務に就かざるを得ない。そんな自分が果たして家族を持ってもよいものだろうか。その悩みが、アーノルドの表情を険しくする。

ロアノーク隊で唯一既婚者であるネオは、それ故ひどく現実的に応えてみせた。

「だったら君は世界の災いすべてを調伏してから妻を迎えるつもりかい？」

そんなことはできるはずもない。たとえ世界一安全な職業があったとしても、不慮の事故というものは起こるものだ。

アーノルドは伏せがちであった顔をあげると、ネオのサングラスに隠された顔をうかがう。目は見えなくとも、その顔は微笑みかけているようであった。

「僕には君の思いは不安ではなくて覚悟に思えるよ。妻を守りたいというね」

「ネオ隊長は結婚して、何か変わったことはありましたか？」

「変わったつもりはないけど、でも、家族を守りたいという思いは強くなった。それだけは間違いないかな」

ネオ・ロアノークの結婚式にはアーノルド自身参列している。もう3年ほど前のことだが、それまでも、あれからも、ネオ隊長はよき夫であり続けようとしている。アーノルドはネオのようでありたいと感じながら、同時にそうなれるかどうかと不安を覚えていた。

結局はその狭間を行き来しているばかりで、結論はいつも先送りにしてしまう。今日も二の轍を踏むことになるらしい。古めかしい手動の扉が開く音がして、2人は揃って首を回す。

普段着ている衣装とは比べるべくもないほど質素な入院着を纏ったヒメノカリス・ホテルであった。大気圏突入の高熱にあてられ、乗機であったフォイエリヒはひどく損壊している。パイロットであるヒメノカリス自身に影響が出ないはずがなかった。

「ヒメノカリス、もう体調はいいのかい？」

長く――とは言ってもせいぜい1日程度のことだが――寝ていたヒメノカリスに、ネオは軽い調子で話しかける。

「いつまでも寝ていられない」

2つのソファーの内、ヒメノカリスが選んだのはネオの隣であった。ウェーヴがかかった状態でさえ床に届くほどに長い髪を今は1つに束ねている。そんな髪の束を抱えるようにして膝の上に置き、ヒメノカリスは腰掛けた。

隣にはネオ。向かいにはアーノルド。アーノルドは握手こそ求めはしなかったものの、それこそ10も年下の相手に慇懃な態度を崩そうとはしない。

「お会いするのは2度目になります。アーノルド・ノイマンと申します。現在はネオ隊長の副官を務めています」

「アイリスから話は聞いてる。ロリコンなんだって？」

思わず固まるアーノルド。ネオは笑いを隠そうとさえしない。

「恋人がちょっと若いだけだよ」

どう対応してよいものかわからないアーノルドに対して、ヒメノカリスはすでに興味を失っているようであった。特に誰を見るでもなく疑問を発する。

「私が寝てる間に何かあった？」

「フィンブルが地球に落ちて、太平洋西岸を中心にひどいことになったくらいかな。後は、世界安全保障機構の中にもプラントも本格的な戦闘を始めようとしている兆しがある」

答えたのはネオ。単なる大西洋連邦軍少佐が世界安全保障機構の会議の内幕を知っているはずがないが、そのことに言及するものは誰もいない。

戦争の兆しを見せているのは大西洋連邦、ユーラシア連邦、南アメリカ合衆国の3カ国に、やや後ろに下がって赤道同盟が続いている。

特に南アメリカ合衆国のエドモンド・デュクロ将軍は鷹派として知られている。

「アウルとステラは？」

「アウル君はスティング君がM．I．A扱いされていることに相当ショックを受けたみたいで部屋から出てこない。ステラ嬢は人見知りする子みたいだね。慣れない環境に戸惑っている様子だった。できるだけ早く会って上げた方がいい」

ヒメノカリスは瞬きをしてみせる。かすかな反応であったが、世界情勢を聞かされた時に比べれば、これでも大きな反応であると言えた。

「これからどこへ？」

「友軍と合流します。と、いきたいところですが、補給のため、1

度ヤラファス港に寄港する予定です」

3度目の質問に答えたのはアーノルド副隊長の方である。ヤラファス港という言葉に、この副隊長は妙な抑揚をつけ、ヒメノカリスが反応を示したのも同じ単語であった。

「ヤラファス港？」

知らないわけではない。ただ、ヒメノカリスとアーノルドにとって、この場所は単なる異国の港ではない。2人が初めて出会った場所であり、約4年前、大西洋連邦軍とザフト軍ガンダムとが激戦を繰り広げた場所であった。

その事件に、ヒメノカリスとアーノルドは居合わせた。

「はい。当面の目的地はオーブ首長国です」

サングラスの奥底でその眼を見せないネオ・ロアノーク隊長。しかし平静に構えるネオこそがヤラファスという言葉に最も強く反応を示すべきであるのかもしれない。

ネオ・ロアノーク少佐こそが、その時大西洋連邦のガンダムに搭乗していたパイロット当人であるのだから。

特に何か目的があったわけではなかった。ただ、久しぶりに地球の海が見たくなった、そんな何気ない気持ちで、シンは展望室を目指した。

観光地に見られるような上等なものではない。光景は硬質ガラス越しで、備え付けられた椅子は横一列に並ぶものが少し置かれている程度だ。保養用であったとしても、軍艦は軍艦としての機能が優先される。それは仕方がない。たとえ潮風を感じることができなくとも、それくらいは気にしないつもりで、シンは廊下を進む。

開放式の展望室を見渡せる場所についた時、シンはすでに先客がいることに気づいた。くすみのない金髪の後ろ姿。レイ・ザ・バレル隊長であることは一目でわかった。

「バレル隊長……」

つい言葉を発してしまった。首だけで振り向き、バレル隊長はシンのことに気づいた様子であった。もっとも、それで特に何かしてくることはない。首を前に戻し、風景に目を向けている。

ここにいるのは隊長とシンだけ。気まずさを覚えないではなかったが、ここまで来ておいて立ち去ることはできない。シンもまた、椅子に座ることにした。ただし、わざわざ隣合った席にする必要はない。席を2つほど離れた場所にとることにした。

目の前には晴れ渡った空と海が広がっている。プラントにいては絶対に見ることのできない巨大な水たまりは、昔と変わってはいなかった。

バレル隊長は何を見ているのだろう。偏見とは思うが、どちらかと言えば即物的で、感傷に浸ることなんてないように思える人だ。次の戦闘に備えて下見でもしているのだろうか。

つい隊長の様子を横目でうかがっていると、バレル隊長もこちら

に気づいた。何か話があるとでも思われたのだろうか。

「バレル隊長、次の寄港地、オーブに決まったって聞きました」

単に状況の確認をしただけだ。バレル隊長はシンの経歴を知ってはいないだろう。元々ミネルヴァにとってシンは非正規の乗員にすぎない。資料が届いているとも考えがたい。

単に寄港地というだけでいいのだ。

「そうだ。あの国は現在でも中立を表明している。これからどうなるかはわからないが、表だって拒否はしないだろう」

相変わらず感情を見せない声。そんな声故だろうか、単語を正確に聞き取ることはできてしまう。

シンが興味引かれたのは、ある何の変哲もない単語であった。

「これから？」

つい首を曲げてバレル隊長の方を見ると、横目とは言え、律儀に視線を合わせてくる。

「世界安全保障機構との合流が懸念されるということだ」

「オーブの理念は、一体どうなるんでしょうね？」

つい目をそらしたのは、何も気まずいからではない。口の端が歪んで、嘲笑を浮かべる時つい目をそらすことに癖がついてしまっただけの話だ。

オーブは中立を謳い、すべての勢力との軍事的関わりを拒絶するとともに侵略戦争を否定した。それを利敵行為と大西洋連邦軍に敵視され、侵略を受けることとなった。国を危険にさらし、民を犠牲にしてまで守りたかった理念を、ちょっと危なくなるとかなぐり捨てる。

ずいぶん立派な理想もあったものだ。どうせ捨てるなら、どうしてももっと早く捨てなかった。

「理想を語るのは力あるものの特権だ。弱者の戯言など誰も耳を貸すことはないのだからな」

嘲笑も忘れ、シンは思わずバレル隊長の顔を見た。普段通り、綺麗なくらいに無表情な顔で何も変わった様子はない。

アブディエルの戯れ言など、それこそ聞き流せばいいものを、それでもレイは応えた。現実主義的なところはいつもと変わらない。それでも、まるで世間話に応じるかのようにシンに応えた。

この人は一体何がしたかったのだろう。わからないまま、バレル隊長は立ち上がる。別段話が途切れたとか、そんなことではなくて、ただ風景に満足しただけではないだろうか。

今度こそ、シンのことなど気にした様子もなく歩きだそうとする。

そのはずであった。

「1つ言っておく」

ふいに立ち止まり、バレル隊長は座ったままのシンへ顔を向ける。

「俺のことはレイでいい」

ただ一言それだけ。シンの反応さえ待たずにまた歩きだしてしまった。この言葉の意図するものがわからず、つい反応が遅れてしまった。

「り、了解です、レイ隊長」

果たしてこれでよいのかもわからないまま、シンは立ち上がり、敬礼の姿勢をとった。

歩き去っていくレイ隊長の背中は、しかし何も語ることはない。

オーブ首長国。

太平洋西岸に位置する島国である。大小様々な島で構成されているが、その中で特に有名なものはヤラファス島とオノゴロ島である。

ヤラファス島は政治の中心であり、行政府もここにおかれている。

オノゴロ島は産業の中心である。かつての世界第3位の軍需産業モルゲンレーテ社の本社はこの島に置かれていた。

そして、この2島に共通することは、戦火に焼かれたという事実である。

ヤラファス島では港でモビル・スーツ同士の戦闘が行われ、街に甚大な被害をもたらせた。オノゴロ島は大西洋連邦軍侵攻の際、最重要拠点として最も多くの被害を出している。

オーブは自衛権を強行に主張するとともに、しかし集団的自衛権を否定した。そのため、他国と政治的結びつきに乏しいとともに経済的には強く結びついているというアンバランスな外交戦略を行っていた。

半官半民のモルゲンレーテ社はラタトクス社のガンダム開発に協力し、その技術を一部盗用していたことはすでに周知の事実である。侵略戦争の否定を謳いながら軍拡を続けるその姿勢に矛盾を覚える国家は少なくなく、そのことがオーブの社会的信用を低下させていた事実は否めない。

同時に、プラントとの戦争が泥沼化の様相を呈してくるにつれ、オーブの戦争への徹底した参加拒否は結果として成功しなかったとは言え、的外れなものではないのではないかという評価もされつつある。

C．E．71年に大西洋連邦軍の侵略を受け、現在の政権はウナト・エマ・セイラン代表が引き継いでいる。大西洋連邦の傀儡と名高いウナト代表は、しかし現実的な政策実行者でもあった。オーブの主権回復、及び戦後復興に尽力し、中立国にしては大西洋連邦よりとされているという事実を認めたとしても、形式的にはオーブは独立国としての地位を取り戻している。

ただし、その政策は一貫しているとは言い難い。

民意の存在である。

世界安全保障機構はまさに集団的自衛権を組織化、拡大化を狙ったものであり、オーブの理念にはそぐわないと感じる者は少なくはない。また、大西洋連邦によって侵略されたという事実が、オーブ国民の中に反感を植え付けたままである。

大西洋連邦への協力姿勢を見せたかと思えば、民意の反対にあい距離を置く。その次はまた協力姿勢を見せると言ったように、その政策は揺れ動いていることが現実である。

それ故、オーブは現在最も動向が注目されている国と言っても過言ではない。

民意の多くはオーブの理念の堅守よりも大西洋連邦への反感から世界安全保障機構への参加を拒む者が多い。それは言い換えれば、プラントへの危機感を大西洋連邦への反感が抑えている形であると言ってよい。

そんなオーブが仮に世界安全保障機構に参加するとすれば、それはプラントへの反感が何よりも優先された結果であり、オーブは間違いなく抗戦派に席を並べるであろうと多くの者が予測している。

現在、世界安全保障機構は加盟国８カ国中、抗戦派が４カ国、現状維持派が３カ国、中立であるスカンジナビア王国で構成されている。ここにオーブ首長国の１票が加わったとしたら、会議の流れは抗戦に一気に傾くことになるのである。

オーブ首長国。

この国は、今、世界の関心をその身に浴びていた。

「我々も世界安全保障機構に参与すべきであると私は考えます。今のオーブに自国を守るだけの戦力はありません！」

「大西洋連邦主導の組織に加わるなどいいように使われるだけだ。そもそも現在のオーブの窮状は大西洋連邦の侵攻が原因ではないか！」

長テーブルの置かれた会議室内に2人の男の怒号が響き合う。テーブルには他にも何名もの人の姿があったが、発言しているのは2人だけで、議論の様子を見守っているだけであった。

両者はテーブルをはさんで対面で立ち、周りの様子を気にすることもない。

「ジェネシスの発射未遂。フィンブルの落着。殴られたことよりも殺されかけた事実の方が許せるとでも？」

オーブ首長国の中には協力軍として大西洋連邦軍に同行し、ヤキン・ドゥーエ攻防戦に加わった者も少なからず存在している。そんなプラントの暴威を目の当たりにした民の意見を代表する議員は反プラントを主張して譲らない。

「国民の多くは大西洋連邦への不信感を拭えていない！」

反対に、オーブから出ることなく戦いの帰趨を見守っていた者たちはいまだプラントの脅威を現実のものと捉え切れていない。そして、その背後には親プラント派の勢力の暗躍が存在している。オー

ブの中にプラントに与する戦力は確かに存在しているのだ。

「だがプラントと同盟を結ぶことなどできはしない。結局オーブはこのままでは中立ではなく孤立させられてしまう！」

「そもそもジェネシスなど本当にあったのかね？　所詮大西洋連邦が主張しているだけではないか！　フィンブル落着にしてもそうだ。都合のいい部分だけ取り上げて自らを正義の国だと気取っているだけだ！」

「ではニュートロン・ジャマーはどうなる！？　たしかにオーブには大した実害が出なかった。しかしそれでは自分に被害さえ及ばなければ他で何が起ころうと構わないと言っているでしかない！」

「大西洋連邦は明らかにオーブの主権を侵害したのだぞ！　言葉を返すようだが、殺人犯とは駄目でも強盗となら手を組むことができるいわれがどこにある！」

この2人の交わす内容は、まさにオーブの、オーブ国民の悩みの縮図である。

長テーブルの先には男がどっしりとかまえて座っている。禿かかった頭に、しわのよった顔。ともすれば単なる中年男性に他ならないこの男こそがウナト・エマ・セイランである。比較的親大西洋連邦よりとされているウナト代表は、しかしどちらに汲みすることもない。ただ平然と構え、両者の首長に耳を傾けているだけであった。

新聞が翻る音がする。豪奢な執務室に、作りのしっかりとした机

が置かれている。いかにも年代ものを思わせるその机に、足が堂々と乗せられていた。

机と負けずとも劣らない椅子の背もたれを軋ませ、足を机に投げ出した人物が新聞を広げているのである。それは一見少年のようで、しかし目元の柔らかさは少女のもの。あまり手入れがされているとは考えにくいくすんだ金髪が男性的ではありながらも、それは間違いなく女性であった。

オーブ首長国先代代表、ウズミ・ナラ・アスハの娘、カガリ・ユラ・アスハである。

「フィンブル落着か。どうして私を行かせてくれなかったんだ、エピメディウム？」

新聞を畳み、無造作に机へと放り投げる。すると、カガリが室内の様子を確認できるほど視界が開ける。するとそこには、応接間特有の対面式に対置されたソファーに腰掛けた少女の姿があった。

左右非対称。そんな言葉の合う少女である。左右の瞳の色が青と赤で異なり、緑の髪は三つ編みにして、左の肩から前へと垂らしていた。ティー・カップを手に、その香りを楽しみながら悠然と紅茶を嗜んでいる。

「無茶言わないでもらいたいよ。そもそも君は戦うべき人じゃない」

「軍籍ならとったぞ」

「無理矢理ね。それに、それならそれで、もっと上官の言うことを聞いてもらいたいよ」

このエピメディウム・エコーはカガリにとって妹にあたる。もっとも、互いが互いにその出生の特殊さを知っているだけに、2人の間に姉妹の情が芽生えることはなく、単に父を同じくする友人のように接している。

カガリは背もたれに強く体を預けたまま、天井を仰ぎ見た。無論、足は机に置かれたままである。

「それよりエピメディウム、オーブはこれからどうするべきだと思う？」

「プラントのために働いてもらいたいと考えているよ」

「本気か？」

首だけが無理矢理背もたれを離れ前を向く。エピメディウムはティー・カップを口につけたままで答えた。

「半分はね。カガリも知っている通り、僕はプラントから送り込まれてきたエージェントだからね。お父様はオーブを地球に巣くう獅子身中の虫にしたいんだよ」

とてもこのオーブという国の行く末を案じているようには思えない態度である。もう飲み尽くしてしまったのだろう。ティー・カップを口から離し、目の前のテーブルに置いたところで、エピメディウムは態度を豹変させた。突然口を閉ざし、瞬きさえ忘れて表情を強張らせる。

ただし、それは紅茶が切れたことを原因とはしていない。

「だがお前たちのお父様は死んだ。もう誰も指図してくれる人はいないはずだな。そんな時、お前たちダムゼルはどう動く？」

首を持ち上げやすいよう、カガリは両手を頭の下に強いていた。こちらもやはり大切な話をしているような態度ではない。しかし、それがことの重要性を減じることはなかった。エピメディウムは瞬きせず、カガリの話を聞いていた。

カガリの言葉が、エピメディウムに少なからぬ緊張を与えていた。

「あれから3年。お前たちは外から見たなら大きくは変わっていない。シーゲル・クラインという水先案内人を失ったにも関わらずだ。それはつまり、始めから航路が設定されていたということだ」

エピメディウムは2人の父を持つ。オーブの姫君としてはウズミ・ナラ・アスハ元代表を、そして、ヴァーリとしてはプラント最高評議会議長を務めたシーゲル・クラインを父とする。

ここでは、シーゲル・クラインを問題としていた。

「お前たちは、いや、シーゲル・クラインは何をもくろんでいる？」

エピメディウムは答えない。快活で、誰に対しても気の置けないエピメディウムにしては大変珍しいことであったが、ことお父様が関わると途端に口が重くなる事実をカガリは知っている。知っていてなお、カガリは食い下がった。

「もうシーゲル・クラインはいない。お前たちを縛り付けていた男はいない。そうだろ？」

短く息を吹いて、エピメディウムの時間が動き出す。屈託のない微笑みを見せたかと思うと、それだけの普段のエピメディウムであった。

「話して上げてもいい気もするけど、そろそろ時間じゃないかな？」

時間。何のことかわからず瞬きを2度、3度と繰り返すカガリに対して、エピメディウムは微笑みを強くする。

「ほら、とても時間に律儀な君の許嫁が来る頃だよ」

すると、突然部屋のドアが開かれた。

「カガリ、ちょっといいかい？」

男だ。色の薄いスーツを着て、まだ若い。背が高いせいか、全体としてどこか弱々しい印象の男が扉を開けて、そして、その顔の横を通り抜けたナイフが壁へと突き刺さった。途端、男の顔が蒼白になる。もしかすると自分の顔に突き刺さっていたかもしれないナイフを見つめていた視線が、油の切れた機械のようにぎこちのない首の動きで部屋の奥を見る。

そこには座ったまま、何かを投げたような姿勢で右手を伸ばしたカガリが歯をむき出しにしていた。

「私を結婚前から未亡人にしたくなければ、次からはノックをしろ、いいな？」

「う、うん、わかった」

男は頷くことだけは素早く、正確である。ただし、部屋の中へと入ってくる様子はぎこちなく、軽く腰を抜かしているらしかった。

この男は、ユウナ・ロマ・セイラン。何とカガリとは許嫁の間柄である。もっとも、時には自らモビル・スーツで戦場に出ていくカガリとは違い、ユウナはデスク・ワークを専門とする。そのためか、主導権はいつもカガリが握っている。

そんな2人の様子を微笑ましく見つめていたエピメディウムは立ち上がるなり、

「じゃあ、ここは若い2人に任せるべきかな」

「エピメディウム！」

「時間はあるよ。そんなに焦らなくてもね」

ユウナの脇を通り抜ける際、何故かウインクをしてみせてから、エピメディウムは扉を部屋の外側から閉めた。残されたのはいまだ死の恐怖から回復しきれていない男が1人。ちょっと目の前を肉厚のナイフが通り抜けただけで情けない。

親同士が決めた許婚の哀れな姿に、カガリは隠す様子もなくため息をついた。

「それで、今日の話は何だ?」

多少持ち直したようだが、相変わらずカガリの顔色をうかがったような雰囲気は抜けていない。

「議会は曇り後雨、時折雷っていうところかな。世界安全保障機構に参加するか、プラントを敵視しないかでものの見事に割れてるよ」

父さんもこの頃白髪が増えた。そんな発言を付け加えることもユウナは忘れなかった。父とは現代表ウナト・エマ・セイランその人であり、父の白髪と国の現状を重ね合わせ皮肉っているのだ。

「ここではっきりとさせておこう。私はできることなら戦争に加わりたくはない。お父様のご遺志にも反するし、発言力が弱いままでは単なる戦力として使い潰されかねない」

「僕は同盟に賛成だよ。確かに中立性はなくなるかもしれない。でも、君のお父上が示した、侵略に関わらず、他国を侵略せず、他国の侵略も許さないという3つの理念は、より戦争回避という観点から見ればこうも解釈できる。戦争を助長するようなことはせず、侵略戦争を行わない、そして、侵略戦争には断固たる処置をとるともね。実際、オーブは自衛戦争を否定していない。それならプラントという脅威を侵略と捉え、その猛威にさらされている国と協力しても決して理念には反しないんじゃないかな」

政治だの理屈の話をする時だけは、ユウナは妙にしっかりとした目をする。普段は3枚目で落ち着きのない若造に過ぎないくせに。

先程とは正反対の意味で、カガリはため息をついた。

「そういう理屈じゃ、お前には勝てそうにないな」

「まあ、理屈だけはね。ただ、民意がどう動くかわからない。何といっても、父さんは傀儡だから」

ウナト代表は大西洋連邦の傀儡でしかない。そのことを吹聴して回っているのは、他ならぬカガリである。3年前の弟の結婚式では大西洋連邦の高官相手にはっきりとそう言ったこともあった。ユウナはもちろん、それを知っていて言っているのだ。

ナイフの衝撃からすっかり立ち直ったユウナはカガリへと微笑みかけていた。余談だが、ナイフはいまだ、ユウナの後ろの壁に突き立てられたままである。

「嫌みっぽい男は嫌われるぞ」

カガリは今日3度目のため息をつくはめになった。

人の死を讃えましょう。それは死者のためではなくて、生きている人がこれからも生きていくために。命を落としてしまった人に、私たちはあなたを忘れてはいません、そう、言い訳をするために。死者の時間は凍りつきう、生者は前へと歩き続ける。もう決して交わらぬ道から目をそらし続けるために。

死者に花を捧げましょう。これは死に隔てられた絆の証です。

生者は歩みを進めましょう。もう死者はあなたの隣に立つことはありません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「鎮魂頌」

ヤラファス。ここは死別と出会いの集まる場所。

第１０話「鎮魂頌」

「オーブも何考えてるんだろ……？」

ザフト軍ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァの展望室で、そうつぶやいたのはルナマリア・ホーク。その目は展望室のガラス越しに、すぐ外に見える光景を呆れ顔で眺めていた。

ここはオーブ首長国ヤラファス港。ミネルヴァは中立国であるオーブでの停泊を許可されていた。現在、ミネルヴァの大きな艦体は岸壁に横づけられている。その向かい側に停泊している艦が問題であった。

ステイガラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦が泊まっていた。地球軍が使用する航空母艦には、大西洋連邦の旗が揺らめいている。

それがすぐ目と鼻の先。オーブは敵対する両国を隣り合わせに停泊させたのだ。

ルナマリアはもう一度、深いため息をついた。

そこで思い出したことがある。ルナマリアのすぐ後ろ、横一列に並べられた椅子に座っている人物がいるということを。

「って、シンの故郷ってオーブだっけ！？」

慌てて振り返ると、左頬の痣に手を当てたシン・アスカの姿があった。

「いや、別に気にする必要はないよ。ただ、ちょっとは気になるかな」

言葉通り、シンに取り乱した様子は見られない。国を捨てるということはこういうことなのだろうか。自分ばかり慌てていることもばからしく、自然とルナマリアも落ち着きを取り戻す。

「なあ、ルナ、許可も下りてることだし、ちょっと街に出てみないか？」

シンはやはり何の感慨もなさそうに、本当に思いつきであるかのように話した。

「いいけど、それってデートのお誘い？」

「そ、そんなんじゃない！」

この時ばかりはむきになるシン。そんなにはっきりと言わなくてもよさそうなものだが、ルナマリアとしても気が楽になったと言える。

「じゃあ、アスランさん誘ってもいいよね」

すでに疑問ではなくて事実確認。ルナマリアは明るく、シンへと微笑みかけた。

ミネルヴァに並ぶはＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルン、そして、ＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタル。

そして、それぞれのガンダムのパイロットたちがキャットウォークに並び、ガンダムを眺めている。

「そうか、ラインルビーンがいたか」

手すりに掴まったまま、アスラン・ザラは隣を見ることなく愛機ヤーデシュテルンの青い翼を眺めている。

「そうなるとあいつもオーブに来ている可能性が高いな。あいつは9つの名前と国籍を持っているらしいが、オーブはその内の1つだそうだから」

あいつが一体誰のことを意味しているのか。アスランはわざわざ語ろうとせず、聞き手もまた聞き返そうとはしない。聞き手、レイ・ザ・バレルはアスランとは違い手すりに体を預けてはいない。それでも、自身のガンダムしか見ていないところは共通する。

「参考になる情報ではないな」

「確かに。ただ、あいつのことだからわざわざこちらの動きを気にしているとは思えない」

たとえば、敵がいると知っていたとしてもすぐ隣に接岸するくらいしでかすような男だ。すでにたとえ話にはなっていないなと、アスランは我ながら苦笑する。

ここはオーブだ。思いもかけない出会いなど、いくらでも転がっていそうではある。

アスランはもう4年も前、この国を訪れた時のことを思い出していた。ヴァーリやドミナント、大勢の仲間に再会して、一途な友人が、恋人が他の男とデートをしていると大騒ぎして皆で止めたりなどしたものだ。

それも、皆焼けてしまった。

こんなこと思い出すべきではなかったかと後悔を始めた時、格納庫へと通じる廊下からアスランの名を呼ぶ元気のよい声が聞こえてきた。声だけでもわかるが、敢えて振り向くと、やはり、ルナマリアが駆け寄ってきていた。その後ろにはゆっくりと後を追うシン――どことなく機嫌の悪そうな顔をしている――の姿がある。

「アスランさん、ちょっと街に出ませんか？　シンが案内してくれるそうです」

走ってきたばかりというのに、息をきらした様子もなくルナマリアはまくしたてた。初対面でわかっていたことだが、この娘は本当に元気がいい。

「君はオーブに縁があるのかい？」

「元々住んでましたから」

ルナマリアの後ろにいるシンへと声をかけると、何故かシンはなかなかこちらと目を合わせようとはしてくれない。

それよりも気になったことは、シンがオーブに暮らしていたということだ。ミネルヴァなど機密に近い艦は国籍条項がなかっただろうか。つまり、移民などを除いた正規のプラント市民で構成されて

いるはずである。

しかし、聞き直すほどの時間は与えられず、ルナマリアの勢いに押されてしまう。

「行きませんか？」

身を乗り出して、元気ばかりか押しも強い。これではシンに尋ねることができそうな雰囲気ではない。

手のひらでルナマリアをなだめるようにしてから、アスランはやんわりと断りを入れた。

「すまない。することもあるし、それに、あまりこの国にはいい思い出がないんだ。もうすぐ４年になるかな。ヤラファス祭事件と呼ばれる大きな事件があってね」

「でも、映画じゃ、アスランさんがオーブに来たなんてお話は……」

本当に、ルンマリアはよく映画を見ている。３０回以上見たというのは嘘ではないだろう。

「映画じゃカットされてる部分だ。あの時、知り合ったばかりの友人がいたんだけど、事件に巻き込まれて亡くなったことをは後から知ったんだ」

トール・ケーニヒと言う名前だっただろうか。キラを通じて知り合った友人のことは、もう顔さえ満足に思い出すことができない。混乱に巻き込まれはぐれて、それっきりだったからだ。トールと恋人であったミリアリア・ハウという少女のことを思い出すと、記憶

は像を結ばない癖に悲痛な感情ばかりが胸をつんざく。

オーブに宛もなく降りてミリアリアに出会うとは考えにくいが、それでも、気持ちが下艦を拒否していた。

「だから、俺のことは気にしなくてもいい」

思い出していると、自分でも考えていた以上に悲しげな表情を作ってしまっていたのだろうか。ルナマリアの勢いは陰り、これ以上迫ってはこなかった。

「じゃあ、その……」

ルナマリアが遠慮がちに見たのは、寡黙な同僚の方である。レイはやはり不機嫌にも見える無表情のまま、ルナマリアの視線に応じた。

「俺も行こう」

「そうですよね、じゃあ、2人で……って、え～!?」

俺はいい。そんな言葉が返ってくると信じて疑わなかったのだろう。想定外の事態に、ルナマリアは驚きを隠せぬまま、大きく声を上げた。レイが部下たちに普段どのように思われているかうかがいしれる。

オーブの街を歩く。4年前は私服で、現在は軍服を身につけている。昔は軍人として街を歩くなんて思いも寄らなかった。今では、

まさかあのレイ隊長と一緒に街を歩くなんて考えてもいなかった。

すぐ隣を歩くルナマリアが、少し後ろを歩くレイ隊長に気づかれないよう小声で話しかけてきた。

「何でバレル隊長まで？」

「知らないよ。何か興味のあるものでもあったんじゃないのか」

シンも様子を首を曲げさりげなく後ろを見てみると、レイ隊長が何やら興味ありげに視線をせわしなく動かしていた。

オーブの首都であるオロファト市の街並みは観光地になるほどおしゃれな建物が多い。４年前の事件の傷跡も残ってはおらず、完全に元の姿を取り戻していた。ただし、レイ隊長の視線は低く、建物を見ているというよりは誰かを捜しているようだ。

目線が低い分、視線はどうしても合いやすい。ルナマリアと２人して振り向いていたことに気づかれてしまった。

「どうした？」

「いえ！　その、ヤラファス事件が気になって……」

話しかけられて答えたのはルナマリア。しかしシンもまた、つい足を止めて振り向いてしまった。ここは往来であることに違いはないが、車の入ってくることのない道路である。昼の時間帯とは言え決して人は多くなく、立ち止まっていても誰かに咎められることもないだろう。

「ヤラファス事件について、俺が話してやれることはない」

軍隊としてしか国を出たことのないような隊長がオーブのような片田舎の事件を知っているとは思えない。たとえ、事件にプラントが関わっていたのだとしても。

ルナマリアは当然の帰着としてシンの方を見る。

「ヤラファス祭、事件だ。ヤラファス祭っていうお祭りがこのヤラファス島じゃ毎年行われてたんだ。恋人が集まるようなお祭りで、オーブのバレンタイン・デーみたいなものかな。でも4年前、大きな事件があったんだ」

「事件？　事故じゃなくて？」

何をもって事件と事故を分けるかは難しいが、少なくとも誰かが意図的に引き起こしたような出来事は、事件としてもいいだろう。

「俺も詳しいことは知らないけど、何でも秘密裡に持ち込まれたザフト軍のモビル・スーツが暴れて、当時停泊していた大西洋連邦軍と戦闘になったらしいんだ。俺は当時オノゴロ島の方にいて、騒ぎ自体は知らないけど……」

「要するに、連れてきてあげられるような人がいなかったってこと？」

「話の腰を折るなよ」

まったく、女というのは一一偏見とは思うが一一恋愛の話となると鼻が利く。

「ともかく、それで死傷者が１００人を超す大惨事になったんだ。それ以来、ヤラファス祭は行われてない」

ただ、そんなルナマリアも死傷者の数には驚きを覚えたらしい。目を丸くして、瞬きを繰り返している。

「そんな話始めて聞いた。それで、プラントの秘密兵器って……？」

「それは……」

知っているはずがない。テレビでも満足に映像が流されず、報道管制が敷かれていたらしい。ただ、ザフトのモビル・スーツと大西洋連邦のモビル・スーツが戦闘したという事実だけが何の進展もないまま流され続けた。

知らない。そう答えようとして、それよりも先に誰かが解答を示した。

「ＡＭＦ－Ｘ０００Ａドレッドノートガンダム。ザフト初のガンダムであり、プレア・ニコルを搭載した核動力搭載機のことだよ」

聞き覚えのない声。横を向くと、地球軍の黒い軍服を身につけた４人の男女が立っていた。先頭の１人はまだ少年と言ってもよいほど若く、答えたのは恐らくこの少年だろう。

階級章は少佐。サングラスを身につけた少年は一見気弱そうながら、その態度はどこか芯の強さを感じさせる。

「あなたは？」

シンは何気なく声をかけた。敵軍の制服を着ていようと、ここは中立地帯であるという安心か、それとも黒という見慣れない色が敵兵であるという事実を薄めてしまったのかもしれない。とにかくシンの反応は鈍く、反対にルナマリアははっきりとしていた。

「ちょっとシン！」

急に手を引かれ、ついルナマリアの方を振り向く。普段朗らかな人物が急に深刻そうな顔をするとひどく心急かされる。

「黒い軍服、これってファントム・ペインでしょ！」

ファントム・ペイン。その言葉を聞いた途端、シンはほとんど反射的に首を回し、少年の姿を確認する。

黒い軍服。見たことは初めてだが、それが意味することは聞かされている。ブルー・コスモスが各国に新設した独立部隊。部隊としての戦闘力、士気は極めて高い狂信者の群。それがファントム・ペイン。

ただ街で見かけただけなら何でもない若者たちである。それがコーディネーターを狩る特務部隊であると聞かされた途端、シンは言葉を失った。

ただレイ隊長だけがいつもの調子を維持している。

「サングラスがずいぶんと似合わないものだな」

先頭の少年へと。ただ、答えたのはその後ろの若者だ。

少年のものよりもずいぶん色の薄いサングラスをした褐色の肌の男性が、自分のサングラスを外しながらぼやいた。

「そうかな。これ最新式のモデルなのによ」

「流行物と似合うかどうかは別問題でしょ。それに、あんたじゃなくてネオ隊長のことよ」

冗談だったのか。それにしては笑えないが。

男性をたしなめたのは女性で、女性は少年のことを隊長と呼んだ。よく見ると、レイ隊長は他の3人を一切気にすることもなくネオと呼ばれた少年を見ている。

「機密情報を往来で暴露とはどういうつもりだ?」

「確かに、立ち話は何だね」

まるで顔見知りのような気軽さで、ネオ少年はサングラスの下で笑った。

あれから、シンはなし崩し的に喫茶店に入ることとなった。ルナマリアやレイ隊長はもちろん、何故かファントム・ペインの面々も一緒である。

こじんまりとした綺麗な店内に、何故か2席借りてザフトとファントム・ペインが分かれて――ただし、隣合っている――座ってい

る。そして何故かネオ少年だけはザフト側の席につき、何故かルナマリアと話に花を咲かせていた。

「ジブラルタルの黄昏は秀逸だと思うよ。アスラン・ザラが仲間を逃がすために傷だらけになっても戦う場面は鮮烈に焼き付いてるよ。特に逃げ延びた先で助けた少女から花を手渡される場面は涙なくしては見られないね」

「わかってますね。そうそう、その場面を務めた子役の女の子が可愛くて可愛くて、妹にしたいくらいですよ。まあ、現実の妹は別にいるんですけど」

どうやらネオ少年も例の映画、「自由と正義の名の下に」のファンであったらしく、ルナマリアといきなり意気投合したのだ。

ルナマリアはと言うと、テーブルに身を乗り出して話に没頭し、ネオ少年――ネオ・ロアノーク少佐と名前は聞いている――もそれをしっかりと受け止めるように熱っぽい。

「僕にも年の近い姉がいるけど、がさつでずぼらで、とても花なんて似合わない人だから」

「現実なんてそんなもんですよね～」

こんなに楽しそうなルナマリアの顔は初めて見た。

「そうそう、キラ・ヤマトってどう思います？　あの渡り鳥、勢力をあっちこっちにふらふらふらふら。本当にどうしようもありませんよね」

「確かにあんな人には近くにいて欲しくないね。特に女性関係にだらしないところは幻滅かな。はじめに付き合ってた子が終盤に殺されてしまう場面があるけど、あれ、今更修羅場にしたくなくてわざと殺させたんじゃないかって疑ってるくらいだしね」

シンには2人の会話に入り込む余地がない。どの場面のことを話しているのかさえ、映画を流し見しただけではわかりようがない。レイ隊長にしてもまったく話に入ろうとはせず、静かに注文した紅茶をすすっていた。

シンの座っている場所は隣の席に近いため、話の内容を聞くことができた。

「なあ、隊長の発言内容にすさまじい違和感あるの俺だけか？」

ネオ・ロアノーク少年を覗いた3人の中で最もおしゃべりな印象がある、シャムス・コーザと名乗った男性がいつも会話のきっかけを作っているらしい。

そしてそれを引き継ぐのが女性である。ミューディー・ホルクロフトという名前だ。

「別にいいんじゃない？　どうせ映画の話だし」

つい気になって隣のテーブルを覗き込むと、3人目、どこかレイ隊長を思わせる寡黙な男性が話始めるところだった。他の2人はコーヒーを頼んでいるのにこの人だけオレンジ・ジュースを注文していた。甘党なのか、すでに2杯目である。どこかアンバランスなこの男性は、スウェン・カル・バヤンであっただろうか。

「単なるコマーシャル・ムービーであることを除いて、脚本の拙さにさえ目を瞑れば、自由と正義の名の下には演出が巧みな商品だ」

つい話の内容を聞きそびれていたが、この3人もあの映画にはあまりいい印象を抱いてはいないらしい。ただ、サングラスをかけたシャムス青年がどうネオ隊長の言動に違和感を感じているのかは、端から聞いていてはわからない。

「へいへい」

これで話は途切れてしまったらしい。シンは首を前に戻す。やはりルナマリアとネオ隊長の映画談義は収まっていない。ルナマリアとは軍学校時代からの付き合いだが、知らない一面というものはいくらでも出てくる。

きっとそのすべてを理解できる日なんて来ないだろう。何となくそんなことを考えながらテーブルに身を乗り出す仲間のことを見ていると、その後ろに時計が見えた。

思ったよりも時間がすぎている。このままでは門限に間に合わない恐れがあった。

立ち上がると、思いの外注目を集めてしまったらしい。ルナマリアとネオ少年さえ話を止めてこちらを見ている。

「すいません、俺、ちょっと用事があって、失礼します」

日が傾き始め、街並みが少しずつ朱に染まっていく。オーブにい

た頃幾度も見たはずの夕暮れは、それでも妙に懐かしく、同時に心を急いた。

もう門限まで時間がない。ただそれだけのことだと考えて、シンは足を早めた。

石造りの道路を歩いて、ふと目に付いたのは花屋。道にまではみ出す形で並べられた花が軽く香っている。花の名前なんて知らない。こんな日でなければ気づきもしなかったことだろう。ましてや、花を買おうなんて思わなかったに違いない。

店の前、どこか気恥ずかしさも手伝って少し離れた位置から店内を覗いて見ることにした。すると、店先に置かれていた花が目に付いた。何の花かなんてわからない。花言葉なんてもってのほかだ。ただ小さくて、白い花びらを咲かせた花が売られていた。

店に入るまでの距離を妙な長さに感じながら、シンは店員とおぼしき男性に声をかけた。

「この花をお願いします」

見つけた、白い花を指さして。

店員は若い男性だった。この仕事は長いのか、エプロンを身につけた姿が様になる。ただ、それにしては、妙なほどに無愛想で無言のままシンが指さした花を手に取ると、店の奥に置かれたテーブルへ。こちらに背中を向けているため何をしているのかは見えないが、花を包んでくれているのだろう。

話かけられたのは、本当に唐突なことだった。

「君、ザフトの軍人だろ。あまり制服でうろつかない方がいいと思うけどね」

思わず男性の方を見る。男性は手を止めていない。

「ヤラファス祭事件のこと、ここじゃ忘れられない人も多い。それに、プラントはまたやらかしたそうじゃないか」

ヤラファス祭事件は、ネオ少年の言っていることが正しいならザフトの秘密兵器が暴れたことが原因であるらしい。そして、もう1つはフィンブルのことだ。

あの事件の時は俺もオーブの住民でした。フィンブル落着には、最前線で参加していた。ザフトの兵士として。こんなこと、言っても仕方のないことだ。

何も言い出す気にはなれなくて、ただ言われるままにしておく。

「こんなこと、君に言っても仕方がないとは思うけどね」

語尾にため息をつけて、男性は作業を終えたようだった。手には、小さな花束が包装されている。男性はやはり表情を作ろうとしないままで、シンの方へと花を差し出した。受け取って、ポケットから2枚の紙幣を取り出す。男性はその内1枚だけをシンの手から抜き取った。

「嫌な思いさせたお詫びだ。少しだがおまけしておこう」

それだけ言うと、男性は店の奥へと歩いていこうとする。お礼を

言うつもりにはなれなくて、シンはそのまま店を出た。

ザフトでエリート・パイロットの証である赤い軍服とあまりに不釣り合いな白い花束。迫る夜の風が肌寒い。

「俺はもう、どこ行っても異邦人なんだな……」

４年前の事件があっても、街の構造そのものは何も変わっていない。慣れた様子で街を歩く。それでも、以前とはどこか違った街並みは、シンの記憶とは重なってくれない。

まるで目を背けるようにうつむいて、街を外れを目指して歩き続けた。やがて突然のように街が途切れ、目の前に光景が広がった。体はとどまって、視線だけが眼下の階段を降りていく。

オロファト市の街外れには公園があって、ヤラファス祭に合わせて毎年花々が綺麗に咲き乱れていた。４年前までは。

シンの目に映ったのは花ではなくて、冷たい質感を持つタイルばりの床。通路の代わりに整えられていた生け垣は、今は規則正しく並べられた石碑にとって代わられている。ヤラファス祭事件の犠牲者とオーブ侵攻の際の戦没者の名前が石碑には掘られている。きっと、シンの母親、マユ・アスカの名前も。

そんな死者の名簿に挟まれた石造りの道を視線が通り抜けると、奥には献花台が用意されていた。公園の奥で、かつては大きな木がシンボルとして雄大に枝を広げていた。それも、４年前に焼けてしまった。かつての恋人たちの憩いの場所に、死者を慰める花が手向けられている。

そして、シンの手にも白い花が握られている。

ここまで来て引き返すことはない。初めの1歩が階段を降りる。すると、後は惰性で階段を降りていく。決して長くはない。あっさりと降りきってしまうと、すぐに石碑に囲まれた道に足を踏み入れた。

もう夕暮れ時だからなのか、人影はまばらである。見ず知らずの誰かが、知らない誰かの名前を探して石碑の周りをさまよっていた。

シンはつい足を止めて、それでもここに母の名前を探すつもりには、なぜだかなれなかった。ただ少し、石碑を眺めてみることにした。

もうあれから4年近くも経つ。戦争で母を亡くした。自分だけが助かったところで、もうオーブにはいたくなかった。プラントがコーディネーターを受け入れている。そんなことを聞いて、プラントに向かったような気がする。

オーブよりはましなんじゃないかと思って、でも、結局大差なんてなかった。

移民が市民権を得るには経済難民でないことの証明――金を見せろということだ――が必要になる。そうでなければ市民権もないままともな仕事にもつけず時間を過ごすか。一番手っとり早く市民権と金が得られるのは、軍人になることだ。

金はない。身よりもない。

シンが選ぶことのできる道なんて、せいぜい軍人になるくらいし

かなかった。

軍学校に入ったのはだいたい2年前。周りは自分とどこか似ていて、それでも違う事情を抱えた移民たちばかりだった。その多くは大洋州連合や東アジア共和国、稀に大西洋連邦やユーラシア連邦から来ている人もいた。

それでも、オーブから来た人には、出会うことはなかった。

移民たちはそれぞれの出身地で派閥を作って、中で一番大きかったのは大洋州連合のグループだっただろうか。それでも所詮移民の中での最大グループというだけのことだ。シンも彼らからは除け者にされたが、それを恨んだりしたことはなかった。

みんな、プラントという国の中で必死に生きようとしていた。

シンが軍学校を卒業ではなく放り出されてから軍に参加して実戦に出されるまで数ヶ月――この期間は任期として加算されない――の後、ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムを与えられ戦場をたらい回しにさせられた。母艦を3度――アーサー・トライン艦長の艦も含まれる――も失った。

そしてミネルヴァに乗って、何故か捨てたはずの国にいる。

めまぐるしく変わる状況の中で、過去だけが変わらない。だから過去はいつも置いてけぼりで、そして風化して忘れ去られていく。シンがこの国の住民だったなんて過去が、もう完全に忘却の彼方に追いやられてしまったように。

道の左右に建てられた石碑から目をそらそうとすると、視線は自

然と正面の献花台へと向いた。台の前には誰かいるようだ。人数は2人。服装からして女性だろうか。2人とも、ずいぶん艶やかな格好をしている。短い金髪の女性の方はゆったりとした袖が特徴で、全体で羽衣でも纏っているような印象を受ける。もう1人は桃色の髪。波立って長く、背中を覆い尽くすほどだ。

この人たちは誰を亡くしたのだろう。漠然とそんなことを考えながらシンは再び献花台へと歩きだした。

シンの手には白い花。女性2人は献花台から動こうとしない。声でもかけてどいてもらおうか。そんなことをする前に、女性の方がシンのことに気づいたようだ。

桃色の髪の女性が振り向こうとして、この女性のすぐ側にいて離れない金髪の女性が釣られるようにシンの方へ向き直ろうとする。

その瞳は、とても澄んだ青い色をしていた。薄暗さを覚え始めた、そんな時間であるにも関わらずその色ははっきりとした輝きを放っていた。思わず手にした花を後ろに隠そうとしたのは気恥ずかしさからではない。ただ、何となくこの女性の前に花を並べることがためらわれたからだ。

女性は、まるで人形のように表情に乏しい顔をしたまま、そっと金髪の少女の手を取った。女性2人の体がもとといた場所を離れて、献花台を遮るものがなくなる。単純に考えれば献花のために道を譲ってくれたということだろう。

ふと女性の顔を見ると、女性は表情を変えることなく献花台の方へとすでに視線を戻していた。何にせよ、これで献花できる。

「ありがとう、ございます……」

果たして聞こえていただろうか。そして聞こえていたとしてもきっと反応はしてもらえない。そんな気がしてシンは足早に献花台へと献花をすませた。彼女たちが置いたであろう花のすぐ横に。

献花台の奥には小さな慰霊碑が置かれ、事の顛末がそこには描かれていた。

ヤラファス祭事件。あのネオ・ロアノーク少佐の言葉を信じるなら、ザフト軍のガンダムが暴れたことを原因として、港を中心に大きな被害を出した。その時の戦火がこの公園を焼いたのだ。

オーブ侵攻の主戦場はオノゴロ島。産業と軍事の島だった。地球軍の主力モビル・スーツ、ＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーが初めて実戦投入されて、オーブ軍は秘密裡に開発をしていたＯＲＢ－Ｍ１　Ｍ１アストライというモビル・スーツを使用した。侵略戦争を否定しているはずのオーブが、裏では過剰な戦力を盗用という形で開発していたことに、シンは子ども心に失望を覚えた記憶がある。

きっと、この女性たちも４年前にどこかで、大切な誰かを失ったのだろう。シンがそうであったのと同じように。

「俺の母さん、あの大西洋連邦軍の侵攻の時亡くなったんです」

もう涙なんて出ない。

母は仕事に厳しい人だった。すでに時代遅れの言葉だが、キャリア・ウーマンとでも言うのだろうか。何事も仕事が中心で、シンはよく１人で過ごしていた。それでも誕生日の時はどんなに忙しくと

も必ず帰ってきてくれて、シンの誕生を祝ってくれた。

そう、４年前までは。

「オーブの為政者たちは口では大層なこと言ってた癖に、いざ戦争が始まると何もできなかった。俺たちは戦場のただ中を走らされた。すぐ上じゃモビル・スーツたちが戦ってて、流れ弾で何人もの人が死んだ。オーブ軍も大西洋連邦軍も俺たち避難民のことなんて誰もかまっちゃくれなかった！」

大きな大きな独り言だ。彼女たちが聞いていてくれているかは問題ではない。

ただ前を、事実を淡々と書き連ねているだけの記念碑を見る。鋭い夕日が眩しい。冷たい海風を浴びていると、空しさばかりが強調されてやりきれない。

「すいません。初めて会った人にこんなこと……」

振り向いても、もういないのではないだろうか。聞いていてもらいたかった、聞かせたい過去ではない、そんな自分でもわからない交ぜになった気持ちのまま、桃色の髪の女性の姿を探した。

女性は、もといた場所にいた。青い瞳がまっすぐにシンを捉えている。

「私は弟とも言える人、ステラにとっては大切な仲間を失った」

ステラと呼ばれた少女は、女性の腕にしがみついて何かをこらえるように体を震わせている。

「魂は実在すると思う？」

わかりやすい悲しみ方をしている訳ではない。今にも泣き出しそうな、そんなわかりやすい悲しみ方をしている訳ではない。女性は、まるで感情を乗せない空虚な話し方で、それは瞳と同様澄んだ音をしていた。

「もし存在しているのなら、スティングの魂はこの場所にたどり着いているのかもしれない。軌道計算してみたら、機体の墜落先はオーブ領内だったから。それなら、スティングもここにいるかもしれない」

一際強い風が吹いた。それとも、そう感じただけだろうか。開いた瞳孔は、女性の瞳の青さをより鮮明に際だたせる。

女性の言葉がわからない。理解できないのは魂のくだりではない。遺体がここにはないにも関わらず花を捧げているのはシンも変わらない。

では、機体とは何だろうか。一体どこから墜落したと言うのだろうか。スティングという男性はパイロットだったとしても、それはおかしい。女性の年齢はせいぜいシンよりも少し上くらい。だとすると、４年前はせいぜい１５、６。その弟となるととてもパイロットをしている年齢には思えない。

「あなたは一体……？」

「大西洋連邦軍所属。階級は大尉」

こんなにもドレスが似合う女性が軍人だという言葉を鵜呑みにした訳ではない。ただ、女性の言葉はとても嘘をついているようには思えない。

「じゃあ、ファントム・ペインの、あのネオ・ロアノーク隊長の部隊の？」

女性は頷く。

先程まで一緒にいた大西洋連邦の軍人たちはミネルヴァの向かい側に停泊していた戦艦の乗組員であった。同じ時期に同じ港に停泊しているのは共にフィンブルの落着に関わったから。それなら、ファントム・ペインと出会ったことも、きっとこの女性と出会ったことも偶然と片づけてしまうにはできない。

もしかすると、宇宙では知らぬ間に戦っていたかもしれない。

そう考えると、シンは妙に落ち着きを取り戻すことができた。緊張が一定以上に高まるとかえって心が冷たく落ち着く。それが、軍隊生活で培ってきた、ある種の処世術だからだ。

「スティングって言う人、どうして亡くなったんですか？」

アスランに指摘されたような、心のほの暗い部分がどうしても声となって現れる。

「イクシードガンダムを壊されたから……。敵のインパルスに……」

ステラと呼ばれた少女が、こちらは今にも泣き出しそうな様子で女性にしがみついていた。そんなこともまるで気にならない。

まるで夢心地の中で、シンはインパルスに搭乗して射撃に特化したＧＡＴ－１３１イクシードガンダムの特装型を破壊した。この事実と偶然では片づけられないほど符合したことに、声が抑えようもなく暗い含みを持つ。

そのことに気づいたように、ステラは女性の後ろへと体を隠すように動く。

「黄金のガンダムのこと、知ってますか？　以前、オーブに攻め込んできた奴です……」

「ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダム」

別に威圧しているつもりはない。それでも、女性はほんの少し手を伸ばせば届く場所に敵兵がいるというのに物怖じした様子を見せない。

そんなこともどうでもいい。

「パイロットは誰です……？」

「４年前は、エインセル・ハンター」

マユ・アスカの、母の仇の名前を女性はあっさりと口にした。

頭では理解している。この名前が、プラントにおいて最も有名なナチュラルであるということを。ギルバート・デュランダル議長が滅すべき悪魔だと声高に叫ぶ名前だと。世界最大の軍需産業ラタトスク社の代表で、その座を追われたブルー・コスモスの幹部。この

戦争最大の戦争犯罪者としてプラントが勢力を上げて追っている名だ。

４年前ということは今は違うということだろうか。

「あなたは、どうしてそんなことまで知ってるんですか？」

大尉と言えば現場ではそこそこの階級だが、上層部に顔がきく階級とも思えない。何より、この若さで大尉の階級を与えられていることの方に違和感を覚える。

「エインセル・ハンターは、私のお父様だから」

シンの疑問を一瞬で払拭させる一言だった。同時に、理不尽な怒りに囚われている自分を自覚する。

仇の娘は仇そのものとは違う。別にこの女性に何かしようと考えたわけではない。それでも、沸々と湧き出る怒りを理性で薄めた泥水はシンの顔の筋肉をひきつらせ、左頬の痣に鈍い痛みを引き起こしていた。

女性がオーブ侵攻を命じた訳でもなければ、女性が侵攻に参加していた訳でもない。

これ以上ここにいてはいけない。

「今度お父さんに会ったら言っておいてください。俺は、あんたを絶対に許さない。そう」

ヒメノカリスの反応も待たず、シンは歩きだそうとした。しかし、

ほんの1歩足が土を蹴ったところで、足は止まった。

「俺の母さんは、あの時死んだんです」

あなたの父親に殺されて。

「俺、シン・アスカって言います」

振り向きもせず、顔はこれから去っていく方向ばかり眺めている。

「私はヒメノカリス・ホテル。この子はステラ・ルーシェ」

2人の名前を聞いて、それでも顔を改めて見ようとは思わなかった。

足は強く地面を踏んで一向に前へと歩き出す気配がない。自分の体のことなのに思い通りにならない。まるで、イクシードガンダムを撃墜した時のように。

別に卑怯者になりたくないわけじゃない。自分のことを正義感の強い人間だと考えたことはない。もしかすると単に復讐をしたいだけなのかもしれない。

「スティングって人殺したの、きっと俺だと思います……。フィンブルの上空で、変わった武装をしたイクシードと戦ったインパルスに乗ってたの、俺ですから」

足からようやく呪縛が晴れた。潮風に背中を押されて、丘の坂道に助けられ、シンは走り出した。

後に残されたのは2人の少女。シンがいなくなったことで、ステラは小動物が巣穴から出てくる様を思わせるゆっくりとした動きでヒメノカリスの影から姿を現す。

シンのことが怖かった。地球を壊すザフトの軍人で、ヒメノカリスのことを怒っていた。そして、スティングを殺したということも言っていた。

スティングはやっぱり死んでしまったのだろうか。

ステラは今すぐにでも泣き出したくなる気持ちがわいて、それでも涙を流すことはなかった。堪えられたわけではない。ただ、ヒメノカリスの顔を見た時、驚きの方が勝ったからにすぐない。

姉は、ヒメノカリスは泣いて、いや、涙を流していた。表情を変えず、ただ涙が白い頬を伝っている。それを泣いているとすべきか、ステラには評価にためらわれた。

「お姉ちゃん、泣いてるの……？」

「涙？」

ヒメノカリス当人が気づいていなかったらしい。指が自身の頬をなぞり、指先に確かにまとう涙に、弟を亡くした姉は瞳を大きくした。

「私、お父様以外の人のために泣けるの……？」

もうすっかりと日がくれてしまった。温暖な気候で知られるオーブとて、夜露を含んだ潮風は肌寒い。鳥たちが巣穴に帰る頃、ミネルヴァ、そしてファントム・ペインもまた母艦への帰路につく。

同じ岸壁を挟んで隣合った場所に停泊しているため、両者の別れは自然と岸壁の上になった。

「楽しかったよ、今日はありがとう」

ネオ・ロアノーク少佐はすでに薄暗いにも関わらずサングラスをとろうとはしない。そんなことを気にした様子もなく応じているのはルナマリアである。すっかり意気投合した2人は、それはにこやかに別れの挨拶を交わす。

「いえいえ」

手を振りながら、ルナマリアは上機嫌な様子でミネルヴァの方へと歩いていった。スキップ混じりで、嘘偽りなく楽しげであった。

すでにスウェンを初めとするファントム・ペインの隊員たちの姿はない。

ありふれた波止場らしく殺風景なこの場所で、残されたのは2人であった。

赤い服のレイ・ザ・バレル。普段表情に乏しいその顔に明瞭な変化が生じているわけではない。しかし、不機嫌にも見えるその顔がそのまま、相手への敵愾心をにじませていた。

黒い服のネオ・ロアノーク。サングラスでアウトローを気取るにはあまりに優男じみた印象の強い少年は、そんなレイの視線を受け流しているようにその静かなたたずまいを変えようとはしない。

「とんだ茶番だな、テット・ナイン」

このレイの言葉を誰も聞いてはいない。ただ相手、テット・ナインを除いて。

「ザイン・セブン、互いにそんな名前で呼び合うことはよそう」

そして、テット・ナインの返事を聞くことができたのも、ザイン・セブンだけである。

「俺はガンダムを破壊する。ゼフィランサス・ズールの造った機体はすべてだ」

今はレイ・ザ・バレルと名乗るドミナントから、かつてキラ・ヤマトと名乗ったドミナントへと。

「僕はゼフィランサスを守る。たとえ、何を敵にしたとしても」

ネオ・ロアノークはおもむろにサングラスを外す。その目はルナマリアと談笑していた柔らかい様子に、どこか冷たい色を含ませていた。

シンは死者の名が書かれた石碑の間を通り抜け、階段を駆け上が

り街へと戻った。いや、逃げ込んだとする方が正解かもしれない。あのヒメノカリスと名乗った少女から。

「何様のつもりだ、お前は……！」

手短にあった壁を殴りつける。頑丈な建物を叩いても手がただ痛くなるだけだ。それでもいい。それでよかった。

シンは逃げた。ただ母親を殺された被害者として相手一一しかも単に娘というだけだ一一に一方的にわめいて。挙げ句に自分も相手にとって仇であるという事実を棚上げにした。

そして逃げ出すことしかできなかった。もう1度壁を殴りつけると、やはり手が痛い。建物はわずかながらも揺れはしない。

大した運動をしたわけでもないのに、妙に呼吸が荒い。不必要に興奮してしまっているらしい。呼吸を整えながら、思い出すのは母のことだ。

「俺、やっぱり母さんのこと、好きだったのかな……」

素直にそう言い切ることのできない自分がいる。しかしそうとでも考えなければ、激昂していることに説明がつかない。

だからオーブになんて帰って来たくなかった。この国には何もない。そのくせに、置き去りにしてきた記憶の残り香ばかりが鼻につく。

１つの決まりを定めましょう。ここではあらゆる暴威が許されます。人を殺してもかまいません。略奪をしてもかまいません。ありとあらゆることがここでは許されます。これはとても大きな矛盾です。決まりを破ってよいと決まりで定めてしまうのですから。

まるで密猟をさせるために用意された狩り場のように。

そんな矛盾に満ちた場所が、それでも世界には存在します。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「密猟区」

戦争。ここは許された、そして許されざる場所です。

第１１話「密猟区」

小さな山である。その斜面にほぼ垂直に落下したフィンブルの破片の１つは山の一角を崩し大きなクレーターを穿っていた。激突から日が経ちすでに火の手は上がっていない。なぎ倒された周りの木々だけが、それでもその被害の凄惨さを強調し続けている。

そんな地球の傷跡を目指す小型のトレーラーがあった。舗装もされていない悪路をものともせず突き進む。その屋根に生えた多数のアンテナが揺れている。道の倒木を踏みしめ、トレーラーは突き進む。

その内部には様々な機材が積み込まれ、それが報道車として利用されていることがわかる。

多数のモニターを有する机を前に、男がくつろいでいた。右手でコーヒーを傾けながら、左手だけで広げられた新聞を保持している。まだ若い男である。袖を肘のところにまでまくりあげたジャケットは、かつて大西洋連邦大統領の記者会見に出た時とは違う。少なくとも、公式の場では袖をしっかりと伸ばすくらいの良識を、男は、ジェス・リブルは兼ね備えていた。

外注とは言え、大手新聞社と契約するほどの記者であるとは到底思えない。ジョセフ・コープランド大統領に食い下がった若者は、ずいぶんと気楽な様子で新聞を眺めている。

紙面には避難民の少女に手当を施す若い男性――１度見たら忘れることがげきないほどの美形だ――の写真があった。

「エインセル・ハンター代表の慈善行為か。そもそもブルー・コスモスがプラントとの関係をこじらせてなければこんなことにならなかったのにな」

カップを傾け、コーヒーを口に含もうとする。その途端、車が急に揺れ、熱いコーヒーが少量とは言え顔にかかった。思わず新聞を取り落とすほど驚かされたが、コーヒーをこれ以上こぼすことだけは避けた。運転は、またすぐに落ち着きを取り戻す。

「フレイ、もう少し丁寧な運転をしてくれないか」

ジェフは運転席に座る少女へと声をかけた。

座席に隠れて姿はよく見えないが、運転手を務めるフレイ・アルスターはひらひらと片手を振ってみせた。

「はいはい、ごめんなさいごめんなさい」

今時のお洒落な女の子だが、どこで培ったのか運転の技術は秀逸である。どんな言葉がフレイの機嫌を損ねたのかわからないが、揺らしたのはきっとわざとだ。幸い服にかかることはなかったが、まだ頬がひりひりする。飲み直す気にはなれずカップの中をついのぞき込む。すると、コーヒーの水面に写ったのは、女性の顔であった。

「あまりあの娘の前でエインセル代表の悪口は言わない方が賢明です、リブル所長」

短く整えられた髪に、細長の瞳。上品な化粧が施された顔は厳しすぎない程度に律儀さや真面目さというものを感じさせる。事実、ジェフの所属する事務所ではこの女性、ナタル・バジルールがまと

め役であり頭の上がらない存在であった。

ジェフは首の角度は変えずに、ただ視線だけでナタルの表情をうかがった。フレイがエインセル・ハンターのファンだとは知らなかったが、ナタルもまた声にどこか棘を含ませていたように思えたからだ。

フレイにナタル。そしてここにはいないが、アイリス・インディアを含めた3人はジェスが独立し、個人事務所を立ち上げた際に雇った新規スタッフである。3人が知り合いであるとは聞いていたが、若干歳の離れた3人がどのように知り合い、どのような関係であるのかまでは聞いていない。

退役軍人であるらしいということまでは聞いているのだが。

所長が女性スタッフとの距離間に悩んでいる間に、車体が小さく揺れた。どうやら目的地についたらしい。

「ついたよ」

気のないフレイの言葉。車は止まっていた。

車載カメラが映す光景は何でもない森の様子である。森の中の隘路に車は止まっていた。そして、目の前の山並みを捉えるカメラには、フィンブル落着の跡がまざまざと見せつけられている。本物の山なのだ。子どもの作った砂山とは訳が違う。それでも、砂山に石を思い切り投げつけたように、山には山肌を吹き飛ばして大きな穴が開いていた。

圧倒されている場合ではない。ジェスが気を取り直すすぐ横で、

すでにナタルが行動に入っていた。先程まで立っていたはずが、今はジェスの横に座っている。前にはジェスの椅子同様モニターが備えられ、そこにはモビル・スーツの姿が映し出されている。

ＧＡＴ－０１デュエルダガーをさらに簡素化したような特徴のない姿をしたモビル・スーツがモニターに捉えられていた。その姿は山の麓――岩が散乱し、とてもではないが人では近寄りようがない――にカメラを構えた状態で存在していた。

ＧＡＴ－００ダガーＬ。デュエルダガーからすべての武装を取り払い、性能全体をデチューンした民間仕様機である。主に土木作業に用いられるが、ジェフたちは撮影用にこれを使用していた。カメラもモビル・スーツの大きさに合わせた特殊なものである。

この機体のパイロットを、アイリス・インディアが務めている。

「アイリス、とりあえずクレーターを見渡せる場所を探してもらいたい」

アイリスに指示を飛ばすのはナタルの役割であるため、ジェスは目の前のモニターに集中している。ダガーＬのカメラから送られてくる映像はここに映し出されている。アイリスはあくまでもカメラを現場に持ち込むだけ。撮影そのものはジェスの仕事なのである。

ここで手が開いているのはフレイだけ。そのためか、フレイは退屈そうな様子でアイリスと通信を繋いでいる。

「ねえ、アイリス、今回のことどう思う？」

「フィンブル落着のどさくさでザフトは部隊を降下させたなんて話

もありますよね」

「ザフトならやりかねない。そのことについては私も同感だ」

応えるのはアイリスだけかと思いきや、ナタルまで話に加わろうとする。

3人は退役軍人とは言え、フレイとアイリスはまだ若い。とても前線に出たことなどなさそうなものだが、それでも敵対したことのある勢力が相手となると厳しい目を向けてしまいがちになるのだろうか。

ジェスが依頼されていた見出し用の写真を撮り始めている間にも、2人の少女は会話を交わしている。

「実際、小惑星を落とすことは難しくないって話だしね。ＴＮＴ火薬何十ｋｇかで動かすことができるんでしょ」

「ジェスさん、フィンブルのサンプル持って帰ってもいいですか？」

まさか自分に話が向いてくるとは思わず、やや不自然な間を開けてしまった。

「……ああ、いや、そんなことは学者先生がすると思うよ」

またシャッターを切る。なかなかいい写真が撮れたのではないだろうか。何の気無しにいい気になっていると、その時のことであった。可愛らしい声をしているのに、妙に底冷えのする声が聞こえてきたのは。

「いい、ですよね？」

アイリスは、実は３人の女性陣の中でも押しが強い。

「わかりました……」

ジェスには、これ以上言い加えることはできなかった。

商魂逞しい。それはたとえば、敵国同士が隣あって接岸している港に、戦艦の乗員の需要を当て込んでオープン・カフェを開くようなことを言うのではないだろうか。

ザフト軍ラヴクラフト級特殊戦闘艦と大西洋連邦軍スペングラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦とに挟まれる岸壁にパラソルを備えた丸テーブルが並べられていた。こんな場所でオープン・カフェをしようとした店があったのだ。

両軍の兵は、さすがに相席するほど神経の太さを持つものはそうはおらず、ザフト軍の緑と地球軍の白とが固まって点在していた。それでも両軍が隣あって座っていることに変わりはない。

その中にあって、それでも相席を構わない人物はいるものである。ただし、こちらはザフト軍の赤と地球軍の黒。３人の少年が同じテーブルを囲んでお茶を嗜んでいる。

「まさかすぐに顔を合わせることになるとはな」

アスラン・ザラがカップを傾けながら。その隣ではレイ・ザ・バ

レルがまだ一度もコーヒーに口を付けぬまま、眉間に力を込めていた。その視線の先には、サングラスをかけたままのネオ・ロアノークが悠々と紅茶を喉に流し込んでいる。

「こんな近くに停泊していれば当然だよ」

つい先日宣戦布告を終えたばかりのレイを前に、ネオは、キラは平然と態度を崩すことはない。

「それより、ルナマリアがずいぶん遠いけど」

ネオがくるりと首を回す。それにつられるようにアスラン、レイが視線を移す。離れたテーブルに1人で座るルナマリアが3人の視線に気づくなり急に体を小さく、テーブルに隠れるように隠れてしまう。怯えた小動物のようにテーブルの上に頭だけだして様子をうかがっている。

アスランは呆れながら体の向きを戻す。

「キラ、今はネオか。お前自分のこと隠してキラ・ヤマトの悪口で盛り上がってたらしいな。ルナマリアはすっかり萎縮してしまったよ。いつからそんなに悪趣味になったんだ?」

「いや、僕は普通にあの映画は好きだよ。プロパガンダであることや、ただ玩具を売るための作品にしては演出は秀逸だよ。配給元も実力のあるところだしね。ただ、勢いだけの作品だから続編は作らない方が賢明だろうね」

「監督にはファンの意見として伝えておく」

キラという男はよくも悪くも嘘をつくということをしない。自分が周りからどう思われているかに興味がなく、そのため、映画でどうこき下ろされていようと気にもしていない。レイやルナマリアとの関係など、その一端であるように思われる。

やはりキラは誰に断ることもなく突然立ち上がった。

「ちょっと知人に会ってくるよ。アスランも知ってる人だけど、くるかい？」

いや。そんなことを言いながら断ると、キラはサングラスの奥でかすかに笑って、それから歩きだした。ミネルヴァのクルーの中にはファントム・ペインの黒い制服が近づいたことであからさまに警戒する者もいるが、もちろんそんなことを気にしてなどいない。オープン・カフェを悠々と歩いていく。

そんな幼なじみの姿を見送りながら、アスランはつい曖昧な笑みを浮かべてしまう。

「いつでもどこでもゼフィランサスのことばかりだ。ユニウス・セブンにいた頃から何も変わってないだろ」

「そうだな。……この国にはカガリもいると聞いたが？」

ここでレイは初めてコーヒーに口をつけた。その間だけ言葉が途切れた。それはレイなりに話題を変えるための間合いを計ったということであるのかもしれない。

「ああ。1に7、そして9と3もいる。これで、ドミナントが全員、1カ所にそろったことになるな」

アルファ・ワン。今ではアスラン・ザラと呼ばれる初号機。３はギーメル・スリー、今の名はカガリ・ユラ・アスハ。７はレイ自身。テット・ナインはいくつもの名前を経てネオ・ロアノークと今は名乗る。そして残りの５人は死亡したものとされている。

「いや、あと１人足りていない」

レイの言葉に、アスランは考えるまでもなく答えを導き出す。数えられないドミナントが存在する。最強にして始源、プロト・ドミナントと呼ぶべき男の名前を知らないプラント国民は存在しない。

「エインセル・ハンターは何が何でも倒さなければならない。それこそがプラントの悲願だ。俺は、飽くなき正義を示す」

アスランが残りのコーヒーを口に含んだ時、すでにコーヒーは冷めきっていた。

人のいない閑散とした格納庫。ステイガラー級の格納庫であり、４機のＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムが整然と並べられていた。中央に置かれているのはＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダム。傷だらけのその姿はまるで修復された後がない。

また、ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型も修復されることなく格納庫の隅に寝かせられていた。大型のバック・パックは取り外され、足にはビームによって溶かされた切断面が痛々しいまま放置されていた。

アウル・ニーダがいるのは、ちょうどそんな傷口のあたりである。

癖の強い髪が、今は一層乱れている。仲間であったスティング・オークレーがいなくなってから満足に部屋を出ることがなかったアウルはどこかとり憑かれたような様子で愛機の傷口からコードを引っ張りだしてはその状態をつぶさに確認していた。人の腕ほどもあるコードは完全に切断され、熱によって隣あったコード同士が溶接されていた場所もあった。これを修復するとなると、足をそのまま取り替える必要があるかもしれない。

修理のための計画を練るアウル。そんなアウルに唐突に声がかかった。

「おい、何やってんだ、坊主?」

振り向くと、いつのまにか男が資材を椅子代わりに座っていた。すぐ近くにはもう1人別の男が立っているが、声をかけてきたのは恐らく座っている方だろう。褐色の肌は関係ないが、伊達眼鏡にも見えるサングラスをかけたところがとにかく軽薄そうに見えるのだ。反対に、立っている男は全体に色素が薄い印象で、それとはまるで関係ないが厳格な印象があった。

一応、パイロット同士として紹介くらいされたはずだ。褐色の方はシャムス・コーザ。色白はスウェン・カル・バヤン。

「見てわかんだろ、ガンダムの修理だよ」

「やめとけやめとけ。ちょっと乗れるくらいで整備や修理ができるほどモビル・スーツは単純じゃねえよ」

「この艦の整備の連中がしっかり仕事しねえからだろ！」

フィンブル落着以来、まるで修理が進まない様子に、アウルはかまわず息を吹いた。

シャムスは面倒くさそうに頭をかいて、答えてきたのはスウェンの方である。

「この艦には元々ディーヴィエイト用のパーツしか積載されていない。ガンダムは多少互換性がきくが、量産機のようにはならない。幸い、オーブはインテンセティガンダムのライセンス生産をしてる。今、アーノルド副隊長がパーツを融通してくれるよう掛け合ってるところだ」

まるで取り扱い説明書のように要点を押さえ、しかし味気ない言葉だ。同じ部隊でありながらシャムスとはあまりに違う態度に戸惑わないことはなかった。

何より、インテンセティを修復することはできないということがよく伝わる。

「まあ座れよ」

シャムスが椅子代わりの資材を叩く。別に従う義理はない。それでも、修理が事実上不可能であることくらいはわかる。

アウルはコードを手放した。それでも、シャムスの隣に座る気にはなれない。ほんの少しだけ2人に近づいたところで足を止めた。その様子には、スウェンは何の関心を示すことはなく、シャムスはあからさまに肩をすくめてみせた。

「お前が仲間の仇を討ちたいって気持ちもわかるがな、今焦っても機会をすり減らすだけだ。ただでさえ整備性の悪いガンダムなんだ。少し機械をいじれる気でいる素人が手え出しても性能を下げるだけだ」

何だよ、偉そうに。それがアウルの率直な感想である。

「ところで坊主」

「アウルだ」

「じゃあ、アウル。お前の姉さんだけどよ、恋人とかいるのか？」

サングラス男はいたってまじめな様子で、そしてとんでもないことを言い出した。

「い、いるわけねえだろ！」

「よし！　いないんだな」

アウルが力強く否定する目の前で、シャムスは力強く手を握りしめる。そんな色眼鏡へとアウルは近寄りながら声を大にした。

「何企んでんだよ！？」

「子どもにはわからないかもしれないがな、お前の姉さんは美人だ。おまけに家は資産家。これで声かけない方が無礼ってもんだろ」

「ざけんなよ！　お前なんか姉ちゃんとつり合うわけないだろ！」

黒い軍服の胸ぐらを掴まれても、シャムスはにやけた表情を変えようとはしない。

「わかんねえぞ～」

いくら睨んでやってもそのしまりのない顔は変わる気配さえ見せない。そんな時、スウェンが唐突に声を出した。

「では、家族関係はどうする？」

何を言っているのかわからず、アウル、そしてシャムスはそのままの姿勢で揃ってスウェンを見る。

「お父上、エインセル・ハンターはかなりの子煩悩だと聞く」

聞き覚えのある名前だった。ヒメノカリスから父ー養父であるとのことだがーとして何度も聞かされた名前だからだ。何故かこの名前を聞かされた時だけ、シャムスは深刻そうに考え込み始めた。

「……そうか、舅か……」

婿舅問題に考えが及ぶほどアウルは年齢を経てはいない。結論として、ファントム・ペインでガンダムの操縦を任せられるほどのパイロットはどこかおかしい。何なんだ、こいつら。それがアウルの率直な感想となった。

オーブ、オロファト市の片隅の小さな喫茶店は、ひっそりと静ま

り返っていた。元々小さな店で、長引く戦争で観光客もあてにはできない。潰れるほどでもなければ、盛況とも言い難い。そんなちょっと大きな街ならどこにでもありそうな店であった。

オーナーの趣味でインテリアは、お茶を嗜む、そのための空間を演出しているように思える。椅子からテーブルなでお洒落な意匠が施されている。

そんな店の中、若い女性が1人カウンターの奥で洗い物に手を濡らしていた。客がいないのはそれほど流行っていないことはもちろんだが、何より、在庫整理のために午前で店を閉めてしまったためだ。無人の店内で、水音だけが淡々と染み渡る。

女性は独り言さえ発することなく、瞬きさえ忘れてしまったような虚ろな視線で洗い物を淡々と進めていく。その手が止まったのは、客の来店を告げる鈴の音ードアに取り付けられたものだーが聞こえた時であった。

大きく開いた髪が特徴的で、素朴な印象。しかし、同時に刹那的な危うさを女性は持っていた。

「ごめんなさい、今日は、もう、……」

店じまいにしている。そう告げようとした女性の言葉は、来客を見た瞬間に止まった。

黒い軍服を着た若い男が、サングラスを外しながら女性に話しかけた。

「こんにちは、ミリアリア」

「キラ……」

女性にキラと呼ばれた少年は、店の中にまで入ってきたところで水が流しっぱなしだと指摘した。ミリアリア、ミリアリア・ハウは自分の手が止まっていることに気づいて手についた洗剤を洗い落とすなり水を止める。身につけたエプロンで手を拭きながら、それでもその視線に光は灯ってはいない。

「何しに来たの？」

「君がここで働いてるって聞いたんだ。本当は昨日訪ねるつもりだったけど、旧友に偶然再会してね」

ミリアリアは少年のことを知っている。キラ・ヤマト。現在はどんな名前を名乗っているのかは知らないが、４年前、ヘリオポリスのカレッジ・スクールに通っていた時の友人である。ただし、その後戦争に巻き込まれて以来、まともな付き合いさえない。

旧友の言葉に関心を示すことはない。ミリアリアは洗い物を再開しようとさえして、蛇口へと手を伸ばした。

「まだトールのこと、引きずってるみたいだね」

「忘れられるわけ、ないでしょ……！」

蛇口を掴んだところで手が止まる。この時初めて、ミリアリアは心の機微というものを明らかにした。嘆くように、しかし言葉を吐き捨てる。

「恋人の死を忘れないことと恋人の死に囚われていることは意味が違う」

恋人、トール・ケーニヒの死からすでに3年が経つ。最後のヤラファス祭でモビル・スーツの戦闘に巻き込まれ命を落としたのだ。公園跡の石碑にはかつての恋人の名前が刻まれている。

キラの言葉はミリアリアには届かない。その原因となった戦闘を行っていた当事者の1人がキラであると知ったのは事故の後だった。

そして、ミリアリアは怒りに狩られ、復讐のために捕虜であったザフト兵を殺害しようとさえした。その結果、大切な友人を巻き添えにしようとして、復讐するということの怖さを知った。

あの時のことを思い出すと、ミリアリアの瞳は再び光を失う。

「帰って……。お願いだから帰って……」

うつむいたままでは、キラがどのようなことをしているのかわからない。ただ、視界の隅で近づいてくること、そして、カウンターに何かを置いたことだけはわかった。

「ミリアリア。1度戦争を見てみないか？　この戦争はどうして起きたのか。何故戦わなければならないのか。その先にトールが死ななければならなかった理由がきっと見えてくると思うんだ」

キラが置いたもの、それを盗み見ると、それは名刺の類であるようだ。ネオ・ロアノークーそれが今のキラの名前なのだろうーという名前と、大西洋連邦軍少佐という階級が書かれている。もっとも、ミリアリアには少佐がどれくらい偉いのかはわからないが。

「僕たちの艦はまだ数日は停泊している。その間にネオ・ロアノーク少佐を訪ねてほしい」

そうとだけ言い残して、キラは、ネオ・ロアノーク少佐は静かに店を出ていこうとする。見送ることは、どうしてもできずにいた。

「俺たちはオーブを出航後、カーペンタリア基地を目指す」

ブリーフィング・ルームにパイロット全員――とは言え、現在ミネルヴァには4人しかいない――を集め、アスランがまず口にしたのはカーペンタリアという言葉であった。作戦会議には欠かせない台に備え付けのディスプレイには東アジアの地図が表示されている。オーストラリア大陸北部に印が表示されていた。

ディスプレイを取り囲みながらシンはカーペンタリアのことを少しずつ思いだそうとしていた。

「カーペンタリアって言うと、東アジア共和国の？」

オーストラリア大陸北部に位置するカーペンタリア湾に設営されたザフト軍の地上拠点のことだ。プラントとは関係が劣悪である東アジア共和国のほぼ中央にあるため、非常に不安定であると聞いている。軍事力に乏しい東アジア共和国を無理に抑えつけているだけだからだ。

そんな不安が顔に出たのだろうか。アスランは軽く笑う。

「そんなに心配しなくても、今は拡張工事が進んでる。だいぶ軍備が増強されたはずだ」

何と言っても、現在のザフトにおいてカーペンタリア基地は最重要拠点だからな。アスランはこうも付け加えた。

「そこで俺が乗っていた艦と合流しよう。その後、レイや君たちには悪いが、少し俺の任務を手伝ってもらうことになる」

レイ隊長はともかく、任務についてはその内容さえ聞かされたこともない。ついよこのルナマリアを見ると、ルナマリアもルナマリアで助けを求めるようにシンのことを見ていた。

このことを、アスランは勘違いしたらしい。

「いや、君たちの任務の重要性は理解しているつもりだ。邪魔しようって言う訳じゃない」

不満も何もない。どう答えてよいものかと苦慮している内に、これまで一言も発することのなかったレイ隊長が動いた。

「アスラン、この2人はミネルヴァの正規の搭乗員ではない」

「それじゃあ、任務について何も聞かされていないのか？」

そのことはうすうす察していたのだろう。アスランは思いの外反応が薄く、同時に飲み込みが早い。

「わかった。さすがに機密までは明かせないが、ある程度の範囲で話そう」

「いいのか？」

「訳も分からず引っ張り回すわけにはいかないだろ。グラディス艦長には俺から話しておく」

「まずその前に紹介しておきたい人がいる」

そう言うと、アスランは軍服のポケットから掌サイズの円盤――形はコンパクト・ミラーの類によく似ている――を取り出すなり、台の上に置いた。見た目よりも重そうで、側面にはセンサーの類が取り付けられたもので単なる手鏡であるはずがない。

紹介したい人とこの装置がどう繋がるのか。シンの疑問に答えを示して、装置の上部から光の柱が立ち上った。光の中に姿を見せたのは赤い瞳を持つ少女であった。

「思ったよりもずいぶん早いね」

ネオは感じた思いを率直に口にした。喫茶店で誘いをかけてからまだ2時間と経っていない。それなのに、ミリアリアはステイガラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦の格納庫に姿を現した。

まだエプロンを身につけたままで、旅行鞄からは衣類の切れ端が覗いている。よほど急いで準備をしたことがうかがえる。

「オーナーには怒鳴られたけど」

ご両親には。そう尋ねるネオに対して、ミリアリアは後で連絡を入れておくとにべもない。

トールを亡くして以来どこか自暴自棄になりつつあるミリアリアの危うさが決断を早めたらしかった。ただ何にしろ、戦艦へと誘ったのはネオの方である。

「ようこそ、ミリアリア。簡単に僕の部隊を紹介しておこうか」

踵を鳴らし、ネオは格納庫の奥へと向き直った。疎らな整備組と違いパイロットは全員が揃っていた。パイロットなんて人種は時間さえれば自分の愛機を眺めたいような人ばかりだ。

まず目に付いたのは、積み込まれた資材の側で資料片手に在庫確認に余念がないアーノルド・ノイマン。足音だけで気づいて、アーノルドは振り向いた。足をとめ、ミリアリアが追いつくのを待ってから話を始める。

「アーノルド・ノイマン。僕の隊の副隊長で……」

「フレイとお付き合いされている方ですよね。以前遠巻きにデートしてるの見ました」

もう4年近く前のことなのに、ミリアリアはよく覚えている。アーノルドはどう答えてよいものかわからず頬をかいていた。わかっているならもういいだろうと再び歩き始める。

続いて見えてきたのは3人の隊員たち。3機のＧＡＴ－３３３ディヴィエイトガンダムが見える位置にたむろしている。男性が2人に女性が1人。

「スウェン・カル・バヤンにシャムス・コーザ。後、ミューディー・ホルクロフト」

シャムスがミリアリアになれなれしい様子で手を振っている。

「何かわからないことがあったらシャムス以外の誰かに聞くといいよ。シャムスは女性に手が早いから。まあ、3枚目だから危険はないよ」

「隊長、もう少しましな紹介の仕方ないんすか？」

大げさに嘆いてみせるシャムス。あんな風によくも悪くも深刻な雰囲気が似合わない男なのだ。

同じ場所から、今度は破壊されたインテンセティガンダムの側で何やら話をしている少年少女の姿が見える。さすがにミリアリアも2人の様子を見るなり、表情を変えた。戦争をするには若すぎる。そう考えたのだろう。

「アウル・ニーダとステラ・ルーシェの2人はまだ合流したばかりでここにはあまり慣れてない。それに、仲間を失ったばかりだから少しでも気を使ってもらえるとありがたいかな」

ミリアリアはすぐには納得できなかったのだろう。しばらく子どもたちのことを眺めて、それからようやく首をネオの方へと戻した。そして、再び瞳孔を拡散させることとなる。

ネオのすぐ側にいつの間にやらヒメノカリス・ホテルの姿があった。すでにいつものような白いドレスに身を包み、状態は万全であ

るらしい。どこか神出鬼没なところは、第3研の3姉妹の特徴のような気がする。

ネオの旧友が驚いているのは別にヒメノカリスの姿が原因ではない。友人であるアリス・インディアとあまりによく似ていることが信じられないのだろう。同じ青い瞳をして、桃色の髪の鮮やかさは変わらない。表情以外であれば、ヒメノカリスとアイリスはよく似ている。

「彼女はヒメノカリス・ホテル。アイリスも、双子の姉だと思っておけばいいよ」

ここでは敢えて、ネオはすべてを語るつもりにはなれなかった。ミリアリアにとってはすべてが新しいことで、色々話して聞かせるには早すぎる。そう考えたからだ。

「誰？」

「ミリアリア・ハウ。僕がオーブにいた頃の友人だよ」

同じ顔であってもヒメノカリスとアイリスとではずいぶん様子が違うのは今更のことだろう。とりあえず名前を聞いただけで興味を失ったらしい。ヒメノカリスがそれ以上ミリアリアについて尋ねてくることなかった。ミリアリアはまだ信じられない様子であったが、ヴァーリについてここで話すつもりはない。

「最後に僕のパートナーを紹介しておくよ」

ネオは自身の愛機を、ＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンを見上げた。ここなら立体映像投影装置を使う必要もないだ

ろう。

「アウル、ステラ。君たちもこっちへ」

声をかけると、ステラは素直に来てくれるが、アウルはしぶしぶと言った様子である。きっと、ヒメノカリスがネオの近くにいなければ応じることもなかったことだろう。

ミリアリアとヒメノカリスはすでにそばにいる。ステラとアウルの到着を待ってから、ネオはラインルビーンへと手をかざした。ラインルビーンの胸部のあたりから光が舞い降りた光がネオたちの目の前で像を結ぶ。赤い瞳と白い髪をした少女の姿が浮かび上がった。

ハイネ・ヴェステンフルスはザフトの軍人であった。赤服とＺＧＭＦ－２３Ｓセイバーガンダムを与えられるほど軍学校では優秀な成績を納め、初陣をＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガー３機撃墜という目覚ましい戦果を上げた。

鮮やかな金髪の手入れを欠かしたことはない。いつも人の前に出ようと心がけ、そのためか、周りからは伊達男だと思われていたようだ。

戦績は十分。後ろで隠れているなど性に合わない。そんなハイネが地球行きを志願したのは至極当然のことであった。

フィンブル落着の時、ハイネは小惑星の欠片に紛れて地球へと降りた。地球の軌道艦隊はフィンブル迎撃に戦力を割かれ、レーダー網は破片がノイズとして写り込む。

安全かつ密かに地球へと降下するには絶好のタイミングであった。火事場泥棒同然の行為だが、ハイネは努めてそれを気には留めないことにした。相手の隙や弱点をつくのは戦いの基本であり、中途半端な情けは戦場では足かせにしかならないとわかっていたからだ。

そして、それはすぐに証明されることとなった。

大気圏降下用の特殊装備が施されたボズゴロフ級潜水艦は内部に多数のモビル・スーツを搭載したまま無事大西洋西岸へと降下を果たした。計画通り。そう確信した指揮官がギルバート・デュランダル議長に負けじと大演説を打ったところで、ハイネは自身の考えの確かさを確認することとなった。

突如鳴り響く警報。事態を把握する間もなく天井が割け、大量の水が格納庫へと流れ込んできた。

敵襲だと即座に確信できた訳ではない。波に足を取られ体が壁へと押しつけられた。全身が水に濡れた頃、強い揺れが水を震わせた。ＧＡＴ－２５２インテンセティガンダムが天井を突き破り膨大な水とともに格納庫へと突入してきたのだ。

再び押し寄せる水の塊。ハイネは流れ着いた小型コンテナにしがみつくことで辛うじて耐えた。水中戦に優れているとされるインテンセティは三叉戟を動かないセイバーガンダムへと突き立てるなり、フェイジシフト・アーマーが発動していない装甲を軽々と貫通する。その次の瞬間にはすぐ隣のセイバーが腹を引き裂かれた。

ハイネはコンテナを手放すなり必死に泳いだ。水の勢いは強く、すぐそばで仲間の腕が波に呑まれていく様が見えた。構ってなどい

られない。自分が溺れてしまわないように精一杯で、とにかく手足を動かした。１つの幸運があったのは、水の流れがちょうどコクピットの位置までハイネを運んだことだ。

水はすでにモビル・スーツの腹部にまで満ちている。開かれたままのコクピット・ハッチの縁に手をかけ、無理矢理体をコクピット内へと引き上げる。流れ込んでくる水とともに、ハイネはシートへと叩きつけられた。

ベルトを絞めている余裕はない。ハッチを閉め、システムを立ち上げるとともにハッチを閉める。コクピット内部に残された水は排出口を通じて機外へ。水位は見る間に下がっていた。

モニターが光を映し出すと、強烈な光が格納庫を包んでいた。

敵のインテンセティが甲殻類を思わせるバック・パックを被り、ビーム砲を放ったのだ。格納庫からブリッジの方向へと。内部にまで装甲を張り巡らせる戦艦などない。少なくとも、ビームの直撃に耐えられる強度があるはずがなかった。

壁に風穴が開き、そこへと水が流れ込んでいく。急に潜水艦が沈み込んだのは、深刻なほど浸水してしまったことを意味していた。この船は沈む。

ハイネはセイバーを動かした。全身が青いインテンセティとは正反対と思えるほど深紅の機体である。右手にはビーム・ライフル。左手にはシールド。そして、バック・パックには2門のビーム砲と翼を持つ。

どれも狭い艦内で使用できる兵器ではない。

迷っている暇はない。悩みは命取りだ。ハイネは歯を強くかみしめるなり、セイバーを突進させた。

腰まで水に浸かっているため動きが鈍い。ミノフスキー・クラフトで無理矢理機体を突撃させ、こちらを振り向きつつあったインテンセティへと体当たりを食らわせた。シールドを前に、ガンダム同士を激突させたのだ。

合計１４０ｔを超える衝撃が波を立てた。インテンセティは２枚のシールドを構えこちらのことを受け止めていた。ナチュラルにしてはいい反応だ。

だが、この１撃の目的は攻撃ではない。ただ押せさえすればそれでいい。セイバーは勢いをそのままインテンセティを押し切ろうとするも、２機のモビル・スーツは下半身が水に浸かっている。勢いはやがて吸収され、シールドをぶつけ合う姿勢のままで止まってしまった。

インテンセティのシールドの表面には、青い薔薇のエンブレムが描かれていた。

これでいい。セイバーの体を水が濡らす。天井から降り注ぐ水が柱となってセイバーを包んでいた。そう、すぐ真上には大きな亀裂が走り、真下のポジションを奪うことができたのだ。

水の中でミノフスキー・クラフトが輝きを放つ。ハイネは仲間への未練を振り切ってしまう心地でアクセルを力任せに踏み込んだ。降り注ぐように叩きつける水の中をセイバーが無理矢理浮上する。インテンセティの放ったビームがつい先程までセイバーがいた場所

を通り抜けた。膨大な熱量に水が蒸発し、水蒸気が文字通り爆発的な速さで噴出する。

天井の穴を通り抜けた途端、セイバーを爆発に揺らされた波が襲う。ガンダムを、フェイズシフト・アーマーを引き裂くほどではない。ベルトを締めていなかったことが災いした。ショック・アブソーバーでも堪えきれないほどの揺れガハイネへと降り懸かり、記憶があるのはここまでである。

目覚めた時、ハイネは病室に寝かせられていた。服は病院衣に着替えさせられているが、拘束具の類はない。拾ってくれたのはどうやら味方のようだ。

立ち上がり、ベッドの周囲に取り巻かれていたカーテンをどかす。状況を聞こうと医者の姿を探すが見つからない。左右見回して見ても医者らしい人物は見あたらない。ただ1人いるとすれば椅子に足を組んで座る女性が1人だが、とても医者には見えない。

緑の黒髪が長く背中にまで延びている。切れ長の目を細い顔のなかなかの美人で、ハイネのことにはすでに気づいているようだ。服は黒を基調としたもので、敢えてたとえるなら魔術師のような凝った意匠が施されている。

さて、医者はどこだろうか。

「打ち身が3カ所。擦り傷が1カ所。ベルトもつけずに乗り回していた割に、君はずいぶんと悪運が強いようだ」

容貌に違わず凛々しい声をしている。その手にあるのはカルテだろうか。医者と言えば白衣が相場と考えていたが、何事も例外はあ

るらしい。

「俺はハイネ・ヴェステンフルス。状況は理解しているかも知れないが、地球降下部隊の者だ」

「私はロンド・ミナ・サハク。この艦の船医をしている。そして君はその患者だ」

「俺の他に生存者は？」

「水深１００m近い場所にいきなり投げ出された人間が助かる術があるなら教えてもらいたいものだ。それに、君とて我々が見つけたからいいものを、鉄の棺桶の中で鮫の餌にもならず漂うところだった」

格納庫にいた仲間はほぼ絶望的だと理解していた。艦内にも水が入りすでに深度を維持でいなくなっていた。

仕方がなかった。水中戦を想定していないセイバーではインテンセティにかなうはずがない。格納庫での戦闘を継続していれば艦の寿命を縮めるだけだった。割り切るしかない。

あの時、セイバーを離脱させることこそが最善の策であったのだと。

ハイネが表情を曇らせている間もロンド・ミナ・サハク医師は不敵な笑みを崩すことはない。

「状況を教えてもらえないか。俺のセイバーはどうなった？　この部隊の所属は？　戦況はどうなった？」

「セイバーは無事だ。多少フレームに損傷は見られたが、大したことはないそうだ。この部隊はカーペンタリア基地所属だ。今も基地に向かっている。大部分の降下はうまくいったようだ。カーペンタリアでは今頃大量の物資の相手に大わらわだろう」

では運悪くハイネが所属していた部隊がたまたま襲われた方に入ってしまっということか。青い薔薇のエンブレムを身につけたファントム・ペイン直轄のインテンセティ。地球に来て早々、目標ができたようだ。

「それで、次は何を聞きたい？」

言いながら医師は足を組み替える。タイト・スカートなので医者にしては不必要なほどに色っぽい。

では次は何を聞こうか。そう考え始めた途端、艦内に突如警報が流された。艦内放送で第１種戦闘配備への移行が告げられる。

「敵襲か！」

言うや遅しとハイネは医務室を飛び出した。艦内構造を見てすぐにわかった。この艦も同じボズゴロフ級である。構造は熟知している。呆気にとられる人々を避けながら通路を走る。ここがブリッジ。そう知っている扉一一潜水艦故か昔ながらの鉄扉が採用されている一一を開けると、窓１つない薄暗いブリッジが見えた。

「艦長はどこにいる！？」

宇宙戦艦のようなわかりやすい艦長席などない。狭苦しいブリッ

ジの中央の長髪の人物――後ろからでは男女の区別がつかない――が振り向いた。

「私だ」

その人物は目の前にいる。それでもハイネは思わず後ろを向いた。すると後ろにはいつの間にか追いついていたロンド・ミナ・サハク医師の姿があった。視線を戻すと、正面にもやはりロンド・ミナ・サハクの姿があった。もう一度振り返ると、やはり医者は妖しく笑っていた。

「彼は私の双子の兄でね。名はロンド・ギナ・サハク。サハクでは紛らわしい。ギナ艦長とでも呼ぶといい」

ギナ艦長は妹とほどよく似た笑い方をする。そして服装まで同じ。よく見れば多少違いがないような気がしないでもない。だが観察する時間もなく、艦が激しく揺さぶられた。

「何があった？」

「敵ストライクダガーに発見された。どうやら、君を拾ったところを哨戒機にでも見つかったらしい。恐らく東アジア共和国の機体だろう」

カーペンタリア湾を押さえられても何もできない国の嫌がらせだ。

潜水艦が再び激しく揺れた。体が壁に叩きつけられた。どうやら、東アジア共和国もようやく本腰を入れることにしたらしい。大方大西洋連邦あたりが軍事支援を強化でもしているのだろう。

「俺のセイバーは出せるのか！？」

「君は病み上がりなんだがね」

「構わんさ。我々がどの程度の拾いものをしたのか、確認するのも悪くない」

この兄妹は立ち上がることもできていないにも関わらず、余裕をなくしてはいない。

「格納庫へ急げ！　詳しい指示は機内で行う！」

上空には合計6機のストライクダガーが飛行している。2機はジェット・ストライカーを装備しているが、残りの4機は砲撃に特化したドッペンホルン・ストライカーで統一されている。水面下のボズゴロフ級潜水艦を狙い撃つのはドッペンホルン・ストライカーの仕事である。大型の大砲を1対そのまま担いだような無骨なストライカーはそれ自体がミノフスキー・クラフトの輝きを放ちながら機体を旋回させる。

ボズゴロフ級潜水艦は潜水艦というよりは潜水もできる輸送艦としての意味合いが強い。潜水深度は必ずしも深くはなく、航行しながらではさらに浅くなる。

合計4機のドッペンホルン・ストライカーから放たれる実弾は水中深くにまで楔を撃ち込み、敵潜水艦を揺らした。

この程度の間接攻撃を繰り返していても撃沈できるとは誰も考え

てはいない。ストライクダガーたちは待ちかまえていた。相手がモビル・スーツを出撃させるために浮上するその時を。

暗い水面に見える影が急速に大きさを増している。海が割れ、飛沫が白く柱を立てた。正面に４つの円筒状の構造を備えた、とても潜水に適しているとは思えない独特の構造をした潜水艦が斜め上に飛びだしさんばかりのいきおいでその姿を現した。

海を持たないザフト軍が独自の技術で開発した輸送潜水艦が巣穴から燻し出された。

「出撃許可は？」

ノーマル・スーツの上着を羽織ったままで、ハイネはセイバーガンダムのコクピットに座っていた。システムを立ち上げ、不備はないことを確認するとともに通信はすでに繋がっている。

「ゼーゴック２機を出撃させるが、ケッテ・リーダーは君でいいかね？」

「了解」

ゼーゴックのパイロットたちと面識はないが、今は緊急事態だ。悠長なことは言っていられない。

ケッテ。元々は戦闘機の戦術用語のことで、３機で１チームを組むことを言う。現在ではすでに２機で１組、ロッテと呼ばれる戦術に取って代わられているが、モビル・スーツ戦術では未だにケッテ

が主流である。3機1組で1個小隊を作り、これがモビル・スーツの最小単位となる。そのリーダーとは、単に小隊長を意味しない。

セイバーの出撃準備は整っている。急速な上昇の後、ボズゴロフ級は落ち着きを見せた。浮上が終わり、今は浮力で水面を航行しているのである。艦体上部は水上に露出し、セイバー頭上のハッチが開かれる。ボズゴロフ級の6つのハッチの内、2つは垂直に取り付けられている。その内の1つを利用して、セイバーが頭上へと飛び上がった。

深紅の機体がまっすぐ上へと飛翔する。どこまでも広い青へと。見渡す限りすべてが青い。どこまで見上げても果てがなく、広がり続けている。そのただ中を、セイバーは飛んでいた。

「これが地球の空か」

思わず見惚れていると、ロックオンされたと警報が鳴り響く。ドッペンホルン・ストライカーを装備したストライクダガーがビーム・ライフルを発射していた。

下図は合計6。恐らく2つのケッテからなる2個小隊の構成だろう。ガンダムとは言え分が悪い。

セイバーとストライクダガーとの間をビームが下から上へと通り抜けた。ゼーゴックによる援護射撃だ。

ZGMF－953ゼーゴックは、ザフト軍が開発した空戦用モビル・スーツである。ずんぐりとした体に、それでも空気抵抗を考えた頭部は細く流線形をしている。バック・パックに畳まれていたウイング――ミノフスキー・クラフトの輝きに包まれている――を展

開し、足をえびぞりに畳むことでモビル・アーマーへと簡易変形をすませ飛行している。ビーム・ライフルを両手に構え、火力、推進力に限ればストライクダガーを超過する機体である。

ケッテ・リーダーはハイネである。このことを理解している友軍のゼーゴックは援護に集中しようとしている。敵もまた、ジェット・ストライカーを装備した2機を前面に出し、残りの4機は後退する。敵のケッテ・リーダーはこの2機だと言うことになる。

ハイネの目標は定まった。

セイバーのバック・パックが輝き、赤く飛び上がる。バック・パックの2門のビーム砲の銃口を頭上へと向けて回転させ、腕を、足を体の軸に合わせて固定する。背中では輝く赤い翼が水平に開くことでセイバーはモビル・アーマーへと姿を変える。推進力の後方への集中。航空力学の恩恵を受けやすい形状。

可変機構を与えられたセイバーに機動力で勝てる機体など存在しない。

ストライクダガーの攻撃は単調で、しかもセイバーの動きにまるでついてこれていない。ビームの光はセイバーをまるで捉えていなかった。

そこへ、2機のゼーゴックからの援護攻撃は入る。小隊の間を抜けるようにビームが軌跡を描き、部隊行動をつき崩す。その隙を逃さず、ハイネはセイバーをジェット・ストライクダガーへと進ませる。

敵はビーム・ライフルを発射しセイバーを近づけまいとする。そ

れをかわしながら現在は双頭の機首を形作っているビーム砲を発射する。細長いビームの塊が飛び出すもミノフスキー・クラフトの機動力は絶大である。ストライクダガーはこの攻撃をかわした。

だが、回避に気をとられすぎている。

「モビル・スーツを腕の生えた戦闘機だと思うな！」

敵が逃げた方向へと加速させる。慌てた様子でライフルを構えようとするがもう遅い。セイバーは変形を解いた。人の姿を取り戻しライフルは右腰にマウントされている。そう、右手にライフルは握られていない。代わりに握られたビーム・サーベルが、輝く刃を構成していた。

ストライクダガーの最期の一撃。放たれたビームを上に飛び上がりかわし、宙返りの要領で敵機の後ろへと回る。セイバーが通り過ぎた頃にはジェット・ストライカーのウイングが斬り裂かれストライクダガーの背中に深く切り傷が刻まれていた。

小隊の中で攻撃力を一手に担う。それがケッテ・リーダー。

夢を叶えましょう。そのための方法は2つあります。人を従わせるか神に従うかです。人を従わせることもいいでしょう。でもそれは、決してままならない人の心に依った不安定な力に他なりません。神を信じることもいいでしょう。神は結局、人がどう信じたいかに左右されてしまいます。

夢を叶えましょう。たとえそれが茨の道としても。

夢を恐れましょう。それが、あなたを幸せにしてくれるとは限りません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「赤と黒」

ダムゼル。それは夢と力を花言葉に持つ華々の名前。

第１２話「赤と黒」

暗い闇が部屋に満ちる。中央をテラスわずかな光だけが照らしている。それは、光が必要とされていないから。ただ、六角形のテーブルを照らし出してさえいればいい。

花と名付けられた少女たちが集う。６つの辺の５つだけにそれぞれ少女たちがつき、座している。それは、最後の空席に誰も座ることを期待していないから。５人がそろえばそれでいい。

少女は５人。しかれど顔は１つ。

桃色の髪をした少女はＧ。上座など求めようもないテーブルにありながら、少女の座る場所こそが至上と誰もが認めている。ガーベラ・ゴルフとして生まれ、ラクス・クラインを名乗ることが許された。

テーブルの中央に描かれた稲穂を加える犬の紋章。クライン家を象徴するその象形を眺め、ラクスは顔を上げた。礼装のようで、そして儀礼的にも思える衣服と相俟ってその姿は神秘的とでさえあった。

「すべての時が集まろうとしています。お父様がお望みになられた夢が現実のものになろうとしています」

かつて歌姫と知られた当時そのままに、その声は澄んだ響きを持つ。

青い髪をした少女はＰ。白衣にワンピース。アンアランスな格好

はかつてと変わらず、しかしその顔には排他的な笑みが宿るようになりつつある。第3に数えられるダムゼル、サイサリス・パパ。

「私たちダムゼルはそのために生み出された」

緑の髪。青と緑のオッド・アイの少女はD。デンドロビウム・デルタはかつての約束通り、妹と変わらぬ服装をしている。異なるのは鏡合わせのように対称であることと、いつも不機嫌そうな顔かたちのみ。

「そのためには、エインセル・ハンターを探し出してぶっ殺す、だろ」

「はい。革命には独裁者の血が必要です」

ラクスの言葉に曖昧な笑みを浮かべたのは黒髪の少女。アルファベットはN。ニーレンベルギア・ノベンバー。赤いドレスを身につけたその姿は、この場に参列を許されないヒメノカリス・ホテルと色が異なっているだけでしかない。

「エインセルさん、殺すにはもったいないくらい格好いい人だけど」

言葉を発しないEを含めた5名の少女がクライン家の紋章を囲んでいる。当主たるラクス・クラインに睥睨されながら。

「わたくしたちは誓い合わなければなりません。お父様が望まれた、クライン家1000年の夢のため」

至高の娘にして最高のダムゼル、ラクス・クラインが立ち上がる。最初に従ったのはサイサリス。サイサリスが立ち上がった次の瞬間

にはデンドロビウムが行動を起こしていた。わずかに躊躇を見せたニーレンベルギアであったが、ため息をつきながらも立ち上がる。

その中で最後まで立ち上がらなかった少女は緑の髪とオッドアイの少女。デンドロビウムとは反対の瞳の組み合わせをして、反対側に三つ編みを垂らしている。少女はE。エピメディウム・エコーは立ち上がらない。

「エピメディウム」

ラクスの言葉に、エピメディウムは人なつっこく、同時に乾いた笑みを浮かべた。

「僕は、お父様の夢がこんな方法で実現できるとは確信が持てない」

この言葉は少なからず驚きをもって迎えられた。お父様、今は亡きシーゲル・クラインの意向にダムゼルは決して逆らうことはない。その前提にはかつて大きな例外が存在し、そして今、揺らいでいる。

机を強く叩く音。エピメディウムにとって姉にあたり、同じ第2研出身のデンドロビウムが歯を剥き出してエピメディウムを睨んでいた。

「私たちが疑ったら、フリージアの死が犬死になる！」

1つの研究室から3体までロール・アウトされた姉妹の中で、2人の姉を助けるために命を落とした末妹の名前を上げられようと、エピメディウムは微笑みを崩さない。ただし、そこには寂しさが混ざり込む。

「それで間違った結論を導いてしまったらそれこそ犬死に以下だよ」

「お父様の御心を疑うのですか？」

ラクスは努めて平静に、普段誰に見せるとも同じように爽やかな微笑みを崩すことはない。

「ラクスが頑張っていることも知っているよ。それに、君は至高の娘だって言うことも理解してる。でも、お父様を独占して欲しくないんだ」

ラクスはラクスであってシーゲル・クラインではない。そして、シーゲル・クラインはもうどこにもいない。

「僕は賛成できない。まだ、ね。少し考える時間が欲しいんだ」

「時間ならあったろ！」

再び、デンドロビウムが拳をテーブルへと叩きつける。鈍い音が照明に乏しい部屋に響く。

「デンドロビウム姉さん、今のオーブは身の振り方に大変悩んでる。とても大切な時なんだ」

オーブが世界安全保障機構に参加すべきか否か。それはすなわち、プラントに協力しないことをも視野に入れていることを暗に示していた。サイサリスがその眼差しの暗さを増していくにも関わらず、ラクスは何も変わることはない。

「昔、神祖ジョージ・グレンは言っていた。足の速い子どもは幸せ

だって、賢い子どもは幸せだって、目のいい子どもは幸せだって。でも、本当にそうかな？」

かつて、すべてのコーディネーターの始祖とも言えるジョージ・グレンが世界に向けて遺伝子調整技術を公表した際に述べた言葉を知らない者などいない。あれからすでに５０年あまりが過ぎようとしていた。

その間にあった様々なこと。それをほんの少しだけ、エピメディウムは紐解いていく。

「昔、オーブでドレッドノートガンダムが暴れたことがあったよね。その時、パイロット、プレア君だね、彼は本当に幸せだったのかな？　まだほんの１０歳だよ。確かに優れた才能を発揮したけど、命を亡くすにしてはあまりにも若すぎるじゃないかな」

「会ったこともないガキのこと考えてお父様を裏切るって言うのか？」

「確かに、僕よりもサイサリスやニーレンベルギアの方がいいかもしれないね。サイサリスはプレア君のことを直に知ってるし、ニーレンベルギアはいろいろな人を見てきただろうから」

サイサリスはプレア・レヴェリーの上司をしていたことがある。ニーレンベルギアが開発したブーステッドマンと呼ばれる強化人間は様々な弊害が指摘された。

どちらも、人を人と見ることを忘れ、単に数値の多寡によって評価したことの悲劇を表している。少なくとも、エピメディウムはそう考えていた。

ニーレンベルギアは明らかな動揺を見せた。

「でも、僕だって苦労はしてるんだよ。オーブのためにありたい、でも、それは時にお父様の意向に反してしまう」

お父様に逆らうことなんてできるはずがない。笑いながら、しかしエピメディウムは戸惑っているように手振りが混迷している。嘆息してから、エピメディウムは顔の間で組んだ手の中に視線を埋没させた。

「お父様がいなくなって、正直僕は自分が見えないんだ。一体何をすべきで、どうしたらオーブとお父様のために働けるのかって」

もう、そのことを教えてくれるお父様はいないのだ。

「その気持ちなら、私にもわかる気がします、エピメディウム姉さん」

ニーレンベルギアが素直に気持ちを示す横で、デンドロビウムは悔しいとも歯がゆいとも見える様子で歯を噛み合わせていた。

「少しでいい。少しでいいから時間をもらいたいんだ」

ラクスは何も変わらない。サイサリスはすでにエピメディウムを睨みつけるようにさえなっていた。

ダムゼル。乙女として認められた6人の中からゼフィランサス・ズールという離反者が出た。そして今、お父様という羅針盤を失った5人は迷走を始めようとしていた。

「大丈夫だよ、ゼフィランサスみたいに駆け落ちなんてしないからさ。何と言っても相手がいないからね」

エピメディウムは微笑んで、しかし立ち上がることは決してなかった。

アスラン・ザラ。フェイスであり、ザフト軍の英雄である男が差し出した装置から立ち上る光は像を結び、それは1人の少女の姿を照らし出す。

赤い瞳が鮮やか。白くとも艶のある髪は大きくロールが巻かれ足下に届くくらいに長い。ヘッド・ドレスやフリルが施された長いスカート。ほんの2、30cmの大きさの立体映像であることもあって、緑色のドレスを身につけたお人形か妖精のようにも見えた。

人形や妖精。そのたとえをそのまま容姿についても適応したくなるほど、小さな少女は綺麗な顔をしている。かつてシン・アスカがミーハーな同僚の話についていけなくて格納庫に逃れた時に見た少女だ。

「女の子……？」

ルナマリア・ホークがそうつぶやく横で、シンはその顔に既視感に襲われていた。人形の少女の顔が、オーブで出会った女性、ヒメノカリスに似ているように思えて仕方がなかった。

シンがお人形を見ていると、お人形もまたシンを見ている。ずい

ぶんぶっきらぼうな様子で、何も言おうとしない。

「翠星石、挨拶くらいしないか」

アスランの言葉に、翠星石と呼ばれた人形はその白い指でテーブルの縁をなぞるように指し示した。

「その線」

テーブルの縁のことだと思われる。

「その線からこっちに入ってくんなです、チビ人間！」

姿も綺麗で声も綺麗で、しかし口調はどこか荒々しい。その癖最後だけは丁寧語とよくわからない。ただ、接近禁止命令を唐突に発せられてしまったと、シンは完全に思考を停止して戸惑うほかなかった。それはルナマリアも同じである。アスランだけがおかしそうに笑っていた。

「すまないね。翠星石は人見知りが激しくてちょっと臆病で、それでいて毒舌なものだからすぐに攻撃的な発言が飛び出すところがあるんだ」

何か怒らせるようなことをしただろうか。翠星石は完全にシンを敵視すると決めたようで、そのまなざしは不機嫌かつ鋭い。

「アスランさん、この子は一体……？」

普段明瞭な口調のルナマリアでさえ完全に困惑している。

「この機体はＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルン。ゲルテンリッターと呼ばれるゼフィランサス・ズールが手がけた7機のガンダム、その3号機だ。翠星石は擬似人格インターフェイス、つまり、ヤーデシュテルンの心だよ」

何故兵器に心を持たせることにしたのだろう。そもそも、それなら別にこんなお人形のように着飾った少女の姿をしている必要などないのではないだろうか。

そんな疑問に先回りして答えてくれたのはレイ・ザ・バレル隊長である。

「要するに人工知能ということだ。姿はゼフィランサス・ズールの若い頃がモデルとされている。ゼフィランサスはユニウス・セブン休戦条約以後新たに7機のガンダムを造り上げた。そのすべてに少女の姿と女性の人格が設定されている」

要するに、心はともなく、開発者が在りし日の自分を思い浮かべて姿を与えたということなのだろう。

「でも、ゼフィランサスって人、大西洋連邦に逃げたって聞いてますけど」

「そんなところからが機密にあたるんだ」

ルナマリアの言葉に、アスランはいたずらっぽく笑いながら答えた。

「レイの任務は敵側、つまり地球が保有しているゲルテンリッターの破壊ということになる。たとえば、ネオ・ロアノークの保有して

いるラインルビーンは5号機。オーブではカガリ・ユラ・アスハが2号機を所持している。それに、初号機はエインセル・ハンターの手元にあるはずだ」

「エインセル……、ハンターですか……」

つい先日仇と判明した男の名を、シンはつい拾い上げた。それを目ざとく見つけたのはアスランである。

「そういえばシン、君のことはまだ聞いていなかったな。君はオーブの出身なのか？」

「ええ、まあ。アブディエルって奴ですから……」

「そうか。それなら正規兵に突っかかりたい気持ちもわかる。ただ、どうして国を出たんだ？　そのことについて差し支えなければでいいが、聞かせてもらえないか？」

多少理解を示されたところで、正規兵なんて外人部隊――そもそも移民の部隊をこの名前で呼ぶこと自体おかしなことだが――のことを使い捨てられる駒としか考えていないという認識はそう簡単には改まらない。

「別に……。俺、母さんと2人だったんですけど、大西洋連邦が攻めてきた母さんが死んだんです。それで……」

逃げるようにプラントに移り住みました。

言葉は歯切れが悪く、要点だけを話すに留めた。別に同情が欲しいわけじゃない。それに、シンと母であるマユ・アスカとの関係は

一言で説明できることでもない。

「エインセル・ハンターが指揮を執ってたって話、本当ですか？それに、黄金のガンダムに乗ってたってことも？」

「本当だ。ただ、俺がフィンブル落着の時に戦ったフォイエリヒに乗っていたのはまず十中八九エインセルじゃない。彼が駆るフォイエリヒガンダムの力はあの程度じゃなかった」

そのフォイエリヒにシンは手も足も出なかった。ではエインセル・ハンターが登場したフォイエリヒガンダムのことなんて想像もできない。大企業の社長で、それでいてパイロットとしても優れている。そんな超人じみた人が存在しているものだろうか。

「エインセル・ハンターって何者なんですか？」

「ブルー・コスモスの元代表で、ラタトスク社の代表。プラントの怨敵。今言えることはここまでだな」

そんなこと、プラントにいるなら子どもでも知っているようなことだ。そしてそれ以上が機密なのだとしたら、結局何も知らないことと同じことだ。

シンはエインセル・ハンターがどんな人かさえ知らない。雲の上の人とでも言うのだろうか。仇は手の届かない場所にいる。このことが不快でないはずがない。左の頬が疼いて、しかめっ面になる。

「お母様の仇をとりたいですか、ちび人間？」

翠星石の言葉にはシンはまた驚かされた。復讐という概念を機械

が理解できるものなのだろうか。何より、勝手にあだ名が付けられている。

「ちび人間て、君の方がこんなに小さいじゃないか」

「翠星石の体は１８ｍですぅ。ちび人間なんて手の上で転がしてやれるです」

胸を張って。本当の人間みたいに表情が豊か。あのゼフィランサス・ズールはどうして兵器にここまで高度な心を与えたのだろう。単に体が小さいだけの人のように思えるが、まだ機械と人と同じように接することには慣れていない。

調子が崩されて仕方がない。

あまりシンのことをからかうな。アスランはあくまでも軽い調子でシンと翠星石のことを見守っている。

「それじゃあレイ、薔薇水晶も出してくれないか？」

レイ隊長が翠星石のと同じような立体映像投影装置――こちらの方が無骨なデザインをしている――を取り出すと台の上に置いた。投影されるのはやはり少女の姿である。

同じく赤い瞳と白い髪。こちらは紫の花びらを思わせるドレスを着ている。

「薔薇水晶。ローゼンクリスタルのＡ．Ｉだ」

「こ、こんにちは」

こちらは翠星石と反対に反応が薄い。つい話しかけたシンに構うことなくどこを見ているでもない。

「翠星石ちゃんとはずいぶん様子が違いますね」

ルナマリアもまた同様の戸惑いを感じる中、レイ隊長は冷たく言い放った。

「兵器に心など必要ないからな」

ＺＺ－Ｘ３Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンから放たれた光が赤いドレスを身につけた少女の姿を描き出す。ドレスを染める紅よりも鮮やかな赤の瞳。ツインテールに巻かれた髪は白髪とは異なる艶めいた白をしている。ゼフィランサスを幼くしたようなその顔は静かで落ち着いた表情をたたえている。

「私は誇り高きゲルテンリッターの第５モビル・スーツ、真紅」

「これ、ゼフィランサスさん！？」

ミリアリア・ハウが旅行鞄が倒れることも構わず声を上げた。ここに集まるすべての人の注目を集めながらも真紅は動じることはない。

「モデルはゼフィランサス自身だからね。だいたい１０歳と少しくらいの時かな。まあ、人格は自然と構築されたものだけど。元々ガンダムに搭載されていたアリスには個性と学習能力がある。いや、

学習能力があるから個性があると言うべきかな。どちらにしろ、それぞれのガンダムで、それぞれのゲルテンリッターが育つんだ。真紅は僕がストライクに乗っていた時からずっとそばにいてくれた」

真紅は気高い。感謝したことをきっと喜んでくれていると思う。それでも、平静を装って冷たすぎずやかましくもない静かな表情を浮かべている。

アウル・ニーダが粗相をするまでは。

「スカートの中とかどうなってるんだ？」

そう立体映像を下から少年がのぞき込もうとした瞬間に、ラインルビーンがけたたましい音を立てた。思わずのけぞり尻餅をつくアウルを、真紅は少し怒りを含ませた表情で見下ろしていた。

「人間の雄は想像以上に下劣ね」

「何だよ、いきなり！」

転んだ姿勢のままアウルが叫ぶ。ネオは手を差しだし、アウルをまずは立たせることにした。

「あまり失礼なことはしないようにね。それに、僕にとって真紅やほかのゲルテンリッターは娘になる。父親としても、娘たちへの非礼は認められないな」

娘。そんな言葉に反応を示したのはミリアリアである。

「ああ。ゲルテンリッターはゼフィランサスが造ったものだし、僕

はゼフィランサスの夫だよ。それに、開発には僕も若干関わってるから」

そのため、彼女たちゲルテンリッターはネオのことを父と呼び慕ってくれる。

「ゼフィランサスさんと結婚したんだったけ。招待状はもらったけど、行けなくてごめん」

いいよ。そう返事をしてく。結婚式自体はすでに3年前だが、ミリアリアにとって恋人を失ってから半年も経っていない時期だったろうから。

3年前、海の見える教会でキラ・ヤマトとゼフィランサス・ズールは永久の愛を誓った。

ミリアリアは真紅の顔を眺める。赤いヘッドドレスに縁取られた顔は見れば見るほどゼフィランサスに似ている。もっとも、ネオにとって5歳から15歳までのゼフィランサスは空白でしかない。実際10歳前後のゼフィランサスと似ているのかどうかはわからない。ミリアリアは、しかしそんなことを確認している訳ではないだろう。

真紅とヒメノカリス。この2人の間をミリアリアの視線は力なく泳ぐ。

「ねえ、キラ。やっぱりおかしいよ。ヒメノカリスさんとアイリスが双子だって言っても、ゼフィランサスさんとも顔が同じなんて変よ」

ミリアリアは何も知らない。4年前、恋人のトール・ケーニヒと

ともに戦艦を降りて、ヴァーリというものからも戦争からも遠く離れて生きてきたはずだ。あのヤラファス祭までは。

ヴァーリのことを話すことにためらいはあった。そんな弱い父を、真紅はそっと後押ししてくれる。

「お父様、ミリアリアさんにもヴァーリのこと、教えて差し上げるべきだと思いますわ。このままでは、余計な気苦労を背負わせてしまうだけですもの」

元々戦争を見せるためにミリアリアをここへと招いた。その第１歩としてヴァーリのことを語るのは間違った判断ではないのかもしれない。

「後でもいいかと思ってたけど、そうもいかないかな。場所はプラント。時はもう２０年以上も前のことになる」

とある屋敷のとあるテラス。１組の男女がそれぞれ双眼鏡をのぞき込んでいる。そこには港を離れていくラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァの後姿が映っていた。すでに大西洋連邦の戦艦は数時間前に出航している。

このまま居座り続けて圧力をかけられてはたまらないと考えていたが、杞憂に終わったらしい。

「やれやれ、ようやくあいつらいなくなったな」

せいせいした。そんな気持ちを、カガリ・ユラ・アスハは正直に

声に含ませた。

その隣ではもう必要ないと双眼鏡を外したユウナ・ロマ・セイランが親の決めた許嫁の様子を見やった。

「君の兄弟がいたって聞いてるけど、会わなくてもよかったのかい？」

「会ったところで、何か話があるわけでもないしな。それにキラやアスランはともかくレイが姉弟の再会を喜ぶとは到底思えない」

言葉通り、すでにカガリは兄弟の乗る艦から興味を失っていた。振り返り、テラスから早いところ室内へ入ろうと歩きだしている。ユウナもまたそのすぐ後に続く。

「さて、余計な奴らはいなくなったし、後はエピメディウムの帰りを待つばかりだな。正直な話、どう転ぶかはあいつ次第というところがある」

室内に入るなりカガリは近くにあったソファーに腰掛けると、砕けた調子で手を振る。

現在オーブの政治勢力は2つに分かれているとしていい。世界安全保障機構への参加を主張するグループと、プラントよりの行動を維持しようとするグループだ。その内、エピメディウムは親プラント派に対して強い影響力を持つ。エピメディウムの意志がそのまま反映されるということはないが、その動向がオーブの最高意思決定に重要な意味を持つことには変わりはない。

そんなエピメディウムは今オーブにはいない。プラント本国へダ

ムゼルの会合があるとして自家用戦艦で行ってしまった。

「カガリ、僕はヴァーリというものを詳しく聞かせてもらったことはない。少しは教えてくれてもいいんじゃないか？」

部屋の隅に備えてあったポットから水をグラス２つに移しながらユウナが尋ねる。

ヴァーリ。エピメディウムをはじめとする２６人姉妹のことを、そう言えばしっかりと話したことはなかった。

「ヴァーリとは元々、ドミナントと並んで次世代コーディネーターを生み出すために行われていた研究だ。特定分野に特化した人材を生み出すことと同時に、どのような遺伝子がどのような能力を発現するかを確認するための試みでもあった。そのため、対照実験として、１個の受精胚をクローニングし２６に分けた。それぞれに別々の調整を施して生まれたのがヴァーリの２６人姉妹だ」

そのため、ヴァーリに属する姉妹は全員同じ顔をしている。髪の色と瞳の色はわざとずらされ、それが９つあった平行研究所の目印となっている。ラクス・クラインを初めとする第３研のヒメノカリス・ホテル、アイリス・インディアが青い瞳と桃色の髪を持つように。

また、その名前はアルファベットに由来する。フォネティック・コードと呼ばれる聞き違え防止のための言い換えをファミルー・ネームに、ファースト・ネームにはそのアルファベットと同じ頭文字を持つ花の名前が与えられた。

「Ａのヴァーリがアリューム・アルファと呼ばれているようにな。

アリュームは花で、Aはアルファと言い換えられる」

ユウナがくれた水を口に含んでいる間、話が一端途切れた。

「その内、特に高い能力があると認められた6人はダムゼルと呼ばれ、父であるシーゲル・クラインの娘であることが認められる。まあ、本当に娘を名乗ることができるのはラクス・クラインだけなんだがな」

26人全員が成功と認められた訳ではなかった。20人は駄作としてフリークとひとまとめに扱われる。6人こそダムゼルと呼ばれ成功と認められるが、父であるシーゲル・クラインが認めたのはラクス・クラインだけであった。

「そして、エピメディウムはそんなダムゼルの1人だ。オーブにはプラントへの利益誘導のために送り込まれた。こんなところだな」

もう一度水を口に含む。ユウナもまた、水を飲んでから返事をした。何故か座ろうとはしない。

「じゃあ、今、プラントじゃダムゼルの集まりでもあるということなのかな?」

「全員はそろっていないだろうがな」

よくわからない。そんな顔をしているユウナへと向けて、カガリはつい笑ってしまう。それほど愉快で滑稽な話だからだ。

「ゼフィランサス・ズール。Zのヴァーリで、6番目のダムゼルがお父様を裏切って男と逃げたからだ」

「もっと綺麗な声でお鳴きなさい。天上の天使が聞きほれるほど、気高き頂に住まう神が悩気に狂うほどに」

ここは部屋という輪郭を持たない。ラクス・クライン。桃色の髪を持つ至高のヴァーリの周りを明かりが照らしている。しかしその周りに光はなくその部屋を見渡すことはできない。

床は闇に消え、空間は闇に溶け、天井は闇の果てに沈む。ただラクス・クラインの周囲だけが光を浴びていた。

「さあ、お鳴きなさい」

その白い手が差し出される先に吊された鳥かご。白く美しい鳥がその中でさえずる。その声は主の望む通りに美しく調べを奏でる。

そう、それでいい。鳥は美しくなければならない。主を楽しませる声で鳴かなければならない。この鳥は、そのために生み出されたのだから。もしも醜いとしたら、もしも鳴けないのだとしたら、それはとても不幸なことなのだから。

花は美しく咲かなければならないように。

「ねえ、どうする？　エピメディウム、もしかしたら裏切るつもりかもしれないよ」

闇の中から染み出すのは妹の声。サイサリスがヒールを鳴らしながら光の下に姿を現す。驚いたのか、それとも分をわきまえたのか、

鳥は鳴くことをやめてしまった。

誰が鳴きやんでいいと言ったのだろう。

ラクスの指が鳥かごへと伸びて、しかしその手は止まる。その手を引き戻すと、ラクスはかつてプラントの民を魅了した声でサイサリスの方へと体を向ける。

「お父様の願いを叶えることがわたくしたちの役目です」

「答えになってないよ」

あからさまに不機嫌そうに床を蹴るサイサリス。

さて、温厚で妹思いのサイサリスはこんなにも短気であったろうか。これではまるで、あの日ユニウス・セブンで命を落としたサイサリス・パパと同じ第7研の第3世代ローズマリー・ロメオのよう。

サイサリスとローズマリーは同じく青い髪をして、同じくモビル・スーツの開発を得意としていた。もしも存命していたとしたら、きっとローズマリーもまた、サイサリスと同じ活躍をしてくれたことだろう。

残念でならない。

顔を眺めていると、サイサリスはもっと怒ったような顔をした。ラクスと同じ顔をしたサイサリスは、しかし怒った表情はとてもよくローズマリーに似ている。このままにしていればもっともっとローズマリーに似ていくのではないだろうか。試してみたくなる。

「このままにしてていいなんて考えてないよね？」

「サイサリス様のお言葉通りです、ラクス様」

サイサリスの言葉に混ざりこむ足音と声。また1人闇の中から姿を実体化する。女性である。黒いゆったりとした衣類はどこか儀礼的で、しかしラクスと比べるならそれは禍々しさを持つ。女性自身、長い前髪で右目を覆い隠し、左目は瞬きすることない異様な雰囲気を持つ。

「マティス」

サイサリスにマティスと呼ばれた女性はマティス・クライン。クライン家の傍流にあたり、ラクスの前に来るや片膝をつきかしずく。

「シーゲル様は志半ばで凶弾に倒れられた。ですが、我らが一族の悲願、クライン家１０００年の夢は決して潰えてはなりません。おわかりであるはずです。クライン家のご当主であらせられるあなた様ならば、ご自身のすべきことが」

ひれ伏したままマティスは動こうとはしない。指示を待っているのではない。ただ時を待っているに過ぎない。朝を迎えるためにはただ待てばいい。朝は必ず訪れる。ラクスがマティスに対してかける言葉もまた、すでに決まっていることであった。それは、１０００年の昔から。

「お父様の御心のままに」

鳥が再び、叫ぶように鳴いた。

暗くともの悲しさや寂しさはそこにはない。窓のない部屋を間接照明の柔らかい明かりが照らしている。赤い独特な形状をしたサングラスを身につけたスーツの女性がティー・テーブルを前に慣れた手つきで茶器を並べている。部屋には音楽が静かに流されていた。

「ミーアお嬢様。アフタヌーン・ティーは如何ですか？　ダブリン産の茶葉が入っております」

音楽は人の声を邪魔することはない。聴こえない訳でもなければ、耳障りでもない。

女性の名はサラ・タイレル。落ち着き払った微笑みは気品さえ感じさせて、仕える主人の反応を待っている。

主は、ミーア・キャンベルは豪華な装飾の施された小さな椅子、それでもその背もたれにその姿を隠してくつろいでいることだろう。

「それじゃあお願いします、サラさん。そろそろキングさんやマールさんも戻ってくる頃ですから、２人の分も淹れて上げてください」

明るく朗らかな声だとするのは身内びいきの欲目にすぎないだろううか。そんなことはない。そう、サラは思いなおした。現にミーアお嬢様はよくお笑いになるようになった。

「かしこまりました」

これまで幾度も繰り返してきたこと。お嬢様と穏やかな午後を過ごす。それは決して毎日訪れることではなかったが、こうしてのん

びりとできる日は必ず腕を振るって差し上げた。

あらかじめ暖めておいた茶器にまずはミルクを注ぐ。その上から紅茶を注ぎ入れると茶葉の発する上品な香りが途端に広がる。白と紅。二色が混ざりあい淡いクリーム色になった頃、サラは表情を強ばらせた。

綺麗な茶器に混ざっておかれているのは紙袋。砂糖が入った紙袋がまるで胸でも張っているように小さなテーブルの片隅で存在感を主張していた。サラの目が袋を見ては、逃げるように目をそらす。しかし意を決して、サラは震える手で、しかししっかりと袋を引き寄せた。手にはすでにスプーンが握られている。茶器に見合うようなかわいらしいマドラー・スプーンなど想像してはいけない。計量スプーンほどの大きさのあるスプーンで、砂糖を大ざっぱに袋の中からすくい上げるとそれを紅茶の中へと流し込む。

紅茶のかさが増すほどの量を流し込んで、サラは恐ろしいものでも見たかのような勢いで砂糖の袋を閉じた。目の前にはサラを初めとする部下たち3名分の紅茶と、もはや紅茶と呼んでよいものかわからない新種の飲み物が静かな水面をたたえていた。

こんなもの――たとえ望まれているとは言え――をお出ししてもよいものか。そう、主人の下へと運ぶことに躊躇する。ここまでが日課である。

ただ、今日に限ってはいくつかの点で異なっていた。まず、ノックもせずに不躾な男たちが突然部屋に入ってきたことである。

「ミーアお嬢さん、大変やで！」

まかり間違っても暗殺者の類ではない。訛のある言葉つかいの男は癖の強い髪をしていて、安っぽいスーツが良くも悪くも似合っている。歩き方もがに股で優雅とはほど遠い。何度言っても態度を改めようとしないこの男はキング・タケダ。隣ではマール・ストークスがしどろもどろと頼りなげな容貌を加速させていた。

2人して何をそんなに慌てているのか。サラには、しかし落ち着きのない態度をしている男どもへの反感が先行する。

「ついに、クライン家が、クライン家が……！　あ、これいただきますね」

マールは事もあろうにテーブルからティー・カップを掴み上げるとまるで安酒でも飲むかのように一息に口に流し込んでしまった。

「クライン家が動き出しました！」

「これは偉いことやで！　ただでさえ今のプラントはクライン派が牛耳ってるようなもんや。このままやと、偉いことになってまう！」

これが果たして報告と言えるのだろうか。サングラスの奥でサラは男2人を睨んだ。たじろぐキングと、マール。まったくもって情けない。

サラは男たちをほうっておいて、ティー・カップをミーアお嬢様の下へと運ぶ。椅子に備え付けられた小さなテーブルの上に紅茶一一便宜上、こう呼ぶほかない一一をおいている間も男たちのことを睨みつけることは忘れていない。

「あなたたちもアズラエル家に仕えるものなら、少しは落ち着きな

さい」

こんな男たちでも、3代財団の1つに数えられるアズラエル財団に務めて10年になるサラの同期なのだ。腹立たしいことに。

まったく、せっかくの時間を完全に邪魔されてしまった。サラは仕方なく、ティー・テーブルまで戻ると本当はお嬢様と一緒に穏やかな時間を過ごすはずであった自分用の紅茶を持ち上げる。紅茶はどんな時に飲んでも心を安らげてくれる。すなわち、どんな気分で飲んでもよい。たとえば、慌てる大の男を睨みながらです。

「それで、何が起きているというのですか？」

男2人、顔を見合わせてからでないと話もできないらしい。

「ええ、それが、クライン家が動き始める兆候があります。詳しくは後で資料にまとめますが、政府筋の多くはクライン家の息のかかった者、あるいは一族の人員が当てられています」

「あの議長の絶対的な人気を背景にやりたい放題や。正直な話、今のプラントにクライン家を止められるだけの力を持つ者はおらん」

陶器を鳴らす音が聞こえた。それは小さな音で、ティー・カップが置かれた音である。誰が鳴らしても同じく聞こえるはずの音だが、サラはそこにミーアお嬢様の悲しみを感じずにはいられなかった。

背もたれに隠されてしまい、その姿は見えない。それでも、そのお顔が微笑んでいないことを知ることはたやすい。

「始まってしまうのですね、クライン家1000年の夢が」

「ミーアお嬢様……」

サラと出会った当初、ミーアお嬢様はとても悲しそうな顔をしていた。顔を上げようとせず目を合わせてもくれない。背もたれに隠されたお姿にかつての日を思い起こして、サラは当時そのままの焦りを覚えた。何かをして差し上げたい、それでも何もできることはない。

「お嬢様、何か私にできることはございませんか？」

もしあるのであれば万難排してお力になりたい。それがたとえ、どのようなことであろうとも。誰もがお嬢様のお言葉を待つ間、針の落ちる音さえも拾えるほどの静寂が、椅子のきしむ音をサラへと届けた。白魚のように白いお嬢様の指が、テーブルの脇に置かれたティー・カップをかすかに撫でた。

「とりあえず、角砂糖をもう１つお願いします」

「もう飽和を迎えていてこれ以上は溶かし切れません！」

エピメディウムが個人的に所有する戦艦、テスタメント級ケトビームは戦艦である。そのため、あまり居住性が重視されているとは言い難い。それでも個室にお気に入りの椅子を持ち込むくらいのわがままくらい、認められてもいいだろう。

特に何でもない椅子である。足に磁石が取り付けられている訳でもない普通の木製の椅子は無重力で浮かび上がってしまわないためにテーブルにロープで固定されている。もっと便利な椅子もあると

何度進められてもエピメディウムはなかなかお気に入り野椅子を手放せないでいる。

たとえ、それが苦難を伴うものであったとしても。

会合でのことを思い浮かべながら、エピメディウムは目の前の男の声に耳を傾けていた。オーブ軍のトダカ一佐である。本来軍属であるトダカがあくまでも民間人にすぎないエピメディウムに従う謂われはないが、トダカはエピメディウムがオーブの姫君として拾われた頃からの付き合いである。

すでに初老を迎え、顔には深いしわが刻まれている。厳格とも渋いとも言える顔つきは、エピメディウムを見るときは柔らかさを纏う。

「地球降下はまもなくです。太平洋上に降りますので、オーブ到着までには3時間54分を予定しています」

「ありがとう。僕は政治以外はだめだからトダカがいてくれて助かるよ」

「いえ」

「君ならそう言ってくれると思ってたよ」

エピメディウムが笑うとトダカもまた表情を緩ませる。しかしすぐに表情を戻して、トダカは軍帽を直した。特に大事な話をしようとする時、トダカは知ってか知らずか身なりを正す。エピメディウムもつい椅子にしっかりと座り直した。

「コートニー・ヒエロニムス殿をご存知でしょうか？」

「知ってるよ。デンドロビウム姉さんの側近で、真面目なのに生真面目じゃないっていうちょっと変わった人だよ」

恐らく、トダカは会合の間に知り合ったのだろう。部屋に入ることができるのはダムゼルだけで、付き人は外で待たされる。そして会合にトダカを伴ったのは今回が初めてのことだった。

ただ、このコートニーの話題が本題とは思えない。その証拠にトダカはまだ姿勢を崩していない。

「では、サイ・アーガイル殿は？」

何となく、合点が言った気がした。ダムゼルがどうして精神的に決して安定していないような少年を連れているのかと気にしているのだろう。

それでも、Nのダムゼル、ニーレンベルギア・ノベンバーがサイ・アーガイルを連れている確たる理由は存在する。

「ちょっと変わっていたように感じただろうね。もう20歳くらいになるのに、まるで子どものようだったろ。それはね、戦争が原因なんだ」

今から4年前。大西洋連邦の一部勢力がオーブ首長国の保有するコロニーで新型機の開発を行っていた。それはザフトに露見することとなり、コロニーを破壊するほど激しい戦闘を招いた。それに巻き込まれたのが多数の民間人であり、サイ・アーガイルはその中に含まれる。

サイは仲間を失い、そして自らも傷ついた。

「発見された時は瀕死の重傷で、手の施しようがなかったらしい。それを、ニーレンベルギアがブーステッドマンとすることで救ったんだ。ところが、すでに脳が深刻な損傷を受けていた」

すべてニーレンベルギアから聞いたことでしかない。元々再生医療の一環として開発されていたブーステッドマンという技術を用いてしか、サイ・アーガイルという人間を救うことはできなかった。

「それからのことは悲劇的だったらしい。まず記憶の錯誤。サイはね、友人のことを憎んで、それでも信頼もしていた。なのに信頼を忘れて、ただ憎しみだけでつき動かされて友達を攻撃してしまったりした。そして最後には廃人同様になってしまったらしい」

そのことは今もニーレンベルギアを悩ませている。

「サイは、命こそ救われたけれど、これまでに培った絆を失ってしまったんだ。結局ほとんどのことを忘れてしまって、まるで子どもからやり直しているような状態なんだよ」

途中から、トダカが聞きたがっていること、ニーレンベルギアがサイを側近としていることの説明にはなっていないことに気づいた。でも、トダカならきっとわかってくれるだろう。

「僕はサイを見ていると、その人をその人たらしめているものは、遺伝子なんかじゃ決してない、そう思えるよ」

まさに心そのものなのではないだろうか。

サイ・アーガイルは確かに生きている。それでも、もうサイ・アーガイルはどこにもいない。

人はたった４つのアルファベットで決めつけられていいものでは決してない。

「トダカ、僕は、カガリにすべてを話そうと思う。ヴァーリが、ドミナントが何故作られたのか。そして、クライン家１０００年の夢のすべてを」

人は仲間の死を悲しみます。でもそれは、人が情緒豊かであるからではなくて、単に本能に刻まれているからです。本能が仲間の死に触れる度苦痛として悲しみを与え、種の保存のために仲間の大切さを教え込もうとするからです。それは単なる生体プログラムに他なりません。

悲しまされているのは大切な人の死ではなくて同種の喪失にすぎません。

それでも、掛け替えのない人を失ったという事実は何も変わりません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「若い使者からのレクイエム」

エピメディウム。見守っていてください。あなたが憂いたこの世界の行く末を。

第１３話「若き死者からのレクイエム」

走れば息切れもする。辛くもなる。それはナチュラルであろうとコーディネーターであろうと同じことだ。どこででも人は疲れるものだ。地球から遙か約４０万ｋｍ離れたプラント、ディセンベル市第７コロニー、ディセンベル・セブンで走り込みを行っても地球と同じように体が悲鳴を上げる。

よくありがちなグラウンドに列を作って走る若者たち。視界の隅に教習用モビル・スーツの装甲、武装が取り外された質素な姿さえなければここはどこにでもある学校のグラウンドだと言えた。いくら武装が外されていようとカリキュラムにモビル・スーツの操縦を入れている学校はさすがのプラントにもない。

ここは軍学校。プラントに合計５０を数える軍事教育専門の機関なのだ。

天秤型コロニーの外付けミラーから反射した日の光に照らされた未来のパイロットどもは無言のまま走り込みを続けていた。ただし、例外が無いわけではない。

列の先頭を行く２人の片割れがだらしなく手を振りながら隣の仲間へと声をかけた。いつまで経っても切ろうとしない長髪がだらしないと担当の教官からいつも注意されている。それでも懲りないこの男は走り込みをさせられたくらいでへこたれることはなかった。

「何でパイロット候補の俺たちが走り込みなんてしなくちゃいけないんだよ？」

「教官に聞こえるぞ」

ジャージの袖で汗を拭っていた仲間はその袖に視線を隠しながらグラウンドの内側の様子を見る。何とも運が悪い。ちょうど1周が終わる頃だったため、楕円形のグラウンドの中で中央に立つ教官と一番距離がない場所に彼らはいた。目が合ってしまった。

白いジャージを軍服か何かのように足の先から頭の先まで一直線に着て、使いもしない竹刀を地面に突き立てるように胸の前で持っている。これでもかと切りそろえられたおかっぱ頭の髪をした教官はまだ若い。まだ10代中盤に差し掛かったばかりの彼らとまだそんなには違わないと思えるのだが、教官はすでに実戦を経験している。軍学校を志願するような激しい気性の生徒でさえ、まだ教官に、イザーク・ジュール教官に逆らえた者はいない。

「パイロットだろうが何だろうが、いざという時にものを言うのは基礎体力だ。まだ口をきく余裕があるならあと5周は追加してもよさそうだな！」

グラウンドの線にそって遠ざかっていく生徒たちへとイザークは声を張り上げた。

聞こえてくるのは走り込み中に無駄口を叩いた生徒への非難の声と、教官であるイザークに慈悲を求める声。冗談のつもりだったが、これほど大きな声が出せるのなら本気で5周追加してもいいのではないか。

イザークが生徒たちをもっとしごいてやろうかと考えていると、どうしても目がいく生徒がいた。最後尾に赤いツインテールを揺らしながら必死に仲間についていこうとする少女がいる。

本来なら男女は別々に指導するものだが、イザークは教官の権限として訓練は男女合同で行わせていた。戦場では男ばかりが撃たれるわけでもなければ、女だから甘くみてもらえるということもない。訓練の段階から女だからという甘えを捨てさせるつもりでいた。

だが、少女は周りと比べ明らかに疲れていた。女性だからではない。ほかの女性とは楽にとは言わないまでもしっかりと隊列についていっている。今にも置き去りにされそうなのは少女だけだ。

イザークには思い当たる節がある。プラントの戸籍にコーディネーターと非コーディネーターは分けて書かれることはない。それでも遺伝子調整を受けていない潜在ナチュラルはこの国に確かにいる。そして、コーディネーターから少なからず差別にさらされている。以前そのことを理由にしてプラントを裏切った男がいた。イザークのかつての部下だった。

あれから生徒たちが1周する間少女のことを眺めていたが、やはりナチュラルである可能性が高い。カナード・パルス。かつてイザークを裏切った潜在ナチュラルと少女は同じかもしれない。

「つべこべ言わず走れ！　それなら、追加はなしだ！」

拍手までして喜びを表現する生徒もいる。その中で、少女だけが辛そうな顔をしていた。

この少女1人のために甘い顔をしたとは誰にも聞かせられない。イザークは裏切られたことを不愉快とは感じながら怒りはすでにない。潜在ナチュラルのおかれた状況だけが脳裏をよぎる。もう3年も前のザフト軍宇宙要塞ボアズの戦いで、イザークは、遺伝子調整

を許さないコーディネーターと、コーディネーターという特権階級に虐げられたナチュラルの言葉を聞いた。

「いかんな。昔のことばかり思い出す。俺も歳をとったということか」

イザーク・ジュール。２０歳。年齢に似合っていない厳しい教育姿勢と古くさい感覚の持ち主であることから、生徒たちからは若年寄りのニック・ネームをつけられている。それが実は、かつてガンダムに搭乗することが認められるほどのエースであったと知る者は少ない。

日が沈む。単に外付けミラーの角度が変わっただけであっても、プラントでは日没を日没と表現する。１日のカリキュラムを終え、イザークはロビーのソファー――とは言え、貴族の屋敷にあるような贅沢なものではない――に座りながら名簿を眺めていた。

声をかけてからその横を通り過ぎる生徒に、しっかり休め、そんな労いの言葉をかけては資料に目を戻す。その繰り返しだ。

軍学校では全寮制がとられている。寮には教官の部屋もあり、もちろん男女は別棟で分かれている。教官の部屋はロビーを持つこの中央棟の２階以上にあるが、イザークが部屋に戻るのは基本的に寝るときだけだ。生徒と触れ合う時間を増やしたいと考えているわけではないのだが、部屋に戻ったところですることがない。

生徒たちの管理ならロビーで行うこともできる。１人１人の顔と状態を思い浮かべながら資料に見ていく。するとどうしても手が止

まるのは例の少女、赤い髪のメイリン・ホークのところである。年齢１４。性別女性。生年月日Ｃ．Ｅ．６１．１０．７。出身地アプリリウス・イレブン。プラントの首都であるアプリリウス・ワンと同じ都市であるとは言え、１１番コロニーは低所得者が多く暮らしていることで知られている。どうやら、メイリンが潜在ナチュラル、いや、コーディネーターに辛うじてとは言えついてくることができているならオナラブル・コーディネーターとすべきだろうか。

どちらで呼んだにしても、メイリンが喜ぶとは思えないが。

そう長く眺めていた気はしない。それでも短くもなかったらしい。メイリン・ホークについて調べている時に、メイリン・ホークから話しかけられる、そんな偶然を招くくらいの長さはあったようだ。

「すいません、イザーク教官」

「メイリン・ホークか。どうした？」

資料を閉じる。別に自分のことを見ていたとメイリンに知られてくないと考えたのではなく、成績に関わる情報を生徒に見せることはできない。

「少しお話、よろしいでしょうか？」

わかった。低く薄っぺらいテーブルをはさんだ向かい側にメイリンを座らせる。勉強方法の相談か、それとも次のテストの範囲か。学生がわざわざ教官に聞くようなことを考えながらイザークはメイリンが膝をそろえ丁寧に座るまで待った。

「噂でお聞きしたんですが、イザーク教官が以前、ガンダムに乗っ

ていたというのは本当ですか？」

「ジブラルタル基地の撤退戦からヤキン・ドゥーエ防衛戦までの間乗っていた。もっとも、映画では語られていないことだ。よく知っていたな」

この学校でさえ、イザークの経歴を閲覧できる立場にいるような人でなければそのことは知らないはずだ。

「実は、私にはお姉ちゃんがいます。お姉ちゃんも、ガンダムのパイロットをしているみたいなんです。それで、少しガンダムについて聞かせてもらえたらなあと思って」

「俺は単なるパイロットだった。だが、まったく知らない訳でもない。それでもよければ話すが？」

メイリンは軽く頷いてお願いしますと答えた。

資料をテーブルへと捨てるように置いた。まず何から話すべきか、そんなことを考えながら椅子に深く座り直す。

「ガンダムは、ゼフィランサス・ズールという技術者によって造られた」

これは少しでも軍事に詳しい人間なら常識だろう。メイリンも授業をしっかりと聞いていればだが、現代戦術史で習ったはずだ。

「現在、ヅダを初めとする新型はそのすべてが初期のガンダムの性能を超えている。それでも、ガンダムというシステムそのものの完成度は高かった。だから、地球でもザフトでも開発が続けられた。

それが、両勢力に同名、同システムの機体がある理由だ。ビーム兵器を持つこと。フェイズシフト・アーマーに包まれていること。最後にアリスと呼ばれるサポート・システムは搭載されていることだ」

ザフト軍でもゼフィランサスの手を離れて開発されたガンダムはこの3大機構を引き継ぐ形で開発が続けられていると聞いている。

「ところで、お前の姉はガンダムのパイロットと言っていたが？」

「はい。インパルスガンダムのパイロットをしているみたいです。それで、どんな機体なんだろうって、気になって」

「そうか。ではすまないが、俺が教えてやれることはあまりなさそうだ。元々、俺が乗っていた時と今ではガンダムというものも様変わりしている」

メイリンは残念そうな顔をする。とは言え仕方がない。イザークの搭乗していた機体はＺＧＭＦ－Ｘ０９Ａジャスティスガンダム。現在では使用が禁止されている核動力の搭載機であり、設計そのものも3年以上前のものだ。すでに軍をやめて2年以上になる。その間に状況は大きく変わった。当時はガンダムが量産されること自体考えられなかった。そんな時代なのだ。

今のことはわからない。だが興味がないわけではない。

「俺の方でも少しばかり調べてみることにしよう。どこまで調べられるかはわからないが、その時にでも機密に触れない程度に話してやるくらいのことはできるだろう」

「ありがとうございます！」

気分が沈む早さだけ回復するのも早いようだ。

「まだ行動を起こすと決めただけだ。礼は後でいい」

考えられるルートは、サイサリス・パパが一番ガンダムに近い立場だが、機体の受領の際顔を合わせた程度の仲で応じてくれるとは考えにくい。となるとアスラン・ザラかデンドロビウム・デルタだが、どちらも各地を飛び回っている。捕まえるだけでも一苦労だろう。今日明日に解決できる話ではないらしい。

「お、教官、いいんですか？　教え子に手を出して」

声の主はグラウンドで危うく5周追加させそうになった生徒だ。女子の部屋にでも行った帰りなのか、女子寮の方から堂々と歩いている。原則男女の行き来は禁止されているのだが、この類は禁止されているとなるとかえってそれを破ろうとする。悪ぶってはいるが特に問題を起こす奴でもないと黙認されているのが現状だ。

「何だ、まずは貴様が手を出してもらいたいのか？　無論、握り拳でな」

ちょっと握りしめた拳を見せるだけで男子生徒は脱兎のごとく男子寮にまで逃げ込んでしまった。やはりあいつだけでも5周追加してやるべきだったろうか。

（仕方のない奴だ）

よくも悪くもムードメーカーなのだろう。メイリンも顔が笑っている。

「そろそろ消灯の時間も近い。メイリン、君も部屋に戻れ」

はい。そんな明るい返事とともにメイリンは立ち上がるなり不慣れな敬礼をしてみせた。

（生徒がみんなあいつくらい聞き分けがよければ、この仕事も楽なんだがな）

メイリンがいなくなるとロビーは静まり返る。この時間に出歩くのはイザークのようなもの好きでなければ教官の大目玉を食らいたい生徒くらいなものだ。結局誰もいない。

イザークもそろそろ部屋に戻ることにした。資料を束ね脇に抱える。ロビーの脇にはエレベーターもあるが、あえてそれをさけ、脇の階段を選んだ。わずか3階まであがると、部屋はすぐ前にある。カード・キーをかざすとロックが解除された音がする。ドア・ノブに手をかけたところで、イザークは違和感を覚えた。わずかに扉を開けただけで光が漏れだした。

（電気を消し忘れたか？）

そんなはずはないと体が緊張する。扉をゆっくりと開け、体をさらさないよう中を覗く。

何もないような殺風景な部屋だ。必要ないと家具はそろえていない。唯一椅子くらいはお気に入りを探そうと2度買い換えた。それでもこれというものには巡り会えていない。未練もあったことから結局捨てられず、3脚すべてが部屋の中に投げ出されている。

その1脚に男が座っている。

「何だ、お前か？」

もうスパイごっこをする必要はない。扉をとっととくぐり抜ける。

男は座っていてもわかるほどの長身をしっかりと整え、面接か何かかと思わせる姿勢でイザークを直視していた。立ち上がるとこの3年で多少は背が伸びたイザークよりも頭が天井に近い。

「お久しぶりです、イザーク様」

「様はよせ。だが、久しぶりとは認めよう。キラとゼフィランサスの結婚式以来だな」

何故かこいつとは、コートニー・ヒエロニムスとは握手を交わす気にはなれない。資料を椅子の1つに置いてから、イザークはほかの椅子に座るとともにコートニーに着席を促した。この部屋で椅子がすべて埋まったのは初めてのことだ。

「お前からはこれまでだいたい1月に1度連絡があった。そして今回は直接乗り込んできた。どういう風の吹き回しだ？　デンドロビウムの護衛であるはずのお前がこんなところにまで」

普段、デンドロビウム・デルタからコートニーが離れることはないと聞いている。そして、こんなところにデンドロビウムが来るとは考えにくい。

無口で表情に乏しい。そのため、顔色というものをうかがいにくいコートニーは内容もその話だしも突然の印象を与える。

「イザーク様。あなたはゲルテンリッターを与えられた者としてデンドロビウム様を守る責任がございます」

ゼフィランサスが新たに開発した7機のゲルテンリッター、その4号機は、何をどう間違ったのかイザークに与えられた。ジャスティスガンダムに搭載されていたアリスが移植された機体で、擬似人格インターフェイスの名は蒼星石。

「蒼星石にはときどき会いに行っている。だが、俺は庭師になるつもりはない」

コートニーという男を一言で表せと言われればイザークは冷静だとか落ち着き払った、そのような言葉を選ぶこととなる。

それが、今は違った。何か目に映る違いがあるのではない。コートニーの行動に浮かんでは消える違和感を拭うことができない。その最たるものが、今、この場所――ここにはデンドロビウムはいない――にいることだ。

「コートニー。お前は一体何を焦っている？　デンドロビウムにはお前がいれば十分なはずだ。この3年、何事もなかった。ファースト・ダムゼルは危険にさらされることはなかった。そうだな？」

連絡こそ取り合ってはいたが、こうして姿を見せたのは初めてのことだ。

「一体何がお前を焦らせている？　何故今になって俺の力を必要とする？」

コートニーは口数の多い方ではないが、決して無口でもない。では答えようとしないのは何故だ。

「ダムゼルの、いや、プラントの中で何かが起きようとしているのか？」

答えるまで視線を外してやらないつもりが、コートニーが突然立ち上がったことで視線はたやすく外れてしまった。

「イザーク様。あなたほどの力がありながら、何故このような閑職に甘んじておられるのですか？」

「俺はプラントのために戦うことはやぶさかではないが、コーディネーターのために戦うつもりはない。一部の人間のために誰かが犠牲になる。それを仕方がないだとか、当然だと感じたくなかった。軍をやめた理由はそれだけだ」

座ったまま、ゆっくりと見上げる。眼球だけでは辛く、首をやや持ち上げたことでようやく見えてきたコートニーの顔は、心なしか落ち着きを取り戻したようにも見える。たった一度だけ自然な様子で瞬きをして見せた。そのことだけで、そう判断する。

「それを聞くことができて安心しました。あなた様は必ず戦場に舞い戻られるでしょう。今、現在、そして未来、デンドロビウム様を脅かす敵と戦うために」

「何を言っている？」

失礼します。それが、コートニーの返事であった。挨拶もなしに部屋を訪れた不躾な客は、一貫性を保ってろくな言葉もなしに出て

いこうとする。コートニーが扉へと向かう間、イザークは考えざるを得ない。

（コートニーが恐れる敵とは何だ？　ブルー・コスモスか？　いや、それが今急に脅威になるとは考えにくい。では……）

答えは見つからない。そして、答えは今すぐにでも部屋を出て行こうとしている。

「コートニー！」

ちょうとドアノブに手をかけたところで、コートニーは振り返った。聞いたところで、答えてもらえるとは思えない。そんな諦めが、こいつの顔を見た途端に広がってくる。

できることと言えば、ルートを確保しておくことくらいか。

「俺はすぐにはここを離れることはできない。だが、蒼星石にはいつでも動けるようには言っておく」

「感謝、します」

地球の空はプラントの空とは違う。特に夕暮れ時、太陽が水平線に沈んでいく時間帯はそれがはっきりと感じられる。地球ではゆっくりと暗くなっていくのに対して、プラントでは外付けミラーの動きが早く時間がくるとすぐに夜が訪れる。

昼と夜しかない世界。それがプラントで進む正規市民と非正規の

市民との二極化を象徴していると無理矢理決めつけることができないことくらい、シン・アスカも理解している。

展望室。暇ができるといつもここに座って外を眺めている気がする。夜の薄暗さが海を隠して、仕方がなく見上げた空には星の光。その内の1つが線香花火のように輝いた時、シンは思わず声を漏らした。

「あれ？」

誰も聞いていないはずだったのに、返事はすぐに聞こえてきた。

「どうしたです、チビ人間？」

若い女性の声。ガラス窓から顔を離すとともに踵を返すと、並ぶ備え付けの椅子の向こう側から近づいてくる人が見えた。アスラン・ザラだ。手には小型プロジェクターを持って、そこに着飾った翠星石の姿が形作られている。ここからだと、まるでアスランがお人形を抱いているように見えなくもない。

そしてシンをチビ人間と呼んだのはもちろん翠星石の方だ。

「やめてくれよ、その言い方」

「アスカ軍曹、君は翠星石に気に入られたみたいだな」

アスランは他人ごとのように笑っている。

「だ、誰があんなチビ人間のこと！」

頬が白い分、翠星石はわかりやすく顔を赤くして手足をばたつかせ始めた。

「照れることないじゃないか。アスカ軍曹は、どこか君たちのお父様に似ているところがある」

「お父様の方が何十倍も何千倍もかっこいいです。あんなたかだか量産機なんかに苦戦してる弱っちい奴なんて、お父様の足下にも及ばねえですぅ」

鋭くしっかりとした動きで翠星石の指先がシンの方を向いた。

（本当に機械なのか……）

感情的で怒りっぽい。人工知能としては必要ないほど高性能で、兵器に搭載されているとは思えないほど人間くさい。誰かが演じているだけと言われた方がまだ納得いく。たとえば、アスランの腹話術とか。

それはないな。とりあえず否定しておいて、シンはため息をついた。

「どうしてここまでぼろくそ言われなきゃいけないんだよ？」

シンがまだ新兵の部類で苦戦を強いられていることは認めよう。それでも任務にはしっかりと参加しているし、赤服を受領したこともある。そうでなくても、翠星石は初対面の時からシンに食ってかかることが多い気がする。

「翠星石の照れ隠しだよ」

「知らねえです！　そんなこと！」

アスランの言葉を聞くとすぐに翠星石の姿は見えなくなる。プロジェクターを切ったのだろう。まるで子どもみたいだ。ゲルテンリッターを作ったというゼフィランサス・ズールはどうして兵器にここまでの感受性を求めたのだろう。翠星石が消える直前に見せた顔を背ける仕草とか、本当にそっぽ向いた子どもを感じさせた。

「翠星石はどうしてだかお父さん子でね。それに、素直じゃないところがある」

もうプロジェクターを垂直に持っている必要を感じなかったからだろうか、アスランは近くの椅子にゆったりと座った。プロジェクターを指で弄んでいるところを見ると、きっと映像が出ていない間はセンサーが機能しないのだろう。そうでなければ翠星石がきっと黙っていない。

「翠星石のお父さんて、誰なんですか？」

「ゼフィランサスの夫さ。一途で、どこか向こう見ずで、そんなところは君に似ているかな」

また、アスランはゼフィランサス・ズールをゼフィランサスと呼んだ。それに、夫のこともまるで友達かのような口調で話す。

一体ザフトの英雄にとって、ゼフィランサス・ズールという技術者はどのような存在なのだろう。

何かを確かめるように見ていると、アスランはそれに気づいて短

く疑問の声を出す。それに何でもないと誤魔化すと、アスランはそれ以上聞いてくることはなかった。代わりにその視線は星空へと向けられた。

「ところで、さっき何に気づいたんだ？」

「いや、今、何かあそこで光ったような気がして……」

すぐ目の前のガラス窓を指でつつく。もちろん窓が光ったわけではなくて、シンが気づいたのは指のその先、街の明かりに邪魔されない星空のどこか。

そこがほんの少し光った気がした。それだけのことだった。アスランが興味を持つなんて思えない事実に、それでもアスランは声を強めて否定した。

「気のせいだ」

先程まで笑っていたことが嘘みたいに、厳しい顔をしていた。

無表情は、一体どんな顔のことなのだろう。嬉しい時の顔でもなくて怒った顔でもなくて泣いた顔でも楽しい時の顔でもない。とすると無表情は一切の感情表現を放棄した表情であるべきはずなのに、それでも、無表情は人を妙に不安にさせてしまう。

「どうしたの、ニーレンベルギア？」

椅子に頬杖をつきながら表情を作ることを忘れていたニーレンベ

ルギア・ノベンバーはこの言葉に意識を取り戻すことになった。気絶していた訳ではないけれど、考えに熱中しすぎてしまっていたようだ。

「少し、怖い顔してるよ」

サイ・アーガイルが顔を文字通り覗き込んでくる。もうこの歳になればこんなに顔を近づけることなんてあり得ない、もうすこしで口づけをしてしまうくらいまで、サイは顔をアップにしてくる。

心は子どもでも体は成人男性。ニーレンベルギアはついその胸ーー鍛えられていてとても固いーーを手で押し返す。力付くではとてもかなわなくても、サイは素直に身を引いてくれた。いくら言動が子どものようでも、子どもと同じように接するわけにはいかない。

「ちょっと考え事してただけよ」

5人のダムゼルが集められた会合におけるエピメディウム・エコーの発言は様々な意味で大きな意味を持っていた。ダムゼルはお父様であるシーゲル・クラインの命に逆らうことはない。しかし今はもう、お父様は存在していないのである。目的地こそ示されながら、そのための手段も方法も、それどころか目的地の確からしさにさえ、エピメディウムは疑問を呈した。

間借りした一室は、まだ引っ越しがすんでいないこともあって必要最低限のものしか置かれていない殺風景なものである。元々ニーレンベルギアは調度品の類に散財する趣味は持ち合わせていないが、それでも、座っている椅子を除けば目に付くものはサイくらいしかいない部屋には寂しさを覚えた。

その寂しさは、ただサイのことを見てしまったからかもしれない。

「ねえ、サイ？」

サイはちょっと眠そうに瞬きをした。

「人は社会のためにあるべきだと思う？　それとも、社会が人のためにあるべきだと思う？」

「よく、わからない」

やっぱり、まだまだ子どものサイにこんなお話は難しいらしい。思わず笑ってしまうと、サイは少しだけ、不機嫌そうに目を細めた。

「そうね。私も、よくわからないわ」

そんな答えのでないなぞなぞが、ニーレンベルギアを悩ませているのだから。

（エピメディウム姉さんはこの答えを出せたのかしら？）

だとしたらどんな答えを導いたのだろう。

Nのヴァーリは、ニーレンベルギアは人を作る。ブーステッドマン、エクステンデッド、人体の強化技術の開発をお父様から求められた。

Eのヴァーリは、エピメディウムは国を作る。オーブ首長国に潜入し、その国を親プラント勢力として設えた。

どちらも、目の前の現実を犠牲にしてお父様に尽くしている。

「でもね、社会のために人が犠牲にならなければならないのだとしたら、それはやっぱり、おかしいと思うの」

ニーレンベルギアは目の前で袖を振るってみることにした。赤い布と黒いフリルが揺れる。エインセル・ハンターから賜った深紅のドレスは、今なおニーレンベルギアを包む。かつて技術協力していた大西洋連邦を離れた今でさえ、ドレスを脱ぐタイミングを掴みかねていた。

普通に量産されているのと比べると色と形が少し違う。それがアウル・ニーダとステラ・ルーシェの機体である。

ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型は、フィンブルの破砕活動の時に敵に壊されたが、アーノルド・ノイマンとか言う副隊長がパーツを持ってきてくれたおかげでやっと修復が終わった。今は初めから損傷の少ないＧＡＴ－Ｘ３７０ディーヴィエイトガンダム特装型――ステラの機体だ――と並んでスペングラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦の格納庫に並んでいる。

「これで俺たちも戦えるな、ステラ」

今すぐにでも飛び出したい。そんなはやる気持ちを抑えながら、アウルはそれぞれの愛機を見上げているステラへと声をかけた。元の姿を取り戻したインテンセティから目を離すことができない。

フィンブル上空の戦闘で行方不明になった仲間――ケンカ友達だ

ったが――を殺したザフトと戦えると思うだけでアウルは飛び跳ねて喜びたい気持ちになる。

「でも、戦うことは、怖い……」

思わず隣のステラを見ると、てっきり自分のモビル・スーツを眺めていると思っていたステラはうつむいて体を小さくしていた。ステラが恐がりなことは知ってた。それが原因で戦いの時暴れることもだ。

「スティングの仇とりたくねえのかよ!?」

少し怒鳴りつけるとステラはすぐにびくつく。

「アウル、ステラ」

ブーツの音が鉄板張られた床を鳴らして、白いドレスがとても似合ってる。ヒメノカリス・ホテルが近寄ってきた分だけ整備の男が横目で見てる。仕事しろよ、仕事。こうアウルが怒鳴って仕事に戻ったと思えばすぐにヒメノカリスのことを見ようとする。

どっかの歌姫と同じ声をして、姉の声は綺麗だった。

「もう、あなたたちは戦わなくてもいい」

姉と慕い、信頼を置いてきたヒメノカリスの言葉を聞いた時、アウル・ニーダは頭が熱くなることを抑えることができないでいた。

「何でだよ!　俺は嫌だ!」

「あなたたちは元々戦うための存在じゃないから。スティングを失った以上、あなたたちまで失うことはできない」

床を強く踏みつけて騒ぐアウルと違って、ヒメノアリスは青い瞳を見せているだけだ。これが冷たいのではなく静かなだけだとアウルは知っている。知ってはいても、認められるかは別だ。

目元がつり上がって、のどの奥から乾いた声が這いだしてくる。

「それって心配して言ってくれてるのか？　それとも、計画に支障が出ることを怖がってるのかよ？」

計画にはエクステンデッドが必要になる。だが、3人である必要はない。1人でもいればいい。アウルとステラもスペアにすぎないのではないだろうか。そんな暗い予想がアウルの声を黒くする。

「アウル！」

突然の声にヒメノカリスの顔を覗き込もうとしていたアウルは足をとられた。慌てて、つい後ろに尻餅をつく。誰だ。座ったまま探していると、右側の資材の上、光が柱を作っていた。

赤いドレスよりももっと紅い瞳がアウルのことを見ていた。プロジェクターをこんなところに置いたのはいったい誰だ。

「一時の激情に身を任せることは頑愚以外の何者でもないわ。ヒメノカリスおば様に謝りなさい」

姿そのものはまだ子どもなのに、アウルよりもしっかりとしているように思う。アウルは真紅がどうも苦手だった。人ではない。そ

れでも人と何も変わらないからどう付き合っていいものかわからないからだ。

「でもよ……」

「あなたは、ヒメノカリスおば様が本気であなたたちのことを計画の備品としてしか見ていないとでも考えているのかしら？」

とりあえず立ち上がることにして、それでも、その間にうまい言葉が思いついたじゃない。ヒメノカリス姉ちゃんは怒ることもなくアウルのことを見ている。ステラは、怖がっているようだった。

（悪いのは俺だけかよ……）

「悪かったよ。でもな、納得した訳じゃないからな！」

今ダメでも後で出撃させてもらえることもある。そんなつもりで、アウルはインテンセティの方へと歩きだした。別に何か用事があるのではなくて、ただここには居づらかっただけだ。

そんなアウルの背中を見送って、真紅はため息をついた。そんな動作さえ、プロジェクターは丁寧に再現する。高さ３０ｃｍほどの人形が呆れたようにしか見えない。

「まったく、子どもなのだわ」

「真紅」

こちらも人形のように表情を変えないで、ヒメノカリスが視線だけで真紅を見る。

「ヒメノカリスおば様？」

「そのおば様って言うの、やめて」

オーブは事実上自治権を回復している。大西洋連邦軍が駐留することはなく、影響が完全に払拭されているとは言いがたいが、形式的には主権を取り戻している。

そのため、防衛のすべてをオーブ軍が担う必要があった。

フィンブル落着以後、ザフト軍はオーストラリア大陸北部のカーペンタリア湾のカーペンタリア基地を中心に活動を活発化させている。ボズゴロフ級潜水艦を中心に東西に戦力を展開しているのだ。

オーブはオーストラリアを領有する東アジア共和国のすぐ北にある。決して他人事ではない。カーペンタリア湾を抑えられたことでインド洋へと出る海域をザフトが睨み、オーブ近海にも踏査に乗り出している。地形はもとより、水温、海流、潜水艦が活動するに必要不可欠な情報を収集している気配がみられた。

世界安全保障機構につくのか、ザフトにつくのか。それだけでカーペンタリア湾周辺の勢力図が大きく書き換えられる。オーブを味方にする者は多く、しかし味方は1人もいないのだ。

オーブの国防を一手に担う国防本部は、いつだとて慌ただしい。階段状の部屋にオペレーターがひしめき、変わるモニターの光が目まぐるしい。情報は刻々と変わり、その度に変更点の確認、起こす

べき行動、分析すべき情報、仰ぐべき指示、人々の声が入り乱れる。

「国防本部！」

静寂とはほど遠い。それでもその声は本部全員の耳目を集めるものであった。スライド式の自動ドアの、その速度ではまだ遅いとばかりに無理矢理開かれた扉からカガリ・ユラ・アスハは国防の中心へと足を踏み入れた。

先程までの喧噪が嘘のように静まり返り、オーブの姫の行進を人々が拝謁している。

この部屋の中で最も高い位置にある扉を抜けたカガリのすぐ目の前に最上段、指令官席がある。座る老齢の男性の周りにオーブ軍の白い軍服を身につけた男たちが数人。その中の1人にカガリは目をつめた。

「カガリ様！」

「レドニルか、お前がいるなら話が早い！　何があったのか報告しろ！」

レドニル・キサカ。古くから護衛としてカガリの行く先々に随行していた男である。褐色の肌に無骨な頬骨。軍服の上からでもわかる鍛えられた体つきの軍人は、らしくもなくカガリから目をそらした。

この男ばかりではない。カガリが眼をつけると誰もが無言のまま目をそらす。指令官とてその有様だ。

「私を見くびるな！　それとも、目をそらし続けていれば事態が改善されるとでもいうのか！？」

互いに顔を見合わせる軍人たち。その中で誰の顔色を伺うでもなく、最も早く決断したのはレドニルであった。こんなところがあるから、カガリはこの男を側にいることを許した。

「エピメディウム様のケトビームが消息を絶ちました」

「救難信号は？」

「ありません」

「事故なのか、事件なのか！？　状況はどうなっている！」

「わかりません」

テスタメント級ケトビーム。テスタメント級とは同じ型の分類を意味する名前ではない。ダムゼルにそれぞれ与えられた専用艦の統一名称というだけにすぎない。エピメディウムの場合はケトビーム。先端に６本の爪を備え戦艦に格闘戦を仕掛けることができるという奇々怪々な艦である。かつてカガリも乗艦したことがある。基本的に宇宙戦艦だが、エピメディウムは通常好んでこの艦を利用していた。

今回もプラントまでケトビームで移動していた。

戦艦であり、メンテナンスに手抜かりがあったとは考えにくい。

（何者かに襲撃された？　ならば信号を出さないはずがない）

無論大気圏突入が最も危険な瞬間であることは今も昔も変わりない。だが、このC．Eの世で前時代的な耐熱パネルの剥離で燃え尽きたコロンビア号とは安全性が格段に違う。偶発的な事故とは、どうしても納得できない。

軍人たちがなかなか言葉にできないでいるのはこのためだろう。誰も報告をあげられる段階にないのだ。この事態に関係のない者たちまで静まり返る中では、扉の開く音さえよく響く。

カガリが入ってきた扉から、今度はユウナ・ロマ・セイランが姿を現す。普段から強面とは言いがたいユウナの顔は萎れたように控えめな様子でカガリを見ている。

「カガリ……」

「ユウナ……」

ユウナの手には資料一一たった1枚の紙切れである一一が握られている。1度強く掴んだのか、しわがよっていた。

「ケトビームの残骸が発見された」

ユウナは資料を突き出す。クリップで止められた写真の下には急いで作られたと思われる報告書があった。どうでもいい報告書に注目したのは、それだけ写真から目をそらしたい意識の現れだろう。

それでも、どうしても写真が目に入らない訳ではない。

どこかの水中でライトに照らされる鉄の塊がそこには写っていた。

「見つかった部品はちょうど爪の部分だよ。頑丈で、だから燃え残ったんだろうね。それに、こんな爪を持つ戦艦なんてケトビームくらいしかない」

偶然付近で演習中であった部隊が海中に落下した爪を見つけた。水深７０ｍ程度の比較的浅い場所で報告は迅速に行われた。ユウナの丁寧な説明が、しかしカガリの胸中にすんなりと入ってくることはない。

「嘘だ……」

ユウナを突き飛ばすように押す。単に邪魔だっただけだ。カガリは先程ユウナが入ってきた、自分が入るために用いた扉を入ってきた時と同様こじ開けるようにくぐり抜ける。

長い廊下を歩いている時、すれ違う人々はそろって何事かと身構えカガリに道を譲る。後ろからユウナの声でカガリを呼ぶ声と駆け足で追いかけてくる気配がある。

胸ポケットからプロジェクターを取り出す。円形で、ゲルテンリッターを呼び出すためのものだ。カガリがマスターを務める2号機、ＺＺ－Ｘ２Ｚ２００ＣＹＡガンダムカナーリエンフォーゲルの心を呼び出す。

「金糸雀！」

「はいかしら！」

光の柱は赤い瞳、白い肌――ゼフィランサスの7，8歳くらいの

時をモデルとしている――をした少女の姿を包む。黄色を基調としたドレスというよりはおめかしという言葉が似合うのは、金糸雀の落ち着きない快活さゆえだろう。プロジェクターにはなぜか日傘も投影されている。

「すぐに飛ぶ。私を拾いに来い！」

合流地点を告げてからプロジェクターは金糸雀の姿を消す。ゲルテンリッターは複雑な戦闘などでなければパイロットなしに単独で動くことができる。

すでに金糸雀の姿はないにも関わらず、すぐ後ろでは息を強く吸い込んだ、まさに息を呑むような音が聞こえていた。首だけで振り向いてみると、ユウナが鬼気迫る様子で携帯電話に声をぶつけていた。

「レドニル、カガリは飛ぶつもりだ！　すぐに航空管制に伝えてくれ。無理なことはわかってる。でも、君なら管制官とカガリ、どちらなら説得に応じてくれると思う？」

当然のことだが、領空内に未確認飛行物体が確認されればオーブ軍ガスクランブルをかける。それが国防本部の上空ともなれば天地をひっくり返したような大騒ぎになる。ユウナとレドニルの問答は、ようするにそう言うことをやりあっている。

「恩に着る」

どうやら話はついたらしい。その頃にはカガリはすでにエレベーターに乗り込んでいた。閉まりかけたドアにユウナが携帯電話を握りしめたままで危うく挟まれそうになる。

「カガリ、せめて、護衛をつけてもらえないかい？」

声を張り上げながら早足のカガリに食らいつこうとしていたからだろう。ユウナは息を切らしている。

「足の遅い機体に合わせるつもりはない。それに、成層圏を突破できる機体など、ざらにあるものか」

機動力では地球軍最大を誇るＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムとて航空力学的にはともかく、推進力ではゲルテンリッターに劣る。もっとも、オーブ軍が主に所有しているのは島国らしくＧＡＴ－２５２インテンセティガンダムであるのだが。

元々期待していなかったのか、それとも息を整えることに集中しているためか、ユウナはこれ以上追求しようとはしなかった。少なくとも、エレベーターが止まるまでは。

エレベーターを降りるとまた歩く。そして次のエレベーターに乗り込むまで１００ｍほど歩いただろうか。目的地は屋上。屋上から１本のエレベーターで本部の深部に行くことができるような造りはしていない。乗り継いだエレベーターを降りて長い階段をあがった扉を開くことで風が吹き付けてくる。

有事の際にはヘリポートとしても使用できるほどに広い。

すでに落日して久しい。暗夜を照らすサーチ・ライトが上空にモビル・スーツを捉えている。光をそのまま照り返す黄金の機体がゆっくりと降下している。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムと同じ対ビーム装甲の黄金色をした機体だが、大きさは１８．７ｍと通常と同じ大きさしかない。また可変機構がないことから、そのシルエットも奇抜なものではない。ライフルにシールド。黄金のガンダムが国防建屋に降り立った。夜風が一際強く体を叩く。

ミノフスキー・クラフトの輝きが次第に収まっていく。斥力を発生させたままでは近づくことができない。

「下がっていろ、ユウナ」

１人でカナーリエンフォーゲルへと歩いていく。誰も搭乗していないはずのガンダムはかしづき、コクピット・ハッチを開く。鐙のついた乗降用のロープが垂らされる。足をかけ、引き上げられるままにしておくと、コクピット・シートには誰も座っていない。日傘――今は夜だが――を差した金糸雀が出迎えた。

「金糸雀、ケトビームの航路はわかるな。消息不明の場所に行く」

「了解かしら」

球形のコクピット内部に浮かぶように設置されているシートへと座る。すでにシステムは立ち上がっているため、ハッチを閉じると途端に周囲の光景がコクピット内に投影される。そばにいる人を自動認識するシステムがユウナのことを捉えた。拡大されるその表情は何とも情けない顔をしている。

（そんな顔をするな。私はちゃんと帰ってくる）

カナーリエンフォーゲルを起きあがらせる。推力を急激に高めて

しまうと建物やユウナへの影響が無視できない。ゆっくりと脚力、アポジモーターで飛び上がらせ、徐々に高度をあげていく。

夜の帳の中を、カナーリエンフォーゲルの輝きが浸る。街の明かりに邪魔されない高さに到達したところで、カガリはスラスター出力を全開に、アクセルを強く踏み込む。

全身のフェイズシフト・アーマーに搭載されたミノフスキー・クラフトが強度の上昇とともに光輝を増す。スラスターが推進剤を吐き出し、ショック・アブソーバーが搭載されているはずのコクピットにまで及ぶほどの加速度がカガリを強くシートへと押しつけた。

それでも、カガリは加速をやめようとはしない。歯を食いしばり、瞬きさえ忘れていた。その目は暗闇の空をまっすぐに射抜く。

「ちょっと、かっちゃん、これ以上は危険かしら」

通常の機体ならここで速度超過のアラームが鳴ることだろう。ゲルテンリッターでは日傘をさした少女がいかにも慌てた様子でふためいていた。やかましさならどちらも変わりない。

「お前はゲルテンリッターなんだろう。ゼフィランサスが造った正真正銘のガンダムなんだろう。庭師だ！　庭園の花を守る騎士だ！　それと、私をかっちゃんと呼ぶな」

ゲルテンリッターが夜空に光の矢を放つ。一筋の光が星空を目指す。速く、迅速に、拙速とも言えるほどの高速が空を裂く。

「エピメディウム、何故お前は死ななければならなかった！」

それでも、星には届かない。

星影は遠く、世界最強と数えられるゲルテンリッターの力を持ってしても星の世界は遙か。手が届くことは決してない。

「プラントの目的は何だ！　ダムゼルの理想とは何だ！　お前たちは何をしようとしていた！！」

いつの頃からか、視界が歪んでいる。全身を襲う加速度に弾かれた涙が拭うまでもなく瞳から離れていく。

「答えろ！　エピメディウム～！」

暗澹たる部屋の中。ただ1人。鳥のさえずりの残響だけが部屋を満たす。

籠の中の鳥。

ここには天なる国の王が安座する玉座。

Gのヴァーリ。

「私たちは、ヴァーリ」

至高の娘。寵愛受けるダムゼル。ラクス・クライン。

「私たちは、復讐のために生み出されました」

足が速くても仕方がありません。頭がよくても評価されるとは限りません。目がいいことがどうしました。基準は多様で評価は変容。それがどこでなら正当に評価されるかわかりません。そんなあなたに朗報です。

ただ強いこと、ただ殺すこと、壊すこと、それこそが絶対基準。

戦場では明確にして明瞭に人の価値が定められます。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「勇侠青春譜」

カーペンタリア。１００人の死が、１人の英雄を作り上げる。

第１４話「勇侠青春譜」

「は。いえ、我々も戦力を出さないとは言っておりません。ただ準備のためのお時間いただきたいと申し上げているのです」

東アジア共和国首相官邸執務室にて、男がその見事にはげ上がった頭にしきりにハンカチをあて、冷や汗を拭っている。首相の椅子に座るこの男こそ、ラリー・ウィリアムズ東アジア共和国首相である。

普段からその弱腰外交を内外から非難――世界安全保障機構の会議では発言さえできないことで知られている――され、現在もその姿勢は残念ながら維持されている。

執務机におかれたモニターに映し出されるのは凡庸な男性。大西洋連邦大統領ジョセフ・コープランドは、何も見えていないようで、しかし油断なく周囲の状況をうかがっている。そのことは、同じ世界安全保障機構の会議に参会した時点で、ラリー首相はいやというほど思い知った。

盗聴防止のため、受話器を耳に当てたままのホット・ライン会談は、しかし話の内容を聞かずともその進捗をうかがい知ることはたやすい。

「無論です。カーペンタリア奪還のためには精鋭を差し向ける所存であります」

東アジア共和国を語る上でカーペンタリア基地の存在を欠かすことはできない。Ｃ．Ｅ．６７年の開戦以来、実に１０年近くに渡っ

て領土の一角を占領され、それをいまだに奪い返すことができていないでいる。国外からはザフト軍がカーペンタリア基地から部隊を発して事実を非難され、国内の勢力――特に軍部――からの非難も日に日に増している。

モニターの映像が消され、受話器が置かれる。ラリー・ウィリアムズ首相の憔悴しきった顔こそが、東アジア共和国の今を如実に物語る。

ザフトを払いのけるほどの軍備はなく、国外からの協力要請を拒むほどの発言力もない。確かにカーペンタリア湾奪還は命題であるとは言え、いざザフトを刺激してオーストラリア大陸全土が戦場と化した時、世界安全保障機構各国がどれほど協力してくれるかは未知数なのである。

「コープランド大統領にも困ったものだ……」

カーペンタリア攻略戦を行うため、兵力を出せ。この単純きわまりない依頼を、決して拒むことができぬよう周到に作り上げた計画のもと押しつけてきたのである。モビル・スーツ後進国である東アジア共和国ではモビル・スーツの保有台数の総数でさえ大西洋連邦の１０分の１もない。

そして、そのすべてが指揮下にあるわけでもない。

簡単な操作で、モニターに青いガンダムが映される。ＧＡＴ－２５２インテンセティガンダム。ビームを弾く特殊な防御法を持ち、ビーム兵器の使用を制限したことで水中戦に適用した量産型ガンダムである。東アジア共和国でも約２０機がライセンス生産されているが、その大半がファントム・ペインなる特殊部隊に組み込まれて

いる。

モニターの写真がおくられるにつれ、１０機を超えるインテンセティが並ぶ映像があった。そのシールドの表面には青い薔薇の紋章が描かれている。ファントム・ペインの証である。

各国のブルー・コスモスの構成員の働きかけによって、大西洋連邦と国交を結んでいる国ではそのほとんどがガンダムによって構成される特殊部隊の設立が求められた。パイロットは実戦を経験したエースばかりが集められ、遊撃部隊としての活動が認められている。ただし、事実上はブルー・コスモス、正確にはエインセル・ハンターの私兵としての機能しているのである。

「ファントム・ペインか。こちらも厄介きわまりない」

大西洋連邦と同じだ。味方でありながら自由にはならず、しかし、東アジア共和国はその絶大な力を必要としている。

カーペンタリア湾。オーストラリア大陸北部に位置し、幅６００ｋｍ、南北に７００ｋｍの蹄鉄型をした巨大な湾である。

この湾は数奇な運命をたどっている。Ｃ．Ｅ．６７年に勃発した戦争初期、ザフト軍は赤道を中心に部隊を展開した。もっとも重力偏差の小さい赤道に地球各国は多くのマスドライバーを保有する基地を構えていた。大洋州連合のジブラルタル基地、南アフリカ統一機構のビクトリア基地、大西洋連邦のパナマ基地、赤道同盟のカオシュン国際空港、及び、オーブ首長国のオノゴロ島。これらの破壊、及び占領をもくろんだのである。

カオシュン国際空港はエイプリルフール・クライシスによって大損害を被ったことによりC．E．７５年現在でさえ復興してはいない。元々軍事用ではなく民間利用の施設であったこともありザフト軍の侵攻が及ぶことはなかった。

ジブラルタル基地、ビクトリア基地はザフトの占領下におかれ、ジブラルタル基地はC．E．７１、ビクトリア基地はC．E．７３に奪還されるまでザフトが支配を続けていた。

中立を謳うオーブ首長国には、何故かザフト軍は興味を示すことはなかった。

しかし、最後のパナマ基地攻略には、ザフトは甚大な労力を強いられていた。世界最大の軍事大国である大西洋連邦はザフトが最も得意とする軌道上降下戦術を許さず、上からの攻めを封じられたザフトは横からの戦いを強いられた。しかし地上戦に不慣れなザフトは拠点がないことからも散発的な攻撃に終始せざるを得ず、攻略は遅々として進むことはなかった。周辺国、ユーラシア連邦、南アメリカ合衆国が軍事的に大西洋連邦を強力にバック・アップしていたことと相まって、橋頭堡を築くことさえできずにいた。

その際白羽の矢が立ったのが、南の海に浮かぶオーストラリア大陸、東アジア共和国であった。

東アジア共和国は当時姿勢を明らかにしてはおらず、また軍事的に弱小であったことからも大戦参加は見送るものと予測されていた。ザフトは突如カーペンタリア湾に降下を開始。あらかじめ建造していたパーツを降下させることで瞬く間にカーペンタリア基地を作り上げた。この電撃作戦が東アジア共和国ほぼ黙認の元に行われ、そ

の実態は未だに明らかでない。当時の政権と裏取引が行われたという噂――保身のため、基地設営を許したというものだ――がいまだ消えず、それが世界安全保障機構内での東アジア共和国の立場を弱くしている。

１つの事実として東アジア共和国は領土の一部を侵害されているとは言え、大きな損害を被った訳ではなかった。カーペンタリアから北へと視線を移すと中立国であるオーブが存在する。Ｃ．Ｅ．７１年当時オーブは原則として軍艦の領海内立ち入りを禁じ、排他的経済水域への立ち入りを厳しく監視していた。北と南から挟む形でインド洋と太平洋の分断を試みるも、それはあくまでも軍艦を目的としたものであり、商用船の通過をザフトは許した。海上閉鎖を行うことはなかったのである。これによって東アジア共和国は大きな損害を被ることはなかったが、カーペンタリア基地を出たプラント船績の戦艦がアフリカ、アメリカ大陸へと向けられているという事実は国際的な非難を浴びた。

また、当時のカーペンタリア基地は規模として大きなものではなく、地球軍によって見過ごされていたという事実も存在する。

この流れが大きく変わったのはＣ．Ｅ．７５、小惑星フィンブル落着の時のことである。ザフト軍はフィンブル落着の混乱に乗じる形で多数のボズゴロフ級潜水艦、モビル・スーツをカーペンタリア基地へと降下。いくつかの部隊は地球軍の奇襲に見舞われたとは言え、その基地規模は大きく向上した。当初の目的であったパナマ基地に睨みをきかせることができるほか、アフリカ方面へと補給物資を送ることが可能となったのである。

ザフトにとってカーペンタリア基地は地上の最重要拠点であり、地球各国にとってその攻略は至上命題となっている。これまで幾度

となく行われた攻略作戦の中でも最大規模の戦線が、ゲルテンリッターの参加を含む形で火蓋が切って落とされようとしていた。

カーペンタリア基地はカーペンタリア基地深奥に位置する。オーストラリア大陸では主要な施設は沿岸部に集中しており、内陸部からでは組織だった戦闘を行うことはできない。世界安全保障機構各国は自然と北部開口部から湾内への侵入を試みることとなった。

大西洋連邦軍、赤道同盟軍、東アジア共和国軍合わせてステイガラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦２０隻、モビル・スーツ総数約３００を数える３個師団を超える大戦力である。

湾内南西に位置するカーペンタリア基地を包み込むように３個師団が東西に横並びとなって湾を南下していた。

ネオ・ロアノーク率いる部隊が参加するのは中央の師団。主に大西洋連邦軍からなるこの師団は部隊の中央、湾の中心を縦に割りながらステイガラー級を並べている。

すでに他の空母からジェット・ストライカーを装備したものを中心とするＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーが出撃を開始している。モビル・スーツの攻撃力が発達している現代戦術において戦艦が前線に展開することは許されない。まだ敵の姿が見えない内からモビル・スーツたちは３機１組の小隊を維持しながら空へと斜めに飛び出していく。

甲板の上にはＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンの真紅の装甲に引き連れられたＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガン

ダムが2列4機並んでいる。そのウイングには青い薔薇が描かれ、ファントム・ペインであることが示される。

ラインルビーンのコクピットの中では、小型プロジェクターの時とは違い自由に動き回る小さな少女の姿がやはり赤い。ゲルテンリッターにとって視覚とは各種センサーであるのであって、立体映像の視線と必ずしも一致はしない。それでも、真紅はものを認識するという行為において映像との整合性を維持することを好んだ。球形コクピットの壁360度に映し出された映像をわざわざ眺めるように人形の姿が飛び回っている。本来であれば、機体そのものである真紅はコクピットに映像が映し出されている時点でその情報のすべてを掌握している。

ネオ・ロアノークはサングラスを身につけ、ファントム・ペインようの黒い軍服のままで真紅に部下と通信を繋ぐように指示を出した。どこの誰かを指定する必要はない。音声認識の発展系として、真紅は自分で考え、然るべき相手との回線を開いた。

4機のディーヴィエイトへ搭乗する4人の部下それぞれへと。

「アーノルド副隊長をリーダーにミューディー中尉、スウェン大尉をリーダーにシャムス中尉はロッテそれぞれを形成。各個敵を撃破する！」

「了解！」

実戦を幾度となく乗り越えてきたパイロットたちは寸時違わぬタイミングで返答した。

本来、モビル・スーツの最小単位は3機1組でケッテを構成する

とされている。ネオの隊ではネオと副隊長であるアーノルド・ノイマンをリーダー――ここでは攻撃役のことだ――として残りの3人が援護に回るか、でなければ今回のような2組のロッテをネオがまとめる変則的なシュヴァルムを採ることが多い。ゲルテンリッターの高い攻撃力は通常のケッテでは生かしきれないためだ。

結果として、この部隊では2個小隊にも満たない戦力で1個中隊ほどの攻撃力を有することとなった。

スウェン・カル・バヤン大尉とシャムス・コーザ中尉を組ませたのはこの2人の意外な相性の良さに由来する。アーノルド大尉の場合、面倒見の良さから誰とでも安心して組ませることができる。

「お父様、出撃要請が発令されました」

空母の管制から出撃許可が出たことが真紅から告げられる。

「真紅、準備はいいかい？」

「いつでもどこでも臨戦態勢。それがレディの嗜みよ、お父様」

そう言ってウインクしてみせる真紅の顔は幼い頃のゼフィランサスの面影を彷彿とさせた。まさに娘の成長を見守る父の心境で、ネオは操縦桿を握りしめた。

「物騒な淑女がいたものだね」

ラインルビーンの背中ではバック・パックが起きあがるとともにウイングが展開する。重戦闘機を水平に担いだように推進力の塊を思わせるその体が全身から光を放ち始める。

「ネオ・ロアノーク、ラインルビーン、出撃する！」

カタパルトもなしに甲板を飛び出すゲルテンリッターは、しかし他のどの機体よりも速く戦いの空へと躍り出た。

カーペンタリア基地到着した途端。艦から降りることもできないくらいのタイミングで敵が攻めてきた。シン・アスカの姿はインパルスのコクピットの中にある。

マニュアル通り簡単なシステムの確認からモニターに戦況の確認を行う。敵の戦力ははっきりとしない――保有している戦力を公開する馬鹿なんていない――がだいたい3個師団と想定されているらしい。カーペンタリアの2個師団、頑張っても2個師団2連隊の戦力の1．5倍は覚悟しろとのことだ。

「ミネルヴァは出撃後、カーペンタリア基地の警護に就きます。敵戦力は甚大なれど、それはもとより予定されていたこと。誇り高きプラントの民として各員の奮戦に期待します」

特に命令ではない単なる艦内放送だ。返事をする必要は感じなかった。コクピットから格納庫を見渡しても敬礼や返事をしているらしい人はいない。出撃前のいつもの慌ただしさがそこにはあるだけだ。

システム・オール・グリーン。ジェネレーター出力、バッテリー残量ともに問題なし。アビオニクス各電圧、正常値。

「アスカ軍曹、ホーク軍曹」

モニターには白いノーマル・スーツを身につけたレイ・ザ・バレル隊長と赤いノーマル・スーツのルナマリア・ホークの姿が移る。

「この戦いはカーペンタリア基地の防衛が最重要目標となる。不必要に前にさえ出なければ、好きなように戦え」

「え、でもレイ隊長は……？」

レイ隊長の言葉に思わずルナマリアが視線を泳がせた。シンにしたところでこのような師団クラスの部隊で戦うことなど初めてのことだ。ルナマリアの視線が動いたのは、あちらのモニターに映っているレイ隊長の顔を見るためだろう。シンも同じように隊長を見たが、特に何か言うこともなく映像は消えてしまった。

好きにしろ。とにかくこの命令だけが生きている。

ルナマリアもやれやれと言った様子で笑っている。

（それなら、これまで通りに戦うだけだ）

シンが搭乗しているＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムを乗せたリフトが動き出す。モニターの風景が変わっていく中、やがて正面にカタパルトが映し出される。根本はまだ室内だが、その先端は開放されていて日の光が眩しい。いつも宇宙の闇の中へ出撃していた。

「シン・アスカ、インパルス、行きます！」

インパルスが膝を折る。足を固定しているカタパルトが機体を押し進ませ、光が急速に広がっていく。空へと投げ出された時、地球の重力というものを感じながら、機体をうまく上昇させる。インパルスの背中には、ソード・シルエットが装備されていた。

ザフト軍と世界安全保障機構とではその戦力差は1．5倍ほどであると双方が捉えていた。数では不利だが、ザフトは防衛側である。攻める側は守る側の3倍の戦力を必要とするとはよく言われることであり、ザフトは必ずしも不利とは言いがたい。同時に、兵力の多寡で勝敗が決するわけでもないことも常識である。

世界安全保障機構は部隊を大きく3つに分けた。それぞれが東西に横一列に並び、湾の南下を開始した。

カーペンタリア基地は湾のほぼ南西に位置している。一点突破を目指すのであれば部隊を薄く引き延ばしたこの布陣は決して理にかなったものではない。それどころか前線の足並みを乱せば各個撃破される危険性さえある。

ナチュラルのすることは間が抜けている。ザフトの部隊長はそう笑う部下を叱責しながら相手の出方をうかがっていた。

横に大きく部隊を広げる布陣は、あまりに有名な陣形とその姿が重なるのである。

鶴翼の陣。横へと広げた陣形の中央を敢えて窪ませることでそこへ敵軍を誘い込み、両翼が翼で包み込むように相手を包囲する。世界安全保障機構軍はその陣形を思わせて中央を残して、まずは西側、

東側の部隊が前進を開始した。本来鶴翼の陣は防御側の戦術だが、直接カーペンタリアを目指す西側部隊を放置することもできなければ、不気味に南下する東側部隊を無視してはザフトは瞬く間に包囲されてしまう。

戦場駆ける戦乙女はカラスにまたがると聞く。死を看取るは霊鳥シームルグ。古き文明の地では死の神タナトスは漆黒の翼持つ。数多の瞳持つ翼の告死天使の名はアズラエル。

死の予感は、いつだとて翼によって運ばれる。

ジェットストライカーを装備したストライクダガーを中心とした西側部隊――世界安全保障機構軍の横並びの部隊の内最も西側の部隊を便宜上こう呼ぶ――がまっすぐにカーペンタリア基地目指して南下を開始した。

迎え撃つはザフト軍1個師団。

ザフトもまた部隊を分けることとした。基地の防衛に集中するには戦力は十分と言えず、また高い火力を持つビーム兵器を備えたモビル・スーツを近づけることは許されない。

防衛師団が基地を守り、遊撃師団が敵の包囲を防ぐ。

レイは、ＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルは防衛師団に参列している。

いまだザフトでも正式採用されていない全天周囲モニターには眼

下に青い海が、空には白雲が、そして前には敵モビル・スーツが群れている。

その中に赤いゲルテンリッターの姿は、ネオ・ロアノークの姿はない。

（参戦しているはずだが、どこにいる……？）

戦いの始まりは、突如として開かれた。

ローゼンクリスタルをはじめとするザフト軍モビル・スーツの後ろに控えるボズゴロフ級潜水艦が一斉に垂直ミサイルを発射する。同時に、ガナー・ウィザードを装備したＺＧＭＦ－１０００ヅダが左肩に大型エネルギー・パックを、それとバランスをとるように長大なライフルから一斉にビームを撃ち出した。緒戦は爆撃、砲撃の応酬。そんな戦術の基本は何も変わってはいない。

だが、大きく変わったこともある。命中精度の悲しむべき低下である。ミノフスキー粒子の電波干渉、ミノフスキー・クラフトの機動力の底上げが相俟って当てるということにおいては寒い時代であった。誘導兵器の使用が不可能であり、また、目標がせせこましく動き回る。

ミサイルの多くはでたらめに放たれ、何もないところで爆ぜる。数で弾幕をはるも、空に広く薄く展開された爆煙をストライクダガーが編隊を維持したまま突破する。ガナーヅダの放つビームは戦場に幾筋もの光を描くも、その多くがそれだけに終わる。わざわざ真っ正面から放たれた攻撃に被弾する間抜けはなかなかみつけることができない。

ストライクダガーの編隊は煙の壁を抜け、ビームの網をかいくぐり、そして接敵する。

スラッシュ・ウィザードを装備したヅダが長柄の戦斧を構え飛び出すと、ＺＧＭＦ－９８６ゼーゴックが直えとして援護に加わる。ウイングを有し、可変機構さえ有するゼーゴックはその機動力でリーダーを務めるヅダに追いすがり、リーダーを狙い撃とうとしたストライクダガーへと攻撃する。

３機１組としてモビル・スーツは１個小隊を形成する。格闘戦に優れたスラッシュ・ヅダを２機のゼーゴックが援護する構図はザフトでは基本形と言ってよい。

ビームが交差し、被弾したモビル・スーツが煙をあげながら海へと落ちていく。そんな戦場の空の中、ローゼンクリスタルは何をするでもない。

白い機体である。純白を白く輝かせ、体に巻かれた帯は黄金の光を放つ。背後に方円を背負い、手には何もない。戦場にあって戦場にない。その姿は戦いの野に降りた天使を彷彿とさせる。

その目的は加護、天恵では決してなく。

「ゲルテンリッターのいない戦場など、ものの数ではない」

身の程知らずにもローゼンクリスタルへと狙いを定めた敵小隊がモニターに映し出される。そのどれもがジェット・ストライカーを装備し、手にはライフルとシールド、ひどくありふれた装いをしていた。

ロックオンされたとの警報音がコクピットに響きながら、レイは冷たくモニターを見つめた。

3機のストライクダガーが放つビームを最低限の動きでかわす。ハウンズ・オブ・ティンダロス。敵の攻撃をかするまで近い距離で回避する会得の極意は、敵から見たならビームが通り抜けたように見えたことだろう。

ストライクダガーたちは動きを止め、レイは冷厳な眼差しを崩さない。

「薔薇水晶、付近のミノフスキー濃度はどうなっている?」

コクピット内に投影される紫の衣装を身につけた少女。

「いちいち姿を見せるな。あれが使用可能である場所を表示さえすればいい」

薔薇水晶は姿を消し、代わりにモニターには様々な色で示された濃度勾配が表示される。ストライクダガーの位置は、決して悪くない濃度であるようだ。

ローゼンクリスタルが円環を頭上へとかざす。敵は距離をあけるような仕草を見せたが、結局こちらの出方をうかがっているでしかない。

「理由もわからず、明かされず、そして死んでいけ」

虚空に閃光が花開く。ビームと同質の輝きと殺意をはらんだ光が先触れなく発生し、ストライクダガーを捉えた。腕をもがれ足を裂

かれまとわりつく光が装甲を食らい尽くす。

どれほど機動力を持っていようと意味はない。この攻撃は、決してかわされない攻撃なのだから。

空中で爆発し、爆煙を突き抜けた残骸が落ちていく様を、レイはもはや眺めてさえいなかった。

意外なことかもしれないが、地球軍の練度は決して高くはない。主に戦場に立っていたのは大西洋連邦、ユーラシア連邦など少数で、他の国々は積極的に関わろうとはしてこなかったためだ。

今回の敵部隊は大西洋連邦、赤道同盟、東アジア共和国による混成軍であるらしい。西側師団、及び東側師団に参加している大西洋連邦軍は少ないらしく、防衛師団が押し切られる様子はない。遊撃師団にしても相手が包囲網を形成することを頑なに防いでいる。

（単に戦いに不慣れな軍が先走っただけなのか？）

大西洋連邦軍が多く参加していると思われる中央師団の動きが鈍い。作戦の不備に戸惑ってるだけと言えなくもないが、そう考えるのは楽天的というより夢想的と言えた。

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺＺガンダムヤーデシュテルンの進行方向にストライクダガーが立ちふさがる。ライフルを向けられるが構わず速度を落とさない。放たれるビームはハウンズ・オブ・ティンダロスでかわし、８枚の青い翼を、ヤーデシュテルンは一際輝かせた。

抜剣したビーム・サーベルで、すれ違いざまストライクダガーの腹部を撫でる。敵機の撃墜を確認することもなく、ヤーデシュテルンは全身を輝かせ加速する。

「翠星石、パラスアテネの場所は？」

「あっちですぅ」

コクピット内を自由に浮遊する人形は、その緑のドレスに包まれた腕を伸ばし、一つの方向を指さした。進行方向から何時の報告だとか言ってくれることはない。そもそも翠星石は軍事用語を知っているのだろうか。

問題はない。兵器らしくない兵器。それがゲルテンリッターなのだから。

翠星石が示した方向を目指すと、言葉に違わず、ラヴクラフト級の優美なシルエットが洋上に浮かんでいる。ミネルヴァとはことなり、白い艦体を青が縁取った特殊戦闘艦を守るように展開する3機のインパルスガンダムがちょうど敵と交戦している時であった。

アスランが母艦とするラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネと部下である3人である。

（手を貸してやるとするか）

翼を広げる。ミノフスキー・クラフトの輝き放つ翼はそれ自体が推進力を有し、ヤーデシュテルンは通常のスラスター推進ではありえない軌道を描いて軽々とパラスアテネの前へ進み出る。両手にはビーム・ライフル。ガンダム・タイプのライフルとて、1撃でシー

ルドを破壊することは難しい。ライフルで敵を撃墜すること自体非行率的であるこの戦場において、しかしアスランは敢えて射撃を選択した。

2丁のライフルの銃口を平行に構える。まるで弓引くように、ヤーデシュテルンはライフルを構え、2筋のビームが垂直に並び合って敵機を目指す。

1撃で破壊できずとも、理論上ビームを防ぐことができる材質の開発はいまだされていない。

初撃がストライクダガーのシールドを捉えた。膨大な光が放たれ、熱がシールドの表面を融解させていく。まだ熱を発散しきれていない段階に間髪入れず次撃が直撃する。連続する攻撃にシールドは耐えることはできない。ビームが強引に貫通するや、ジェネレーターの内在している胸部を貫き燃やす。

派手な爆発に、不出来な部下たちもようやく上官の帰還に気がついた。

「遅いですぜ、隊長。燃え尽きちまったかと心配しちまいました」

モニターに映る赤いヘルメットをつけた角張った顎をした男。ヘルベルト・フォン・ラインハルトはいつも悪い冗談を好む。

「でも安心してください。隊長亡き後、ラクス様は俺が守りますんで」

続いたのも男だ。赤服を着ることが許されるほどの腕前だというのに、こちらのマーズ・シメオンもいついかなる時もブラック・ジ

ョークを好む。眼鏡をかけているためか多少なりとも理知的に見えなくもないが、頭の中は変わらない。男2人が飲み仲間というのも、同じ部隊にいることだけに由来しているわけではないだろう。

「生憎だが、ラクスの騎士の座は誰にも譲るつもりはない」

「ほら、馬鹿言ってんじゃない。敵はまだわんさか来てるんだ」

最後に現れたのは女性の顔。眼帯で左目を覆うその姿は歴戦の勇士を思わせる。事実、ヒルダ・ハーケンはこの部隊のまとめ役である。

ヒルダ、ヘルベルト、マーズ。この3人が操るインパルスガンダムがヤーデシュテルンにつき従う。

モニターには次々に押し寄せる敵機の姿がおびただしい。しかしひるんでいることはできない。敵の東側師団は明らかに迂回する動きを見せていた。東側からザフト軍の包囲をもくろんでいるのだろう。

（そんなことさせられるか！）

「回り込もうとする敵を優先的に撃破する。2個中隊を残しながら順次壁を作れ。このまま東側師団の本体へと進撃する！　翼包囲をさせるな！」

「了解！」

「そんなこと、当たり前ですぅ」

部下3人の力強い返事に混じって翠星石の何とも緊張感のない声が聞こえる。

敵部隊は西側師団がカーペンタリア基地を攻撃し、東側師団が迂回して回り込もうとしている。中央師団は戦力を温存しているのだろうか、まだ大きな動きは見られない。

包囲されることさえ防ぐことができればカーペンタリア基地の防衛は鉄壁である。いくら数に勝る地球軍とてたやすく攻め落とすことはできないだろう。そして、アスラン加わるザフト軍遊撃師団は敵を撃破しながら東に駒を進めようとしている。敵が包囲網を完成させることは難しいはずだ。

（だが何だ、この違和感は……？）

ヤーデシュテルンを先頭にするように遊撃師団は進む。進撃の度、敵を撃破し、一定戦力をそこに残すことで敵に突破されないための壁を築く。カーペンタリア基地から東に伸びる防衛線が完成されようとしていた。この壁の南側にはボズゴロフ級を初めとする戦艦が並び、壁の堅牢さを高めている。

しかし、違和感が拭えない。

撃墜されたストライクダガーが原型を残したまま墜落していく。その背中には、水平翼を備えたジェット・ストライカーが装備されている。この機体ばかりではない。この戦域に存在するほぼすべてのストライクダガーがジェット・ストライカーを使用していた。ソード・ストライカー?の姿がない。

この戦場にはリーダーがいないのだ。

アウル・ニーダは、まだ落ち着かない様子で、体を小刻みに動かしている。時折こちらへと向けてくる視線に目を合わせ、それからまた正面を向くことで視線を前へと誘導しようとする。そんなヒメノカリス・ホテルの努力を無にして、アウルはすぐに姉の方を向いた。

「俺たち、本当に出なくても大丈夫なのか？」

「みんな、押されてるよ」

押されている。スペングラー級のブリッジから眺めるなら、ステラ・ルーシェからはそう見えるのかもしれない。

遠目に見える戦場では撃墜されるストライクダガーの方が数多く、戦線が目に見えて後退していた。アウルの場合、味方の窮状に自分が何もできない苛立ちを、ただステラは近づいてくる戦場に怯えているのだろう。ヒメノカリスはステラの手をそっと掴んだ。アウルなら恥ずかしがって握らせてはくれないが、ステラは素直に握り返してくれる。

「あそこにはゲルテンリッターがいる。アウル、あなたが加わった程度で変えられる戦況なら、キラがとうに覆してる」

「ファントム・ペインの連中がヤキン・ドゥーエを戦い抜いたことくらい知ってるさ。でもよお、そんなに強いのか？」

「見ておきなさい。ガンダムに乗ることが許されたエースの戦いと、

次元の異なるゲルテンリッターの力を」

新兵器の登場は、戦争を変えてきた。

第２次世界大戦時、ナチスドイツが開発した突撃銃の原型であるＭＰ４３が開発されたことで、後にソ連によってＡＫ－４７が、アメリカによってＭ－１６が開発され、アサルト・ライフルが戦場の主役となった。

このことがもたらした変化は、点から面への変換である。

かつてはライフルによって相手を狙い撃つ戦法がとられたが、アサルト・ライフルの登場によって大量の弾をばらまき広域を制圧する手法がとられることとなった。第２次世界大戦当時、１人の兵士を倒すために必要とされる弾丸は平均して１万発とされ、アサルト・ライフル以後は１００万発が必要とされた。

それほど大量の弾丸を散布する戦いが行われたのである。

そして、時代がＣ・Ｅへと変わったことで新たな兵器の革新が起きた。ビーム・ライフルの登場である。

ビーム・ライフルは極めて高い攻撃力とともに特徴的な兵器でもあった。ミノフスキー粒子に一定の電圧を加えることで生成されるメガ粒子は、その必要なエネルギー量を確保するために極端な小型化を行うことができない。当初、ビーム・ピストルのような兵器も開発こそされたが、ビーム中に含まれるメガ粒子濃度の低さから現在では採用されていない。

ビーム兵器は、ライフルの形こそ最適であった。そのことが引き起こした先祖返りがあった。ビーム・ライフルにアサルト・ライフルのような使い方はできない。アサルト・ライフル以前の点による攻撃が返り咲くこととなったのである。

そして、ミノフスキー粒子によって仕掛けられた、もう一つのいたずらがあった。

ミノフスキー・クラフトによるモビル・スーツの高機動化が量産機単位で推進されたのだ。

ビームは高い攻撃力を誇る。事実上この攻撃を完全に防ぐことのできる材質は開発されておらず、そして、ミノフスキー・クラフトは高い機動力を堅持する。

攻撃を防ぐのではなくかわす。防御力を機動力で代替せざるをえない現実が、C．Eの戦場には出現した。

その事実は当然の帰着としてビーム・ライフルの命中率の極端な低下を招いた。先例にならうなら、1機のモビル・スーツを撃墜するためには1000発から数千発のビームが必要だとする論文が、大西洋連邦ミスカトニック大学のラバン・シュリュズベリィ教授によって発表されている。

そして、モビル・スーツはビーム・ライフル以外の選択肢を与えられてはいない。通常兵器と比べ3倍を超えるとされるエネルギー効率は、仮にビーム・ライフルと同程度の火力を得たいとしたなら3倍規模の火器を、機動力が重視される昨今において携帯しなければならないことを意味する。

ザフトにはモビル・スーツ携帯用の優れたアサルト・ライフルが存在するが、誰もナイフで刀に挑みたいと考えるものはなかった。

そして、ミノフスキー粒子は電波を阻害する。ビームは荷電粒子の塊を放つ、いわば散弾である。狙撃に不向きな材料がそろいすぎていた。

その結果、会敵距離は次第に縮小され、両者が肉眼で確認できる距離で睨み合う戦場が頻発することとなる。

ガンダムによって誕生したミノフスキー物理学にまつわる兵器によって、すべての材料が揃えられた。

ビーム兵器に頼る他ないが、しかしビームは命中率が高くはない。ミノフスキー粒子の電波干渉と相まってモビル・スーツは前へと出ることが求められた。そして、背部に装備されたミノフスキー・クラフトは前と横への機動を得意とし、反面後退を苦手とする。そして、敵は見えるすぐ目の前にいる。

当然の帰着。必然。戦術的合理性。そして、この状況が発生する可能性を超えた蓋然性。

これらはモビル・スーツ戦術に革新を導き出すこととなった。

白兵戦の優位である。

ビーム・ライフルは連射することができない。それはすなわち、一定時間の間に攻撃される回数に制限があることを意味している。たとえば、敵機に接近するわずかな時間。

ビーム・ライフルは命中率が低い。シールドならば、完全ではなくとも数回であれば防ぐことができる。ビーム・ライフルによる撃墜効率の悪さを補う方法は、たとえば、生きた弾丸とも言える現在唯一の誘導兵器たる格闘。

ミノフスキー・クラフトは前進を得意とし、後退を苦手とする。たとえば、接近しようとする機体の方が逃げようとする機体に比べはるかに有利であるということ。

白兵戦に特化した高性能機による効率的な敵機撃墜。この構図が導かれたことはあくまでも必然であった。

ソード・ストライカー?。スラッシュ・ウィザード。ソード・シルエット。ビームという高火力の射撃兵装があってなおこのような白兵戦用の武装が開発され続けることには理由が存する。

ケッテにリーダーが存在することには訳がある。

格闘を得意とする機体が敵機を追い、その接近行動を射撃を得意とする2機が支援する。この3機1組の小隊がケッテであり、攻撃力を担う白兵戦の1機をリーダーと呼ぶ。

ガンダムが量産されたことは必然である。敵機に高い確率で接近し、極めて効率的に敵を撃墜できる高性能機。それを満たすことができるのがガンダムと呼ばれる完成されたシステムであり、それを可能とする一部のパイロットの存在がその部隊の攻撃力を決定する事実は過言とはされない。

ケッテであれ、ロッテであれ、ガンダムの数が、エースと呼ばれ

る戦士の存在が、剣戟を支配する。

ディーヴィエイトガンダムとディーヴィエイトガンダムによるロッテ。リーダーはアーノルド・ノイマン大尉が務めている。

パイロットとしての経歴はモビル・アーマーに始まるアーノルドはディーヴィエイトをモビル・アーマー形態で運用することを好んだ。ウイングを横に広げ、手足をしっかりと固定する。スラスター方向の統一。戦闘機並みの推力がディーヴィエイトを真っ直ぐにヅダへと突き進ませる。

1個小隊のヅダがビームで撃墜しようと試みるも、ミノフスキー・クラフトによって不規則な機動を可能とするディーヴィエイトを捉えることはできない。

そして、リーダーだけを眺めていればいいわけではない。直掩を務めるミューディー・ホルクロフト中尉のディーヴィエイトがモビル・スーツ形態のまま、両手に装備された2連ビーム・ライフルで敵の隊列をかき乱す。

攻撃に組織だった防衛をとれなくなったヅダが小隊を離れた。その瞬間、アーノルドは風を体に浴びている、コクピットという室内にありながらそう錯覚させられるほどの加速を開始した。

射撃を当てるためには近ければ近いほどよい。その単純きわまりない理論のまま、ディーヴィエイトは飛翔しながら2連ビーム・ライフル、バルカン砲を掃射する。

装甲が弾け腕がもげる。小規模の爆発に叩きつけられる形で両腕を損壊したヅダはゆっくりと高度を下げていく。攻撃力を失ったヅダをアーノルドは敢えて追うことはなかった。自身のスコアを稼ぐことよりも素早く次の敵へと移ることを優先したためだ。

そのすぐ側の空域ではスウェン・カル・バヤン大尉のディーヴィエイトが猛禽を思わせた。モビル・アーマー形態のまま文字通りの爪を開いた。1対2本の爪がそれぞれビーム・サーベルを発生させ、ヅダの胸部をえぐるように斬り裂く。

ジェネレーターを破壊されたヅダが爆発する頃には、すでにディーヴィエイトは飛び去る。僚機の仇をとろうとガナーヅダが長大なライフルの銃口を持ち上げる。狙いをすます。そのために動きを止めてしまったことがヅダの運命を決した。引きちぎれる銃身。それが敵の攻撃によるものだと気づいた時には、すでに次弾がヅダを捉えていた。

リーダーの攻撃の隙を軽減する。それが補佐を務めるシャムス・コーザ中尉の役割である。

そして、直掩の存在さえ必要としない。それがゲルテンリッター。ゼフィランサス・ズールが夢想した、まさに悪夢のような機体である。2機のゼーゴックが並んで両手に構えたビーム・ライフルを次々と撃ち出す。連射性に乏しいビーム・ライフルの特性を理解した交互射撃は確かな弾幕をはりながら、それでもラインルビーンを捉えることはできても当てることはできない。

まるで、悪い夢でも見ているかのようにビームが素通りしていく。ただ敵は直進一一それも恐ろしい速度で一一しているだけ。狙いもぶれてはいない。それでも当たらない。ビームが敵機の後ろへただ

流れていく。

ゼーコックが本来は爆撃用――発射までのラグが大きく、対モビル・スーツの使用は想定されていない――の胸部ビーム砲を放つ。太いビームの輝きは、まるで世界を異にしているように命中という概念をどこかへ置き去りにしていた。

もはや逃げることもできない。ビーム砲を発射した姿勢のまま、ゼーゴックの体をビーム・サーベルの輝きが素通りする。爆発までの時間を置くことなく2機目のゼーゴックの上半身と下半身が分かれた。空にいながらにして残骸と化したゼーゴックの間には、2刀のサーベルを構えたラインルビーンだけがある。

その姿、爆発が多い隠そうと全身を包むミノフスキー・クラフトの輝きが煙を払い、ゼーゴック2機のリーダーを務めていたスラッシュ・ヅダが戦斧を振り降ろす。ラインルビーンはサーベルをかかげ斧を受け止める。奇襲が防がれた。そう、ヅダのパイロットが認識した刹那、ヅダはすでに胴を両断されていた。ラインルビーンがすねにビーム・サーベルを発生させ、回し蹴りの要領で足を振り抜いた後のことであった。

「たった一握りのエースの存在が戦況を左右する。それがこの戦争がガンダムのための戦争を呼ばれる所以」

ヒメノカリスの言葉は、ガンダムによって誕生したビーム兵器が、ガンダムのための戦場を形作った事実を端的に示していた。

「やっぱりお父様のいねえ地球軍なんて烏合の衆ですぅ」

翠星石の言うとおり、遊撃師団は敵の東側師団の行動を完全に抑制している。このままならば敵は基地を守る防衛師団を突破できないままいたずらに戦力をすり減らすだけだろう。

「油断するな、翠星石。何かがおかしい」

ＧＡＴシリーズを敢えて敵軍に流し、プレア・ニコルを解放させることで核ミサイルの封印をプラントに進んで解かせたほどの強かさを見せた大西洋連邦が、こんな消耗戦を果たして許すのだろうか。

すでに攻撃の勢いも弱っている。翠星石の言葉通りならばすでに勝敗は決したと言ってもいいだろう。

それでもアスランはまとわりつく違和感をぬぐい去れないでいる。

「でも、もう基地が見えないくらいの会進撃ですぅ。何も心配することねえですよ」

確かに、モニターにはすでにカーペンタリア基地が見えないほどに離れている。湾をほぼ横断してしまったらしい。基地は遠く水平線の彼方だ。戦闘を繰り返す味方の部隊。その南側で援護砲撃を行うパラスアテネを初めとするボズゴロフ級の艦隊。

そして、視界の隅に映る戦略図には記載されていない基地。カーペンタリア湾の沿岸――その沖合でボズゴロフ級が列をなしている――に森に飲み込まれるようにその存在感を静かに風景にとけ込ませている。

「翠星石、あの基地は何だ？」

「基地？」

「あそこに見えるだろ。すぐに検索してくれ！」

モニターの中に基地の様子が拡大される。塔は倒れ、壁材は剥がれ落ちていることがはっきりと確認できる。木が敷地内にさえ繁茂していることからも、それが廃棄されて等しい基地であることがわかる。基地としての機能が残存しているはずもない。作戦上の要素として斟酌されない程度の場所にすぎない。

では何故この基地はここにある。ザフト軍の横腹をつく位置に、ただ偶然廃棄された基地があったにすぎない。

（そう片づけるには危険すぎる）

「もう登録抹消されてやがる基地で……、アスラン、あの基地、潜水艦のドッグとしても使われてたです！」

天から投げ落とされた王の汚らわしさに世界は怯え、大地は身悶えします。反逆者、裏切り者、明けの明星、主の敵、魔王、光を掲げる者、プロト・ドミナント。天から与えられた力を、それでも天に向ける忌まわしき王は、今高らかに告げることでしょう。

死と破壊。決して戻らぬ安寧を約束します。

天が砕け、地が裂ける戦いの果てに訪れる世界を待ち望みます。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「堕天國宣戦」

ウインダム。まずは、魔王が羽ばたく、その一片を。

第15話「堕天國宣戦」

かつてブルー・コスモスには3輪の薔薇が咲いていた。

ムウ・ラ・フラガ。大西洋連邦軍のエースとして知られ、ヘリオポリス崩壊事件に居合わせたこの男は、後に最強の2文字とともに語られるガンダムを3機までザフトへと流した。

ラウ・ル・クルーゼ。ザフトきってのエースとして知られるこの男は略奪したガンダムの使用及び、とり漏らしたガンダムの追跡を行った。

ガンダムの力が広められ、ビーム兵器の必要性が示された。結果、ザフトは、プラントは必要とされる電力消費を補うためにプレア・ニコルの、核の封印を解かざるをえなくなった。

すべてはブルー・コスモスの策略のままに。

エインセル・ハンター。世界最大手の軍需産業ラタトスク社代表を務めるこの男は、アラスカにて敵対する穏健派を葬り去り、大西洋連邦における主導権を手中に収めた。核の力を受け取ったのもこの男だ。

薔薇の名はムルタ・アズラエル。3輪の薔薇であり、3者の男たちは、ブルー・コスモスの意志と力であった。

しかし1輪の薔薇は散り、1輪の薔薇は萎れてしまった。

残るはただ1輪。

そしてそれは人が手にした最も偉大で最も気高い薔薇の華。美しさの誉れは天にも届き、十重二十重と重なる花びらは冷厳なる色を秘め、その棘は、何にも増して鋭く長い。

エインセル・ハンター。

それは、人が手にしてはならなかった青い薔薇。

大西洋連邦東岸ニューヨーク・シティ、ブルー・コスモス本部代表執務室。3輪の青薔薇を模したエンブレムが壁一面を占めるこの場所で、男女が握手を交わす。

クリーム色をしたスーツの男性がまずソファーに腰掛け、相対する座席へと女性の着席を促す。女性は、眼鏡の似合う人であった。眼鏡と知性とが正比例の関係にはないとは言え、女性は知的とも上品とも、感情というものを努めて表には出さない方法を心得ているように小さく笑いを作る。

「お久しぶりです、ジブリール代表。代表の椅子には慣れましたか？」

「ええ。ただ、未だにあなたの伴侶の登場を望む声が大きく苦慮させられています」

男はロード・ジブリール。ブルー・コスモス代表として世界安全保障機構の会議に出席した時とは異なり、その表情は穏やかであった。

現代表は、たえず先代の、エインセル・ハンターの影に脅かされている。そんな偉大な先達者の妻、メリオル・ピスティスは困ったように口元を緩めて微笑む。

「デュクロ将軍と話し合われたと聞いています」

反対に、ロード代表が頬を強ばらせる。以前会議で顔を合わせた南アメリカ合衆国代表エドモンド・デュクロ将軍は典型的なタカ派である。かつてのブルー・コスモスの復活を願う将軍にとって、ロードの政策は生やさしく、そのためことあるごとに噛みついてくる。そのことへの反感を、ロードは隠そうとはしない。

「彼など典型的な、ファンと言ってもいい。エインセルたちの力は紛れもなく本物です。ただ、私の立場で軍にたとえをもとめることは問題かもしれませんが、指揮官たるものは後ろに下がり前線の兵のために作戦をたて、補給線を維持し、今後の戦いさえ視野にいれて動くべきなのです。いたずらに前線に出て、仮に戦死、実際、我々はムウ・ラ・フラガという男を失っている。私はエインセルが代表から退いたのは早すぎると考えています。ブルー・コスモスのために力になってもらいたいと考えています。だからこそ、ファントム・ペインの設立を働きかけました」

興奮気味であったロードが冷静さを取り戻すまでのわずかな時間を、メリオルはいやな顔1つすることなく待つ。

「失礼。愚痴など聞かせてしまいましたね」

エインセル・ハンター先代代表から後継指名を受けて以来、ロードはいつだとて偉大な先輩と比べられる。エインセルに勝てるはず

もない。しかし、ロード自身はそのことをブルー・コスモスの誇りとは思え、恥と感じたことはない。

エインセルとは違う道を行く。そのことを確認しなおすように、ロードは声を落ち着かせていく。

「ブルー・コスモスは、今だからこそかつての組織としてのあり方、確かに当時から過激な面が問題にこそなってはいましたが、思想としてコーディネーター反対を訴えていくべきであると考えています」

「エインセル様もロード様には期待をかけています」

メリオルは、あのエインセルがそばにいることを求める女性は男の慰め方を心得ている。エインセルは、ありとあらゆるものを持っている。

「ところで、エインセルは今どこに？　今日は来てくれるものと期待していたのですが」

優雅なほどに冷静なメリオルが、あからさまに目をそらした。ちょっと視線をそらすどころの騒ぎではない。首を曲げ、あらぬ方を見てまでロードの目を見ようとはしないのである。

ただならぬ事態は、ただならぬ事態によって引き起こされることを、ロードは心得ている。

「まさか……」

「エインセル様の悪い癖が出ました……」

最後まで目をそらしたままで、メリオルが答えた。

「概図でいい、戦略図を出せ！」

アスラン・ザラの言葉にモニターに示されたのはカーペンタリア湾の地図である。北側に口を開いた湾の喉元にカーペンタリア基地を示す記号と、防衛師団を示す凸型の記号。そして、そこから東側に湾を横断するように中隊程度の戦力が数珠繋ぎに点在する形で伸びている。

「遊撃部隊が不自然に引き延ばされて戦線にむらが生じている。引き返せ！　これは罠だ！」

東側師団の動きを抑えようと、会進撃の勢いのまま東に突出しすぎている。これではザフトはみすみす相手に柔らかい横腹を見せていることと何も変わらない。敵――よりにもよって最も練度が高いと思われる中央師団を相手は温存している――はどこでも好きな場所を突き破ることができる。

（それからどうする？　何が起こる？）

突き破った戦線を維持することで遊撃師団、防衛師団両方を挟撃するつもりだろうか。北には敵部隊がひしめく。突き立てた錐のように突破した地点を起点として傷口を左右に切り開くことで遊撃、防衛師団は西と東側からも攻め込まれるとともに分断することもできるだろう。

だが、それは反対に考えればザフトが地球軍を挟み撃ちにしてい

る状況にも近い。確かに一時的には突破されるかもしれないが、十分に押し返すこともできるはずだ。

まだ違う。何かが違う。

「アスラン、ぼさっとしてる暇はねえですよ！」

翠星石の相変わらず乱暴な声に無理矢理意識が揺り戻されると、アスランはＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンを動かす。ミノフスキー・クラフトの輝きが残滓として中に残り、その光の中を疾走する赤い影が通り抜けた。

「ラインルビーン！　キラか！」

通り抜けた影が、輝きとともにとって返す。両手に握られたライフルを腰に安置している余裕はない。ライフルを放り投げ、ビーム・サーベルを抜く。不可視のＩフィールドが形成され、ビームがサーベルの形を成した瞬間に、光が激突する。全身をミノフスキー・クラフトで包まれるゲルテンリッターは、ヤーデシュテルンとラインルビーンはサーベル同士をぶつけ合い、それぞれの光が１つの塊となってカーペンタリアの空を照らす。

制止していたヤーデシュテルンに比べラインルビーンの速度は大きい。辛うじて攻撃を受け止めたものの、押し切られる形でアスランは体が後ろへと押しやられていく感覚を味わっていた。

「マスターをサポートすべきゲルテンリッターがずいぶんな失態ね、翠星石」

ガンダム――正確にはゲルテンリッター同士――を繋ぐ通信から

聞こえたのは少女の声。会ったことはないが、翠星石の妹、真紅だろう。

「しゃあねえですよ！　人間勝ってる時は調子よくて周りのことなんて見えやしねえです」

鍔迫り合いの状態であるため、モニター一杯に映し出されているラインルビーンへと翠星石が指さしながらわめく。調子に乗ったり、戦闘中に騒いだり、翠星石は本当に子どもだ。

このままでは埒があかない。

「キラ、君はどういう育ての方を、したんだ！」

アクセルを踏み込み、ミノフスキー・クラフトの強度を上げる。一気に突き飛ばすつもりで両刀を振り抜く。この剣撃に弾かれるように２機のガンダムの間に若干の距離が開いた。これならレールガンを展開できる。両腰にある長い銃身を起きあがらせる。ＺＧＭＦ－Ｘ１０Ａフリーダムガンダムにも同様の武装があったことを思い出しながら、それがガンダムを相手に満足な戦果を上げることができなかったことも勝手に記憶の海から這いだしてくる。

発射された高速の弾丸は、やはりラインルビーンを捉えることはなかった。

ラインルビーンは光の軌跡を残して飛び上がり、見上げた頃にはすでに方向を転換。すでにヤーデシュテルンを目標に収めていた。

「育ての親は君だよ。君だって肝心な時に注意力をなくすだろ。子は親の悪いところから似てくるものだよ」

こんな短い言葉をネオ・ロアノークが発している間に、ラインルビーンが降下し、それをヤーデシュテルンがサーベルで弾く過程が含まれている。攻撃を失敗したラインルビーンはそのまま通り過ぎていく。

戦いには制高という概念がある。頭上をとった方が優位という考え方だ。降下の勢いのまま、水面近くにまで高度を下げていたラインルビーンは、果たして不利な状況におかれていると言えるのだろうか。レールガンを放つ。しかし高速で水面すれすれを飛翔するラインルビーンを捉えることはできず、いたずらに水柱を立てるでしかない。

ハウンズ・オブ・ティンダロスの体得者に射撃はものの役には立たない。

「翠星石、こちらから仕掛ける。目を回すな！」

答えを待つ前にアスランはヤーデシュテルンを降下させた。ショック・アブソーバーがあるにも関わらず、体が浮き上がるような感覚にはいつまでも慣れることができない。

降下する勢いでビーム・サーベルを振り下ろす。サーベルは確実にラインルビーンを捉え、そして剣は素通りする。反撃として放たれた回し蹴りは、しかしヤーデシュテルンを鼻先をかすめた。

この繰り返しだ。

性能は同等。実力は伯仲。互いの攻撃を紙一重でかわし合いながら、端から見たなら互いに何度も撃墜されている。本気を出せば勝

利を収めることも不可能ではないだろう。しかし、よくとも相撃ち、最悪共倒れになる目算が高い。

（今は俺もおまえもまだ死ぬべき時じゃない！）

ヤーデシュテルンのサーベルをラインルビーンがサーベルで受け止めると、反対側の手では逆のことが起きていた。互いが互いの攻撃を受け止め、同時に受け止められている。ビームが還元されるために発する光が目映い。その光の先に、ラインルビーンがまるで睨み合うようにヤーデシュテルンと向かい合っていた。

「何故お前がここにいる？　カーペンタリア基地は遙か西の果てだ！」

こんなところで遊撃師団の相手をしていても仕方がない。防衛師団にはレイ・ザ・バレルもいれば、分厚い防衛線が展開されている。いくら大西洋連邦軍とて正面切って戦えばどれほどの被害がでることか。ネオが、キラがそんなこともわからないはずがない。

目の前に見えるラインルビーンの顔が、光の加減からか笑ったように見えた。

「基地を破壊しなくても、基地は破壊できるものよ、翠星石のマスター。あなたも、そろそろ気づいている頃ではなくて？」

まるで真紅の号令を待っていたかのように西でいくつもの水柱が上がり始めたことを、翠星石が伝えてくれた。モニターを見ている余裕はないが、だいたい見当がつく。

「狙いは……、ボズゴロフ級か！」

ザフト軍は防衛師団として部隊をカーペンタリア基地に重点的に配備し、遊撃師団は東へと歩を進めた。包囲されないよう、敵の東側師団を追いかける形で、しかし防御を手薄にしないために部隊をちぎりながら置き石として配置しながら。

その結果、部隊は不自然に薄く、長くカーペンタリアを東西に横断する形で展開してしまったのだ。

無論、防衛師団は健在。カーペンタリア基地の堅牢性は損なわれてはいない。だが、敵部隊を北側に押し込めておけるだけの力はすでに失われていた。

すでに名のない基地である。

誰も関心さえ寄せることのなかったここはカーペンタリア基地から離れた位置にあり、湾の南の岸辺に位置する。その位置から少し沖合を見渡せば、多数のザフト軍ボズゴロフ級潜水艦が背中を、弱いわき腹を見せて群れていた。

そして、北側では少し力を込めれば破けてしまうような手薄な遊撃師団の残り香のような2個中隊。

まずは基地が動いた。放置され、すでに機能していない潜水艦のドッグは、しかし天蓋付きの停留地としては十分な機能を果たす。大西洋連邦軍ビーコン級潜水艦が3隻、基地を抜け出すなり飢えた狼の群のように背中を向けるボズゴロフ級へと襲いかかった。

放たれる魚雷がボズゴロフ級のわき腹に突き刺さる。カーペンタリア湾は浅い。比較的浅海を航行していたボズゴロフ級に突き刺さったそれは、巨大な水柱を海面へ優々と届けた。破孔から流れ込む水がザフト兵を押し流す。

北側からは伸びきった遊撃師団の網をたやすく引きちぎり、中央師団が突入を果たす。ドッペンホルン・ストライカーを装備したＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーを中心に、多数のモビル・スーツが水面に顔だけを出しているボズゴロフ級へとその鉤爪を振り降ろす。ビームがたやすく上部甲板を吹き飛ばし、背負われたキャノン砲は多少の水など構うことなくボズゴロフ級へと突き刺さる。

慌てたボズゴロフ級の中にはが急速に潜行を開始するものもいる。だが、カーペンタリア湾の水深は浅い。わずか６０ｍ程度深さに全長２７０ｍもの潜水艦が急速潜行できるほどの深さはない。頭から自ら叩きつけられるボズゴロフ級は海底の砂を巻き上げてなおその勢いは止まらない。底に受け止められた衝撃はそのまま艦体に伝わり、中央からひしゃげて折れる。

カーペンタリアの湾に、残骸それ自体を墓石として宇宙鯨の群が死に絶えていく中、白鯨が３００年の時を越えて再び姿を現した。

海の深い青にも負けない青のガンダムがボズゴロフ級の上甲板にその両足をつけて立っていた。ＧＡＴ－２５２インテンセティガンダム。甲殻類を思わせるバック・パックを背負い、手には海神を思わせる三叉戟。バック・パックとアームで繋がれた1対のシールドには青い薔薇の紋様が描かれる。

海は浅く、海面は近い。荒天の中、それでも波立つ白波がボズゴロフ級とガンダムとを撫でる。泡沫が視界を遮る中、インテンセテ

ィは三叉戟を構えた。刃そのものが赤熱していることが沸騰し生じた泡がまとわりつくことで判別できる。高周波ブレードと呼ばれる刃そのものが超周期に振動するこの兵器は鉄はおろか、フェイズシフト・アーマーでさえバターのように切断する。

突き立てられる戟。分厚い装甲がたやすく裂け、流れ込む水の動きが新たな泡を作り出す。インテンセティは泡から逃れるように駆けだした。水の中を、前へ、前へと。刃はそのままボズゴロフという鯨に深く食い込み、裂傷が突き進む。それは鯨の解体を思わせて、泡はその血液、濁流はその断末魔。

東アジア共和国からファントム・ペインへの入隊を許され、インテンセティガンダムを与えられた戦士はこうも呼ばれていた。白鯨、白鯨ジェーン・ヒューストンと。

海底に横たわり、すでに息をしていないボズゴロフ級のその上に白鯨は立つ。その背後からはさらに3機の青薔薇を掲げるインテンセティが水を裂きながら次の獲物を求めて現れる。

後ろから追い回され、気づいた頃にはホエール・ガンが腹深くに食い込んでいる。数世紀に渡って鯨油目当てに殺戮された海洋哺乳類の気分がわかるというものだ。だが、ボズゴロフ級はいくら殺してもランプを灯すどころか機械油による海洋汚染を助長するだけだ。わざわざ狩られてやることはない。

ロンド・ギナ・サハクは揺れ動くブリッジの中で、そばの柵にしがみつきながらも状況の確認に努めていた。とても艦長をしているとは思えないほど派手な装束に身を包んだ伊達男は、それでも艦長

の座にあることを許される。どれほど艦が揺れ動こうと、ギナは恐怖をその目に浮かべることはない。

それは写し身にしても同じだ。ギナのすぐ後ろ、同じような姿に同じような格好をした妹、ロンド・ミナ・サハクが床に座り込みながらも気丈に不敵なまなざしを崩していない。

「回頭はしないのか？」

「潜水艦はモビル・スーツのようには動けないものだ」

船医の言葉をギナは聞き流す。

その場で回頭などしようものなら狙い撃ちにされる。大きく迂回して振り向こうとすれば艦隊の足並みを乱し、最悪衝突しかねない。この海域は浅く、元々潜水艦向きではないのだ。

そう、説明している余裕はない。一際大きな、明らかに魚雷の直撃を受けた衝撃がブリッジを揺らす。机上に置かれたペンが跳ね上がるほどの揺れが事態の深刻さを印象づける。

「右舷に被弾。弾薬庫を中心に浸水拡大！」

「隔壁、閉鎖しろ！」

「しかし、まだ乗員が！」

「潜水艦の約束事だ。このまま浸水を放置すればみなが死ぬ！」

クルーとの短いやりとりの中でギナは歯茎が痛くなるほど強く噛

みしめる。格好つけるわけではないが、部下をみすみす死なせて喜ぶ指揮官などいない。

「右舷からバラスト水をブローしろ。左右で偏っている」

破孔からの浸水が止まってくれることを祈るばかりだ。今は少しでも艦体の状態を維持し、敵から逃れる術を探さなければならない。

「ハイネ、戻れそうか？」

「敵に背中を見せることはできない。見栄というよりも現実的な問題としてな。やつら、今になってガンダムを投入してきやがった！」

ハイネ・ヴェステンフルス。何とも覚えにくい名前の拾いものは今頃ＺＧＭＦ－２３Ｓセイバーガンダムで大空を駆けていることだろう。白兵戦に特化したＧＡＴ－１３１イクシードガンダムをリーダーとして直掩にドッペンホルン・ストライクダガーで構成されるケッテと交戦中だと通信が届く。何とも優雅な空の旅だ。

「撤退を続けることで速度の速いモビル・スーツと母艦とが引き離される。そして戦線は縦に伸びる。典型的な陽動だな。敵の狙いは初めからボズゴロフ級だったんだろう。輸送船を失えばカーペンタリアは事実上陥落したも同然だ。そして、要塞を落とすことに比べれば潜水艦を沈める方が遙かにたやすい」

（分析感謝する、妹よ。だが……）

「思い通りにはさせんさ。グーンをあるだけ出せ。艦の防衛に当たらせる！」

温存していたと言えば聞こえはいいが、この４年で急速に発展したモビル・スーツの中でただ水中で使えるというだけでしかない旧式でできることがあるだろうか。地球軍は高い汎用性から水中でも使用できるインテンセティガンダムの開発に成功している。

しかし、ザフトにはそのような機体を作ることはできないのだ。地球にとって、水中戦に優れた機体は攻撃にも本土防衛にも使用できる。だが、宇宙に本国を持つプラントにとって、水中で真価を発揮するだけの機体は攻撃にしか使用できない。

ザフトは地球にとって侵略者に他ならない。

ボズゴロフが沈めばカーペンタリアは輸送基地としての機能を大きく消失させる。それはすなわち事実上の機能停止にも等しい。そう、カーペンタリアは傷一つつけられることなく、陥落させられるのだ。

「何か手はないのか？　何でもいい！　誰でもいい！　我々が反撃に打ってでるだけの材料を与えてみせろ！」

部下の前で取り乱す。指揮官としてあるまじき行いを、ギナは抑えることができなかった。目の前のコンソールを叩きつける音が、しかし警報、騒乱、艦を揺り動かす音にかすれて消える。

（これ以上ボズゴロフ級を沈められる訳には……）

防衛師団に参加するラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァのブリッジにさえ、ボズゴロフ級が轟沈させられる様子が、炎と黒煙が海

を這い、仲間たちを呑み込んでいく様子がモニターに映し出されている。

「レイ大尉は？」

「現在基地の防衛に当たっています」

防衛師団から戦力を割けばそれこそ敵の術中にはまることになる。わかってはいたが、ではどうすればいい。

タリアは軍帽を深くかぶりなおした。少しでも不安が部下に伝わらないようにするための癖のようなもので、他の指揮官はどうするのか知らないが、これがタリアなりの気分の落ち付け方でもある。

「ルナマリア・ホーク軍曹、シン・アスカ軍曹はどうか？」

まさに藁にもすがるとはこのことだろう。正規市民でもないパイロットに何が期待できよう。

「ホーク軍曹、駄目です。身動きとれません。アスカ軍曹……！」

何でもないはずの報告である。たとえ戦闘中とは言え、そんなに手間取るような内容だろうか。クルーの不自然な報告の意図はすぐに知れた。

「敵艦隊のど真ん中にいます！」

大西洋連邦軍ビーコン級潜水艦。鯨体形の潜水艦は獲物を追いか

け回す猟犬のように浅海を進む。厚い水を通り抜ける陽光が光の柱となって艦体へと突き立てられる。荒れる海面は泡を巻き上げ、美の女神が生まれ得る情景にはほど遠い。泡から生まれた女神は、しかし戦神アレスの愛人である。

ここはまさに戦場と海であった。

潜水艦とは思えないほどけたたましい音をたて、パッシブ・ソナーは打ち放題。船側から放たれた魚雷が泡を纏いながら急速に、高速に、無慈悲にボズゴロフ級へと突き刺さる。

戦神司る空赤き火の星に届けとばかりに爆炎と煙が立ち上り、恐怖と敗走が産み落とされる。戦場と海との間に。

光はただただ降り注ぐ。敵であろうと、味方であろうと構いなく。

光は降りてくる。敵をめがけて、敵を目指して。

海を砕き、波を割り、泡を纏いながら光は降臨する。ミノフスキー・クラフトの輝きを背負い、その手には1対の大剣。2歩の足がビーコン級上甲板に立ち、鋭い2本の脚が突き立てられる。分厚い金属の装甲がひしゃげ、2本の剣が足跡として突き刺さる。突き刺さる。

潜水艦に立つ4足の獣。コクピットの中でシン・アスカは4足の獣のように猛る。

「沈め！　沈め～！」

足が1歩前進すると、剣の脚が前へ。突き立てられ、突き刺さり、

深く、深く。また足が、脚が前へと動く。

剣が行進する。引き留める海の水を構いもしないで、傷口から流れ出る泡を嬉々と眺めながら。剣が進む。剣が歩む。

この艦にはあの方が乗っておられる。撃沈などもっての他。喧騒、騒乱、戦笛に至るまで静寂を乱すことさえ許されない。

「上の馬鹿を振り落とせ！」

インパルスが艦の上。中では黒い軍服――ファントム・ペインの証――の指揮官が部下から1枚の紙切れを受け取っていた。粗末な紙に書かれた言の葉は、それだけで1人の指揮官を忠実な部下へと変える。

指揮官は、その口元を力強く歪めた。

「前部タンク、ブロー！　上甲板カタパルト展開準備！　総員、対ショック姿勢！」

こんな浅海で緊急浮上をしようとしている。そして、攻撃を受けている最中にわざわざカタパルトを開く。

それがどうした。マニュアル違反が何だ。

指揮官は自信に満ち、クルーたちの腕には青い腕章。この腕章こそが、すべてを物語る。

体が下から持ち上げられる感覚。緊急浮上する潜水艦に、シンの体はＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムごと持ち上げられていた。

突然体が軽くなる感覚。水面を突き抜け、水がインパルスの体からはがれ落ちた。

鯨体型潜水艦を地面とした大きな大きな下り坂。坂の下に指令塔がそびえ、その根本が開口していた。甲板が左右に開いて、カタパルトのレールがシンの、インパルスの足下めがけて伸びていた。

（こんな状況でカタパルトを開くなんて……）

誤作動。ついそんなことを思い浮かべる。潜水艦はすでに水平に戻ろうと前が沈み始めていた。このまま水に浮く状態に落ち着けば攻撃を仕掛ける好機になる。ビームは水中では使用できないが、通常なら桁外れの攻撃力を発揮する。

それが計画であり、その通りにできるはずだった。

カタパルトに光が灯る。何かが出撃しようとしている。潜水艦が水平に落ち着くよりも早く、シンが反応できるよりも速く。

何かが飛び出して来て、コクピットを光と衝撃が同時に襲う。フェイズシフト・アーマーに激突されたのだ。衝撃の一部が光として放出され、残りはインパルスとシンが引き受けることになる。

吐き気を催す急激な挙動に光景がめまぐるしく変わる。インパルスが潜水艦の上から叩き出された。これくらいがわかる。目の前、

ゴーグル・タイプのデュアル・センサーにＶ字のブレード・アンテナ、どこかカンダムに近い顔をした機体が目一杯に映されていた。

（こいつに叩き落とされたのか……）

見たことはないが、その特徴は地球軍の新型ＧＡＴ－０４ウィンダムとして聞かされていたものと同じだ。こいつがカタパルトで加速した勢いのままインパルスに抱きついたのだろう。高度計ではすでに１００ｍほどに達している。

潜水艦からはまんまと引き離された。それならもう目的は果たしただろう。いつまで抱きついているつもりだ。

ビーム・サーベルを発生させ、敵の背中を撫でるようにきるつもりで動かしにくい腕を、それでも動かす。新型とは言え量産機。ガンダムでさえ耐えられない攻撃に耐えられるはずがない。

撃墜できる。そんな予定は、破れた。

急に敵の姿が見えなくなる。腰の辺りを蹴られたようだ。衝撃に襲われ、敵はインパルスを足場にして飛び上がった。

舌を噛んでしまわないようしっかりと食いしばり、見上げるところにいる敵の姿を見る。

白い機体だ。ストライクダガーよりも装甲の起伏が激しく、どこか鎧を着た騎士のように見える。背中には１対の可動翼を持つ新しいストライカー――シンには知る由もないがかつてＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅストライクノワールガンダムが使用していたストライカーと同型のものである――をつけている。

ウィンダムは、まるで泳ぐようにゆっくりと宙返りすると、自由落下を利用して加速する。敵は下にいる。見失う気はない。すぐにモニターで敵の姿を追い、そしてすぐに敵を追いかける。

そんな予定だった。それなのに、敵の姿はすでにない。眼下には曳光弾やビームの輝き、爆発の光ばかりで、戦場の光景しか見えない。

（一体どこに……？）

消えるはずもない。融けて消えてしまうはずもない。では、どうして落ちていった先にいない。シンがこれまでに培った戦闘経験が告げていた。自分は、確実に敵があの時間で移動できる範囲を見たのだと。

シンは、敵を、ウィンダムを捉えられるはずだった。予測が予定とならない。この感覚を、シンはこの敵との戦いで3度経験した。

敵は、予想と予定をすべて上回ってくる。

突然の警報が響く。異常接近を知らせるはずのそれは正しいはずがなくて、そして何よりも確かだった。

モニターに再び敵の顔が一杯に映し出される。いつの間に、どうやって、やられる。いくつもの思いが邪魔をして動くことができない。ウィンダムの蹴りがインパルスの腹部へ命中して、シンは自分の悲鳴に耳が痛くなるほどの叫びながら弾きとばされる。

出力はこちらが上。攻撃力も防御力も機動力も。コストと生産性

以外のすべてが勝っているはずだ。攻撃に転じれば勝てる。まだくらくらとする頭に無理をして、シンはインパルスを立ち直らせるとともにアクセルを踏み込む。出力に比例して推進力を生み出すミノフスキー・クラフトが強い輝きを放ち、背中からインパルスを加速させる。

戦艦にさえ致命的な損害を与えるビーム・サーベルを、何故か動かない敵へと素直に振り下ろす。敵は再び上へと逃げた。今度こそ見逃さない。インパルスを後ろへと下げ、敵の動きをモニターに捉える。

モニターはしっかりと敵の姿を捉えた。それなのに、予定していたものは見えてはくれない。

ウィンダムはほぼ垂直に飛び上がった。そして、ほぼ直角方向に突然向きを変えて見せた。ＡＭＢＡＣ。能動的質量移動による自動姿勢制御。手足を動かすことで重心の位置を変え、推進剤を消費することなく機体を動かす。そんなモビル・スーツ操縦の基本テクニックがある。

それでも、どんな教官もどんな熟練兵でも機体を直角に機動させる方法なんて見せてはくれなかった。

敵はまた直角に曲がって見せる。１度目は前へ、２度目は下へ。飛び上がったウィンダムは、これでモビル・スーツとしてもあり得ないほどに小さい旋回半径でインパルスの後ろを通り過ぎて行った。

反応さえできなかった。左足がいつの間にか切断されている。

そしてまた敵は直角に機動する。３次元的に、どちらに動くのか

さえ予想できない。これまで、どんな機体もゆっくりと弧を描くように旋回していた。だからその旋回半径を感覚として覚えておけば敵の動く範囲が予測できた。こんな動き方をされれば感覚で敵の位置を掴むことなんてできるはずがない。

見えないはずだ。わからないに決まっている。敵は直線を複雑に何度も折りまげ、弾丸を思わせる速さでシンを意識を飛び越える。

「何なんだ、あんたは～！」

出力はこちらが上のはずだ。直線の最高速なら負けているはずがない。機体を逃がそうとミノフスキー・クラフトを輝かせる。インパルスを加速させると、まず、速度を高めようとする。十分に速度が乗っていない状態ではせっかくの性能が生かせない。

（速度さえあれば、負けないはずだ！）

戦場よりも高い空を飛ぶと、敵機が追いかけてくる。まだ速度が上がりきってないから、引き離すことができない。敵がストライカーから根本で固定された銃身を起きあがらせるなり、レールガンが放たれる。見えている攻撃なら余裕をもってかわすことができる。

高機動を維持したまま、敵の放つレールガンをかわし続けることができる。そろそろ速度が上がってきただろうか。

ウィンダムが中程度のビーム・サーベル――恐らく、ストライカーに設置されていたのだろう――を両手に1つずつ構えて接近してくる。単純な攻撃力ではこちらが有利だ。ビーム・サーベルにはビーム・サーベルで迎撃すると、敵は弾けるように通り過ぎる。そして、例の直角カーブでまた強襲を仕掛けてくる。それをまた打ち返

す。

インパルスは十分な速度で飛行している。それなのに、敵は確実に追いつき、そして主導権を握ったまま攻撃を仕掛けてくる。

意味がわからない。単純な出力ならインパルスが上。それなら、速度の優位はインパルスになくてはならない。ふと、速度計を見ると、せいぜい時速１００ｋｍ程度。遅い速度ではないが、感覚と速度があっていない。本当は、もっと出ていなければおかしい。

魔法でも何か使われたのか。考えをまとめている余裕はない。敵は速度的優位を維持したまま、また急接近してくる。モビル・スーツの不必要に擬人化された顔が急速に大きさを増してくる。

「うわあぁぁ！」

思わず機体を大きく動かした。

その時、速度計が大きく戻った。軌道を曲げる時、パイロットに大きな負荷がかからないよう、速度を落とすシステムがモビル・スーツには搭載されている。インパルスは、攻撃をかわす度、いや、攻撃される度に速度を落とされていたのだ。

敵はさらに速度を上げたようにも思える。あんな無茶な機動をしているのに、速度はまるで落ちていない。恐らく、リミッターを解除した上で、Ｇさえも計算に入れた完璧な操縦を実現しているのだろう。

（同じモビル・スーツでどうしてこんなに動きが違うんだ……）

疑問と言うよりも嘆きに近い。敵は、このウィンダムのパイロットはシンよりも確実に強い。勝利する映像がいつまでも描けず、ただ敗北する現実だけが近づいてくる。

また敵の強襲をサーベルで防いだ。完全に防いだつもりだった。それなのに、左手に握られているサーベルは中腹で切断され、ビームは消失した。高機動戦闘の最中、折れた剣の先はすごい速度で回転しながら落ちていった。

もう機体の有利なんて問題にはならない。敵は圧倒的に強い。赤服を一応とは言え身につけるシンよりも、ザフトのガンダムよりも。

こんなパイロットがいるなんて信じられなかった。目の前の現実が憎らしかった。エインセル・ハンターは強いとアスランが言っていた。では、エインセルはこの敵くらい強いのだろうか、それとも、もっと強いのか。どちらにしても、シンよりも遙かに強いことになる。

絶望させてくれるほどの時間さえない。敵はすぐにUターン――実際にはもっと鋭い方向転換をしている――して、すぐに攻撃を仕掛けてくる。

意識で戦っていては負ける。左腕のサーベルを敵へと投げつける。命中を確認していては間に合わない。右腕に残されたサーベルを両手で構え、ただ迎え撃つために振り上げる。

作戦も何もない。ただ相手の速度に合わせて腕を動かしただけ。それでも、敵は意識と無意識のさらに先を行く。

放たれたサーベルをまるで通り抜けるような最小の動きでかわし

た。そうシンが意識した頃には、敵はすぐ目の前。振り下ろされる大剣を気にすることもなくインパルスの懐に入り込むと、両腕が肘の先から切断され、右足が切り取られていた。しかしこの認識さえすでに遅く、わき腹に入った敵の鋭い蹴りがインパルスを強く蹴り飛ばす。

悲鳴を上げる余裕さえなかった。自分が吹き飛ばされていると気づいたことでようやく、悲鳴ともうめき声とも思える声が口から漏れる。そして、この意識さえ、やはりすでに遅い。敵は、すでに次の行動に移っていた。斜め下に落ちていくインパルスを追いかけて、現実離れした何かがモビル・スーツの姿をしてるみたいにシンへと迫る。

それから自分が何をしたのか、シンは覚えていない。ただ、自分に何が起きたのかだけは他人の記憶のようにかすかに頭に残る。

コクピットめがけて繰り出される攻撃。ビームの光が、光そのものが襲ってくるような錯覚。

上半身と下半身が分離するインパルス。これまで何度も命を拾ってきた分離機構が作動する感覚。

そして、確実に目の前の目標を失ったはずの剣が、それでもレッグ・フライヤーを切断する。偶然ではない。目の前で分離されたにも関わらず敵は一瞬の内に目標を切り替えて下半身を斬ったのだ。

（それならチェスト・フライヤーだって、上半身だって狙えたはずだろ……。なのにどうして……？）

不自然な分離と急速な落下の勢いに、シンの意識はここで途絶え

た。

それからどれほどの時間が経ったのか。次に気づいた時には、インパルスの体はカーペンタリア湾の波に洗われていた。海は、とても静かだった。ついさっきまで空で激戦――少なくとも、シンにとっては大激戦であった――を繰り広げていたことが嘘のように、空は青くて、波は穏やかだった。

インパルスは着水していた。きっと、墜落防止システムが働いたのだろう。ソード・シルエットのミノフスキー・クラフトが無傷であったことがせめてもの幸いという奴だ。比重では水よりも軽いモビル・スーツは海水に浮く。傷口からの海水の侵入は少ないらしく、上半身だけになったインパルスは仰向けになって浮いていた。どこかやられたのか、今は動かすことさえできない。シンはそんな屍となったインパルスの腹に座って、空を眺めていた。

本当に、どこまでも空は深い。空を突き抜けて行った先に宇宙があるなんて想像もできないくらいに。

「戦いは……、終わったみたいだな」

もうこうして2、3時間くらい漂っている気がする。遠くに聞こえていた戦いの音も今は聞こえなくなっていた。

ザフトは勝ったのだろうか。戦闘時間から考えてみると、きっとカーペンタリアは落ちていない。地球軍もボズゴロフ級を破壊したことを手土産に撤退したのではないだろうか。

「ボズゴロフか……」

シンがあのウィンダムと戦うきっかけになったのも、ボズゴロフを少しでも守ろうと無理に敵の潜水艦に攻撃を仕掛けたことだった。

あんなに恐ろしい敵は見たことがなかった。もしも機体性能が同じだったら、あんな時間をかけずに、シンなんて瞬殺されていたことだろう。リミッターを解除した無茶な機動を、それでも完璧に制御できる技量と計算し尽くされた戦略。最後に見せた異常な回避術。そのどれか1つでもシンには手の届かない力だった。

体は自然と丸くなり、膝を抱くように座る姿勢を変える。そろそろ日が落ちようとしていた。薄暗くなりつつある中、寒くないわけじゃない。それでも、震えはきっと、寒さのせいじゃない。

死にたくないとは思っても、死ぬことが怖いなんて考えたこともなかった。味方なんていらないと思ったこともある。それなのに、今は1人でいることが怖い。

ザフト軍はたかが1人のアブディエルを探してくれるだろうか。そんなことは期待しない。それよりも、撤退中の敵軍に見つけられてしまうことの方が確率として大きい。

味方なんていらない。1人でいることにも慣れてる。でも、1人でいることがこんなにも無力だなんて考えたこともなかった。

母さんはいつも仕事、仕事で家になんていてくれない。友達なんて欲しくもなかった。ザフトでだって、アブディエルは仲間外れにされる。それでもいい。それでよかった。それなのに、いまは震えが止まらない。

気づくと、日はすっかり落ちていた。そんな夜の闇を吹き飛ばし

て光が頭上からシンへとかかった。膝を抱く腕を解いて夜空を見上げる。するとそこには、光輪を背負った白いガンダムが輝いていた。見間違うはずもない、ＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルがゆっくりと降りてきていた。

手を突き立ち上がって、光が降りてくる様を眺める。

「レイ隊長……！」

どうしてここに。まさかシンを探して。

「こうも簡単に見つかるとはな。おまえは運が強いようだな、アスカ軍曹」

レイ・ザ・バレルの言葉は、シンの震えを止めさせていた。

カーペンタリア基地に戻ったシンを出迎えたのは、異様な光景だった。左右に軍服を着た人々が並び、誰もが直立不動のまま道を作っている。すでに日が暮れたにも関わらずライトが惜しげもなく灯されて、シンが進む先、男が１人、シンを待ちかまえているように立っていた。

外套やローブのようにも見える上半身と下半身を同時に包むゆったりとした服を着ている。長い髪がよく似合う整った顔をした男性の顔を知らないプラントの人間なんていないだろう。

ギルバート・デュランダル議長。その人物の名前に気づいた時、シンは思わず足を止め、左右を見回した。プラントの最高権力者が

自分を待っているはずなんてない。

すぐ後ろを歩いていたレイ隊長と目が合うと、その目はシンに落ち着きを促しているように思えた。

何が何だかわからない。ただ、気を取り直して歩き出す。何でもいい。ただ上官が目の前にいるならすべきことは決まっている。適度な距離まで進んだところで軍人として敬礼する。

「シン・アスカ軍曹。話は聞いている。この度は君の機転に救われた。ザフトを代表してお礼申し上げたい」

テレビでしか聞いたことのない独特の響きと力強さを持つ声。慣れた様子はない、しかし迷いのない動きでデュランダル議長は敬礼を返した。

「ザフトの英雄に」

「敬礼！」

議長の言葉を誰かが繋いで、左右を囲んでいた兵たちが一斉に敬礼をした。単あるアブディエルにすぎないシン、ただ1人へと。

暗い夜空にいくつもの光の柱を立てて、スペングラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦の広大な露天甲板に４機のインテンセティガンダムが並ぶ。そのどれもがシールドに青い薔薇を持つ。東アジア共和国のファントム・ペイン所属機が左右に2機ずつ並び、道を作り出す。

道の前にはネオ・ロアノーク隊長を初めとする主立ったパイロットに加え、ヒメノカリス・ホテルに連れられた子どもが2人。ステラ・ルーシェはヒメノカリスのそばを離れず、アウル・ニーダは自分の機体と同系の機体を興味深げに見上げている。

インテンセティたちはパイロットの降上を容易にするため、膝を折る。それぞれの機体からパイロットがハッチから伸びるロープに足をかけゆっくりと甲板に降り立つ。ヘルメットをかけていてもそれぞれ年齢も性別もバラバラであることがわかる。そのうちの1人を先頭に、残りの3人が後につく。

「ネオ・ロアノーク少佐は？」

先頭の1人――体格からして女性である――はヘルメットを外しながらそう訪ねた。外されたヘルメットから金髪があふれ出て、若い女性がその顔を露わにする。軍人らしい厳しい雰囲気をまといながら、その視線は柔らかい。

ネオが歩み出ると、女性パイロットは手を差し出した。

「白銀の魔弾とお会いできるとは光栄です」

「こちらこそ、白鯨ジェーン・ヒューストンの名前は聞いています」

互いが自信を持つが故に相手を認めあう度量を持つ。ファントム・ペインの隊長を任せられる2人は握手を交わした。

「通り名持ちのパイロットって本当にいるんだな」

「ほんの一握りだけど。ファントム・ペインにはどうしてもそんな

人が多い」

アウルの何気ない言葉に応えるのは姉であるヒメノカリス。実戦を経験したパイロットの中でも実績を重視して採用されるファントム・ペインの性質は、ヒメノカリスの言葉に端的に著されていてた。

聞いておきながらアウルは興味をなくしてしまったらしい。めんどくさそうに頬をかき、その指を4機のインテンセティガンダムが作る道の先へと向けた。

「じゃあ、あのウィンダムのパイロットもそうなのかな?」

甲板を揺らし、白いウィンダム――通常、ところどころい青が配色されているはずが、この機体は白一色に塗装されている――が降り立つ。かしづくように膝を折るガンダムの先に量産機。このおかしな光景に、アウルは、なんだよ、これと軽く吹き出す。

ウィンダムもまた膝を折り、コクピットからは男が降りてきた。薄暗い中でも白いスーツが照り返す。ガンダムに作られる回廊を赤絨毯の上を歩く王のように進む度、その髪が麗しい金髪で、瞳の青さが人々を捉える。

男の姿を確認した者から、ファントム・ペインの面々が次々敬礼していく。あのお調子者のシャムス・コーザでさえ軍の形式に則った敬礼をしていた。

人物の正体を知らないアウルと、正対面の人には慣れないステラ。そして、ヒメノカリスだけが敬礼を怠っていた。

ステラを置いていくことになっても。アウルに気づかれることが

なくても。

ヒメノカリスは走り出した。ドレスが乱れることを構うことなく、その顔は恋に焦がれる少女のよう。

「お父様！」

愛しい人のその胸に飛び込んでその首に手を回して抱きつく。すると愛する父上はそっとヒメノカリスを抱き止める。王が寵愛する姫君をその腕に抱くように。

「寂しくはありませんでしたか、ヒメノカリス？」

そうして、黄金の玉座を持つ王は愛娘へ優しく囁きかける。

愛情と誠意。あなたはこの言葉に違和感を感じはしませんか。馬から落馬する。頭から頭痛がする。どちらも意味の重複です。だとすると、愛と誠は重複しないのでしょうか。愛情という言葉に誠意は含まれていないということなのでしょうか。

愛情は誠実を前提とはしていないということでしょうか。

愛情とは偽りさえ許容するということなのでしょうか。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「愛と誠」

ザフト。愛はそれでも、誠と結びつくはずです。

第16話「愛と誠」

「ハイネ・ヴェステンフルス。見ての通り優秀なパイロットで、奇襲にさらされたボズゴロフ級からただ1人生還した勇敢な男だ」

ギルバート・デュランダルは、そうシン・アスカのほぼ向かい側に座る少年兵を紹介した。同じ赤服で、橙色の髪が特徴的な少年だ。その胸には十字架の形をした黒い勲章がかけられていた。シンの胸にも同じ勲章がつけられている。

鉄十字勲章。ザフト軍で功績のあった兵士に送られる勲章を、シンは受領した。窮地に陥っていたボズゴロフ級潜水艦を狙っていた敵潜水艦にシンが強襲を仕掛けたことで敵の足並みは乱れ、結果、壊滅的打撃だけは逃れることができた。向かいのヴェステンフルス中尉が勲章を与えられたのは、デュランダル議員の言葉通りその勇気を讃えられてのことだ。

ついヴェステンフルス中尉の勲章に気をとられすぎていた。議長が何か話していた気がするが、話はいつの間にかシンの話題に移っていた。

「シン・アスカ軍曹、いや、今は曹長だったね。優れた機転によってカーペンタリアの窮地を救ってくれたのは彼だ」

その場の全員の人の視線がシンに集まり、シンは軽く頭を下げた。

この場はシンとヴェステンフルス中尉を祝うための晩餐会でもある。普通は見ないような細長いテーブルを挟んでザフトの兵隊が並んでいる。上座は当然議長だが、テーブルのほぼ真ん中の席はシン

とヴェステンフルス中尉が向き合って座っている。

「緊張しないでくれとは言っても難しいこととは思うが、同じザフトの未来を担う者として、今日は親睦を深めてもらいたい」

そんなことを言われても大半は見ず知らずの人ばかりだ。議長の前で羽目を外せる度胸のある人もいないらしい。簡単に見回したところ、みんな静かに食事をしていた。

兵士の多くは緑色の軍服で、シンのような赤服の方が少ない。せいぜい、シンとヴェステンフルス中尉、それに隣で体を固くしているルナマリア・ホークくらいなものだ。

（あれで味なんてわかってんのかな？）

それくらいナイフとフォークの動きがぎこちない。

ともかく、多くが緑の軍服で、何よりアスラン・ザラもレイ・ザ・バレル隊長の姿もここにはなかった。シンが見知った顔はタリア・グラディス艦長――指揮官として白い制服を着ている――くらい。とはいえこの艦長とは普段仕事上での話しかしない。席が離れていることもあって話はできそうにない。

「デュランダル議長。この時期に何故地球へ？」

「君にはギルバートと呼んでもらいたいものだが、いや、すまない」

盗み聞きするつもりはなかったが、静かな中だ。声は自然と聞こえてくる。元からグラディス艦長とデュランダル議長は隣り合わせというわけではないから、特に隠すつもりもなかっただろう。

デュランダル議長はナプキンで口元の汚れを落とすと、その視線を前に向けた。全員に聞かせる内容だと考えたらしい。

食べながら話を聞く訳にもいかない。まだほとんど食べていない魚料理から顔を上げて、まだ食事中の場合はたしかナイフとフォークを八の字に置いたはずだ。

「私が地球を訪ねたいと考えたのはこの世界の現状をこの目で見たいと考えたからだ。今、世界はエインセル・ハンター、ブルー・コスモスという悪意によって大いに汚されてしまっている。血のバレンタインから続く一連の紛争は、もはや戦争とさえ言えない」

シン以外の人たちも手を止めて話を聞いている。

「エインセル・ハンターの狙いとはプラントの根絶であり、そのためには味方を犠牲にすることさえ厭わなかった」

「アラスカ基地のことですね？」

突然の声に、シンを含めて全員の視線が1人に集まった。ルナマリアだ。

「あ、すいません。映画で、私も見ましたから……」

議長の言葉を遮ってしまったと思ったのか、ルナマリアはばつが悪そうにしている。それを、デュランダル議長は笑ってすませた。

「いや、理解してくれて嬉しいよ。あの映画はセミ・ドキュメンタリーとしての役割も期待されているものだからね。戦争の現実を1

人でも多くの人に知ってもらいたかった」

要するにプロパガンダだと認めているということだろうか。

「エインセル・ハンターが仮に勝利を収めた場合、コーディネーターはどうのように扱われてしまうのだろうね。もう２００年以上も前の話だが、ナチスドイツがアウシュビッツを初めとする強制収容所で行ったことを思い出すと、私は震えが止まらなくなる」

そのナチスドイツを止めろという大号令で進められたマンハッタン計画で作られた核爆弾が、血のバレンタイン事件で使われたことはどうなんだろう。

議長は立派なことを言っていると思う。それでも何かがおかしい。そんな気持ちが心を離れてくれない。

「どうして地球の人々はエインセルのような男に力を与えるのか、私は理解に苦しむ。もしも正しき人が人々を導くことができたならそれはどれほど素晴らしいことだろうね。私は戦争が少しでも早く終わることを願ってやまない。それは、君たちも同じことだろう」

カーペンタリア基地を守り抜いた英雄を讃える晩餐会は終わって、シンはルナマリアと休憩室のテーブルに座っていた。他に人の姿はない。ここは基地の中でも一部の人しか入れないような場所で、気のせいか椅子の座り心地がいいような気がする。

本当ならアブディエルになんて入れない場所で、シンは勲章を眺めていた。実際鉄が使われていると思われる勲章は手に重く、鈍い

光沢が妙に視線を引いてくる。

「エイブス隊長たちが欲しがってたの、きっとこれなんだよな……」

新造コロニー、アポロンで命を落とした仲間たちは、勲章さえもらえれば本国への帰還が許されると、除隊が許可されると信じていた。シンの手にかかる重さは、とても命をかける価値があるとは思えないほどに軽い。

「隊長たち、それが欲しくて無茶してた。シンはそんなことないと思うけど、もう無茶はやめた方がいいよ」

わかってる。そんな返事をしておく。マッド・エイブス。アーサー・トライン。アビー・ウィンザー。みんな死んでしまった。アブディエルなんて呼ばれたくなくて、市民権が欲しくて無理をして。そんな人を何人も見てきた。

勲章を握りしめる手に自然と力がこもる。

「でも、アブブディエルでも頑張ればちゃんと認めてくれるってわかって、ちょっと安心かな」

まただ。デュルンダル議長の時も感じた正体のわからない違和感を、どうしてだかルナマリアからも感じた。

ルナ。そう呼びながら顔を上げる。同じテーブルに座る仲間を見るつもりで、しかしシンの視線はそれよりも先に休憩室の外に吸い寄せられた。

廊下を横切った誰か。桃色の残像が網膜にこびりついて離れない。

無意識に体が動く。立ち上がった勢いで勲章が手から落ちた。甲高い音がした。鉄の十字架は床にでも落ちたのだろう。

「ヒメノカリス……！」

ルナマリアが止める声を聞き流す。テーブルにわき腹をぶつけた痛みもかまわないでシンは走り出した。休憩室を抜けて廊下を曲がる。すると桃色の後ろ姿が、オーブで出会った少女の後ろ姿が見えた。

地球軍にいるはずのヒメノカリスがどうしてこんなところに。そんな疑問は、ついさっき少しだけ見えた横顔に塗りつぶされる。見間違えるはずなんてない。

「ヒメノカリス……」

名前を呼んで、その肩に手をかけようと手を伸ばした。その手を誰かが掴んだ。手をひねられる。走っていた勢いさえ殺されて、気づいた時には壁に押しつけられていた。

シンを壁に押しつけているのも女性である。切れ長の目をしてただでさえ厳しい印象を受ける人なのに、さらに睨まれている。体格に恵まれているとは言えないシンを、それでもしっかりと押さえつけている。

ヒメノカリスはこの女性をマティスと呼んだ。

「マティス。その方に敵意はありません」

マティスは明らかな疑いの眼差しをシンに向けた後でようやく解

放した。

以前聞いたのと同じ声をしていても、何か雰囲気が違う。鮮やかな桃色の髪をしていて、瞳は青くて。それでも、彼女は微笑んでいた。ヒメノカリスと同じ顔で、それでもヒマノカリスは微笑みを見せてなんてくれなかった。

見とれているのか、それとも呆然としているのか。何にせよ、シンはまだ壁によりかかったまま少女を見ているしかなかった。

ルナアリアが追いついて来たのはちょうどそんな時だった。

「ちょっと、シン！　勲章……」

勲章を持ってきてくれたのだろう。では、どうして急に戸惑ったのか。シンが少し関心を持って振り返ろうとしたところで、ルナマリアは素っ頓狂な声をあげた。

「この人……、いえ、この方、ラクス様よ！」

ルナマリアを見ようとした時とは比べものにならない早さで少女へと首を戻す。

ラクス・クライン。この名前を知らないプラントの人間なんていない。歌姫で、アスラン・ザラの恋人で、映画じゃプラントを導く女神のような人。今では市議会議員として政治活動さえ行っている。

ヒメノカリスとは違う。

「すいません、人違いでした……」

ではこのマティスとか言う女性は護衛かその類だろう。いきなり見ず知らずの男が走ってくれれば取り押さえもする。

もう休憩室に戻ろう。そう足首を曲げた時のことだ。

「ヒメノカリスを、妹を知っているのですか？」

妹。その言葉の意味を頭に入れる前に、ラクス議員はシンに微笑みかけた。

「少し、お話しませんか？」

爛れた黄金のガンダムが横たわる。見上げる男の髪も同じく黄金。

「フォイエリヒの修復には相応の設備が必要ですね」

小惑星フィンブル落着の際、傷ついた体を構うことなく大気圏突入を行ったＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムは全身が傷つき、まったく修復されないままの姿をさらしていた。

本来の主であるエインセル・ハンターに看取られるように。

「ごめんなさい。私が、壊しました」

エインセルの傍らに立つヒメノカリス・ホテルは桜の木を折った子どものように伏し目がちにうなだれる。普段感情を顔に出すことのないヒメノカリスとて、父の前では表情を作る。

そんなしおらしい愛娘の頬を手を添えて、ヒメノカリスが顔を上げる時節にあわせて、エインセルはその澄んだ青の瞳で見つめあう。

「私は喜ばしいと考えています。フォイエリヒがこれほど破壊されながら、ヒメノカリスが無事であったのですから」

頬に触れる父の手を包み込むように手にとって、ヒメノカリスはただその優しさに身を委ねようとする。しかし、ここは公共の場である。誰が何を見ようと咎められることはない。

「お姉ちゃん……」

ステラ・ルーシェからかけられた声に、ヒメノカリスは名残惜しげに父の手を外してその姿を探す。すぐそば、軍人としてあるまじき位置にまで接近されていたことに、ヒメノカリスは瞬きをほんの数回。父以外には機微を見せようとしないこの少女にとって精一杯の驚きを見せた。

ステラは体を小さくしてヒメノカリスの方を見ていた。正確には、エインセルのことを見ないようにしている。人見知りの激しい妹のために、ヒメノカリスは父を手で示した。

「ステラ、この人はエインセル・ハンター。私のお父様」

名前を知らないはずがない。世界でこの名前を知らない人を探す方が難しいだろう。

人見知りと知名度は関連がない。ステラとしては大切な、唯一頼ることができる姉をとられてしまう不安も手伝ってエインセルの顔

を見ることさえできないでいる。

「その、あの……」

エインセルの背は高い。少しかがんでみせたところで、その顔はステラの上にある。視線を伏せたステラと視線が交わることなどないはずだった。ただエインセルが手をかざしただけで、その前提は根底から崩壊する。

白く大きな手。力強さを想起させるにはしなやかで、しかし弱さを体現するには不釣合いな自信に満ちた動きを見せる。そんな大きな手が、ステラの前髪をそっとかき分けた。開けた視界に吸い寄せられるように見上げたステラの瞳を、エインセルは柔らかな微笑みで受け止める。

「元々あなた方エクステンデッドは戦闘要員ではありません。それによく耐え、頑張ってくれましたね、ステラ」

手はそのまま握手を求めるようにステラの前にさらされる。視線は伏せたり上げたりを繰り返す。ステラは恐る恐るといった様子で両手をゆっくりと、添えるようにエインセルの手を掴む。

手を通して伝わる体温と内からあふれる確かな力強さ。ステラの一挙手一投足をすべて受け入れてくれるようにエインセルは微笑みを絶やさない。

まるで巨樹の木漏れ日のよう。とても大きいのにまるで威圧的でなくて、優しささえ感じられる。姉と慕うヒメノカリスが慕う父と、ステラは視線を合わせることを恐れることはなくなっていた。その優しさを確かめるようにエインセルの手を離さないステラ。それを

どこまでも受け入れる度量を見せるかのようにエインセルは微笑みを絶やすことはない。

そんな2人の交流の様子を、ヒメノカリスはただじっと眺めていた。瞬きすることなく、その瞳に深い色をたたえながら。もはや相手が自分の妹である事実など関係ない。

「ヒメノカリス、エインセル兄さんに近づく女性すべてを敵視する癖、そろそろいい加減、治した方がいいと思うよ……」

ちょうどそばを通りかかったネオ・ロアノークの言葉である。サングラスに隠された目を除いてさえ、呆れ顔がわかるほどである。もっとも、恪気に憑かれたヒメノカリスは、義弟にして叔父が通り過ぎるまで何ら関心を払うことはなかった。

ネオと入れ替わるようにしてアウルが、肩をかすめることほどの距離でネオとすれ違う。足音を響かせ、子どもらしく、わかりやすい不機嫌さを示している。

「ヒメノカリス姉ちゃんの父さんとか聞いてるけど、ここは格納庫だぜ！　民間人が入ってくんなよ！」

ステラと握手を交わすエインセルへと音が聞こえそうなほど力強く指さす。青き薔薇の王へと向けられたその指は、しかし姫君によって絡めとられる。ヒメノカリスが真顔でアウルの人差し指を握りしめる。

「アウル。人には優先順位というものがあるの。私の場合、最上がお父様。あなたは二の次。お父様に口答えはしないで」

とても静かな声だった。抑揚も感傷もない。澄んだ風ほども感情が含まれていない声は、すなわちアウルへの一切の気遣いが放棄されたことを意味する。

「そう言うことはもっとすまなさそうとか、言いにくそうに言ってくれよ！」

無理矢理掴まれた指をふりほどくと、アウルはエインセルを露骨に睨みつける。結局、アウルもステラと同じである。子どもであり、大切な姉がどこからともなく現れた人間にとられてしまうことに怯えているのだ。

「なあ、おっさん。あんた強いんだろ。なら、俺と勝負しようぜ。模擬戦てやつをさ」

手を離す。すでに握手できないことに名残惜しさを仕草として見せるステラから離れ、アウルを止めようとするヒメノカリスをほんのわずかな手の動きで制する。

エインセルはアウルと向かいあわせた位置にしっかりとした足取りで立った。

「アウル・ニーダ。決闘の申し出、お受けします」

格納庫に放置された資材を椅子代わりに整備員から非番のブリッジ・クルーまでもが飲み物片手にくつろいでいる。格納庫に用意されたモニターはＧＡＴ－０４ウィンダム、ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型にコードで繋がれ、互いのメイン・モニタ

ーの映像が映し出される手はずになっている。狭い格納庫内で実際に機体を動かすことはできない。シミュレーターを使う。アウルとエインセルを選手として、その他大勢の観客が見守っている。

ロアノーク隊の面々もその他に含まれている。

「どっちに賭けます、副隊長殿？」

普段から飄々としているシャムス・コーザは当然のように胴もとを買ってでた。手には賭けについて書かれたメモらしきものを持ち、副隊長であるアーノルド・ノイマンの元へと来ていた。

座ったまま、アーノルドは困ったように笑う。

「僕は賭事はしない主義なんだけど、オッズくらいは興味があるかな？　今、何対何だい？」

「エインセル代表が１倍で、坊主が１６９倍……」

あまりの惨状にその場にいた誰もが言葉を失った。シャムスがサングラスをかけなおすように指で押す。この博徒自身も現状をわきまえていない訳ではない。

「……賭が成立してないじゃない」

ミューディー・ホルクロフトが呆れたようにため息をつくその横で、どこの観艦式に参加しているのかと尋ねたくなるほど堅苦しい姿勢を崩さないのはスウェン・カル・バヤン。シャムスはスウェンの肩を強く掴んだ。

「スウェン、今度はお前が行ってこい！　たぶん１００倍を切れる！」

決して賭けが成立するとは言わない同僚を一瞥してから、スウェンは視線をモニターへと戻す。まだ戦いは始まっていない。

「断る。勝てない戦いは挑まない主義だ」

「エインセルさんて強いの？」

作務衣、軍服ばかりの格納庫の中でミリアリア・ハウだけが私服のままスウェンたちと並んで座っている。戦闘そのものにはあまり興味がないらしく、頬杖をついたままモニターの方を見ている。

「これなら象と蟻の方がまだ賭が成立するくらいさ、ミリィ」

シャムスはミリアリアとスウェンの間に入り込むように座ると、ミリアリアの肩を抱こうとする。その手は当然のようにミリアリアによって叩き落とされた。

格納庫から離れた休憩室。女性３人がお茶を嗜んでいる。ヒメノカリスがとてもリラックスした様子でテーブルにつく。そのテーブルの上では真紅が映像の中にご丁寧に椅子とティー・セットを表示させていた。ただステラだけがどこか落ち着きがない。

「ねえ、お姉ちゃん？」

「何？」

あくまでも冷静なヒメノカリス。

「アウルと、エインセルさんの戦い、見なくていいの？」

真紅はティー・カップを置くと、その小さな唇からは吐息がこぼれる、ような映像が投影された。

「ステラ、あなたは太陽が東から登ることを毎朝確認するかしら？」

少し考えてからステラは首を大きく左右に振る。

「しないと思う」

「それと同じこと。太陽が東から上るように、水が低いところへ流れるように、人は自明のことをわざわざ確認しようとは思わないものだわ」

真紅は再びお茶を口に含む。この小さな貴婦人も白薔薇のヴァーリも、２人の男の戦いにまったく興味を示すことはなかった。

通された部屋は、質素で、それでいてどこか気品があって。言葉では説明できないが、とにかくラクス議員と同じで静かな気迫がある部屋だった。ただソファーが置かれているだけの部屋なのに。

ソファーは１つしかない。シンとルナマリアは客人としてソファーに座らされていた。ラクス議員は立ったまま、かごに入れられた鳥と戯れている。ルナマリアなんて有名人を前に緊張しているとい

うのに。

「気を楽になさってくださいな」

小さな笑い方もヒメノカリスとラクス議員は違う。ヒメノカリスとは1度会っただけで、笑顔なんて見たこともないが。

「私はラクス・クライン。シン・アスカ様のことは耳にしています。あなたのお名前を、お聞かせくださいませんか？」

ラクス議員はシンの胸の勲章を見てから、シンの隣に座るルナマリアへと視線を移した。

「ル、ルナマリア・ホークです！　その、ご尊顔承り、光栄至極。この上ない栄誉と……」

立ち上がり、慣れているはずの敬礼が不自然に見えた。ルナマリアがどれほど緊張しているかよくわかる。全身筋肉痛かと思えるくらい動きが固い。

「気を楽になさってください。映画の私と現実の私は違います。実際は議員の末席を任せられている小娘にすぎません。あなたのように命をとしてまで戦うことの方がどれほど尊いことでしょう」

「こ、光栄です！」

あくまでも落ち着いているラクス議員に比べるとルナマリアの慌て方がよくわかる。敬礼をしたまま、座るどころか動こうとさえしない。そんなルナマリアのすぐ脇でシンは座ったままだった。

「あの、ラクス、さん……」

「はい」

「ヒメノカリスのこと何ですけど……、妹って……？」

かごの鳥が鳴き始めた。とても綺麗な声で、それでいてかすての歌姫の声を邪魔することもない。演奏が、歌手の歌を引き立たせることと同じで。

「それを語るには、まず私たちの悲しいお話を聞いていただかなければなりません。ラクス・クラインは1人ではないのです」

ふと思いついたのは翠星石のことだ。あのお人形も髪が白くて瞳が赤いことを除けばヒメノカリスとラクス議員とも同じ顔をしている。何か関係があるんだろうか。

「私たちはプラントの未来を担うべく、命を分け合い、それぞれが異なる役割を演じることができるよう力を授けられました。ヒメノカリスと私は同じ命に基づく命として、同じ顔と姿を有しています。私は政治を、ヒメノカリスは戦いを得意とするように」

人は生まれながらに使命を持っている。こんなことを言っているのではなくて、そういう風に遺伝子を調整されて生まれてきたということなのだろう。

ラクス議員は少しだけ嬉しそうに、少しだけ悲しそうに話してくれる。

（何なんだ……、この嫌な感じ……）

何か具体的に不愉快なことがあるわけではない。正規市民というだけで反発するほど子どもでもないはずだ。それでも、どうしても嫌な感覚が消えてくれない。普段は何とも思わないルナマリアの声にもつい軽く苛ついてしまう。

「それじゃあ、ラクス様と、その、ヒメノカリスさんは姉妹だってことですか？」

「はい。ところが、私たちは引き離されてしまいました。ブルー・コスモスの手によって。C．E．６１．２．１４。あの日、あの場所で」

自分の誕生日を知らない人はいてもこの日付を知らない人はいない。「血のバレンタイン事件」。プラント、ユニウス市第７コロニー、ユニウス・セブンが核攻撃にさらされた事件は、ブルー・コスモス主導で行われたとされている。そして、エインセル・ハンターはその組織の代表を務めていた。

シンの頭の中でパズルが組み上がっていくに連れて、ラクス議員は悲しみの方が増しているようにも見える。さっきまでは、まだ妹のことを嬉しそうに話す姉の顔があったのに。

「私も、そしてお父様も必死でヒメノカリスを探しました。努力が失望に変わり、失望は、やがて絶望へと成り果てました。ヒメノカリスがブルー・コスモスに、エインセル・ハンターの娘として生きていることを知った時のお父様の嘆きがどれほどであったか、おわかりいただけますか？」

「ヒメノカリスさん、もしかして利用されてるんですか？」

さすがのルナマリアももう敬礼してはいない。代わりにシンが動けないでいた。ヒメノカリスとはまだ1度会っただけ。しかし見知らぬ間ではない。そのことが混乱の原因になっていいるのだろう。

今度見えるのは妹を利用されている姉の怒り。

「エインセル・ハンターはヒメノカリスを戦場に送り出しています」

大西洋連邦軍に所属していると言っていた。シンは体に力を入れることなく考えることに集中しようとした。もっとも、そんな時間はなかった。

「シン様。あなたがどこでどのようにヒメノカリスと知り合ったのか、お聞かせくださいませんか?」

今のラクス議員は、妹を心配する姉だろうか。

「俺は、オーブでした。ちょっと前に寄港した時、慰霊碑の前で……」

やっぱりおかしい。あの時のヒメノカリスはとても強そうな人だった。ステラとか言う妹――似てないから、きっとラクス議員の妹ではないのだろう――を守ろうとしていた。

「やはり、戦場にいたのですね……。妹は、どのような様子でしたか?」

目の前に父の命を狙う男がいるのに、その父親こそがシンの仇だと教えてくれた。ただ自分の利用する相手にちょっとした復讐がし

たかったからとは思えない。とてもまっすぐな瞳を持つ人だったから。どうしても、ラクス議員の妹と、シンが出会ったヒメノカリスが一致しない。

「どうって……、その俺の一方的な身の上話を聞いてくれて、エインセル・ハンターが、俺の母さんの仇だって教えてくれました」

「ヒメノカリスは、優しい子のままでいてくれたのですね」

まるでその喜びを示すように鳥が大きく高い声で鳴いた。

「私、ブルー・コスモスだって、エインセル・ハンターだって倒して妹さんを取り戻してみせます！　ねえ、シン」

「ああ……」

熱っぽくて、それでいてどこか楽しそうだ。ルナマリアがアスランと、映画の中の英雄に出会った時と同じ顔をしている。ついていくことができない。まさかそれは、シンだけがいまだに座ったままだということと何も関係ないはずなのに。

「シン様にとっても、エインセル・ハンターは仇なのでしたね。エインセル・ハンターはあまりに多くの悲しみを振りまきすぎました。シン様の願いが成就されること、世界が喜びに満ちる日を、私は願っています」

まるで映画の中のようだ。悲しみや戦うことの正当性を主張するお姫様と、それに同調する戦士。たった1人の戦士だけでも部屋が熱気に覆われたような気もする。

こんな中でシンは、どうしても映画の中には入れないでいた。

ヒメノカリス・ホテルについてシンが知っていること。それは、ラクス・クラインの妹で、エインセル・ハンターの娘で、ステラ・ルーシェという妹がいる。

たったそれだけだ。

何も知らないに等しい。ヒメノカリスのことも何もかも。

ここはＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムのコクピットだ。これまで使っていた機体はＧＡＴ－０４ウィンダムとの戦いで破棄せざるを得なかったため、新しく支給されたものだ。手に馴染ませるように操縦桿を握る。まだ新品であるためか、若干の堅さがあった。

思えば、単なる外人部隊でしかなかったシンがアスラン・ザラに出会い、特殊部隊にいることが認められたのは、すべてあの時が始まりだった。

新造コロニー、アポロン。まだ建造途中のコロニー蓋が閉められておらず、筒の状態だったーの強行調査に行って、そこで仲間たちを失った。ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムを見たのもその時だ。

（もしかすると、あれ、ヒメノカリスが乗ってたのかもな）

それでもシンはフォイエリヒガンダムを撃墜することができなかった。仇ははるかに高い場所にいる。４年前、シンが見上げた空に

黄金のガンダムが輝いていたのとまだ何も変わっていない。

仇なんてとれるのか。仇をとってどうする。母さんが喜んでくれる。母さんを喜ばせたいのか。母さんを喜ばせてどうする。これまでもしてきたことをまた繰り返していくつもりなのか。

母さんに言われるまま。

コクピットは薄暗い。ハッチは閉めていないが、格納庫のどこからでもシンの顔を見ることはできないだろう。だから、歯を強くかみしめているのを知っているのはシンだけだ。

母を憎んでいると知っているのはシンだけだ。

場の雰囲気を完全に無視した声が聞こえてきたのは、本当に突然のことだった。いったいどうやってコクピットに入り込んだのか、コンソールの上にプロジェクターが置かれている。もちろん、翠星石の姿が投影されている。

「どうしたですか、ちび人間？」

赤い瞳を持つヒメノカリス、翠星石が屈託のない笑顔でシンを見ていた。つい体から力が抜ける。その顔に悩まされていると言ってしまいたくなる。

「君には関係ないだろ」

「聞いたですよ、ウィンダム相手に負けたってこと」

今度はとても意地悪そうに笑う。ヒメノカリスはこんな顔絶対に

見せない。

「用がないならいいだろ」

どうやってコクピットに入ったか知らないが、いくら本体が１８ｍを超えるモビル・スーツであっても、プロジェクター自体は人の手で簡単に動かせてしまえる。シンは翠星石を摘みだそうと手を伸ばした。

「お母様の仇、討ちてえですか？　エインセル・ハンターに勝ちてえですか？」

この言葉を聞かされるまでは。手が体ごと止まる。乗ってきたと考えたんだろう。翠星石の行動は早かった。

「仕方ねえです。翠星石が一肌脱いでやるです」

両手を腰に当てて、わかりやすく胸を張る翠星石。操作なんてしていないはずなのにコンソールが点灯し、ハッチが閉まっていく。翠星石の仕業に決まってる。

「勝手にシミュレーター起動するなよ」

「ちび人間に見せてやるです。フォイエリヒを使ったエインセル・ハンターの力を。ちびるでねえですよ」

モニターには宇宙空間が展開されている。ちょうど正面のモニターには、だいたい１００ｍくらいの場所にフォイエリヒガンダムが徐々に形作られていく。

「エインセル・ハンターのデータがあるのか？」

「当然ですぅ。翠星石がフリーダムやってた頃、ゼフィランサス・ナンバーズとはみ～んな戦ったです。見たくねえですか？　お母様の仇が、C．E最強と謳われた力が」

シンの返事を待つことなくフォイエリヒは完成していた。機体の状態を示すモニターにはインパルスがソード・シルエットを装備していることを示している。翠星石が元々パイロット・サポート・システムであるということが、何となく本当のような気がした。

「優しい翠星石に感謝するですよ、ちび人間」

いや、やっぱり嘘か。

つい先程までの喧噪が嘘のように静まり返った格納庫の中で、コードを引きずる音が聞こえる。子どもの胴くらいの太さのコードを、アウルが脇に抱えて運んでいた。長くて、とても引きずらずにはいられない。各種ケーブルが目一杯詰まったコードを力むための声を出しながら運んでいるのだ。

格納庫の床から生えている装置の前まで来たところで、真紅が声をかける。

「そう、それをここに繋ぎなさい」

装置の上――アウルの背よりも少し大きい――から言ってくるから思い切り上から目線だ。渋々指示に従って装置とコードをつない

でも、つい口を滑らせる。

「何で俺がこんなこと……」

「口よりも手を動かしなさい」

（どこの口うるさいおばさんだよ）

今度は口にしなかった分だけ賢くなった。装置に音がするまでコードを押し込む。これでいいだろう。

「ほら、できたぜ」

「次は私をコクピットまで運んでちょうだい」

別に言ってもらいたいわけじゃないが、ご苦労様の一言くらいくれてもいいんじゃないだろうか。

（こんなこと言っても無駄だろうけどな……）

もうこの赤い瞳の少女の性格はわかったような気がする。いちいち反抗しても勝てないと、アウルは円盤型のプロジェクターを手にとった。もちろん、持ち方が荒っぽいと怒られた。乗降用のロープにつり上げられている間、そんな不満が顔に出たのだろう。真紅はすました顔で、ますますアウルの機嫌を損ねてくる。

「アウル、エインセル様に１０連敗をきして泣きついてきたのは誰だったかしら？」

あれは、こう言い出そうとしてアウルは言葉にすることをやめた。

シミュレーターではアウルがＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型を、エインセルがＧＡＴ－０４ウィンダムを使用していた。機体性能のせいにもできなければ、まぐれと言い切るには１０連敗は痛い。

何も言い返すことができない。アウルはコクピット・ハッチをくぐり抜け、シートに座るまでいろいろいいわけを考えて、ことごとく失敗していた。結局、プロジェクターをコンソールの脇に置くまで何も言い返すことができなかった。

「ほらよ。それで、本当に見せてくれんだろうな？」

「私はオーベルテューレとしてフォイエリヒとの戦いを経験したものよ。あなたにはそれを見せて上げるわ、アウル。夢のような悪夢と恐れられた魔王の力を」

コクピット・ハッチが閉まり、あたりが暗くなる。モニターや計器の明かりで自分の姿を確認できる頃には、すでにシミュレーターが立ち上がっていた。何もない虚空空間で黄金の輝きを持つガンダムがアウルの前にいる。

「……嘘だ！　こんな動き、人間にできるわけない！」

シミュレーターは起動からわずか１３秒で停止していた。システムの不具合によるエラーではない。この事実を、シンは信じきれずにいた。

ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが、ザフト軍の最新鋭機が

設計そのものは１０年前と言われるＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムにわずか１０秒で撃墜された。いや、撃墜されたらしい。

自分は何もできなかった。これだけがわかっていること。

敵は何をした。これがわからないこと。

翠星石は威張るでも余裕でもなく、ただまじめな顔をしてシンを見ている。

「認めるです、シン。これが魔王とまで呼ばれたプロト・ドミナントの力です」

これがエインセル・ハンター。これがフォイエリヒ。

「あれで手抜いてたって言うのかよ……」

見て知っていたはずの力だった。

モニター画面は暗い。ついさっき、心の中で真紅に文句を言ってシミュレーターを動かし始めたばかりだった。

ただアウルはエインセルを知っていた。だから、信じられないとは思わない。これから登ろうとしていた山の高さを呆然と見上げることはあったとしても。

「この無窮の世においてさえ最強と賞揚されるエインセル・ハンター。その力に、一朝一夕でたどり着くことができるとは思わないこ

とよ、アウル」

真紅は椅子に腰掛け紅茶を飲んでいた。機械としてまったく意味のない映像であっても、今のアウルにはつっこみを入れるほどの気力は残されていなかった。

客人を失った私屋にて、鳥の奏でる声楽に感興そそられる姫君が無邪気に鳥かごを撫でる。

この部屋には2人の騎士と1人の従者。

アスラン・ザラはこの部屋の中で唯一の調度であるソファーの背もたれに手をついて体を支えている。その様子は、この部屋の空気に打ち解けているようにも見えた。

「ラクス、確かにシンは頑張っている。ただ、シンが君の興味を引く相手とは正直思えない」

「尊母を失い、家郷を捨て、ただ刃と、ただ剣となった。すべてはクライン家１０００年の夢のために」

「シンは子どもだ。それに、ただの移民で単なるコーディネーターだ。計画に何にも関わることはできない。違うかな？」

「私は、この子がどこで生まれ、どのようにここに来たのかを知りません。それでも、私はこの子に愛情を注ぎます。この子の清らかな声が私の心を慰めてくれるからです」

鳥の声を聞きながら、アスランはこれ以上姫にお伺いを立てることはない。代わりにレイ・ザ・バレルが、もう1人の騎士が動いた。

部屋の隅、壁から背を離そうとしないレイ。さも、部屋の中央に近寄ることを忌避しているように。

「聞きたいことがある。エピメディウム・エコーを殺させたのは、プラントなのか？」

Eのヴァーリにしてダムゼル。公式には事故と発表されたこの事件を額面通りに受け取るものなどここには誰もいない。2人は真実を知っている。2人は、真実に近すぎた。

姫は獣と戯れ、よって、従者が代わりに応える。マティス・クラインは、姫とも騎士とも一定の距離をあけてたたずんでいた。レイに向かって答えているはずが、その視線は何を見ているでもない。レイもまた、マティスを見てはいない。

「13枚のカード。しかしそれがクライン家1000年の夢を妨げるのだとしたならば、破いて捨てなければならない。ヴァーリもドミナントも、ダムゼルでさえも例外ではない。そうでしょう、エースのアスラン、セブンのレイ」

マティスの手から床に捨てられた1枚のカード。トランプのカードで、4隅にハート、ダイヤ、クラブ、スペードがすべて描かれた特殊なもの。数字は5。Eのヴァーリであるエピメディウム。そして、Eは第5のアルファベットである。エピメディウムを象徴するカードにナイフが突き立てられた。ナイフを投げ落としたマティスは楽しげでさえあった。

ファースト・ドミナント、アスラン・ザラ。

セブンス・ドミナント、レイ・ザ・バレル。

「さしずめ、キングはエインセルってところかな?」

エースの言葉にマティスは答えない。答える必要がなく、沈黙は肯定へと導かれる。

軽く息を吹く。ただこれだけで、アスランは命を狙われているという事実を帳消しにする。ソファーから手を離し、マティスを見ないまま、ラクスへと視線を送る。

「ラクス。俺は君を裏切らない。シンのことは、君の言うとおりにしよう。レイもそれでいいな」

レイは答えない。アスランも答えを望まない。誰もが心得ていた。沈黙が答えになるのではない。答えなど、はじめから定められている。答える必要はなく、答えを聞く必要がない。

アスランは今ここですることはないと歩き出す。レイもまた、ここに長くとどまることを望まない。しかし、レイはすぐに歩きだそうとはしなかった。部屋の扉を開けるアスランの背を見送りながら、誰に聞かせることもなく囁く。

「あいつは、俺と同じだ……」

シン・アスカ。レイ・ザ・バレル。この2人に共通することを誰も知らない。レイのこの言葉を誰もが耳にしなかったことと同じく。

正義とは相対的なもの。絶対の正義もなければ絶対の悪もありません。母国の栄えの為に隣人を殺し、護国と語り富と資源を独占する。あなたの正義はあなただけのものです。あなたは人の正義を悪と見る。他の人があなたにそうすることと同じように。

あなたは正義です。たとえ、他の正義すべてを敵にしたとしても。

あなたは正義です。たとえ、それを認めるのがあなただけとしても。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「ナルシス・ノワール」

戦争。敗者は正義さえも奪われる。

第17話「ナルシスノワール」

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンの放つ２筋のビームがＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーのシールドを吹き飛ばし、胸部へと突き刺さる。中空に生じた爆煙を突き破って残骸が尾を引き海へと落下する。

青い翼が輝きを放ち、その威光に恐れおののいたように敵部隊が撤退を開始する。敵はストライクダガーを中心に構成された１個中隊。すべてがガンダム・タイプで構成されるアスラン・ザラの部隊と対抗するにして戦力不足甚だしい。

「よし、深追いはするな。敵を撃退できればそれでいい」

まだカーペンタリア基地からそう遠い場所ではない。単なる偶発的な遭遇戦で無理をする必要はない。

コクピット内を飛び回る人形が落ち着かない。翠星石はパイロット・サポート・システムであることを忘れたかのようにあらぬ方向を見ている。その理由はすぐに知れた。ルナマリア・ホークの通信が即座に入ったからだ。

「でも、シンがまだ！」

どうやらシン・アスカが交戦中であるらしい。その方角は考えるまでもない。翠星石が見ている方向に決まっている。機体を回すと、まるで遊覧船の窓から窓に移る子どものような動きで翠星石も動いた。

シンの搭乗するＺＧＭＦ－５６ＳインパルスガンダムがＧＡＴ－１３１イクシードガンダムと戦っている。イクシードガンダムは白兵戦に特化した機体で、シンの使うソード・シルエット同様１対の大剣を装備する。ファントム・ペインではないようだが、ガンダムである以上、腕利きが搭乗しているはずだ。

（シンには荷が重いか……）

さて、どのように援護すべきか。そう考えていた時、翠星石が叫ぶ。友達の試合を応援しているかのように声を張り上げて。

「意識を加速させるです、シン！」

「わかってる。わかってるさ、翠星石！」

敵のイクシードが対艦刀を力任せに振り下ろしてくる。右手に持つ対艦刀でこれを受け止める。敵の攻撃はこれで受け止められるはずだ。シンはサーベル同士が激突する瞬間を確認しなかった。意識はすでに次に飛んでいる。防いだと確信するよりも先に左手のサーベルで薙払うための行動を起こしていた。サーベル同士が接触した頃には、すでにシンの攻撃が始まっていた。反応が遅れた敵は慌てたように身を引き、逃がし損ねた右足を切断される。

そして、その頃には、シンの意識は次の動作へと移っていた。

逃げる敵を追い、敵の反応が追いつく前に右手のサーベルを振り下ろす。左の肩から剣が食い込むと、ビームとフェイズシフト・アーマーの輝きがイクシードを縦に焼いていく。

この一連の動きをシンの意識は鮮明に認識していた。シンは訓練の成果が徐々に、かつ確実に出ていると確信する。肩からわき腹にまで切り裂かれたイクシードが目の前で爆発する光景はそれを保証してくれている。

「よし！」

強敵であるイクシードガンダムを撃墜できたことで、つい手を握りしめて喜びを表現した。

しかしここは戦場であり、帰還命令も発令されている。いつまでもこうしてはいられないと、シンは母艦ミネルヴァを目指すことにした。普段とは帰還のタイミングが違うためか、珍しい組み合わせと並んで飛ぶことになった。

レイ・ザ・バレル隊長のＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルと、ザラ大佐の部下であるインパルス２機が同じ方向を目指している。

「動きが１テンポ速くなったな。反応が遅れることがなくなったばかりか、敵の意識の隙間をつけるようになってきている。いい傾向だ」

「あ、ありがとうございます……」

普段無口な隊長から話しかけられるとつい戸惑ってしまう。誉められたのだから、素直に喜べればいいのだが。通信越しとは言え、レイ隊長の声は素直にシンのことを誉めてくれたように思える。

次に入ったのは別の通信だ。

「まったく、アブディエルの分際で鉄十字勲章なんざ生意気なんだよ。俺だってまだ3つしかもらってないのに」

「嘘つけ。1つももらったことねえだろ」

どちらも野太い男の声だ。アスラン大佐の部下で、ヘルベルト・フォン・ラインハルトとマーズ・シメオンと名前は聞いている。まだ一度も顔を合わせたことはないが、2人とも相当な皮肉屋で、ザフトの英雄にさえ燃え尽きたと思ったなんてジョークを飛ばしたと聞いた。要するに、アブディエルと呼んだこと自体悪い冗談だと言うことだ。

どう返事していいものか悩んでいる内に、並んで洋上に浮かぶ2隻のラヴクラフト級の艦影が見えてきた。

「意識を加速させなさい」

仮想空間の中をＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型が飛ぶ。一瞬たりとも気を抜くことはできない。少しでも隙を見せれば8本の刃に切り刻まれる。

（難易度マックスにした上で攻撃力を限界まで上げたラスボスとやりあっているみてえ……）

敵が、ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムが4機のバック・パックから、4本の手足からビーム・サーベルを展開して突っ込ん

でくる。まず来るのは右で、次は左、下、上。

意識を加速させて、敵の動きに反応していく。インテンセティがアームで連結されたシールドを2枚展開する。まず右のサーベルを受け止める。次は左を止めたことを確認して下を防ごうとした時、アラームが鳴り響いた。シミュレーターが停止し、アウルは前のめりになっていた体を機嫌悪そうにシートに戻す。

負けたのだ。真紅が回避不可能と判断し、インテンセティは撃墜された。これで何度目の戦死か、もう数えてない。

「反応は確かによくなっている。でも、まだまだ認識に頼る癖が抜けていないようね」

コンソールの外れで真紅は椅子に座っている。結局真紅自身も単なる立体映像でしかないため、立ったままでも疲れないはずなのだが。もちろん、訳は聞かない。どうせレディの嗜みだとか言ってくるに決まってるからだ。

「人は予測とともに動いているわ。たとえば階段を降りる際、もう一段あるつもりが実際はなかったとしたらついつんのめってしまうでしょう。それは予測がはずれたから。裏を返せば、人は自らの動きに予定を立てている」

真紅は小言が多い。早くシミュレーターをやらせてもらいたいが、そのためにも真紅の機嫌を損ねることはできない。手を頭の後ろに置いて、くつろいだ格好で聞いておくことにする。

「あなたは敵の攻撃をシールドで受けるつもりでいた。でもそれからは？　エインセル・ハンターの意識はすでに2手先、3手先、1

0手先まで予定されている。そして、いちいち予定の実現を確認してから動いていては達人にはついていくことさえできないわ」

真紅の言いたいことは、アウルはまだ物事を確認してから動いている。そういうことらしい。攻撃されたら攻撃を受けて、その防御を確認してから次のことをしようとしている。エインセル・ハンターの場合、攻撃したら防がれることを予定して、そして確認しない。予定が実現することを確信してもう次の行動に移っている。行動にわざわざ確認というクッションを挟むアウルとエインセルではどんどん行動の速さに差が生じてくる。

そしてその差が致命的になった瞬間、撃墜されているという訳だ。

「意識を加速させなさい。知覚を捨てなさい。意識と無意識の狭間に、極意は潜むものよ」

確認を挟まず次々行動の予定を立てることを真紅は意識の加速と呼んでいる。無意識にではない。意識的に動いて、無意識的に確認をすっ飛ばす。そんなことを真紅は要求してくる。

言いたいことは言い終わったのか、真紅はまたシミュレーターを起動してくれた。俄然やる気が出て、操縦桿に手が伸びる。仕方ない子ね。そんなこと言われても無視して、早速フォイエリヒに挑む。

結果は、２３秒。これでも記録は更新した。

「遅い。まだ目で見たことに頼りすぎね」

再びシートに深く座る。

ただ予定を立てて確認そっちのけで動くとすぐに裏をかかれる。相手の動きを予想して予定を立てて、確認しないで次々行動に移す。

「まるで未来の敵とシャドー・ボクシングしてるみてえだな……」

「悪くないたとえね。あなたにもようやく見えてきたのかしら？」

何となく、わかってきた気がする。シートに跳ねるように座りなおして臨戦態勢。操縦桿を掴んでいつでも戦える。次はいけそうな気がビンビンしてる。

「へっ。この調子なら、おっさんが最強の座明け渡すのも時間の問題じゃね」

少なくとも手の届かない相手ではないはずだ。

真紅は綺麗な顔――姉貴によく似てる――で笑うと、アウルはどうしてかいやな感じがした。どうしてここで笑うのかわからない。

「その鼻息なら、エインセル・ハンターの本気をもう少しだけ見せてもよさそうね。ハウンズ・オブ・ティンダロスは、敢えて使わせてなかったのだけれど」

いきなり始まったシミュレーションは何もかもが違っていた。

開始から４秒後。

「何だよこれ！　攻撃が当たらない！　攻撃がかわせない！　動きが読めない！　気配がわからない！！」

当たると予定していたはずがすり抜ける。予想していた攻撃が来ないくせに考えもしなかった方向からコクピットを一突きにされた。何かされたようで何かがわからない。初めてシミュレーター訓練を受けた時と同じかそれ以上の不思議っぷり。

「チャンピオン・ベルトはまだまだ先のようね、アウル」

紅の淑女は優雅に紅茶をすすっていやがった。

軍人と民間人はあまり変わらない。少なくとも、食事に関してはそうだと思う。空母の食堂は学食とそんなに変わったようには見えなかった。トレーを持った人がカウンター越しに沿って並んで、ただ制服か軍服かの違いくらい。ミリアリア・ハウがこなしている仕事も喫茶店にいた頃と何も変わっていない。

エプロンをつけて、お皿に食材を盛りつけて手渡していく。ただ、軍人さんにはそれぞれの仕事に合わせて必要なカロリーが違うから元から何を食べるべきか決まっているところが少し違う。その人の制服で盛りつける食材を変えていく。

少し戸惑うことがあったのは、黒い制服の男性が前に来た時のことだった。地球軍の制服は白を基調としたものが多く、その人物はひどく変わって見えた。周りがようやく食事にありつけると表情を崩している中で、唇を横に結んだ顔が険しくも思えた。

「ミリアリア・ハウ。一つ、折り入って聞き入れてもらいたいことがある」

「何でしょう……？」

この人はキラ・ヤマトの部下で、スウェン・カル・バヤン大尉。ファントム・ペインだとかいう特殊部隊に所属することが許されるエースなのだそうだ。瞬きをしない眼差しがミリアリアを捉えている。

「私の食事にはニンジンを入れないでもらいたい。頼む」

なんてまっすぐで純粋な目をしてるんだろう。ただただ真摯なスウェン大尉の願いに、ミリアリアは大尉から目をそらすことができない。ただ手は動かして、お皿に茹でられたニンジンを盛りつけた。

「そんな目して言われてもダメです。そもそも兵隊さんの食事は栄養管理がされてるんです。食べることも仕事の内です」

大尉が持つトレーの上にニンジンが盛られたお皿を置くと、特に反応はない。さっきまで冷静な戦士のように思えていた顔が、少し拗ねた子どもの顔に思えてくるのがとても不思議に思える。

（この人、本当にエースなの？）

敵機を撃墜できてもニンジンを撃墜できないなんて。

はっきりと嫌がった様子はなくとも、どこか機嫌が悪くなった様子でスウェンはテーブルの方に歩きだした。代わりにミリアリアの前に立つのはニンジン嫌いの兵隊さんの同僚である。

褐色の肌と同じような色をしたサングラスは度が入っていないそうだ。文字通り色眼鏡で見ていると言うべきか斜に構えていると言

うべきか、シャムス・コーザはとにかく考えていることが周りと違うと思う。この人もエースなのだと聞いているから撃墜王に必要な才能と言うのは変人ということなのかもしれない。

「まったく、スウェンはガキだな。ところでミリアリアちゃん、俺にはピーマンを大盛りで頼む」

「大盛りですね」

前髪をかき分け、きざな顔をしてみせたシャムスのトレーにはピーマンが盛りつけられたお皿をおいて上げた。途端に恨みがましい視線で見てくる。

「別に私、天の邪鬼ってわけじゃありませんから」

なるほど、チーム・ワークは抜群らしい。2人ともそろって好き嫌いが子どもっぽい。食べる前からピーマンの苦みを噛みしめているかのような顔をして歩き去っていくシャムスを、ミリアリアはつい目で追ってみた。

シャムスは先に席についていたスウェンの隣に座る。配膳台からそんなに離れてはいない場所で、声を何とか聞くことができそうだ。

「シャムス、わかっているな」

「ああ、俺たちはチームだ」

何か声が違う。話し方がいつもとは違うように思えた。何が違うのか説明はできないけれど、一語一句しっかりと発音されていて、これが兵隊の話し方なのかと納得する。2人は紛れもなく軍人だっ

た。もっとも、そんなチームが協力して取り組むことと言えば、お互いの苦手な食べ物が盛りつけられたお皿を取り替えようとしていただけ。こういうのを能力の無駄遣いと言うのではないだろうか。

呆れて見ていると、同じように呆れているのはミリアリアだけではなかった。2人のエースの向かい側に座る女性パイロット、ミューディー・ホルクロフトがミリアリアに目配せしながらため息をついた。

「2人とも、後ろ」

仲良く振り返る子ども2人の目には、もう言葉もないミリアリアの顔が写っていることだろう。渋々とではあっても、お皿を取り替えることをやめたことは誉めて上げてもいい。

子どもみたいなエースの相手を終えるとまた仕事に戻る。一通り食事を配り終えると、ようやく食事にありつくことができた。エプロンを外して食事を載せたトレーを持って食堂に出る。調理スタッフ専用のスペースなんてないから、食事は兵隊さんが使っていたテーブルのどれかを使おうかと少し悩んでみた。

見渡すと軍人と民間人の違いが少しわかった気がする。とても食事をとるのが早い。ついさっき配膳が終わったばかりだと思っていたのに、食堂ではすでに人の数が少なくなっている。いつどんなことが起こるかわからない。備える必要があるからなのだろう。

（そんな仕事なんだ……）

どんな時も緊張をなくさないことはすごいと思う。そう考えて少し損した気分になった。席を探そうとした視線の中に、いまだにニ

ンジンとピーマンに苦戦しているエースの姿を見てしまったから。

結局、シャムスに手招きされる形でミリアリアの席は決まった。ミューディーの隣。４人でテーブルを囲むことになった。

ミリアリアが食事をとる前の席でスウェンとシャムスが真剣な眼差しを手元に向けている。敵はもちろん緑黄色野菜。作戦会議中と言われても信じてしまうかもしれない。

「皆さん、エース、なんですよね？」

なるべく失礼にならないように聞こうとした。とてもエースには見えませんなんて言えるはずもないから。少しでもピーマンのことを忘れられるからか、シャムスはとても乗り気だ。

「まあな。これでもヤキン・ドゥーエ攻略戦じゃストライクダガーで大暴れしたもんだ。まあ、ジェネシスの時は、実際死にかけたんだが」

「あの時は本当に危なかったよね。シャムスが敵を深追いしてなかったら私たち今頃スペース・デブリだったし」

この３人がミリアリアよりも年上であることは間違いないとして、それでも４年前はそんなに変わることはないだろう。これまで戦争を意識したことは２回だけ。ヘリオポリス崩壊とヤラファス祭事件の時。それまでは戦争を意識しないで暮らしてきた。関わることもなければ、関わろうとも思わなかった。

（軍人になる人って、どうして軍人になるんだろ？）

何気ない質問を、ミリアリアは何気なく口にした。

「皆さん、どうして軍人になったんですか？」

みんな、あのシャムスさえ突然黙り込んでしまった。何か聞いてはいけないことを聞いてしまっただろうか。そんな思いがよぎって、食事をする手がとまってしまう。

3人の様子を見ようと視線を動かすと、目があったのは意外にもスウェンであった。

「私の場合、エイプリルフール・クライシスで両親を失ったことが主な理由になる」

これをきっかけに、シャムス、ミューディーも話し出す。

「俺も似たようなもんだ。ただし、殺されたのはお袋とダチだけどな」

「私は兄さんと父さん。ミリアリアは誰？」

「誰って……」

ミューディーは当然のように聞いてきた。あなたはエイプリルフール・クライシスで誰を失いましたかと。誰も亡くしていない。それなのに、この3人は誰か親しい人を失っていることを前提にしているように思える。

食事の手は止まったまま。食べかけのサラダにフォークが刺さったまま。

（そんな自分たちの感覚で話されても困るんだけど……）

誰かを亡くしたということは強烈な動機にはなるかもしれない。それでも、みんながみんな同じ境遇というわけではない。エイプリルフール・クライシスで大切な人を亡くした人が軍人になるというだけで、みんな同じような被害に遭ったわけではないのではないだろうか。

どう返事していいかわからない。とりあえず、フォークを刺したままの葉物野菜を口に運んだ。普段からゆっくり食べる癖が身に付いている。それなのに、突然の言葉にほとんど噛まずに飲み込んでしまった。

スウェンの言葉だ。

「オーブはエイプリルフール・クライシスの影響を受けなかった」

「裏でプラントと繋がってて、うまく逃れたんだったっけか。なら、ミリィにはわからないかもしれないけど、地球じゃ、7人に1人が殺されたんだ。試しに家族や友達、知り合いの名前を7人ずつ挙げてみな。その度に1人がプラントに殺されてる」

「今でもプラントはあれは正当な防衛行為だって言ってるんだってね。地球の奴らはバカだからブルー・コスモスに扇動されてるんだって。本当、プラントって私たちのことバカにしてるよね」

みんながみんな同じ境遇というわけではない。それは、もしかしてオーブとそれ以外の国で分かれるということなのだろうか。ミリアリアは確かに恋人を失った。それでも、ヘリオポリス崩壊に巻き

込まれるその日まで戦争というものを感じたことなんてなかった。

エイプリルフール・クライシスを単なるテレビの向こう側の出来事だと思っていた。

「俺たちは確かにエインセル・ハンターの手駒で、ブルー・コスモスの下部組織だって面も否定しない。だがな、俺たちの殺意や闘志は俺たちのもんだ」

「私は自らの意志と殺意をもって、プラントに敵対する」

シャムスとスウェンの言葉はミリアリアの心に深く突き刺さり、彼らの隊長の言葉を掘り返す。

（キラが見せるって言ってた戦争って、こういうことなの……？）

ここは果たしてどこだろうか。王のおわす場所。しかしそこには極彩色の絨毯もなければきらびやかな装飾が施されているでもない。狭い部屋。質素な寝床に2脚の椅子。見紛うことない船室。

王はここにいる。

「シン・アスカ。存じません」

玉座であろうと、単なる安普請の肘掛け椅子であろうとエインセル・ハンターは変わらない。豊かな水を湛える湖の青さを備える瞳は娘へと向けられている。

「オーブ侵攻時、オーブに居住していた少年です。お父様を母の仇と認識しています」

ヒメノカリス・ホテルは変化を見せる。その顔には確かな機微を浮かべている。不安か、あるいは焦燥。父への気遣いがそこには見られた。隠れる、頼るということを見せないヒメノカリスが唯一父の前では弱さを露わにする。

「間違いではありません。私が直接手を下した可能性は低いとは言え、指揮を担ったのは私です。アスカ少年の母の死は私に帰責します」

体を小さくして椅子に座っている。これだけでも、ヒメノカリスにとって希有なことである。

「お父様……。スティングを殺害したのは、このシン・アスカである可能性が高いと思います。シン・アスカは言っていました。イクシードを撃墜したインパルスに搭乗していたのは自分だと」

この人ならすべてを知っている。この人はエインセル・ハンター。それだけが唯一にして絶対の論拠。

「フィンブル落着の際、突出していた部隊があった。そのインパルスに搭乗していたのがシン・アスカ。これは面白い。私もインパルスと交戦しました。部隊が混乱する中、ただ1機挑みかかってきたインパルスと戦いました」

「それもシン・アスカ……？」

「可能性としては低いと言えるでしょう。カーペンタリアには全戦

力の1割未満とは言え、２０機を超えるインパルスの参戦が確認されています。ただ、違うと捨て去るにはあまりにも惜しい」

お父様は子どもみたいに楽しく笑う。その顔にヒメノカリスの心は軽くなる。ヒメノカリスにとって不安も喜びも、憂いも歓喜もすべて父に起因する。

「憑かれたような使命感と生きることへの渇望。仮に私が剣を交えた相手がシン・アスカであるとするのなら、なんとも健気で、いじらしいではありませんか。敵であり敵ではないものに、復讐者にして復讐者でない者に、何より愛を知る者に。私を倒すことができるのは、そのような相手に他なりません」

シン・アスカは違う。シンは単なる復讐者にすぎない。だから、シンにお父様は殺せない。殺させない。お父様はヒメノカリスのそばにいてくれる。いつまでも。誰よりも。

立ち上がると、布がすれることを意識する。お父様に与えられたドレスが純白でとても綺麗。

「お父様が似合うと仰いました。だから私はこのドレスが好きです」

スカートを摘み、回る。お父様に見てももらうため。波立つ髪が香りを放って揺れ動く。お父様が綺麗と言われたから、ヒメノカリスは自分の髪が好きになった。

「お父様が愛でてくださいます。だから私は私が好きになれました」

だから私を見てください、お父様。ここにはあの邪魔な女もいません。

お父様に近づく。それだけでヒメノカリスの胸は高鳴る。視線を交えるだけでもう他の何も目に入らなくなる。座るお父様にしなだれかかるように抱きついたなら、世界の幸福を独り占めにしたよう。

「愛しています。お父様」

エインセル・ハンターの手がヒメノカリスの髪を優しく撫でる。

（違う……）

触れて欲しい。でも違う。こんなことではなくて、抱きしめて欲しい。あの女よりも深く、強く。体を預けたまま見上げたお父様はいつものように微笑んでくれる。父が娘を鐘愛するままの顔で。

「そろそろ消灯の時間です。ステラが待っています。部屋に戻りなさい」

暖かいのに冷たい。父の温もりに寂しさが混じり込む。いつもそう。お父様はお父様でしかいてくれない。望んでも、願っても。お父様はお父様でしかいてくれない。

「お父様は、どうして私のすべてを愛してはくださらないのですか？」

「私はあなたの父であり、あなたは私の娘であるからです。愛に種類は数あれど、その共通する様態は、誠意と真心に他なりません」

「私にはお父様しかいません。お父様だけが私を暗く沈んだ淵から救い上げてくださいました！　感謝、しています。すべてを捧げた

いほどに」

しがみつく。他に表現のしようがない。その胸を掴んでヒメノカリスは必死にしがみついていた。離れたくない。失いたくない。この手の下に、かつてヒメノカリスがつけた大きな傷跡がある。

あの時と同じように、エインセルは微笑む。ヒメノカリスがその愛を疑い、傷つけた時にもエインセルは娘を許し、微笑んでくれた。それからエインセルとヒメノカリスの関係は変わっていない。

（とても嬉しいです、お父様。でも、それが重荷であることを、どうして理解していただけないのですか？）

「ありがとう、ヒメノカリス。あなたのその言葉が私にどれほどの慰謝を得るかはかりしれません。私はすでに満ち足りているのです。あなたという娘を得たことで」

そのしなやかな指先はあくまでも父が娘を慈しむでしかない。

「人は死ぬが故に子をなす。老いるが故に子を育てる。私は、いつまでもあなたの側にいてあげられることはありません」

「お父様のいない世界なんて、私には耐えられません……」

夜の海に飛沫をあげて、ガンダムが1機、2機と海に潜る。ファントム・ペインに所属するＧＡＴ－２５５インテンセティガンダムがスペングラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦から飛び降りた水柱が月明かりに照らされる。

露天甲板にはまだ2機のインテンセティが残っている。１４０ｔもの重量が一気になくなることに備え、インテンセティはタイミングを合わせて甲板の左右から飛び降りていた。先ほどの2機と同様、残った2機も船体軸の対角線上に並び、タイミングを見計らっていた。

隊長機がまだ飛び降りる気配を見せない。まだ用を残しているのは隊長だけであるのだが、2機が甲板に残されているのはそのような理由がある。

隊長、ジェーン・ヒューストンは機体を傾けて甲板を見下ろしていた。同じファントム・ペインに所属する指揮官と話をしている。サングラスをかけ、まだ少年と呼んでもさしつかえない少佐と。

「せっかく同じファントム・ペインに出会えたのに、見送りさえ満足にできなくて申し訳ありません」

１８ｍ、７０ｔもの機体が動く音に、人の声など本来ならばかき消されてしまう。モビル・スーツに搭載されている集音センサーと、モニターがネオ・ロアノーク少佐の姿をジェーンに伝えている。

暗いコクピットの中、ジェーンはまだヘルメットをつけていない。相手に自分の姿は見えていないとは知りつつも、自身の金髪に手櫛を入れて身だしなみを整えた。ロアノーク少佐はそれほどの価値がある男だ。

「私たちはエインセル・ハンター代表の下に集った戦士です。なれ合うよりも同じ目的のために手を取り合える。そのような関係でいいのではないでしょうか」

各国に散るファントム・ペインが部隊として一堂に会したことなどなく、そしてこれからもない。単なる力であればいい。エインセル・ハンターという意志に従う力であればいい。必要とされなければ出会うこともなく、不要であるならこれから会うこともない。

ただエインセル・ハンターの求めに応じカーペンタリア基地を襲撃し、その護衛――必要とは到底思えないが――を務める形でロアノーク少佐とは出会った。ただそれだけのことだ。そして任を解かれた今、東アジア共和国を離れるこの空母から離れる必要があった。その前に、少しくらいは私的好奇心を働かせてもいいのではないだろうか。

「話は変わりますが、オーブでは墜落事故で要人が事故死したと聞きました。このことをどう考えます？」

「エピメディウム・エコーのことですね。ヴァーリのことは？」

「これでもファントム・ペインの部隊長です。多少アクセス権は与えられています」

無論、ネオ・ロアノーク少佐の素性についても多少は聞き及んでいる。ロアノーク少佐は特に動揺した様子も見せずに応じた。多少声がうわずって聞こえているのは、騒音の中、声を意識して大きくしているからにすぎない。

「ラクス・クラインの手によるものだと思います。理由は2つ。至高の娘が優先すべきは姉妹の情ではなくクライン家の意向であるということ。ダムゼルの死はこれで2人目だということ」

では声に突然混じり込んだ低い声の抑揚は、感情の発露でないと言えるのだろうか。

「ラクスがダムゼルを襲ったのは、これが初めてじゃない」

海は暗く、空は黒い。かすかな月明かりが果たして何の足しになると言えるだろうか。

街の明かりに蹴散らされた星々と欠けた月のみが見下ろす海の上を、人工の光が並び飛ぶ。

人が初めて光を手にした時、先見の明ある者は縛り付けられ、神は報復としてあらゆる災いを人にもたらした。これは神話の時代のお話。

人が空を光で照らした時、人は星を見ることを忘れてしまった。昔は空にはたくさんの星が瞬いていた。

人が再び光りを手にした時、人は終末の予言を現実のものとしてしまった。核を持たない時代に戻ることはできない。

人は何かを得る度に何かを失ってきた。そしていつも言い訳を繰り返す。得たものは素晴らしいもので、失ったものはとるに足らないものであったと。

C．E．71年に人が新たに光を手にした。ミノフスキー物理学という大きな大きな光を。それは素晴らしいもの。失ったものはとるに足らないもの。まったくもってとるに足らないもの。

冥海に光が見えた。それは、新しい光。ミノフスキー・クラフトが発する光に他ならない。一際大きな光が２つ。ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンとＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルが全身から光を放つ。その後ろに５つの輝きが、インパルスガンダムが５機従いながら飛行している。

ミノフスキー・クラフトがもたらしたのは大きな機動力。失ったのは秘匿性。存在位置を宣伝しているかのように眩しい光に、その行く先、沿岸の基地が途端に慌ただしくなる。幾本ものライトが立ち上り、スクランブルをかけられた戦闘ヘリが浮き上がる。

奇襲が事実上機能しないという代償。その程度ならと人は笑う。本当にそれだけですむのか確認しようともしないまま。

アスランは発見されたことを問題にはしていない。ここはカーペンタリア湾から続く海峡の一部。敵も警戒を続けていただろうし、ミノフスキー・クラフトの機動力なら気づかれてもすぐに接近できる。

「この基地はエインセル・ハンターが立ち寄った形跡のある場所だ。少しでも情報が欲しい。一気に殲滅する」

「了解！」

「パラスアテネ、アリスの発動を。作戦時間は３０分。攻撃目標は敵戦力の完全な沈黙」

近づくにつれて夜の闇が薄く薄く剥がれていく。基地がその姿を肉眼でも確認できそうなほど接近した時、ザフト軍は基地に襲いか

かる。

C．E．７１年。人はガンダムという名前の新たな光を得た。

カーペンタリア基地を出発したミネルヴァは東南アジアの島々の間を縫うようにして赤道同盟を目指す。そう、シンは聞かされていた。エインセル・ハンターが大西洋連邦の同盟国である赤道同盟のＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムの修復を行うという情報がもたらされたからだそうだ。

狭い海峡をラヴクラフト級わずか2隻で航行すること――それも東アジア共和国の領土内だ――に不安がなかった訳じゃなかった。実際、スマトラ島とマレー半島のシンガポール海峡を抜ける際、敵のイクシードガンダムと交戦した。

ただ、戦闘がその一度だけだったところをみると少数精鋭でインド洋まで抜けるというザラ大佐の作戦勝ちであったらしい。

ミネルヴァはすでにマラッカ海峡に入った。シンガポール海峡とつながるこの海峡は北西方向に向けて広くなる。広ければそれだけ敵との遭遇確率も減ってくれる。インド洋は目と鼻の先、そのはずだった。

「防衛戦力はデュエルダガーだけのようだが、油断はするな！」

レイ隊長の声だ。意識を現実に戻す。駆動音響くコクピットの中でモニターには次第に大きくなる名前も知らない基地が映し出されていた。

小規模な基地だ。恐らく建造途中の。マラッカ海峡は平均水深が３０ｍもないほど浅い。カーペンタリア基地から海峡を抜けてくるボズゴロフ級を監視するための基地とは思えないから、カーペンタリア基地への橋頭堡として一応用意されているような基地なのだろう。

（これなら楽に落とせる）

わざわざ7機ものガンダム・タイプを使うこともないくらいに。気になることなんてない。敢えて１つだけ挙げるとすれば、基地に隣接する熱源反応のことだ。基地は岸壁にそって横に４００ｍほど。そのすぐ後ろに、どうやら町があるらしい。

素速く戦力を削らないと町にまで被害が及んでしまう。その点、シンが好んで使用するソード・シルエットはピンポイントの破壊が得意だ。慌ただしい基地目指して加速しようとした、その時のことだった。

「アリス、発動」

ザラ大佐が何かの命令を発した。意味はわからない。何か聞き逃したことがあっただろうかとヘッド・フォンにすることと同じようにヘルメットを横から押さえた。その分反応が遅れて、その時にはすべてが始まっていた。

いきなりザラ大佐の部下3人のインパルスが加速を開始した。それも、完璧に同じタイミングで。まったく同じように武器を構えて、まったく同じように動いて、完璧な編隊を組んで基地へと向かっていく。

まるで機械が動かしているように。

こんなこと前にもあった。拡散した瞳孔にはコクピットのわずかな光が眩しい。あれはフィンブルの破砕活動――実際したことは妨害以外の何者でもなかった――に参加した時のことだ。自分が自分ではなくなって、インパルスガンダムと一体化したような感覚で、自分が自分と、現実が現実と認識できなくなった。

それと同じだ。同じことがあのインパルスたちにも起きている。

「何なんだよ、これは……？」

夢じゃなかった。トリガーハッピーやバックフィーバーなんかじゃない。

（一体何が起きてるんだよ！？）

あの時のシンとルナマリアに。今のヒルダ、ヘルベルト、マーズに。

「ほら、シン、何ぼさっとしてるのよ！」

ルナマリアは何ともないらしい。基地ではすでに火の手が上がっていた。ミノフスキー・クラフトの強度を上げて加速する。シンが基地に等着した時、そこは戦場ではなかった。

まだ、基地としての名さえ与えられていないような基地である。

国籍は赤道同盟。マラッカ海峡の出口に位置し、赤道同盟との国境側に置かれ、防衛戦力がＧＡＴ－０１デュエルダガーを配備されている。特筆すべきことがないほど小規模の基地である。

ガンダム・タイプの襲撃に耐えられるはずもない。

インパルスガンダムの襲来を受けた時点で、勝敗はすでに決していた。

３機のインパルスガンダムは完璧であり、そして残酷である。

完璧な連携。同じ敵を２機が重複して狙ってしまうことなどない。それどころか、インパルスを狙う敵めがけて他のインパルスから攻撃が加えられる。そこには人間味というものは何もなく、的確で正確、精確な攻撃は瞬く間に基地機能を低下させていく。

示し合わせたように無駄がない。行った攻撃の範囲をすべての機体が理解し、まるで１人が同時に３機を操っているかのように基地全体に均等なダメージが重ねられる。

そして残酷。

そこに容赦や自慈悲はなかった。足を破壊されたデュエルダガーが市街地へと落ちていく。偶然か、それともパイロットの意地か、デュエルダガーは建造物をさけ道路へと落ちた。コンクリートが砕け、押しつぶされた車がけたたましいクラクションを奏で続ける。

デュエルダガーは動こうとしていた。片足はすでになく、右腕のライフルも銃身がひしゃげている。落下の際背部を強く打ちつけたことが原因であろう。メイン・スラスターがうまく機能していない

ようにも見える。それでも動こうとしていた。

1機のインパルスが近づいている。ライフルを構え、明らかに撃墜の意志を示しながら。町から離れようと無理に体を浮かせたデュエルダガーの腹に完璧に、そして残酷にビームが撃ち込まれた。ビームの熱量は爆発を引き起こし、デュエルダガーの胴が引き裂ける。破片は熱と炎を纏いまき散らされ、ビームは直接町を焼き払う。

上半身を含む大きな鉄の塊がビルを直撃する。落ちた破片は道を砕き逃げまどう人々を飲み込んでいく。

シンがすべきことなんて1つもなかった。基地についた時にはすでに一方的な殺戮が行われ、シンが立ち入る隙なんてなかった。それは攻撃に直接参加した3人以外の誰にとっても同じで、ザラ大佐も一度も攻撃することなく基地の跡地に着陸していた。

煙は多いが、とにかく火の手が多くて明るい。着陸場所には困らないほど大きな広場がいくつもできていた。

基地機能は完全に停止している。わかりやすい皆殺しだ。

対空砲火はない。適当に選んだ跡地に残骸を踏みつけてインパルスを着地させると、余計に酷さがわかる。空から直撃の瞬間を見た破壊されたバギーがあったのはこのあたりのはずだが、重装甲のモビル・スーツさえ破壊する力をまともに浴びて残骸は探せそうにない。モニターには望遠で町の様子が映っていた。子犬と思われる小さな体が、瓦礫のそばで動かない。

「ザラ大佐！　これはどう見たってやりすぎだ！　一般市民を巻き込む戦いなんて許されるはずがない」

惨状を見ようともしないでかろうじて形が残された基地施設――きっと指令室が入っているやつだ――にばかり興味を持ってるザラ大尉の、ヤーデシュテルンの背中へと言葉を投げつけてやった。

「シン、君の言っていることは理想論で、俺たちのしたことは結果だ。この基地にはエインセル・ハンターに関する情報が残されていた可能性が高い。データを抹消する余裕を与えるわけにはいかなかった」

「そんなの俺たちの都合でしょう！」

音声のみの通信であるため、顔は見えない。見えないでも、どうせ呆れたような顔か、興味のないような顔をしているに決まっている。

「一刻も早くエインセル・ハンターを倒さなければもっと多くの人が死ぬ。確かに最善の結果とは言えないかもしれないが、エインセル・ハンターを野放しにするよりはずいぶんましだ」

「それじゃあ４年前のジェネシスと同じだ！」

ここで地球軍を撃退しなければプラントは負ける。そんな考えの下、当時のプラント最高評議会議長パトリック・ザラ――ザラ大佐の父親だ――は地球の全生命の９割を焼き払おうとした。これはあまりの暴挙だとして、地球各国では全地球規模の軍事同盟を組もうと言う世論が活発になった。

（わかるはずだろ！　そんなこと、しちゃいけないくらい！）

あんたは同じことをしようとしている。目的で手段を正当化して多くの人を殺そうとした。こんなシンの声にならない叫びを、ザラ大佐は背を向けたまま聞き流そうとする。

「そうだな。ジェネシスのおかげでプラントは救われた」

乾いた声で、そのためか聞き取りやすい。それでもすぐに返事ができなかったのは、聞き間違えではないと自分に確認するための時間が欲しかったからだ。

「大佐は、自分の言ってることがわかってるのか……！？」

それじゃあ４年前と同じだ。自分のためにためらいなく人を犠牲にして、それを仕方がないて片づける。アブディエルを死地に送り込むことは仕方がない。フィンブルが地球に落ちても仕方がない。

プラントは何も変わっていない。

シンの気迫に危うさを覚えたのだろうか。ルナマリアの操縦するインパルスが２機のガンダムの間に着地した。ヤーデシュテルンもシンの方へようやく体を向けた。

「シン、いい加減にしときなよ。地球の人たちがどんなにひどい奴らか、シンだって知ってるでしょ。もしジェネシスがなかったら、私たちどんな目に遭わせられてたかわからないじゃない！」

「どうして自分の正当性を証明するために誰かを悪人にしなきゃいけないんだ！」

ルナマリアが言っていることはすべて「自由と正義の名の下に」の受け売りでしかない。マスコミ発表、政府の言っていることを鵜呑みにしているだけだ。人から言われたことをそのまま自分の意見かのように錯覚しているだけなんだ。

ここで2人とやり合いたいわけではないのに、どうしても操縦桿から手が離れてくれない。

「あんたたちコーディネーターはいつになったら気づくんだよ！」

操縦桿から手を離せ。理性が押しとどめて、感情が先走ろうとする。手の筋肉が痛いくらいで、そんな緊張はきっとルナマリアにもザラ大佐にも伝わっているはずだ。

だから2人とも警戒を解かない。だから、誰かに間を取り持ってもらう必要があったのかもしれない。

神々しい。そんな光を全身から放って、ローゼンクリスタルの白い機体が地上に降り立った。ザラ大佐に協力するには遠い場所で、それでもシンが大佐に斬りかかることを止められる位置だ。

「シン・アスカ、そこまでにしておけ。話したいことがあるなら俺が聞いてやる」

「レイ、隊長……」

今、周りで燃え盛る火と同じだ。一度くすぶるとそれはなかなか消えてはくれない。それでも、小さくすることはできる。

シンはようやく、操縦桿から手を離すことができた。

純粋であるということは残酷であるということです。純粋であるためには排他的でなければなりません。自分を汚すすべてを排斥しましょう。でなければ純粋ではいられません。汚れずにはいられません。たとえそれが、どれほどのものを犠牲にするとしても。

純粋な正義は純粋な悪と同じです。

どちらも自分以外の正義も悪も認めることはできません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「汚れなき悪意」

ボーパール。ここは純粋な思いの集う場所。

第１８話「汚れなき悪意」

殲滅された名前も知らない基地のメイン・コンピュータに翠星石が潜っている。アスラン・ザラはただＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンのコクピットに座って待っていればよかった。今コクピットに翠星石の姿はない。まさかデータ抽出にそこまで容量を食うはずがないので、潜っているという表現を端的に示そうとしているのだろう。

しばらくして、翠星石の緑を基調とした小さな姿が映し出された。その手には何故か紙の束が抱えられている。

「アスラン、データは無事だったです」

要するに、データを持ち出してきたことをわざわざ映像で表現しているのだ。ゲルテンリッターらしい遊び心だと言える。

翠星石はモニター――全天周囲モニターであるため、壁一面のことだ――に資料を１枚張り付ける。白みつつある外の光景を上書きされて、張り付けられた資料が広がる。単にデータをモニターに投影したタイミングに合わせて映像が重ねられただけなのだが。

資料にはエインセル・ハンターがこの基地を訪れたこと。そして、目的地が克明に記載されていた。予測されていた航路とも大差ない。どうやら当たりのようだ。

よくもまあスペングラー級空母で狭いマラッカ海峡を抜けたものだ。

「作戦は成功だ、ルナマリア。エインセル・ハンターの行く先がわかった。赤道同盟のボーパール工業地帯だ。軍事施設としても機能している場所だ。ここならフォイエリヒの修復ができると考えたらしい」

続いて翠星石が張り付けた資料には東南アジアから中央アジアにかけての地図が映し出される。ご丁寧にマレー半島北側に現在位置が、赤道同盟旧インド地区のほぼ中央にボーパールと表示されている。

モニターは一部が資料で埋まってしまっているが、すぐ近くにいるラナマリア・ホークのＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムはしっかり見えている。翠星石が位置を工夫してくれたのだろう。

「でも、フォイエリヒってもう古い機体なんですよね。そんな機体、アスランさんなら楽勝だと思います」

「実際どうなるかは戦ってみないとわからない。だが、君の言うことにも一理ある。エインセルはゲルテンリッターの初号機を与えられているはずだ。何故それを使わないのか、正直なところ見当もつかない」

翠星石は指示を出すまでもなく資料を消してくれた。夜明けを迎え、すでに外は明るくなりつつある。沖合を見ると2隻のラヴクラフト級特殊戦闘艦が水平線に浮かんでいた。

「そういえば、君たちもフォイエリヒを見たことがあったんだったな」

「はい。アポロンとか言う未完成のコロニーで見ました」

C．E．７４年から突如作られ始めた新造コロニー群は合計３０基を超える。国籍もバラバラで関連があるとは考えにくいが、こんな混乱期にあるためか、そのすべてが途中で建造が止まっている。宇宙要塞にするような作りではないようなのだが。

「それもわからない。ヒメノカリスはそんな新造コロニーにフォイエリヒを持ち込んで一体何をしようとしていたんだ？」

「相手が何を考えていようと、全部叩き潰してやりましょう。自由と正義の名の下にみたいに！　私、オナラブル・コーディネーターで、あまりプラント政府にいい印象ありませんけど、地球に好き勝手させちゃいけないことくらいわかります」

単純と言ってしまえばその通りだが、ルナマリアの明るい調子は嫌いではない。

確かにプラントは、ザフトは何が起きても敗北という選択をすることはできない。結局、勝利を信じて戦う他ないのだ。気持ちを新たにしていると、目の前に何かが飛んできた。翠星石だ。

「アスラン、翠星石はシンの言ってたこと、間違ってねえ気がするです」

らしくなく声が小さい。翠星石はどうしてだかシンによく懐いている。

作戦を優先するあまり民間人さえ犠牲にしたことをシンに咎められたことを言っているのだ。

「そうだな。だが、シンはまだ若い。正義は絶対のものじゃない。正義が勝つなんて言うのはお話の中だけで、正義では守れないものもある。正義にこもって誰かを死なせてしまうより、俺は偽善と呼ばれても人を救う道を選びたい」

「偽善と呼ばれても人を救うため。私も、そんな生き方がしたいです」

ルナマリアが肯定してくれても、翠星石は頷いてはくれなかった。

ミネルヴァの開け放たれた小さなハッチから鋭角に朝日が飛び込んでくる。すでに照明を必要としないくらい、格納庫は明るくなっていた。床にいれば照り返しがきついだろうが、キャット・ウォークに乗っているシン・アスカにはそんなに辛いものではなかった。

格納庫にインパルスガンダムとＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルが並んでる。パイロットである２人もやはり並んでいた。

「敵は降伏していなかった。ハーグ条約に則っても逸脱しているとは言えない。何より、フェイスに噛みつくことは賢明とは言えんな」

シンは愛機――まだ新品同然のやつだが――を眺めているふりをして手すりによりかかっていた。レイ・ザ・バレル隊長は構わず話かけてくる。

「わかってますよ、それくらい。でも、仕方がない、必要な犠牲だって言葉、俺、どうしても好きになれない」

母はそうして犠牲にされた1人だった。そして、アブディエルもオナラブル・コーディネーターもプラントから無理を強いられている。

「オーブの連中もそうだった。プラントも、ブルー・コスモスも結局同じ穴のむじなじゃないですか。理想だとか正義だとかたいそうなこと掲げて、やってることは同じ。その癖、犠牲の多いだとか少ないだとかそんな数比べばかりしてる。実際その犠牲の中に含まれる人のことなんて誰も考えてやしない！」

ザラ大佐がそうだった。こうした方がより少ない犠牲で戦争を終わらせられる。そう言って民間人を犠牲にした。やってることは同じ癖に数がちょっと少ないからって自分が正義の味方かのように勘違いしてる。

手すりが軋む音がした。横目で見ると、レイ隊長がシンと同じように手すりに体重を預けていた。

「正義とは相対的なものだ。正義の敵は悪ではなく他の正義だという話を聞いたことはないか？」

普段と何も変わらない。事実に忠実で、あまり声に感情は表れない。

「ある男が恋人を救おうと私財をなげうったとしよう。美談だが、純粋ではないな。男には恋人を救いたいという強い気持ちは間違いなくあったことだろう。だが、同時にこうすれば恋人はもっと自分のことを愛してくれるかもしれない、抱きしめてくれるかもしれない、そんな欲望や打算がなかったと言えるか？」

「いや、俺、恋人とかいないから……」

この戸惑いの中に、まさかあの隊長が恋をたとえ話に使うとは思ってなかったことも含まれる。

「どんな英雄的行いとて、必ず醜いと呼ばれる欲は含まれるものだ。完全な正義などありはしない」

「じゃあ、何をしてもいいってことですか？」

隊長は片手を軽く振る。

「話はまだ続く。正義を語る上でしてはいけないことが３つある。自分を正義と思いこむこと、自分は悪と開き直ること、自分は偽善者だと信じることだ。自分が正しいという発想は必ず他の正義との衝突を繰り返し、それは悪に他ならない。無論、悪に逃げ込むことも結果は同じだ」

「偽善は？」

知らずに話に興味を持ち初めていたらしい。体が傾き、首は隊長の方を、少しだが向くようになっていた。

「正義とは相対的なものだと言っただろう。結局、これこそが正義というものは存在しない。だからこそ、正義というものの模索を諦めてはならない。他の正義を尊重することを忘れてはならない。自分が偽善だと公言することは、正義が何かを考えることを諦めたと同義だ。自分の正義と他の正義とのすりあわせが面倒になった馬鹿者が気取っているだけだからだ。お前にはお前の正義があるように、

アスランにはアスランの正義がある」

「結局、ザラ大佐の弁護ってことですか？」

「では、お前が正義でアスランは悪か？」

「いや、それは……」

いきなり目を合わせられてつい緊張してしまう。目をそらしながら答えるしかできなかった。

「悪行に正当な怒りを抱くことは結構だが、アスランをだしに正義を気取っているようでは、結局お前の嫌うプラントと同じではないか？」

悪に対して怒ってもいい。それでも、その人を悪人だと考えるな。それこそ矛盾ではないだろうか。そんなシンの考えを見透かしたようにレイ隊長は軽く笑った。

「自分の正義が絶対ではないと考えることと偽善だと開き直ることは意味が違う。だが同時に正義が相対的だということも忘れるな。お前が他人の行為に怒りを抱くことは当然としても、他人の正義を否定しようとはするな」

レイ隊長は手すりから体を浮き上がらせた。

「罪を憎んで人を憎まず。そういうことだ」

誰かを否定するということは裏を返せば自分を肯定するということに他ならないということだろうか。だから悪事に怒ってもその人

を悪だと言ってはならない。それは誰かをこき下ろして自分が正義だと言いたいだけだから。

「アスランには俺からも話しておく。お前も激情に駆られて激昂はしないことだ」

キャット・ウォークの固い床を鳴らしながら隊長が去っていく。

「レイ、隊長……」

声をかけようとして、しかし声は出なかった。レイ隊長も気づくことなくつい伸ばした手は何もない場所を掴んだ。

これでいいのかもしれない。お礼を言うにはまだ気持ちの整理がついていない。

シンはレイ隊長に初めて会った時、その援軍の遅れを責めた。その時言ったこと、外人部隊の扱いの悪さは何一つ間違っているとは思わない。ただ、それでも、そんな外人部隊の報告を信じて援護にかけつけてくれたのはレイ隊長の部隊だけだったから。

巨大な黄金の胸像が2人の男女を見下ろしている。黄金は爛れ、人で言うところの瞳、デュアル・センサーはカバー・レンズが割れ、内部のカメラが露出している。

満身創痍。このたった一言で今のＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムの状態を表現することができてしまう。言葉とはつくづく便利なものだ。

セレーネ・マクグリフは格納庫に立てて置かれたフォイエリヒガンダムを見ていた。見上げる必要はない。ちょうど胸部の辺りに置かれた床――本来の床からは２０ｍほどの高さにある――がガンダムの様子を観察するにはちょうどよい。

目線をまっすぐに向けると、フォイエリヒの黄金の装甲に女性の歪んだ姿が写っていた。厚手のシャツにタイト・スカート。髪がだいぶ長くなっている。そろそろ切った方がいいだろうか。もう化粧をさぼっていい年齢ではないとつい口紅ののり具合を確認しようかと目をこらしてみた。歪んだ鏡で見えるはずもない距離。無駄なことをしたとつい笑ってしまう。

そんなセレーネの横で、まるで勇者が打ち倒した巨大な竜の亡骸でも見ているかのように神妙な面もちをした男がいる。

「これがフォイエリヒガンダム……」

もう３０にはなるというのにどこか子どもっぽさがこの男からは抜けない。ソル・リューネ・ランジェ。ロームフェラー財団の人間で世界安全保障機構に赤道同盟代表として参加しているとは思えないほどだ。実際、悪い言葉を使うなら周りからはなめられているらしい。

「全高約２５ｍ。重さ１５０ｔ。大きさだけで通常のモビル・スーツの１．５倍、条約にひっかかるから核動力は取り外されているけど、それでも量産機の倍の出力はあろうかという化け物ね。とても常人に扱える機体ではないわ」

「セレーネさんでも？」

首を回したソルは、よく見るとわくわくしているようにも見える。フォイエリヒの巨大な姿に、もしかすると圧倒されるとともに憧れも抱いているのかもしれない。男の大人と子どもの違いはおもちゃにかけるお金の額だけだという言葉もあながち嘘ではないらしい。

「当然でしょ。それに、安物を着こなすことも腕の見せ所よ」

そして、このフォイエリヒを扱うのはエインセル・ハンターだけでいいのだ。

噂をすれば何とやら。規則正しくて、それでいて個性的。足音だけでも存在を主張してる。そんな素敵な男のお出ましお出まし。

まずセレーネが振り向いて、それにつられたようにソルが首を回す。

背が高く金髪。青い瞳が憎らしいくらい人の目をひく。どこか現実離れした、絵画の中から颯爽と歩み出たような男が歩いてくる。その後ろには少女を2人引き連れている。まずセレーネに目配せすると、セレーネは微笑み返しておくことにした。すると美青年は、エインセル・ハンターはソルの前へと歩み出た。

「ソル・リューネ・ランジェ代表。お目にかかれ光栄です。エインセル・ハンターと申します」

「初めまして。ご高名はかねがね聞き及んでいます。それに、ロード・ジブリール代表とは会議で何度か……」

まず手を差し出したのはエインセルの方。まったく物怖じしない

態度であるのに対して、ソルの方は戸惑いを覚えているように手つきが鈍い。握手をかわしただけでもこの2人の男としての格の違うというものはわかってしまうものらしい。

ソルも会議では積極的に発言しようと取り組んでいるようだが、いざ議論が白熱すると大西洋連邦のジョセフ・コープランド大統領ほど発言力はなく、あるいは南アメリカ合衆国のエドモンド・デュクロ将軍とブルー・コスモスのロード・ジブリール代表との言い争いに割ってはいることができないでいるそうだ。

そんな若い代表――ほとんどエインセルと同い年なのだが――がエインセル・ハンターと出会って気負わない方が難しいことかもしれない。助け船を出すではないが、セレーネは進んでエインセルに近づいた。わざわざ握手を求める間柄ではないが、敢えて握手してもらったのはエインセルに触りたかったから。これに尽きる。

「お久しぶりね、エインセル。それにヒメノカリスも」

見せつけるように握手していると、お父様命のエレクトラはその青い瞳でセレーネを睨みつけた。それこそ、お姫様みたいな姿をして、お人形のような顔をして。

「お父様に近寄らないで」

ヒメノカリスは本当に可愛らしい。いつまでも子どもで、そして純粋だから。本当はもっとエインセルと触れ合っていたいが、ヒメノカリスに嫌われたくもない。握手はそろそろやめとくことにした。

この親子は変わっていない。エインセルは相変わらず凛々しくて、ヒメノカリスは焼き餅焼き。それから、今回は娘が2人いる。

見ると、エインセルのスーツの端を見覚えのない少女が掴んでいる。どこか子犬のような印象の少女で、不安そうにエインセルを見上げている。ヒメノカリスのように攻撃的でなくとも、エインセルが他の誰かにとられてしまいそうで怖がっているのだろう。

「その子は新しい娘さん？」

手元に置いているのはヒメノカリスだけだとしても、エインセルは常時１００人を超える子どもたちを支援している。別に子どもが１人、２人増えたりしても不思議はない。

「軍事機密に属します」

「あなたらしくないジョークね」

つい顔をしかめてしまった。エインセル・ハンターは真実を語らないことはあっても嘘は言わない。若干違和感があった。

ソルは別の違和感を感じていたらしい。

「セレーネさん、ハンター代表とお知り合いなんですか？」

「これでもファントム・ペインだもの。エインセルとはハワイ基地で会ったわ。それから7年もアタックし続けてるのに、まだいい返事がもらえてないの」

出会った頃にはすでにエインセルは結婚していた。メリオル・ピスティスと別れてと何度言っても聞いてはくれない。離婚を要求する度、メリオルが親の仇でも見るように睨んできたことが微笑まし

く思い出される。

「ねえ、ヒメノカリス、新しいお母さん、欲しくない？」

口の端が変形するほどの形相で睨まれた。この母子は似ていないようでよく似ている。メリオルもきっとこんな顔して怒ってくるに違いない。

「あいかわらずもてもてね。メリオルも気が気でないでしょうね。それで、地球の王様がわざわざこんなところにまで来た理由は？」

エインセルは内ポケットから恭しく紙切れを取り出した。手渡された紙は四つ折りで、開くと簡単な説明が書かれ、記憶媒体がしまわれていた。

「フォイエリヒの修理をお願いしたいのです。そして、そのデータを一切残してもらいたくはありません」

「なるほど、軍事機密ね」

説明を流し読みして、ふと少女、ステラ・ルーシェ――名前は紙に書いてあった――を見る。ちょっといたずらがすぎたのか、すっかり敵と認識されてしまったらしい。セレーネを見る目つきが鋭い。

（再会を祝ってエインセルに抱きついたらどうなってたでしょうね）

さすがにそれはやめておこう。ヒメノカリスに殺されかねないから。

「わかったわ。もちろん一両日中とはいかないけど、できる限りお

望み通りにするわ」

「セレーネ、勝手に……」

「感謝します」

ここの代表であるはずのソルの言葉を事実上無視する形で、セレーネとエインセルの間に契約が成立する。

「私ももう1度見てみたいもの。フォイエリヒの黄金に輝く姿が。だから任せてちょうだい。あなたのことは、必ず守り抜いてみせるから」

ここは赤道同盟ボーパール。魔王に仕える魔女が棲む森は如何なる敵も逃さず絡めとるのだから。

軍産複合施設は、経済大国で知られる赤道同盟に決して珍しいものではない。ボーパールが際だっていることと言えばその規模、そして立地条件である。

東アジア共和国にフォイエリヒを修復する技術はなく、ユーラシア連邦だと半球またがなければならない。大西洋連邦本国に持ち帰ろうとすれば太平洋を横断しなければならない。消去法で赤道同盟。そして、進行方向、予想ルート、得られた情報、経過時間、そして、エインセル・ハンターがフォイエリヒガンダムを必要としている事実、そのすべてが示していたエインセル・ハンターはここに、ボーパールにいると。

これらの情報がブリーフィング・ルームのモニターに映し出される。暗いため、集められたパイロットたちの顔を見ることはできない。アスランはそれでも部下たちの士気高揚を確信していた。

「今回の作戦目標はボーパール基地でもなければ敵の部隊でもない。エインセル・ハンターただ1人だ。みんなよく思い出して欲しい。ユニウス・セブンの悲劇からすでに15年が立つ。あの日、その時君たちは何をしていたか、俺は知らない。ただ、人生が大きく変わってしまったであろうことは想像に難くない」

アスランは血のバレンタインに巻き込まれ、自ら命を辛うじて拾う危機に見舞われるとともに母となるはずの女性を失った。

「1度道を踏み外してしまった俺たちはいまだにもとの道に戻れないでいる。今日、ここで道を戻そう。新しい道をやり直そう。そのためにも君たちの力が必要だ」

静かな気迫がブリーフィング・ルームに響いている。

「俺はここで初めてこの言葉を使う。俺たちの勝利が明日を切り開くことを信じて。勝利を我らに！」

ミネルヴァは今、ボーパール西部のアッパー湖を横断している。東西に長いこの湖は幅が最大でも4ｋｍ程度しかないこの湖に2隻のラヴクラフト級特殊戦闘艦が並んだだけでも手狭に感じるほどだ。

シンはすでにミネルヴァの上に出ていた。ラヴクラフト級はその複雑な形状からわかりやすい甲板がない。そのため、モビル・スー

ツの足を活かして艦体前方に陣取っていた。

分厚い黒雲が空を覆い、降り注ぐ雨が地上にある何もかもを叩く。土砂降りの光景は、どこか世界の終わりを思わせた。そう言ってしまうと大げさだろうか。

ただ、ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムのコクピットから眺める光景は、過去の人が想像していた荒廃した未来像によく似ている。

壁で囲まれた街を中心としてその外側には破壊されたＧＡＴ－０１デュエルダガーのすぐそばにＺＧＭＦ－１０１７ジンの頭部が転がり、その隙間を埋めるように鉄くずが積み上げられている。アッパー湖も見えるところに何かの残骸が浮かんでいる。

ボーパールの街からは黒煙が吐き出され、雨がそのすべてを打ちつけていた。

「ここがボーパール……。何だか、嫌なところですね」

まるで雨そのものが毒を持つかのように思えてしまう。雨はシンと同じようにミネルヴァの上に立つレイ隊長のＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルにも降り懸かっている。ところが、全身をミノフスキー・クラフトで包むローゼンクリスタルは全身を輝かせて、雨をことごとく弾いている。装甲そのものが推進器として機能する。そのことがよくわかる。

「今から２５０年前、ボーパールで科学工場の大規模事故が発生した。猛毒のイソシアン酸メチルが気化するとともに街にばらまかれたそうだ」

まさかその影響が今でも残されている訳はないだろう。しかし、産業廃棄物がうず高く積まれた光景は２００年の毒を今に伝えているようにも思えた。

「そんなことして平気だったんですか？」

シンの言葉に通信から思わぬ声が聞こえてきた。こう、息をもらしたような。モニターに姿は表示去れていないが、まさかレイ隊長が笑ったのだろうか。少なくとも声にそんな調子はないが。

「平気な訳がないだろう。事故発生が深夜だったこと、工場側が対処を怠ったことから直接の死者は数千から、報告によっては１５００人とするものもある。そして汚染はその後も５０年に渡って土壌を蝕み続けた」

「無茶苦茶ですね」

「操業していたユニオン・カーバイド社は本社を、大西洋連邦、いや、旧アメリカ合衆国においていた。当時の触れ込みは本国と同水準の安全性ということだったらしいが、その実、安全管理は杜撰だったらしい」

そのため補償も満足にされず、ボーパールが廃棄物処理を兼ねた工業都市として発展することになる５０年もの間、汚染され続けたという報告もあるそうだ。コクピット・ハッチ、ヘルメットを通して入ってくる空気に、どうしてもある種の気持ちの悪さがつきまとう。あたりに産廃が放棄されていることもその感覚を助長した。

「そんな工場がどうして街中に……」

「２５０年前、人はほんのわずかに愚かだった。持たざる者がわりをくうのはいつの時代も変わらない」

「どうして、何でしょうね……？」

記憶は自然と４年前のことを、オーブが侵攻を受けた時のことを思い出す。あの時は、黄金の太陽が輝く、よく晴れた日だった。今日は土砂降りの大雨。

それでも、シンは同じ目標を見据えている。

「色々な考え方があるとは思うが、１つは引き立て役だろう。貧しいことを憎むのは貧者だけだ。富裕層にとって、貧者は己の富の豊かさを自覚するためのよい肥やしとなる。人は自分よりも弱い者を見ていなければ自分の価値を自覚できない」

レイ隊長に返事をしている余裕はなくなっていた。湖面をゆっくりと進むミネルヴァは、徐々に大きくなるボーパールの街の城壁を見せてくれる距離にまで達していた。

操縦桿を握りしめ、フット・ペダルの感触を確かめる。

「そろそろ作戦開始時刻だ。油断するな。この毒と鋼の墓場には魔女が棲むと聞く」

エインセル・ハンター。この男ただ1人を殺すためだけの戦いが始まるとしていた。

雨天が視界を遮り、ミノフスキー粒子濃度は極めて高い。奇襲にはうってつけの状況である。

廃棄場所の拡大に伴い放棄された市街地の建造物に隠れながら、ザフトの一団が進んでいた。全機がＺＧＭＦ－１０００ヅダであり、バック・パックにはスラッシュ・ウィザードを装備している。ミノフスキー・クラフトは機動力を大いに向上させたが、同時に光り輝く。奇襲、隠密、秘匿には向いていない。よって、１個小隊のヅダは飛行することなく徒歩で進んでいた。

先頭のヅダが瓦礫を強く踏みつける。崩れそうにない。そう判断したところで瓦礫を踏み越えていく。続くヅダも同様に瓦礫に足を乗せ、何かを確認するような間を置いてから瓦礫を越える。その動きには慣れというものが感じられなかった。

先を行くヅダが歩みを止めないまま通信を飛ばした。

「新入り、実戦は初めてか？」

野太い男の声で、返事は少年とも少女ともとれる高い声である。

「はい、これが初陣です」

「運のいい奴だ。プラントの歴史に刻まれる瞬間に立ち会えるんだからな。いいか、俺たちは悪のドラゴンを倒しにきた勇者だ。そして、歴史は絶えず正しき者の味方だ」

長柄のビーム・アックスを携え、甲冑に身を包んだようなヅダの勇姿はたしかに戦士然としていた。驟雨をものともせずにザフトの

戦士たちは行進する。

その先には鉄の壁に取り囲まれた魔城があり、その深奥には人の姿をした悪竜が鎮座する。

彼らは知っていた。竜を倒さなければ未来はないと。

彼らは知らない。竜は青い薔薇をさした魔女によって守られていると。

「勝利を我らに、だ」

「勝利を我らに」

そして、彼らは知ることはない。魔女が魔女よ呼ばれる所以を、その力の正体を。

轟音を響かせ雷が鳴る。大気を斬り裂く音のほんの１秒ほど前、稲光が確認された。よって、落雷は少なくとも３００ｍ離れたどこかに落ちたことになる。それが彼らに何ら影響を与えるはずがない。

モビル・スーツよりもわずかに高いビルとビルの間を通り抜けようとしていた先頭のヅダが突然動きを止めた。

「隊長……？」

何か事態を想定した訳ではなかった。ただ何気なく、新兵は隊長機の側に歩みを進めた。その振動が、隊長機を揺り動かした。７０ｔもの鉄の塊が呆気なく前のめりに転倒した。それも、あり得ない倒れ方で。通常、モビル・スーツは転倒した場合、自動で姿勢を制

御し、手をつくなり膝を曲げるなりして衝撃を緩和しようとする。人でいう反射がコンピュータ制御で備えられているのだ。

ところが、隊長機は崩れ落ちた。戦斧を携えた姿勢のまま前のめりに転倒する。受け身などない。人の形をした鋼鉄の像が折れたように痛んだコンクリートを破砕する。生じた揺れは家屋にわずかに残されたガラスにひびを刻む。

「そんな、敵なんてどこにも……！」

明らかに攻撃を受けた隊長の機体。雷鳴に重ねて攻撃されたことはいくら新米とは言え理解ができた。しかし、それが敵の姿はどこにもない。ヅダのモノアイがせわしなく左右に動き、首が振り子のように左右に振られる。

どこを見ても、どこを探っても敵の姿はない。まるで壁のように並び立つビル群のどこにも敵の姿はない。そう、左右には建造物が横一列に並び、隊長機が通り抜けようとした場所だけが開いていた。

攻撃は正面から。

再び落雷が大気を震わせる。雨音が支配権を取り戻した頃には、天を仰ぎ見て眠りについたヅダの姿がさらされていた。腹部のコクピット・ハッチが獣に喰いちぎられたかのような無惨な姿をさらし、その風穴へと雨が流れ込んでいた。

魔女は静かな死をもってその魔術を披露する。

「アスラン、別働隊が攻撃されたです！」

「想定よりも攻撃が早いな」

翠星石の声を聞きながら、アスランは戦術図を思い描いた。ミノフスキー粒子による電波干渉を鑑みたなら射程は短い。少なくとも予測された射程には南西から展開するどの部隊も入っていないはずだ

（街から標準も定められないまま放ったのか？　いや、それが命中するとは考えにくい。となると、攻撃はモビル・スーツからとみていい）

「遊撃隊が出てきたようだな。俺たちを街に近づけたくないということは、エインセル・ハンターがいることにますます信憑性が出てきたな」

「どうするです、アスラン！？」

プロジェクターと違い、コクピット内の翠星石はとにかく落ち着きなく飛び回る。アスランの頭の周りを1周したところで、指示を飛ばす。

「ピートリー級に連絡してくれ。進軍を停止し、距離を保て。射程は前提が崩れたと」

ユーラシア大陸方面に展開していた部隊と共同戦線を張っている。ピートリー級陸上戦艦は南の旧市街地からヅダを先行させて徐々にボーパールの街と距離を詰めてもらう予定だったが、モビル・スーツが出ている以上、これ以上近づくことは無謀と言えた。後退させる必要まではないだろう。

（問題は、クルーが翠星石の口調に戸惑わないかだが、まあ、問題ないだろう）

翠星石は特に会話をしている様子は見せないが、すでに連絡をとっているはずだ。ゲルテンリッターが少女の姿をしているとは言え、本体はあくまでもモビル・スーツだ。姿は単なるおまけのようなものにすぎない。翠星石にピートリー級との連絡を任せ、同時にレイとの通信を繋いでもらう。２つの通信を同時に繋ぐことくらい、翠星石はたやすくしてのけた。

「レイ、聞こえるか？　敵は遊撃隊を中心に防衛線を張っているらしい。このまま堀の外で立ち回られると面倒だ。俺たちで指揮官を落とすぞ」

「了解した。だが用心しろ、アスラン。片角の魔女は人を化かすと聞く」

セレーネ・マクグリフ。またの名を片角の魔女。その戦術は珍妙にして、奇怪。想定外の戦い方を得意とすると聞く。

何より、魔王の城を守るのが魔女とは、少々できすぎではないだろうか。

「このＣ．Ｅの世に、狐狸の類もないだろう」

たとえどのような相手であろうとも、引くことも退くこともできはしないのだ。

鉄と鋼が積まれ、滂沱として雨が油と汚れをその身に混ぜ合わせながら流れを作る。

実を結ばぬ汚れた鉄が樹木を騙り、川には毒で着飾る。

まさに魔女の森にふさわしい。魔王を迎えるにふさわしい。

魔女は青い薔薇を持つ。

ＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーの左肩にファントム・ペインの象徴たる青薔薇が描かれる。右手にはライフル。左手には通常と比べ厚手のシールド。すべては背に象徴される。ドッペンホルン・ストライカー。２本角の名前が示すように通常１対のロング・レンジ・ライフルが装備される砲撃に特化したストライカーである。それが片方しか装備されていなかった。長大な銃身が右側にしか装備されていないのである。

左右対称を欠くドッペンホルン・ストライカー。この姿故、セレーネ・マクグリフは片角と呼ばれる。片角の魔女と。

ストライクダガーのコクピットの中でセレーネは笑う。ノーマル・スーツの中で笑う。楽しくて楽しくてしょうがない。あの男のために戦える。エインセル・ハンターのために戦えるのだ。

片角のストライクダガーが片足で残骸を踏みつけた。体をやや前かがみに、背負われた銃身が水平に倒れていく。

レーダーには映し出されていない。専用のスクープで覗き見た光景には雨に隠された、しかし敵の姿が見えている。距離は約２．５

ｋｍ先。ドッペンホルン・ストライカーの弾速は秒速約１５００ｍ。着弾まで約１．６秒。モビル・スーツならば５ｍは進むことができるほどの時間だ。そして、その間に弾丸は１０ｍ以上も沈む。気温２２度。気温は高ければ高いほど空気の密度を減らし弾を通りやすくする。湿度８４％。湿度が高ければそれだけ空気中の水分との磨耗して弾の運動エネルギーは減らされていく。コンディション劣悪。雨降りしきる中、レーダーは感度が悪く敵機との正確な距離はわからない。アクティブ・ソナーを使ってこちらの居場所をさらすつもりもない。

だから魔女は手品の種を仕込んだ。遠く離れたビルとビルが狭い道を作る場所がある。飛行したくなければこの間を通らなければビルを崩して大きな音をたてるか、貴重な時間を失ってまで迂回しなければならない。だからヅダはこの間を通り抜ける。

これで、距離は２４７４ｍ。両側を塞がれ横に逃げることはできない。そして敵はこちらに気づいてさえいない。

指を引く。雷が響く。機体を震わせ、弾丸が飛び出す。雨を弾き、大気を引き裂いて、突き進む。身を引く重力を振り切らん速度で、横風をものともしない鋼鉄の弾丸がヅダの腹部に突き刺さる。弾頭が砕け、貫通することはない。ただ体内に留まり、臓腑を中から喰らい尽くす。

命中。ドッペンホルンから空薬夾が排出され、次弾が装填される。

次の標的はまだ何が起きたのか気づいていないらしい。音源解析にかければ落雷と銃声を分解して狙撃が行われたことに気づくことができたでしょうに。

もう一度、狙いをつける。雨を抜け、風を浴び、重力がまとわりつく感覚に身を委ねる。意識が２ｋｍ先に飛び、至近距離で銃口を突きつける感覚で引き金を引く。落雷が銃声を消した。

間延びするほど長く思える１．６秒をすぎて、腹を喰い破られたヅダが仰向けに倒れる姿を、セレーネは息を吹きながら確認した。

気を抜くには早すぎる。まだ戦いは始まってもいない。

機体の姿勢を元の直立に戻すと、もう１機のセレーネ・マクグリフが雨の中現れる。青い薔薇を肩につけ、片角のドッペンホルン・ストライカーを装備するストライクダガー。

「セレーネ・マクグリフ、全機配置完了しました」

男の声に、セレーネ・マクグリフは答えた。

「了解よ、セレーネ・マクグリフ」

報告したセレーネ・マクグリフ機の後ろにはセレーネ・マクグリフ機が雨に打たれている。

「では始めましょうか。さあ、ザフトの戦士たち、この３０人のセレーネ・マクグリフを打ち破れるかしら?」

戦いは始まりを告げる。片角の魔女の魔術とともに。

暗い部屋だ。住み慣れた場所でないことも手伝ってずいぶん不気

味に思える。生粋のコーディネーターであるギルバート・デュランダルは宇宙で生まれ、議長として活動を開始するまで地球に降りたことは一度たりともなかった。カーペンタリアを訪れたことなどなかった。

地球の重力を感じ、大気の臭いに軽い不快感をもよおしながら、ギルバートは部屋の明かりをつけた。

執務室として机など最低限の家具しか置かれていない部屋の中央から、一つの視線がギルバートを射抜いた。

白状しよう。この時、ギルバートは薄ら寒さを覚えた。その感覚を議員として培った平静を装う技術で押さえ込み、努めて朗らかに対応する。

「やあ、ラクス」

暗い部屋、明かりもつけずに待っていたのはラクス・クラインその人である。桃色の髪に縁取られた青い瞳が、視線そのものに圧力を与えるようにギルバートを見ていた。

「晩餐には呼んであげられなくてすまない。やはり戦いの後は兵たちを労ってあげたくてね」

言いながら、ラクスの脇を抜け机の前まで歩く。特段用があるわけではないが、さも置かれた資料を整理しているように手を動かすのはラクスから視線をそらすきっかけが欲しかったからにすぎない。

あの晩餐にはラクスどころか、ラクスの息のかかったアスラン・ザラもレイ・ザ・バレルも呼んでいない。ハイネ・ヴェステンフル

スとアブディエルであるシン・アスカを誉め讃えるためのものだった。

それが気に食わないということなのだろうか。

ラクスはギルバートのすぐ横に立った。身長差から見上げられる形で、その眼差しは厳しい。口元をしっかりと結び瞬きのない瞳が片時も離れてはくれない。

「シン・アスカ。何故、彼に勲章を授けたのですか？」

思わず手を止めていた。取り繕うようについ手振りを大きく応えてしまうが、それも仕方がない。

「1人の兵士に勲章を与える度に君に相談しているわけにはいかないだろう。それに、彼はよくやってくれた。まさにアブディエルの星だよ。能力ある者を評価する。それが……」

「なりません！」

物静かで、声を荒らげる様を想像しにくいラクス議員にここまで強行に否定されるとは考えていなかった。

「アブディエルもオナラブル・コーディネーターも重用することはなりません。王は王であり、従者は従者でなければならないのです！」

「だがね、アブディエルのガス抜きも必要だ。それは君もわかっていることだろう。エルスマン議員の言葉を真に受けるわけではないが、2級市民の間の不満は……」

「なりません！」

とりつく島もないとはこのことだろう。話はいつまでも平行線で、ラクス議員が意見を変える、いや、変えられないことは想像に難くない。結局、ギルバートが折れる他なかった。

「わかったよ。今後、査定に関しては今まで通り正規市民を優先することにする。それでいいかな？」

ラクス議員とは、どこかで互いの意見を尊重しあう必要があるようだ。

地上の汚れを洗い流したのは雨でした。神と崇められたのは雨でした。死であり、恵みであって、破壊とともに豊穣。魔王と讃えられ、唾棄されるかの者のように。最強と認められ畏怖されるかの者のように。自らを刈り取ると定めたかの男のように。

どちらにも共通することは、人知の及ばない圧倒的な力の所在。

人は雨に挑み、それでも雨を必要としています。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「雨のソナタ」

片角の魔女。それは雨を慕い、そして最もその恐ろしさを知る者。

第１９話「雨のソナタ」

数ｋｍ先――このご時世、正確な距離を計ることは難しい――から放たれた弾丸は放物線を描いてアッパー湖に着弾する。豪雨を弾き飛ばすほどの勢いで水柱が立ち、それが幾本も立て続けに形成される。

着弾してから届く銃声をＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンが拾う。砲撃は秒速１０００ｍを超すのだろうが、音速はせいぜい３５０ｍ。当然、発砲音は遙かに遅く聞こえてくる。

「翠星石、音と砲撃の時間落差から概測でいい、発射地点までの距離を出せ！」

どちらにしろ、これ上近づけることは危険だ。アスラン・ザラは通信――機体はすでに艦外に出ている――で母艦であるラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネにこれ以上前に出るなと伝えた。計画ではアッパー湖を東に進み、ボーパールの街に設置された砲台の有効射程外で揚陸するつもりだったが、計画は変更せざるを得ない。

こうしている内にも際どい場所に着弾した弾丸のしぶきがパラスアテネにふりかかっている。

翠星石がモニター上にボーパール周辺の地図と、それぞれの砲撃の予測発射地点を×印で表示していく。どれもばらばらで、移動している形跡さえあった。やはりモビル・スーツによる攻撃であるようだ。

アッパー湖のほぼ真東に壁に囲まれたボーパールの街がある。そ

の南には放棄された旧市街地があり、そこから別働隊が向かっているはずだ。もっとも、そちらも攻撃を受けていることはすでに報告されている。

「アスラン！　ピートリー級が攻撃を受けてるです！　無限軌道を撃ち抜かれたです！」

ピートリー級とはザフトでは珍しい陸上戦艦で、砂漠の虎が扱ったことで特に有名なレセップス級とは異なり無限軌道を使用している。そのため、堅い地盤においては多大な積載量を誇るのだが、車輪を直接狙われては仕方がない。

（ピートリー級も十分な距離をあけていたはずだ）

要するに、敵は想定射程外から高速で動いている無限軌道を装甲の隙間を狙い打つようにして命中させたということになる。

「今更狙撃に苦しめられることになるとはな」

こちらに向かってくる砲撃の多くは方向だけで狙いをつけたような粗末なものだ。恐らく、あんな狙撃を成功させられる奴は1人、セレーネ・マクグリフしかいない。

「各機、指揮官を探せ！　散開して突入する」

ヒルダ・ハーケン、ヘルベルト・フォン・ヘルベルト、マーズ・シメオン。3人の部下たちの了解の声がした。

立ち上る水柱の中をヤーデシュテルンが突き進む。雨を弾き、鉄に汚れた大地を目指しながら青い翼を開く。

「何なのよ、これ……」

バック・パックには長大なライフルを背負うブラスト・シルエットを背負うＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムに搭乗したルナマリア・ホークは眼下の光景に唖然としていた。

指揮官を倒す。この命令を、指揮官てやっぱり強いのかな、そんな簡単な気分で捉えていた。けれど指揮官の強さはわからない。見つけることさえできない。

見えていないのではなくて見えすぎて、指揮官機の姿もはっきりとわかる。

左肩に青い薔薇――プラントにとって見たくもない紋章だ――をつけて、ドッペンホルン・ストライカーは右肩のしかない。そんなアンバランスな機体に間違いない。問題は、そんな機体しかないということ。

「同じ機体ばっかじゃない！」

ルナマリアが見えている範囲だけでも3機のＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーがまったく同じ姿をしている。どれを攻撃していいか分からず腰だめに構えたライフルを一番狙いやすい敵へと左右から一斉に放つ。雨の中、雨粒を蒸発させながらゴミの山を吹き飛ばす。

命中していない。攻撃をかわした敵は他の2機とともにドッペン

ホルン・ストライカーの弾丸を上空に放ってくる。ビームとは違う弾速の速さ。思わずひやりとしながら――直撃を受けてもフェイズシフト・アーマーが守ってくれる、多分――機体を左右に動かす。ミノフスキー・クラフト様々である。

（でも、どうしたらいいのよ、これ……？）

指揮官を一刻も早く倒さなければならない。なのに、指揮官機をみつけることができたにしても、それに気づくことができない。ルナマリアには、文字通りすべての敵が同じに見えていた。

何人もの魔女が笑っている。

現在の戦術において狙撃はまず加味されない。ある種の荷電粒子を飛ばすビームは収束率、減衰率の関係から長距離狙撃には向いていない。レーダー精度の著しい低下も接近戦への移行を助長した。ビーム・ライフルは精度よりも扱い易さが優先され、モビル・スーツはことごとくビーム・ライフルを装備するに至った。

狙撃は必要とされなくなった。当てられず、当てられたところでモビル・スーツが携帯する火器である以上、ビーム・ライフル以上では決してない。

戦術から狙撃という言葉さえ廃れようとしていた。

ドッペンホルン・ストライカーという火器がある。現代では珍しい実弾銃器であり、それは妥協の産物であった。ミノフスキー・クラフトを搭載したバック・パックの爆発的普及はモビル・スーツの

急速な世代交代を招いた。ミノフスキー・クラフトを搭載しないモビル・スーツは旧型に追いやられ、ストライクダガーもその中に含まれる。ストライカーは急遽バッテリー内蔵型のものが新造され、ストライクダガーは辛うじてミノフスキー・クラフトを身につけた。バッテリーの容量の関係上、大型ビーム砲を使用することはできず、火薬式の実弾を用いるほかなかった。

ドッペンホルン・ストライカーは妥協の産物である。

バッテリーの不足からビームを使用できず、新型モビル・スーツの量産も遅れていた。

すでに旧式に追いやられた機体と、技術革新に追いやられた火縄銃の頃からの枯れた技術。狙撃という概念は、ことモビル・スーツ戦術ではすでに迷信のように語られる。

時代に取り残された力と技をいまだに手放そうとしない。だから魔女と呼ばれた。技術の革新によって忘れ去られようとしている力は魔術のようで、それを使う女は魔女に他ならない。2本角を意味するドッペンホルンを片方の銃身しか用いようとしない。だから片角。

片角の魔女。セレーネ・マクグリフ。

すでに枯れ果てた技術でもって、狙撃という迷信を具現する。

実弾はビームほどの威力はない。しかし、ただ飛ばすだけならば有効射程はビームの比ではない。当てる。このあまりに簡単な概念を実行することは難しい。仮にできたとしたならば、それは魔術と呼ばれる。

枝が鋼鉄。土壌は毒。廃棄の森を踏みつけ、セレーネ・マクグリフが角を水平に倒す。他のセレーネ・マクグリフと何ら変わることはない。同じ姿をし、同じことをする。同じように放たれた弾丸は音を飛び越え、常識を打ち破り、他のどれとも違い命中する。

ザフト軍ピートリー級陸上戦艦は無限軌道を持つ。装甲のわずかな隙間に、高速で駆動する車輪の間に、弾丸が撃ち込まれる。ベルトを正確に破断させる。ちぎれたベルトは車輪に巻き込まれ艦体は大きく揺れ動いた。無事である反対側の無限軌道だけが推進力を維持し、軌道が歪む。まっすぐどころか思いの方向さえ描けなくなったピートリー級は旧市街地の廃屋に激突し瓦礫の中に埋もれる。

動くことのできない戦艦は的以外の何者でもない。数機のセレーネ・マクグリフ機がとりつき、ビーム・ライフルとドッペンホルンが雨の下に火花を咲かせる。ボーパールの街から放たれた砲弾が次第にゼロ・インを済ませていく。その間、ピートリー級は動くことさえままならない。

次はどのピートリー級を狙おうか。そう、セレーネ・マクグリフは考えを弄ぶ。

これはゲーム。敵がセレーネ・マクグリフを倒せば、敵の勝ち。ただし、それまでに一定数のピートリー級が撃沈していればセレーネ・マクグリフの勝ちである。

ザフトもそれだけ、一刻も早く魔女を討ち、倒さんとする。

降り注ぐ雨よりも速くＺＧＭＦ－１０００ヅダが機体を降下させていた。スラッシュ・ウィザードの戦斧を振り落とし、セレーネ・

マクグリフとは別のセレーネ・マクグリフ機へと果敢に攻撃を仕掛けた。

本来ならばモビル・スーツを破壊できるほどの攻撃力を有する戦斧だが、雨に冷やされ、湯気を立てながら振るわれるそれはただでさえ通常よりも厚手のシールドに防がれる。泥を強く踏みつけ、それでも押し切ろうとしているヅダへと、セレーネ・マクグリフは横から弾丸を叩き込む。

ビームほど派手ではない一撃は装甲を突き破った途端に破裂し、細かな破片はそれぞれが膨大な運動エネルギーを抱えたまま内部機構をもちろんパイロットごとずたずたに引き裂く。

ヅダは魔女の影を追い、そして魔女の魔法に刈り取られた。

コクピットは凄惨たる有様であった。破壊されたハッチから雨水の混じった泥が大量に入り込み、何十年も放置されていたかのようにことごとくを汚している。モニターは汚れ、砕けた液晶の隙間から入り込んだ泥が画像を大きく歪ませていた。

その歪つな像の中に、泥に汚されていない場所に血痕が点在している。パイロットのものだ。

緑のノーマル・スーツは茶に汚れ、フェイス・ガードは内側から赤く塗られ顔を伺い知ることはできない。ひび割れたフェイス・ガードの隙間から飛び出した血が、モニターを汚したのだ。

パイロットはまだ辛うじて息をとどめていた。震えながら持ち上

げられる手はスーツが裂け、欠損した指から血が止めどなく流れている。

「何故この血が……、エインセル・ハンターのものでは、ない、のだ……」

この呪詛と引き替えに、魔女はまた1つの魂を受け取った。

事切れたパイロット。それを乗せたままのヅダが、わき腹に風穴をあけたまま、屍の山に疲れきった戦士のように背中を預けて動かない。

雨は降り続いている。

ここは、何から何までおかしい。全部が同じ機体、同じ装備。ケッテが戦術として確立した現在の戦争においても同じ性能の機体を揃えることは珍しくはないが、敵は隊列というものを組もうとはしなかった。悪く言えばバラバラに、よく言うなら柔軟に戦っている。変に小隊を組もうとしないからリーダーがおらず、そのため、シンは攻め手に迷っていた。

攻撃力を担うリーダーを2機の直掩が援護する。3機1組のケッテなら、リーダーを落とせばよかった。今回もそのこと自体は変わっていない。攻撃力を担うセレーネ・マクグリフを撃墜すればそれでいい。

では、片角の魔女はどこにいる。

対艦刀のビームに触れた雨粒が蒸発し、気化熱がビームの温度を引き下げる。ミノフスキー粒子に還元されたビームを攻撃に適する温度に上げるため余計なエネルギーが消費されていく。全体としては大したことのないロスであるはずが、雨にエネルギーを削られていくことは気味が悪い。

まるで、魔女の森に蝕まれていくようで。

それが、すぐ目の前に魔女と同じ姿、もしかすると魔女本人であるかもしれない奴がいるならなおさらだ。

アクセルを踏み込む。インパルスガンダムが抜かるんだ地面を蹴って前進する。いつもと勝手が違う。泥に足を取られてうまく勢いが乗らない。思えば、シンは地球で戦ったのは数えるほどでしかない。それも、こんな悪天候での戦いなんて初めてだ。

勢いの乗らない体から振るわれる大剣の勢いが乗るはずなんてない。さらに雨でビームの出力が少しとは言え削られていることもあって、袈裟がけに振り下ろした対艦刀はストライクダガーのシールドに防がれる。片方しかないドッペンホルンとバランスをとるためなのか、普通のものより重厚で、ビーム・サーベルの1撃を辛うじて防ぐほどだ。

（でも、ビームに破壊できないものなんてあるものか！）

強引にアクセルを踏み込み泥を踏みつける。対艦刀を押しつけられたシールドは赤熱し、雨がその傷の周囲で沸騰する。もはやこれ以上もたないと判断したのだろう。ストライクダガーはシールドを捨てるなり跳び退いた。

意識を加速させる。翠星石の言葉を思い出しながら前へ出る。

相手はビーム・ライフルをこちらに向けた。これはかわす。接近する。敵がサーベルを抜くよりも早く攻撃する。撃墜する。

加速した意識が予定を立てる感覚。

敵のビームを身を翻してかわした。この時にはすでに体は前へと動いている。敵はかわされた、では次はサーベルでも使おうと考えているのだろう。しかしその頃には、インパルスのサーベルが横薙に振るわれていた。シールドを手放した左腕が肩越しにサーベルを掴む。抜いた。その瞬間に、インパルス右腕の大剣が相手の左腕を縦に斬り裂く。そして左腕にはもう1本の対艦刀がある。意識が敵の左腕を破壊したと認識した頃には、2本目のサーベルが敵の胴に深々と食い込んでいた。

泥と雨を吹き飛ばす爆発。まずは1機撃墜。

だが、気は上向かない。これが魔女だったのだろうか。それとも違うのか。無駄なことをしてしまったような感覚に襲われて、それが事実であったと知った時に嫌な気分にさせられる。

通信が、またピートリー級が1隻、無限軌道を狙撃されたと報告していた。魔女は生きている。こいつじゃなかった。

（じゃあ、どこにいるんだよ!?）

カーペンタリアの時もここでも、地球軍は戦艦を狙ってくる。地上に拠点を少ない数しか持たないザフトは足を叩けばすぐに音を上げると考えているんだろう。まさにその通りで、だからこそ、少し

でも早く魔女を倒さなければならない。

「他と違う動きをしてる奴を見つければきっと！」

上空に行こう。高性能な高射砲を相手に飛行することは危険ー実際、ザフト機の多くは地上に降りて戦っているようだーだが、全体を見通さなければ手当たり次第に魔女と戦わなければならなくなってしまう。

分厚い黒雲を目指して、ソード・シルエットのミノフスキー・クラフトを輝かせる。

１００ｍほど上空に出た時、戦況は混沌としているのが見えた。ケッテを組まない魔女たちとの戦闘にザフト軍は混乱しているようだった。小隊として戦闘するよう訓練された兵士たちは、３機もの機体を用いてわずか１機を狙い撃ちにしていた。確かに効率的に撃墜はできるが、それは目標がわかっていた場合の話だ。目標がどこにいるかもわからない状況の中では数をあたらなければならない。小隊で活動しているということは、手数を３分の１にしているにも等しいように思えた。

「これじゃあ運だめしだ……」

魔女に当たってくれることを祈るしかない。そうしているうちにも動けなくなったピートリー級が攻撃にさらされている。

ストライクダガーの動きはどれも同じに見えた。魔女なんていないようにも思えて、反対に全員が魔女のようにも思える。

幸いシンに関心を示している機体はないようだが、危険を冒して

まで上昇した意味はあまりなかった。暗い空の中、1人で漂っていると、インパルスが突如警報を発した。未確認機の接近。下にばかり気を取られていたが、横から白い機影が近づいてくる。

「あの時のウィンダム！」

カーペンタリア湾で見た全身を白く染めた機体だ。手も足も出ないうちにやられた相手だ。あの時よりは強くなったつもりでいた。それでも、超えられた気はしない。また負けるかもしれない。そんな余計な考えが、反応を遅らせた。

以前ほど鋭くはない動きで、それでもシンの反応が間に合わない速度でウィンダムが突進してくる。放たれたのは蹴りだった。インパルスの胸部にウィンダムの両足が叩き込まれ、衝撃とともに途端にインパルスの動きは鈍くなる。ウィンダムは踏みつける形で全体重を預けているようだった。

いくらミノフスキー・クラフトでもモビル・スーツ2機分の重量を支えるのは辛い。無理をすればスラスターごと焼け付くことになる。スラスターとミノフスキー・クラフトの出力を落とすと、敵は予測していたように離れた。インパルスだけが落ちていく。

「くそ！」

急いで出力を上げても、落下は止まらない。徐々に落ちていく高度と落下速度。幸い、落下速度の方が先に0になってくれた。ミノフスキー・クラフトの輝きが泥を吹き飛ばす。それほど地面が近い。落下は免れたが、それは落下のエネルギーを相殺できただけで、すぐには動けない。

反応の遅れを見逃してくれる相手ではなかった。モニター一杯にウィンダムの手が広がった。掌に刻印された番号を読みとれてしまえるほど近く、ウィンダムの手がインパルスの頭を鷲掴みにする。

後ろへと押し出される感覚に悲鳴が漏れた。だが、背中から叩きつけられる衝撃には歯を食いしばって耐えてみせた。

どうやら馬乗りにされているらしい。メイン・センサーは手で塞がれてしまっているが、サブ・カメラにはウィンダムの姿が見えていた。武器を手にしている様子はない。

（何がしたいんだ、こいつ……？）

訳がわからず相手の出方をうかがう他なかった。声が聞こえてきたのはその時だ。

「他と明らかに違う動き。あなた、シン・アスカ？」

聞き覚えのある声で、それでいてどこか確信がもてない。たった一度出会っただけの相手の声によく似ていた。

「ヒメノカリスなのか……？」

機体を接触させ、装甲の振動を介しての接触通信は触れていなければ話すことができない。そのため、ヒメノカリスはある周波数を告げてきた。聞き慣れない周波数で、シンはインパルスの設定を変更する。これで、話をすることができることになった。

「確認させて。スティングを殺したのは、あなた？」

名前はもうはっきりと覚えていない。ただ、ヒメノカリスが言っていた、フィンブル落着を阻止しようとして戦死したパイロットのことだろう。以前と同じように口の中が乾く感覚を味わいながら、声を絞りだした。

「緑のイクシードに乗ってたなら、きっと間違いない」

殺したのは俺だ。そう告げた途端、何かが変わった。声を聞いた訳じゃない。モニターに姿は映ってなんてない。

「あの時の私にはあなたを殺す動機しかなかった。今の私にはあなたを殺す資格がある！」

考えてる余裕はなかった。

ミノフスキー・クラフトの強度を一気の上昇させる。機体に無理をかけてまでインパルスは弾けるように体を起こした。跨っていたウィンダムを突き飛ばすと、ウィンダムはすでにビーム・サーベルを抜いていた。相手の方が突然の事態に見舞われたはずであるにも関わらず、攻撃はヒメノカリスの方が早い。

抜かるんだ泥を踏みつけてウィンダムが前へ出るとともにサーベルを振るう。対艦刀で受け止めると、泥――何故かこの周りには産廃がほとんどなく、開けた平地になっていた――でふんばりがきかず鍔迫り合いの形で動けない。インパルスと敵にそう極端な出力の違いがないことも原因だろう。

戦いにくい敵だ。少し動きを見ただけでもわかる。ヒメノカリスは強い。動きを読んでみようにも、攻撃を仕掛けてみようにも、うまくいかないという嫌な予感がまとわりついた。言葉で説明するこ

とは難しいが、相手が強いと動きの中にそれを感じることができる。それが感覚として危機感をもたらしてくる。

どう動いても勝利に繋がるイメージが持てず、動くに動けない。ただ剣と剣とで互いの動きを潰し合う。

「君のお姉さんに会った！　ラクス・クライン議員だ！　エインセル・ハンターは君の本当のお父さんじゃないんだろ！」

「本当？　遺伝子の繋がりがないだけで大切な人を偽物呼ばわりしないといけないの？」

「それは違うけど！　なら！　どうして君のお父さんは君を戦わせるんだ。利用しているだけじゃないのか？」

出力ではこちらが上とは言え、少しでも気を抜くと押し切られる恐れがある。声が自然と大きくなった。

「私が望んだことだから。私はお父様のためだけに在りたい。お父様が望むなら剣になって、お父様が望むなら盾となれればそれでいい」

「そんなのおかしいだろ！　どうして子どもが親の所有物のように扱われなきゃいけないんだ」

踏み込みすぎている。そのことは自覚できても、どうしても言葉を抑えることができない。ヒメノカリスのしていることも置かれている状況も見過ごすことができないでいた。

ラクス議員に言われたからじゃない。ヒメノカリスを救ってやり

たいだとか、そんな大それたことを考えてるからじゃない。

ヒメノカリスのことが、自分と重なって見えた。このことがわかっているのは何もシン自身だけではなかった。

「それはあなたのことでしょう」

気を張るシンに比べるとヒメノカリスの声はあまりに澄んでいて、心の奥底にまで入り込む。

体が浮かび上がる感覚は、何も動揺ばかりが原因ではない。当て身をくらわされ、浮き上がったインパルスがその背中から泥の中に倒れたからだ。ビーム・サーベルを発生させたままの対艦刀が地表に触れ、ビームの熱量が泥を爆発的な速度で泥を巻き上げる。インパルスが立ち上がった頃には、その全身が泥で汚れていた。

「調べたのか、俺のこと……？」

「家族は母親のマユ・アスカ1人。父親はなし。マユ・アスカはあなたを1人で産んだ。結婚歴も離婚歴もない。あなたには父親がいない」

仕事人間だった母のことが、たった1人の家族だった母のことが思い出される。4年前、大西洋連邦のオーブ侵攻によって殺された、エインセル・ハンターによって殺された母のことが。

「あなたの母親は望んであなたのことを産んだのは間違いない。でも、あなたを望んでいたとは限らない。血の繋がりだけが、あなたと母とを繋いでる。それが、あなたの言う本当の親？　でも、あなたはコーディネーター」

豪雨は、それでもインパルスにまとわりつく泥を削ぎ落としてはくれない。

「やめろ……」

作り替えられたものだとしても、原型となった受精卵は確かに母由来の卵が使用されている。ヒメノカリスが言っていることは何一つ正しいことなんてない。事実であったとしても、認められることなんて何一つとしてなかった。

「やめろ！」

これ以上何も言うな。言わせない。

モビル・スーツが携帯するには過剰とも思える1対の大剣を力任せに振るう。実体剣としても重さだけでモビル・スーツを両断できてしまえるのではないかと思える攻撃を、ウィンダムは受け流すようにかわすと、勢いを残した一撃は地面に食い込む。ビームが泥を爆発させる。

「お前に何がわかる！　俺と母さんの何が！」

攻撃する度にかわされ、その度に泥が爆発する。雨がふって、泥が跳ね回る。戦う2人の姿は見る間に汚れていく。互いに互いを汚しあっているように。

「それでもあなたにはわかるの？　私とお父様のことが！」

「セレーネさん……」

「戦闘中はかけてこないで」

必死の思いでかけた電話は、言い訳を聞いてもらうこともできないまま切られてしまった。もう1度かけなおすこともできず、ソルは携帯電話を懐に戻す。

見上げる空は、格納庫の天井の縁を通して降り落ちる雨が見えていた。格納庫の内と外を境にして、濡れた滑走路と乾いた床、戦場と安全地帯とが分け立てられているように思える。

ソルがいるのは、もちろん濡れていない側、安全な方だ。

外からは雨の音に混ざって爆発や砲撃の音、金属同士が激突する音が繰り返されている。そして、内側には飛行機の駆動音が響いていた。

今1機の飛行機が飛び立とうと準備を進めていた。安全な場所から安全な場所へと移動するために。

軍用の大仰な飛行機の横で、エンジンの音もかまわず話をしているエインセル・ハンター代表の姿があった。安全な場所に籠もっている。そのことに負い目を感じるソルとは違い、まったく物怖じした様子はみられない。

ソルは意を決して話しかけることにした。

「エインセル・ハンター元代表……」

話をしていた機関士とはちょうど会話が途切れたらしかった。ハンター代表はあっさりとソルへと関心を向けてくれた。ソルの方は、代表について離れないステラ・ルーシェという少女がつい気になってしまったが。

（軍人としては若すぎるな）

代表の娘という少女も出撃している。

今格納庫でエンジン音を響かせる飛行機は、しかし脱出のためのものだ。

「今もあなたを守ろうとたくさんの人が戦ってます。それでもあなたは1人で尻尾を巻いて逃げるおつもりですか？」

敢えて不躾な言葉を使ったのは挑発の意味もある。

「はい。フォイエリヒはお任せします。あなた方の技術なら、フォイエリヒは必ず輝きを取り戻すことでしょう」

冷静な言動が気に障らないはずがない。自分のために戦う人々を見捨てて自分だけ逃げようとしている。それは重大な裏切り以外の何者でもない。彼らのことを信じているなら待てるはずだ。待たなければならないはずだ。

「あなたは自分のしていることが……！」

わかっているのか。問いつめたいという思いはソルの足を進ませる。つい力がこもったその足取りは、周囲に不安を抱かせるほどで

あったかもしれない。

ソルは突然腹部に鈍い痛みを覚えた。予期しない衝撃に、体が後ろへと傾く。尻餅をついた形で上体を肘で支える。床に座り込んだソルの上に跨るようにして、少女ステラが拳を振り上げていた。

「わあああぁぁぁ～！」

瞳に涙を浮かべて、必死の形相を形作りながらソルを殴りつけようとするステラ。意識が追いつかず、防御することもできない。ただ殴られると呆然と考えていた。

殴りつける手が突然止められた。寸でのところで、ソルは殴打を免れたのである。ハンター代表が、ステラの手を後ろから止めていた。

「ステラ」

怒りがごっそりと抜け落ちて、残されたのは涙する少女の顔だけだ。ステラはさめざめと泣きながらハンター代表にすがりつく。その過程で、ソルから離れた。ハンター代表が優しげな手つきで少女を抱き上げると、ステラはこの温もりを手放さないとばかりにその胸にしがみついた。

ブルー・コスモスをかつて束ねた男は、少女を抱きしめたまま、ソルを見下ろしていた。侮蔑でも皮肉でもなく、ただ平然と。

「申し訳ありません。この子はかつて暴動によって両親を失っています。そのため、興奮するとその時の恐怖がフラッシュ・バックするのでしょう。このように攻撃的な行動をとってしまいます」

何とも間抜けだ。少女には、ソルの行動は大切な人への敵愾行為にしか見えなかったのだろう。いつまでも尻餅をついたままではいられず、ソルはゆっくりと起きあがった。

エンジン音がうるさい中、少女のすすり泣く声だけは妙に耳に届く。

「私には、あなたがわからない。あなたは魔王と呼ばれている。特にプラントにとって、あなたは不倶戴天の仇敵にも等しい。それなのに、あなたは多くの人に愛される。それは何故なのでしょう？」

このステラはさることながら、セレーネもヒメノカリス嬢もこの男のためには命を惜しまない。

これは悔しさなのだろうか。多く愛されたいと望んでいるわけではないが、信頼を置く女性が敬意を惜しまない相手が自分でないということは、ソルの心をひどくかき乱した。エインセルが優しくステラを抱くことと対照的に。

「私は、世界を救いたい。しかし私にはそれほどの力はありません。助けを必要としています。私のしていることは世界を分けることにも等しいのです。敵と味方に、非協力者と協力者に、犠牲にする者とされる者に。私は仲間には最大限の敬意を、敵には絶対的な破壊を惜しみません」

「それは、正しいことなのでしょうか？　自分に媚びてくる人間だけを守り、従わない人間を滅することが？　あなたは、それを正しいことだとお考えですか？」

それでは自分と価値観の排他的に排斥しているだけにすぎない。そんなものは正義と決して呼べなければ、仲間思いと美辞麗句で片づけるにしても貧相だ。

「思いません。だから私は滅ぼされなければなりません。ただ私を否定する敵にではなく、ただ私を肯定する味方にでもなく。復讐者にして復讐者ではない者に、敵であり敵ではない者に、何より愛を知る者に、私は滅ぼされなければなりません」

「私には……、あなたがわかりません」

これまでに見たこともない目をしていた。ただ美形というだけではすまない。自信に満ち溢れているというのではなく、しかしその瞳は臆するところを知らない。悠然と水を湛える湖が、人にどう思われようとその美しさを変えないように。生きた人間にこんな目ができるのだろうか。ソルへと向けられているはずの眼差しは、しかしソルを見てはいない。いつも他の何かを見ている。

（セレーネさんには、ハンター代表が見ているものがわかっているのか……？）

そして、それこそが代表を敬愛する理由なのだろうか。何か言葉にできる思いはもうない。できることはただ自分がすべきことをするだけ。

「フォイエリヒガンダムは、確かにお届けします」

「感謝します」

涙にくれる少女を抱いたまま、ソルの疑念も疑惑もすべてを受け

止めていた。

「エインセル・ハンターを確認しました！　しかし、敵の攻撃が激しく……」

すぐそばに着弾した。直撃でもしなければフェイズシフト・アーマーに守られたインパルスを破壊できるものではないが、衝撃にヒルダは思わず歯を食いしばる。

恐れはない。それどころか高揚まで覚えるほどだった。モニターには約３００m離れた地点――格納庫だ。どうやら1人で逃げるつもりらしい――のエインセル・ハンターが映し出されている。

敵が小隊行動をとらず、結果としてザフトも戦い方を大いに変更せざるをえなかった。それが幸いしたのだ。戦いは混戦模様を呈し、戦線は混雑した。ヒルダの搭乗するインパルスはボーパールの街の近くにまで接近していた。廃棄物が積まれた山の上から格納庫をうかがえる位置にいる。開かれたゲートから、格納庫の奥を眺めることができるのだ。

問題は、ここから動くことができないことだ。

「無理をするな。俺の到着まで待て！」

「しかし……」

隊長であるアスラン大佐は頼りがいのある人物であると言えた。実力もさることながら、高い志を持つ。従うに値する人物である。

だが、事態は逼迫している。

瓦礫の山から顔を出し、滑走路の方をうかがう。即座に攻撃され急いで身を隠さざるをえなかったが、一瞬ながら様子をうかがうことはできた。航空機はすでにエンジンを温めている。今すぐにでも飛び立っていくことだろう。いくらアスラン隊長のガンダムでも、敵の攻撃をかいくぐって、加速する航空機に追いつくことは難しい。

眼帯の奥が疼いた。

「それでは間に合いません！　強行します！」

「ヒルダ！」

（アスラン隊長、パラスアテネでの戦いは、悪いものではありませんでした）

フォース・シルエットの機動力を頼りに飛び出す。黒雲立ちこめる空に出た途端、攻撃は苛烈さを増した。ボーパールの街の高射砲に加え、ストライクダガーの攻撃が複数方向から迫ってくる。

ほんの一瞬でいい。ほんの一度でいい。あの悪魔を射程内に収める機会を与えてくれ。たとえ、この命を賭けたとしても。

しかし、現実は非情であった。思いだけでは及ばない。

高射砲がインパルスの片足を捉えた。フェイズシフト・アーマーの輝きが空を照らし、それを目印にしたようにビームが殺到する。ウイングがへし折れ、腕がライフルごともぎ取られる。破壊のエネ

ルギーの一部が光として放出され、光の塊となってヒルダは落ちていった。大地に叩きつけられ、止まらない勢いがインパルスの体で轍を刻む。

どこか産廃の上にでも落ちたのか、滑走路は見えない。モニターの半分が死んでいることも手伝って、何より、片方しか見えない癖にその目に血が入った。

「エインセル……、　ハンター……！」

赤く染まった視界の中でヒルダは手を伸ばす。そちらにエインセル・ハンターがいる確証なんてものはない。ただ奴に向かって手を伸ばすという意志こそが重要であった。

執念に憑かれ、血の気を失った亡者のような手が血に染まる視線の中を泳ぐ。

「貴様さえ、貴様さえいなければ……！」

舞い降りたストライクダガーのビーム・サーベルが、インパルスを刺し貫く。

もう、セレーネ・マクグリフも半分に減ってしまった。

セレーネ・マクグリフはヘルメットを脱いだ。裂けた額から流れる血がヘルメットの中で異様な臭いを放って嫌だった。

どんな魔法も解ける時はあっけない。どれほど狙撃がうまかろう

と、それはビーム・ライフル未満の攻撃を誰よりもうまく当てることができるというだけだ。ストライクダガーとて、ムーバブル・フレームも搭載されていない旧型に他ならない。

セレーネ・マクグリフの搭乗するストライクダガーはすでに４隻のピートリー級に甚大な被害を与えていたが、自身もまた左腕と頭部を失うほどの損害を被っていた。

幸いなのは空に飛行機雲を引いて飛び去る飛行機の姿が見えたこと。

「エインセルは、うまく逃げたようね……」

雨はまだまだ降りしきる。

悪いことは現在戦う相手。

命を失った機械たちの墓場の中で、セレーネは青い翼を持つガンダムと対峙していた。ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルン。庭師を意味するゲルテンリッターの３号機であり、花園の花を守る騎士である。ゼフィランサス・ズールが造った、正真正銘のガンダム。

（さて、どうしたものかしら……）

性能差は歴然としている。戦ってどうにかなる相手ではない。一矢報いてもいいかもしれないけれど、それではつまらない。魔法が解けてしまうから。

魔女は笑う。魔王様のことを思い浮かべれば、魔女はいつだって

笑うことができた。

「青き清浄なる世界のために。ねえ、私の愛する魔王様……」

ヤーデシュテルンが７０ｔを超える重さがあるとは思えないほど軽々と飛ぶ。全身をミノフスキー・クラフトの輝きで包み、泥の中で戦っていたとは思えないほど綺麗な姿をしていた。その美しさをじっくり堪能して、反応できなかったふりをして、セレーネはビーム・サーベルの輝きがコクピットに飛び込んでくるまで魔王のことを思い描いていた。

「セレーネ・マクグリフはどこだ!?」

４機目のセレーネ・マクグリフ機を撃墜した。頭部と左腕を失ったこの機体は、たやすく胴を斬り裂くことができた。他の機体と何が違うわけでもなく、これが魔女の機体だと判断するほどアスランは楽観的にはなれない。

全体ですでに２０機に手が届くほどのストライクダガーを撃墜したが、まだ１０機以上が残されている。魔女はすでに死んでいるかもしれないし、まだ生きているかもしれない。最初に撃墜された１機がそうであることも考えられれば、最後の最後まで倒すことができないことも考えられる。

生きていようと死んでいようと、魔女の魔術は残り続ける。

「アスラン。エインセル・ハンターはもうここにはいない。ボーパールは、ピートリー級をこれ以上失ってまで陥落させるべき拠点で

はない」

ピートリー級の防衛に当たっていたレイ・ザ・バレルからの通信だ。翠星石はモニターに無限機動を破壊され、集中攻撃を受けたピートリー級の姿を映していた。

（もし魔女が生きていればまた次のピートリー級が狙われる）

そして、死の確信を得ることができるのは、最後のストライクダガーを撃墜した時だろう。

苦いものでも噛んだようにアスランは顔をしかめた。勝利とは目的を果たすこと。ここに、目的とするエインセル・ハンターの姿はすでにない。

「翠星石、撤退するよう勧告を出せ。　これ以上の戦闘は、無意味だ」

サーベルとサーベルが、ビームの粒子をまき散らしながら激突する。それぞれモビル・スーツが振るうことができる限界の速度で武器をぶつけ合い、限界が訪れたのはサーベルの方だった。

ウィンダムのビーム・サーベルが根本で破断する。インパルスの対艦刀はその前に中腹で切断されていた。２機とも二刀流であるため、まだそれぞれ右手に武器を残している。

意識の加速。それはヒメノカリスにもできるらしい。先回りはできず、しかしシンは必死に食らいついた。

残された大剣を両手で構え、力任せに振り落とす。ウィンダムが構えていたビーム・サーベルを強引に巻き込みながら、対艦刀は地面に切っ先を激突させた。刀身が歪み、Ｉフィールド内に保持できなくなったビームが水を蒸発させ大気を膨らませ一際大きな爆発を起こす。

刀を振り下ろした無理な姿勢のままで耐えられる衝撃ではない。今日だけで3度目になる、背中から地面に叩きつけられる衝撃をシンは味わった。

軽い脳震盪でも起こしたのか気分が悪い。

インパルスはどうやら尻餅をつく形で座っているらしい。地面の起伏に背中のソード・シルエットが持ち上げられる形で上体が起きているのだ。そのため、モニターには前の光景が、ウィンダムの様子も映し出されている。インパルスと同じように上体を起こして座り、何故かコクピットが開いていた。

パイロットであるヒメノカリスの姿は、インパルスが見下ろす地面の上にあった。

「ヒメノカリス……」

行動にあまり意味は考えなかった。ハッチを開き、雨と土の強烈な臭いの中へと跳びだした。コクピット・ハッチの上から見えるのは、2体の巨人に踏み荒らされた泥の大地と、そこに立つ桃色の髪の少女。ケーブルを頼りに地面に降りようとして、そうする理由がないことに気づいて足は止まった。

シンの左頬の痣に降り懸かる雨は、ラクス議員と同じ綺麗な桃色の髪を濡らして、純白のドレスに水の染みを作る。早く雨の中から連れ出してあげたい。そんな衝動は、しかし決意には結びつかない。

「ここがどこか知ってる？　ここはユニオン・カーバイド社の工場があった場所。ここから噴き出した毒がボーパールの街を襲った。でも、あなたは毒にはなれない。毒にはさせない」

アッパー湖から北北東３ｋｍに位置するここだけが産業廃棄物に覆われていない理由がわかった。ボーパールの街はここから南東方向、アッパー湖の東側に建造されている。汚染された場所にわざわざ新造したのは何かの皮肉だろうか。

「もう一つ、あなたを殺す理由ができたから。あなたは、お父様を愚弄した」

表情のない人だと思っていた。感情を露わにしない人だと。今ここで、睨み上げられるまでは。

何も言い返すことができないシンをほったらかしたまま、ヒメノカリスは振り向いた。倒れるウィンダムの方へと歩いていくことをただ見送ることしかできない。

プラントの民は言う。エインセル・ハンターは悪魔だと。すべての戦争は奴が始めたのだと。持たざる者の妬みと悪意がエインセル・ハンターの手によって戦争という現実に作り替えられているのだと。

娘は語る。戦いに繰り出す父を、あくまでも真実の父親だと。

唯一わかっていることは、誰もが皆、エインセル・ハンターに強

烈な感情を抱いているということ。

インパルスの通信機からは、混線しているのか、ひっきりなしに通信が届く。敵の声も味方の言葉も、一向に衰えない雨音のなか聞こえてくる。雄叫びに断末魔、悲痛な言葉もそのすべてがエインセル・ハンターの名を呼んでいる。

「どいつもこいつも！　エインセル・ハンターの名前を叫んで死んでいく！」

この時代、誰もがエインセル・ハンターに憑かれていた。

雨は、一向にやむ気配を見せない。

もしも状態と位置を正確に知覚できる知性があったなら、それはあまねく未来のことを占います。次にどの方向にどれくらいの速度で動くのかわかるからです。今を知ることが明日を知ることになるのです。それは不可能です。少なくとも、人のその身では。

人は知りません。今の現実さえ。だから明日の理想も見えない。

真実とは何でしょう。たやすく歪んでしまうものでしょうか。今の現実のように。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「Ｈａｌａｔｉｏｎ」

ラプラスの魔。人は今日を知らず、だから明日に怯えてすごす。

第２０話「Ｈａｌａｔｉｏｎ」

ここは一体どこだっただろう。少々風景が変わりすぎてすぐに気づくことができなかった。それとも、血が抜けすぎていて意識がはっきりしないせいだろうか。

以前の光景が思い出せないくらい無茶苦茶で、椅子も壁もそのことごとくが破片となって壁に突き刺さり、床に転がっている。ユカに落ちているネジへと向けて、血溜まりがゆっくりと這って行く。届くかな、届かないかなと眺めていると、結局、血は届いてしまった。

全部、僕の血なのに。

変なことばかり考えるのは、きっと出血がひどいから。自嘲してみようか。そうエピメディウム・エコーは考えた。もっとも、体が痛くて声をあげて笑うなんてできなかった。

立っていることもできない。体を起こすこともできなくてトダカに支えてもらっていた。どれほど光景が変わってしまっても、のぞきこんでくるこの顔は忘れていない。もう初老なんて呼んでもいい年なのに、この頃かえって渋さが増したように思える。

（そんな今にも泣きそうな顔なんて似合わないよ、トダカ）

「気を確かに。深い傷ではありません」

自分も破片で顔を切って血を流しているというのに、トダカは人のことばかり気にしてる。本当に真面目一辺倒な男で、だから嘘を

つくことに慣れていない。

「嘘が下手だね、トダカ。出血量は十分すぎる……。それに、嫌なところに破片が入ったらしい。きっと……、僕を狙ったものだよ……」

床に寝ころび、上体をトダカに支えてもらっている。この状態から指一本動かすことも辛くてできない。体中が痛んでどこが痛いのかわからない癖に致命傷を受けたことだけはわかる。

「ラクス姉さんかな、それとも、サイサリス姉さんかな。どちらにしても、手抜かりはないだろうね……」

少し話しすぎたみたいだ。咳こんで、息に含まれる吐血が服を汚した。鮮やかな血で、呼吸器から出血しているらしい。どうりで息苦しいと思った。

乙女たちを少し脅かしすぎてしまったらしい。それとも、初めから目をつけられていたのだろうか。エピメディウムはオーブという国に肩入れしすぎていたから。

クライン家が１０００年をかけた夢のためなら、し過ぎるということはない。でも、その夢を実現させてはならない。１０００年がかりの復讐は成就されてはならない。

「トダカ……。カガリに伝えてほしい。すべてを、話している時間はないけど……、だからたった２つだけ……」

痛みをこらえてトダカの腕を掴む。白い軍服が血で汚れてしまって、悪いとは思うけど、気を使っているほどの時間は残されてない。

「ジョージ・グレン……、ＤＳ、ＳＤ。……それから、オーブをお願いするって……」

ヴァーリに生まれて、ダムゼルに選ばれた。そんな姉を逃がすために、妹は自ら命を絶った。ダムゼルに選ばれなかったから。価値がないと教え込まれていたから。だから、価値のある姉を助けようと自ら命を絶った。

死ぬ必要なんてなかったのに。価値がないなってことなかったのに。

天国は、クローンでも受け入れてもらえるんだろうか。もし入ることができるなら妹になんて言って謝ろう。せっかく助けてもらった命を無駄にしてしまったことを。

「フリー……ジア……」

口の端から血が雫となって零れ落ちた。

「これが、エピメディウム様の最期です」

カガリ・ユラ・アスハに与えられた執務室には、重苦しい雰囲気が流れていた。カガリが流しているのだ。カガリが座る机の前、腕を吊り、顔中を包帯と絆創膏まみれにした男、トダカ一佐が姿勢を最初から最後まで崩さないまま、話を終えた。

エピメディウムの側近だったこの男は、意識を取り戻すなり病院

を抜け出したそうだ。今頃医者が探している頃だろうと冗談みたいなことを本気で言っていた。

軍人らしく、簡潔かつ明瞭。非の打ち所のない報告である。ご苦労だった。そんな言葉をかけて、カガリはトダカの背中を見送った。気を利かせて、何か慰めの言葉の一つでもかけてやるべきだったのかもしれないが、今のカガリにはこれが限界であった。

部屋を出るトダカと入れ替わって入室したのはユウナ・ロマ・セイラン。神妙な面持ちで、カガリのことを気にかけている様子が伝わってくる。それが何か気に障ったことはなかった。それでも、カガリは自分というものを抑えられない感覚が突如として噴き出した。

「私が甘ちゃんだったということなんだな！　エピメディウムのことを待っていればいいと思ってた！　のんびり構えていればいいと油断していた！　プラントになんて行かせるべきじゃなかった！！」

近くに手頃なものがなくて机を叩きつけた。ドミナントとして優れた筋力はくだらないくらいいい音をたてた。机の上に置かれたプロジェクターが浮き上がって左右に震えるように動く。通常、ゲルテンリッターが姿を見せていない時はセンサーの類は働いていないはずだ。だが、今回ばかりは緊急事態と判断したのか、慌てた様子で金糸雀が光の柱の中に姿を現す。

何とも息苦しい。興奮のあまり呼気が整えられず、少しでも気分を落ち着かせようと肩で息をする。今日ほど椅子の背もたれをありがたいと考えたことはなかった。椅子に深くこしかけながら気を落ち着かせようとしているカガリのことを、金糸雀もユウナも不安げに見つめていた。

「カガリ……」

気を遣ってくれる許嫁に感謝できるほどの落ち着きはまだ取り戻せていない。

「ユウナ……。ＤＳＳＤとは何だ？　ファースト・コーディネーターとどんな繋がりがある？」

ひどくぶっきらぼうな口調であったことを自覚する。単に気分の問題だけではなくて、ファースト・コーディネーターのことを思い出したせいなのかもしれない。ジョージ・グレンは、選民思想が鼻につく男だと子どもながらに辟易したものだ。

そのことを知らないユウナは努めてカガリを落ち着かせようとしているようであった。

「ＤＳＳＤはＤｅｅｐ　Ｓｐａｃｅ　Ｓｕｒｖｅｙ　ａｎｄ　Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ　ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎの略称で、その名の通り、深宇宙の資源開発を目的とした公社のことだよ。多数の国と地域から支援を受けている国際団体としても機能してる」

「創業はＣ．Ｅ．１７年。元々はジョージ・グレンが木星圏探索のために設立した会社で、その後ＮＧＯとして活動を続けているからら」

ユウナと金糸雀。２人の言葉を聞く内に、そういえばそんな団体のことを聞いたことがあることを思い出す。もう何年も前の話だが、往復４年をかけて木星に希少元素を採集に向かう輸送船について聞いたことがあった。使われた艦はツォルコフスキー。あのジョージ・グレンが人類初の木星探査に用いた宇宙船であったことが今更なが

ら思い出される。

ファースト・コーディネーターとＤＳＳＤはあまりに容易に結びついた。

「プラントとの関係は？」

「ＤＳＳＤには各国が資金援助をしている。額は様々だけど、一番多いのは大西洋連邦。ただ、これは国家規模を考えれば不思議はない。問題は、金糸雀、お願いしていいかな？」

プロジェクターから金糸雀の姿が消え、代わりに棒グラフが表示される。３次元的な人の動きをたやすく投影して見せるプロジェクターはグラフ程度簡単に描き出すことができる。

グラフには、各国から毎年相当な額がＤＳＳＤに支出されていることがわかる。

「これが各国の支出資金。今度は国費との割合を示して」

棒が長さを変え、縦軸の単位が額からパーセンテージに変わると、各国は軒並み棒の長さを短くした。だが、中にはかえって長さを増した国が散見される。３カ国。どれも何かと馴染みのある国だ。

「そう、オーブ首長国とスカンジナビア王国、そしてプラントが抜きんでてるんだ」

プラントはともかく、他の２カ国は、ヴァーリが進入していた国だ。スカンジナビア王国は誰が行っているのか知らないが、オーブではＥのヴァーリが、エピメディウム・エコーがプラントのための

活動を続けていた。

エピメディウムはこのことを伝えようとしていたのだろう。

（だから殺されたのか？　ＤＳＳＤの秘密を守るために）

「ＤＳＳＤとは、一体何なんだ？」

ユウナは答えない。金糸雀がいつの間にか姿を取り戻している。2人とも、さすがにそこまでは知らないらしい。反対に、何故詳しいのかも疑問だ。

「妙に詳しいが、どうして知ってる？」

現オーブ国家元首の息子は笑って答えた。

「無視するには大きい額だからね。調べたくもなるさ。エピメディウムが関わってるならなおさらね」

「どうして話さなかった？」

気分はなんとか落ち着きを取り戻しつつあったが、機嫌はかえって悪くなった気がする。肘掛けを指で叩くと、いい音がする。どんな木材が使われているのかわからないが、穴をあけようかともくろむくらい力を込めてやる。

「本当に必要になったらエピメディウムが話すだろうと考えてたから」

「お前は許嫁よりもその姉妹を優先するのか？」

鋭い眼光を飛ばしてやる。今回はナイフは使わないでやろう。そんな甘さがいけなかったのかもしれない。ユウナは何とも曖昧な笑みにその顔を作り変えた。

「普段外じゃ親の決めた許嫁なだけだって吹聴してるって聞くけど、少しは認めてくれたのかい？」

やぶ蛇とはこのことだろう。とりあえず椅子を回した。背もたれに体を隠すことにした。顔はともかく、声だけならいくらでもごまかしがきく、はずだ。

「ユウナ、ＤＳＳＤについて詳しく調べろ。いいな」

安心したようとも、残念そうともとれる様子でユウナが息を吹く音が聞こえた。ともかくＤＳＳＤについて調べてはもらえるようだ。足音が聞こえて、ゆっくりとユウナの気配が遠ざかっていく。ドアノブに手が掛かった音がして、ようやく気を抜くことができる。

そう考えていただけにこれは完全に不意打ちだった。

「カガリ」

突然名前を呼ばれたのだ。

（慌てるな。何も慌てる必要はない）

胸に手を当てると妙に鼓動が早い。それを抑え込むように手に力を込めた。

「父さんはきっと世界安全保障機構への加入を進めようとする。もし君が望むなら引き留めてもいい。もちろん、流れを覆すことはできないとは思うけど、世論に訴えかけるなり、気持ちの整理をするなり時間を稼いであげることくらいはできるかもしれない」

「ね、根回しは嫌いだ」

ようやくユウナが部屋を出ていく。扉が閉められた音を確認して一息つくことができた。ただ、どんな顔色をしているのかまでは確信が持てないため、振り向けずにいる。机には、金糸雀がいるはずだ。とぼけたようでいて、その実ＺＺ－Ｘ２００ＤＡガンダムトロイメントに由来するゲルテンリッターを見くびるつもりにはなれない。

カガリの案じた通り、金糸雀は思いもやらない着眼点を持っていた。

「ねえ、かっちゃん。ＤＳＳＤのＯｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ、Ｏはどこにいったのかしら？」

「知るか！　それに、私をかっちゃんと呼ぶな！」

思わず振り向いて、赤くなった頬を見せてしまった。

「邪魔するぞ」

まずは男が１人、部屋に入るなりソファーに無遠慮に腰を落とした。その声ははっきりと通り、男の職業を連想させる。聞き違えが

許されない職業、あるいはその経験者。

「本当に邪魔だ。とっとと帰れ！」

続いて女が1人、立ち上がるなり出口を強く指さした。口調こそあらしいが、その澄んだ声から凄みは感じられない。

2人はまるで別々の世界にいるかのようである。女だけがただ喚き散らし、男は平然とジャケットの内ポケットからプロジェクターを取り出した。男は、イザーク・ジュールは気心しれた歓待を受けたようにくつろいだ様子でソファーにもたれかかっていた。女、デンドロビウム・デルタは怒ることに疲れたように椅子に座りなおした。肘を机につき、その手の上に置かれている顔は穏やかでない。エピメディウムとは正反対のオッド・アイがイザークを睨んでいた。

ごくありふれた応接間にそぐわない張りつめた空気の中で、プロジェクターが起動する。光の柱の中、少年を思わせる青い衣装を身につけた赤眼の少女が浮き上がる。白い髪のその上に乗せた帽子を摘むと、帽子をくるりと翻し恭しくイザークへとお辞儀をする。

「おはようございます、マスター」

その表情はかわいらしいより凛々しく、固く結ばれた口元、しっかりと閉じられた瞳は主の許しあるまで礼を尽くす決意が現れている。その姿にはイザークさえソファーに座りなおさせた。

「蒼星石」

「はい、マスター」

「デンドロビウムにも話をしておけ。俺たちはあいつを守らなければならないらしい」

蒼星石はイザークにしたのと同じように頭を下げる。この慇懃な態度はデンドロビウムもまた、座席に着かせた。不機嫌そうなことは変わらずとも、ただ声は控えめとなった。

「早く用を言って早く帰れ」

「俺が今軍学校の教官をしていることは知っているな。教え子から頼まれた。インパルスガンダムについて教えてくれ」

「そんなことなら国防……」

サイサリスの手が投げやりに振られている。国防委員会の方へ行け。この言葉は、蒼星石がぴしゃりと遮る。

「門前払いされました」

イザークが国防委員会の本部から蹴り出される様子でも想像していたのか、しばらく手を止めていた。

「お前の母さん元評議会議員だろ」

「引退しています。それに、議会はクライン派が牛耳っています」

動き出したのもつかの間、デンドロビウムは再び動きを止めた。再起動の立ち上がりは鈍い。

「サイサリスは……」

「自宅に押し掛けたら変質者として通報されました。警察をまくのはさすがのマスターでも骨でした」

インパルスガンダムの開発者をあたるのは、真っ先に思いつかなければならないほど当たり前のことだった。デンドロビウムは、変質者として追い回されるイザークを笑うべきか、それとも思いつきをことごとく実行に移す行動力を誉めるべきか悩んでいるようにも見えた。

「……で、私の方に来たって訳？」

蒼星石だけが頷く。

「残念だが、私はインパルスを運んだことはあっても詳しい訳じゃない。溺れる奴は藁をも掴むっていうが、結局藁は藁だ」

無駄足だったな。そう言いたげに口元を緩ませ、デンドロビウムはイザークへと手を振る。早く帰れ。こう言いたいのだとわからぬイザークではないが、それを敢えて無視するとともに目つきを細める。

「では、次の質問だ。エピメディウムが死んだな」

デンドロビウムもまた瞳孔を拡散させ、わかりやすく雰囲気を変えた。ただ蒼星石だけが落ち着いた表情を続ける中、部屋の空気は重みを増した。

イザークの淡々とした口調が響く。

「俺の記憶ではお前とエピメディウムは双子とも言える間柄で、関係も悪くなかった。エピメディウムの死はできすぎている。プラントがやったな」

椅子に座ったまま、デンドロビウムは何も語ろうとはしない。強く結ばれた口元で不機嫌さを強調しながら、椅子に深く腰掛ける。そんなDのヴァーリを、イザークの視線は片時も離すことはない。

「お前は何故動かない？」

「勝手な憶測でものを語るな！　あれは、……事故だ！」

「姉妹の死を事故だから仕方がないと納得できる女か、お前が！」

デンドロビウムの声をイザークの覇気がかきけして、部屋には再び沈黙が染み渡る。激情に駆られながら、しかし誰も立ち上がろうとはしなかった。ただ棘持つ眼差しだけが混じり合う。

「出ていけ……」

小さな少女の始まりは、やがて怒号として終わる。

「とっとと出ていけ！」

その手は肘掛けを強く掴み、不釣り合いな瞳は開かれることなく閉ざされた。

それからわずか数分後、イザークはその手にプロジェクターを抱えたままプラントの人工の空を見上げた。特に意味はない。特殊ガラスが張られた狭い空が見えただけだ。

視線を地上に戻せば大型のフォーク・リフトが前を横切り、積み上げられたコンテナが並んでいる。人よりも機械が存在感を示す倉庫街の光景が見えるばかりだ。

要するに、イザークは追い出されたのだ。すぐ後ろにはデンドロビウムが事務所を構える建物の扉がある。倉庫らしく、鉄製の小さなものだ。錆の浮いたこんなものが、イザークから一つの可能性を奪っていた。

「さて、どうしたものかな、蒼星石？」

言葉ほど悩んだ様子はない。いざとなれば国防本部に侵入してデータを盗み出せばいい。そんな冗談とも本気ともつかない考えを巡らせながら腕の中の蒼星石へと視線を落とす。

「僕はマスターが望まれることをするだけです」

ゼフィランサス・ズールと同じ顔をした男装の少女は努めて冷静である。双子の姉にあたる翠星石は口やかましいと聞いている。ずいぶん違うものだ。

そんな蒼星石の目がイザークとは別の方向、路地の向こう側を向いていた。ゲルテンリッターは映像ではなくプロジェクターに仕込まれたセンサーで視認しているため、視線と視界は必ずしも一致しないが、それでも視線と映像を合わせることを好んだ。

何かがあるということだ。イザークが確かめるため首を回すと、男が1人歩いていた。こちらに向かってくる。デンドロビウムに用があるのかと考えたが、軽く手を振ってきたところを見るとどうや

らイザークに用があるらしい。

「人形を連れたお兄さんは君のことだね」

見るからに怪しい男だ。目つきが鋭く、それでいて瞬きが極端に少ない。見ようと思えばつなぎにも見えるジャケットは倉庫街の雰囲気にとけ込んでおきながらそれでいて街中で見かける普段着としても通用しそうだ。合法非合法問わず、他人の秘密を盗み見る職業であるとうかがいしれる。

「そう警戒しなくてもいいよ。怪しい風体は自覚しているが、怪しい者じゃない。私はケナフ・ルキーニ。綺麗なお姉さんから言づてを頼まれていてね」

ケナフと名乗った男は何故か、蒼星石のことを眺めていた。

戦闘中でさえなければ戦艦も一般の船舶と変わりない。静かで、廊下を通る人は疎らだ。

シン・アスカは壁に背中を預けて立っていた。時折体を動かしては左胸につけられた勲章が服に引っかかって気に障る。鉄十字勲章。ザフトで功績をあげたものに授与されるこの勲章には、どうしても愛着を持てないでいる。

勲章が嫌で体を動かさないでいると、やはり気になるのは壁の脇にある扉だ。特に珍しいものでもないスライド式の扉はレイ・ザ・バレル隊長の個室だ。今はいないらしく、待っていなければならなかった。

いくら疎らでも人がいないわけではない。シンの前を通り過ぎていったちょうど5人目がレイ隊長だった。シンに気づいていないはずはないが、気にした様子もなく扉脇のリーダーにキー・カードを通した。開く扉をくぐり抜けようとする隊長へ、シンはこの機会を逃すまいと体を壁から離した。

「あの、レイ隊長！　聞いてもらいたいことがあるんですけど……」

「餌をやった犬に懐かれた気分だな」

レイ隊長がわずかに口を開き、笑ったような顔を作る。初対面の時のことが思い出される。あの時も言っていることは正しかったが言い方はどこか意地が悪かった。

「そ、そりゃ、相談に乗ってくれるかもって期待していますけど、そんな言い方……」

「話してみろ。場合によってはまた餌を放ってやれるかもしれない」

不満を表現するシンに対してさえ、レイ隊長は今度は含み笑いのような表情を向けてきた。そのまま部屋に入っていくのだが、扉の縁に手をかけてしばらく閉まらないようにしてくれているところを見ると、部屋に入れてくれるということらしい。

フェイズの部屋は、別に特別なことはなかった。シンの部屋よりわずかに広いが、レイアウトは同じ。ベッドに机。最低限のものしかないのなら、体を伸ばすことができる広さがあればそれで十分なのかもしれない。

机から、この部屋唯一の椅子が引き出されて、レイ隊長はその椅子をシンに譲った。自分は机に直接腰掛け、シンは入り口の近くで椅子に座る。

視線で促されて、シンは話を始めた。

「実は、知り合いが何か悪いことしてるみたいで、説得、みたいなことしてみたんです。そしたら、あなたに何がわかるのかって怒鳴られました。そんな親しい間柄じゃないんですけど、なんだか放っておけなくて」

「それはお前の態度に問題がある」

いきなり、全否定された。

「いや、でも……！」

「お前は言ったな、親しい間柄ではないと。では、それが悪いことだと何故わかる？　結局、自分の勝手な思いこみで悪いと決めつけただけではないか？」

返す言葉がなかった。真っ直ぐな隊長の視線から目をそらしては駄目だとわかりながらつい視線が泳ぐ。わずかだが視線から逃げた。そこに追い打ちをかけるようにレイ隊長の言葉は続く。

「そのことは自分で調べたのか？　それとも誰かに聞いたのか？」

ラクス・クライン議員に聞いた。決してすべてを信じた訳ではなかったが、いざヒメノカリスと対面した時、シンは自分の体験と重ねすぎていたのかもしれない。足りない情報を、勝手な憶測で補っ

たのだ。

（これじゃルナマリアと同じだ……）

与えられた情報や考え方を自分のものであったかのように思いこんでいた。

盗み見るように見たレイ隊長の顔は、普段通り落ち着いていて、少なくともシンを評価しているようには見えない。

「要するに、言われたことを鵜呑みにして俺が正しいと押しつけた結果怒られた、そういうことではないのか？」

声の一部に妙な抑揚がついたのは、ため息をつかれたからだろうか。

「調べることも大切とは思いますけど、それじゃあ、遅すぎることだって……」

「物事には段階と順序というものがある。階段が１０m先だからと壁をよじ登りたいなら別だが」

ヒメノカリスに少しでも早く気づいてもらいたかった。そのこともレイ隊長に言わせれば焦りすぎということらしい。決して叱られているという訳でもないのに妙に喉が乾く。隊長の言葉を聞かされる度に自分の浅い考えに気づかされるからだろうか。

狭い部屋の中をシンの視線だけが泳いでいる。

「自分の目で見て自分の頭で考えることだ。誰かの考え方を自分の

考えと思いこみ、得意気になることは愚かなことではないか」

そんなことわかっていたつもりなのにできなかった。主観が邪魔をして、自分にとってわかりやすい現実と都合のいい事情をいつの間にか作り上げていた。それこそ、プラントが地球やアブディエルに対して行ってきたこと、シンが最も嫌っていたことだった。

地球の奴らがプラントを攻めるのは持たざる者の嫉妬であって、それをブルー・コスモスに簡単に誘導されている。そんな馬鹿な奴らに媚びてきたのがアブディエルなのだと。

実際、地球になんて行ったこともない奴が声高にそう叫ぶ。

そしてシンもまた、プラントの民なんてそんな奴ばかりだと考えていた。

机に座る隊長は不思議だった。初めて会った時、まるで感情を見せない機械のような人に思えた。シンに不必要に注目することなんてなかったからだ。それが侮蔑ではなくて感情的になるシンとの衝突をさける為の行動であったのではないかと思い始めたのは、つい最近のことだ。

隊長は本当に変わっている。シンは口元が緩むことを感じた。こんな考えを巡らせている間も、隊長は何も言わずに待っていてくれた。

「隊長って、何だか変わってますね。プラントの正規兵なんてみんな横柄な奴らばかりなのに……」

「横柄な奴ら？」

「あ、いや、横柄な態度をとる人が多くて。それで、隊長は、何か違うなって」

手振りまで使って慌てて取り繕う必要があった。

（まるで学校の先生みたいだ……）

ザフトの正規兵が横柄であった事実は事実として認めてよいが、それを頭ごなしに否定してはならない。人を否定するということは、自分を肯定することに他ならないからだ。

レイ隊長がかすかに笑ったように思えたのは気のせいだろうか。

「俺も元々プラントに住んでいた訳ではない。生まれはプラントだが、ほんの2年前まではユーラシア連邦のツングースカに住んでいた。俺も実際のところはアブディエルだ」

アブディエルがどうしてフェイスをしているのだろう。聞いても話してはもらえない気がして、聞かないことにした。

「詳しい事情は話せないが、俺とお前はあらゆるところでよく似ている。同類のよしみとして、一つ教えておこう。グラディス艦長には手の内をさらすな」

「どうしてですか？」

これはつい聞いてしまった。レイ隊長は、やはり少し笑っているように見えた。

「詳しい事情は話せないと言っただろう」

やはり、隊長はどこか底意地が悪い。

「ヒメノカリスのことはもう一度考え直してみろ。人は情報を必ず外から与えられる。しかし鵜呑みにはせず、咀嚼、そして吟味することだ」

「そうか、じゃあ、はじめからシンがソード・シルエットの使用を許可されていた訳じゃないんだな?」

アスラン・ザラは展望室から海を眺めていた。窓際に立ったまま、すぐ隣にはルナマリア・ホークが並んでくれている。しかし、ここはミネルヴァではない。同型艦であるラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネの艦内だ。

ルナマリアには作戦を共同する部隊としてパラスアテネに着艦してもらっていた。翠星石は連れていない。その理由は、ルナマリアが隣にいることと重なっている。

そのルナマリアは、口元に手をやって少し考えたように見せてから答えた。

「はい。入ったばかりの頃は連携ができないからって、フォース・シルエットを使わされました。でも、どうして?」

「いや、ソード・シルエットを使うパイロットは珍しいから。要するにミネルヴァに正式に加わることが決まった頃にソードの使用が

許された、そういうことかな？」

「はい」

今度考えるのはアスランの番だった。

窓の外、アデン湾の海とアフリカ共同体領ソマリア地区の岸辺が見えていた。パラスアテネは紅海を北上し、スエズ運河に入ろうとしている。地上最大の激戦区とも言われる地中海を目指す中、アスランはラクスに言われたシン・アスカの監視を続けていた。

（赤服が優先的に選ばれるインパルスのパイロットの中でもソード・シルエットを選択する者は多くない。それもまだ経験の浅いシンが）

ケッテ・リーダーはそんなに多くは必要ない上、扱いが大変難しいからだ。鉄十字勲章を与えられるほど優れた功績をあげたのもまぐれではないだろう。

本国から正式にミネルヴァに加わることが許可された時からシンは比較的自由な行動が許されるようになったと言える。そして、そのおかげでシンは功績を上げ、その戦果はプラント本国で報道されたほどなのだと言う。

「デュランダル議長の差し金か……」

アブディエルと潜在ナチュラルの不満は鬱積していると聞く。その不満を抑えるための広告塔として利用していると考えるのは単純すぎるだろうか。

（何にせよ、ラクスの興味は正しかったということかな）

「……さん」

「……ああ、何だい、ルナマリア？」

少々考えごとがすぎた。話しかけられていることにも気づけなかった。慌てて首を回すと、飛び込んでくるのは不安げに見えるルナマリアの顔だ。

「ヒルダさんのこと、残念でしたね」

ボーパールで戦死した部下のことが思い出される。アスランの制止も聞かずエインセル・ハンターを討とうとして、ヒルダは死んだ。あまりに呆気なく。

「彼女も覚悟はしていただろう。最後まで訳は話してもらえなかったが、エインセル・ハンターを倒そうと人一倍熱意を傾けていた」

プラントでは珍しいことではないが、だからこそ、わざわざ語る必要をヒルダは覚えなかったのかもしれない。

「私、まだヒルダさんのこと、よく知り知りませんでした」

それは仕方がないと、アスランはルナマリアの肩に手を置いた。

ヒルダ、ヘルベルト、マーズ・シメオンの3人とはカーペンタリア基地で合流したばかり。共同作戦を遂行中とは言え母艦は異なっている。満足に顔を合わせることもできなかったことだろう。

「それが戦争だ、ルナマリア。喧嘩をして後悔して、次は仲直りを

しよう。次は一緒にどこかに行こう。それでも、その約束が果たされるまで2人が生きている保証なんてどこにもない」

準備が整ってから死ぬ。そんな日常でさえ難しいことが戦場で果たされるとしたら奇跡と言ってもいいだろう。

「少しでも早く戦争を終わらせよう、ルナマリア」

ここはアデン湾。地球の海は素直に美しいと思える。西岸は海賊たちが船を襲うために出帆し、東岸を北上すれば１００年にわたった宗教紛争の地、パレスチナに入る。地中海は、その覇権を争いいくつもの国々が剣戟打ち鳴らした。

座れれば何でもいい。そう考えてアウル・ニーダが選んだのは何が入っているのかもわからない小さな箱だった。人が抱えるくらいの大きさは座るにはちょうどいい。汗を拭う。呼吸を整えながら見上げると、愛機ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダムがたたずんでいる。

箱は他にいくつも並んでいて、その上に光の柱が立ち登る。赤いドレスの真紅が突然声をかけてきた。

「ずいぶんお疲れね、アウル」

見上げたままでまったく気づかなかった。本当は少しびっくりしたが、叫びそうになったのを無理矢理呑み込んだ。真紅は本当に神出鬼没で、ついさっきまでプロジェクターなんてなかったはずだ。

（何なんだよ、この呪い人形は……？）

真紅は相変わらず無意味に紅茶を飲んでいる。

「あのさ、ハウンズ・オブ・ティンダロスって……。あんなことできる奴いるのか？」

「少しは理解できたかしら？　エインセル・ハンターがどれほど鍾愛と怨嗟を受けているのか。魔王と呼ばれているのかが」

「正直、だせえあだ名って思ってたけどな」

ガキ向けのファンタジーじゃないんだ。いい歳して魔王なんて呼ばれているエインセルを見くびっていなかった訳ではないような気がする。ヒメノカリス・ホテルが自分よりもエインセルに近いことの嫉妬もあったんだろ。

こんなこと、真紅に話したら子どもだと笑われるに決まってる。だから正直むすっとしたまま黙っておくことにした。

真紅がカップを左手に持った皿に置く音がした。そんなことまでプロジェクターは再現しようとしている。

（ゲルテンリッターって、ほんと何なんだろうな？）

人より人らしいことがあって、本当にこんな小人がいるような、人形が動いているように思える時だってある。つい気になって真紅の方を見ようとすると、真紅よりも先に黒い軍服を着た男と女が近くにいることに気づいた。格納庫は何かと雑音が多い。そのせいで側にくるまで気づけなかったし、男は声を大きくして話しかけてき

た。

「ちょっといいかい？」

「おっさん誰だよ？」

見たことがあるような気はする。でも、特徴らしい特徴がなくて、切りそろえられた前髪がどうもいけてない。女の方も見覚えがある。たしかミューディー・ホルクロフトとか言ったろうか。

答えてきたのはミューディーの方だ。

「アーノルド・ノイマン大尉よ。この隊の副隊長なんだから覚えときなさい」

そう言ってミューディーもまた箱の上に座った。アウルとは真紅を挟んだ場所だ。まあ、アーノルドのおっさんは立ったままだけど。

「で？」

「アウル」

真紅が声に怒りを混ぜ込んでいた。態度が悪いと叱られている。言うことをそのまま聞くのはしゃくだから、言葉遣いを変えても態度は変えないでやった。

「用は、何でしょう？」

真紅だけがため息をつく。副隊長殿は特に気にした様子はない。

「次の作戦について決めておきたい。君も知っての通り、この艦はジブラルタル基地を目指している」

「わざわざアフリカ大陸大回りしてだろ。何で運河使わねえんだ？」

喜望峰なんて大回りの航路使ってる。こうして馬鹿してる間に、ヒメノカリス姉ちゃんとステラはあのエインセルに連れられて赤道同盟のボーパールに遊びに行った。アウルだけが留守番だ。

「スエズ運河のこと？」

ミューディーが箱に寄りかかった状態の座り方をしてた。

「ならもっと世界情勢を勉強しなさい。スエズ運河は現在ザフトが実効支配してる。一応汎ムスリム同盟の所有で、表向きは船舶の行き来は規制されてないけど。ま、商船はともかく、軍艦であそこを通ろうなんて奴はいないけどね」

「加えて、アフリカ大陸北部のアフリカ共同体は親プラント派の多い国よ。今地中海を横断しようとすることは、わざわざ戦場のただ中に飛び込むようなものね」

「アフリカ大陸は歴史が複雑だからね。それに、汎ムスリム同盟も今プラントとことを構えたくないとするのが本音だろう。スエズ運河の交通料は重要な収入源だ。戦闘で破壊されるわけにはいかないだろうから」

ミューディー、真紅、アーノルドの順番に話が続いていく。

「大洋州連合は汎ムスリム同盟を非難もしているわ。カーペンタリ

ア基地を出立したボズゴロフ級がスエズ運河を通ることでアフリカ共同体に物資を効率よく送ることもできれば、ジブラルタル基地に派兵することも容易になるものだわ」

「ユーフラテス川とライン川の争いはオスマン帝国の時代から続けられたきたことだから。一朝一夕に解決することではないのかもしれないね」

「でも、ここで少しはザフトに痛い目みてもらわないと大洋州連合の機構脱退もありうる話でしょ、副隊長。内部にも外部にも不満が向けられてるって言うし」

「そうだね。大洋州では東アジア共和国への不満も根強い。いつまでカーペンタリアを野放しにしてるんだってね」

「結局、それぞれの国の利害が対立して、世界安全保障機構も一枚岩になり切れていないのが現状なのだわ」

「ザフトにとってもマスドライバー奪取の至上命題だ。アフリカ共同体、汎ムスリム同盟の協力が得られる内に地中海で足場を固めたいというのが本音だと思うよ」

「さっきから意味わかんねえよ！　何話してんのか、わかるように話せよな！」

アウルは思わず叫んだ。3人が3人とも訳の分からない話を目の前で続けられて、アウルの我慢は限界を迎えた。

真紅とミューディーはなんだか呆れたような顔してアウルを見ている。アーノルドも仕方ないな、そんな表情でアウルを見下ろして

いた。

「じゃあ、作戦内容とセットで話そうか。真紅、君は地図も投影できるそうだけど、お願いできるかい？」

おもしろくないと足を組んで座るアウルの前で真紅の姿が世界地図、アフリカ大陸から地中海にかけてのものに変わった。

「この地方のだいたいの勢力図はわかるかな？」

「ああ……」

アフリカ大陸は2色に色分けされていて、南側は南アフリカ統一機構。北側がアフリカ共同体だ。南アフリカ統一機構が青く塗られていて、北は赤。きっと赤は敵だ。その色がアフリカ大陸から右に行って、ユーラシア大陸の西のはじっこまで染めている。確かここには汎ムスリム同盟がある。どっちもプラントよりの行動が多いって聞かされてる。

アーノルドはまず浅くうなずいてから話を始めた。

「現在、大西洋連邦軍、南アメリカ合衆国軍が大洋州連合軍と協力する形でアフリカ共同体のエル・アラメイン攻略に動いている。ここは軍事拠点として重要であるばかりでなくて、スエズ運河にも近い」

地図の上に矢印が描かれて、大洋州連合から地中海をわたって南のアフリカ共同体に延びていく。たしか、エジプト地区だとか言う場所だ。その北側にエル・アラメインと表記があるが、どんな街なのかも知らない。

「仮に攻略に成功したなら、楔を打ち込む形でザフト軍をアフリカ大陸の東西に分断できる上、橋頭堡としても機能することになる」

「さらに言うなら汎ムスリム同盟、アフリカ共同体への強烈な恫喝としても機能するわ。目と鼻の先に剣をぶら下げられていい思いはしないでしょうし」

要するにザフトに味方する奴らの目の前でザフトをこてんぱんにのしてやればいいってことだ、多分。

でも、ミューディーの奴はきっと信じてない。目を細めて、なんだか面倒くさそうにも見える顔してアウルのことを見てる。

「アウル、わかってる？」

「あ、当たり前だろ。で、それと俺がどう関係するんだ？」

今度はアフリカの西の海に点が表示されて、そこから地中海の入り口にまで線が伸びてく。

「僕たちはジブラルタル基地に入った後、攻略作戦に合流する。それに君は加わるかどうかを聞いておきたい。ネオ隊長とも話したけれど、君は確かに軍人だが、その前にエクステンデッドで、そして子どもだ。拒否権は特例として……」

「行くに決まってんだろ！　こっちは戦いたくてうずうずしてんだ」

それなのにヒメノカリス姉ちゃんは戦わせてくれなかった。見上げれば、すぐそこに修理されて新品同然のインテンセティガンダム

汎用型がある。そういえば、パーツを持ってきてくれてのが、このアーノルドとか言うおっさんだったような気がする。それを教えてくれたのが、たしかミューディーだ。

副隊長を立たせて自分は座ってる。そんないい身分の女はどっかいい加減な顔をしてる。

「アウルだっけ？　あんた何でそんなに戦いたいの？」

スティング・オークレーのことを思い出している間、少しだけ返事が遅れた。

「ダチがへましたんだよ。その尻拭いくらいしてやらないとな」

「要するに復讐ってこと」

つまらない。そんなことでも言いたそうにミューディーはアウルのことを見なくなった。真紅は元の姿を取り戻し、アーノルドは特に何も言うことなくここを離れようとしていた。

「あんたは何なんだよ？」

「馬鹿げたこと聞くのね。今の戦場には2種類の人間しかいないわ。私もその1人。でも、きっとあんたは違う。戦場になんてでなくてもいいんじゃない？　危ないだけでしょ」

言いたいことを言うだけ言ってミューディーは立ち上がる。別にとめようなんて思わなかった。何と言われようと、アウルの決意は変わらない。地図から少女に姿を戻した真紅は、そんなアウルをみつめたまま、何も言おうとはしなかった。

「解析の結果、小惑星フィンブルは火星と木星の間のアステロイド・ベルト由来だとわかりました。よって、プラントに取材に行きましょう」

事務所所長の机に座り、優雅なアフタヌーン・ティー――インスタントで、まとめ売りされているような安物だ、残念ながら――を飲んでいるジェス・リブルめがけて突き出されたのは1枚の書類と、突飛な提案であった。

企画主はアイリス・インディア。書類の横には桃色の髪を束ねた青い瞳の少女の顔がある。アイルスの顔を見る度、誰かに似ているような気がするのだが、今はそのことよりもすべきことがあった。

所長として毅然とした態度をとることである。

「確かにプラントは外宇宙の探索に熱心で、情報は得られると思うけど……。いや、駄目だ。事務所所長としてそんなこと認められない」

職員は4人。その内3人が女性という男にとって肩身の狭い現場である。いつも主導権を握られっぱなしで、所長としての威厳を取り戻さなければと常々考えていたところだ。

少々乱暴にティー・カップを置く。強く茶器の鳴る音が、しかしより一層かしましい事務所内でむなしく響いて消えた。

「ナタルさん、こういう時、留守電でいいのかな?」

大きなキャリーバッグを担いで事務所を横断するフレイ・アルスター。書類の束を抱えたナタル・バジルールとすれ違う。

「主だった連絡先に長期取材旅行に出るとすでに連絡してある」

「ならいっか。でもプラントって久しぶり」

明らかに、もう荷造り始めてますと主張していた。フレイは自分の机の上から小物を手に取り物色している。どのお気に入りを鞄に仕込ませようか悩んでいるのだろう。

「まさかまた戻ることになるとは思っていなかった。アイリス、君の荷造りが遅れている。そろそろ手をつけるべきだ」

そうしている内にナタルが隣の部屋に消えていく。しっかりした経理はガスの元栓でも確認に行ってくれたのだろう。

「は～い」

済んだ声で返事を済ませたアイリスが去っていく。戦う資格さえ与えられなかったジェスを残して。

「俺、所長なんだよな……」

やり場なく漂う視線は机に落ちた。そこにはナタルが総括し、フレイの運転で、アイリスに写真を撮ってもらったものをジェスがまとめた記事がモーニング・サン誌の片隅を飾っていた。そのさらに片隅に書かれた、執筆者ジェス・リブルの名前が空しい。

ある偉大な王は剣こそが至上と語り、ある偉大な魔法使いは鞘こそが有用であると諭しました。すべてを断つ剣とすべての災いを遠ざける鞘。どちらかを選ぶとしたらあなたはどちらを選びますか。すべてを切り裂く黄金の剣ですか。すべてを守る青い薔薇の鞘ですか。

剣を選ぶなら、あなたは王国を失うほどの災いに晒されるかもしれません。

鞘を望むならあなたの最期は裏切られ、非業のものかもしれません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「刀と鞘」

フォイエリヒ。それとも両方欲しいですか。

第２１話「刀と鞘」

ゼフィランサス・ナンバーズ。鬼才ゼフィランサス・ズールがブルー・コスモス代表の願いを受けて開発した地球製モビル・スーツの始まりにして究極、始祖にして、未だにこれを超えるものは存在していない機体。

超える機体は存在できない。

人が乗り込むことができない機体に意味はない。人が扱うことができない兵器に意味はない。

すべての兵器は人と言う足枷に縛られている。

仮に、人が扱いうることを前提としない機体があったとしたなら、人を超えることが予定される機体があったとしたなら。それはすでに兵器ではなく芸術。実用性など一切加味されることのない夢幻の存在に他ならない。

ある人は言った。あれは夢。ゼフィランサス・ズールが眺め続けた黒い夢なのだと。

魔王は降り立つ。軍馬に跨り、同族殺しと銘打たれた忌み刃をその手に。馬の名は悪夢であり、その姿は太陽に刃向かう炎。真名をその殺戮の決意で覆い隠した魔王の名は、エインセル・ハンター。

黄金は輝きを取り戻した。

展開されたコクピット・ハッチに手をかけながら、ソル・リューネ・ランジェは外を眺めた。鏡ほども磨き上げられたＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムの装甲は目映い光を放っている。その眩しいほどの光から目を守るように、ソルはコクピットの中へ視線を移す。

「突貫でしたが、質は一切落としていません」

全天周囲モニターの球形コクピットの中に座るお人形、ヒメノカリス・ホテルはコンソールを叩く手を止めて、かすかに口元の力を緩めた。

「いい。これならお父様に上げられる」

合格のようだ。ソルは自分よりも１０は年下の娘の様子に安堵の気持ちを覚えた。純白のドレスに桃色の波立つ髪、表情に乏しい顔はたとえようのないほど人形のようで、何より子どもである。

（こんな子どもまで、エインセル代表のために命を投げ出した）

この娘が戦場に出ている間に、父であるエインセル代表はこのボーパールを脱出した。娘――この娘の父にしては代表は若すぎるため、養女なのだろう――を１人残して。

それなのに、ヒメノカリスはそんな状況を嬉々として受け入れている。

話し出すきっかけを得られないまま、口だけ開けてしまい、喉の乾きを覚える前にようやく言葉が口を出てくれた。

「エインセル代表は、一体どんな人なのでしょう？　セレーネさんはあの人を逃がすために死にました。僕には、それが理解できません」

返事はない。機嫌を損ね、無視を決め込まれてしまったのだろうか。そう考えた矢先、突然青い双眸がソルを捉えるために動く。

「あなたは身勝手」

声に冷たい印象を覚えるのはこの少女の癖だろうか。何にせよ、好意的ではないようだ。

「お父様とあなたは違う。あなたは周りの中心にいようとしている。でもお父様は中心にいることを周りから望まれている」

何を言われているのかわからない。考え、何か言わなければと口を開いたタイミングで、ヒメノカリスは言葉を続けた。

「ボーパール侵攻で、ザフト軍はモビル・スーツ１３機、ピートリー級を４隻失った。この街に戦略上の価値はほとんどないのに」

「確かに全体で見ればそうかもしれません。しかし……」

「お父様は１人でも多く救おうとしている訳じゃない。誰もが不幸にならない世界のために戦ってる」

その言葉は矛盾してはいないのだろうか。誰もが不幸にはならない世界が人に死の犠牲を求める。そして何より、誰もが幸せになれる世界ではないということが、妙に気に障る。

訪ねても答えてはもらえないだろう。そんなことばかりは理解できるようになっている。

「じゃあ、これはすぐにでももらっていくから」

ソルを見た時と同じように視線だけが動いて、コンソールを見つめ直す。ヒメノカリスはソルと話をしている間、コクピットから立ち上がろうとさえしなかった。

ため息をつく気にもなれない。

「まだ調整がすんでません。後3日ください。このままでは敏感すぎる」

「そんな時間ない。すぐにもらっていく」

拒否されることも、何となく察しがついていた。エインセル・ハンターという男に容易に近づけるはずがないと、どこか諦観としてわかっていたのかもしれない。

胸ポケットから取り出した記憶媒体をそっと差し出した。

「お約束通り、データは一切漏らしていません。これが最後のデータです」

ヒメノカリスが受け取ってくれたことに、白状するなら安堵を覚えた。何も受け取りを拒否されると考えていたわけではない。ただ、個人で抱えるにしては、この機密は重すぎる。

フォイエリヒは、世界と繋がっているにも等しいのだから。

「フォイエリヒは、何から何まで想像を超えたものでした。決戦兵器というものがもしも実在するならば、それはこの黄金の巨像のことを言うのでしょうね」

「アウル！　お姉ちゃんが！　お姉ちゃんが……！」

スペングラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦の格納庫にて出撃を今か今かと待ちわびていたアウル・ニーダは、突然ステラ・ルーシェに抱きつかれた。明らかな涙声で、抱きつかれた照れくささよりも異常なことが起きていることの驚きの方が大きい。

アウルはステラを引き離してそのカオを見ようとするが、ステラは泣くばかりでなかなか離れてくれる気配がない。

「どうしたんだよ？　泣いてちゃわかんねえだろ！」

ただごとでないことくらい、アウルでも察している。ステラもそうだが、格納庫がいきなり慌ただしさを増した。まだ出撃までは時間があるはずだ。

いつも余裕こいてるネオ・ロアノークも黒いノーマル・スーツに着替え格納庫に駆け込んできた。その癖サングラスは外していない。真紅のプロジェクターがその手にはあった。

「アウル、ボーパールからの輸送機が戦場に迷い込んだそうよ。ヒメノカリス伯母様とフォイエリヒが乗っているわ」

「何でそんなとこにいんだよ!?」

作戦会議をこんな場所で終わらせてしまうつもりなのか、ファントム・ペインの面々がアウルの周りに集まっていた。

「汎ムスリム同盟が領空侵犯の一部制限を行った。そのため黒海上空を抜けたようだ。制限そのものは珍しいことではないけれど、今回は運が悪かった。ザフトの部隊に発見されたらしい」

ネオが今回の騒動について話すと、アウルはつい声を大きくした。

「罠でもはられてたのかよ!?」

「いや、ザフトとしても偶然の遭遇のようで部隊規模は小さい。問題は、飛行ルートだ。君も知っての通り、黒海では両勢力の基地が入り乱れているから」

アーノルド・ノイマン副隊長殿の言葉に、アウルはつい、知らねえよ、んなこと、と心の中で考えた。黒海が地中海の東側の海で、今回戦闘が予測されていたダーダネルス海峡の北側にあると聞かされたくらいだ。現地の事情なんて知るわけがない。

そんなアウルをほったらかしにして、ネオが話を進めていく。

「そのため、ヒメノカリスが採用するルートは恐らくダーダネルス海峡を渡るルートだろう。地中海に出られれば、敵をまける可能性も高くなる」

（1人くらい、よくわかってねえ奴混ざってんだろ……）

どいうつもこいつも事情は完璧に把握してますなんて顔してる。

「アーノルド、ミューディーはアウルと先行して欲しい。僕たちはザフトの動きを警戒しながら後に続く」

了解。敬礼をした2人が自分たちの機体、ＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムへと走っていく。すぐに続きたいところだが、アウルはゆっくりと自分の胸を見た。ステラはまだ泣いていた。

誰かが肩に手を置いてきたかと思いきや、よりにもよってシャムス・コーザの奴――他にこんなことしそうな奴なんていない――だった。

「これは人生の先輩からのアドバイスだ。女を泣かす男はろくな死に方しねえぞ」

言ってることはふざけてるのに顔は大真面目だからたちが悪い。追いかけてやろうにもステラが離れてくれない。どうしたらいいかなんてわからないが、とりあえず、両肩に手を置いて、なだめてみる。

「姉ちゃんは、絶対に連れて帰ってくる。だから早く泣きやめ、ステラ」

絶対に、スティングの時のように勝手にいなくなったりなんてしないから。

「輸送機か。時期と機会は一致しているが、フォイエリヒが搭載されている根拠はないな」

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンのモニターに映し出される地図には輸送機の飛行予想ルートが描かれている。このままいけば両軍が睨み合うただ中を通り抜けることになる。

これが重要な機密を積載している保証はない。だが、フォイエリヒが運び込まれた時期と経路は一致している。確信は持てずとも、可能性として捨て去るにしては惜しい。

悩むアスラン・ザラの目の前を緑の妖精が通り過ぎる。赤い瞳の妖精はモニター上に敵軍の位置を書き込んだ。

「アスラン、地球軍は明らかに動きを見せてるです」

総攻撃に打ってでたにしては部隊全体の動きは鈍い。だが、単に輸送機の回収に出向くにしては動きが早い。

「確かに敵が動いている以上、こちらも打ってでないわけにはいかないな。翠星石、司令部に連絡しておいてくれ。今動ける部隊を斥候として出撃させる。仮にフォイエリヒならばエインセル・ハンターもいるはずだ」

Ｃ．Ｅ．７５年を迎えた現在、モビル・スーツ戦術において大きく変わったのはその大半が飛行能力を獲得したことにある。ミノフスキー・クラフトの恩恵により、スペックを落とすことなく、量産機でさえ軽々と空を飛ぶ。

これにより、戦術は大きな変更を余儀なくされた。戦車や戦闘機など通常兵器と呼ばれる旧来の兵器群ではモビル・スーツに対抗できず、反対にモビル・スーツで通常兵器を相手取ることはオーバー・スペックにもほどがある。結果、通常兵器は通常兵器の相手に専念し、モビル・スーツの相手はモビル・スーツが務めている。

輸送機の援護に出向いたはずのロアノーク隊が遭遇したのは、当然のようにモビル・スーツ部隊であった。

「隊長！　スウェン！　敵さんのお出ましだ」

シャムスの言葉を待つこともなく、ＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンのモニターにはヅダとＺＧＭＦ－９５３ゼーゴックの混成部隊が映し出されていた。

ゼーゴックは足をエビぞりに折り曲げ、簡易変形形態のまま。ヅダにしても機動力を優先したブレイズ・ウィザードを装備している。斥候か、それとも輸送機を狙っているのか、どちらにせよ、すべきことは決まっている。

「各機、ゼーゴックを優先的に狙ってくれ。足の速い敵は厄介だ」

「了解！」

スウェン・カル・バヤン。シャムス・コーザの了承の声を聞きながら、ネオは機体を加速させた。

敵の密度は薄い。速度に優れるゼーゴックが先行し、ヅダが目に見えて遅れている。ほんの少し脅しつける。そんな気持ちでネオは

猟犬を呼び起こす。

放たれるビームに意味はない。ハウンズ・オブ・ティンダロスの体得者にとって、サーベルはライフルほどの間合いを持つ。敵の攻撃を命中と回避の限りない境界でかわしながら、ラインルビーンはゼーゴックとすれ違う。縦に裂かれたゼーゴックの燃える破片が飛び散り、爆発する。

スウェン、シャムス、2機分の2連ビーム・ライフルが不用意に前進しようとしていたゼーゴックに次々と炎の釘を打ち立てる。

わずか3機の機体を前にゼーゴックの2個中隊が目に見えて動揺を見せた。変形を解き、モビル・スーツ形態になるとともに速度を落とす。ヅダと合流しようとしている。その利点である速度を、これで敵は自ら捨てた。

装甲を輝かせながら、ラインルビーンは敵の周囲を大回りに飛行する。空を選んではゼーゴックから放たれる光の軌跡が青天井へと吸い込まれ、海上に躍り出ては降り注ぐビームが水柱を突き立てる。

ゼーゴックは完全に翻弄されていた。

ラインルビーンに気を取られすぎては2機のディーヴィエイトが執拗な攻撃を加える。慌てて隊列を乱した1機が瞬きの間にラインルビーンに接近され、強引に胴を裂かれる。

戦場は大きな変革を迎えていた。ミノフスキー・クラフトの搭載によって機動力が拡充され、結果、射撃の命中率は低減の一途を辿った。攻撃力とはすなわち効率的な敵機撃墜効率を意味するに至り、ビーム全盛の現在においてさえ各国は格闘機の開発の手を緩める気

配を見せない。２個中隊よりもエースをリーダーに据える１個小隊の方が高い攻撃力を有する。

そんな荒唐無稽な現実が、ガンダムの名の下に具現化されている。

ヅダの部隊が追いつくまでの間、ゼーゴックたちはわずか３機のガンダムによって完全に足止めされていた。そしてザフトが待望の合流を果たす頃には、すでに水平線の内側にジェット・ストライカーを輝かせるＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーの姿があった。

勝負は振り出し。しかし地球軍優位にスタート・ラインは引かれていた。

片肺の輸送機が黒煙をたなびかせながら空を飛ぶ。その軌道は安定せず、徐々に高度を下げている様子が見て取れる。辛うじて飛行しているにすぎない鈍重な輸送機に追いすがることはたやすい。

ブレイズ・ウィザードを装備したＺＧＭＦ－１０００ヅダが軽快に飛行する。

輸送機はよく使われる型のもので、大きな箱に翼と機首を取り付けたような巨体へとヅダが肉薄する。一体何を運んでいるのか。確かめたいという欲が働いたのだろう。ライフルを使用しようとはせず、肩に取り付けられたシールドの内側から小型のビーム・アックスを取り出し、一気呵成に切りつける。輸送機後部のハッチ――モビル・スーツの積載可能な輸送機らしく、ヅダよりも大きなものだ――がビームによっていとも簡単に斬り裂かれ、内部が露出する。

さあ、一体何をため込んでいる。体当たりを食らわせるようにハッチをこじ開け、格納庫へと足をおろす。ザフト系モビル・スーツの特徴であるモノアイが決して広くはないはずの格納庫を見渡そうとして、真正面から顔面めがけて迫りくる何かに気づくことが遅れてしまった。

何かが突き立てられる。何かがヅダの頭部を貫き、そしてそのまま振りおろされる。頭部から胴体にかけてビームの輝きが走り、７０ｔを超える機体が輸送機から蹴り落とされた。顔を潰され、首から腹にかけて風穴を開けられた機体は中空で爆発する。

一体何が起きたのか。仲間のヅダがモノアイを輸送機に向ける。そこにはビーム・サーベルの輝きとモビル・スーツのシルエット。敵モビル・スーツが破壊されたハッチから身を乗り出すようにして肩越しにレールガンを構えていることに気づき、その瞬間にわき腹を貫かれた。輸送機に引き離されまいと限界に近い時速５００ｋｍで飛行していてはかわしようがない。同等の速度で吹き付ける風圧がヅダの胴を引き裂き破片と残骸をまき散らしながら落ちていく。

格納庫に立つＧＡＴ－０４ウィンダムの背にはヴァイス・ストライカーが装備されている。かつてＧＡＴ－Ｘ１０５Ｅストライクノワールガンダムによって実用姓が試験されたヴァイス・ストライカーを扱うのはかつてと同じくヒメノカリスによって振るわれる。

「この機体はお父様のもの。あなたたちが触っていいものじゃない！」

ウィンダムの後ろには、モビル・スーツの搭載を可能にするほどに巨大なコンテナが、さも棺のように黒い姿をたたえていた。金の文字で描かれた、ＺＺ－Ｘ３００ＡＡ。魔王のための棺である。

機体が突然揺れる。これまでにも続いていた慢性的な振動に突如として混ざり込む激震。この輸送機はもう長くはもたない。そう確信させるに十分な衝撃が格納庫を揺らした。

ドレスの姿のままウィンダムのコクピットに座るヒメノカリスはパイロットの声を聞いていた。

「この機はもう持たない。積み荷はここで降下させる。後のことは任せたい」

ウィンダムの集音マイクがエンジンのものと思われる爆発音を広い、感覚としてわかるほどに高度が落ちていく。

彼らは死を覚悟している。だからヒメノカリスに託そうとしている。青き薔薇が崇める力のために。

「……青き清浄なる世界のために」

「青き清浄なる世界のために」

祝詞を言い交わし、すでに大破しているハッチが形式的に開かれる。コンテナがゆっくりとスライドし、眼下に見える海へと一気に投げ出された。四隅に備えられたパラシュートで展開し、ゆっくりと降下していく様子を確認してから、ヒメノカリスはウィンダムを空へと踊らせた。

その後ろでは小規模の爆発を繰り返しながら墜落していく輸送機の姿があった。パイロットたちが脱出できたとは思わない。彼らが託した力は無事着水を終え、地中海の穏やかな波にさらされている。

ミノフスキー粒子濃度の高い中ではお世辞にも精度が高いとは言えないレーダーには、北西、南から2つの部隊がここを目指している。分解能の関係上正確な数や機種はわからない。北西側が地球軍。数は、ザフトよりも多いように思える。

勝利条件はコンテナの防衛。敗北条件はその反対。条件としては決して楽観視はできない。恐らくザフトはこの戦いに足の遅いグーン――すでに旧式の水中専用機――を動員してはいないだろう。すなわち、戦いは空に限定される。何ともC．E．75年のモビル・スーツ戦術を反映している。

そして地球軍は思いも寄らない機体を投入していた。本来青一色の装甲を緑に染めたインテンセティガンダムがミノフスキー・クラフトを高強度に輝かせて部隊の先頭をきっていた。

「助けに来たぜ、姉ちゃん！」

「アウル……」

戦闘を禁じたはずのアウル・ニーダだ何故ここにいるのか。そんな漠然とした疑問は翼持つ危機と偽りの力に覆い隠される。

「ヤーデシュテルン……、ローゼンクリスタル……」

ZZ－X3Z10AZガンダムヤーデシュテルン。ZGMF－X17Sガンダムローゼンクリスタル。ゲルテンリッター3号機とサイサリス・パパによって作られた紛い物。そのどちらも、リーダーを務めるに十分な力を持っている。

翠星石の小さな手がモニターに映し出されているコンテナに触れると、その部分だけが拡大される。人形の動作とモニターの操作を連動させる。ゲルテンリッターは何故かこんなお遊びを好む。コンテナは黒く、モビル・スーツを乗せるには大きい。フォイエリヒならばちょうどいい大きさだろうが。

コンテナにＺＺ－Ｘ３００ＡＡと刻印されていることを見つけ、アスランは息を吹いた。困惑と、決意を意味する。ブラフでないとは限らないが、どちらにせよ、食いついてみないわけにはいかない。アスランの目は鋭さを増し、感覚が研ぎすまされていく。

「どうやら、フォイエリヒで間違いないようだ。レイ、コンテナの中身は恐らくフォイエリヒだ。起動される前に破壊する」

「直接戦って勝つ自信がないのか？」

「フォイエリヒに乗ったエインセルに勝てるなんて言ってる奴は身の程知らずか自信過剰かのどちらかでしかない。神を侮ることは構わないが、エインセルを見くびることだけはするな」

「了解した」

雛が巣立ちを迎えるにしては、空には嵐が吹き荒れていた。

インテンセティガンダムの特徴である甲殻類を思わせるバック・パックが頭を覆う。そうすることでバック・パックに取り付けられ

た1対のアームの可動域が増し、ビームを弾くシールドによる鉄壁の防御を発揮する。少なくとも、アウルはこの盾に幾度となく救われていた。

ヤーデシュテルン。8枚の翼持つ青いガンダムが2丁のライフルから次々とビームを放つ。シールドで防ぎながら、甲殻類の口に当たる部位からビームを撃ち返す。しっかりとロックオンしてから撃ったはずなのに、ビームが届いた時にはヤーデシュテルンはまったく別の方角にいた。

「火力も機動力も！　何から何まであいつの方が上じゃねえかよ！」

叫んでいる余裕なんてない。それでも無理矢理怒鳴った隙をつくようにヤーデシュテルンが目に見えて大きさを増してくる。接近されてる。認識しても意識が追いつかない。何もできず、構えたままのシールドに蹴りを入れられた。

機体全体を揺らす激震。喉が潰れたみたいな悲鳴しかでない。

（意識の加速が役に立たねえ……！）

ミノフスキー・クラフトで強引に体勢を戻しながら心の中で文句を言った。意識を加速させるにしても、相手の動きがまるで読めないなら意味がない。予定が立てられないからだ。

体勢を崩したのに敵が攻撃してこなかったのはミューディーが援護に入ってくれたからだ。地球軍のガンダム・タイプの中では最高の機動力を持つはずのディーヴィエイトガンダムでさえ動きについていくことができていない。2連ビーム・ライフルの攻撃は完全に反応が遅れていた。

「隊長が戻ってくるまで何としても持ちこたえなさい！」

バック・パックのレールガンを起動する。空気中でさえ音速を軽々超える弾丸がヤーデシュテルンを狙う。ビームに比べ反動の大きいレールガンは大概バック・パックみたいな場所に固定して使用される。ライフルのように腕を動かせばいいという訳にはいかない。取り回しの悪さから満足な狙いもつけられないまま、アウルはしびれを切らせた。

大体の狙いで発射した。

そんな攻撃が当たるはずがない。曳光弾の軌跡はでたらめな場所を通り抜け、ヤーデシュテルンは余裕でミューディー機の足を撃ち抜いてた。ライフルは両手にあるとばかりに、ほとんど同時に放たれたビームがストライクダガーの腹部を貫通していた。

（ガンダム・タイプ2機相手でまだ余裕があるなんて化け物もいいところだな……）

シールドを前に構えたまま攻撃に出ることがどうしてもできない。動きが読めなくて、その分攻撃される恐怖が邪魔をする。

片足を失ってもミューディーはまだ戦っていた。ローゼンクリスタルとは姉ちゃんとアーノルド副隊長が戦っている。ディーヴィエイトガンダムはともかく、ウィンダムは明らかに動きが遅れてる。フル・ミノフスキー・クラフトのゲルテンリッターに量産機が追いつけるはずがない。

ウィンダムがレールガンを放つ。すると何故か腕を破壊されてい

たのはウィンダムの方だった。ハウンズ・オブ・ティンダロスを使われると馬鹿みたいな光景が繰り広げられる。

「コンテナは何としても死守して！」

片腕を失っても、姉は戦うつもりでいる。通信で届いた声に、アウルはつい弱音をもらした。

「死守ったってよ……」

自分の身を守るだけで精一杯だ。敵をかっこよく撃退してやる姿なんて思い浮かべることさえできないでいる。

どんな手がある。真正ガンダム2機を相手に、群がるヅダやゼーゴックを打ち払ってコンテナを守る。そんな裏技、真紅だって教えてくれなかった。

そんなこと、神様にだってできやしない。魔王になら、できるのだろうか。

魔王になら。

「青き清浄なる世界のために」

声が届いた。聞き覚えのある、どっか気取った男の声。アウルが驚きながら通信に耳を傾けると、戦場ではそれどころじゃなかった。地球軍の機体が揃って動きを変えて、それに釣られてザフト軍も動きがおかしくなる。

たった1人の男のたった一言が戦場をかき回していた。

「私に時間をいただきたい」

どいつもこいつも慌てふためいたみたいに飛び回る中、妙にまっすぐな動きをする奴がいる。それを見た時、アウルは天と地がひっくり返ったほどに目を見開かされた。

「む、滅茶苦茶だ！」

モビル・スーツ程度の大きさしかない小型輸送機――武器なんて積んでるはずがない――が戦場のど真ん中を飛行していて、拡大されたモニターには操縦桿を握るエインセル・ハンターがいた。ザフトの連中が血眼になって探してる男が散歩でもしてるような気分で出歩いていいはずがない。そんなことくらい、アウルにもわかる。

心配した通り、ザフトは輸送機へと集中攻撃を仕掛けようとする。機動性に乏しい輸送機でかわしきれるはずがない。ゼーゴックの放ったビームが輸送機に命中しようとして、突然割り込んだストライクダガーがそれを防いだ。生じた爆発にシールドが破壊されて、バランスを崩したストライクダガーが投げ出された。

「何なんだよ……、これはぁ！？」

アウルの目の前で異様な光景が展開されていた。

たった1機の輸送機のためにザフトが群がり地球が守る。

ザフトの攻撃を文字通り体をはって防ぐストライクダガー。体中をビームで貫かれながら、それでも輸送機の無事を見届けるように

首が錆び付いたように鈍い動きで回転する。胸部から炎が噴き出したかと思うと、ストライクダガーの姿は一瞬で火の塊に消えた。

小型のビーム・アックスを振り上げたヅダが輸送機に接近しようとすると、やはり別のストライクダガーが当然のように立ちふさがる。斧を体で受けると、ビーム・アックスは胸部ジェネレーターに深々と食い込み、反対にストライクダガーのサーベルがヅダのコクピットを貫いていた。

たった1機、たった1人のためにどいつもこいつもあっさりと死んでいく。

アウルは動けないでいた。ただ目の前の光景を眺めていることしかできない。隙だらけにも関わらず、誰もアウルのことを狙おうとはしない。

たった1人のためだけの戦争。それが、目の前の現実だった。

「最期に教えといて上げる。戦場にいる2種類の人間ていうのはね、エインセル・ハンターを殺したがっている奴と、エインセル・ハンターのために死ねる人間よ」

傷つきながら、それでもまだミューディーは戦おうとしていた。足はヤーデシュテルンに撃ち抜かれた。腕は輸送機をかばって破壊されていた。でも、まだ装甲は残ってる。

ミューディーの覚悟を、アウルはただ聞いていることできないでいた。

左腕は肩から失い、両足は喰いちぎられたように欠損している。もはや飛行しているだけで手一杯。右手に持つビーム・アックスだけがその存在を主張するようにヅダは輸送機へと肉薄した。

恐怖はなかった。失った手足は地球軍の攻撃にさらされたためだ。ただエインセル・ハンターさえ殺せれば、世界は平和になる。たとえすぐに争いが収まらなくともやがては。

ヅダはビーム・アックスを振り上げる。輸送機の正面から一撃で引き裂いてしまうつもりで、しかし、輸送機が加速する。空飛ぶ鋼鉄の塊がヅダに激突し、鉄のひしゃげる音がした。

撃墜された機体の末路を、もはや見守る者は誰もいない。

２０ｍにも及ぶ巨人が銃を放ち、断末魔は巨大な爆発を噴き出すに等価。

それは、あまりに儚い矢のように、まっすぐに、鋭く、空を裂く。

エインセル・ハンターは飛んでいた。正確には落ちているにすぎない。重力に従うまま、海へと落ちていく。しかれどそれは落下ではない。天から大地に向かおうとする王を、単に重力が導いているというだけで支配したとは言えない。

王は猊下を目指し飛んでいるのだ。

光の槍が織りなすファランクス。静寂にはほど遠いウォークライ。そのすべての中心に描かれる青薔薇の王。

何も大地を下に描く必要はない。王が向かうのだ。大地を上に描け。登りゆく王の姿を基準とせよ。天も地も、巨人も兵器も、敵も味方もすべてあべこべにしてしまえ。

王は登る。下へと向けてパラシュートを開き、しかし登ることをやめはしない。ベース・ジャンプ用の小型パラシュートを限界のタイミングで開いた王は身を翻し、空へとその眼差しを、大地へと御足を向ける。

これで、大地は下に、空は上に描かれる資格を得る。

減速もままならないまま、王は自らの棺へと降り立った。墜落、激突。それは人が決めること。君臨、踏破。それは王がなすべきこと。漆黒のコンテナの上を転げ回り、しかし落ちることはない。手をつき、足を伸ばし、立ち上がる。ＺＺ－Ｘ３００ＡＡ。コンテナに刻まれた、刻印された黄金の炎の前に、王は立つ。

「ゼフィランサス。あなたのくれた力は素晴らしいものでした」

剣は振るわれなければならない。槍は貫き通されなければならない。炎は焼き尽くさなければならない。

王威は王に供されなければならない。

「ムウ。あなたの遺してくれた世界のため、私は再び剣をとります」

王を傷つけることまかりならぬ。誰も、そのような力持たぬ故に。

王を誅すること許されぬ。誰も資格なき故に。

コンテナの近くに墜落したヅダが爆発し、発生した高波がコンテナを洗う。波が引いた時、すでにエインセルの姿はない。

しかし、誰も海に転落したとは考えていなかった。そんな間抜けな結末は、地球軍もザフト軍も、ナチュラルもコーディネーターも、アスラン・ザラでさえ望んではいない。

「エインセル！　ハンター！」

奴はコンテナの中に潜り、ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムを動かそうとしている。そう、誰もが決めつけていた。

ヤーデシュテルンが全身を輝かせ、腰部から展開したレールガンがストライクダガーの右半身を吹き飛ばす。右は腕も足もない。コクピットにも熱が飛び込んでいることだろう。それでもストライクダガーは向かってくる。亡者のようになりながらもコンテナとの射線を遮ろうとする。そんな機体が長く持つはずがない。攻撃するまでもなくジェネレーターから炎が爆発となって吹き出す。

パイロットは最期の時をエインセル・ハンターのために使ったのだ。このストライクダガーばかりではない。ありとあらゆる機体が群がってくる。

どれも迷いがまるでない。皆喜び勇んでエインセル・ハンターを守ろうとする。

コンテナにライフルを向けると、片足のディーヴィエイトが急速

に接近してくることを翠星石が伝えてくれた。バルカン砲の射線から機体を逃がすためやむなくロックオンを解除する。モビル・アーマー形態のディーヴィエイトが水色のウイングを輝かせ通り過ぎた。

先程からこの繰り返しだ。ロックオンしては邪魔が入り、いつまでも攻撃できない。

モビル・スーツ形態に変形したディーヴィエイトがしつこく飛び回る。どうやら、何が何でもエインセル・ハンターを討たせるつもりはないらしい。

（時間がないんだ！）

こちらに向かってくるディーヴィエイトを狙い撃つ。ハウンズ・オブ・ティンダロスでも使えなければ回避はできない。ビームは正確にディーヴィエイトを捉え、しかし敵は止まらない。

「なっ！？」

ビームは確かに右肩を貫いた。爆発した右肩は姿勢を崩すに十分な破壊力があったにもかかわらず敵は止まらない。右腕を破壊されることは覚悟の上で突貫を敢行したのだ。我が身を捨てた、擬似的なハウンズ・オブ・ティンダロスに、アスランは虚をつかれた。

「アスラン！」

翠星石の心配そうな声を聞きながら、ディーヴィエイトに残された左手に握られたビーム・サーベルが強引に叩きつけられる。右腕のビーム・ライフルが斬り裂かれ、しかし追撃を許すつもりはない。蹴りを放つ。フレームのみならず装甲そのものが推進力を持つゲル

テンリッターの蹴りは従来とは比べものにならない速度でディーヴィエイトの腕を打つ。フェイズシフト・アーマー同士が接触した光の中、主を失ったサーベルが落ちていく。

サーベルを叩き落とせたことをわざわざ確認はしなかった。その頃にはすでに次の行動に移っている。左手に残されたライフルを突きつけると、ディーヴィエイトは逃れるどころか銃身を掴むなり進んで自らに押し当てたように見えた。その時には、すでに引き金を引いていた。

至近距離で放たれたビームは大きな爆発を引き起こす。ヤーデシュテルンそのものは無傷。しかし、ライフルは2丁とも無惨な姿で握られている。

「翠星石、レールガンの残弾は？」

「もうねえです……」

パイロットとして残りの弾を把握していなかった訳ではない。念のため聞いてみたところで、やはり答えは決まっていた。

ライフルを失い、弾は尽きた。サーベルを使おうにも、そう簡単に防衛線を割らせてはくれないだろう。あのディーヴィエイトのパイロットは文字通り命がけでヤーデシュテルンの力を奪ったのだ。

王はそれほど偉大なのか。臣民の命など犠牲にされて当然なのか。

「アスランさん、やっぱり、地球人ておかしいですよね……」

通信で聞こえてきたルナマリアの言葉が、この戦争の狂気を端的

に顕しているように思えた。

「レイ、お父様に手出しはしないで！」

左腕を失い、遙かに性能の劣るウィンダムであるというのに、ヒメノカリスはよく戦う。がむしゃらに、しかし鋭い剣撃を繰り出すウィンダムのサーベルを軽くいなしながら、レイは軽く笑みを作った。

あれほど強烈にシーゲル・クラインを崇拝していたヒメノカリス・ホテルの変わりようが興味深くも面白い。たとえ、シーゲル・クラインとエインセル・ハンターが入れ替わっただけにしても。

「断る。俺はサイサリスのために戦う騎士らしいのでな」

ローゼンクリスタルの数少ない武装であるビーム・サーベルだけでウィンダムの攻撃は防ぐことができた。

ドミナントとヴァーリ。従者は王には勝てない。たとえ、ヴァーリの中で戦闘に特化した遺伝子操作が行われたタイプ・Hであっても。

「魔法を見せてやろう」

剣を交えたまま、ローゼンクリスタルはバック・パックの円輪を機動している。サイサリスがローゼンクリスタルに与えた、ガンダムを壊すための力を。

光が、突如コンテナの真上に現れた。

何か、明確な何かがあったわけではなかった。ビームなど放たれていない。ミサイルの類が使用された訳でもない。突然ビームの塊が虚空から出現したかのよう。

漆黒の色をしたコンテナは、ビームに焼かれ閃光、爆発の果てに無惨な姿に変わり果てた。残骸が海に漂う。立ち上る黒煙は棺の中を覆い隠し、火が海を撫でる。

爆発がすべてを吹き飛ばしてしまったかのよう。

静かだった。先程までの激戦が嘘のように静まり返り、誰もが手を止め足をとめ燃え盛る棺を眺めている。

思いは一つに、エインセル・ハンターの存在を追い求めている。

ヒメノカリスは震える唇から父への思いを示す。

「お父……、さま……」

父への絶対の信頼が、それでも失うものの大きさに、失うことの恐ろしさに体の震えを止められないでいる。

翠星石は映像ながらに瞬きを落ちつきなく繰り返す。

「やった、ですか……？」

敵への絶対の恐怖が、それゆえザフトに勝利の確信を、魔王の死を保障してくれるものは何もない。

アスランは唇を固く結んだまま、微動だにできない。エインセル・ハンターは死んだ。油断はするな。矛盾する心がせめぎあい、それは時間の経過とともに魔王の死を確信する方向へと優位に進んでいくはずなのだ。

では何故、次第に魔王の存在感ばかりが募ってくる。

戦士としての勘か、部隊長として冷静に努める心構えゆえか、あるいはエインセル・ハンターと刃を交えた者としての自負。

アスランは何ら確信のないまま、しかし確信をもって叫んだ。

「まだだ！」

その瞬間、幾筋もの光が立ち上った。

誰の反応も許さないまま、何機ものザフト機が光に貫かれ、墜落することさえ許されず爆散する。

どこから、誰が、何が、どうした、どこにいる。

すべての疑問の答えが海を突き破り生まれ出た。太陽は空にあるべきものだ。しかし海から飛び上がった太陽は鋭槍の姿で飛び回る。全身から放たれる黄金の輝き。風よりも速く鳥よりも自由に巨人たちが漂う空を舞う。

やがてそれは変化を見せる。

指が開かれるように、あるいは花が咲くように、それとも、悪魔が歪んだ口を開くように。

槍の穂先が４つに割れ、それぞれが形を変えていく。

それは人かそれとも人形か。でなければ、異形の怪物が必死に人の姿を取り繕う。

細く長い足が作られ、腕は黄金の輝きを放つ。太陽は太陽のまま、王は王であることに変わりなく。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダム。

かつてオーブで、かつて宇宙で、魔王と恐れられ、神像と讃えられ、最強と認められたガンダムの姿が再び戦乱の空に花開く。

あれから４年がすぎていた。母を失い、空を見上げて眺めた光景が、今は同じ高さ。手を伸ばせば決して届かない距離ではない場所にある。

黄金のガンダムが、その輝きがシン・アスカの左頬の痣を焦がす。

「これが、フォイエリヒガンダム……」

初めて遭遇した訳ではない。戦闘だって完敗であったとは言え行

った。それでも、シンにとってこれが初めての接触であった。

以前とはまるで違う。何が違うのかなんて説明できない。それでもわかる。

ただ空に漂っているでしかないフォイエリヒガンダムを前に、シンは思わずＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムを後退させた。これを臆病と笑われるつもりはない。誰でも同じなのだ。ヅダが、ゼーゴックが次々にフォイエリヒから距離を開ける。

火を恐れる獣が、自分が安心できる距離を求めて後ずさることと同じだ。

このフォイエリヒは違う。

目映い輝きに瞬きすることさえ忘れて、ただ見入ることしかできない。きっと、誰もが同じことをしているはずだ。

間合いが目に見えるものだとは思いもよらなかった。弱い者ほど距離を開け、実力に反比例して距離は開く。すると、自然と線が描かれる。ヅダ、ゼーゴックのような量産機が最外で円を縁取り、その内側にインパルスガンダムが並び、ローゼンクリスタル、ヤーデシュテルンが最も内側にいる。

フォイエリヒから放たれる不可視の間合いを、ザフトがそれぞれ縁取って巨大な球体を浮かび上がらせていた。

まさに結界だ。シンも、レイ隊長の横に並びたいとは思わない。一歩踏み出すことを本能が恐れている。これ以上、奴には近づくな。心臓を掴まれているような息苦しさの中、それでも必死に声を絞り

出す。

そうしなければ、魔王の覇気に呑み込まれてしまいそうで。

「これが、エインセル・ハンター……」

たった1機、たった1人の男の存在が戦場すべてを支配する。

母を奪われた少年が、シン・アスカが魔王と出会った。

あの日嗅いだ燃え盛る炎の臭い、焼き尽くされた人の臭い、周囲を埋め尽くす膨大な死の臭い、まだなお放たれる砲火の臭い。あの日と何も変わらない。戦場を包むすべての臭いの変わらぬただ中で、少年は魔王と出会った。

元気な子どもでいて欲しい。では元気でない子はいりませんか。明るい子でいてほしい。では明るくない子どもは不要ですか。優れた子どもが欲しいなら、力のある子どもが欲しいなら、それでは生まれてきた子どもが優れていなかったらどうしますか？

捨ててしまいますか？　殺してしまいますか？

それとも、そんな子ども、初めから不要ですか？

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「戦慄の子どもたち」

マユ・アスカ。あなたの気持ちはどうですか？

第２２話「戦慄の子供たち」

オーブが国を焼かれてから４年。主戦場となったオノゴロ島では戦死者８３７名を数え、民間人への被害も６００名を超えた。あれから復興は進み、破壊されたモルゲンレーテ本社跡地にはすでに新たなビルが建造されている。

それでも、人々の記憶から、戦争の悲惨な光景は消え去っていない。そして、侵攻してきた大西洋連邦への恨みも。しかし、世論は世界安全保障機構への参加に否定的なものばかりではない。大西洋連邦主導の組織に加わることを頑なに拒絶する者がいる一方、理解を示している意見も少なくないのだ。

意見が二分するきっかけとなった大きな事件は２つ。

ヤキン・ドゥーエ攻略戦において、プラントが地球全土を標的としてジェネシスの発射を敢行しようとしたこと。中立と敵味方。プラントはそんな枠組みを一方的に破棄してしまった。対岸の火事ではすまない。それは子どもとて理解している。

エピメディウム・エコーの起こるべくして起きた事故。オーブ国民に対してさほど大きな影響はなかった。表向きは。エピメディウム・エコーが親プラント派をとりまとめていた事実を鑑みれば、世界安全保障機構への参加に反対する勢力の動揺は計り知れない。

プラントはオーブを見限り、オーブもまた、プラントに汲みすることをやめた。世界安全保障機構第９の加盟国としてその名を連ねたのである。

その加盟を祝うための特使が訪れたのが、何の皮肉かかつての戦いの地、オノゴロ島であった。

オノゴロ島ヒルコ国際空港のロビーに人だかりができている。記者に政府関係者。特に記者は数が多く、貴賓が通る通路の両側を埋め尽くしてはカメラを構え待ちかまえている。

そんな中にあって客人を迎えることができる立場にあるのはただ1人。自動ドアの前に余裕を持って立つのは恰幅のよい禿頭の男。オーブの政府関係者が身につける焦げ茶色の制服を身につけている。

ウナト・エマ・セイラン。現オーブの国家元首にして、カガリ・ユラ・アスハの許嫁ユウナ・ロマ・セイランの父親である。

そんな見事にはげ上がった頭を、カガリはロビーを見下ろす観覧室のガラス越しに眺めていた。さすがに光輝いているなどということはないが、見事な禿げようである。カガリは窓のそばに立ちながら、すぐ横に立つユウナ――背が高いため、見上げる必要がある――の生え際を横目で観察した。まだ大丈夫なようだが、将来はどうなのだろう。

別にユウナの将来を心配する立場にあるわけではないと、カガリは気づかれる前に視線を戻す。ウナト代表が来賓の到着を今や遅しと待ちかまえている。

「問題は世界安全保障機構が誰を送り込んでくるかだな。国家元首が来ないことは当たり前として、となると……、誰だ?」

ジョセフ・コープランド大西洋連邦大統領が来ることはないとして、しかしカガリに次の人物の名前をあげることはできない。

「恐らく、大西洋連邦の要人の誰か。その誰かが重要だよ。それによって、大西洋連邦や世界安全保障機構がオーブをどうしたいか見えてくる」

そんなことは百も承知だ。そう、カガリは考えながらも、いざユウナに言われると自然と身が引き締まる。

やがて、ロビーが一挙に騒がしさを増した。記者たちが一斉に色めき立ち、客人の到着が近いことを教えてくれる。自動ドアが開かれ、しかし客人の姿はない。カガリには確認できなかったが、記者たちに気づいているようで一斉にフラッシュが瞬いた。

正直者にしか見えない人物が入ってきたのではもちろんない。単に見えなかっただけだ。その人物は車椅子を使っていた。ウナト代表の前に来るとともに立ち上がり、握手を交わした。この時に初めて、カガリは相手の姿を初めて眼にした。

若い男だ。くすみのない金髪に、サングラスをかけている。頬がこけて、また少し痩せただろうか。

カガリはこの男を知っている。

「非公式に会いたい。すぐに会談の準備をしろ！」

会談は、あっさりと実現した。執務室、いつものように机につき、背もたれに身を預けるカガリの間で、男は車椅子に座っている。その肘掛けにはドリンク・ホルダーよろしくプロジェクターがはめ込

まれ、金糸雀がその姿を現していた。

「久しぶりだな、金糸雀。カガリはお前を使いこなしているか？」

「もちろんかしら。かっちゃんはすごいかしら」

ＺＺ－Ｘ２００ＤＡガンダムトロイメントのアリスをしていた割には金糸雀の敬礼はずいぶんと不格好だった。今はそんなことはどうでもいい。カガリはすでにお約束となりつつある抗議の声から、挨拶は始まった。

「私をかっちゃんと呼ぶな！　それより、ブルーノ兄さん、その、久しぶり」

兄と、ブルーノ・アズラエルと出会うのはずいぶん久しぶりのことになる。アズラエル財団代表の１人として忙しい毎日を送っている兄――あくまでも技術上であって、血の繋がりはない――に気軽に会えるはずもない。何より、かつては殺しあいを演じたこともあって、あらゆる意味で気軽さとは無縁だ。

それでも、ブルーノはサングラスをかけた顔で軽く笑みをつくる。カガリばかりが気負っているところは、出会った頃から変わっていない。

「そう畏まるな。それより、彼かね？　君の婚約者というのは？」

ブルーノが見る先はカガリの横、カガリ以上に畏まった男が直立不動でいる。

「ユウナ・ロマ・セイランと申します」

義兄に気に入られまいと腐心しているのだろう。妙に動きが固い。

（まったく、何をしているんだ……？）

呆れた心地でため息をつきながら、カガリは不出来な許嫁を嘆いて見せた。

「親が決めただけの間柄だ」

「君がそこまで聞き分けのいい子だったとは知らなかった」

吐きかけた息を飲み込んで、のどに大気が詰まった。何も言い出せず、息苦しさから顔が赤くなる。

カガリ1人が気負って、ブルーノ・アズラエルは、ラウ・ル・クルーゼはいつもどっしりと構えている。4年も前から、敵と味方に分かれて戦っていた時からそれだけは何も変わっていない。

そのことを思い出すと、カガリは二句を紡げなくなる。そんな隙に、将来の兄の歓心を少しでも買いたい若人は少々上擦った声を上げていた。

「カガリからあなたのことは聞いています。かつて、ラウ・ル・クルーゼを名乗りブルー・コスモスを率いたことも」

「引退した身だ。代表はロードに、戦いはエインセルに任せきりだ」

「いえ、そんな。あなたの勇猛果敢さはカガリからよく……」

ブルーノはただ静かに笑うばかりで、お世辞が通用しているようには見えない。普通、おべっかが通じるのは無能な相手だけだ。有能な人間は何もしないでも評価されるため、誉められ慣れている。名誉というものに固執するのは無能ばかりで、阿諛追従は相手を見て行わなければならない。

ユウナもそのことに気づいたのだろう。歯切れの悪い言葉で、取り繕うように話題を変えようとする。

「カガリは、あなたのことはよく話してくれました。ですが、エインセル・ハンター代表についてはあまり。その、ブルー・コスモスの3巨頭として知られたあなた方のことを私はよく知りません」

「かっちゃん、一時期エインセルさんのこと命を狙ってたかしら。それで今でも……」

余計なことを言い始めた金糸雀を一睨みして黙らせる。もっとも、金糸雀はいたずらっぽく舌を見せただけで、恫喝に屈した様子はない。ただ、話題を変えつつ、さりげなくブルー・コスモスの偉大な代表であったことを讃えるというユウナの変化球は多少なりとも効果があったらしい。

ブルーノ・アズラエルは普段に比べると饒舌に話し始めた。車椅子をまるで高価な座席のように肘掛けによりかかり、まるで手にワインでもくゆらせているかのような優雅さで。

「エインセルという男は、そう、私が知る限り誰よりも弱い男だ」

最強のパイロットであり、影響力は大西洋連邦大統領ジョセフ・コープランドをもしのぐ。アズラエル財団、ピスティス財団の財力

を手中に、世界最大手の軍需産業の総帥を務める。

人類史上最強の男を、開口一番弱いと呼ぶ男が、他にいるだろうか。

「誰よりも弱いからこそ、ブルー・コスモスという最強の盾を必要としている。フォイエリヒという最強の剣を必要としている。そして、戦う理由としての家族を必要としている」

結局、最強であるという結論に変わりない。カガリはかつてそんな相手の命を狙ったことに今更ながら薄ら寒い思いを感じていた。

「そうして得たものを守るためには、世界最強の座になければならなかった。ただ、それだけの男だ」

力でエインセル・ハンターを倒せる者など、どこにもいない。

戦場に、声にも音にもならない鬨の声が響きわたる。

誰もがエインセル・ハンターに憑かれていた。

部隊も配列も隊列も間合いも武装も敵も味方も何もない。狭いコクピットの中、誰もが同様に均一に叫び、猛り、声の限り叫ぶ。

その目には黄金のガンダムが、エインセル・ハンターだけが、黄金の輝きだけに支配されている。

殺す者と守る者。攻めるものと防ぐ者。狂信者と狂信者。

ザフトがＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムへと殺到する。ＺＧＭＦ－１０００ヅダはビーム・アックスをその手に狂戦士のように、ＺＧＭＦ－９５３ゼーゴックは適正距離を忘れた狂戦士のように、ただフォイエリヒへと引き寄せられていく。

狂気には狂気が、力には力が。兵器は兵器とともにまみえる。

ここには戦術も戦略もなかった。ただエインセル・ハンターを殺せ、エインセル・ハンターを守れの二句だけが、誰の耳にも届かぬはずの声が、しかし確実に戦場を震わせている。

フォイエリヒに狙いをつけ、放たれるゼーゴックのビーム。それはＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーの左肩に受け止められ、片腕をもぎ取るも、ストライクダガーはかまわず右手のサーベルでゼーゴックの心の臓を貫く。撃墜されたゼーゴックの爆発を待たずに、ヅダが飛び込んで来ては斧を敵の体へと深々食い込ませた。モビル・スーツ２機分の爆発に呑み込まれたヅダが爆煙の中から這い出た途端に、背中からコクピットを撃ち抜かれる。

混戦では生ぬるい。狂乱とも言える戦いが繰り広げられていた。

ここには戦術がない。ケッテを組む必要などない。エインセル・ハンターさえ殺せば、すべての目標が達成される。

ここには戦略がない。エインセル・ハンターさえ殺せば、今後のすべての作戦展開を考える必要がない。

戦える者は前に出る。戦えぬ者も前に出よ。すべての命がすべての兵器が焦燥につき動かされる。すべてはエインセル・ハンターを

中心として。

フォイエリヒは8刀の剣を持つ。両手両足からビーム・サーベルが輝く刀身を伸ばした。多節アームで連結されたユニットが計4機、バック・パックに搭載されている。このすべてがビーム・サーベルを放ち、剣となる。

かつて、フォイエリヒは白兵戦最強と謳われた。そして、現在、白兵戦最強の名を受け継いだ機体は存在していない。

王者は、まだその王位を明け渡してなどいない。

2機のヅダが同時に襲いかかる。この光景は、人々に共通した印象を与える。ザフト軍も地球軍も等しく、飛来する確実な死とくすまぬ黄金の輝きを夢想する。

荒唐無稽な光景であった。斬りつけようとしているはずのヅダに走る3筋の輝きは、ビーム・サーベルの軌跡。頑強であるはずのモビル・スーツの装甲がたやすく斬り裂かれ、獣に喰い破られたにも似た傷跡を持つヅダの残骸が降り落ちる。

ゼーゴックが四方八方から一斉にビームを放つ。これも、人々に膨大な死の確信を与え、しかしエインセル・ハンターの不滅は約束されている。

フォイエリヒの黄金の輝きはビームを寄せ付けない。ビームはフォイエリヒの表面を滑り落ちるように通り抜けた。そして、モビル・スーツ最大火力を誇ったかつてのフォイエリヒは、すでにその座を

取り戻している。４機のアームに装備される４連ビーム・ライフル。アームの自在な動きが、攻撃を無効にされ、戸惑うゼーゴックたちへと向けられる。光の槍が並んで４本、ゼーゴックの腹に突き立てられる。ライフルに撃ち抜かれたとは思えない傷を見せて、ゼーゴックの胴が裂けた。

すべてが予定調和。すべてが淡々と処理されていく。

エインセル・ハンターは殺せない、倒せない。

刃向かう者は殺される。

すべては定まっていたことのように。これは戦いとは呼べなかった。一方的な殺戮でもない。人が歩いて蟻を踏む。ほんのわずか足を踏みかえることのない怠惰を、戦いとも殺戮とも呼ばないように。

エインセル・ハンターは、ただ歩きたい方向へと歩いている。それは、殺戮とさえ呼ぶことはできない。

シン・アスカは体が芯から凍り付いたような震えを覚えた。

フォイエリヒは何から何まで異常だった。皆が狂ったように殺そうと、守ろうとして、そしてそのどちらも意に介してはいない。殺せるはずがない。守られる必要がない。

そして次第に、ザフトには諦めが支配するようになっていた。誰もが攻めかかろうとはせず、フォイエリヒが少し動いただけで、まるで攻撃でもされたかのように飛び退く。

突然の任務で戦力が十分であったとは言わない。それでも、たった1機のモビル・スーツが戦場の空気を支配している光景を、シンはこれまでに見たことがない。

「これが……、これが……」

「そう、これがエインセル・ハンター」

そんな父の輝かしい姿に、ヒメノカリスはとてもすてきな贈り物に目を輝かせる子どものように見ほれていた。戦場にいるのに、コクピットの中という似つかわしくない現場でさえ、ヒメノカリスは恋に焦がれる乙女のように父への敬愛の眼差しを惜しまない。

ヒメノカリスでは駄目だった。フォイエリヒのような煩雑な操縦機構を制御しきれず、両手足のサーベルを扱うことがせいぜいであった。だが、エインセルは、父は違う。8の剣を完全に扱い、フォイエリヒはその力を完全に取り戻した。

誰もが父を力で殺そうとする。それは馬鹿げたこと。力でエインセル・ハンターは倒せない。

何故なら、最強を倒す力があるということは矛盾に他ならないから。最強を超える力がない以上、エインセル・ハンターは力では倒せない。

「だから、誰もお父様を倒せない」

力でエインセル・ハンターを倒すことはできない。どれほど刃を研ぎすませようと、どれほど銃に火薬を込めようと、エインセル・ハンターはより鋭い刃を携え、より優れた銃器を構えている。

ゲルテンリッターでは勝てない。それは単なる力でしかなく、力で力は滅ぼせない。

青い翼と黄金の暴威とが激突する。

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンが両手にビーム・サーベルを構え肉薄する。ゼフィランサス・ズールが直接手がけた機体はしなやかにその腕を振るい、達人の妙技のごとく次々にビームの輝きがまき散らされる。

輝きが瀑布となって、そして瀑布がまた、それを押し返す。

フォイエリヒの構える８刀のサーベルはアスラン・ザラの輝きをたやすくさばき、防ぎ、押し返す。

白いＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルの参戦も事態を変えることはできない。２機のガンダムを合わせたところで４刀。フォイエリヒの半分でしかない。

黄金のフォイエリヒは２機のガンダムを平然と相手にしながら、悠然と殺陣を舞う。

すべてがガンダムであって、すべてがハウンズ・オブ・ティンダロスを、異形の猟犬を飼い慣らす。

剣戟が、鍔迫り合いが繰り広げられ、しかし次第に剣と剣が互いを無視し始める。振り抜かれたヤーデシュテルンのビーム・サーベルがフォイエリヒの表面を滑る。フォイエリヒの一撃がローゼンクリスタルをすり抜ける。

それは、次第に不出来な活動写真のような光景に変わっていった。3機ものモビル・スーツが死闘を繰り広げている。それにも関わらず、剣は、敵を確実に捉えたなずの剣が素通りし、命中したはずの攻撃が何の効果ももたらさない。

ハウンズ・オブ・ティンダロス。攻撃を極限最小限の動きで回避する絶技の体得者の動きは異常の一言に尽きた。今見えているはずの光景が、しかしまるで別世界のものか空想の産物のようにしか見えない。激しい攻撃の最中、しかし誰も傷つくことなく、命中と確信できる無為が繰り返される。

「エインセル・ハンター！　今ここですべてを終わらせる！」

アスラン・ザラの、ヤーデシュテルンの攻撃は繰り返され、しかしすべてが徒労に終わる。

「アスラン・ザラ、あなたには私を殺す資格がありません」

エインセル・ハンターの、フォイエリヒの攻撃は繰り出され、それは、均衡をたやすく斬り裂いた。

命中すると確信した攻撃が命中する。そんな当たり前のことに違和感を禁じ得ない。それほどその光景はあっけなく、当然のことが常軌を逸したほど不自然なものに思われた。

ローゼンクリスタルの右足が切断され、ヤーデシュテルンの左腕が破断する。弾けるように戦闘は終わりを告げた。装甲の一部を破壊されたことで2機のガンダムはバランスを崩し、ミノフスキー・クラフトの推進力の偏りが3機のガンダムを遠ざけた。

ダメージを処理し、ヤーデシュテルンとローゼンクリスタルが体勢を取り戻そうと、フォイエリヒは何も変わらない。

手足から光の剣を延ばし、背には4本の腕が輝き、剣を構えている。その異形の姿は、神々しく、禍々しく、世界の王の姿を象徴する。

アスラン隊長でも及ばない。その事実は、しかしザフトの戦意をこそぎ落とすには、エインセル・ハンターとい標的は、得られる成果は大きすぎた。

確実に駄目だ、しかし、勝つことができれば配当は大きい。

ザフトはエインセル・ハンターを殺すことだけを目的としている。

2機のＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが退けられたガンダムに代わるように前へと出る。２５ｍほどにも達するフォイエリヒの前に、それはひどくちっぽけで、とるに足らない存在のようであった。

マーズ・シメオン。ヘルベルト・フォン・ラインハルト。

ヒルダ・ハーケンを失い、ザラ隊のインパルスは2機に減ってしまった。だが、ヒルダがエインセル・ハンター殺害に執心し、その命を落としたように、残された彼らもまた、エインセル・ハンターに寄りつかれていることは等しい。

「やるぞ、ヘルベルト！」

「了解だ！」

2人の同意が、母艦へと伝えられる。

「パラスアテネ。アリスを発動させろ！　時間無制限。目標はフォイエリヒガンダムの撃墜！」

「しかしザラ大佐の許可がなければ……」

「やれ！　今日ここで、俺たちの呪われた戦いを終わらせるんだ！」

マーズの言葉に、オペレーターの否定が重ねられ、しかし結果としてヘルベルトの意志に上書きされる。

アリスの発動。それに伴う意志と現実の剥離の中で、マーズとヘルベルトの意志は次第に混濁し、エインセル・ハンターを倒すという夢の中へと沈んでいく。

アリスに支配された2機のインパルスはフォイエリヒへと向かい、そして、唐突にその動きを止めた。

目の前にフォイエリヒがいる。しかしインパルスたちはそろって中空に静止し、脱力したように手を下げ、ただ浮かんでいる。

フォイエリヒがサーベルを一振りする。2機のインパルスガンダムはあまりにあっさりと引きちぎれ、燃える残骸となって海へと降り注ぐ。

何が起きたのか。ただ2機のインパルスが無謀に挑みかかり、撃墜されただけのこと。では、なぜ動きを止めた。誰もそのことを理解できない。

フォイエリヒは黄金に輝き続ける。

「機械では駄目なのです。人を倒すのは人でなければなりません」

戦闘はあっけなく終わった。終わったというよりも、終わらせたというべきだろうか。エインセル・ハンターが、まるで気まぐれな太陽のようにあっさりと終わらせてしまった。

フォイエリヒの撤退。その後地球軍は目立った動きを見せることなく、シンは友軍とともにエル・アラメインにまで撤退した。

エインセル・ハンターとフォイエリヒ。一度は目にして、一度は戦ったはずなのに、いざ戦士として対峙すると何もできなかった。

整備は整備員任せ、作戦会議は上層部が行う。そうすると、末端の兵士は訓練をしているくらいしかすることがない。その方がかえってよかった。ひたすらシミュレーターに打ち込み、エインセル・

ハンターの影から少しでも目をそらすことができるから。

インパルスのコクピットの中、モニターに映ったフォイエリヒの映像ともう数えることをやめてしまうくらい刃を交えた。

それは今も。

光速を思わせて飛び込んでくるフォイエリヒの攻撃を、レイ隊長たちのような無茶な動きでかわすことなんてできやしない。とにかく大きく動いて、攻撃から逃げるように動き回る。

仮想現実ではGまでは再現されない。現実にはどれほどの加重が体にかかっているのか、ふとそんなことを考えた瞬間に、画面が突然落ちた。シミュレーターが止まったのだ。

「ダメです、ダメダメですぅ～」

赤い瞳をした小さな少女がお手上げといった様子で手のひらを上に向けて鼻息をもらす。

「攻撃はかわしたはずだ」

「それでも、許容Gを超過してやがるです。ショック・アブソーバーに頼った戦いしてたら、体がいくつあってももたねえです」

翠星石は立てた人差し指を素早く左右に振る。何を甘いことを言っている。そんなジェスチャーを見せられても、シンはどうもしっくりこない。

「心配してくれるのは嬉しいけどさ、エインセル・ハンターに勝つ

ためには……」

「だ、誰もちび人間のことなんて心配してねえです～！」

白い頬を赤くーープロジェクターはそんなことまで表現しているーして、翠星石は光の柱ごとプロジェクターの中に引っ込んでしまった。

「お、おい！」

慌てて手を伸ばすも、プロジェクターに反応はない。このままプロジェクターを鷲掴みにしても何の意味もないだろう。シンは手を戻して、そのままシートに深く腰掛けた。

「機械が人間以上に子どもっぽいって何だよ……？」

額を押さえるために髪をかきあげて、その手を下ろすよりも先に左頬に触れた。ここには痣がある。４年前、大西洋連邦がオーブへと侵攻した際につけられたものは、いまだに消えてはいない。

エインセル・ハンターは強い。何度も戦ったシミュレーターよりももっと強いように気もした。

（本当に勝てるのか……？　フォイエリヒガンダムに乗ったエインセル・ハンターに……）

残念なことに弱気ではなくて冷静な判断だと思えた。インパルスガンダムではどれほど鍛えたところでフォイエリヒには勝てない。圧倒的な性能差をパイロットの腕で補う。そんなことができればドラマの主人公みたいで格好いいけれど、実際は、戦闘に関するデー

タの何から何までエインセル・ハンターの方が上だ。

勝っている要素なんてなければ、勝てる可能性も見えてこない。

「俺にもゲルテンリッターみたいな機体があったら……」

それでも勝てるかどうか怪しいことろだろう。そして、単なる一兵卒でしかないシン・アスカがそんなゼフィランサス・ズールのガンダムに乗ることができるはずがなかった。

エインセル・ハンターという主役と戦場という同じ舞台に立ったところで、格の違いというものは確実に存在している。

考えても考えても絶望的な状況しか見えてこない。翠星石の機嫌も損ねてしまった。休憩を入れるにはいい頃かもしれない。

シンはコクピット・ハッチ展開の操作をする。目の前でハッチが開き、まぶしいくらいの光と、いつもよりも慌ただしい音が聞こえてきた。

今、格納庫はちょっとした来客を迎えているらしかった。

ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァの格納庫にローゼンクリスタルとヤーデシュテルンの2機が並んで寝かせられている。ローゼンクリスタルは右足を、ヤーデシュテルンは左腕を破壊されていた。

これほど高性能のガンダムともなれば、修復には細心の注意が求められる。偶然地球に降りていたとはいえ、ザフト製ガンダムの開

発者がわざわざ足を運ぶほどだ。

傷ついた愛機を見上げるレイ・ザ・バレルの横に、開発者が白衣を身につけ立っていた。知識層には多い青い髪をしたヴァーリは、工学系の人間であるはずだが、何故わざわざ白衣を身につけているのかはまだ聞いたことがない。

開発者、サイサリス・パパは白衣に両手を入れたままローゼンクリスタルを見上げている。かと思えば、横目でレイを眺めた。

「で、いつになったらキヤ・ヤマトを倒せるのさ?」

「ゲルテンリッターは俺が破壊する」

わざわざ目をあわせてやる必要もないだろう。互いに体はローゼンクリスタルの方向を向いたままだ。サイサリスもすぐに視線を正面に戻した。

「レイって口先ばっかりだよね。キラには啖呵きったらしいけどさ。いい? ローゼンクリスタルの力はフォイエリヒだって破壊できる力なんだよ」

「だそうだ。お前はゲルテンリッターを超えられるのか?」

懐から取り出したプロジェクターには紫色のドレスを身につけた少女の姿が浮かび上がる。ゲルテンリッターと同様に赤い瞳こそしているが、さて、モデルはゼフィランサスなのか、それともサイサリスなのだろうか。

薔薇水晶は答えない。普段とかわらず表情を変えないまま、レイ

のことを見上げている。母であるサイサリスが睨むために体の向きをこちらに合わせたことに比べるとひどく違う。

「口先ばかりはお前ではないのか？　お前は、本気でゼフィランス・ズールを超えられる気でいるのか？」

顔を向ける。その途端に、頬に鈍い痛みが走る。サイサリス――ヒメノカリスと異なり、身体能力に特化したヴァーリではない――の平手が頬を打ったのだ。

「忘れないでよ、レイ！　地球の片田舎でくすぶってたあんたを拾い上げてあげたの、あたしだってこと！」

すぐに激昂し、行動に移す。以前のサイサリスはもっと物静かな女性だった。これではまるで妹のローズマリー・ロメオのようではないか。

顔を赤くして怒るサイサリスを見ていると、レイはかえって頭が冷え、冷静になれる気がした。

「では俺からもお願いしよう。インパルスが2機同時に敵前で停止した。アリスの誤作動が疑われる。確認を怠るな」

アスランの部隊は1度に2機のインパルスを失い、事実上全滅している。フォイエリヒを前に停止した2機は明らかに動きがノーマルではなかった。

心当たりがあるのか、それとも思いつかないことが悔しいのか、サイサリスは顔を赤くしたまま歩きだした。

サイサリスとの出会い、いや、再会は2年前。わざわざ雪降りしきる凍土の上を、寒さに文句を言いながら歩いてきた。サイサリスはドミナントを必要としていた。アスランやキラのように他のヴァーリに従う者ではなく、カガリのように自分勝手でもない、サイサリス自身のためのヴァーリを。

（だが、お前にとって俺は消去法なのだろう？）

レイでなくともよいのだ。ただ、全１０体――エインセル・ハンターを含む――のドミナントの中で、現存する5体の内レイ・ザ・バレル、セブンが一番現実的であったというだけにすぎない。

レイである必要はないのだ。ただ、自分の自由になれるドミナントさえあれば。

それが苦々しく思わないでもない。だが、表情は努めて平静を装う。すでに１０年以上も身につけた仮面は堂に入りつつある。この技術は、特にこんな場合に役に立つ。広い格納庫の中、ろくすっぽ隠れようともせずにレイのことを見ている部下に内心を悟らせたくない場合には。

振り向くと、目を合わせた途端にシン・アスカがひどく困惑した様子を見せた。逃げ出すこともできず、目を合わせることは気まずいが、しかし露骨に目をそらそうともしない。何とも煮えきれない。

「すいません、盗み聞きするつもりはなかったんですけど……」

要するに、盗み聞いていたということだ。

「気にするな」

「何か冷やすもの、もらってきましょうか？」

何のことかと思いきや、はられた頬を気遣ってくれているらしい。確かに多少の痛みは覚えるが、大したことではない。

「所詮女の細腕だ」

そう、むべなく言ってしまうと、シンは余計に落ち着きがなくなってしまった。何か話し出すきっかけを無理に探しているように見えなくもない。

「えっと、今の人……」

サイサリスのことだ。すでに姿は見えなくなっているが、シンはサイサリスが立ち去った方を妙に気にした様子で、近づいてこようとしない。

考えてみれば、どうということはなかった。以前子犬のようだと言われたことを気にして積極的に話を持ちかけられずにいるのだろう。そんなところが子犬のようだと思わなくもない。

「そこでは話しにくい。横に来い」

こう言ってやることで初めてシンは距離を詰めた。一度シンはレイの手元を見やった。珍しく姿を見せている薔薇水晶を見たのだろう。何と言っても、薔薇水晶もサイサリスやゼフィランサスと同じくヴァーリの顔をしている。

「あの女はサイサリス・パパ。インパルスの設計者だ」

わざわざ説明してやったというのに、シンはなかなか薔薇水晶から目を離そうとしない。

「ああ、ラクスたちとよく似ているだろう。薔薇水晶も、サイサリスもな」

「クライン議員て、三つ子なんですか？」

思わず笑わされてしまう。少々口元を歪めた程度の笑い方くらい許されるだろう。

「いや、２６人姉妹だ。クライン家がある計画のために用意したクローン体だ。もっとも、各人調整のされ方は異なるがな」

瞬きを繰り返し、シンはわかりやすくわからないといった顔をする。

どこかの誰かに誤った情報でも植え付けられたのだろう。誰かは、だいたい見当がつく。

「ラクスに何か吹き込まれたな。あの女は嘘はつかないが、巧妙に人をだます。彼女たちはヴァーリと言ってな。あんな顔した女がまだ２０人以上いる」

さらにゼフィランサス・ズールがそのヴァーリも末妹であるということは、今はまだ話さないでおくことにしよう。今でさえ、よく話を計りかねているようなのだから。

話題を変えるには頃合いだろうか。

「エインセル・ハンターはどうだった？」

「あ、その……、正直、勝てる気がしませんでした……」

どちらにしろこの若輩者はあわてざるを得ないらしい。エインセル・ハンターに勝てないことを恥じるべき人間など、この世界にはどこにもいない。

「それだけお前が強くなったということだ。山に登ったことのないものに登山の苦しみを伝えることはできない。しかし、お前も難儀なものだ。母の仇がよりにもよって世界最強の男とはな」

「知ってたんですね……」

少しは落ち着いたようだ。それとも、気分が沈んだとするべきだろうか。

「特殊部隊に入れるのだ。思想性、関係者、金回りから当然経歴まで精査される。無論、母親のこともな」

その審査に合格したと喜ぶよりも先に、レイが自分のことを想像以上に知っていることの方が気になったのだろう。確かに、シンの経歴は、地球では変わっている。

興味がない訳ではないが、話すかどうかはシンに任せることにする。

シンはレイと目を合わせられないと考えたか、何か、見るものを探して視線が泳いだ。ようやく落ち着いたのは、シンが横たわるロ

ーゼンクリスタルに目をやった時のことだ。

それでもしばらくの間をおいてから、シンはレイを軽く一瞥して話を始める。

「俺の母さん、マユ・アスカって言うんですけど、男嫌いだったんです。それでもどうしてだか子どもが欲しかったらしくて、精子バンクに頼んで人工授精したそうです。相手は容姿端麗、成績優秀などこかの誰か。有名な学校に通う御曹司だとか聞いてます」

「御曹司がはした金欲しさに精子バンクに協力しているのか？」

「そうですね。母さん、掴まされたのかな？」

曖昧で、どうとでもとれる笑い方をしている。ザフト軍正規兵に噛みつくような男だが、祖国オーブでは、いや、家庭ではこのような笑い方をしていたのだろう。

シン・アスカに父親はいない。生物学的には、遺伝子提供者はいるのだろうが。それも優れた。

「子ども心にわかってました。母さんはただの子どもじゃなくて、優れた子どもが欲しかったんだろうって。優秀な遺伝子を手に入れて、コーディネーターにしてまで。だから勉強もスポーツも頑張りました。そうして結果を出している内は、母さんは母さんでいてくれたから」

何故シンが目をそらすための何かを必要としていたのか、その理由がわかり始めていた。シンの瞳には涙が溜まり始めていた。

シン・アスカという息子の中で、マユ・アスカという母親の存在を消化しきれていないのだろう。

「でも、怖くて一度も聞けなかった。もしも頑張ることをやめてしまったとしたら、優れた息子じゃなくなったとしたら、母さんはそれでも俺のこと、まだ息子だと思ってくれるのかって……」

徐々に涙声になっていくなか、それでもシンは最後まで言い切ることができた。その後涙を拭い、シンは曖昧な笑みを取り戻す。恐らくは、母に向け続けてきた顔なのだろう。

「母さんが死んで、どうなるかなんて、もう確かめようがないんですけどね」

シンはレイとよく似ている。自分ではなく、ただ一定以上の能力を持つ存在が必要とされているという点において。仮に条件を満たす能力がなかったとしたら、他の誰かが持っていたとしたら、レイもシンも必要とされないのではないか。

シンは怯え、レイは嘲う。

そして、薔薇水晶は珍しく自らの意志で口を開いた。心ない人形の、抑揚のない声音で。

「どうして……、人は目から水をこぼすのですか？」

「悲しいから、かな……？」

「悲しいと人は泣くのですか？」

シンは瞬きを繰り返す。涙を払うためではない。単純に薔薇水晶の行動に困惑させられているのだろう。感情を理解できない機械。こちらの方がよほど自然に思えるが、シンもゲルテンリッターに、翠星石に慣らされてしまったらしい。

「薔薇水晶って、翠星石とはまるで違いますね」

プロジェクターの光の柱の中で、静止画のように薔薇水晶は動きに乏しい。

「薔薇水晶には心がないからな。考えたことはないか？　ゼフィランサス・ズールは何故兵器に心を与えたのか。そう考えた者がもう1人いた。それがサイサイス・パパ。先程の女だ」

何故、こんな無意味なことをしたのだろう。わからない。わからないから無意味だ。そして、無意味なら必要ない。

「薔薇水晶はゲルテンリッターではない。サイサリスがゲルテンリッターに似せて作った紛い物だ。そして、サイサリスはそのローゼンクリスタルがゲルテンリッターを倒した時、自らの力が証明されると考えている」

そのために、ローゼンクリスタルには不可視の一撃を生み出す力が与えられた。その力は、まさにガンダムを破壊するための力なのだ。

だが同時に、高性能機を造るためには、サイサリスはガンダムを真似ることでしか、足がかりにすることでしかたどり着くことができない。

「哀れな女だ。ゼフィランサスの影を追い続け、すがることでしかアイデンティティを確立できない。薔薇水晶はそんなサイサリスが作った偽物だ。兵器に心は必要ない。サイサリスが作った、少女の姿をした兵器だ」

ならば何故、薔薇水晶に少女の姿を与えたのだ、サイサリス。

プラントで食いっぱぐれる職業をご存じだろうか。気象予報士だ。すべての国土がコロニーで構成さえるプラントでは天候から日の出、日の入りまで完璧に制御され、気象予報ではなく気象予定にしかならないからだ。

昨日、寝る前に見た予定では明日は一日快晴。予定通り、窓の外から朝日が燦々と降り注いでいる。

廊下を歩いて、それはひどく遅い歩みで、等間隔に杖が床を叩く音が聞こえる。そして、足を引きずるような音も。

足音の主は扉を開く。誰でもたやすくできてしまうこさえ一苦労ちった様子で、扉はゆっくりと開かれた。その人物には左腕がなく、右手は杖を掴んでいる。

扉の先には小さな部屋。どこか企業の受付を思わせる大きめの机に、受付嬢よろしく座る女性。

人物は女性に話しかけた。若者特有の軽い調子に、どこか気取ったような話し方が目立つ。

「おはよう、リーカさん」

「おはようございます」

立ち上がって挨拶しようとする受付嬢に、人物は軽く首を振り、それを制する。

人物は若い男性。受付嬢もまた若い女性である。そして、両者のもう一つの共通項は、どちらも障害者であるということである。人物は歩く度、右手の杖が床を鳴らし、左足がほとんど動いていない。受付嬢は顔の半分を覆うほどのバイザーを身につけていた。視力のないものに視力を与えるための視力供与バイザーがずいぶんと重そうに見える。

女性は、リーカ・シェダーは視力を持たない。女性が身につけるにしては不格好で重いバイザーを振るようにして近づいてくる人物の様子を見ている。

「親父は昨日も帰らなかったみたいだな」

「はい。現在クライン派と唯一対抗しているのはタッドさんだけですから、陳情の人が詰めかけて仕方がないと聞いています」

人物はため息をついた。４年前の戦争で左腕を失い、左目は視力を失っている。左足はほとんど動かずとも、こんな簡単な動作くらい苦にはならない。受付のカウンターほどの大きさを持つ机に寄りかかるように立ち止まる。

「手紙、なんか来てる？」

「お花とカードが来ています」

健常者なら目配せですませるところを、リーカはわざわざ手で指し示した。机の脇に花束が置かれとカードが添えられている。

「花？　爆弾とかじゃないいんだろうな？」

冗談じみた人物の言葉にリーカは思わず笑みをこぼした。それに気分をよくしたのか、杖を机に預けた人物はカードを抜き取る。

花はとても独特の形をしていた。花びらが立ち上がるものと垂れ下がるものに分かれ、まるでドレスを着た貴婦人のようにも見えた。

「リーカさん、この花の名前、わかるか？」

「多分、アイリスの花だと思います」

アイリス。その言葉に人物はどこか楽しそうに笑う。カードを胸ポケットに仕舞うと、杖をとる手は軽快である。

「ちょっとでかけてくる」

「お1人で、ですか？」

「いくら障害者に冷たいプラントでも、とって喰われはしないさ。そう心配しないでくれ」

人物が歩き始めるとともに、杖の音と足を引きずる音が聞こえる。ゆっくりと離れていくその音を見送りながら、リーカはバイザーに覆われた顔の奥で不安げな顔を作る。

「お気をつけて、ディアッカさん」

昔々、人は楽園に住むことが許されていました。ところが、蛇に唆された女が禁断の実を食し、それを男に与えました。神はそれを許さず人を楽園から追放して、女に男を誘惑した罰として陣痛の苦しみを与えました。人が生まれながらに負う罪は、女のせいだそうですよ。

男が悪いのではなくて、誘惑する女が悪い。

それなら、男の人はいつになれば懲りるのでしょう。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「未来のイヴ」

原罪。罪は飽くなく産み出されて、では罰は？

第２３話「未来のイヴ」

太陽光を大型ミラーが反射し、コロニー内に降り注いでいる。人工的な昼は、何十億という昔から地球を照らし続けた巨大な核融合炉に頼りながら、プラントの昼は演出される。

平日の昼間であるためか、公園に人影は疎らである。子どもを連れた母親のグループが芝の上に敷かれたシートの上で談笑しながらはしゃぎ回る子どもの様子を見守っているくらいだ。

子どもと親というものはどこも大差ないのでないだろうか。ただ、ここはプラントだ。ひどくプラントというものを意識させた。

杖をついて公園を歩く。動かない左足を引きずりながらの歩行は独特の音を立てるため、母親たちはすぐにディアッカ・エルスマンのことに気づいた。露骨に嫌な顔を隠そうとしない。母親の中の何人かは、子どもを呼び戻しながら、ディアッカから目を離そうとしない。

（まるで犯罪者だな）

実際、プラントで障害を持つことは罪だ。劣等遺伝子のキャリアはそれだけで犯罪であり、その形質を次代に伝えることが禁じられる。手っとり早く断種か、強制収容所送りにされる。

ディアッカの場合、戦争時の負傷が原因であり、遺伝子上の欠陥――障害者であることを欠陥だとすればだが――を持つ訳ではない。人々の侮蔑さえ気にしなければ、白昼堂々街を歩くことができる。

木陰に長椅子を見つけ、とりあえずそこに座ることにした。一度座ると、自分が疲れていたことを実感できる。木製の椅子が軋む音を聞きながら深く座る。

離れたところでは、不安そうな子どもに母親が優しく声をかけている光景が見える。何であの人、手がないの。悪いことしたからよ、だからいい子でいなくてはいけませんよ。恐らく、こんなことでも言い聞かせているのだろう。劣等遺伝子を持つことが悪いということと、悪い者が劣等遺伝子を持たされるという理屈は簡単に醸成される。

教育熱心な母親たちはシートをまとめ、場所を変えた。特に何でもない別の芝の上で、さすがにディアッカのことを睨むことはなかったが、避けられていることは明白だ。

「ジョージ・グレンは、障害を持つ子どもは幸せだとは言ってくれなかったな……」

美しい子ども、足の速い子ども、賢い子どもは幸せになれるとは言っていたのだが。

歴史のしがらみから解放された理想郷プラントは、人が培ってきたものまで捨て去っていた。

吹く風に匂いは感じられない。プラントのコロニーでは地球のような雑多な生物の坩堝ではなく、人と機械の手によって管理された自然が広がっている。すべてを制御できる範囲に押し込めなければ納得できず、管理から漏れた存在を異端だと排斥する。こんなところにまでプラントの悪しき風潮が見られるとするのは考えすぎだろうか。そんな考えは突然中断させられることになる。誰かがディア

ッカの肩に手を置いた。まずは左肩だ。

「まだお父さん、プラント最高評議会の議員さんなんだって？」

どことなく底意地の悪そうな少女の声が聞こえる。

続いて、右肩に手が置かれた。

「私たち、お友達ですよね、ディアッカさん」

さわやかな声で、それこそ腹に黒いものをため込んだような声がした。

そして、ベンチの前にはスーツを軍服よろしく着込んだ女性がいつの間にかいた。見忘れるはずもない。かつてアーク・エンジェルの艦長を務めた中尉殿だ。退役したと聞いているが、髪を短くまとめ、実利と装飾を兼ね備えたような最低限の化粧の仕方は当時と何も変わっていない。

「今度は何たかりにきたんだ、ナタルさん？」

左肩はフレイ・アルスター、右肩はアイリス・インディア。この2人のことは見るまでもない。

戦争とは何か、いろいろな捉え方があるとしても、ミリアリア・ハウにとっては一つのことだった。ついさっきまで話していて人が結構な確率で突然、もう会うことができなくなる。

突然の別れを突きつけられることが、戦争なのだと考えた。

空母の大きさの割に狭くて暗い通路。ミリアリアの目の前には鋼鉄の扉があって、中からは機械音が聞こえている。格納庫の前で、ミリアリアは踏み出す1歩を躊躇っていた。

前の戦闘で、隊員の1人、ミューディー・ホルクロフトが戦死した。きっと、みんな気分が沈んでいるのだろう。自分になら慰められると考えるほど自信過剰ではないにしても、恋人を失った経験者として、何か力になってあげることができるかもしれない。

そんな決意を固めるため大きく深呼吸して、よしと小さくかけ声を発する。ドアノブを回すと、それだけで格納庫の音量が増したような気がした。ライトが眩しいくらいに照らされた広い空間のほんの片隅の扉を開けて、ミリアリアはモビル・スーツを支えられるくらい固い床に足を着けた。

格納庫は騒がしくて、ミリアリアはなるべく壁の側を選ぶようにして歩いた。ガンダムの装甲を外すくらい、本格的に整備をしているらしかった。そんな整備の人たちが忙しそうに動き回る中、堂々と真ん中を歩く度胸なんてなかった。

そうして隅から隅に移動している内に、目当ての人物を見つけることができた。それでも、目的の人を見つけられたとは違う気がする。わかりにくいとは思うけれど、ミリアリアはつい戸惑うしかなかった。

戦死したパイロットと同じ部隊の隊員のシャムス・コーザが積まれた資材の上で手を頭の下に敷いて横になっていた。サングラスまでかけて、まるでビーチで日光浴でもしてるみたいな格好をしてい

る。

「シャムス、さん……？」

「お、ミリィ、俺の戦う姿でも見に来たのかい？」

体を起こして、資材の上に座って、黒いノーマル・スーツを着た体は確かに鍛えられていてスタイルがいい。それで、顔は軟派な感じで笑ってた。どこにも、戦友の死を悲しんでいるようには見えない。

資材の影から偶然通りかかったのはスウェン・カル・バヤン。こちらはもう軍服に着替えていて、いつも通り静かな顔をしている。この人からも死別の悲しみは感じられなかった。

「ミリアリア・ハウ。ここは兵器の保管場所だ。素人が踏み入ることを推奨しない」

「ミューディーさん、亡くなったんですよね……？」

確信がもてなくなって、つい聞いてしまう。

「ああ。エインセル代表庇ってな。俺もどうせならそんな死に方希望だ」

躊躇った様子もなくて、シャムスはそんなことを軽い調子で言ってのけた。

いつまでも片づけられる気配のない部屋の中には、向かい合わせに並べられたソファー周りだけが辛うじて足の踏み場を維持している。ただ歩く場所だけ開いていればいい。それが横着なのか合理的なのか、ネオ・ロアノークは後者だと嘯いておくことにした。

少なくともソファーに座っている分には不便を感じることはなく、ここは単なる休息の場であって、必要以上の機能性が求められているわけでもに。

ソファーに座りながら、向かいの席で電話している副隊長の声を聞いているくらいなら、雑多な部屋でも何の問題もない。

「プラントって！　僕に相談もなしに……」

１０歳も年下の恋人を持つアーノルド・ノイマンはある種の遠慮があるのか、それとも恋人のキャラクターか、いつも押し切られている。アーノルドの話を聞いているだけでも、終始ペースを握られていることは簡単にわかる。

慌てたような態度で話を進めていたアーノルドが、しばらくして息を吹いた。これもいつものことだ。若い恋人のわがままに折れて、ため息をついた。

「何か困ったことがあったら僕かハンター代表に連絡するんだよ。それじゃあ、また……」

電話を切るアーノルドに、わかりきったことをつい聞いてしまう。

「フレイ？」

「ええ。今プラントのエルスマン宅にいるそうです」

アーノルドが慌てた理由もわかる。フレイたちは4年前、ザフトを離反する形で地球軍へと合流している。クライン派がアイリス・インディア、Ｉのヴァーリの存在を公にしまいと判断したためか、指名手配などはされていないようだが、それでも思い切りのよさは否定されない。

どこか疲れたような副隊長の顔に、少しの罪悪感を覚えながらもネオはつい笑みを漏らした。

「相変わらずだね、フレイもアイリスも」

ネオは2人の出会いから知っている。フレイは民間人。アーノルドは保護した軍人で、家族を失ったフレイに戦艦の操舵手としての居場所を与えたのがアーノルドだった。

もう4年も前のことになる。

「それにしても、僕とアーノルドも結構長いね」

「ええ、ヘリオポリスで隊長が現地徴用されて以来です」

「そうか、僕の軍籍はちょうどアーノルドと重なるんだね」

「あなたは当初からゼフィランサスさんのことばかりでした。周りからすれば困惑させられることばかりでしたよ」

「それを言われると痛いよ」

ネオもアーノルドも静かに笑う。そういえば、この生真面目な副隊長が口を開けて大笑いしていることは見たことがない。いつでも物静かで堅実。恋人との結婚も真摯に取り組みすぎているから遅れているという面もある。

戸籍を多少ごまかしてまで結婚を急いだネオには、何にせよ内耳をくすぐってくれる。それとも、廊下を誰かが走る音が聞こえたことが原因だろうか。

音の大きさからして女性。アーノルドも気づいたらしく、つい扉の方をそろって眺めていた。ノックなんてなかった。扉が勢いよく開かれ、姿を見せたのはエプロン姿が様になりつつあるミリアリアだった。

「ねえ、キラ！」

この艦でネオのことをキラと呼ぶ数少ない１人は、息を整えるための時間が、そのまま会話の中断になる。肩で息をするほどではないにしても、胸に手を当てて、時間にして３０秒ほど呼気の調整に費やした。

「ミューディーさん、亡くなったのよね？」

少し声が震えているのは、多分呼吸の乱れが原因ではないだろう。

ミューディー・ホルクロフトの死にざまをネオは目撃していない。ザフトの分隊を抑えるため別行動しており、その間に、ミューディーは遙かに性能の劣る機体でゲルテンリッターとの戦闘を行った。

「ヤーデシュテルンと戦ってね。ゲルテンリッターと戦えるのはゲ

ルテンリッターだけだよ」

結果としてネオはミューディーを死地に追い込んだことになる。だが、この判断を間違いだったとは考えていない。エインセル・ハンターとＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムを守ることができたからだ。

座る場所をずらして、ミリアリアに座るように促した。決して嫌われているわけではないと思うのだが、ミリアリアは部屋の出入り口に立ったまま、声を張り上げた。

「悲しくとかないの！？　あのシャムスさんだって、スウェンさんだって、まるで当然みたいに受け入れてる！」

いきなり大きな声を出すものだから、体が驚いてしまったのだろう。ミリアリアはせき込んで、また言葉が中断する。そんな少女の様子を、ネオもアーノルドも静かに見ていた。きっと、スウェンとシャムスも同じような様子でミリアリアと言葉を交わしたのだろう。

それでもネオは、戦士としてこのように対応せざるを得ない。

「慣れたとは言いたくないし、悲しくない訳じゃない。ただ、距離間というものを学ぶんだよ、戦場が長いとね。互い互いにあくまでも戦友でいよう、それ以上の間にはならにようにいようってね。シャムスだって、明るく振る舞ってるけど、でもどこか壁を作って、僕を含めて仲間の誰にも一定以上は踏み込ませないよう、踏み込まないようにしようとしている」

少なくとも、人の死にいちいち心揺り動かされているような正常な感受性の持ち主に兵士は務まらない。

「僕たちだって悲しみがないわけじゃない。もしゼフィランサスを傷つけられたりなんかしたら、僕は相手を許さない。でも、仲間とはそうはならないように気をつけてる。戦場じゃ、人の生死なんて日常茶飯事だからね」

心は本当に穏やかで、身体がリラックスしたことを隠そうとはしなかった。ソファーにゆったりと腰掛けて、ミリアリアが心に押しつぶされてしまいそうに身体を固くしている様子と対照的に思えた。

（これじゃあ、どちらが部下を失ったのかわからないな）

ただ、ネオは自分が冷血な人間とは考えていない。実際、ゼフィランサスが傷つけられた時には相手を許すことは発想さえ浮かばなかった。ネオは、ゼフィランサスを傷つけようとする相手を決して許さなかった。

「キラは、そんなこと私に教えたくてこんなところにまで連れてきたの？」

ミリアリアは今にも泣き出しそうな、悲しい顔をする。

「違うけど、大きく外れてもいないかな」

君には、悲しみを乗り越えてもらいたいのであって、無神経になってもらいたいわけではないから。そして、この経験はそのために決して無駄にはならないとも、ネオは確信している。

「ミリアリア、この戦争は、君が考えている以上に根が深いものなんだ。一体どうして戦争が起きたのか、何故コーディネーターが生

まれたのか、そんなものを、君にはいずれ見せてあげることになる」

「大丈夫だって、心配しないで」

席から離れていたフレイが携帯電話をしまいながら席に戻る。元々ついていた席とは違うが、この部屋には椅子がいくらでもあった。少し席をずらしたところで誰も気にもしないことだろう。

ここはエルスマン宅ご自慢のシアター・ルームである。ディアッカの父であるタッド・エルスマンが趣味で作った部屋で、大型モニターに向かって椅子が多数、放射状に並べられている。テレビを見ながら大勢で話をするにはもってこいの部屋だと言えた。

椅子は角度をつけて並べられているため、ディアッカが座る椅子から見ることができる椅子は数多い。電話にでていたフレイがついた椅子も見える範囲内だ。電話の相手はアーノルド・ノイマンだろう。4年前からフレイの方が積極的だった恋愛関係はまだ続いているらしい。

「結婚はしないのか？」

何気ない一言のつもりだったのに、何故か鋭い眼差しで睨まれた。

すぐ隣の席に座っていたアイリスがそっと耳打ちしてくれる。

「フレイさん、アーノルドさんがなかなか切り出してくれないって気にしてるんです……」

そういえば、４年前も口づけを唇ではなくて額にされたとフレイが怒っていたことを思い出す。アーノルド・ノイマン殿の堅物ぶりは相変わらずらしい。

なんて声をかけていいかわからない内に、フレイは不機嫌そうに顔をそらしてしまった。フレイにしても変わった様子なく、４年ぶりとは思わせない。

何か話を逸らそうとしてテレビでもつけようかと思い立つ。親父の趣味で作られた部屋だ。椅子――ソファーのようにゆったりとしたものだ――の肘掛けのプラスチック・カバーを外すと、そこには大型モニターのコントローラーが内蔵されている。

ただ、操作をする前に、部屋の扉を叩く音がした。簡単に返事をすると、扉を開けて視力供与バイザーを身につけたリーカ・シェダーがトレイを片手に現れた。

リーカはナタル・バジルールにはレモン・ティーを、ジェス・リブルと名乗ったジャーナリストはストレート・ティーを配った。丁寧な物腰で、その姿には戦時中命を落とした少女の姿を思い出さずにはいられない。

ジャスミン・ジュリエッタ。先天的に視力がなく、いつもバイザーをつけていて素顔を目にしたことは、結局一度もなかった。障害者であることに負い目を感じて、いつも周りの機嫌をうかがっているようなところは、残念ながらリーカにも共通する。

この国で障害者は、障害者は障害者であるというだけでのけ者にされる。ジャスミンとリーカ。この2人が似た印象を与えるのは、悲しいほどに必然だ。2人とも、周りの顔色をうかがうことでしか

生きてこられなかったのだから。

リーカは、今度はディアッカの下に飲み物を運んでくれる。ディアッカはストレート・ティー。片手の使えないことを気遣ってくれたのか、手渡すのではなくて椅子のボトル・ホルダーに直接置いてくれた。

「どうぞ、ディアッカさん」

「ああ、悪いな、リーカさん。おやじの私設秘書なのにお手伝いさんみたいなことさせて」

隣の席のアイリスはオレンジ・ジュース。本人は何も気にした様子なく飲み物を受け取っているよう装っているのだろうが、昔から隠し事の苦手な少女は、必要以上にリーカのバイザーに気を取られているようにも見える。

リーカは特に気にした様子もなく小さくお辞儀して部屋を後にした。ジェス記者を除いてジャスミンのことを知っている連中はみんな言葉少なにリーカのことを見送った。

沈黙の中、事情を知らないジェス記者だけが雰囲気を察して落ち着かない様子で首を回していた。女性陣3人はジェス――上司だと聞いているが――に構いもせず、それぞれ考えを巡らせているらしい。この光景だけでも、このジェスというフリー・ジャーナリストが事務所でどんな扱いを受けているかわかる。

「あの人……」

最初に声を出したのはアイリス。

「リーカ・シェダー。見て通り、目は見えない」

「ジャスミンと同じだけど、その、まだ忘れられないの？」

フレイは、４年で少しは遠慮ということを覚えただろうか。

「俺とジャスミンは元々そんな間柄じゃない。確かに俺のしていることはジャスミンがきっかけだが、引きずってるつもりはない」

そもそもリーカを雇用しているのは親父で、人選にはディアッカは関わっていない。もっとも、ディアッカがプラント国内の障害者保護の活動を進めようとしている。そんなディアッカを、父は支援しようとしてくれている。

（甘やかされっぱなしだな、俺も……）

そんな親父殿はアプリリウス市。プラント最高評議会議員として忙しい毎日を送っている。本来、息子の活動に関わっている余裕などないはずだ。すまないとは思うが、正直にありがたい。

プラントは、変わらなければならないのだから。ジャスミンが死ななければならない理由を知る者としてディアッカは歯を噛みしめ、表情を歪ませた。この顔に気づいた訳ではないのだろうが、アイリスたちもジャスミンのことを知っている。

「やっぱり、プラントって変わってないんですね」

「変わってないどころか、返ってひどくなったくらいだ。プラントはコーディネーターの国だ。そして、コーディネーターは優れてな

くちゃいけない。障害者が無能とは言わないが、不利であることに代わりはない。そんな人たちのことまで気を遣うような国なら、そもそもコーディネーターを作る意味はない」

子どもには優れていて欲しいと望む親たちが、障害者を子どもに持ちたがるはずがない、それどころか、障害を持つ子どもなんていらないと考えるだろう。そして、プラントとはそんな人間たちが集まって建てられた国だ。

「優れていることを求めるということは、劣っているということを認められないってことだからな」

少なくとも、自分や子どもたちが劣った存在であることを認められる人はここにはいない。

「特にプラントじゃ優れた遺伝子は財産だ。優性遺伝の劣等遺伝子を持ってるなんて認定された日には、強制収容所で隔離か、断種手術を強制される」

極右進化論者に言わせれば、劣等遺伝子は本来自然環境の中で淘汰されるべき存在であり、今日の社会はそんな障害者まで生きながらえさせていることはあまりに不自然であるばかりか、劣悪な遺伝子を種の中に存続させてしまうことになるとのことだ。

この国では、劣っていることは罪になる。

アイリスやフレイ、ナタルといったこの国の内情を多少なりとも理解している人は特に驚いた様子もなく淡々とディアッカの言葉を聞いている。プラントへの渡航は初めてだというジェス記者だけは、どこか不安げな様子で手つきに落ち着きが感じられない。

「プラントは優れた遺伝子操作技術を持ってる。それでも駄目なのか？」

「そんな完璧なものじゃない。それに、優れた調整にはそれだけ金がかかる。ところが、プラントは徹底した実力主義だ。障害者が金を稼ぐことはそもそも難しい。障害者を優先して雇用する特別規定なんてないからな」

障害者と健常者――あまり好きな表現ではないが――の収入には3倍から5倍の格差があるとするデータもあるほどだ。

「プラントじゃ、ナチュラルも増え続けてる。富裕層は遺伝子調整を子どもに施すことができるが、そうじゃない人はナチュラルとして生まざるを得ない。そして、実力主義の名の下、コーディネーターが優れた力を発揮して要職に就き、ナチュラルは高給取りにはなれない。するとナチュラルの子どももナチュラルとして生まれ、コーディネーターの子どもはコーディネーターとしてまた金を稼ぐ。その繰り返しだ。プラントは建国からだいたい５０年だが、その間に貧富の格差は固定され、それもどんどん広がってる」

この国では金がなければ能力は手に入らない。能力がなければ金を集められない。ナチュラルはいつまでもナチュラルのままで、コーディネーターは次第に富を独占する。

現在の地球では考えられないことだろうが、プラントには事実上の貴族制、一部のコーディネーターが結果として富も権力も能力も独占する状況が建国当初から続けられている。

今思えば、そんな制度がナチュラル蔑視、コーディネーター至上

主義の風潮を助長し、この国を支え続けている。ナチュラル対コーディネーターの図式をこの戦争に持ち込んだのはプラントの方。しかしそれは、政治家の暴走や激昂ではなくて、一部の人間の偏見や誤解が原因ではないのだ。

この国の病巣そのものが戦争さえ腐らせた。

リーカが淹れてくれたお茶をすすって、喉を休ませる。その間、重苦しい空気ばかりで誰も話そうとしない。

「少々極端だが、人口の５％が富の９５％を独占しているようなお国柄だ。まあ、我がエルスマン家もその５％の側なんだが」

少々冗談混じりで言ってみたが、案の定、雰囲気の改善にはこれっぽちも役立たない。

「その割を障害者やナチュラルが負わされているのか？」

記者らしく、質問はいつもジェス記者から来る気がする。

「いや、最近は移民もそうだな。そもそも移民なんて大半が経済難民だ。納税が楽なはずがない。結局軍隊にかり出されて使い潰されてるのが現実だ」

「でも、中には要領がいい奴もいるのね」

いつの間にかフレイが新聞を手にしていた。椅子の脇にでも置かれていたやつを見つけたのだろう。１週間前――その頃、家にいた親父が置き忘れたものだろう――のもので、一面には左頬に痣のある少年兵がギルバート・デュランダル議長から鉄十字勲章を渡され

る場面が掲載されている。フレイがディアッカたちに見せるように、その少年を指し示していた。

「シン・アスカか。今のプラントじゃちょっとした有名人だ。だが、そいつも利用されてる感じだな。アブディエルでも努力すれば功績は認められる。差別されているように感じるのは、単にお前たちの努力が足りないだけだってな」

プラントじゃ当たり前のように使われている言葉を、フレイは理解しなかった。

「アブディエルって？」

「ああ、アブディエルってのは移民のことだ。何でも、天使の名前で、仲間を裏切って上に媚びへつらった奴なんだと。コーディネーターの造物主を気取るナチュラルへの皮肉も兼ねてるんだとさ。仲間であるはずのコーディネーターを裏切って、ナチュラル様にお仕えしていたってな。地球に住んでたってだけで、裏切り者扱いだ。コーディネーターが人類の未来をかけて戦っていた間、何もしなかった厚顔無恥な馬鹿どもなんだとさ」

敢えて大げさに手を振って、嘆きを演出してやる。プラントはいつも自分たちよりも下の人間を、見下すことができる人間を探してばかりいるようでならない。

もっとも、これは今に始まったことではない。だから安心だと考えるべきか、それとも何ら改善が見られないと嘆くべきか。

戦艦の艦長として、悲観的な思考に慣れたナタルは躊躇なく後者を選択した。

「状況は、４年前よりなおひどくなっているようだな」

「今はちょうど、ユニウス・セブン世代が声を上げ始めた時期だからな」

また専門用語を使ってしまっただろうか。軽く仲間たちを見回して、やはり誰もユニウス・セブン世代という言葉を理解したようには見えない。

「ユニウス・セブン世代っていうのは、血のバレンタイン事件前後に子ども時代を過ごした世代のことだ。俺の前後がそれにあたるな。ガキの頃からナチュラルはひどい奴らだ、ナチュラルは悪い。いいナチュラルは死んだナチュラルだけだ。そんな教育を受けてきた奴らが成長し、この国を動かす若き力になってるってわけだ」

血のバレンタインからすでに１４年経つ。その時にまだ子どもであったり、生まれていなかった若者が血のバレンタインでナチュラルどもはひどいことをしたと大人たちから延々と聞かされ続けながら成長する。するとどうなるか。地球になんて行ったこともない若者たちがさも自分で見てきたかのようにナチュラルの非道を語り、プラントの正義を声高に主張するようになる。

その最たる例といえば、４年前のジェネシス発射の正当化だろう。戦争に関係のない人々も、地上の友軍さえ一緒くたに殺戮する大量破壊兵器の使用を、プラントの若者の多くは仕方がないことだと認識している。

ナチュラルは悪魔のような奴らで、そんな相手に負けたなら根絶やしにされてしまう。生きるためには、手段を選んでいるだけの余

裕はなかったという理屈だ。

だが、そのナチュラル像は、地球に住むナチュラルを見たこともない若者が、政府お墨付きの報道から得られた情報を元に作り上げられたものだ。

事実、ディアッカも捕虜になるまではナチュラルという存在に触れたことなどなかった。そのことは、やはりフレイに指摘されてしまった。

「そういえば、ディアッカも初対面の時は鼻につく奴だったしね」

初対面の時のことを、まだ根に持っているらしい。気のせいか、フレイの眼差しは、若干きつい。

（お前だって反コーディネーター主義者だったろうが！）

聞かれるとややこしいので、心中に留めておく。

「まあ、俺の場合ひねくれてるからな。お前たちに出会えなかったとしてもこいつらのようにはならなかっただろうけどな」

肘掛けのコントローラーを操作する。モニターが映し出され、デュランダル議長殿が演説し、それに喝采を浴びせる群衆の様子がモニターに表示される。何もたまたまではない。国営放送の一局が、いつもこの手の映像を流し続けているのだ。

演説台に立つギルバート・デュランダル議長は熱弁をふるう。声の響きがよく、その姿は映画俳優かと思わせるほど勇ましく凛々しくもある。

「ギルバート・デュランダル。我らが指導者様だ。若くて逞しい。演説も上手ければ容姿端麗。考えてもみろ。こんな偉大な指導者様がことあるごとに君たちは正しい、君たちは素晴らしいと宣ってくださる。ユニウス・セブン世代なんてイチコロだろ」

群衆の多くは若者だ。この中に限っては、ナチュラルもコーディネーターも、アブディエルも関係ない。誰もが偉大な指導者に熱狂し、右手を高く掲げ、高らかに勝利礼讃を謳い続ける。

そこは完全な正義と大きな力と絶対の確信に裏打ちされた熱狂に支配されている。

これでいてブルー・コスモスを狂信者の群と捉えているのだから質が悪い。

アイリスもフレイも気分悪そうに画面を見ている。さすがと言ったところか、ナタルに限っては不快そうながらも怒りを含ませた顔をしていた。

「まさにファシズムだな。４年前からその兆候は見られたが……」

「報道規制までされてるんだな……」

ジェスの言葉が語っているのは、演説画面に挿入された数枚の写真についてだ。

緑色の一般兵を制服を着たザフト軍が何やら一般市民と笑いながら談笑している。地球で撮られたもので、説明では、当初フィンブル落着でぎくしゃくした地球の人々とも、ザフトの手厚い支援で次

第に打ち解けたということだ。ザフト軍は地球で受け入れられており、無辜の民を苦しめてはいない。解放軍として受け入れられ始めている。

そういう宣伝文句にギルバートの流れるような演説が重ねられ、プラントの民は自らの正義の戦いを確信し、そんな避難民に手をさしのべようとしない地球軍への怒りを高めていく。

だが、実際地球の記者の様子を見るなら、事実は違うらしい。

「ザフトは、大西洋連邦に武力で支配されている可哀想な人々を解放して回っている解放軍なんだそうだ。だが、プラントの国力考えればそんな余裕があるはずがない」

そんなことさえ、今のプラントの民は気づいていない。目をそらしているのか、それとも都合のいい情報のみを与えられて満足しているのか。単純に地球の為政者はそろって無能で、ブルー・コスモスを悪と決めつけ、正義というぬるま湯に浸かりきっている。

開戦からすでに8年が経過し、莫大な軍事費が市民生活さえ逼迫している中、施しを与えられるほどザフトに余力があるはずがない。

続いてプラントに理解を示す国の都市に大西洋連邦軍が侵攻し、市民を虐殺している現場にザフト軍がかけつけたことで最小限の被害に押さえられたエピソードが紹介されている。プラントは徹底して敵を悪としたいらしい。

こんなことの繰り返しだ。ディアッカはため息さえついてモニターの電源を落とした。

プラントは、長引く戦争で尊いものをなくしてしまった。

ふと、横からアイリスがお菓子の箱を差し出してくれた。リーカがもってきたものではないので、アイリスの私物だろう。箱から、スティック状のお菓子を1本つまみ上げる。もちろん、母国の窮状を嘆くディアッカを気遣ってくれた訳ではない。ただ、多少気を遣ってくれたと期待しておく。

「ディアッカさん、これ、ここにくる途中に買ったんですけど、すごく高いですよね」

値段を聞くと、もう一箱同じものが買えるくらいの数値だった。試しにお菓子をかじってみると、まずくはないが、値段相応の味とも思えない。いや、今のプラントなら、これが相応の値段ということだろうか。

「消費税が年々上がってるからな。そろそろ10割の大台突破も見えてきた。物の値段の半分以上が税金てわけだ。ほかにも住民税に酒税、タバコみたいな嗜好品もすぐ税金があがるな。日用品だって同じだけの消費税がかかる。まあ、相続税は据え置きだけどな」

要するに、このお菓子のだいたい半分は品質ではなく戦地の武器、弾薬のための値段ということになる。

「こんな税金で生活がなりたつのか？」

いつものように尋ねてくるジェス――いつの間にか、手には取材用と思われるメモが握られている――の質問に答える。

「富裕層はな。だが、潜在ナチュラルや障害者、アブディエルはそ

うはいかない。だが、心優しき我が総統は救護の策を用意された。徴兵に応じれば、その人数に応じてその世帯は税を免除される」

「それって、金がなければ命を出せってこと？」

フレイらしい率直な言葉だ。だが、外れてはいない。プラントには徴兵制が存在しない。それは一見無理に戦争に駆り出されないまともな状況のように思えるが、裏を返せば金さえ国に納めれば大手を振って戦争にいかずにすむということだ。そうして、貧乏人と非正規市民たちばかりが権利を餌に戦場に送られ、命を落とす。

「そうして、プラントは莫大な戦費と兵力を同時に賄ってんのさ。兄が家のために戦争へ。それでも足りなくて次は弟が。こんなことは、よく聞く話だ」

「障害者はどうするんだ？　戦争にもいけないし、税金だってなかなか払えそうにないが」

別に聞かれたくないことではなかったが、ディアッカはあからさまに嫌な顔をしなければならなかった。ジェスは驚いたような顔をしたが、アイリスたちは変わらない。良くも悪くも、ディアッカという人間を心得ているらしい。

気分を落ち着けるため、大きく息を吹く。

「プラントじゃ、障害者の誕生は年々減少している……」

遺伝子調整技術が向上した訳ではない。そもそも、自然状態では、人は大なり小なり何らかの障害を持って生まれてくる。障害者がいなくなったのではない。

「胎児条項って知ってるか？　堕胎はこれまで世界的に認められてきた。別に俺はピューリタンじゃないから反対はしないが、それでも、堕胎が優生思想の温床に使われてきた事実を考えるとそうも言ってられない。通常、堕胎は胎児が独立して生存不可能な時期、明確に規定されてる訳じゃないが、妊娠、だいたい２２だか、２４週前後まで認められる。それ以上になると、堕胎は認められないことの方が多い」

「どうして？」

あんなユニウス・セブン世代の熱狂を見た後だと、フレイの何気ない疑問が柔らかく聞こえる。

「考えてもみろ。それ以上になると、胎児は母体から離されても未熟児とは言え生きていけるんだ。そして、堕胎は通常の分娩の手順に従って行われる」

「要するに、堕胎の行程として胎児を殺すということが含まれるということか？」

ナタルの言葉にディアッカが頷くと、若い女性――ナタルのことをおばさんだと言っているわけではない――たちは口を手に当てて驚きと不愉快さを表現した。

「そんなことがある時期、一部の国と地域で行われてきた。胎児条項って言う、ある条件をつけてな」

その条件が何であるのか、恐らくここにいる人にはわからないだろう。

「障害児だ。正確には障害を抱える人に限って、堕胎の時期的制限が免除された。それを支えたのが優生思想だ。優れた子は国力の拡大につながる。反対に、劣った子どもは余計なカビも同然だ。障害者の子どもは障害者である可能性が高い。産まれてきてはならない。そんな大音頭の下で障害児の堕胎は進められた」

息詰まるなか、無理に息を吐く。

「さて、これはもう２００年以上も昔のお話だ。人は技術も思想も進歩する。技術は進歩して、健常者の子どもでも障害児は生まれるし、それをあらかじめ予測できるようになった。プラントじゃ、生後６ヶ月までの胎児の殺害が合法的に認められている。理由は、もう説明するまでもないな」

どうせ胎児を殺すことが認められるなら、出産後でもある程度準堕胎行為としての間引きが認められるべきではないか。建国当初、そんな議論が行われ、そして認められる形で決着した。

「障害児の堕胎までなら、昔こんなことをした国がいくつもあった。その代表格が、ナチス・ドイツって知ってるか？　今の大洋州連合のある場所にあった国なんだが、ここではユダヤ人やロマ人、ある意味じゃ当然だが政治犯の虐殺を行った。それに障害者の殺害もな。障害者の殺害は合法的に行われた」

障害者を殺害してもよい。そんな法律が、事実上存在した。

「ナチス・ドイツ総統の元に手紙が届いたそうだ。それはある夫婦からの手紙で、妻が若年性痴呆症にかかったことを嘆くものだった」

夫は妻を愛し、妻には愛する妻でいてもらいたかった。妻は夫を愛し、夫を愛する自分のままでいたかった。ところが、病の進行はとまらない。妻は自分が自分でいる内にその命を終わらせることを希望し、夫はそれを理解した。

慈悲深き総統は、いたく感銘し、痴呆患者の安楽死を認める法律を作り上げた。

「プラントでも障害者や重篤な患者の安楽死、いや、ここじゃ尊厳死というべきか、ともかく、それが認められている。障害者は哀れだから死なせてあげなければならない。それがやがて、障害者は生きていることが不自然だということになる。リーカさんも実際言われたことがあるそうだ。面と向かって、どうしてあなたの両親は、あなたを堕胎しなかったんでしょうねってな」

ただ淡々と語る。それ以外の抑揚は不謹慎以外の何者でもないような気がして、ディアッカは極力、声を絞り、何も見ていないような調子で話しを続けた。

「プラントはそれを推奨さえしてきた。優れた人々による世界は、そうじゃない人を排斥することを助長しなければ存在できない。劣っていることが許されるなら、そもそも優れた存在を追い求める理由がない」

劣っている者にも十分な権利が与えられるのだとすれば、高い金を払ってまで子どもをコーディネーターにする価値が減少してしまうから。

「自分たちが優れた存在であるために他の誰かを下位と見下す。優勢思想とはそれで、コーディネーターとはそれだ。プラントとは、

自分たちが優れていると認識したいがために、ほかの誰かを絶えず下位と見下している、そんな人たちの国だ」

ここには誰もいない。ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァ艦長、タリア・グラディス以外は誰も。

部隊を率いる者の証である白い軍服に乱れがないか確認する。手鏡に写された顔は、お化粧がしっかりと乗せられている。

ここは艦長の個室である。誰かが尋ねてくるわけではなく、普段通り執務用の机があるだけで、誰かと顔を合わせる訳ではない。

それでも、タリアは身だしなみを確認し、気を引き締めた。これから通信を交わす相手は、そんな余計な気遣いさえ支払う価値がある。

無線全盛――ミノフスキー粒子のおかげで揺らいでいるとはいえ――の現代において、古めかしいほど大きな受話器を引き出しから取り出す。暗号化されていることを確認してから、タリアは気を静めるとともい声を受話器へと吹き込んだ。

「はい。暗号化はすませています」

「よろしい。では話を始めよう。どうかな？　シン・アスカ曹長は？」

暗い部屋だ。

「アブディエルとは思えないほど優秀です。フェイスには及びませんが、安定して使える駒です」

主であるはずの自分がいるというのに照明は沈み、これでは自分の顔さえ確認できないではないか。それとも、この部屋にさえ、自分はこの国の王と認められていないのだろうか。

「なるほど。君は知っているだろうか？　今プラントではシン・アスカはちょっとした顔だ。テレビではアブディエルの星として連日語られている」

「あまり2級市民に肩入れなさっては正規市民の反発を招きはしませんか？」

タリア、君もラクス・クラインと同じことを言うのか。

「アブディエルも人間だ。戦うからにはご褒美が欲しいし、ご褒美をあげればもっと頑張ってくれる。ラクス議員は、そこをわかっていない」

それを教えてあげなければならない。もちろん、授業料はいただくことにしよう。

「そうは思わないかな、タリア」

森の中で生まれた人は森で迷いません。森こそが生活の場であり、迷い込むということそのものがないからです。その森がどれほど深くても、どれほど過酷でも、その人は決して迷いません、迷っていることにさえ気づきません。そこが生きるためのすべての場所だからです。

その森こそが世界のすべてと思いこんで。

その森に生きるべき場所と信じ込んで。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「ｄｅｅｐ　ｆｏｒｅｓｔ」

理想。それは、人が限られた視野の中で、それでも必死に見つけた限界の世界。

第２４話「ｄｅｅｐ　ｆｏｒｅｓｔ」

東アジア共和国トリントン基地。シドニー湾にほど近い場所に位置するこの基地は、現在慌ただしさを増している。軍事的に大国とは言い難いこの国で、この規模の基地は珍しい。立ち並ぶ格納庫に、大型機の離着陸が可能な滑走路まで完備されている。

滑走路の両脇では輸送機がエンジンを暖め始めていた。立ち並ぶ格納庫の中からはＧＡＴ－０１デュエルダガーが規則正しく足を動かしながら歩み出る。鋼鉄の足が分厚いコンクリートを叩く音が乾いた風に染み込んでは消える。

晴れ渡った空の下、戦の準備が着々と進められていた。

東アジア共和国の悲願、カーペンタリア湾を奪還するため、基地の喧噪は幾重にも重ねられた駆動音に支えられながら戦いの気配をわずかずつ高めていく。

そのただ中に、青い装甲に身を包むＧＡＴ－２５２インテンセティィガンダムたちの姿があった。軍事費に制約の多い東アジア共和国においてガンダム・タイプすなわちファントム・ペインの所属であることを示している。バック・パックにアームで繋がれたシールドの表面に青い薔薇の紋章が描かれ、そのことは証明されている。格納庫の片隅に並ぶインテンセティたちもまた、出撃を待っていた。

ジェーン・ヒューストン率いるインテンセティは、はやる気持ちを抑え、戦いの時を待つ。気持ちばかりが急いて、しかしすることがない。コクピットでスタンバイを終えたジェーンは自然と暇を潰すようにモニターを眺めていた。

モニターの中にある人物の姿を認めた途端、その顔を不快そうに歪めた。

「ラリー・ウィリアムズ首相がどうしてここにいる？」

モニターの片隅には見事に禿げ上がった頭をしたスーツ姿の男が、大勢の制服組を引き連れて歩く姿が映し出される。格納庫の開かれたままの出入り口を横切る間の短い時間だけで、ウィリアムズ首相の姿はすぐに消えてしまう。しかし、ジェーンの表情は戻らない。

東アジア共和国が誇る臆病首相が一体何の用だ。ファントム・ペインの部隊長はウィリアムズ首相が嫌いだった。いや、軍部に所属する者にとって、天敵とも言える男である。

（戦うどころか立ち向かう気概もない臆病者が！）

部隊の仲間も同じことを考えたらしい。通信では、どこか投げやりな同僚の声が聞こえてくる。モニターには、ヘルメット越しにもわかるひねくれた口元を見せつけるように動かす若造の顔がある。若造は、マーレ・ストロードは、何か雑誌の類――出撃直前のコクピットにいるにも関わらず――でも見ているようにジェーンと目を合わせないまま口だけが動く。

「大方軍事費削減の伏線でも張りに着たんじゃないか？　まさか第2次カーペンタリア攻略戦に加わるとは思えないしな。世界安全保障機構じゃまともに発言もできないと聞くが、典型的な内弁慶だな。シビリアン・コントロール万歳」

ずいぶんと気のない声だ。ウィリアムズ首相に再三予算削減を迫

れられる軍にとって、あの男のすることにいちいち目くじらたてる者は次第に減っている。

ジェーンは、それでも歯がゆい思いから抜けきれずにいる。

「ガンダムを並べろとは言わないが、せめてウィンダムの配備くらい急いでもらわないと」

見える範囲の機体の大半はデュエルダガーである。ビームを扱えるというだけの旧式ばかりが並んでいるのは、首相の熱心な軍縮政策の一環だ。

「お国は不安なのさ。東アジア共和国一国でザフトに対抗できない。そして世界安全保障機構がどこまで協力してくるかはわからない。板挟みだな」

「面倒なものね。戦争も、政治も」

「エインセル・ハンターはジブラルタル基地をすぐに発ったらしい。船団がジブラルタル基地を出たことが確認されている。目的地は、アイスランドのヘブンズベース基地か、でなければアメリカ大陸のどこかだ」

暗いブリーフィング・ルームの中、大西洋を中心とした世界地図だけが明るく照らし出されている。テーブル上の地図にその顔を照らされながら、アスラン・ザラは大西洋西岸を軽く指でなぞってみせた。

エインセル・ハンターはこのどこかを目指している。

「追うのか？」

レイ・ザ・バレルはテーブルにつこうとはせず、暗闇のどこかにいる。注意しなければ見えない場所で、背中を壁につけたまま腕組みしていた。いつものように何を考えているのかがわかりにくいところがある。

感情を特には含めない声で、レイは続けた。

「ザフトはエインセル・ハンターにこだわりすぎている。エインセル・ハンター追撃にあてる戦力確保のためにいくつかの軍事作戦を中止せざるをえなかった。ボーパールのように工場施設としてはともかく、軍事拠点として攻略価値の低い場所に貴重な戦艦を多数投じてしまった」

「失敗だった。そう言わせたいのか？」

レイは一度アスランを見て、すぐに目を伏せる。

「追っている者は逃げている者の奴隷だということだ。逃げている者が行くと決めた通りについていくことしかできない。エインセルは何故ボーパールに逃げ込んだ？　単にフォイエリヒの修復のためだったのか？」

「待ち伏せされていたと？」

ボーパールでは片角の魔女にしてやられたことは、確かに大きな損害だった。そして、魔女の噂こそ伝え聞いておきながら、それで

もボーパール侵攻を決断せざるを得なかったことは事実だ。

レイは答えない。代わりに壁を離れ、テーブルの側へと歩み出る。

「わかっているとは思うが、今の地球軍はフィンブル落着からまだ立ち直り切れていない。例を挙げよう。まず、赤道同盟は太平洋岸の施設、都市は被害を受け、復興は完全ではない」

まず、レイはテーブルを撫でることで地図の縮尺を世界中を見渡せるほどにまで引き延ばす。その指が太平洋西岸、東アジア地区に触れると色が赤く変わり、それは広く北はユーラシア連邦から南は東アジア共和国の一角まで赤く染まる。

「ユーラシア連邦も政治的には安定せず、オーブは世界安全保証機構に参加を決定したとは言え、その影響が出始めるまでには今しばらく時間を必要とする。東アジア共和国については言及す必要はもはやないだろう。東アジアの一帯は混乱し、まとまりを欠いている」

ユーラシア連邦とオーブどちらも赤く染められると、東アジアの一帯はほとんどが赤く染まってしまった。何らかの理由でザフトに対して積極的な軍事行動ができない国々だ。

東アジアでは、ザフトは比較的自由に動ける。

「そうだな。そのおかげでカーペンタリアからハワイ基地を狙うことができている」

オーストラリア大陸の北側に開けた湾から、指で太平洋の真ん中へと線を引く。この常夏の楽園は、２００年以上前の世界大戦当時から大西洋連邦の基地が置かれている。現在攻略中だが、ここを陥

落できれば、パナマ基地への橋頭堡になってくれることだろう。

何より、休暇の際にはバカンスを楽しめそうだ。

そんな馬鹿げたことを考えている内に、レイは新たに朱を落とした。

「汎ムスリム同盟は比較的親プラント派だ。この国とアフリカ共同体はフィンブル落着の影響をほとんど受けなかったからな」

地中海の東側が赤く塗られ、ついでアフリカ大陸の北側が赤く染まる。地中海を南側から囲い込むように赤が弧を描く。

「スカンジナビア王国は軍事的には協力していない。汎ムスリム同盟とユーラシア大陸を縦断する形で分断している。アフリカ共同体のおかげで大洋州連合と南アフリカ統一機構は協力体制を構築できないでいる。そうだろ」

ヨーロッパ地区の北側が赤く塗られると、それは東側のユーラシア連邦、南側の汎ムスリム同盟とともに赤い壁を形作り、ユーラシア大陸を東西に分断する。さらに西ユーラシア大陸の大洋州連合と南アフリカ統一機構とが地中海を挟んで分け隔てられている。

ユーラシア大陸は西から東まで見事に赤くなったものだ。ローマに発し、日本――どちらの国も現在は存在していない――で終わったシルク・ロードも蒼白の規模である。

すでに8年の戦争を経て、エイプリルフール・クライシスから数えて11年にも及ぶ地球圏の混乱は決して小さなものではないのだ。

「どこでもうまくやっているつもりのようだが、プラントは所詮小国だ。いつまでも火事場泥棒の真似事は許されない。そして、俺たちは西へ向かおうとしている」

地中海から西へ。そこに待ちかまえるアメリカ大陸は、文字通り白地図のままだった。世界最強の大西洋連邦。そして、軍事的には底力を持つとされる南アメリカ合衆国。

レイの予想した待ち伏せという言葉が、俄然真実味を増す。

「エインセル・ハンターは何としても抹殺しなければならない」

「エインセル・ハンターを殺して本当に戦争が終わると考えているのか？」

ようやく勢力図を完成させたレイは目だけを動かしてアスランを見ようとする。まるで睨まれているようだが、普段からレイは笑うことが少ない。大した問題ではないと、アスランは片づけることにした。

「レイ、君が懐疑的であることは理解しているつもりだ。だが、俺は考えを改めるつもりはない。プラントはエインセル・ハンターの死を希求している。そして、プラントはまだ戦える力を残している。５つの資源衛星の軍事拠点化に成功したし、何よりも、プラントの背後には文字通りの強力な後ろ盾があるからな。プラントはまだ１０年は戦える」

レイに何を言っても仕方がないかもしれない。ちょっとやそっとで考えを変える男ではないし、少々意固地になっているところがあるからだ。それに、ザフト軍の作戦行動を決定しているのはアスラ

ンではなく、軍の上層部だ。ここで押し問答していても仕方がない。

「そんなことよりも、エインセル・ハンターの行き先だが……」

まるでタイミングを見計らったように扉が開いた。外から差し込む光の眩しさの中から、青い髪が顔を出す。第６研のヴァーリの中で唯一残ったのはこのサイサリス・パパだけになってしまった。最も、全滅してしまったところだってある。ユニウス・セブンの悲劇から約１５年。あまりに多くの命が失われてしまった。

白衣を揺らしながらテーブルに歩いてくるサイサリスは手にした資料を頭の横にかざしている。

「エインセル・ハンターの居場所がわかったよ。南米ジャブローだってさ」

テーブルに投げ落とされる資料は、ちょうど大西洋連邦のあたりを覆い隠す。これでアメリカ大陸は南アメリカ合衆国が見えるだけだ。そして、見なくてはならない国も、この合衆国だけだ。

「ジャブローは、このあたりにあるとされている」

レイが指を伸ばし、かるくブラジル地区を叩く。すると、ポイントが表示された。ジャングルの中の基地。それがジャブロー基地である。深い森の中、おまけに基地の大部分は地下に置かれている。そのため正確な位置は特定されていない。

「厄介な場所に逃げ込まれたものだな。ところでレイ、ボーパールには魔女がいた。今度は狼男でもいるのか？」

「ここはジェネラルの城だ。エドモンド・デュクロ将軍。南アメリカ合衆国准将でありながら自らモビル・スーツで戦場に出ることを好み、何より、エインセル・ハンターのファンであるらしい」

「……それって、本当に将軍なの？」

サイサリスが呆れたような顔で呆れたような声を出す。レイが珍しく笑ったように目を細めた。

「エインセル・ハンターのファンか。気は合いそうにないな」

エドモンド・デュクロの名前はアスランとて聞いたことがある。世界安全保障機構に代表として出席している。ブルー・コスモス代表であるロード・ジブリールとは不仲が囁かれているそうだが、この情報は戦闘に役立ちそうにない。

「それと、ヤーデシュテルンとローゼンクリスタルの修理も終わったよ。今、翠星石と薔薇水晶にチェックさせてる」

「そうか。後は、作戦に必要な戦力の確保だな」

「当てはあるのか？」

「今回は宇宙軍との連携も視野に入れている。それに、アフリカ方面軍の指揮官とは面識がある。甘い考えとは思うが、いくらか戦力を出してもらえないか打診してみよう」

元々エル・アラメインから直接大西洋に出ることはできない。地中海の玄関口にはジブラルタル基地があり、そこは地球軍の最重要拠点の一つだ。ゲルテンリッターが2機あるとは言え、突破などで

きない。経路は、自然とアフリカ大陸を南下しての迂回路を採用せざるを得ない。

アフリカ。この地は、アスランにとって、仲間にしろ敵にしろ、掛け替えのない人々を失った場所だった。

いつものように部屋の中、いつものように小鳥のさえずる声を聞いている。ラクス・クラインは吊された鳥かごに手をかけて、少し揺さぶっては鳥の鳴く声に微笑みをこぼす。

そしていつものようにマティス・クラインの報告に耳を傾けている。

マティスはように通りに凝った意匠のスーツを着て、資料を読み上げる声は淀みない。

「シン・アスカ。精子バンクによる体外受精。地球にしては珍しい出生ですが、それくらいなものです。特にラクス様が気にかけるほどの存在ではないでしょう」

資料から上げられた顔は、嘘偽りなく興味ない、そんな今にもため息をつきそうな表情をしている。すでに数を減らしたカード、それに対応する人物以外のことに関して、マティスは関心を支払うことはない。

「ギルバート様はどう考えておられるのでしょう?」

「単なる客寄せの猿でしょう。デュランダル議長支持派は軍部に多

く、そして軍内でアブディエルやオナラブル・コーディネーターの不満は高まっています。せいぜい、そのガス抜きに利用している程度かと」

アブディエルでも成果さえ挙げられたならば認められる。シン・アスカはすべての外人部隊の目標であるとともに、目の前に吊された餌なのだろう。

（それでは駄目なのです、ギルバート様）

王が王ではなくなった時、従者が従者ではなくなってしまった時、プラントはプラントではなくなってしまう。コーディネーターの楽園ではなくなってしまうのだから。

「シン・アスカはカードの1枚にさえなり得ません」

ラクスはつい笑う。ドミナント。ヴァーリ。現在最高の技術で作られた、最高のコーディネーターたちの中でただのコーディネーターにすぎないシン・アスカを比べること自体おかしなこと。

つい鳥かごを揺らしてしまい、鳥が慌てたような声で鳴く。この声も耳によい。脅かせば慌てる。それは当たり前のことで、ラクスの予想している通りに動く内は、何にせよ可愛らしい。

「アスランからの報告でも、同様のことが聞かれています。それにしても、ギルバート様はどうすればわかっていただけるのでしょう？」

「あの男もまた、カードの1枚にすぎません。ご命令とあればいつでも。クライン家は1000年の夢を見続けて来ました。誰もがそ

の使命と役割に気づき、その力を遺憾なく発揮できる世界のために、私は手を汚すことを厭いません」

うやうやしくひれ伏すマティス。鳥は思いのままに鳴き続けてくれる。

「それがお父様の、シーゲル・クラインの夢。クライン家１０００年の夢」

大西洋を一路西へと向かうスペングラー級ＭＳ搭載強襲揚陸艦と護送船団の群れ。多数の戦艦、巡洋艦に守られた航空母艦は、王のために海原を裂く。

王はエインセル・ハンター。露天甲板に持ち込んだ椅子に腰掛け、オーケストラに波裂く音を弾かせ、照明には傾き始めた太陽を当てる。手にした本はすでに朽ちた装丁には古の言葉が刻まれる。アラブの狂える詩人アブドゥル・アルハザードがその命と引き替えに遺した偉大な書を、王の指は１枚、また１枚と解き明かす。

禍々しく、語句の一語一句に至るまで呪詛が書き連ねられ、忌み言葉が人を脅かす存在への憎悪を謳っている。

人の誕生は、決して人の望むものではなかった。人が考えるよりも遙かな以前から存在する悪意。そして、世界は今なお悪意に脅かされている。

１人の狂気に綴られた妄想だと多くの人は片付ける。そんな絵空事を、エインセル・ハンターもこの書のお伽話を信じる訳ではない。

だが、無視できない。目をそらすことができない。

この書には描かれるのは膨大な敵視と悪意。裏側から世界を脅かす存在に対する強烈なまでの厭悪と憎悪。狂おしいほどの憎しみが綴られている。同時に、その存在に関する詳細にして膨大な知識。

何とも矛盾ではないだろうか。憎いなら避けるのではないか。嫌うのであれば目を背けるのではないか。

存在の証明と否定とが並び立ち、憎悪故の詳述。詳細故かきたたられる怨嗟。

汚物の川を泳いで渡る。針の山を素足で渡る。腐肉を貪り食うにも似ている。

狂うはずだ。狂わぬ故を持たない。おびただしい憎しみに魂が上げる悲鳴と慟哭に苛まれながらなお書き綴られていく文字の羅列。それは緩慢たる精神の死。流れ出た腐汁をインクに並べられ、絶叫のように確かに、蝕むように読む者の精神の内側へと入り込んでくる。

何故ここまで憎むことができる。何故憎い相手のことをここまで知ることができた。何故書き並べることができたのだ。

幾多の何故が理解の範疇を超え、狂気という逃げ道が優しく囁きかけてくる。そう、詩人の狂気を断ずることなしに、この書を理解することはできない。いや、理解したと嘯いて自らの安寧を誤魔化すことができないのだ。

この本は何から何まで狂っている。荒唐無稽な悪意を、常軌を逸

した狂気が暴露し、理性そのものが精神を脅かす。

人の始まりは呪われ、有史以前のおぞましい歴史とその住民の姿が語られている。人の始まりは人が望むようなものではなく、悪意は人が考える遙か以前から存在していた。この宇宙の片隅、人の歴史を覗きみるように。

音が消え、光が失われ、ただ自分とその書だけが消滅に取り残されてしまったような空虚と虚空の狭間で、しかし見下ろしてくる何かの気配は消えることがない。

指がページをめくっているのか、ページが指にめくらせているのか曖昧な感覚は、突如として消え失せる。

「お父様」

波の音が戻る。太陽は沈みかけ、すでに夕刻と呼ぶには遅い時間にさしかかっているらしい。首を持ち上げるように回すと、純白のドレス姿のヒメノカリス・ホテルの姿を確認する。

「ヒメノカリス……」

その顔は、開ききらない瞳が、訝しそうにも不安げなもののように思われた。

「お顔色が優れません。それに、汗が……」

エインセルの前髪をかき分けるように額に触れるヒメノカリスの指には、確かに濡れた跡が見られた。赤道の光にあてられたのだろうか。それとも、手にした本に原因を求めるべきか。開かれたまま

の本を、ゆっくりと閉じる。ヒメノカリスの前で開けておくものではない。勢いよく閉じたとしたなら、何が溢れだしてしまうかわからない。

「何でもありません。少々読書に集中しすぎたようです」

表紙はボロボロに擦り切れ、年代ものを思わせる書物は、それだけでヒメノカリスの興味を引くには十分なものであったようだ。しかし、時に猫のような興味を示すヒメノカリスが、それでも本に手を触れようとはしない。

「この本は私が以前好事家の遺品に含まれていたものを譲ってもらったものです。世界に潜む悪意とその邪な望みについて語られています」

残念ながら原著ではなく、数世紀後に作成されたラテン語版の写本にすぎない。それに加え、内容は完全には揃ってはおらず、詩人の狂気のすべてを伝えるには不完全なものとなっている。このような不完全なものでさえ、本来ならば大学図書館に寄贈すべきものである。

今エインセルの手の中にあるのは、ひどく偶然の産物であると言えた。

「そんなもの、お父様がご興味もたれるものとは思えません」

「確かに、すべてが突拍子なく、狂っているとしか思えない記述の連続です。しかし、私はこの書読むに既視感さえ覚えました。我々もまた、おぞましい誕生と、歴史の奥に潜んでいた悪意と戦っているのではありませんか？」

娘の反応は芳しくはない。残念ながら机までは用意していなかったため、本の置き場所というものはない。ただ、いつまでもこの本を手にしていてはならないという妙な強迫観念が、エインセルに本を肘掛けの狭いスペースに置くという妥協を促す。

汗は引き始めていた。

「つまらない話をしました」

立ったまま、父であるエインセルだけが座っている状況でも文句の一つもないヒメノカリスは本を一瞥しただけですぐに目をそらす。

「お父様、ボーパールでシン・アスカに会いました。お父様のお命を狙っています」

かつて耳にした名前を胸中で反芻しながら、エインセルは椅子に座り直す。パイプ椅子同然の座席は座り心地を保証してくれるものではないが、何にせよ、気持ちの切り替えにはなるというものだ。

「シン・アスカ。彼が戦うのは何故でしょう？　母の仇を討つために。では、それは何故でしょう？」

４年前、誰がシン・アスカの母親、マユ・アスカを殺害したのか、正確な答えがわかることは終生ないのだろうが、それを問題とする者はいない。犯罪に使われた刃物を特定することに注力する者はいても、それがどこで作られたものか調べる者はいない。

誰の意思によって殺害が行われたのか、それさえわかれば十分なのである。エインセル・ハンターがオーブ侵攻を決め、その結果、

シン・アスカの母が命を落とした。それでいい。

「私なら、仮にお父様を奪われたとしたなら、相手を絶対に許しません。私の大切な人を奪った報いを受けさせます」

風が次第に夜を含み、肌寒さを増している。

「ヒメノカリス。復讐とは何か、考えたことはありますか？」

「大切な人を奪った相手への報復です」

躊躇なく断言するヒメノカリス、愛娘をどこかたしなめるようにエインセルは笑う。

「そうではありません。本能です。仇とは大切な人を奪った存在ではなく、大切な人を奪ったことがある実績を持つ人物なのです。人は群れる生き物です。仲間を慈しみ、守り、栄えなければなりません。そんな折り、仲間を奪うことを実績として示す何かがあればどうなると思いますか？」

「わかりません」

「それは、他の何よりも仲間に危害を加える可能性が高いということが証明されたと同義です。だから本能は命じるのです。保存本能のまま、あれはかつて仲間を奪った。今後も奪う可能性が高い。排除せよ。それが、種を守ることに繋がるのだから。復讐は死者のために行うのではなく、種の保存のために行われる本能の一環にすぎません」

死者のために行われた復讐など存在したためしはない。

すべて死者に名を借りた脅威の排除と専断的な攻撃に他ならない。

殺さなければまた相手は自分の大切な誰かを奪うかもしれない。だからこそ排除せよと本能が命じる。それを人は大切な人のためと嘘をつき、自分を思いこませることで復讐を美しく仕立て上げ、美化してしまう。

所詮、本能に流されているにすぎないにも関わらず。

復讐を賞賛せよ。それは暴飲暴食を繰り返し、醜く肥え太った姿ほども美しいのだから。それは自慰に明け暮れる浅ましさほども美麗である。

「シン・アスカにとって私は、母を奪った人物なのではなく、母を奪ったが故に今後も彼の大切な誰かを奪う可能性が極めて高い危険人物にすぎません」

果たしてシン・アスカはどのような人物としてエインセルの前に立つのだろうか。

「仮に彼が単なる復讐者であり、ザフトという単なる敵であるとすれば、私を倒すことはできません。魔王を倒すのは勇者でなければならないのです」

魔王を倒すのは勇者でなければならず、勇者はいつも人間である。人間だけが魔王を打ち倒すことができるのだ。

それは、人間だけが意志を持ち、思想を持つからである。魔王を獣が倒したとしても、それは単なる殺害にすぎず、魔王の遺志は揺

るがない。魔王のイデオロギーを否定することでこそ、魔王はその存在を初めて否定される。

そして、その否定を行い得るのは人間だけなのである。

本能に憑かれた人は、獣と相違ない。

復讐者に、魔王を倒すことはできない。

「シン・アスカ。彼という存在は大変心惹かれます」

のんびりとした太陽は、ようやく水平線にその姿を隠した。まだ残された光の残り香に娘の顔は照らされている。夕日の中で、ヒメノカリスはそっとエインセルに触れるため手を伸ばしてくる。

娘が不安である時、まるでエインセルの存在を求めるように行う癖である。シン・アスカという復讐者の脅威にさらされている父のことを案じているのだ。

沈みゆく太陽を見るためと言い訳し、エインセルは娘から首をそらす。

「ヒメノカリス、私はあなたの父であり、あなたは私の娘です。そのことだけは、何があっても忘れてはいけません。わかりますね」

「はい、お父様」

しかしその手はエインセルから離れることはなく、ただ父の存在を求め続けていた。

その手を振り払うことはなくとも、しかしいつまでもこの温もりを与えて上げることはできない。ヒメノカリスにも、そして世界にも。

太陽が沈みかけたデッキの上で、何より目立つのは椅子に腰掛けるエインセル・ハンターと、すぐそばに立つドレス姿のヒメノカリス・ホテル。何にもない甲板の上をたった2人が独占している。

そんな馬鹿みたいな光景をミリアリア・ハウが目にしたのは、ほんの少しの気まぐれと、ちょっとした偶然のため。少し風に当たりたい。そんな気分で甲板に上がったところ、たまたま2人の姿が見えた。

海には他にも何隻も船が進んでいて、そのすべてがエインセル・ハンターを守っているという。魔王なんて呼ばれていることが、この光景だけでもわかったような気がする。

もしかすると、この人も、そんな護衛の1人なのかもしれない。

エインセル・ハンターとは離れた場所、話を聞くには遠すぎて、その分、会話の邪魔をしたり、変に意識させたりしないくらいの場所に黒い軍服を着たスウェン・カル・バヤン大尉が直立不動の姿勢を崩さないで立っていた。

「スウェンさん」

話しかけると、表情に乏しい顔のまま、スウェンは振り返った。ニンジンが食べられないくせに、こうして見ると凛々しい軍人さん

のように思えるから不思議だ。

「ミリアリア・ハウ」

「フルネームじゃなくて、ミリアリアで結構です。それより、どうしてこんな場所に？」

「護衛の真似事のようなものだ」

そう言うと、スウェンは顔を正面に戻す。またエインセル・ハンターとその娘さんを見守っている。ミリアリアは危険人物ではないと思ってもらえたのだろうか。あまり興味や関心があるようには思えない。

声をかけようか、どうしようかと迷って、他に何かすることもないと思って結局声をかけることにした。

「エインセルさんて、やっぱり要人とか、そんな人なの？」

すぐ横に立ったのに、スウェンはエインセル・ハンターのことしか見ていない。

（これがファントム・ペインってことなのかな？）

無口な軍人はそれでもまったくの無愛想ということでもない。視線こそ前を向いたままでも、応えてはくれる。

「無論だ。この世界において最も影響力を持つ者を挙げてみせろと問われれば、半数を超える人物がエインセル・ハンターの名を挙げる。政財界問わず、今日において彼の意向を無視できる者はいない」

「スウェンさんが守るのも、そんな人だから？」

この話題はちょっと踏み込んだ内容だったのだろうか。スウェンは横目でミリアリアのことを見て、心なし目つきが鋭いような気がする。

「私は両親を失った。そんな私を支援してくれたのがエインセル・ハンターだった。……まず、これが理由の一つにあたる」

また目が前に戻って、今度は少し、ほんの少しだけ視線が柔らかくなったような気がする。

スウェンが子どもの頃となるとまだエインセルも２０歳前後だったと思う。そんな頃からエインセルは戦災孤児の支援活動をしていたということだろうか。

エインセル・ハンターという人のことは本当にわからない。

「プラントは危険だ。自分たちを優れた存在であると盲信するあまり、自身の存在を外から見るということができないでいる。そのため、行動に躊躇が伴わず、苛烈に走る傾向にある。エインセル・ハンターはその危険性にいち早く気づき、そして止めようとした」

淡々としているようで、それでも少し、スウェンは興奮気味に話しているみたいに思えた。ニンジンのこと以外だととても静かなスウェンが浮かれたみたいに話す様子は、でも同時に危ういようにも思えて仕方がなかった。

「でも、戦争なんてしなくても……」

「戦争を始めたのはエインセル・ハンターではない。血のバレンタイン事件はプラントの自作自演だ。地球のコーディネーター排斥主義者が行動を起こした。図式としてはわかりやすいが、それならば１０億の人間を殺し、世界を焼き払おうとしたことが許されるのか？」

どうしてこんなにまくし立てようとするのだろう。普段自分からは何も言ってこない癖にこんな時だけ一方的になるなんてずるい。

「そんなことわからないけど！」

距離があるから、エインセル・ハンターたちに気づいた様子はなかった。

「でも、エインセル・ハンターや！　戦争してる人たちのしていることが正しいなら……！　トールの死は、仕方がないことだってこと……？　キラも、そう言いたかったってこと？」

そんなことを言うために、わざわざミリアリアをこんな地球の裏側にまで連れてきたのだとしたら許せない。そんな気持ちが顔をだして、どうしても抑えが効かなくなってしまう。こんなこと、この４年の間に何度もあった。発作みたいなもので、今回は小さい方。

騒ぐミリアリアに比べて、スウェンは表情だけはいつもみたいに静かで筋肉を感じさせない。こんなことがはっきりとわかるのは、スウェンが体ごと顔をミリアリアに向けてきたから。

ミリアリアだけが騒いで馬鹿みたいに思える。

「私はネオ隊長ではないが、一つ話をする。釈迦の説法に、このような話がある」

「釈迦って、仏教の？」

「私の家は大西洋連邦では珍しく仏教系に属していた。特に信心深い訳ではないが、話くらいはわかる」

「でも、頭、禿げ、じゃなくて丸めてないし……」

ミリアリアよりも少し背の高いスウェンの額のあたり、髪の生え際のあたりに手をかざして振ってしまう。風で前髪がそよいで、別にかつらということはないみたいだ。

「キリスト教徒でも神父でもなければ婚姻は認められる」

地毛、ということらしい。顔のすぐ前で手を振られたのにスウェンは特に気を悪くした様子はなかった。ミリアリアが手を下ろしたことで満足したと考えたのだろうか。スウェンは話を始めた。

「いくつかバリエーションがあるようだが、あるところに、子を失い、嘆き悲しむ母親がいた。母親は釈迦にすがり、子を生き返らせて欲しいと懇願した。釈迦はそのためには一度も死者を送り出したことのない家の、諸説分かれるところだが、かまどの灰が必要だと母親に言った」

「そんなもので、生き返らせることなんてできるの？」

話の腰を折ってしまうことにはならないかと、少し体を引いて、上目遣いになりながら話しかける。

「それはわからない」

スウェンは特に気にした様子――いつものことだけど――もない。

生き返らせるために必要なものなのに、それをそろえても生き返らせることができるかわからない。どうしてお釈迦様はそんなものを集めさせようとしたのかわからなくなった。

「わからないって……」

軽く息を吹くスウェン。もしかすると、スウェンなりのため息なのかもしれない。ミリアリアに呆れるために時間を開けてから、話はまだ続いていく。

「考えてもみるといい。これまでに一度も死者を出したことのない家庭など、存在すると思うか？」

即答はできなかった。ただ、少し考えてみると、死者を出したことのない家というのはおかしいような気もする。ただ、考えている間にも、スウェンのお話は続いていた。

「母親はあまねく探し歩いた。だが、どの家も必ず誰かを亡くしていた。死者を送り出したことのない家などなく、灰は手に入れる術などそもそもなかった。その時、母親は悟ったのだそうだ。誰もが誰かを亡くし、その悲しみに耐えて生きているのだと」

それはわかる気がする。人はいつか死ぬ以上、誰も死んだことのない家なんて存在しないに決まっている。ミリアリアがトールを亡くしたみたいに、スウェンたちファントム・ペインの人たちもエイ

プリルフール・クライシスで誰かを亡くしていた。

お話の中の母親とミリアリアは、よく似ている気がする。

「これはあくまでも私見が入るのだが、この話には2つの解釈ができる。1つは、話にあったように、誰もが悲しみを抱いて、それでも生きているということ。もう1つは、母親に子どもの死を受けいられるための準備であっという考えだ」

「準備？」

「母親は、それこそ必死だっただろう。我が子の為に灰を探し回り、たとえ願いが叶えられなかったとして、亡き子のために力を尽くすことができた。その体験と実感、そして死を受け入れるための時間的余裕ができたことで、母親はこの死を受け入れ、悲しみに耐えられるようになった」

さすがにどうしてスウェンがこんな話をしたのかくらいわかる。2つの内、ミリアリアはこの戦争で自分以外にも大切な人を亡くした人がいる、そんな当然のことを知った。そして、今トールが死なければならなかった理由を探そうとあがいている。

まるで、灰を探す母親みたいに。

「キラがあなたたちに合わせたり、こうして戦争の手伝いをさせてることが、私にトールの死を受け入れるための準備をさせてるって、ことなの……？」

「わからない。だが、血のバレンタイン事件から15年目にさしかかる現在、世界はあまりに多くの死と悲しみに触れてしまった。加

え、残された人々が悲しみから立ち直ることができないのであれば、それはあまりに悲しい」

ミリアリアの視線をまっすぐに見つめ返したまま、スウェンは微動だにしない。それは別に狂信的にエインセル・ハンターを盲信している人ではなくて、ただ悲しみに耐えるための方法の1つとして戦っているだけ。スウェンもまた自分なりの方法で灰を探しているのかもしれない。

「ミューディーさんのこと、もう一度聞いてもいいですか？」

「優れたパイロットで、優秀な戦友であり、何より、志を共有する仲間だった」

悲しみ方も、その乗り越え方もひとそれぞれだということ。そんな当たり前のことを、ミリアリアは思い出したような気がした。

「イザーク・ジュールには渡しておいたよ。そろそろ、動き出す頃じゃないかな？　ところで、そろそろご褒美をもらいたいところなんだけどね」

「駄目です。ケナフさんにはまだまだ働いてもらいます」

ケナフ・ルキーニ。怪しい風体の男を自認する男は壁に背中をつけたまま、ティー・カップから紅茶をすすっている。ここを訪れた時はいつも紅茶が出される。最も、飲み物は甘ったるいジュースと決めているケナフにとって紅茶のような繊細な香りを楽しむ飲み物は口に合わない。そのためか、ついカップの縁をつかみ、ただのコ

ップかのような持ち方でお茶をのどに流し込む。

眉を潜めたのは、何も紅茶の渋みだけが原因ではない。

ガードの固いミーア・キャンベル嬢は大きな背もたれに体を隠して声しか聞こえてこない。代わりに応対してくれるのはサラ・タイレル。どにも風雅というものを好むのか、ケナフの紅茶の嗜み方がお気に召さないらしい。

「今度はこの資料をエルスマン議員宅に届けていただきます」

資料の手渡し方には、どこか棘が含まれている。こちらも独特の形状をしたサングラスで目を隠し、なかなか素顔を見せてくれない。

「私もこう見えて反体制派のジャーナリストとしてプラントにはマークされていてね。あまり派手に動きたくないのが本音なんだけどね」

イザーク・ジュールと言う人形を連れた少年に資料を届けた時も、思えば似たようなやり取りが交わされた記憶がある。ミーアはなかなか姿を見せてくれず、サラはあくまでも棘を含ませていた。

（さすがにいきなり写真を撮らせてくれはまずかったかな）

そのせいでお嬢様思いの女中はすっかりケナフを敵と認識してしまった。お嬢様の方は気分を害した様子こそなかったが、それでもどこか遊ばれているようだ。

聞こえてくるアズラエル財団のご息女の声はどこか楽しそうに聞こえる。

「その代わり、反体制派の記者として有益な情報もあげてるつもりですよ。それに、美少女の生写真撮りたいなんて申し出、条件付きで受けてあげるんですから、それくらい我慢してください」

「たしかに。だが、君、さりげなく自分を美少女と呼びやしなかったかい？　そろそろ少女なんて歳でもないだろうに……」

「せっかくヴァーリの居場所、教えてあげようと思いましたのに」

茶化す言葉を、これには止めざるを得ない。ミーア嬢の協力なしにはコレクションが完成しない。目的のためには、ケナフはあっさりと折れた。右手にティー・カップを、左手にサラから手渡された資料を持つという滑稽な格好のまま、ケナフは深々と頭を下げる。

「すまなかった。昔から天の邪鬼でね。君ほどの女性を前にするとつい心とは裏腹のことを言ってしまう。許して欲しい」

「純粋なほどに不純。ケナフさんのそんなところ、嫌いじゃありませんよ」

元々冗談半分だったのだろう。ミーア嬢は特に気分を害した様子はなく笑い声が聞こえてくる。これでいい。道化を演じようと、写真さえ撮らせてもらえればそれでいいのだ。できればツー・ショットを希望する。

頭を下げているというのに、ミーア嬢はすでに別のことに関心が移っているらしい。はじめからこちらを見ていないとは言え、１人で頭を下げているに等しいこの状況には、少々こめかみに力がこもる。

「シン・アスカって、雰囲気が少しだけ、エインセルお兄さまに似てるよね、サラさん」

新聞をめくるような音が背もたれ向こう側から聞こえている。サラは茶器を片づける音を響かせている。

「そうでしょうか？　メリオル様やヒメノカリスお嬢様の前では言えませんが、エインセル様の方が男前です」

さて、そろそろ頭を上げてもいいだろか。特に気にされている様子もないが、そのタイミングを失してしまった感が否めない。

迷宮に迷わない秘策を教えて上げます。迷宮に入らないことです。入らなければ、迷うことなんてあり得ません。でも、人はどうしてか迷宮に囚われてしまいます。どうしようもない袋小路に自らを追い込んでしまいがちです。

甘い見通しや、責務に追い込まれて迷宮に足を踏み入れがちです。

戦争なんて始めなければ、終わらせる苦労を味わう必要なんてありません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「ＬＡＢＹＲＩＮＴＨ」

ザフト。自ら進んで迷宮に入ることを決めた人たちの、1つの呼び方です。

第２５話「ＬＡＢＹＲＩＮＴＨ」

南アメリカ共和国。西暦２０９４年に成立したこの国家は立地的、政治的に大西洋連邦に近く、世界安全保障機構においても大西洋連邦寄りの発言が目立つ。ユーラシア連邦が政治的混乱に見舞われている現在、大西洋連邦にとって南アメリカ合衆国の重要性は増しており、徐々にパートナーとしての地位を築きつつある。

ここはそんな国の要塞の１つ。ジャブローである。

アマゾンの熱帯雨林が大地一面に敷き詰められ、その間を泥の混ざった川が蛇行して流れる。人工物の臭いを一切感じさせないこの森は、しかしその地下に世界最大規模の要塞を構えている。

正確な位置は知れない。絶えず深い森の中に身を隠し、太陽にさえその姿をさらしたことはない。

南アメリカ合衆国最大の要塞である。だからこそ、魔王を、エインセル・ハンターを受け入れた。

森のただ中に、魔王の城は静かに世界を恫喝する。

「この酒はあんたと飲みたいと思ってね」

野太い男の声とともに、戸棚から酒の瓶が取り出される。細長い円筒形のボトルを掴む指は太く、男の無骨な顔つきが中の酒に映し出された。しかしその顔はどことなく喜ぶ子どものような無邪気さ

があり、男の、エドモンド・デュクロ将軍の喜びのほどが伺い知れる。

来客が手伝いのために立ち上がろうとしたのを手で軽く制し、エドモンドは器用な手つきで開けたボトルからワインをグラスに注いでいく。２つのグラスに注ぎ終えたところで、そのグラスを両手に持って客の元へと歩き出す。右手は相手の、左手は自分のためのものである。

棚からやや離れた位置にある対面に置かれた椅子の片方に腰掛けた男にグラスを手渡すと、エドモンドは改めて反対側の椅子に腰掛けた。

男は、何ともワイン・グラスを持つ様子が絵になる。まさに絵画の中から現れたような男なのだから。その手つきの一つ一つに優雅さを含ませながら、男はワイン・グラスを軽くかざす。

「光栄です、デュクロ将軍」

こう言えば誤解を招くかもしれないが、まるで初めて恋を知った子どものような心地で、エドモンドはこの男と会う日を一日千秋の思いで待ちこがれていた。

魔王と呼ばれ、実力者として知られ、この世界の誰もがこの名前を耳にしたことがあることだろう。

エインセル・ハンター。

この男はエドモンドが想像した通り、風雅で、だが、魔王という言葉が示すとおり見てくれだけの男ではない。そんな男が目の前に

いるという事実は、エドモンドを年甲斐もなく高ぶらせた。

「堅苦しいな。エドモンドと呼んでくれ。代わりに、エインセルと呼ばせてもらってもいいかな、閣下？」

「ええ。ではエドモンド将軍、お相伴にあずかります」

エドモンドとエインセル。将軍と魔王と呼ばれる2人がともに杯を傾け、優雅な手つきでエインセルがワイン・グラスを回す。

「気に入ってもらえたようだな。この酒はラサの酒でな。まだ知名度こそ高くはないが、質は良好だ」

「私は酒類は嗜みますが、友からはよく選択が悪いと窘められる。代わりに、ロードは旨い酒を知っています」

ロード・ジブリール。この名前を聞かされた時、エドモンドはついしかめっ面を作ってしまった。エインセルはそんなことまで予期していたとでも言うようにどこかいたずらっぽく笑っている。

色々とお見通しであるらしい。これには笑うほかない。

「エインセル閣下の耳に入っているようだな。だが、俺は別にロード・ジブリール新代表を嫌っているわけじゃない。ただ、閣下と比べたなら、すべてが小粒に見える。全員が全員だ。ジブリール代表が悪い訳じゃない。ただ、あの男がたまたまエインセル閣下の後継者だというだけだ」

思い出すのは世界安全保障機構でのロード代表とのやりとりだ。エドモンドは代表のやり口を手ぬるいと唾棄したが、代表はブルー・

コスモスの新しい立場を主張して譲らなかった。そう、ロード・ジブリールが悪いのではない。ただエインセル・ハンターと比べられてしまう不幸があるだけだ。

エインセルはワインで口を湿らせて、それこそ酒のように人を酔わせる声音で語る。

「私も常々懸念しています。私に与えられた才覚、才知、才能は素晴らしい。それは私に謙遜を許さぬほどです」

これほどの言葉が、まるで傲慢とは感じられない。事実をそのまま語っているが故に、その声に驕りなど入り込む余地などないのだ。

まったくもってこの男はすばらしい。

「事実だな。今の地球はあんたなしでは動かない。ブルー・コスモスの代表を退いたところで、ファントム・ペインの面々ではブルー・コスモスではなくエインセル・ハンターに忠誠を誓っている。そしてザフト共はやれエインセル・ハンターを殺せの大合唱だ」

「私は魔王と呼ばれ、慕われ、恐れられる。しかし、それでは駄目なのです。私が築いたものは意味がない。何故なら、誰も私の跡を継ぐことができず、それは持続されるものでは決してないからです」

偉大な王の帝国が、それでもいくつ滅亡したことか数えることはできないように。

この男との会話は、ひどく愉快で、さらに不可思議でもある。どこか人と会話しているように感じさせないのだ。自身を偉大と語りながら、それが事実以外の何者でもない。不安を口にしながら、し

かしそこには弱気が微塵も含まれてはいない。世界は本当につまらない。そうとでも言いたげに、すべてを理解しつくしているかのように。

この男からは、後顧の憂いなど感じようがない。

「魔王に率いられた軍団では駄目なのです。魔王に創られた世界では駄目なのです」

「だが、誰もが魔王の存在を必要としている。ユニウス・セブン以後、何人の人が死んだことか。2、３０億か。そして、まだ戦争は終わる兆しをみせない」

気づけば、エドモンドのグラスの中のワインはほとんど減ってはいなかった。それほど、この男の話に集中していたらしい。いつもなら4、5杯は飲み尽くしている頃だ。

それほど楽しみで仕方がない。この男がどのような世界を見せてくれるのかが。この戦争という戯曲にどのような指揮をしてみせるのかが。

戦争は終わらない。

「今この瞬間にも世界中で剣戟は鳴りやむことがない。是非見せてもらいたいものだ。エインセル・ハンターなら、この世界をどうするのか」

敵と味方。そんな2色に分けられた世界の中で、エインセル・ハンターは魔王と呼ばれ、慕われ恐れられる。

世界では、戦いが続けられていた。

大西洋連邦領、ハワイ基地。第２次世界大戦においてアメリカ参戦のきっかけを作り出すこととなったこの基地は２００年を超えた現在においても大西洋連邦西側の防波堤として機能している。

大西洋連邦軍にとって、ここはカーペンタリア基地を発したボズゴロフ級を水際で食い止める拠点であり、ザフト軍にとってはパナマ基地を中心として大西洋連邦、南アメリカ合衆国を眺望するにうってつけの場所である。

東アジア地区はフィンブルの落着によって混乱している。オーブ首長国は世界安全保障機構への参加こそしたが、まだ軍事的な動きを活発化させてはいない。

同盟の粗い網の目を潜り抜けるようにボズゴロフ級潜水艦がハワイを目指す。

その元凶であるカーペンタリアでは、東アジア共和国の奪還への動きは芳しくない。

東アジア共和国は怖いのだ。単独でザフトに対抗できる力はなく、また、カーペンタリア基地から西周りでアフリカ大陸を目指す航路は狭い水路が多く、ザフトの艦船を閉じこめやすい反面、ザフトをそれだけ本気にさせてしまう。水路を絶たれたザフトは全力で東アジア共和国の排除に動くことが想像に難くない。

東アジア共和国の政策は、一定のザフトを野放しにすることで軍

事の矛先が自分に向かうことを避けている。

だが、この政策はそのザフトが向かう先、ハワイ基地を抱える大西洋連邦、ジブラルタル基地の大洋州連合、ビクトリア基地を持つ南アフリカ統一機構から不満を買っている。これらの不満が限界を迎えた際に、単発的な軍事行動を起こす。この程度の戦闘に東アジア共和国は終始していた。

地中海は主戦場である。東側の汎ムスリム同盟はスエズ運河をザフトに押さえられているという事実に加え、歴史のいたずらからくる大洋州連合との不仲は親プラントとも言える政策に偏らせている。

ザフトにスエズ運河の使用を事実上黙認し、カーペンタリア基地から出発したボズゴロフ級がスエズ運河を経由しジブラルタル基地攻撃のための手駒を運ぶのである。

大洋州連合の再三の使用許可取り下げの要求を、汎ムスリム同盟ははねのけ続けている。その結果、両国の関係は急速に悪化しつつある。

地中海南側のアフリカ共同体もまた親プラントに近い政策で知られている。アフリカ大陸を二分する南アフリカ統一機構とはかつてアフリカ大陸の覇権を争った間柄であり、ザフトのゲリラを黙認する形で南アフリカ統一機構に損害を与えている。

赤道をまたぎ、戦場が横に横に広がっているこの戦争の性質に着目し、ザフトの正式名称である黄道同盟という名前への皮肉として、この戦争を黄道戦争と呼ぶべきという考え方も存在している。

重力偏差の影響が比較的小さな赤道周辺にマスドライバーをはじ

めとする宇宙への玄関口が置かれることは当然であり、マスドライバー確保を至上命題に掲げるザフトにとって戦場が赤道周りに限定されるのは必然であった。

戦いは、各地で続けられている。

かつて、中華民国と呼ばれる大国が太平洋西岸の覇権を狙い、周辺各国との間に強い反発を招いたことがあった。今より１００年以上の前のことである。

当時の中華民国は世界最大の経済大国であり、周辺国はどれ一つとして対抗できるだけの国力を有していなかった。この中華民国という国はかねてより隣接する多くの国と地域で領土上の問題を引き起こしていた。軍事力による統合さえ行い、各国のどこも平和的な解決を期待しはしなかった。

東南アジア各国は同盟を締結。勢力図は中華民国、及びそれに対抗する２大同盟の３色に塗り変えられることとなった。この同盟が、後のオーブ首長国、東アジア共和国の前身である。

この３代勢力の３すくみの睨み合いは２０年にわたって続けられたが、思いも寄らないところからバランスが崩れることとなる。

すでに３０年も前に朝鮮民主主義人民共和国が崩壊したことによって発生した大量の難民が周辺国、中華民国、日本、ロシア、大韓民国に流入し、大きな混乱を引き起こしていた。この難民の流入により最も大きな混乱に巻き込まれたのが中華民国であった。

中華民国では、世界最大の経済大国へと躍り出るために様々な歪みを生み出していた。急拡大する貧富の差。加熱しすぎた投資は、実態経済との落差を３０倍にまで高めてしまった。

投資とは衆愚の思いこみである。１００の価値の物を投資家が１１０で買い取り、１２０で売り払う。別の投資家が１２０のコストで買い取り、１３０のコストで転売する。この転売が繰り返される度、投資家の懐には１０ずつ資金が流れ込んでいく。そうして、１００のコストのものがいつの間にか１８０で取引され、消費者は８０もの余計な負担を支払ってまで、投資家を肥え太らせるしかない。消費者の消費はやせ衰え、投資家が集めた金をさらに投資していく。

１００のものが２００になり、３００になり、最終的には３０００で取引される。ただ、忘れてはならない。どれほど投資家たちが値をつり上げ取引しようと、その価値はあくまでも１００でしかないということを。２９００は、単なる幻想でしかない。

その幻想は必ず覚める。日本では金利の急速な引き締めにより金が急速に市場に回らず、１０００のものを誰も１０００で買う者はいなくなった。９００は不良債権として、かつて世界第2位にまで上り詰めた東方の経済大国を永遠に沈めてしまった。アメリカ合衆国ではサブプライム・ローンという幻想から覚めた時、リーマン・ブラザーズの破綻に始まった世界恐慌は世界を急速に不安定にし、それが世界各地に再編を促すほどの不安定の種を根付かせた。

中華民国でも同じだったのである。誰も住むことのない高級住宅地が転売を繰り返される。本来の価値をは外れ、誰もが幻想に狂い、踊る。そして、その狂乱する経済の恩恵は一部の富裕層に集められ、貧困層との格差の拡大は、国内の急速な不安定化を招いた。

そこに追い打ちをかけることとなったのが朝鮮民主主義人民共和国から流入した難民問題である。爆発的、そう表現されるほど人民の不満が高まり、それは政府への反発へと深化していく。内戦。そう各国がかき立てるほどこの時期の中華民国国内の争乱は激化。次第に分裂の様相を呈する。

世界最大の経済大国の崩壊は、世界を震撼させることとなる。

本来は中華民国の増長に対抗するために設立された2大同盟はそのまま中華民国崩壊の処理に奔走。2大同盟、ロシア連邦を中心として政治的な再編成を余儀なくされる。

ロシア連邦を中心としてユーラシア連邦の枠組みが作り上げられ、分裂した中華民国の残された勢力は赤道同盟へと後に発展していく。2大同盟がそれぞれ、オーブ首長国、東アジア共和国へと形を変えていくことは先述の通りである。

対立と政治的不安から導き出された混乱。それが東アジアの歴史を語る上で欠かすことはできない。

C．E．75年を数えた現在、赤道同盟と東アジア共和国が協力し、カーペンタリア湾奪還に乗り出している。赤道同盟は中華民国の流れをくむ国家であり、東アジア共和国は中華民国への対抗処置として設立された同盟を起源にする。

両国の対立の歴史が、カーペンタリア奪還の足かせになっていないと誰が言えよう。

歴史が戦争を生み、戦争は歴史を語る。

太陽が空にある時。浅く傾く空母の躯の上。赤い巨人と青い巨人が睨み合う。

赤い巨人は左腕にシールドを構え、その背には1対の大型ライフルとウイングがミノフスキー・クラフトの光を放つ。右手には握られたビーム・サーベルの輝き。

青い巨人は甲殻の兜を仰々しく被り、その手には鋭い槍を持つ。

ＺＧＭＦ－２３Ｓセイバーガンダムとガト－２５２インテンセティガンダム。火煙を上げながら沈みゆくスペングラー級ＭＳ搭載強襲揚陸艦の上でガンダムが睨み合う。

その直上ではＺＧＭＦ－９５３ゼーゴックが飛び回り、ジェット・ストライカーを装備したＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーと撃ち合いを続けている。２機が立つ甲板とて、撃沈され、徐々に水没していく空母の上である。

戦場のただ中、死が満ちてくるこの中で、セイバーのパイロット、ハイネ。ヴェステンフルスは誰にとっても思いがけぬ行動を見せた。

「……聞こえる、か……。……ダム」

オープン・チャンネルでもなければ、無論、東アジア共和国軍に規定に合わせたものでもない。出鱈目に周波数を設定しながら、インテンセティに通じるものを手探りでさがしているのだ。

その声は偶然にも、かすれながらもインテンセティに、対峙する

ガンダムへと届いた。

何かの罠か。対するインテンセティのパイロット、ジェーン・ヒューストンはまずそう疑い、だが、あっさりと周波数を重ね合わせた。

「敵と話とは、ずいぶん余裕ね、ザフト」

ハイネは声から相手を女と、ジェーンもまた、少年とも言える年頃の男が相手だと互いに判断し合う。

「貴様、ファントム・ペインだな。聞くが、これまでに何隻のボズゴロフ級を沈めた!?」

「数えていない」

ハイネはつい声を荒らげ、ジェーンはしかし努めて冷静であった。

地球降下直後のボズゴロフ級を攻撃し、仲間たちを殺したインテンセティはシールドに青い薔薇の紋章をつけていた。今、目の前でジェーンが搭乗する機体と同じく。

目の前の相手がその仇かもしれない。ハイネはその疑惑を素直に口にする。

「では……、降下直後のボズゴロフ級を撃沈したか？　格納庫でセイバーとやりあわなかったか？」

「では、お前がハイネ・ヴェステンフルス」

ザフトではハイネ、シンの両名をカーペンタリアの英雄として大体的に宣伝している。それが敵軍に知られていてもおかしなことはない。だが、ハイネが水没していく格納庫の中でインテンセティとやり合ったことは、その詳細まではさすがに広まっていないはずだ。

疑惑を確信に変えるには、ジェーンの言葉は十分すぎた。

「どうやらお前らしいな、仲間にそうそう水風呂をごちそうしてくれたのは！　名を聞いておこうか！？」

「東アジア共和国海軍第2師団所属、ジェーン・ヒューストン」

セイバーが腰を屈め、インテンセティが槍を構え直す。

この戦いにおいて、仇が誰であるとか、かつて討ち漏らした相手を再び前にしようとそれは何ら意味をもたない。敵であることに違いはない。討たねばならないことに変わりない。

赤と青とが飛び出し、慌ただしい戦場にまた一つ激突音を付け加える。

第2次カーペンタリア攻防戦。東アジア共和国、赤道同盟、大西洋連邦を中心とする地球軍とザフト軍の戦力は拮抗し、壮絶な痛み分けの末、ザフト軍はカーペンタリア基地を守り抜いた。

アフリカ大陸。人類発祥の地であるこの大陸は、長らく苦難と嘆きの時代を繰り返した。

欧州各国による植民地化に伴う搾取にさらされ、独立以後も根深い民族対立に欧州への経済的依存、エイズによる人口抑制が行われるほどの流行に続き、経済的な成長は森林を切り崩し人類史上最悪の出血熱を解き放つ結果となった。

欧州による文字通りの線引きは民族問題を勘案したものではなく、アフリカでは対立と内戦が各地で発生した。その戦乱は、やがて純粋な資源競争へと姿を変えていった。

かつて欧州に搾取され、独立後も外資系企業に持ち出されるでしかなかった資源を、やがてアフリカ各国が管理を始めた時、すぐに問題が露呈することとなった。各国政府が資源を私腹を肥やすことに費やし、人々の暮らしはいつまでも改善の兆しを見せなかったのである。先進各国は、しかし資源の確保に奔走し、その政治体制を是正しようとはしなかった。

やがて、明確な変化が訪れる。民主化運動の高まりである。チュニジアに始まった民主化革命の流れは当時普及していたインターネットを介して瞬く間に広がり、そして運動そのものを推進させた。活動家の横の繋がりが容易となり、また思想を広く人民に広げることとなったためである。

それはアラブの春と呼ばれ、この年を前後していくつもの独裁政権が崩壊した。アフリカに民主化の動きが生まれたこと。人々は明るい未来を期待し、だが、それは裏切られることとなる。

民主的に決定するということが、必ずしもよい結果を生むわけではない。民主化されることで、これまで独裁者によって抑えられてきた思想、宗教が台頭、やがて北アフリカの各地でイスラム国家建国が相次ぐことになる。特にエジプトで明確になったイスラム化は、

イスラム教と強く対立するユダヤ教の国家、イスラエルとの強い反発を招いた。

当初懸念されていた全面戦争勃発こそ起こらなかったものの、民主化を終えた国家は、次第に革命の勢いも薄れ、次第にイスラム教原理主義の萌芽にさらされることとなった。

西暦２０７６年、第６次中東戦争を契機として北アフリカに後のアフリカ共同体の前進である国際同盟が成立する。６度目を最後に数えた戦争を乗り越えたものの、疲弊は激しく、北アフリカでは長らく深刻な食糧難に見舞われることとなる。

その間、欧米各国の支援を受けた南アフリカでは南アフリカ共和国を中心に高度経済成長を成し遂げ、ＥＵに習った経済的な連携が南アフリカ統一機構の下地となった。

戦争と貧困に明け暮れた北と、豊かな南。アフリカ大陸内部の南北問題は、やがて深刻な事態を招く。経済的に成長を続けた南アフリカは深刻な水不足に直面し、水資源豊かなケニア地区ビクトリア湖から水を引く計画を実行しようと、北アフリカと激しい対立関係が勃発するに至った。この争いは、やがて戦争にまで発展することとなる。

資金豊かな南アフリカ軍は北軍を圧倒。ビクトリア湖を手に入れ、やがてその水を使い尽くしたことで、後の重要拠点ビクトリア基地が建造されたのは周知の事実である。

南軍優位のまま戦争は終結するものと思われた。たった一つの、森の逆襲さえなければ。

増加した人口を養うために、南アフリカでは森を切り開き、農業用地の拡大に熱心であった。それが、森に眠る悪魔を目覚めさせることになる。

かつてザイールと呼ばれ、現在コンゴ地区と呼ばれる地域、スーダン地区の2箇所で発生したこのウイルス性の災害は、６００名の感染者の内、４００名を超える死者を生じさせた。最初の感染者の故郷の川、エボラ川の名前を与えられたこの出血熱は、発見から１００年以上もの間病原微生物危険度レベル４を維持し続けたこのフィロウイルスは戦争に明け暮れる両軍に襲いかかった。致死率が少なくとも5割、最悪の場合9割を超える最強のウイルスは５００万を超える人命を殺傷。これは史上最悪のウイルス禍として今日まで記録されている。

もはや戦争を続ける力も気力も、両軍には残されてはいなかった。ウイルスという共通の敵を前に、人は争うことをやめたのである。

西暦、２１３６年、年号がC．E．に改められるわずか４年前の出来事である。

北部がアフリカ共同体と、南部が南アフリカ統一機構となった後も、両国のわだかまりは拭い切れてはいない。

C．E．６７年、プラントが地球に対し宣戦布告後、たやすく大洋州連合の最重要拠点であるジブラルタル基地を奪取、その後４年近くにわたって占領を続けられた理由の一つであるアフリカ共同体領土内でのザフト軍事行動の事実上の黙認は、決して偶然ではない。

アフリカ共同体は恨みを忘れてはいなかった。

C．E．７５年を迎えた今、アフリカ共同体は親プラントよりの政策で知られ、ザフト軍のゲリラ活動を黙認している。ザフトは、勇んでビクトリア基地へと攻め込んでいる。

かつて奪われた地に犬が噛みついてもよい。未練はなく、ただ怒りだけが残滓を胸に残す。

１００年以上前の禍根でさえ、戦争は浮き彫りにする。戦争は、人の悲しき歴史を幾度となく示し続ける。

夜風を遮るものは何もない。地平線の彼方に逃げ込んだ太陽はその熱を残すことさえ嫌がった。砂の一粒一粒がわずかな熱さえ奪い去ってしまいそうな砂漠の夜でさえ、砲火も、戦火も奪い去ることはできない。

砂が弾け砲弾が爆裂する。ビームに炙られた砂が悲鳴を上げて暴れ狂う。

砂で覆われたアフリカの大地は、しかし戦争を呑み込むことはない。

「派手にやってるな」

砂漠上空を飛行する大型輸送機の群。すでに後部ハッチが展開され、それぞれモビル・スーツが縁に立つ。その中の一つ、赤いＧＡＴ－１３１イクシードガンダムの中から聞こえた声だ。

どこか楽しげにさえ聞こえるその声の主はカイト・マディガン。

コクピットの中で黒いノーマル・スーツを身につけた男は、出撃間近であるにも関わらずヘルメットをつけないまま、延ばされた顎髭の手入れに余念がない。すでに大人としての雰囲気を身につけた男性ながら、軽薄そうな印象を隠そうともしていない。モニターに映る、爆発を繰り返す砂漠を愉快そうに眺めている。

「早めに片を付けてしまおう。軍人は給料性だからな」

このマディガン機の後ろにはまた別のイクシードガンダムが出番を待つように佇む。声の主はそのパイロット、レオンズ・グレイブズである。眼鏡をかけ、カイト・マディガンとは異なった堅物の印象を与えるが、同時にその声は打算を感じさせて冷たいと思えるほどである。

「用心しろよ、レオンズ。遺族年金を本人は使えないからな」

そして最後。輸送機の格納庫最後の機体も、やはりイクシードである。パイロットはエドワード・ハレルソン。褐色の肌が健康的であり、吹く鼻歌は陽気なリズムを刻んでいる。しかし、3人の中で唯一ヘルメットを被り、操縦桿を握りしめる手は力強い。

このエドワードこそがこの部隊の隊長であり、イクシードはどれもが左肩に青い薔薇を、そして1対の大剣を背負う。

ファントム・ペイン、南アフリカ統一機構所属軍。それが彼らの肩書きであり、エインセル・ハンターのために、ザフトを屠る猟犬である。

「了解です、隊長殿」

「じゃあ、いくとするか、レオンズ、エドワード隊長」

迷いなく、しくじりなく3機のイクシードが夜空を飛び降りる。並行する輸送機からＧＡＴ－０１デュエルダガーが降下を開始する。上半身を中心として追加装甲が施されたこれらの機体は、南アメリカ統一機構の主力機である。すでに旧式として遅れた設計のデュエルダガーに追加装甲を施すことで性能の底上げが計られている。

主戦場を砂漠に設定する南アフリカ統一機構にとって設計が単純であるがその分メンテナンス性が良好であるデュエルダガーは状況によってはガンダム以上に重宝される。

武装はライフル、シールド、そして、2本のビーム・サーベル。必要最低限、しかし必要な性能すべてを満たすデュエルダガーが夜の砂漠を踏みつけて着地する。

敵を探してデュエルダガーの首が左右に動く。すると、それが突如傾いた。首だけではない。胴体が、腰から上がまるごと傾いて落ちる。焼き切られた胴体だけが、何者かに切り取られたことを証明している。やがて残された屍が爆発することで砂漠を震し続ける戦火に加えられる。

立ち上るいくつもの火柱の間を影が走る。

状況を認識できず立ち尽くすデュエルダガーの左足が吹き飛ぶ。思わず膝をつく姿勢で体勢を崩す。大きく視線を低くしたデュエルダガーは、ここで初めて目撃する。闇が獣の形を成して飛びかかってくる光景を。

味方の損害が想定以上に激しい。このことはガンダム・パイロッ

トたちに一つの予感を抱かせた。

「ザフトの動きがいい。これはいるな……」

すでに両手に大型ビーム・サーベルを装備したイクシードのコクピットでカイトはヘルメットを脇から取り出した。すぐそばで同じく大剣を手にしたレオンズもまた、ヘルメットを装着している最中であった。

「割に合わんな。歩合制にするよう、上に掛け合ってみるとするか」

普段軽口を戦う2人を真剣にさせるほどの存在がここにはいる。

黒煙の間、火明かりに照らされた獣がカイトのイクシードへと跳びかかる。漆黒の体に四足獣の肉体。三首に光の牙を生やした番犬がイクシードへと踊りかかったのである。

イクシードの大剣と獣の牙とがぶつかり合い、ビームの輝きを散らす。力任せに押し返された獣は、その四肢で強く砂を踏み、着地する。

漆黒の装甲に、ザフト軍初のビーム兵器搭載機であるバクゥを思わせる四足獣の姿。その背からは2本の首が延び、合計3本の犬を思わせる首からはそれぞれビーム・サーベルが伸びている。

ＺＧＭＦ－８８８ヒルドルブ。ザフト軍の汎用型陸戦機である。汎用と呼ばれている以上、単なる局地戦専用機ではない。

また1機のヒルドルブは挑みかかる。狙いはレオンズの機体であり、四足獣として跳び出したはずのそれは、しかし人へと姿を変え

ていた。２本の首をそのまま背負い、ザフト製モビル・スーツの特徴であるモノアイが光。両手に構えたビーム・サーベルを軽々振るっては次々とレオンズ機に叩きつける。

四足獣への変形を可能とした可変機。それがヒルドルブ。不整地においてはバクゥを思わせる四肢で走破し、３本の首がビーム・サーベルを牙と光らせる。モビル・スーツ形態ではＺＧＭＦ－１００ヅダ同様ウィザード・システムによる換装を可能とする。

アフリカ戦線のザフト軍を支える陸戦の主力機である。

人型であろうと２本の首は肩越しにビーム・サーベルを、まるで剣の柄を噛んで保持する形で発生させている。レオンズのイクシードが対艦刀を叩きつけると、それは受け止めるとともに刃を傾かせ、攻撃をそらした。

「練度が高い！　やはり奴の部隊だ！」

南アフリカ統一機構軍を恐れさせるザフト軍アフリカ方面軍指揮官は、勇猛果敢で知られている。そしてその部隊もまた、すべてがヒルドルブで構成される特殊部隊としてその名を轟かせていた。

砂漠の虎。

ザフト軍最強の陸戦として知られる部隊が夜の砂漠を荒らす。しかし、青い薔薇もまた、世界の至る所で咲き乱れ、枯れることなどない。

それは、まさに燃え盛る炎が渦巻いたかのようであった。深紅の旋風が、レオンズと対峙するヒルドルブの脇を吹き抜けた。切断と

呼ぶにはあまりに強引かつ強力に任せた一撃がヒルドルブを胴裂きにする。体が弾けるように別れ、ヒルドルブの半身は別々の箇所に叩きつけられるとともに爆発する。

爆風にさらされ、イクシードの深紅の装甲がフェイズシフト・アーマーの輝きを放つ。

その輝きめがけて四足獣形態のヒルドルブが飛びかかる。本体の首からは左右に2本の、背中の第2、第3の首からはそれぞれ左右の片側にビーム・サーベルが伸びる。計4本のサーベルを、しかしイクシードはものともしない。対艦刀を握りしめたままの左手を強引に叩きつけると、決して軽くはないはずのヒルドルブがひっくり返り、腹を上に向けたまま砂地へと叩き落とされる。悲鳴など上げぬはずのモビル・スーツが、しかし苦痛にうめくように四肢を不自然にひきつらせたかと思うと、その胸部へと対艦刀が突き立てられた。

膨大な熱量を持つビームの熱が胸部ジェネレーターを焼き尽くし、爆発がイクシードを包み込むほどに大きく、大きく吹き飛ばす。

爆煙の中から立ち上がるイクシードは、やはりその深紅の装甲を赤く輝かせる。その姿は、まるで敵の返り血を浴びているかのよう。ゆえに彼は、エドワード・ハレルソンは呼ばれる。かつて最も知られたシリアルキラーは被害者を幾度となく切り刻んだ。その姿は血にまみれただろうと誰もが空想し、その姿を重ね合わせた。伝説の殺人鬼と敵機の血にまみれた如きイクシードの姿を。よって、斬り裂きエドと。

虎は密林に生息する生物である。斬り裂きジャックは３００年以上も昔、工場の排煙に煙る街の中に消えていった。

アフリカの砂漠には、あり得ない存在が、しかし名に確かな力とともに対峙する。

砂漠の虎。それは戦火に照らされる闇の中から歩み出る。元来、漆黒の装甲をしま模様に染めた三首の獣は威風堂々。その背後に2機のヒルドルブを従え、吹き抜ける風は虎が鳴らした喉の音。

斬り裂きエド。獣から吹き出した血にも等しい黒煙と残り火の中立ち上がる。左肩には青い薔薇。この世で最も鋭い剣を構え、カイト、レオンズの2人がその背後に並ぶ。時折爆ぜる火花は、獲物の断末魔。

アフリカの砂漠は、月明かりと戦火によって照らされる。

客人を迎える時はシアター・ルームにあげることがエルスマン家での決まり事と化していた。

アイリス・インディア、フレイ・アルスター、ナタル・バジルールの3人が1つの椅子、ディアッカ・エルスマンの座る椅子を囲むように立つ。足の悪いディアッカだけが座り、残りは皆客人を迎えるために立っているのだ。

まもなく、扉が開くとともにまずはジェス・リブルが部屋に入ってくる。ジェスはアイリスたちの方を見ることなく、後ろを気にした様子で体を傾けていた。

「わざわざすまないな。俺はプラントでの取材経験がなくて、勝手

がわからないんだ」

ジェスに連れられて入ってくるのは女性である。短く整えられた髪や、お洒落なジャケットを着こなした様子が、人の視線を意識する仕事をしているのだと思わせる。この印象そのままに、アイリスたちが揃って様子を眺めていようと、気にした素振りを見せない。どこか余裕のある印象のまま、ジェスの後について歩く。

「ジェスさん、この人は？」

部屋の真ん中、ちょうど大型モニターの前のあたりでジェスは立ち止まる。

「ベルナデット・ルルー。師匠のところで一緒だったんだ。プラントに戻ったって聞いてたから、今回の取材に協力してもらえればと思ってさ」

「プラント政府について探ってるんですって？」

ベルナデットは体こそジェスに向けているが、その顔はアイリスたちの方を向いていた。どこか落ち着きに欠けるジェスの声とは違い、とても聞きやすく、落ち着いている。

「ああ、いつの間にか、そういうことになっていた」

「そう。でも、悪いことじゃないわ。今、政治はとても若い娘好みよ」

ベルナデットは胸ポケットか2枚の写真を取り出す。いつも持ち歩いているのだろう。多少くたびれたその写真には、それぞれ男性

が1人ずつ映されている。目線はカメラを向いていないところを見ると、許可を得て撮ったものではないのだろう。

それも無理はない。世界で最も有名な2人が易々撮影に応じてくれるとは思えない。現プラント最高評議会議長、ギルバート・デュランダル。ブルー・コスモス代表を務めたエインセル・ハンター。

「ギルバート・デュランダル、エインセル・ハンター。どちらも目が覚めるような美形でしょ」

そちらの方が受けがいいと考えたのか、ベルナデットはアイリスやフレイに見せるようにしてから写真を仕舞う。効果的なところを選ぶところからも、このベルナデットが紹介された通りの職業であることを匂わせている。

その反面、ジェスがどこかトボケた様子に見えてしまう。

「そりゃ、そうかもしれないけど、それがどうしたんだ?」

「わからない? 政治家なんてケバいおばさんか、恰幅のいいおじさんの仕事よ。でも、2人ともとてもいい男よ。スタイルは抜群で、甘いマスク、エインセル代表はあまり前には出てこないけれど、ブルー・コスモス内部じゃ、演説上手で通っているらしいわ」

不出来な同門をワトソン役のように利用し、ベルナデットはまるで周囲を試しているようにもったいぶって、しかし十分な情報を与えていた。

観客はついこうではないか。そんな意見を言ってしまいたくなる。ディアッカが、まず応じた。

「要するに、プレビシットってことか？」

「プレステージ？」

「プレビシットだ。選挙が政治家の政策を吟味する場ではなくて、その人物の人柄やスター性を審査する場所に変わっているという話だ。当然だが、あまりいい意味で使われる言葉じゃない」

フレイに間違った方向に拾われながらも、ディアッカの用意した答えはベルナデットを満足させたらしい。敏腕記者はジェスをほったらかしにして、ディアッカたちに完全に向き直る。

要するに、より効果的な聴衆としてディアッカたちを選んだということなのだろう。

「今プラントじゃ、ギルバート・デュランダル人気はそんじゃそこらのタレントを凌ぐほどよ。それに、就任後地球圏においてザフト軍がまだ重要な拠点を一つも失っていないこともあって、デュランダル議長が言うことはすべて正しいと人々が思いこみ始めている」

「危険な状況だな。クライン派の政策はほぼ素通りということか」

厳しい表情のナタルの言葉は、決して否定されない。現在、プラント最高評議会の１２議席中、１１席をクライン派が牛耳っている現状は誰もが知っている。

「その危険性もあるわ。コーディネーターは賢すぎるのよ。少なくとも、コーディネーターは自分たちがそうだと考えているわ。この中に政治家、法律を学んだことがある人は？」

右手を軽く挙げて挙手を促すベルナデット。しかし、この中で手を挙げる者はいなかった。しばらくして、ベルナデットもまた手を下ろす。

「私もよ。だから簡単にね。法律は、大まかに分けて2つの流れがあるそうよ。自然法と実定法。自然法は、法律の上に倫理だとか道徳、不可侵領域とも言えるものがあって、どんな法律でもそこをねじ曲げることはできないとされているわ」

「要するに、どういうこと？」

正直なフレイの言葉に、ベルナデットは小さく微笑みを作りながら応じた。

「たとえば、人権を法律で好き勝手に制限してしまえるとしたら問題でしょう。だから自然法思想では人権みたいな大切なものを法の上位の存在と位置づけ、操作されてしまうことを嫌うの」

「でも、人権とか、そんな曖昧なもの、勝手にあるなんて言われても……」

「そう、そこが自然法の問題ね。もう一つの実定法は、そんな理由からそんな人権も法律で制定すべきとしているわ。その方がわかりやすいし、自然法と違って宗教色もない。プラントは当初理想郷として建国されよとしたわ。人種も民族も、そして宗教も関係ない、旧人類のしがらみがいっさいない国としてね。そんな国が実定法の流れをくむ法律に基づいて憲法を制定したのはごく自然な流れね」

「それって、問題なんですか？」

続いて質問を引き継いだのはアイリス。律儀にも挙手して質問している。ディアッカとナタルは口を固く結んだまま、難しい顔をして考えを巡らせている。

「法と道徳は違う。でも、決して切り離して考えることもできないわ。悪法問題というよくよく言われる問題があるわ。ある国で殺人を合法とする法律が制定されたとして、人を殺したとする。法という概念からではこれを裁くことはできないの」

「どうしてですか？」

「反対に考えて。合法とされている行為で罪に問われたら、それこそ問題でしょう」

「そっか……」

まるで飲み込みの早い教え子に諭しているように、楽しげにさえ話していたベルナデットが、急に声をひそめ始める。

「最悪の場合、法律が為政者に恣意的に利用されてしまうことを意味するの。まさに悪法も法、なのよ」

不必要に深刻になっている。そのことに気づいてか、ベルナデットは一度、敢えて微笑んでみせたようだった。

「でも、殺人がいいこととは思わないでしょう。そんな時は自然法の方が有利なの。自然法は法の上の概念を規定している。そのため、法にはかなっているとしても悪いことは悪いのよ」

「それが、今のプラントがさらされている危機だと、そう考えてるんだな？」

ディアッカの言葉に、ベルナデットは満足げに首肯する。

「そう。プラントは歴史的必然から憲法を実定法思想から作り上げてしまった。法がすべてで、権力者の意思と、それを国民が認めてしまう場合、どんな法律でも通すことができてしまうの。そして、今ギルバート・デュランダル議長の下、プラントは熱狂的なプレビシットに走っている。さてさて、どんな法律ができあがることかしらね？」

「何か先例でもあるのか？」

「西暦１９００年代に登場した大洋州連合のナチスドイツでは合法的に独裁政権が誕生したし、それと今は赤道同盟や東アジア共和国、オーブ首長国、この３カ国に分かれているけれど日本という国も人権が制限されたわ」

「ドイツと日本は、確か同盟国だったな」

「ええ。別に驚くに値しないわ。日本の明治憲法はドイツのプロイセン憲法を参考に作られたもので、２カ国とも揃って実定法の国よ。歴史的な解釈は避けるけれど、法律という観点から見たなら、この両国の結びつきは至極当然なのよ」

議員の子息とジャーナリストの会話がしばらく続いた後、アイリスが再び手を挙げた。

「要するに、プラントでも独裁国家誕生の危険があるということで

すよね？」

「ええ。少なくとも、私はそう考えているわ。コーディネーターはね、賢すぎるのよ。ナチュラルにはできないことができる。ナチュラルの二番煎じに甘える必要はない。それは同時に、人類が多大な犠牲を支払ってまで得てきた知恵も技術も進んで捨ててしまったことと同義なのよ」

そんな例の一つを、ベルナデットは意外なところに求めた。ビーム兵器を先に開発したのは大西洋連邦である。ところが、ザフト軍初の本格的なビーム兵器搭載機であるＺＧＭＦ－５１５ゲイツにはビーム・ライフルこそ装備されたが、ビーム・サーベルは見送られ、取り扱いに癖の強いビーム・クローが採用された。

ナチュラルの後には続かない。そんな驕りにも近い自負が感じられるエピソードであるとした。

「コーディネーターは、毒に溺れる毒蛇で、日光に当てられる鳥と同じ。自分の強すぎる力を抑えることができず破滅と隣り合わせにある存在だから。そして、民衆はエインセル・ハンターを、ブルー・コスモスを恐れている。そんな法案は通せない、なんて誰かが言ったとしても、すぐこう言い返されるわ。ブルー・コスモスが攻めてくるぞ。そして、誰も反論しなくなる。内憂外患とでも言うのかしら？　プラントは内と外から暴走させられているのよ」

もう一度、ベルナデットは写真を取り出す。今回は1枚だけで、手慣れた様子でそれは予定された人物の写真であった。

ＳＰに囲まれて階段を降りているエインセル・ハンターの横顔が写っている。

「そういう言う意味において、エインセル・ハンターはとても危険よ。プラントにとって彼は、寒気がするくらい美しく見えている。格好いい指導者と美しい魔王の一騎打ち。まさに劇場型ね。端からなら、きっと楽しめたでしょうにね」

これから起きることに想像を巡らせているのだろう。ベルナデットは眉をひそめて難しいひゅじょうを作り上げる。アイリスとフレイもまた、難しい顔をして口元に手をやっていた。ただし、その理由はベルナデットとは異なっている。

「でも、エインセルさんは、別にそんなことしようなんて考えてる訳じゃないと思うんですけど……」

「エインセルさん？」

呼び方にしては妙に親しげであることに、ベルナデットは疑問を隠そうとはしない。

「エインセルさん、私の足長おじさんですから」

とアイリス。フレイも続けた。

「私にとっても命の恩人だし」

表情を止めて、しばらく考え込んだようなベルナデットは、やがて結論を出した。息を吹いて、あくまでも信じようとはしない。

「冗談だって言うなら、今の内よ」

髪をかきあげる仕草を挟むベルナデットに、アイリス、フレイが同時に携帯電話を突きつける。

「ツー・ショット写真」

ウィンクしながらピース・サインを出すフレイと静かに微笑むエインセル・ハンター。

緊張した面もちのアイリスと、やはり静かに微笑むエインセル・ハンター。

「あなたたち、名前は？」

アイリス・インディア。フレイ・アルスター。ナタル・バジルール。ディアッカ・エルスマン。名前が並べられた時、ベルナデットは大きく笑った。口と腹を押さえなければならないほど大きく。

ひとしきり笑った後、ベルナデットは話にまるでついてこないジェスの方へと勢いよく振り返る。

「ジェス、どうしてこんな大きな話、今まで隠してたの！？」

やはり、ジェスは何も気づいた様子はない。瞬きを繰り返すばかりで、要領を得ない。

「この子たち、皆アーク・エンジェルのクルーよ」

アーク・エンジェル。近代戦史を語る上で欠かすことができない戦艦の名前が登場した時、ジェスは目を見開いて驚きを素直に表現する。

「そんなこと聞いてないぞ！？」

「履歴書には軍歴ありって書きましたよね」

「さすがに傭兵してザフト軍にまで入ってましたなんてことまでは言わなかったけど」

アイリスとフレイはむべもない。

「あの時はだいぶ無茶したんだぞ」

「はいはい、感謝してるって」

フレイは椅子に座ったままのディアッカの肩を揉み始めた。秘密――とも呼べないが――がバレたことを構う様子はまるでない。

「ジェス、呼んでくれてありがとう。おもしろいことになりそうね」

ベルナデットさえ、すでに口元が緩んでいる。当事者と、状況を楽しむことができる者。そして、事態の急変についていくことができないジェスだけが取り残されている。

そんなジェスの様子を、ディアッカはつくづく他人事とは思えないと眺めていた。

「ＤＳＳＤについて何かわかったか？」

人気のない廊下。カガリ・ユラ・アスハは立ち止まり、手に新聞を握りしめたユウナ・ロマ・セイランを待つ。

「いや、異常にガードが固くてね。まるで、軍事施設並さ。ただ、おもしろい記事を見つけた」

そう、ユウナは新聞を開いて見せる。わざわざ指で指さなければならないほど小さな記事を示している。フィンブルの破片を分析した結果だとかが、落着地点の写真とともに掲載されている。

「フィンブルがアステロイド・ベルト由来と判明か。ずいぶん小さい記事だが、ジェス・リブル？　知らないな」

火星と木星の間に存在する小惑星群なら、確かにＤＳＳＤが何らか関連している可能性はある。大手新聞社がこぞって被害状況や戦況に紙面を割く中、記事の姿勢は一風変わっていると言えた。

「きっとフリーのジャーナリストだろうね。話くらい聞いてみたいと事務所に連絡してみたけど、長期取材で留守だってさ。噂じゃ、プラントに行っているそうだよ」

「このご時世にか？　ジェス・リブルか。なかなか行動力のある新進気鋭の記者のようだな。覚えておいて損はない名前のようだ」

「あなたたち、少しお話聞かせてもらえない？　ああジェス。何か飲み物人数分もらってきてちょうだい」

すぐに行動を起こせないジェスに対して、ベルナデットは手を叩

いて急かした。

「ほら、早く」

戦争の目的は？　敵を殺すこと？　味方を守ること？　勝者の名の下、正義を語ること？　無理難題を敗者に押しつけること？　敵を悪と罵ること？　戦う意味はこのどれか？　それともこのすべて？　きっとそんなこと。

それなら何を迷うことがありますか？　ただ敵を虐げ、味方だけに温情を。

戦う意味なんてわかりきったことではありませんか？　すべては勝つことに帰着するでしょう。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「ディレッタントの密かな楽しみ」

正義。そんなもの、厭世家の手慰みでないと、あなたは言えますか？

第２６話「ディレッタントの密かな楽しみ」

「５機撃墜おめでとう。君もいっぱしのエースだな」

いつの間にか、格納庫にいるよりも医務室にいる時間の方が長くなっている。自分は学生ではなく軍人だ。そう、ハイネ・ヴェステンフルスは自嘲した。ハイネを出迎えた女医は、パイロットのそんな顔色を気にもしないで祝福の言葉を投げかけた。いつものように医者とは思えない派手な服装に、すらりと伸びた足を組んで座っている。若造には目の毒だ。

「全部デュエルダガーだ。それに、ケッテ・リーダーにしては少ない方だ」

少々ぶっきらぼうな返事をしてしまったのは、ある種の照れ隠しであろうと自覚する。それが褒められたことに対してか、美脚を見せられたことに対してなのかまではわからない。

いつもの場所。医療器材の棚の近くに置かれた椅子に腰掛ける。この部屋ではいつもこの椅子で女医殿と、ロンド・ミナ・サハクと話をすることは、ほとんど習慣と化していた。

「あまり謙遜していると乗り遅れてしまわないか？」

コーヒー・カップ――ミナが飲むのはブラックと決まっている――を傾けながら言ってきた言葉の意味を、すぐには理解できなかった。消去法として考えを巡らせると、だいたい見当はついた。

ハイネと時を同じくして鉄十字勲章を与えられた男が後１人いる。

「シン・アスカか。議長の晩餐の時に見かけたが、どうということない男だったな。当然ユニウス・セブン世代でもないが、かと反体制派というほど先鋭化されているようにも見えなかった」

「どっちつかずか。確かに、今のプラントはあらゆる意味で二極化していると言える。ただ、それは君も同じだろう」

特にハイネがすぐに言葉の意味を理解できるとは考えていなかったのだろう。カップを側の机に置く。そんな短い動作でミナはすぐにつづきに入った。

「この基地に降りてくる者は若者は多くの場合、やむなく戦場に送られてくる者か、でなければコーディネーター至上主義者だ。君は戦争に積極的とも言えるが、しかしギルバート議長をどこか冷めた目で眺めているようにも見える」

図星だ。そんなにたやすく見抜かれるほど、自分は単純な人間か。つい顔をしかめてしまう。

「医者はカウンセラーもするのか?」

「多少はな。だが、この程度の人間観察で心理学を謳うつもりはない」

要するに、見ていればわかるということらしい。確かに、勝利を我らに、なんぞ一度も叫んだことはなかったし、戦争反対とプラカードを掲げたこともない。

「俺と親父はコーディネーターだが、お袋はナチュラルだ。コーデ

ィネーター至上主義には、ついていけないところがある」

おやじ曰く、女は天然ものに限るとのことだが、そう言ってお袋には殴られていた。こんなことまで教える必要はないだろう。

「それより、軍医殿はどうして何だ？　今のプラントで医者が食いっぱぐれることなんてなさそうだが？」

わざわざ戦地にまで出向く必要があるようには見えないということだ。そして、コーディネーターと人類の輝かしい未来のためと宣うようにも見えない。

「ちょうど、兄が軍人だった」

「それは手段であって動機じゃない。それに、ユニウス・セブン世代と言えば、あんたも入るんじゃないか？」

「辛うじてな」

こちらも理由の一端を話した。相手にも話させるつもりで視線をそらさずにいると、ミナは笑いながら息を吹く。

「私は４年前も戦争に参加していた。地上軍で、カーペンタリア基地所属なのは変わらない」

「ということは、ヤキン・ドゥーエ攻防戦の時には……」

Ｃ．Ｅ．７１年当時からカーペンタリア基地は小規模とは言え稼働していた。そして、７１年の末、地球にいたかいないかと言うことは、重要な意味を持つ。

嫌なものでも噛んだように口を閉じていられず、口を開いて空気の入れ替えを行った。

「地球にいた。仮にブルー・コスモスが命がけでジェネシス発射を阻止してくれなかったとしたら、私は死んでいただろう。そして、宇宙の仲間たちはやむを得ない犠牲、尊い犠牲だとだと称えてくださることだろう」

地球上の全生命の9割を死滅させると試算されたジェネシスの照射を前に、それは邪推でも何でもない。当時のザフト軍上層部に地球に残存していた部隊を犠牲にするつもりでいたのだ。

プラントの勝利のためだ。そんなことを言っていいはずもない。ハイネが何も言い出せずにいると、ミナは笑う。自嘲か嘲笑か、普段通りの笑い方に、しかし影を感じずにはいられない。

「我々ザフト地上部隊は、加害者であるとともに被害者なのだよ」

新たに配属されるザフト兵の多くはユニウス・セブン世代で、きっとミナたちにも誇らしげに語るのだろう。プラントの正当性とあるべき未来の姿を。それがどれほど滑稽で無神経に見られているかも知らずに。

プラントはどこもかしこも歪みを抱えている。

杖の音を響かせて、そして扉が開かれた。一般邸宅にはすぎた両開きの扉の片側が開き、隻眼隻腕のディアッカ・エルスマンがイザ

ーク・ジュールの前に姿をさらす。

もはや戦えないほどの傷を負った身であるにも関わらず、ディアッカの様子は4年前と何ら変わっていない。不遜で、どこか斜に構えた笑い方が相変わらず似合う男だ。

「イザーク・ジュールだったか。キラとゼフィランサスの結婚式以来だな。まあ、あがれよ」

開いた扉から招き入れられる。杖をつく音に左足を引きずる光景。4年前の戦争が残した爪痕というものだ。

「コートニーにも同じようなことを言われたな」

もう3年も前の話だ。各勢力の要人が集まり奇想天外な結婚式を最後に、イザークは当時の仲間たちと会ってはいなかった。特に頻繁に顔を合わせるほど仲のよかったわけではなく、また、イザークの方から避けていた面もある。

戦争というものからつかず離れず、そんな距離を維持してきた。

小声であったためか、コートニーの下りは聞こえていないらしい。ディアッカは玄関口からまっすぐに続く通路をゆっくりとしたペースで先を行く。

「今、教え子に頼まれてインパルスガンダムについて調べていてな。少しでも足がかりを探している最中だ。不躾とは思うが、協力してもらえればありがたい」

「教え子って、女か？」

振り向いた訳ではない。ただ首を横に向け、後ろに関心を払ったという様子で尋ねてくる。イザークも足をとめないまま、答えておいた。

「よくわかったな。メイリン・ホークという名だ」

どんな根拠があったのか尋ねてみようかとも思ったが、頭をかきながら足を早めたところを見ると単にからかわれただけのようだ。

（まったく子どもだな）

そうしている内に、ようやく目的の場所についたらしい。玄関同様大きな両開きの扉で、装飾の施されたドア・ノブが取り付けられている。ディアッカはノブに手をかけてから、一度立ち止まる。

「それで、ザフトの機体のことでどうして俺のところに来た？」

訝しがっている様子はない。単なる疑問だろう。こんなことに答えるには、イザーク自身よりもこちらの方が適任だろう。

このコロニーなら、使えるはずだ。

プロジェクターを取り出すと、光の柱から蒼星石が姿を現す。

「あるお方からいただいた資料に、インパルスガンダムに搭載されているシステムに問題があるとありました。そのシステムこそが、アリスです」

「おい、それって！？」

片足が悪いというのに、ディアッカは見ていて不安になるほど驚いた。アリスという単語に反応したのではないくらい、イザークにも容易に見当がつく。

「ゲルテンリッターの4女、蒼星石のプレジェクターだ。俺も、マスターの1人だからな」

「ゼフィランサスから聞かされたことがある。見るのは初めてだが、ほんと、ゼフィランサスによく似ているな」

イザークの手の上に立つ蒼星石を覗き込んでいたディアッカが、ふいに視線を外した。

「と、あまりじろじろ見るもんじゃないな。で、アリスだったな」

ノブに手をかけたままであったため、ディアッカは話しながらも扉を開くなり部屋へと入っていく。イザークもまた、返事をしながら後に続いた。

「そうだ。俺たちが乗っていたガンダムにも搭載されていたのと同名のシステムだ。アーク・エンジェル組みがいるのも驚きだが、……まさかお前がいるとはな」

部屋の中には、何故か山積みにされた資料の塊がいくつかできていた。その間に並べられた椅子にアイリス・インディア、フレイ・アルスター、ナタル・バジルールの姿もあった。何やら資料を読みふけっているらしい。問題は次だ。何故か女性陣から不自然に離れた場所で椅子に怪しげな雰囲気の男、ケナフ・ルキーニがコーヒー片手に座っていた。インパルスに関する資料を渡してきた時と何ら

雰囲気が変わっていない。

「何？　この変態おじさんと知り合い？」

「資料を渡されたというだけだ。一緒にはするな」

挨拶もなしにフレイという女はケナフを指さす。そういえば、この女はそんな女だった。

「おいおい、本人の前だ。ちょっとは気を使ってくれたまえ。そして、私は変質的ではあるかもしれないが、変態ではないよ」

そう言っている割に、アイリスたち女性陣の距離の開け方は尋常ではない。特にナタルなどアイリスとケナフの間に割ってはいるように間に座っては、資料を見る目が時折鋭い眼光となってケナフを貫いている。

何があったのかは知らないが、フレイの様子を見れば見当がつくというものだ。

「女性にいきなり写真撮らせてくれなんて言ってくるのは変態か変態のカメラマンよ」

「ひどい言われようだな」

「ケナフ・ルキーニと言えばプラントでは反体制派のジャーナリストとして知られているが、まさか、体制どころか、社会とも相入れないという意味だったとはな」

ディアッカはすでに椅子に座っている。思いの外アイリスたちに

近い場所だが、特に警戒されていないところを見ると、どうやらこちらは嫌われているということはないらしい。蒼星石もどこかに座ればいいと言ってくれるが、構わず扉近くに立っていることにする。

座るための立ち位置――ややこしいが、周りの人間との間合いの取り方と言うことだ――をしばらくは探らせてもらうつもりでいた。何より、変態に巻き込まれては面倒だ。

「違う。私はただ、ヴァーリの大ファンでね」

ケナフは立ち上がり、椅子の脇に置いていたアタッシュ・ケースを持ち出す。それだけで女性陣が警戒心を増したところを見ると、このケナフという男、相当のことをしでかしたらしい。

「これまで２０人のヴァーリに会ったり、資料を探ったりしてきたよ。クライン家が用意した２６人姉妹のクローン体。それぞれの経緯を眺めていると、それ自体、裏歴史を追うことに繋がる。これほど興味引かれる存在はないよ」

ちょうどテーブル程度の高さに積まれていた資料の山にアタッシュ・ケースを開くと、中には、様々な資料や写真が雑多に放り込まれているようだった。ケナフはわざわざ中身を見せようとはせず、元の席へと戻る。まずはフレイが動いた。ケナフの様子をうかがいながらにじり寄るようにゆっくりと近づいていく。

（女というのは、時折小動物のように見えるな）

さて、こんなこと言って世界の半数を敵にしてはしまわないだろうか。腕の中の蒼星石の横顔に尋ねてみる気にはなれない。

やがて、フレイはコーヒーを飲むほどくつろいだケナフの方を見たまま、恐る恐るアタッシュ・ケースに手を伸ばす。写真の1枚をひったくって仲間たちのところに戻る様子など、小動物に餌付けしている場面をほどよく彷彿とさせる。

そうしてようやく、フレイたちは1枚の写真を覗き込み、文字通り三者三様のやりかたで驚いてみせた。

「これって、カルミアさん!?」

ケナフに確認をとるように写真を翻してくれたおかげで、イザークにも見ることができる。どこかの砂漠で、ケナフと褐色の肌のヴァーリが並んで写っている。穏やかな微笑みがよく似合っている。

「カルミア・キロとは、Kのヴァーリとは4年前、アフリカの砂漠で出会った。なかなか気さくな人で写真撮影にもあっさり応じてくれたよ。残念ながら、戦死したそうだが。ああ、こんなこと、君たちにとって今更だな」

イザークは地上では大洋州連合の密林での戦闘に従事していた。自分の知らない場所での物語であるらしい。フレイは写真を凝視したまま、目を離せないでいる。ずいぶんとしおらしい様子だが、何があったのか聞くほど野暮でもない。ケナフがアタッシュ・ケースへと近づいているのを気にもとめないほどだ。

「ここにあるヴァーリの少女たちの半数以上がすでに死亡している。長女でさえまだ20程度の年頃だというのにも関わらずだ。まさに花だよ。咲き急いで散り急ぐ」

アタッシュ・ケースから次々取り出される写真には、髪や瞳の色、

年齢までバラバラ――恐らく、すでに死去しているヴァーリのものなのだろう――で、同じ顔だけが共通している。

「アイリス・インディア。Ｉのヴァーリにも是非写真を撮らせてもらいたい。ああ、別に今すぐでなくてもいいよ。君がその気になるまで待たせてもらうつもりだ」

「言い方がキモい！」

フレイは音がしそうなくらい力強くケナフを指さす。何かと台無しにもほどがある。

興味がないわけではないと、アタッシュ・ケースを見に行く。なるほど、中には、恐らく２０人に手が届くほどの写真と資料が入れられている。

「そんなヴァーリ・フリークが何故インパルスのデータを持っている？」

「とあるヴァーリに交換条件で頼まれてね。資料を渡してこい。そしたら写真を撮らせてあげるとね。だが、インパルスは、反体制派ジャーナリストとしても面白い。初期のガンダムに搭載されているアリスとは別物だからね」

「プロジェクト・ラスト・バタリオンのことですね。公式にはインパルスガンダムの量産計画とされていますが、いくつか疑問があります。まず、今のプラントにはインパルスを量産することのできる国力もなければ、パイロットも十分ではありません」

「それに、今のまま生産数を増やしてもユニウス・セブン休戦条約

に抵触するだろうね。そう、非現実的もいいところのいい加減な計画だ。ところが、プラント政府はこの計画を推進している」

蒼星石の方がこの類の分析ごとは得意としている。連れてきて間違いではなかったようだ。

「そこにアリスが関わっている。そう言うことですね？」

「さすがはゼフィランサスの娘さんだ。いつか、君の母さんの写真も是非ともお願いしたいものだ」

ケナフと蒼星石の話しは順当に進んでいるように見えたが、突然蒼星石の口が止まる。普段から冷静で、静かな横顔の似合う少女だが、今回は説明はしにくいのだが、唇がかすかに震えているように見える。

「マスター、この人とは距離を開けてください……」

ここは蒼星石の願い通り、2、3歩後退してやった。

「お前の口からそんな言葉を聞くことになるとはな」

「僕にも好悪はあります」

このケナフという男、女性の嫌悪感をかきたてずにはいられない性分なのだろうか。しかもそのことを気にした様子もないから質が悪い。

「新しい情報じゃ、インパルスが敵前で機能停止したそうだ。アリスの誤作動が疑われている。総責任者のサイサリス・パパは、それ

でも信じているようだよ。このアリスを搭載するインパルスこそが、兵器の究極形、最後の大隊なのだとね」

その男の顔は、ついさっき少女を引かせた男とは思えぬほど、野心的で敏腕記者を思わせる。

イザークはここでようやくこの部屋に散らばる資料の山の意味することを考え始めた。記者が最高評議会で唯一反クライン派を貫くエルスマン宅に集まっている。その意味するところは、突然部屋の扉を開けた。

「戻ったぞ。今回はウン・ノウ教授に取材してきた。プラントの政治体制に批判的な論文が多くて当局にすっかりマークされてたが、何とか接触成功だ」

何やら若い男――上等なカメラを首からぶら下げていることから、この男も記者なのだろう――が興奮した様子でシアター・ルームへと入ってくる。見慣れない顔だが、慣れた様子からしてディアッカたちの知り合いだろう。

男のすぐ後から続いたのは若い女で、身だしなみには気を使うようだが、手にしたメモを真剣に眺める様は、これまでの流れから職業を連想させる。

「次はここなんてどうかしら？　比較的ナチュラルの住民が多いと噂される地区よ」

「ここもすっかり反体制派ジャーナリストの拠点になったな」

ディアッカのため息まじりの嘆きが、この資料の山が何者かを語

っていた。

ＺＧＭＦ－８８８ヒルドルブ。砂漠のような不整地での戦闘を想定して開発されたこの機体は、モビル・スーツ形態をしている時は細身で、ＺＧＭＦ－１０００ヅダに比べると華奢な印象を与える。それでも漆黒に体に残る砂汚れは、この機体が過酷な戦場を戦い抜いていることがよくわかる。

歩きながらというのに、シン・アスカはつい気をとられて壁際に並ぶヒルドルブたちを見上げていた。岩盤をくり貫いた不格好な壁に並ぶ機体はどれもが歴戦の強者を思わせた。ここがアフリカ方面軍総司令部の隠れ家だと聞かされたことがイメージに拍車をかけているのかもしれない。

ヒルドルブは続いて、視界にちょうどトラのような縞模様が描かれた機体が入った時、シンは誰かにわき腹をつつかれた。隣を歩いていたルナマリア・ホークがシンに注意を促したのだ。見ると、シンの先を行っていたはずのアスラン・ザラ大佐が足を止めて、誰かと話していた。

機体に気をとられすぎていたことは認めるが、もう少し優しい注意はなかったのだろうか。ルナマリアにつつかれた痛みを意識しながらザラ大佐と相手の話を聞いていることにした。

相手は若い男だ。指揮官を意味する白いノーマル・スーツに、日に焼けた肌の色がよくめだっている。顔はどこか若さが残っていて頼りなさそうな頬骨をしていても、その視線は真剣さを感じさせる。

「久しぶりだな、アスラン・ザラ大佐」

男性が敬礼すると、ザラ大佐も敬礼する。上官――直属ではないが――に合わせる形で、シンとルナマリアも敬礼した。

「お久しぶりです、マーチン・ダコスタ大佐。この度は寄港を許可いただき、感謝します」

マーチン・ダコスタ。シンでも知っている名前だ。現代戦史で名前を聞いたことがあった。ただ、如何にザフトが活躍し、地球軍が卑劣であったかを教え込むだけの授業で、ほとんどまともに聞いてなんていなかった。こんな時は、何かとミーハーな戦友の存在がありがたい。

「そ、それじゃあ、あなたが砂漠の虎!?」

敬礼したまま声を震わせる光景は――ルナマリアには悪いが――なんだかおかしい。

（砂漠の虎か……）

虎の模様にペイントされたヒルドルブを見た時に気づくべきだったかもしれない。この人が4年もの間砂漠の地で戦い抜いたザフトの英雄だった。

「確かに、そう呼ばれてはいる」

ルナマリアのようには感激できないで見ていると、ダコスタ大佐は特に表情を変えることもなく答えた。どこかザラ大佐との出会いを思い出す。どことなく、ファンのあしらい方に慣れているところ

とか特に。

また悪い癖が出ているらしい。ザフトの正規兵とみるとまず食ってかかる癖は、なかなか抜けてくれない。

ただ、無理に反感を押さえ込む必要なんてなかった。

「私ごときにその名前はふさわしくはない。砂漠の虎の名は、元々私の上官が持つ名前だった。アンドリュー・バルトフェルド。この名前を着飾るにふさわしいのはあの方だけだ」

ダコスタ大佐が首を曲げた。つられて見ると、そこは壁――ゲリラのアジトらしく岩盤がむき出しだ――で大きめの額に入った写真があった。何かの集合写真というには砕けていて、写真の中央で少し若いダコスタ大佐が大柄な男性に頭を強く撫でられている。一応形としては集合写真であるため、2人ともこちらを向いて顔がよく見える。大柄な男性は眩しいくらいに笑っていて、ダコスタ大佐は迷惑そうでも嫌そうには見えない。指令の眼差しは、その大柄な男性に向けられていた。

アロハ・シャツを着て、笑うこの男性が、アンドリュー・バルトフェルド、砂漠の虎と呼ばれた男なのだろうか。

ダコスタ大佐の声は何か楽しいことでも思い出しているかのように少し明るくて、同時にその横顔は寂しげにも見えた。

「映画でも、その勇猛果敢ぶりは伝え聞いてます。アスランさんに戦う意味を授けた人だって」

「自由と正義の名の下には見ていない。何せ、私が出ていないので

ね」

何故か、ルナマリアのこの言葉に、ダコスタ指令は急に態度を落ち着かせたような気がする。ルナマリアもそのことに気づいたのか、ザラ大佐のように熱狂的にはならない。

変な感じに沈んでしまった雰囲気の解消法なんて知らない。何か目を止めておくものが欲しかったこと。何よりも気になることがあって、写真に目を戻した。

ダコスタ大佐の反対側。砂漠の虎と呼ばれた男の腕にしがみついている褐色の肌をした少女がいた。見ただけで、優しさだとか暖かさ、そんなものを感じさせてくれるくらい明るい笑い方をしている。

そして、ヒメノカリスと同じ顔をしていた。

「すいません、ダコスタ指令。あのバルトフェルド指令の左にいる女性は？」

「彼女はカルミア・キロ。バクゥの開発者で、バルトフェルド指令のよきパートナーだった。ヒルドルブを開発するための基礎設計は、ほとんど彼女が残したものだ。もっとも、当時は十分な強度のフレームが存在せず、可変機構を有する陸戦機は構想の段階で止まってしまったが」

やはりダコスタ大佐は昔話をすると楽しそうで寂しそうにも見える。きっと、この人ももういないのだろう。

敬礼の手はすでに下ろしている。指さすのは失礼ではないだろか。そんな躊躇も混ざりあって、シンの指は不格好な形になって写真の

方を向いた。

「この人も、ラクス議員の妹さん、何でしょうか？」

ダコスタ大佐の反応は鈍い代わりに、ザラ大佐は行きおいよく振り向いてまで反応を見せた。砂漠の虎と呼ばれる指令は、シンのことをフェイス直属のエリート・パイロットとでも勘違いしたのだろう。

「レイが、話したのか？」

「いえ、それもありますけど、俺、ヒメノカリスにも会ったことありますから」

何で雑兵がヴァーリのことを知っているのか。きっとザラ大佐の頭の中ではそんなことが巡っているのだろう。目を見開いたまま数秒してから、ザラ大佐は息を吹くことをきっかけとするように落ち着きを取り戻そうと試みた。

「そうか……。レイからどこまで聞かされたかは知らないが、ヴァーリのことはできる限り公表しないでもらいたい。約束できるか？」

「わかりました……」

別に新聞記者の知り合いなんていない。誰かに話すつもりなんてなかった。了解の意志を示そうとすると体が勝手に浅い敬礼をしてしまったのは、シンにとって軍隊生活が短くないことを意味するのだろうか。

シン・アスカ。アスランにとって、この少年は不思議な少年と言えた。ただのコーディネーターであり、何ら特別な存在ではない。そうであるにも関わらず、あまりに世界の核心に近い。

（シンがあの計画の何らかの障害にならなければいいが……）

「君たちはエインセル・ハンターを追っているそうだが」

ダコスタ指令に声をかけられたことで思考を中断する。作戦会議を行うために移った指令室――ここもむき出しの岩盤を壁にしている――にて、アスランはダコスタ指令と立ったまま向き合っている。

「はい。次の目標は南米ジャブローです」

「要害だな。出来得ることなら、侵攻を遅らせたいところだ」

臆病な訳ではない。それどころか、臆病と謗られる怖さをはねのける勇猛さを、この指令は兼ね備えている。その顔は単純な攻略上の難点に考えを巡らせているようである。

アスランがダコスタ指令と出会ったのは４年も前、大西洋連邦軍のアーク・エンジェルを追尾している時のことだった。その時から、ダコスタ指令は代理とはいえ、怜悧な指揮官であった。

（アフリカ共同体の事実上の協力を得られるからと言って、この４年の間、部下を束ねることは並大抵のことではないはず）

「エインセル・ハンターの抹殺はプラント国民全員の悲願です。ジャブローでは大規模戦闘が予測されます。そのために、ダコスタ指

令にはご助力願いたいのです」

「どれほど出せるかはわからないが、前向きに検討しよう」

「感謝します」

敬礼しておく。少々安易な使い方だが、軍隊では敬意や了承を示すために敬礼は便利だと言えた。

依頼しておいて矛盾しているとも言えるが、８年近くもの間、前線にさらされ続けた南アフリカ統一機構の練度は決して低くはない。そんな敵を相手としながら援軍の要請に応じるのは、やせ我慢ではなく自信の現れだろう。

「ところで、インパルスの補給は不要か？　聞けば、部隊は全滅の憂き目を見たと聞いている」

「ええ、ボーパールで１人、ダーダネルス海峡では２人の部下を失いました。ただ、ご心配には及びません。こう言えば聞こえは悪いのですが、補給で代わりを配備してもらう予定ですので」

今頃、カーペンタリア基地を発したボズゴロフ級潜水艦が喜望峰を経由してモビル・スーツをはじめとする補給物資を運んでいる最中である。その中にはＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムとそのパイロットも含まれている。

ことインパルスガンダムにおいては、連携に不安を感じる必要は一切ない。戦力に不安を覚えてはいない。

ダコスタ指令は、何故か瞬きを繰り返す。何かに驚いているよう

ではある。

「君は変わったな。以前のような迷いがない。だが、迷っていた瞳の方が、輝いて見えたものだ」

このことには、つい笑わざるを得なかった。

４年前、アスランはこのアフリカの地でかけがえのない友を失い、敵からは多くのことを学んだ。

ニコル・アマルフィ。仲間を守るために命を落とした友は、戦争は人々からかけがえのないものを奪っていくことを教えてくれた。

モーガン・シュバリエ。敵でありながらアスランに戦うことの意味とその覚悟を伝えてくれた人だった。

そのどちらも、戦争の中で失われてしまった。

笑顔にはどうしも乾いたものが含まれてしまう。

「私もいつまでも子どもではいられません、ダコスタ指令」

シンとルナマリアは格納庫に残された。集合写真を2人並んで眺めていた。カルミア・キロと呼ばれた女性は、見れば見るほどヒメノカリスとよく似ている。

レイ・ザ・バレル隊長に教えられたヴァーリという存在が、より実感として意識される。

「ねえ、シン、ヴァーリって何なの？」

まだラクス・クライン議員からヒメノカリスしか妹はいないと言われたことを信じているルナマリアの言っていることは正直、今更だ。

「俺も詳しくは知らないけど、ラクス議員て、２６人姉妹なんだってさ。それぞれ別々の遺伝子操作をして、それぞれ専門の分野を変えた存在らしい」

「ふ～ん」

思っていたよりもあっさりとルナマリアは写真に視線を戻した。ついシンの方がルナマリアのことを見てしまう。

「気にならないのか？」

「そりゃ、２６人姉妹だなんて言ってもらえなかったけれど、いきなり言われても納得できなかったと思うから、別にラクス様のことは……」

何もおかしなところのないごく普通の受け答えだからこそ、違和感が感じられた。

「そうじゃなくて！　……その、親の都合で遺伝子を組み替えるなんてことがさ……」

これは感覚の問題で、どう説明していいかわからない。つい言葉に勢いを乗せてみたものの、そんなんで続くはずなんてなくて尻す

ぼみもいいところになった。

ルナマリアは、珍しく考え込んだような仕草をした。

「ああ、私は確かにコーディネーターには産んでもらえなかったし、差別も経験したけど、それだからってコーディネーターのことを恨んだりなんて……」

「違うだろ……！」

つい体を動かして手振りまで大きくなる。

シンが感じてもらいたいのは、親の意志や都合で子どもの体を勝手に作り替えることへの違和感そのものだった。そんな、地球では当たり前のことが伝わらない。プラントでは遺伝子操作への抵抗感が薄いと聞いてはいたのに。

「どうしちゃったのよ、シン？」

（聞きたいのは俺の方だ……）

長年肩を並べて戦ってきた友人の意外な一面を見たような気がした。ただ、これが初めてじゃない。ザラ大佐を援護した時のルナマリアだってシンにとって思いがけない友人の顔を見た瞬間だった。

ルナマリアのことを、シンは知らないでいる。

「……俺たちって、軍学校以来の付き合いだけどさ、よくよく考えてみると、戦争のことしか話したことなかったな」

「そう言えばそうね。でも、まさかシンがファッションの話なんてしたいわけじゃないんでしょ」

冗談混じりの明るい調子。こんなルナマリアは、出会った時のままだ。

「そうだな。結局、戦争のことだけだな、俺たちって。……ルナはこの戦争をどう思う？」

集合写真。恐らくはその大半が戦争で命を落としている人々の前で、シンは訪ねた。格納庫の喧噪が妙に大きくやかましく聞こえる。

「確かに、ナチュラルの人にとって、コーディネーターは怖いと思うよ。もしも宇宙に閉め出さなかったとしたら、今頃地球じゃ優秀な人はコーディネーターばっかりだったと思うし。やっぱり、能力ある人への怖さって、わかるよ」

コーディネーターはこの戦争を語る時、いつも持つ者と持たざる者の問題にしようとする。ナチュラルであるルナマリアも、そんなところはシンが横柄だと貶したコーディネーターと何も変わっていない。

（俺は、ルナマリアに勝手な期待を押しつけてただけなのかもな）

同じ外人部隊に送り込まれた、同じ境遇を共有できる戦友として自分のことを理解してくれている存在だと。レイ隊長の言葉は、色々なところでシンのものの見方と変えてくれた気がする。

「でも、地球にだってコーディネーターはいるんだ」

「シンみたいに結局地球にはいられないって、逃げてきてるでしょ」

「じゃあ、ジェネシスの照射は、やっぱり正しいことだと思うか？」

ルナマリアは大きくため息をついた。でも、それは見せつけているとか皮肉とかではなくて、ルナマリアのちょっとオーバーなリアクションだということくらいならわかる。

「前も言ったけど、ああでもしなかったら、私たち何されてたかわからないじゃない」

だからジェネシスの使用は正しい。それで地球上の全生命を死滅させることになったとしても。そう、プラントの人はすぐに口にする。ただほんの少し、地球の側から考えてもらいたい。

「なあ、ルナ。ルナには、地球に住むナチュラルの知り合いっているか？」

「軍人になるまでプラントから出たこともなかったわ」

「じゃあ、地球人が怖いって、悪い奴らだって、どうしてわかるんだ？」

目を大きくしてわからない、そんな顔をするルナマリア。でも、本当に答えがわからないからじゃなくて、どうしてそんなこと聞かれるのかがわからないだけだ。返事はすぐにあった。

「みんな言ってるじゃない。それに、映画もあるし……」

「それって、自分で見たり感じたりしたことじゃなくて、誰かが言

っていたことを、自分にとって都合のいいところだけ都合よく信じ込んでるだけじゃないのか？」

つい被せるように言葉を返すと、ルナマリアは不機嫌そうに目を細めた。感情表現を隠さないところも、シンの見てきたルナマリアだ。

「……何が言いたいのよ？」

「地球のナチュラルがみんな悪い奴で、プラントを滅ぼしたがってるなんて情報、結局ザフトやプラントの政府筋、地球と戦いたがってる人が流したものだろ。ルナはそんな情報をまるで自分の経験のように鵜呑みにして流されてるだけじゃないかな」

「何よ、地球軍が核まで使ってプラントを攻めようとしたのは本当でしょ！　正当防衛よ！」

こんな風に怒りっぽいところもルナマリアだ。それに、怒りを深刻にしないですぐに吐き出してしまえるところもあって、ルナマリアは人間関係をこじらせたりなんてしない。そんなところも、シンは見てきた。

「でも、ザフトはジェネシスを使った。俺だって核がいいとは思わないけど、核以外ならどんな兵器を使ってもいいって訳じゃないだろ。それに、血のバレンタインを引き起こしたのは一部の人間だけど、じゃあなんで、プラントは地球全土を標的にしてニュートロン・ジャマーを投下したと思う？」

「でも、あれって大した被害は出なかったって……」

たとえ怒っていても相手の話を聞くことができる。こんなところは、シンにはないいいところだと思う。

ルナマリアは感情的でも情緒豊かで、どんな人とでも話ができる。軍学校で孤立していたシンに声をかけてきたのはルナマリアだけだったし、よく正規兵とトラブルを起こすシンと正規兵の間に割って入ってくれたのもルナマリアだった。

ただほんの少しだけ、相手の立場に立って物事を考えるという視点に欠けている。レイ隊長に何度も説教されたシンのように。

「停電、エネルギー不足、食料難に犯罪率の増加、難民の発生や航空機事故。全部合わせれば少なくとも１０億の人が死んだって言われてる」

「１０億って……！？」

ルナマリアは、素直に驚いてくれた。

「プラントじゃ、驚くくらいそのことが報道されてない。でも、考えてみればわかるだろ。そんな効果も意味もないものを投下するはずなんてないってことくらい」

シンはオーブ――この国は驚くほど影響が少なかった――にいてその惨状を知らない。それでも、一度だけ、ニュートロン・ジャマーが投下された日の地球の衛星写真を見たことがあった。普通なら街の明かりが散りばめられているはずの大地が、何も見えないくらい真っ暗だった。

黒い地球は、とても恐ろしいものに見えた。

「プラントのコーディネーターにとって、地球はユニウス・セブンに核を撃ち込んだ悪い奴かもしれない。でも地球の人にとってプラントは普通の生活を一瞬の内に奪い去った悪魔なんだ。ジェネシス発射は仕方がない。それなら、地球の人も同じじゃないかな？　今度は何を落とされるんだろう。今度は何億の人が殺されるんだろう。たとえ核を使ってでもプラントを滅ぼさなきゃいけない。そう考えたんじゃないかな」

「でも、シンの言ってることだって……！」

「そう、結局俺の意見を補強してくれる都合のいい事実を並べてるだけだ。だからルナ、人は自分の目で見て、自分の頭で考えなきゃいけないんだ」

ルナマリアは反論したいことや面白くないこともあるはずなのにシンの言葉を聞いてくれる。こんなこと、シンにはできそうにないことなのに。

「ルナ……、人には誰だってそれぞれの立場があるんだ。ルナがプラントやそこに残してきた家族のために戦うように、ルナが悪魔のように言ってる地球のナチュラルだって家族を殺されれば悲しいし、憎しみもわくんだ。それなのに、ただ自分たちを攻撃してくるからって、それを悪と決めつけて自分たちだけが正義だって思いこむことは、やめてもらいたいんだ」

そんな、誰かを悪役にしなきゃ名乗れない正義なんてあまりに悲しいから。

「正義の反対は悪じゃなくて、他の正義なんだからさ」

シンもルナマリアと何も変わらない。以前、フィンブルが地球に落ちようとしている時に冗談半分で破砕作業に参加しようとしていた仲間にシンは怒る自分を止められなかったことがある。今ではそれは、気分を沈めるくらい苦い味をもつ思い出に変わっている。

「ヴィーノ・デュプレ、ヨウラン・ケント。あの2人がフィンブル落着を茶化してた時、俺は怒った。地球の大事を笑い事にするなってさ。でも、それはあくまでも俺が正義でいたかったからにすぎないんじゃないかって、この頃思うんだ。あの2人だって落とせばいいって本気で考えてた訳じゃないと思う。ただ、俺とは立場が違って、だから少し考え方や取り組み方がずれてただけなんだ」

人にはそれぞれ立場があって、自分の立場だけを尊重してしまうことは控えないといけない。そんなことは、全部レイ隊長からの受け売りだ。

「まあ、やっぱり軽率な奴だったとは思ってるんだけどな」

苦いものを振り払うように少し笑って見せた。すると、なんだか、ルナマリアは不思議そうな顔をしている。

「シン、何か変わったね。何だか、考え方が大人っぽくなった？」

「そうかな？」

「そうよ。……何があったのか知らないけど、わかった。私も少しは地球のこと、学んでみようと思う」

そうしてくれるとありがたい。少しでも相手の立場を理解してみ

ようという気持ちさえあったなら、相手を一方的に否定しようなんてことにはならないだろうから。

（ルナは、やっぱりルナだよな）

基本的に明るくて、人のことを考えてあげらえる人だ。シンはそれを知りながら、ただ自分とは意見が違うからと勝手に溝を開けようとしていた。何年も地球との戦争にさらされてきた国民のことを考えようともしないで。

結局、シンはレイ隊長にもまだまだなれそうにない。

何の気なしに写真を見ると、そこには色々な人が笑顔で写っている。思い出すと、ほんの４年前、シンはただの地球の少年で、ザフト軍のことをまるで異星人の軍隊みたいに考えていた。こんな風に、自分たちと同じように笑う人たちだなんてこと考えもしないで。

ふいに、自分たちに近づいてくる足音があることに気づいた。ザラ大佐だろうか。そんな気で振り向くと、そこにはレイ隊長の姿があった。いつもみたいに冷静な顔で、それでも少しいつになく真剣な顔をしているようにも見える。

「シン、ルナマリア、そろそろジャブロー侵攻について話しておく。ザフトも今回は本気だ。エインセル・ハンターがジャブローを出てしまえば大西洋連邦という巣穴に逃げ込まれる。そうすれば殺害は事実上不可能だ。これが当面最後のチャンスということだ。相手もそれだけ必死に守ろうとすることが考えられる。ボーパールのような工場と一緒にするな」

ルナマリアと揃って敬礼する。大事の前の敬礼は、すると身が引

き締まる思いがした。南米ジャブロー。この世界の人なら一度は耳にしたことがある名前を心の中で繰り返すと、これからの戦いの激しさを予感させてくれる。

ここに、母の仇が、世界が魔王と呼んで称え、憎む男がいる。

（エインセル・ハンター。あなたは一体どんな思いで戦いを続けてるんだ……？）

戦場という地名はありません。迷わせるのは森でも、森に入ると決めるのはあなた方です。わざわざありもしない場所を作り出して、危険に進んで足を踏み入れる。とても賢明とは言えません、そんなこと。でも、人はそんなことをずっと続けてきました。

戦争は必ず人が起こすものです。

森は人に何の悪意も抱いてなんかいません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「名無しの森」

ジャブロー。人はいつも人に脅かされ、人に惑わされてきました。

第27話「名無しの森」

「私が議長の座についてすでに2年がすぎようとしている。しかし、君たちに約束した平穏な未来をいまだもって実現できていないことは慚愧に耐えない思いだ」

フロアに集められたザフトの兵士たちは整列したまま、体を微動ださせることはない。1人ひとりがかすかな物音をたてただけでも十分な騒音として聞こえるほどの人数が集まりながら、音はすべてギルバート・デュランダル議長に支配されている。視線はすべて演説台の議長へと注がれている。

作戦を前に議長自ら乗り込んだ戦艦にて、その演説は続けられる。

「そんな私を見捨てることなく寄り添い、そして力を尽くしてくれる諸君等には感謝しつくすことができない。ありがとう」

軍人ではない議長が見真似で敬礼を形作る。すると居並ぶザフトの兵士たちは一斉に敬礼を返した。

「これを最後にしよう。決然とした憎しみ持って人の名を語らなければならないことも、悲しみの涙が滂沱に流されなければならないことも」

その言葉は次第に力を増していく。その熱意が兵たちに伝わるかのように部屋は熱気を帯び、戦いが近いことを予感させていく。議長のお言葉は、絶えず人の気を高ぶらせずにはいられない。

その様を、デュランダル議長は敬礼の姿勢を維持したまま眺める。

「プラント最高評議会議長としてではなく、未来を憂う1人の人として、戦うことさえできないちっぽけな男として、私は全身全霊の敬意をもって君たちを送り出したい！」

議長が力強く敬礼の手を払いのけると、その腕は高らかに掲げられた。

「勝利を我らに！」

勝利への誓い、勝利への祈りは、議長から兵へ、兵から兵へ、人から人へと伝播していく。兵士たちはすでに同調することをやめていた。上官も部下もなく、我先にと手を掲げ、勝利への誓いと祈りを捧げ続ける。

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに！！」

膨大な水量の泥水の中、デュアル・センサーの光が不鮮明な視界の奥をうかがう。水底の軟泥を踏みつけると、モビル・スーツの足が深く埋まると、代わりに吹き出した泥がさらに視界を悪くする。ただでさえ夜間で薄暗い。有視界戦闘を目的に開発されたモビル・スーツ――暗視だってできる――の視界がまともに機能していない状況を、シン・アスカは濁った水しか見えないモニターを眺めることで理解していた。

戦闘時は瞬きさえできずに見ているはずのモニターのあまりの様子に、シンは気さえ抜けた様子で通信機から伝わるレイ・ザ・バレル隊長の声を聞いていた。

「アマゾン川は、今でこそ多少水量は減ったが、かつては長さ約６５１６ｋｍ、川幅は河口で１００ｋｍもの大河だ。その大部分が密林に覆われ、水量、流域面積ともに世界最大を誇る。そして雨期になれば川幅は何倍にも広がることになる」

普段から物知りな印象のレイ隊長だが、今回はちょっと説明くさい。もしかすると本でも片手に話しているのかもしれない。今、前線にはいない。さすがの隊長もコクピット以外の場所では気も緩むかもしれないから。何でも、隊長のＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルは全身がミノフスキー・クラフトに覆われ、目立つため今回の任務には向いていないのだそうだ。同じ理由でアスラン・ザラ大佐もまだ出撃はしていない。

「ジャブローを攻略するためにはまず位置を特定しなければならない」

「でも、そんな６０００ｋｍだなんて……」

６０００ｋｍどころ、泥水の中では数ｍ先の視界さえ疑わしい。ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが歩く度、どんどん視界が悪くなっているような気さえする。すぐ後ろを歩いているはずのルナマリア機の様子さえ見えていないほどだ。

シンたちの任務は偵察だ。水量を増した川に身を隠しながら敵基地の位置を探っている。何でも、アマゾン川は水位の変化が激しい

ことや、水流の逆流現象で知られるなど機雷を仕掛けにくい場所であるらしい。実際、シンはただ泥まみれの光景を眺め続けることができた。

「行きあたりばったりの戦いを仕掛けるつもりはない。諜報部の調査で、範囲は１００ｋｍほどの範囲に絞られている。だが、降下部隊が効率よく攻撃に加わるためには、位置の特定が不可欠だ。同時に位置を特定するのは直前が望ましい」

レイ隊長の言葉にも、どうしてだか真剣とか、本気になれない。この泥川の奥にエインセル・ハンターがいる。母の仇がいる。そんな実感がなかなか浮かんでくれないせいかもしれない。

（母さんの仇か……）

「どうしてですか？」

ちょっとタイミングを逃しただろうか。考えごとをしている間だけ返事が遅れてしまった。レイ隊長の返事はない。ただ、それは機嫌を損ねたからではなくて、ルナマリアが先に答えたからだ。

「サイクロプスよ。４年前、アラスカじゃ、この兵器のせいでザフトはエインセル・ハンターに敵ごと一緒に吹き飛ばされたんだから」

アラスカでの戦いはシンでもよく知っている。例の映画では印象的な場面で、名シーンだとルナマリアによく聞かされていたからだ。エインセル・ハンター、当時のブルー・コスモスの代表は軍上層部と結託し、自分の政策に従わない勢力を囮にしてザフト地上軍の主力を味方ごと焼き払ったらしい。エインセル・ハンター――映画の中ではムルタ・アズラエルとして表現されている――の手段を選ば

ない卑劣さがことさら強調されていたが、このことが原因でブルー・コスモス代表の座から降りることになったとも、ルナマリアとは別の人から聞いたことがあった。

今回もザフトは降下部隊まで含め、大部隊での戦闘を予定している。いつもは映画フリークのルナマリアの言葉も、今回だけはシンに緊張感を与えた。

「そうだ。できる限り無関心を装いたい。サイクロプスかどうかはわからないが、この規模の基地だ。何が飛び出しても不思議ではない。もっとも、調査では敵が基地施設を他に移しているなどの情報はない。エインセル・ハンターが移動したという情報もだ。サイクロプスの使用はないというのが上層部の結論だ」

隊長のこの言葉は、不思議な安心感を与えてくれた。どうしてだか、エインセル・ハンターは自棄なんて起こさない。彼がここにいるならサイクロプスに巻き込まれる心配なんてない、そう考えた。

（ヒメノカリスのことから、勝手なエインセル・ハンターを作り上げてんのかな、俺……？）

シンは、まだエインセル・ハンターに会ったことさえない。

「シン、ルナマリア、聞いているとは思うが、この先駆隊に小隊として参加してもらう。お前たちの他にも9小隊が調査には参加することになる。連携は密にな」

「了解です」

モニターには映し出されていないのに、つい敬礼しようと手が操

縦桿から離れてしまった。インパルスに不自然な動きが発生して、余計な泥がさらに水質を濁らせる。

「ちょっと、シン。何してるのよ？」

ルナマリアから怒られた。何も見えないのにさらに見えなくされたことにご立腹らしい。ただ、その気持ちはわかる。いることはわかっているのにいつまでも姿が見えてこない。今のシンとエインセル・ハンターの位置関係は、４年も前から何にも変わっていないように思えた。

偵察開始を前にアスラン・ザラは新たに部隊に加わった部下を出迎えた。ラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネの格納庫には新たに配属されたインパルスガンダムが２機。その足下で２人の若者が敬礼している。

どちらもまだ若く、赤服を身につけている。

インパルスガンダムのパイロットは、比較的平均年齢の低い兵士が選ばれることが多い。その事情を知るアスランは特に彼らの若さを気にすることはなかった。

ゆっくりとした手つきで敬礼し、新たな部下を迎えた。

「君たちには期待している。よろしく頼む」

名前はエミリオ・プレデリック、ダナ・スニップ。この２人は、好対照であった。エミリオは背が低く、まだあどけなさの残る褐色

の顔からは決意と熱意が感じ取れる。対してダナは背が高く、その表情にしまりがない。

（ずいぶん違う2人が揃ったな）

そんな感想を抱きながら敬礼の手を下ろす。

「今回の任務は聞いているとは思うが、ジャブローの位置特定のための強行偵察だ。注意してもらいたいのは……」

「そんなの聞く必要ありませんよ。ナチュラルどもは皆殺し。鼻かんでくずかごにポイだ。でしょ、ザラ隊長」

ダナがその印象通り軽薄な様子でアスランの声を遮ると、エミリオまでもアスランに作戦内容を語ることを許さなかった。

「彼の言うとおりです。我ら優良種たるコーディネーターはナチュラルなど問題にしていてはなりません。露を払うように片づけ、それを証明しなければならないのです」

別にこの2人が不真面目な軍人ということではない。特にエミリオは足を開き、手を後ろに、休めの姿勢をしたまま喉の奥からはっきりと声を出した。

何のことはない。この2人は10代後半。血のバレンタイン事件のせいで反ナチュラル教育一辺倒に変わった時代に成長した第1世代とも言える世代である。ギルバート・デュランダルの支持を支えているのもこんな若者世代であり、彼らくらいの年頃なら、極右に傾倒していても不思議はない。

特に、デュランダル議長の就任後、そのような傾向は一気に顕在化したのだから。

気にする必要などない。部下がどんな思想を持っていようと、インパルスガンダムを動かすことができるのならばそれで。

「そうか、だが、油断だけはするな。どんなネズミにも牙もあれば爪もある」

2人の若者ははっきりとした声で応え、力強く敬礼した。

「隊長も言ってたけど、アマゾンてすごいところね。地球の森はすごいって聞いてたけど、こんなところばかりなの？」

ルナマリアの声は、どこか聞こえにくい。隊長とは通信が傍受されることを恐れてすでに繋いでいない。ルナマリアとは短距離通信を繋いでいて、敵に聞かれる危険性は小さい。それでもそろそろ予定されている範囲に近いと理解はしているのだろう。ルナマリアが声を潜めているのは、きっと大きな声を出して聞かれてしまうことを警戒してのことだ。

別に声の大きさが通信が傍受される危険性と比例関係にあるはずはないのだが。

「まさか。ここは地球でも最大規模の密林だ。発生する酸素の何割かはここで作られてるなんて聞いたことがある」

時折、水面からメイン・カメラ――額のカメラ――を出して周囲

の様子をうかがう。周囲は木が密集して生えていて、何か人工物があるようには見えない。あまり長く頭を出していては目立つ。元々地上での運用をメインに設計されているわけではないインパルスには潜水艦の潜望鏡のような便利な機能はついていない。周囲の様子を確認して、インパルスを再び水中に完全に沈める。

モニターにはルナマリアがこちらを見ていた。声にはしなくても、どう、と聞いているような瞳で。首を振って何もないと答えると、ルナマリアは残念そうにため息をついた。

また、少し歩いて次の地点を探らなければならない。そう考えた矢先だった。

音がした。明らかなモビル・スーツの駆動音が水中に響く。敵か味方か。ルナマリアもシンも瞬きを忘れて音の方向を観察する。いつでも背中の対艦刀を抜けるように準備している。水中では水蒸気爆発の危険性があるためビームは使用できないが、この大剣はビーム発振部分の反対側は実体剣としても使用できる。水中戦は、やろうと思ってできなくはない。

敵。そうだとすると、こんな薄暗く、泥だらけの水中をわざわざ移動するだろうか。ただ、味方だと判断するには、偵察任務で駆動音を出すことに無神経すぎる気がする。

相手はこちらに気づいているのだろうか。泥水の向こうにはモビル・スーツ2機分の金属反応。後少し接近すれば、短距離通信の範囲内に入る。そうすれば、識別信号を確認できるはずだ。

外の声を直接聞いているわけではないけれど、集音マイクが拾った音を処理してコクピット内に伝えているため、モビル・スーツが

近づいてくる音の大きさの違いはわかる。

そして、識別信号は、味方であることを示していた。

思っていたよりも緊張していたらしい。息を吹くと肩から力が抜けた。瞬きを我慢していた目が少し乾燥している。

「大丈夫、味方だ」

緊張はルナマリアも同じだったようだ。普段からリアクションの大きい同僚は大げさに体を伸ばした。

「こちらバレル隊、シン・アスカ曹長」

レイ隊長が言っていた残り9つの部隊の1つだろう。通信を繋ぐと、モニターには赤いノーマル・スーツを身につけた少年の顔が写る。ずいぶんむっすりとした顔で、何となく、まじめだけど融通のきかない頑固さがあるように思えた。

「ザラ隊に新しく配属されたエミリオ・プレデリック曹長だ」

敬礼して、言葉の一つ一つをはっきりと言うエミリオ曹長は、シンの感じた印象通りの人のようだ。

続いて写るのはもう1機のインパルスのパイロットだろう。

「俺はダナ・スニップ。よろしくな」

何だか、軽いとか軽薄とか、そんな人のように思える。階級を名乗らなかったところとか特に。

この2人がザラ大佐の新しい部下ということになる。

「私はルナマリア・ホーク。階級は軍曹です」

（大佐の部下が曹長っていうのも何だかなあ……）

ザフトにもベテラン・パイロットはいるはずなのに、妙な組み合わせのように思えた。ルナマリアが挨拶をしている間、ついそんなことを考えた。

その内、泥水の向こうにわずかながらインパルス2機の姿が見えるようになっていた。ロックオン・カーソルが2つモニター上に枠を作って、その位置を知らせてくれている。インパルスは2機ともフォース・シルエットを装備した機動力を重視した汎用装備だ。

まだジャブロー基地を発見したという報告はない。この2人もまだ見つけてはいないのだろう。まさかピクニック気分で歩きながら話す訳にもいかない。

シンは特に気にすることもなく、インパルスを歩かせ、泥を舞い上がらせる。ルナマリアがついてくる様子を確認していると、何故かザラ隊の2機も同じルートを歩こうとしている。

（支流が枝分かれしてるから、分かれた方が見つけやすいのに……）

すると、またモニターにエミリオの顔が写し出された。

「聞けば、アブディエルにオナラブル・コーディネーターだそうだが」

つい、プラント本国での扱いを思い出した。ユニウス・セブン世代はすぐにアブディエルのことを、自分たちが人類の未来をかけて戦っている間ナチュラルたちに協力していた卑怯者だと言い出す。

昔はとにかく怒りばかりがわいて、今は同情したいような気分にさせられる。自分や自分に味方してくれる人の間でしか通用しない感覚でしか物事を判断できないなんて。そんな自分の境遇に気づくことさえできないことが一層エミリオたち哀れな一であるように思わせた。

そんなシンの沈んだ顔を、エミリオは同情ではなくて不安と勘違いしたらしい。

「心配しなくてもいい。優れた存在であるコーディネーターは寛大だ。自らの過ちに気づき、道を正そうとする者を無碍にはしない」

結局、自分たちの基準だけが正しくて、自分たちに味方する人だけが正しい、そう言っているでしかない。自分に都合のいい世界だけ信じて、他にも世界があることから目をそらす。こんな人たちを、プラントでは大勢見てきた。

「そう固くなるなよ。一緒にエインセル・ハンターをぶち殺そうぜってことなんだからよ」

モニターに顔を映したダナ――階級はわからない――に、そうですね、そんな曖昧な返事をしておく。もう怒りはわかない。それでも、彼らの狭い世界を開く術なんて、今のシンにはない。別にプラントが間違っていると認めろとはいわない。ただ、ほんの少し自分たちとは違う環境に生きている人もいると感じてもたえるだけでい

いのに。

そんなことを伝える手段はきっと誰にもないのだろう。そうやって、プラントはゆっくりと狭い世界の中で沈んでいく。泥川の中をインパルスが自分の姿だけを見つめながら進んでいくように。その先に待ち受けるのは大きな戦いであるということは、妙に暗示じみているようにも思える。

ルナマリアが報告してきたのは、ちょうどそんな時のことだった。

「シン、ちょっとこっち来て。おかしな反応があるわ」

泥の中手招きするインパルスの姿を追うように足を動かす。盛り上がった水底を踏みつけると、メイン・カメラが水上へと突き出た。かすかな月明かりを増幅した映像がモニターに写し出された。

増水した川らしく、川辺には根本が水没した木々が並んで、その奥にようやく陸地が見える。そこに、斜め上に向けて銃身を伸ばす砲塔が森の中にぽつんと置かれていた。むき身の金属色で周りの木とは明らかに浮いている。

このことに、シンが額につい力をこめた。

「偽装されていない？」

ほんの少し迷彩模様を表面に描くだけでも視認性は大きく減少する。隠されているはずの基地設備がまるで隠されていない。

（ジャブローは、ここじゃないのか……？）

しかし、それにしては少しインパルスが首を回しただけでいくつかの砲塔を見つけることができた。ダミーにしては数が多いし、手が込んでいる。だが、ここが基地の周囲であるとするなら、何故偽装されていないのだろう。

シンが出せない結論を、エミリオは即決した。

「何故我々コーディネーターが作られたのか、これで自明だな。旧人類がこれほどの失敗作ならば我々にはそれを越える責務がある。位置情報を送れ。ジャブローは、少々時間が合わないが、白日の下にさらされたと」

シンが止めている暇なんてなかった。エミリオ機――すぐ後にはダナ機も続いている――が川から飛び出すと、いきなりビームを発砲した。夜空にビームの輝きが瞬いて、砲台が派手な爆発を起こした。

「ねえ、シン。どうする？」

ルナマリアの声を聞きながら、とても口には出せないがバカは賢者１００人分の働きをするという言葉を思い出す。賢者は１つの事態を１０回分析し、１０の対処法を考えてからどう行動すべきかを決めるが、バカははじめから１つしか見えておらず、対処を検討することもないからとにかく行動が早い。決断力と行動力において、賢者は愚者に勝てない。

この言葉は賢者への皮肉か、愚者への戒めかなんてわからない。ただ、対処を考えている時間なんてなかった。

「俺たちも行くぞ！　隊長たちが来るまで時間を稼ぐんだ」

深い森の城はジェネラルが守る。エドモンド・デュクロ将軍。エインセル・ハンターのファンを自認するこの男の大きな特徴は、自らモビル・スーツに搭乗し、最前線へと出向くことである。これは愚かな行いと言わざるを得ない。指揮官の死は指揮系統の混乱を招き、それはすなわち部隊全体を危険にさらす行いであるからだ。

そう、彼は将軍である。よって将軍と呼ばれている。誰もいないのだ。前線に自ら進んで立つ将軍など。何千の将校がいようと、戦場の将軍は彼しかいない。

エドモンド・デュクロだけが戦場において唯一将軍と呼ばれるのである。

絶対多数の中の唯一の例外。それを愚かと笑うことはたやすい。エドモンド・デュクロはヒロイズムに憑かれた愚者と笑えばよい。指揮系統を絶つことはたやすい。エドモンド・デュクロの首をあげれば達成される。

こんな馬鹿げたことをする将校は他にはいない。よって、エドモンド・デュクロはジェネラルと呼ばれ、そしてそれが単に将校を指す言葉でありながら、エドモンド・デュクロを指す。

戦場に降り立つ、絶対唯一の例外として。

誰も知らないのだ。誰もしたことがないのだから。将軍が自ら進んで前線に現れることの意味と戦いを誰も経験したことがない。存分に笑うといい。これは愚行に他ならないと。存分に笑え。もはや

笑うこともできなくなるその前に。

エドモンド・デュクロはノーマル・スーツさえ身につけることなく、その鍛えぬかれた体をコクピット・シートに固定していた。不適な笑みはどこか子どもじみてさえ、愉快気である。

頭上には月。夜は程良く更けた。そして、深い森には無数のザフトの影がある。

「レナ。観客はそろったようだな」

モニターには、こちらは黒いノーマル・スーツを身につけた女性が写る。まだ出撃前だというのに意気軒昂。普段から鋭い眼差しに覇気が宿り、抜き放たれたナイフのような輝きを放つ。

レナ・イメリア。エドモンド・デュクロ腹心の部下にして、ファントム・ペインに所属する中尉は、ジェネラルと同類である。騒ぎはしないが、ショー・タイムが待ち遠しくて仕方がない。

その瞬間を今や遅しと待ちかまえる。

「はい。ご命令とあらばいつでも幕を開けられます」

「では始めようか」

侵略者である宇宙人から地球を守る5人の戦士たちの物語を。

夜の森に火煙が立ち昇る。破壊された砲台が燃え上がり、インパ

ルスガンダム、ＺＧＭＦ－１０００ヅダで構成されるザフトの機影を照らし出す。抵抗らしい抵抗なく、ザフト偵察部隊は地上に露出していた砲台の始末を終えた。

砲塔の位置を地図上に分布すると、それは一つの円模様を形作る。その中心に一体何があるのか。ザフトの兵士たちは吸い寄せられるように視線を集めた。

小高い丘。煙がスモークのように月明かりをにじませ、それの姿を縁取る。それは、月光に照らされステージのように高いところからザフトに披露されていた。

ＺＧＭＦ－１０００ヅダ。本来濃い緑色で染められているはずの機体が５機、それぞれ異なった色に染められている。左から順に白、黄色、赤、桃色、青で全身を染めた色とりどりのヅダが並んでいる。その右手にはビーム・アックス、左手には手にそう形で装備されたシールド・ガトリングガン。その背には大型の水平翼と１対のキヤノン砲を備えたバック・パックが担がれている。Ｉ．Ｗ．Ｓ．Ｐ．と呼ばれる試験段階で開発が中断されたストライカーを、ザフトの機体であるはずのヅダが装備していた。

その装備の不自然さよりも何よりも、その機体の色がザフトを大いに戸惑わせた。原色を多用し、まるで隠れるつもりがない。何故、わざわざ目立つ高台に立つのか。

見上げたまま、ザフト軍各機は相手の出方をうかがっていた。

まもなく、５機のヅダの横隊は突然動き始める。赤いヅダを中心に左右対称の動きで両端の白と青のヅダが綺麗に左右対称の動きを見せ、同時に同じ姿勢で止まった。すると、今度は内側の２機、黄

色と桃色のヅダが武器を振り上げた。そして、中央の赤いヅダがその手にあるビーム・アックスを首の後ろで担ぐようにポーズを決める。すると、5機の後ろから突然起きた爆発は、色とりどりの煙で背景を構成した。

赤いヅダが1歩前に出ると、残りの4機が同時にポーズを変える。その様は、まるで何かのショーでも見せられているかのような出来映えであった。

「さあかかってこい、侵略者ども！　地球の平和は我らが守る！」

野太く、闊達な印象を与える声。通信ではない。赤いヅダから直接マイクで響いている。

ザフトは直ちに理解した。自分たちは敵の行為を理解できないと。そして、赤いヅダ、奴こそがエドモンド・デュクロ。この基地の指揮官であるということを。

赤いヅダを初めとする5機のカラー・ヅダが、それは見事なタイミングと姿勢で丘から夜空へと躍り出た。

「鹵獲したヅダを改造したようだな。しかし、奴らは戦術というものを知らんのか？」

エミリオは敵の様子を白けた眼差しで眺め、ダナは腹を抱えて笑った。

「奴ら最高だな。じゃっ、お礼に皆殺しにしてやるか」

すでに他の部隊のヅダ――こちらはザフト――は動き出している。

ルナマリアは動き出せない。相手の出方が予想外――わずか5機で、おまけにあんな派手な登場の仕方で――で、これなら奇襲でもかけられた方がまだわかりやすいと嘆くほどだ。

「でも、私たちの任務はあくまでも威力偵察で……」

「嬢ちゃん、対空放火を潰しておかなきゃ、迷惑するのは降下部隊だぜ」

通信程度でダナは止められない。ダナ機は揚々とビームを乱射しながら白いヅダを追っていく。ビームが着弾する度爆発が巻き起こり、木々が燃えていく。

赤いヅダ、ジェネラルに狙いをつけたエミリオは森の木々に仕掛けられた装置に気がついた。モニターにはモビル・スーツと同じ高さの木――木々は様々な高さのものが密生している――にあからさまに爆弾と主張している箱が括りつけられていた。

恐らく衝撃に感応して爆発するものだろう。確かにモビル・スーツを破壊できるほどの爆発力を有しているように見える。だが、そのため装置は大きく、たやすく検知することができた。

「こんな罠になどかかると思っているのか、劣等人種め！」

赤いヅダへとライフルを放つ。ヅダは攻撃をかわすと、着地を妙に大きなアクションを見せて行った。降り立ったという印象を与えるが、何とも無駄の多い動きだ。

5機のヅダを囮として罠にまでおびき寄せる作戦だったのだろう。だが、このような幼稚な作戦を、エミリオはたやすく看破した。

まだ始まってさえいないということを知りもしないで。

わずか5機。炎くすぶる森の中をわずか5機の南アメリカ合衆国軍のヅダが動き回る。２０機を超えるヅダとインパルスの部隊がそれを追う。

赤いヅダの中で、エドモンド・デュクロは笑う。豪快に笑う。

「さあ、ショーの始まりだ！」

それは、まず敵のヅダが放ったガトリングガンの弾丸が引き起こした。ビーム全盛の現在、実弾を使用するメリットは少ない。しかし、まったく存在しないわけではないと、シンは思い知らされた。

ビームとは異なり、連射の可能なガトリングガンは、攻撃力はともかく攻撃範囲はきわめて広い。闇と火とを振り払って降り落ちた鉛の弾丸は、木々をでたらめに引き裂く。そして、木々には、爆弾が設置されている。

モビル・スーツの装甲を貫けるかどうかという程度の弾丸の着弾点が次々に爆発した。

爆風はモビル・スーツの数倍の高さにまで達し、大気を通り抜けた衝撃が機体を揺らすほどだ。もしも間近で爆発に巻き込まれようものなら大破は免れない。単なるガトリングガンの攻撃が、この戦

場においては過剰なほどの攻撃力に化ける。

「張り巡らせた爆弾は、トラップではなく、攻撃力強化のためだと！」

通信をつないだままでいたため、エミリオ曹長の声が聞こえていた。モニターに顔は映し出されていないが、その慌てぶりは理解できる。

シンはインパルスの足を止めたい誘惑に駆られる。爆弾は発見は容易とは言え、確実に見つけられる保証はない。それなのに、敵はその位置を正確に把握していることだろう。近くにあればガトリングガンで狙われる。ここにはなくても移動すれば爆弾に触れてしまうかもしれない。

見ると、友軍の多くがその足を鈍らせていた。

「ミノフスキー粒子濃度が濃くて狙いがつけられないよ、シン！」

「こっちも同じだ爆風でセンサーやモニターがまともに機能してない！」

燃える木々に照らされたブラスト・シルエットを装備したインパルス――ルナマリアの機体だ――は、足をとめてあたりの様子をうかがうことで手いっぱいの様子だ。シンもそれは同じだ。戦闘開始直後、急にミノフスキー粒子が上昇し、そしてこの熱と爆発の中では、情報が満足に把握できない。

「怯むなよ。敵はわずか5機だ！」

そう言って前に飛び出したダナのインパルスが、突然爆発した爆風に倒される形で木々を巻き込みながら倒れた。通信からは痛みを訴える軽いうめきが聞こえているから、大丈夫ではあるようだ。

敵のカラフルなヅダはとにかく派手に動き回り、弾丸をばらまいている。確かに設置爆弾は厄介だが、それでもいつかは使いきる。そうすれば数では圧倒的に勝るザフトにいずれは押し切られる。敵は、そんな戦法をわざわざ選ぶのだろうか。

そう考えている内に、味方のヅダが爆発した。爆弾が近くで爆発し、それに巻き込まれたらしい。ただ、そんな爆風にやられてしまうほど近い場所にいただろうか、あのヅダは。

しかし、事実として味方がやられたことを、エミリオ曹長が叫ぶ。

「1機やられた！　だが、ナチュラルは底なしの愚か者だな。一帯を焼け野原にしてしまえば、ジャブロー基地ここにありと宣伝しているようなものだ」

燃え上がる木々が不気味なほど明るくて、それでも夜は暗い。燃える木だけが見えるような不気味な光景は放射熱なんて関係なしに背筋を寒くしてくれる。別に、夜闇が怖いからじゃない。熱が放出されているということが問題だった。

つい動きを鈍くしていたシンのインパルスのすぐ側だ。炎の熱に火薬が発火し、爆弾が攻撃もなしに突然爆発した。完全に隙をつかれるように、シンは機体ごと飛ばされる。７０ｔの機体が落ちたのは川の中だった。

叫ばないよう噛みしめていた歯が痛い。フェイスズシフト・アー

マーに守られたインパルスに損傷はないが、機体は浅い川底に寝かせられたように倒れているらしい。上体を起こそうとついた手が泥に滑りながらも、インパルスの顔は簡単に水面に突き出た。

揺らめく炎の隙間を闇が埋めて、弾薬と爆薬が空気を振るわせている。

たった5機のヅダを相手に味方には徐々に損害が生じ始めている。たったの5機だ。主力部隊ではない偵察部隊の半分にも満たない数が、どうしてそれほどまで戦えるのだろう。

シンが眺めている間、エミリオはまったく戦意を衰えさせていない。

「総員、赤いヅダを狙え！　奴が指揮官だ！」

エミリオ機がビーム・サーベルを手に赤いヅダに切りかかる。ヅダ・レッドはビーム・アックスでそれを防ぐと、ビームが強烈な光を放ちながらミノフスキー粒子へと還元されていく。

ここは敵の根城。敵は用意周到待っていた。それでも、5機のヅダが20機ものモビル・スーツを相手にできる理由が、シンにはわからないでいた。

この戦闘は何かがおかしい。

爆弾がどこにあるかわからない。そう警戒したヅダのパイロットは、自らの機体を丘の後ろに隠した。せいぜいモビル・スーツより

もわずか背が高い程度の丘だが、燃える炎から隠れるにはうってつけである。その丘の影は火の光から切り取られたように夜が置かれていた。その闇の中に身を隠し、ヅダは敵の様子をうかがう。

爆弾の位置は。敵の動きは。援軍の到着までの時間はどれくらいか。

パイロットの脳裏を駆けめぐる様々な考えに呼応するように、ヅダのモノアイがせわしなく左右に揺れ動く。丘を背に、ビーム・ライフルをしっかりと握りしめて。

敵はどこにいる。前か、上か、右か左か。そのどこか。

そのすぐ後ろ、闇を分厚く塗りたくった丘の切り立った壁にゴーグル・タイプのデュアル・センサーの輝きがあることをヅダは知らない。

後ろは壁だ。敵は前か横にいる。

そんな安全な壁から伸びた手がヅダの顔を掴み、腕を掴み、そして、鋭利なナイフを持つ別の手が首へと深々と刃を貫かせる。事切れたかのように身動きを止めたヅダはなすがまま、闇の中へと引きずり込まれた。

夜の帳と闇だけを残して、後にはヅダの悲鳴さえ残らない。

ルナマリアは攻撃を余裕でかわしたはずだった。ヅダ・ブルーがバック・パックから放ったキヤノン砲の一撃を大きくかわし、背中

の大型ビーム・ライフルを脇の下で腰だめに構えようとした。

その時、機体の損傷を告げる警報がコクピットに鳴り響いた。左腕のフレームが損傷している。肘関節を動かせないと告げていた。

確かにフェイズシフト・アーマーはフレームにまでは採用されていない。それでも、敵の攻撃は回避したはずだし、爆発の破片が食い込んだのだとしたら運が悪いにもほどがある。

「何なのよ、一体！」

ルナマリアの言葉は疑問というよりも苛立ちに近い。わずか5機のモビル・スーツがその数倍の相手を翻弄する不条理を、ザフトの誰もが受け入れられないでいた。

「シンは強くなったです。まあ、そのことは、認めてやってもいいです」

いつものシミュレーター訓練の途中で、翠星石は突然胸を張ってそんな話を始めた。小さな人形の少女の胸は薄い。胸を張られるとそんなことが強調される。そんなことを考えていると、いつの間にか翠星石が指を前に、シンのことを指さしていた。

「翠星石がほめてやってるのに、その薄い反応はなんです！？　シンの癖に生意気ですぅ！」

「前、感謝したら怒りだしただろ！」

あの時も、同じくインパルスのコクピットの中で、同じように翠星石が怒りだして訓練が中断してしまった。ただ、今回は翠星石もそのことを気にしているらしい。指す指から力が抜けて、気まずそうに目をそらす。

ただ、感情の変化の激しい翠星石のことだ。すぐに持ち直すだろうと考えているそばから、いきなり態度が変わった。

「と、ともかく、シンは強くなったです。さすがは翠星石が鍛えてやっただけのことはあるです！」

また胸をはる。本当にこの人形は忙しい。

「でも、エインセル・ハンターにはまだまだ勝てねえです。エインセル・ハンターは翠星石が惚れ惚れするくらいのいい男で、世界でも有数の金持ちです。おまけに物腰穏やかで紳士的。すぐにかっとなるお子さまとは違うです。も一つ言うならあっちの方が断然女性にもてるです。人としても男としてもまだまだ遠く及んでねえです。それに……」

「そろそろいいんじゃないか？」

話はまだまだ続きそうだったので、声を割り込ませた。操縦席の背もたれに体を預け不機嫌そう――実際、いい気分ではない――にしてやる。もちろん、翠星石はそんなこと気にしてない。

「でも、シンが勝つために一番足りてないのは、相手のことを見抜く力です」

いつもの柔らかい笑顔のままで。

「シンは、いつも自分を中心に考えてばかりです。それじゃ意識の加速もいつかは役に立たなくなるです。意識の加速は単なる攻撃予測ですから、相手の立場に立って考えられねえと意味なんてねえです」

「……相手の心を読むってことか？」

翠星石は甘い、甘いと言いたそうに立てた指をメトロノームのように振る。

「自分の中の鏡に相手を写すように、相手の殺気を読むです、考え方を知るです。そうすれば、シンはもっと強くなれるです。翠星石が保証するです」

その境地を、翠星石は明鏡止水と呼んだ。曇りのない鏡のように清らかに、澄んだ水のように静かに、戦場という狭隘な世界を写しとる。

ここは戦場。木々が燃え、視界は明と暗の両極端に分断されている。すぐ側に川があることから抜かるんだ土壌で覆われていることが多い。敵は5機。派手な色と派手なパフォーマンスで戦闘を繰り広げている。

そして、シンのインパルスは下半身を水に浸したまま、戦場を眺めている。

「考えろ。敵の目的？　俺たちの撃墜。それなら5機だけじゃなく

て、もっと多くのモビル・スーツを投入すればいい。それができない。いや、レイ隊長は施設を移してないって言ってた。できないじゃなくてしない……」

ジャブローの基地規模なら常時５０機程度の機体を所有していても不思議はない。エインセル・ハンターがいるなら防衛力が増員されている方が自然だ。

ではなぜ5機だけ。どうしてもっとモビル・スーツを出さない。温存しているから。ザフトを見くびっているから。戦力が元からないから。そのどれもがしっくりとこない。

いきなりインパルスの近くの水面が爆発した。ビームの流れ弾が着弾したのだ。生じた波がシン機を揺らすと、シンの左頬を痣を冷や汗がなぞっていく。

いつまでも考えてはいられない。いつ攻撃されるかわからない。そんな焦りが思考を幾度となく中断する。

敵の姿が見えない。敵の考えがわからない。

ふとレイ隊長の姿が浮かんだ。これは心の弱さの現れだ。翠星石の言葉が浮かんだのは、それでもまだ戦おうとする決意があるからだ。

「シン。シンは確かに成長してるです。その方向性も間違ってねえです。だからもっと自信もちやがれ、です。シンよりも強い敵は、み～んなシンの前にいるです。シンが必死こいて進んでる先にいるです。よそ見なんてしてる暇あるなら、もっと自分を信じるです。もっと素直に前を見るです。敵の立場に立って情報を分析して、そ

れから自分の経験を頼りに戦法を組み立てるです。そうすれば、シンとシンよりも強い敵の違いは、立てた戦法の再現率の違いでしかねえです。これができた時、シンはまた一つ強くなれるです。翠星石が保証してやるです」

敵は前にいる。突拍子もない戦術なんて選択しない。合理的で、確実で、より優れた戦い方を、シンには再現できないかもしれないけれど、それでも考えられる戦い方を選んでいる。

わずか5機の敵。

戦力の温存。それは違う。それでは、わずか5機の敵に翻弄されていることへの違和感を消すことができない。

ザフトを侮っている。それも違う。あのエインセル・ハンターがその身を隠すと決めた場所が、そんなに浅はかなはずがない。

戦力が足りていない。これも違う。ほかの2つの理由と同様、違和感も消えなければ、エインセル・ハンターの陰もそのままだ。

もっと素直に捉えろ。敵はわずか5機。だが、5機とは思えない戦力を持って、エインセル・ハンターを守っている。答えは、あまりに簡単なことだった。

「できないんでもない！　しないんでもない！　してたんだ！」

シンが結論に達した時、インパルスの後ろから大きな水柱が立ち上がる。それはシンの死角の中で鋭利なナイフをインパルスめがけて振り下ろそうとかざす。

その時、インパルスが動いた。双眸の輝きが尾を引くほど早く、濁った水面が踊り狂うほどの勢いでシンは振り向く。ビームを発していない対艦刀は振り抜かれた勢いで水を巻き込み水柱をあげながら振り上げられる。その剣は、水柱の中に潜むモビル・スーツの左腕を、肩から強引に切断した。

左腕を失い体勢を崩す敵のモビル・スーツ。それは、全身を黒く染めたＧＡＴ－０１デュエルダガーの姿をして、そしてそれはすぐに川の中へと沈んで消えた。

シンを後ろから奇襲しようとしていたのだ。それが、シンにはわかっていた。これは決闘ではない、戦争だ。正面から挑む義理はない。それなら、敵は後ろから来る。そう、シンは読んだ。

そして、これではっきりとした。この戦場に、敵は５機だけではない。

「みんな聞いてくれ！　この森には黒く塗装したデュエルダガーが潜んでる。派手な爆発やミノフスキー粒子でこちらを攪乱して、ヅダが派手なパフォーマンスでそれを隠す作戦なんだ！」

５機のヅダが派手な登場を行い、その姿を敵に印象づける。そして、爆弾を多様した戦法は、それだけ敵に繊細な索敵を怠らせる。派手な色で、派手な戦い方をして、さも自分たちの愚かさを印象づけて、この森に潜んでいる黒いデュエルダガーの存在を隠す。

単に視覚効果ばかりではない。人の意識を利用した迷彩だ。

「ナチュラルどもめ、卑劣な真似を！」

毒づくエミリオの機体の左目を弾丸が貫いた。途端にモニターの一部映像が不鮮明になり、センサーの破壊が確認される。

これまでならば、それは敵ヅダの攻撃か、でなければ爆弾の破片だと片づけてしまったことだろう。だが、今は敵の存在を認識している。

攻撃のあった方向へとビーム・ライフルを放つと、森の木々がなぎ倒され燃え上がる。その炎に照らされたスナイパー・ライフルを持つ黒いデュエルダガーが闇の中へとけ込むように消えた。

「レナ、気づかれたようだぞ」

明らかに敵の動きが変わった。エドモンドは黒子に関心を払う無粋な観客を鼻で笑う。それはレナも変わらない。

「問題ありません。我々ダークダガー特装隊は、この森にある限り無敵です」

態度で示すことはなくとも、ザフトに対し必要以上の恐怖を抱くことなど、この女性パイロットには無縁のことであった。

黒く染められたデュエルダガーを、ジャブローではダークダガーと呼称していた。ビーム全盛の今においてこの機体は敢えてビームを装備していない。武器は実弾、実体剣に限定され、排熱まで考慮されたこの機体は、ファントム・ペインの証である青薔薇の紋章さ

え掲げてはいない。代わりにレナ中尉のノーマル・スーツの手の甲には、青い薔薇がプリントされている。

ＧＡＴ－０１デュエルダガー。単なるマイナー・チェンジであるこの機体は正式な型式番号が当てられていない。

闇に隠し、名を隠し、その姿は現在地上を目指すエレベーターの中にある。

目の前にヅダ・ピンクがいる。そのインパルスガンダムはライフルを放ちながら桃色のヅダを牽制し続ける。そのすぐ後ろ、地面が突如盛り上がりエレベーター・ブロックが出現したことに気づいてさえいない。

ハッチなどない。むき身の箱でしかないエレベーターの中に乗り込んだ2機のダークダガーは闇の中から誘う幽鬼のように手を伸ばし、ナイフがインパルスの首に、左足の膝関節に突き刺さる。抵抗しようにも武器を構える腕は押さえられ、首から入った刃は胸部ジェネレーターを損傷させている。成す術なくインパルスが引きずりこまれ、エレベーターが降下すると、そこはただの地面以外の何もない。

隠れていたスナイパーを炙り出すために、シンは大剣を払う。ビームの刃が放つ熱が木々を切断するとともに燃え上がらせ、隠れていたデュエルダガーが露わになる。

デュエルダガーの性能はインパルスにもヅダにも遠く及ばない。ビームでないライフルではフェイズシフト・アーマーを傷つけることさえ難しいだろう。しかし、デュエルダガーはあっさりと撤退する。丘の土壁に偽装されたハッチに消えると、シンに追撃を断念させた。中で何が待ち受けているかわからない。迂闊なことはできなかった。

「地下に張り巡らせた道を利用してるんだ。これじゃあ、敵の正確な数さえわからない！」

これで、ここがジャブローの真上であることはほぼ間違いないだろう。いや、ジャブローの真上だからこそ採れる戦法だ。砲台が偽装されていなかったのも、まんまとおびき出されてしまったということらしい。

「どうするのよ、シン！？」

「任務を果たす。俺たちの任務は威力偵察で、要塞の陥落じゃない！」

そう、援軍として本隊が到着すれば、力任せに押し切ってしまえる。ハッチが多数設置されているのだとすれば、侵入も簡単だろうから。

（でも、こんな一時しのぎの戦い方なのか、本当に！？）

明鏡止水の境地でいようとすればするほど敵の恐ろしさが強調される。よくないことが起きようとしている。確証なんてないのに、確信はある。

何か、よくないことが起ころうとしている。ここで、今すぐにでも。

夜空を照らして、ザフト軍の輸送機が到着したのはすぐのことだった。

宇宙からいくつもの流星がジャブローを目指す。底の丸まった円筒形のカプセルが地球の大気に炙られ赤熱しながら成層圏への降下を果たした。十分な減速。カプセルを焼く熱が減少した時、カプセルはその壁を炸薬で吹き飛ばす。露わとなったカプセルの内部には、それぞれ3機のヅダが背中合わせに格納されていた。

そのカプセルが合計２０を超える。

「重力偏差を間違えるな。もちろん、味方に当てるようなことは論外だ」

通信で放たれるザフト兵の声。カプセルにモビル・スーツを固定していたアンカーが外され、ヅダたちが身を軽く乗り出す。暗い夜空の中、風を斬り裂いてカプセルは降下を続ける。

その眼下には、望遠とは言え燃える森の一角がはっきりと見えている。地上部隊は見事敵基地を発見し、篝火まで焚いて待っていてくれる。

多くのザフト兵はほくそ笑みながら新たな指示を聞く。

「先発隊から入電。視界良好。速度、５００を維持。角度修正４。

各機、発進！」

カプセルから一斉に放たれるズダの群。背負ったバック・パック、ウィザードが輝き、ミノフスキー・クラフトの輝きが星々のように瞬く。

「高度７００で減速後、一斉射撃を行う。総員、構え筒！」

ブレイズ・ウィザードを装備したヅダはライフルを、ガナー・ウィザードを使用する長大なビーム砲を構える。それぞれが狙いすますためモニターを注視し、そのため、誰もが気づいた。

森の一角。燃える炎に縁取られ巨大な闇が口を開いていた。円形の穴。その規模は、戦艦が入ってなおあまりあるほどの大きさがある。地上部隊の報告には挙げられていない。正体不明の何か。

「何だ？　あれは？」

「プレア・ニコル。順調稼働。エネルギー充填率９０を維持」

「偽装傘展開よし！」

「ザフト軍降下部隊を確認。予測航路、８４％一致」

オペレーターの声があがる度、暗い指令室の大型モニターにはグリーン・ライトが表示されていく。赤から緑へ。その色は次第に指令室の様子を映し出す。

明らかになる指令室の奥、そこに、光で照らされた金髪碧眼の男が鎮座している。とても戦闘指揮をとっているとは思えないほど優雅に、ティー・タイムにでも興じているほどにゆったりと。

「データ観測の準備はできていますか？」

「計測班、準備完了！」

オペレーターの声に、男は、エインセル・ハンターは手を叩く。ただ一度だけ。拍手ほど耳障りではなく、しかし彼らの功績を称えるために。

「それは重畳。では始めましょう。伝説に語られるトネリコの木は、９つの世界に根をはるほどに巨大であり、その巨樹は天につくほど雄大であったとされています。そして世界が終わりを迎えるその日に、燃やされた巨樹は世界へと火を燃え広がらせ、世界そのものを焼き尽くしてしまいました。その樹の名を、ユグドラシルと申します」

遠く神話の時代に語られた物語は、この日、現実となる。

人間には2種類の人しかいません。男性と女性です。何故なら、人は恋という強い思いで結ばれるからです。恋とは単なる異性愛に限りません。人が人へと向ける強い思いを恋と呼ぶのだとしたなら、人と人を結びつけるのは恋であって、そして、恋によって結びつけられるのは多くの場合、男性と女性です。

でもご用心。世界には恋の気まぐれを警告する神話、逸話は山ほどありますから。

強い思いで結ばれる人と出会う時、そこにはひっそり魔が潜む。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「逢魔ヶ恋」

ユグドラシル。思い人との出会いは、魔王との謁見。

第２８話「逢魔ヶ恋」

南米アマゾンの深い森の中、それはぽっかりと口を開いた。森と地面とが左右へとスライドし、人どころかモビル・スーツさえ呑み込んであまりある大穴が口を開く。月光に照らされた夜の闇よりもなお暗いその穴はその奥底を見せぬまま空へと向けられていた。

何も見えない。そんな腹立たしさに誰かがマッチの投げ込んだ。穴の中心にほのかに光が落ちて、一気に燃え広がる。穴の深奥、中心部に生じた光は一気に穴全体を照らし、その姿を明らかにする。

土くれではない、機械で舗装された壁面は不可視の力を働かせ、光がゆがみ、視界がぼやけて見える。その膨大な光は外へと漏れだした。戦闘を続けていた南アメリカ合衆国軍、ザフト軍の両軍が戦いの手を止め、夜中の夜明けを眺めている。降下を続けているザフト軍軌道部隊もまた、同じ光景と、そしてほんの少し異なった光景を眺めていた。

地面に立っているだけでは見えない。穴の直上でしか見えないものがある。穴の奥底で、なおも激しさを増す輝きとその正体。戦場に立ったことがあるものならば誰もが目にするその光の色は、ビームと同じものであった。

地獄の門が開けられた。囚われていた光が我先に逃げだし、故郷である空を目指す。

大気を裂いて光の柱が立ち上る。その膨大な熱量は大気組成そのものを歪ませ、ただ熱いというだけで轟音が響きわたった。木々を揺らす衝撃。燃え盛る炎でさえ恐ろしさに身悶えする。鮮烈な光は

すべての星々の輝きを飲み干して大地から空へ。

燃やすものは焼き、砕くべきものは砕く。

降下部隊はその業火にさらされた。直撃を受けたモビル・スーツは瞬く間に蒸発し、そうでない部隊も叩きつける大気の衝撃に崩壊を強制させられる。

それは凄惨でさえなく美しい。光が天へと昇り、天がそれを受け入れる。どれほどの時間であったのか、誰も説明できない。ある者は数秒の出来事だと答え、またあるものは数分間も照射が続けられていたと答える。

そして彼らは口を揃える。光が終わった時、すべてが終わっていたのだと。

穴から放たれたビームがやせ細り、やがて消えていくと、世界には再び夜が幅をきかせるようになる。揺らめく炎に照らされ、それでも夜空の星々が輝き始めた。だが、その中に、ザフト降下部隊の放っていたミノフスキー・クラフトの輝きは、どこにもありはしなかった。

降下部隊の全滅。この事実を、アスラン・ザラは夜空の中で眺めていた。偵察部隊が基地の場所を特定し、降下部隊、地上部隊の本隊とが同時にジャブローにて合流を果たす。１個師団を超える戦力で敵基地を強襲する作戦は、アスランの目の前で瓦解した。

「推定出力３００万ｋｗのビームですぅ！」

コクピットの中で翠星石が慌てた様子で動き回っている。何故か腕にペンを持ち、照射されたビームが降下部隊にどのような被害を与えたかの予測図が簡単ながらモニターに描かれる。

「真上にしか放てない兵器。まさか降下部隊迎撃に特化した兵器とはな……！」

あまりに非効率極まりない。敵が降下してこなければ仕方なく、降下地点がずれても意味がない。そんな博打のような兵器が本気で効果を上げると信じていたのだろうか。だが、敵は実際に降下部隊、１個連隊戦力を一瞬で消滅させることに成功した。そんな敵に都合よく動く戦況に、アスランは歯茎が痛くなるほど強く噛みしめる。

戦力の半分を消滅させられたとしても、地上部隊はすでに戦場に入っている。戦闘は続行せざるを得ない。輸送機から降下した部隊はすでに眼下でジャブローの森に入った。輸送機が撤退した今、飛行を続けているのはアスランのＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンと、そしてレイ・ザ・バレルのＺＧＭＦ－１７Ｓガンダムローゼンクリスタルくらいなものだ。

「Ｃ．Ｅ．６７年の開戦当初、地球軍は軌道上降下によって甚大な被害を出した。そして、我々がここに軍勢を率いてくることは彼らにはわかっていただろうからな」

レイは、いつでもレイだった。冷静に状況を分析し、そして言葉にはどこか棘を含む。

エインセル・ハンターは追われていることを知っていた。ザフトは彼を追うしかなかった。結果、アスランは地球を半周させられる

ほど戦場を引き回され、行く先々で戦力を失うこととなった。それは事実に他ならない。

「だが、この戦争は何としても終わらせなければならないんだ！」

エインセル・ハンターさえ倒せばすべてが終わる。まだ地上部隊が残っている。ここで戦争を終わらせることも可能なのだ。たとえ、敵がその戦力の大半を温存しているとしても。

翠星石は次々と現れるモビル・スーツの反応を警告して騒いでいる。ジャブローの穴蔵から敵部隊が這いだしてる。簡易レーダーで正確な数を計ることは難しいが、それらはザフトを包囲するようにレーダー上で点滅を繰り返す。その内の一つが、急速に近づいてくる。

それは赤い光だった。光の塊となったモビル・スーツがヤーデシュテルンを目指す。ミノフスキー粒子に由来するその輝きを纏い、赤い流星がアスランへと剣を突き出した。迎撃のため、青いヤーデシュテルンは剣を抜いた。

ビーム・サーベルとビーム・サーベルとが触れ合い、輝きが放たれる。流星の、ＺＺ－Ｘ５Ｚ０００ＫＹガンダムラインルビーンの攻撃を受け止めるとガンダム同士をつなぐ通信からは聞き慣れた声が聞こえてきた。

「戦争をやめさせたいなら、プラントが無条件降伏すればすむ話じゃないかな？」

元々同じ出生を持つゲルテンリッターは余計な通信まで繋いでしまう。

「そんなこと、できるはずがないだろう、キラ。プラントの理想は、捨て去ることができるものじゃない！」

サーベルを無理に振り抜くようにして距離を開ける。無駄だ。そう自覚しながらも腰からレールガンを展開、確実に命中させられる呼吸で発射する。肉眼では確認さえできない弾丸がラインルビーンを通り抜け、森を鋭角に吹き飛ばす。

ラインルビーンは、かすり傷一つない。

「理想を捨てられないんじゃなくて、プラントが理想に囚われているの間違いじゃないかい？」

ハウンズ・オブ・ティンダロスの前に射撃は役に立たない。レールガンは使用できない。左手でも抜刀しビーム・サーベルを両手に構えた。

「お前はどうしてわからない。人は変わらなければならない！」

「それでも、変えてはならないものもある。たとえば、僕がゼフィランサスのことを好きなこととかね」

「戯れるな！」

ゲルテンリッターが輝きを増し、輝きが推進力に変えられる。急速に接近する2機はサーベルを振るい、苛烈に仕掛け、しかし互いが相手に攻撃を加えることもなく、受けることもなく通り過ぎる。

南アメリカ合衆国が使用した兵器の名はユグドラシル。スカンジナビア王国の神話に語られるすべての世界に根を下ろすほどに巨大なトネリコの木の名である。

基地の上空めがけて固定されたこの兵器は降下部隊を瞬く間に消滅させた。

ザフトは戦力の半数を一瞬の内に失い、そして、地球軍は反撃に出た。もはや隠しておく必要はない。水中のハッチが展開し、ＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーが這い出る。地面を盛り上げて現れたエレベーターからは、黒く塗装されたＧＡＴ－０１デュエルダガーが姿を見せる。

そして、ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムの黄金の輝きが、夜空の中で太陽を騙る。

地球軍には輝かしい威光を、ザフト軍には痛烈なる恐怖を。エインセル・ハンターは、魔王はその存在でもって、戦いそのものを支配する。

ＺＧＭＦ－２３Ｓセイバーガンダムがモビル・アーマー形態のまま高速機動でフォイエリヒに接近する。双頭の機首を構成するビーム砲を黄金のガンダムへと向けた。発射されるだろう、しかし回避されるだろう。魔王を知る者すべてがそう予想し、それは裏切られた。

明星が瞬く。それは何とも不思議な光景であった。フォイエリヒが右腕からビーム・サーベルを発生させ、前へと出るとともに機体を翻す。攻撃と呼ぶには穏やかで、回避とするには悠長。セイバー

が鋭く速く、猛々しいとは対照的にフォイエリヒは動き、2機はすれ違い、そして、セイバーだけが両断されていた。

魔王だ。空には魔王がいる。

エインセル・ハンターが魔王と呼ばれているからではない。魔王の力持つ者がそこにはいるのだから。

まったくもって途方もない。ハウンズ・オブ・ティンダロスを完全に体得していなければできない動きだ。高速ですれ違う敵に的確に攻撃を当てることに加え、敵が攻撃に入る瞬間を読んでいなければできない。

最強の男という程度の評価は役不足ではないか。

レイ・ザ・バレルは素直に恐怖を感じていた。フォイエリヒと夜空の中で対峙するローゼンクリスタルの中で。

ネオの相手に付きっきりのアスランには悪いが、どうやらまず戦うべきはレイの方であるらしい。

「エインセル・ハンター。あなたを討つことに何の感慨もないが、そのお命、いただいていく」

さて、どうなることか。ダーダネルス海峡では完敗だった。

ビーム・サーベルを抜き、しかしこれで攻撃するつもりはない。ブラフだ。

（このミノフスキー粒子の濃度ならば、どこでも爆破可能だ）

ローゼンクリスタルが背負う円環から幾本もの不可視の矢が放たれる。それはフォイエリヒの存在する地点に次々と突き立てられ、やがてビームと化したミノフスキー粒子が爆発する。

さて、ビームに耐性を持つフォイエリヒの装甲はこの攻撃に耐えられるのだろうか。結論は、わからない。何故なら、爆心点にフォイエリヒの姿はなく、ローゼンクリスタルの後ろに回っているからだ。

攻撃は回避された。異常な速度で。

エインセル・ハンターは仕掛けてこない。すでに眼下の森では戦闘が激しさを増しているが、ここだけは不気味なほど静かで、遅い時が流れている。

（何故仕掛けてこない……？）

ローゼンクリスタルを振り向かせながらレイは攻撃をしてこない相手に故、焦りを募らせる。余裕を見せつけられているようが気味が悪いのだ。

だが、この機会を利用しない手はない。もう一度、円環のシステムを起動する。空間を狙うのではなく、直接フォイエリヒ、正確にはその装甲に狙いを定める。サイサリス・パパが言っていた、ガンダムを破壊するための力を使うために。

エインセルは、とうとうと手品の種明かしを始めた。

「なるほど。その円環はパルス・レーザー射出装置。一定濃度のミノフスキー粒子に計測されないほど微弱なレーザーを多角的に照射することで、レーザーが幾重にも重なり、交わる地点でのみ膨大なエネルギーが発生する。結果、そこにミノフスキー粒子が励起し、ビーム化を引き起こすことで計測上は虚空に突如ビームが発生したかのように映る」

さすがに手を見せすぎたか。そう、ローゼンクリスタルの力は、空間のミノフスキー粒子を直接ビーム化することにある。原理そのものは単純である。一昔前の放射線治療と同じことだ。放射線を照射すると、放射線が通り抜けた細胞すべてがダメージを受けるが、それは微々たるものにすぎない。しかし、角度を変えて幾度も照射すると、焦点になり一点だけが幾度も放射線にさらされることになる。すると、焦点の細胞、ガン細胞のみが深刻なダメージを負うこととなる。円環から放たれたパルス・レーザーが誰からも気づかれることなく、虚空の一点に膨大なエネルギー――ミノフスキー粒子がビーム化するほど――を発生できたように。

「とてもユニークな発想です」

（そうだ、そのままでいろ……）

ローゼンクリスタルの力は、単なる奇襲ばかりではない。

後ほんの少しの間気づかないでいてくれればいい。照準が定まりパルス・レーザーの照射が開始されるまでのわずかな間でいい。

寒気がするのに額に汗の感触がある。冷や汗というものだろう。戦場でなくては味わえない、ドミナントとしてはなかなか巡り会え

ない敵を前に、レイは1秒を10倍にも長く感じながら、フォイエリヒの最期を待ちかまえていた。

「そして」

パルスレーザーが照射される。円環の複数の照射装置――そうとわからないよう偽装されている――からレーザーが放たれ、それぞれが大気をわずかずつ暖めながら焦点へと殺到する。1は1でしかないが、1を100倍すれば100だ。1の炎に100焼かれ、そして燃え尽きろ。

しかし、爆発は発生しなかった。フォイエリヒはわずかに機体の位置をずらした。それだけだ。しかし、それだけでローゼンクリスタルの攻撃は失敗した。

フォイエリヒの黄金が際だってまぶしく見えるのは、瞳孔が開いたためだ。狙いを見破られたこと、行動を完全に看破されたことはそれほど衝撃的なことであった。

「ミノフスキー粒子の被膜に包まれるガンダムにとって、ローゼンクリスタルの力を使えば装甲そのものを爆薬に変えてしまうこともできる。まさにガンダムを破壊するためのガンダムとでも呼ぶのでしょうか？」

空間にあろうと、装甲にあろうと、同じミノフスキー粒子だ。同様に爆破ーただし、装甲のものは分子量に乏しく、パルスレーザーの照射により時間を要するーできる。それが、サイサリスがガンダムを破壊する力と呼んだゆえん。ガンダムは、全身をフェイズシフト・アーマーに包まれ、ミノフスキー粒子の塊のようなものだからだ。

魔法は解けた。

ノーマル・スーツの中では汗を拭うこともできない。

「私はレイ・ザ・バレル。第7のドミナントだ。兄がいると聞いて、一度会ってみたいとは考えていた。最強であるべき我々を上回る存在と聞いてなあ！」

ローゼンクリスタルが装甲の輝きを増す。紛い物とは言え、ゲルテンリッターと同程度の性能を有する機体である。ミノフスキー・クラフトの光は易々と純白の機体を黄金へと突き進ませた。

フォイエリヒは右腕から左腕からビーム・サーベルを伸ばす。ローゼンクリスタルが両手に構えるサーベルに比べるなら太く長い剣は、壁とも剣そのもののようにも思える。

サーベルを叩きつけてはたたき落とされ、突き出したものは払われる。まさに壁だ。そして剣。剣そのものが自らの意志で動いているかのように淀みない動きはローゼンクリスタルの攻撃をただの一度でさえ通すことはない。

子どもと大人の喧嘩ではないだろうか。通常のモビル・スーツの1．5倍の大きさのフォイエリヒを相手にしていると、ついそのように考える。

剣技では埒があかない。剣を叩きつける衝撃を利用するように距離を開け、即座にパルス・レーザーを照射する。ミノフスキー粒子が励起され、ビームの爆発を引き起こす。その場所にはすでにフォイエリヒの姿はなく、相手が逃れた先に続いてレーザーを向ける。

攪乱のために敵が散布したミノフスキー粒子の濃度は十分にある。ビームそのものを発生させることには事欠かないが、所詮は奇襲用の兵器だ。正体を看破された以上、フォイエリヒは動きを止めず、夜空に次々と無意味な光の花が咲いた。

「何故あれほど大型の機体がこうも軽々と動く！？」

ミノフスキー・クラフトは表面積の大きな機体ほど強力に働く。しかし大型モビル・スーツであるフォイエリヒは同時に通常と比べて倍もの質量を有する。機動力は一概にどちらが有利とは言えない。

フォイエリヒは１５０ｔもの機体を軽々と動かし、ミノフスキー・クラフトなしではありえない機動を見せる。縦に横に、スラスターの位置など無視した機動は、レイの予測さえ許さない。ビームは無為に爆ぜ、魔王は反撃に出た。バック・パックとアームで連結されているユニットを動かすと、そこには横一列に並んだ銃口が開いている。

銃口が輝き、放たれたビームはローゼンクリスタルに命中するなり通り抜け、そのまま木々を払い、土をめくりあがらせ、森の一角を消し飛ばす。

ハウンズ・オブ・ティンダロスでかわしたのだ。

そうだ。元よりガンダムを射撃で破壊することなどできない。ドミナントとしては戦闘経験に乏しいレイでさえ、フィオエリヒの射撃に関しては回避することができる。

活路は、絶えず前にしかない。接近戦において最強と謳われた魔王に挑むことがどれほど無謀であったとしても。

無謀は勇気とは呼ばないらしい。そして、勇気など奮い立たせるまでもなかった。敵の方からやってきてくれる。両手のビーム・サーベル。つま先からもサーベルが発生し、バック・パックの４機のユニットすべてからビーム・サーベルが発生している。

８本の剣を持つ金色の魔王の姿は、強がりを消し、臆病を臆病と定義することをやめさせる。魔王を威圧できる者などなく、かの者の前ではすべてが弱者に貶められる。

魔王の剣は壁であり、剣であり、そして瀑布か。幾重にも重なり合う斬撃がローゼンクリスタルのサーベルをすり抜け、ハウンズ・オブ・ティンダロスの喉笛を斬り裂いた。

ビームの輝きの中に、フェイズシフト・アーマーの鮮烈な輝きが混ざり込む。フォイエリヒの剣はローゼンクリスタルを捉えた。バック・パックが切断され、円環が剥離する。メイン・スラスターを有するバック・パックを破壊されたのだ。ローゼンクリスタルは急激な推進力の低下に伴い、急速に高度を下げていく。切り取られた円環は地面に激突し、フェイズシフト・アーマーの輝きを放った後、その輝きは瞬く間に衰えた。墜落同然に落下したローゼンクリスタルは川に叩きつけられ、壮大に水しぶきを上げる。装甲そのものが推進力を持つにしては水を押し返す力弱く川にうつ伏せに体を浸らせる姿は、出力の低下を如実に示していた。

体のどこかが痛むがうめいていられる余裕などない。

「薔薇水晶、機体の状況はどうなっている？」

紫色のドレスを身につけた少女が姿を現す。この手のひらに乗っ

てしまいそうな少女が姿を見せることをレイは嫌っていた。だが、この際そんなことは言ってはいられない。

「円環、及びバック・パック消失。出力、４割に低下。早急な修繕の必要を認めます」

ゲルテンリッターとは違い、心を持たない薔薇水晶のことを、レイは単純に嫌っているのだ。嫌いであるということと、しかし信用しないこととは意味が違う。戦闘継続が不可能なほどの損傷であることに違いはない。

もっとも、これ以上戦ったところで意味があるのかどうかはまた別の話だ。

全天周囲モニターには頭上にフォイエリヒが鎮座している様子を映している。見下ろされている訳ではない。ただ、空にあるのだ。さも紛い物の太陽のように。どれほど疎ましくとも憎らしくとも、地球創生以来太陽を取り除くことができた者などいないのだ。

フォイエリヒは、闇夜に輝く太陽であった。

降下部隊の全滅。それは戦力の半減以上に重要な意味をもたらすこととなった。地上部隊が2次元的に展開し、上空を降下部隊が担当するという作戦がつまずけば、地上部隊は容易に包囲され、そしてその囲みを破る術を失ってしまう。

機動力に優れるセイバーガンダムが動員されていようと、制空権を取り戻すには絶対数が足りていない。では何機揃えればいいのか、

答えられる者はいない。

空には魔王がいる。魔王は結界を纏う。揚々と魔王に触れたいと願う者は誰もなく、謁見を望む者は望むべくもない。誰もが魔王を恐れ、地べたに押し留められる。

たった1機のモビル・スーツが築く制空権が、ザフト軍すべての機体から空を奪う。

魔王を頂点に迎える世界、それはまさに地獄に他ならない。

首を失い、手のないＺＧＭＦ－１０００ヅダの屍が焼かれた木々の灰の上に倒れ込む。これほどの傷を負いながらまだ死に切れぬかのように、時折痙攣をおこしたように足が跳ねた。

足を斬られた。ＺＧＭＦ－９５３ゼーゴックがバランスを崩し仰向けに倒れると、全身を黒く染めたＧＡＴ－０１デュエルダガーが群がる。両手の肉厚のナイフを次々と突き刺しては無理に引き裂かれる金属音が悲鳴にも似た音を奏で、喰い散らかされたゼーゴックの死肉が辺りにばらまかれていく。

ダナ・スニップ。この名前を知る者は少ない。新しくザラ隊に配属されたばかりのこの若者は軍学校を優秀な成績で卒業後、偵察など軽微な任務をこなしたばかりでアスラン・ザラ大佐の下へと送られた。軽率な印象だが、自信に満ちた態度はその軽ささえ含めて評価されていた。訓練の成績は優秀。実戦でも勇敢なパイロットになると期待されると。

その自信が何ら根拠のないものと、誰もが気づかぬふりをしていた。

戦いを甘く見ていたのだ。だから軽率な態度をとった。訓練を気楽な気持ちで行い、それが周囲からは勇敢にも見えた。どんなミッションにも物怖じしないのだと。

実戦は違う。失敗したからとやり直すこともできなければ、相手は自分と同程度の能力――ダナはナチュラルを見下していたが――を持つ人間である。そうそうとうまくことが進むはずがない。敵はこちらの手を読み、命がけの戦場で気を抜く者などいない。確実に実感させられる死への恐怖を乗り越えるにしては、ダナはあまりに経験と覚悟が不足していた。

「何だよ、ナチュラルの癖によお……」

ヘルメットはつけていない。止まらない涙を拭うために外してしまった。手の甲を目にこすりつけては鼻水をすする。

逃げることは許されない。敵の包囲を飛び越えようとしたゼーゴックが上空からの横一列のビームでそのずんぐりとした胴体を貫かれた。フォイエリヒからの攻撃だ。ただフォイエリヒは空にいて、飛び上がるものを許さない。

次第に狭まる包囲網。あたりを警戒するあまりダナの搭乗するＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムは怯えたように首を回しあとずさる。

背中に何かがぶつかった。悲鳴にならない悲鳴とともに振り向きざまにライフルを発射すると、黒焦げた木を跡形なく吹き飛ばしただけだった。

異常なほど高められた警戒心は、しかし何ら役立つことはなかった。いまだ炎くすぶる木が踏み倒される。今度こそ敵か。ダナはもはや見境なくライフルを発射する。

何一つとして間違ってはいなかった。それは確かに敵であり、攻撃は確かに命中した。そして、ビームの攻撃力はモビル・スーツを破壊するに十分な威力を持つ。

間違いなどないからこそ、そこがダナの限界であった。

ビームは確かに敵に命中した。甲殻類を思わせる大型バック・パックを被り、バック・パックとアームで連結されたシールドへと確かに。しかし、シールドはビームを弾く。ビームがシールドの表面を滑り、何もない場所を吹き飛ばすでしかない光景に混乱の極みに達したダナはビーム・ライフルを乱射する。

「来るな！　来るなあ！」

攻撃のすべてが弾かれ、やがて、ライフルからはビームが放たれることはなくなった。エネルギー切れではない。乱射したことで銃身の冷却が追いつかず、安全装置が作動したのだ。何にせよ、ライフルは使えない。

敵はゆっくりと近づいてくる。緑を基調としたその体は、闇と炎に照らされる暗い森にあって不気味とも沈んだ色を見せている。その手には鎌を持ち、状況が状況であるのならダナは笑うだろう。どこの死神だと。

そう死神のように、ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型は近づいてくる。

あとずさるインパルス。すでにライフルの引き金を引くことさえ諦めている。もはやそこに冷静な判断などない。コクピットの外にさえ届くほどの叫び声をダナはあげた。ライフルを投げ捨て、バック・パックのサーベルへと肩越しに手を伸ばす。

サーベルを使用する判断は的確。しかし、遅すぎた。

インテンセティガンダムの鎌が風切り声とともに振るわれる。横一文字に振るわれた鎌はフェイズシフト・アーマーに守られているはずのインパルスの胴体をたやすく斬り裂いた。

胴裂きになりながらもインパルスの下半身は立ち尽くす。衝撃を吸収したフェイズシフト・アーマーが切断面を中心に光を放ち、それは、吹き出す血にも似て見えた。

「ストライクもどき殺ってきゃ、スティングの仇にあたんだろ」

半身を泣き別れにされたインパルスガンダムの前で、アウル・ニーダは無邪気に笑う。

囲いを破ることはできない。包囲を飛び越えようとすればエインセル・ハンターに撃墜される。是が非にもエインセルの脅威を取り除かなければならないが、それはレイにはできない相談だ。

ローゼンクリスタルは本体そのものは無事だが、元々武装に乏し

い機体である。円環を失えば戦闘力を大幅に減じてしまう。墜落した川から機体を起きあがらせたところで、空のフォイエリヒを見上げることしかできない。

シン・アスカが通信を繋いで来る。

「隊長、動けますか？」

ローゼンクリスタルのすぐ隣にソード・シルエットを装備したインパルスが着地する。

シンに気をかけられるほどとは、今のローゼンクリスタルはよほど見すぼらしく見えているらしい。そう、苦笑しながら答えておく。

「バック・パックをやられただけだ」

「援護します。隊長は撤退する方法を探してください」

これはよほどのことだ。ますますもってレイ・ザ・バレルというドミナントは追いつめられているらしい。愉快なものだと口元が勝手に緩む。

「まさか……」

「お前に助けられることになるとはな、なんて言ってる暇はありません！」

シンの必死の言葉は、二重の意味でレイの言葉を遮ることとなった。

「……言うようになったな。だが、エインセル・ハンターは強い。油断、などしようもないが……、すまない。俺からお前に言ってやれることはなさそうだ」

ここで撤退を開始するためには、エインセル・ハンターの注意を少しでも引かなければならない。シンは、それをしようとしている。そんな部下に贈ってやれる言葉なぞ、レイは持ち合わせていなかった。

戦闘中はモニターに顔を表示しない。ガンダムのカメラ越しに見えるインパルスの姿だけが部下の姿と覚悟を伝えている。

「あなたからは、十分な言葉をいただきました」

ミノフスキー・クラフトの輝きを残滓として残し、シンを乗せたインパルスガンダムは浮上する。魔王とその配下たる死が支配する空へ。

「シン、死ぬな……」

空へと出るなり、ビームが雨か矢のように降り注いできた。とにかく機体を出鱈目に動かして、無理矢理かわしてやる。ミノフスキー・クラフトに任せた無理な機動は、シンの体を痛めつける。

それでも、これくらいしなければエインセル・ハンターには届かない。

黄金の機体は目の前に。ただ全力で駆け上がればいい。

「あああああぁぁぁぁ！」

決して機動力に優れる訳ではないインパルスの全力は、徐々にフォイエリヒの黄金の姿を大きくしていく。何故か、攻撃が激しかったのは飛び上がった瞬間だけで、接近している間、フォイエリヒは何もしてこない。理由はすぐにわかった。

異常接近を告げる警報がコクピット内に流れ、何かが接近してくることがわかる。モビル・スーツだ。直感的にそう判断し、両手に構えた対艦刀で近づく何かを弾く。

ビームの粉が散る。勢いを殺されて、インパルスは仕方なくフォイエリヒとは距離のある場所に浮かばせておくしかなかった。それは相手も同じだ。インパルスに飛びかかってきたモビル・スーツ、ＧＡＴ－０４ウィンダムも同じように空に浮かんでいる。まるでフォイエリヒを守るように立ちふさがる形で。

白いウィンダム。

「ヒメノカリス！」

以前繋いだ周波数は生きているはずだ。返事はすぐにあった。綺麗な声なのに、まるで感情の伴ってない声はヒメノカリスのものだ。

「シン・アスカ。あなた、人とは違うことしないと気が済まないの？」

「目立ちたがり屋みたいに言うなよ！」

確かにカーペンタリアでもボーパールでも部隊行動が苦手で突拍子もない行動をしていたかもしれないけど、ヒメノカリスに言われるほど勝手なことはしていないはずだ。

「何でもいい。前、伝えたはず。お父様の前に立ちはだかるなら、私はスティングの仇をとると」

言葉に感情なんて込められていないはずなのに、それでも徐々に凄みを増していくのがわかる。

（来る……！）

そう、考えた。それでも、ヒメノカリスは動かなかった。

今度はヒメノカリスが守られるように、フォイエリヒの黄金の輝きがインパルスとウィンダムの間に割り込んだ。

「お父様……？」

ヒメノカリスの声は聞こえても、フォイエリヒとは通信は繋がっていない。何か話をしているのかもしれない。ただ、それをシンが聞くことはできない。

「わかりました……」

まるで場所を譲るみたいに、いや、場所を譲ってウィンダムが離れていく。シンとエインセルが残されて、シンは、初めて魔王の前に立つ。

始まりは４年前。母を殺され、ただ仇の黄金に輝く姿を見上げて

いるしかできなかった。

次はダーダネルス海峡。威圧されて、近づくことさえできないで立ち尽くしていた。

深い森と、それを燃やす炎。炎は夜空を照らして星の輝きを曇らせる。フォイエリヒの名前の由来は、”火のような”を意味する言葉なのだと聞いたことがある。だから同じ炎に輝きが曇らされてしまうことなんてない。それどころか炎を照り返してかえって輝きを増しているようにさえ思えた。森を、死体を燃やす火が、こぞって魔王を賞賛しているみたいに。

本能は告げている。逃げろと。理性は冷静だ。勝てるはずがないとわかってはいる。

歯を噛みしめるしかない。そうしないと、すぐに顎が震え出すから。操縦桿を掴む手は痛いくらいで、意識して力を抜こうとしてもまるで抜けてはくれない。目は瞬きさえ忘れてフォイエリヒからそらすことができない。

「エインセル・ハンター……」

本能が拒絶し、理性は不可能と断定する。それでも、シンは4年前から我が身のうちに根付いた何かに急かされるようにアクセルを踏み込んだ。

「あんたは、母さんの仇だ！」

ゲルテンリッターには遠く及ばない加速であっても、シンが一言述べる間にインパルスはフォイエリヒを射程に収めた。敵は動かな

い。その理由を考えている余裕なんてない。両腕の対艦刀を力任せに振り下ろす。

体が前のめりにつんのめった。攻撃が命中して、そこから生じる衝撃を体が無意識に警戒していた。ところが、衝撃はいつまでも現れない。踏ん張った分だけ、体が動いた。

何が起きたのか、考えるよりも先に動く。意識が加速し、ただ体だけが反応していくような感覚は、シンを確かに救った。インパルスが飛びのくと、装甲をビームの輝きがかすめた。フォイエリヒはいつの間にかインパルスの後ろにいたのだ。

（これが、ハウンズ・オブ・ティンダロスの力……）

何度もシミュレーターで経験したはずなのに、どこかで感覚から置き去りにしていた。非現実的だと疑っていたのかもしれない。

これが現実だ。

「俺だっ……！」

短い言葉でさえ言いきることができない。本当に瞬きほどの一瞬で加速したフォイエリヒが一気に迫ってきた。

意識の加速。明鏡止水。それらがない交ぜになって、シンはほとんど意識の外でインパルスに攻撃を命じた。剣の速さに加え、フォイエリヒの加速を加算したはずの一撃は、黄金の機体をすり抜ける。

左足を斬られた。すぐに次の動作を意識しろ。心に敵の姿を映せ。

インパルスとすれ違うように後ろへと飛んでいったはずのフォイエリヒはすでにインパルスに迫りつつある。確認したのでも、意識したのでもない。カーペンタリアで白いウィンダムが見せた機動を、フォイエリヒもしてくる。

あるのは確信とそれを元に組み立てられる意識の連続。

フォイエリヒが迫る。右手のビーム・サーベルを構え、初撃を受け止める。すれ違いざまに仕掛けてくる攻撃は、身を翻しながらかわしきれないものだけを左のサーベルで受け止める。

損害や状況をいちいち確認している余裕はない。ただ敵の動きを読み、意識を組み立て、それを元に動くだけだ。

フォイエリヒが離れていく。次の攻撃までのわずかな時間に状況の確認をすませなければ。切断されたのは左足。フォイエリヒはカーペンタリアでウィンダムが見せたような直角の機動ですぐに方向転換をしてこようとする。

（やっぱりあのウィンダムには……！）

もう思考を並べている余裕はない。加速させた意識のまま、行動を初めていなければならなかった。

８本の剣が迫る。かわす。かわせないものは防ぐ。明鏡止水が剣を教え、意識の加速が人の感覚が追いつけないほどの行動を実行する。無理矢理でも、強引であっても、フォイエリヒの攻撃を防いでやった。

離れていくフォイエリヒ。シミュレーターでも、３０秒程度持た

せたことがある。状況の確認。行動予測。意識の加速。次は、こちらから打って出る。

インパルスを加速させ、エインセル・ハンターが見せた直角の機動を実行するのだ。手足を動かし重心を入れ替える。スラスターとミノフスキー・クラフトの推力のすべてを利用して機体を直角に加速させる。それをもう一度。もう一度。インパルスは短い時間で速度を落とさないまま３６０度方向を変える。フォイエリヒへと飛ぶことができる。

機体そのものが重く、大型であるフォイエリヒは旋回しきれない。だから攻撃できる。意識が加速したそのままにインパルスの剣撃はフォイエリヒを捉えた。自らが弾丸にでもなったように剣を突き出し加速する。

まるで黄金が霧散したような。ハウンズ・オブ・ティンダロスの魔法のような光景。攻撃は当てられなかった。でも、インパルスも損傷してはいない。状況の確認。意識の加速。次に備える。

この時のことを後で思い出したなら、シンは高揚していた。自分の意志がわからないほど意識が研ぎすまされ、翠星石とともに学び、高めた技術のすべて、エインセル・ハンターを倒すためだけの力を発揮する。

だがそれでさえ、シンの力と思いは、エインセル・ハンターに及ぶことは決してなかった。シミュレーターにおいて、生き延びる時間が増えようと、ただの一度も勝利できなかったことと同じように。

意識を加速させ、会敵し、離れまた意識を加速させる。その繰り返しが、途端に綻びを見せた。

予想が外れた訳でもない。意識の加速に不備があったのでもない。しかし、インパルスは右腕を切断される。

フォイエリヒが離れる。また意識を加速させなければならない。ところが、フォイエリヒは加速の完成よりも速く、そして鋭い。旋回半径をさらに狭め、意識の加速が間に合わない。予測が間に合わなかったところから先の攻撃が、今度はインパルスの頭部を破壊する。

シンが連続して意識を加速させてることには限界がある。そのため、その間に一呼吸置くことでその弱点を補っていた。だが、だましだましの戦法はタイム・ラグが蓄積し、それが限界を超えた瞬間がシンのタイム・レコードを決定してきた。

すでに魔法は解けていた。エインセル・ハンターとの戦いに特化することで得た３０秒という時間は、すでに使い果たされていた。

状況の確認さえさらに間延びする。体がきしんでいた。直角に曲がるという機動がもたらしたGが今更シンの体を締め付ける。

（翠星石に注意された、通りだな……）

こんな思考を許さないほど、エインセルは速い。意識の加速を許さないほどの瞬間に振るわれる光の剣は肩が辛うじて残されていた右腕を完全にもぎ取り、バック・パックの一部を破壊する。

ミノフスキー・クラフトが搭載されたバック・パックが破壊されたことでインパルスは目に見えて高度を下げ始めた。それさえ予測していたようにフォイエリヒはシンを追う。

意識の加速を行っている時間を、相手の攻撃の合間をエインセルは必要としない。同じことができることと、同じようにできることとは意味が違う。

もはや意識が間に合わないほどの時の狭間の中で、シンは最後の瞬間まで戦いをやめようとはしなかった。

生きることを渇望する本能。母の復讐のため。戦士として培われた戦意。そのどれかのようで、そのどれとも違う。心の内に宿る何かにおいたてられるようにシンはフォイエリヒへと、エインセル・ハンターへと立ち向かう。

インパルスは左腕にただ一つの剣を持つ。フォイエリヒは全身に8の剣を持つ。数を比べるまでもなく、結果は明白であった。

最後の腕を切り落とされ、ドッキング機構に重要な損傷が生じたことから上半身と下半身が離れ離れに落ちていく。空には、くすまぬ黄金のフォイエリヒを残したまま。

多少の時間をかけた。この事実は性能で遙かに劣るインパルスがもたらした小さくとも奇跡と呼ぶに値する。

だが、結果は何ら変わることはない。インパルスは破壊され、フォイエリヒの黄金の体は傷一つない。たった一つだけ、異質な輝きがあることを除いて。

この輝きこそが、インパルスが、シン・アスカが演じたもう一つ

の奇跡であった。

ビームを弾くフォイエリヒの装甲。それはビームとライデンフロスト現象を引き起こすよう調整されたミノフスキー粒子を纏うという点においてフェイズシフト・アーマーと共通する。ビームの熱量そのものの吸収量がわずかであるため発光現象は目立たないが、ビームほどの熱量にさらされれば、ミノフスキー粒子は吸収したエネルギーを光として放出せざるをえない。

フォイエリヒの腕に見られる異なる輝きを放つ一筋の線。それは、インパルスの放った一撃がフォイエリヒをかすめたことを意味する。

この奇跡を知る者はわずか一人。エインセル・ハンターだけであった。

腕に残る一筋の輝きを、エインセルは微笑みさえ浮かべて眺めていた。

ただのコーディネーターがエインセル・ハンターを超えられるはずがない。そんな当たり前の光景を、アスランはガンダムラインルビーンと対峙しながら眺めた。両者とも傷はない。結局腹のさぐり合い。まだどちらも全力を出してなどいない。

もっとも、ラインルビーンとの戦闘に終始せざるを得ないことに代わりはない。アスランがフォイエリヒを抑えることができないでいる。

（これ以上ザフトの損害を増やす訳にはいかないな）

アスランは、暗い覚悟を固めた。

「パラスアテネへ。撤退する。目標をできるかぎり軽微な損害に設定し、アリスに撤退を実行させろ。他の艦と連絡して、残存するインパルスすべてにだ」

「アリス、発動！」

前線からの指示を受け、ラヴクラフト級特殊戦闘艦ミネルヴァの艦長タリア・グラディスはアリスの発動をオペレーターに高らかに命じた。広いブリッジ内に艦長の声が響く。

「グラディス艦長、シン・アスカ機、反応ありません」

すでに撃墜されている。オペレーターの報告に、タリアは口元に手をやり、悩んだ仕草を見せた。それもわずかな間のこと。手が離れ、露わになった口からは冷たく聞こえる声が聞こえた。

「放っておきなさい。どう転んでも、議長はお喜びになるでしょうから」

生き延びればそれでよい。だが、死せる英雄にも、あのお方ならば利用価値を見いだすことだろうから。

気がついた時、体の半分が水に浸かっていた。目の前では破壊さ

れたハッチから泥水がコクピット内に流れ込んでいた。どうやら川の中に落ちたらしい。それが衝撃を和らげ、うまく浅いところに落ちたからおぼれることもなくすんだ。

シンは自分の悪運の強さに苦笑した。ところが、すぐに苦痛にうめくはめになった。無傷ではない。打撲くらいは負っているのだろう。シート・ベルトを外し、座ったままで体を軽く動かしてみると全身が鈍く痛んだ。

だが、いつまでもこうしている訳にはいかない。外ではまだ戦闘が続けられている。フェイス・ガードが泥にまみれ使えなくなったヘルメットを外して水の中へ投げ落とす。ヘルメットを外したためか、音がはっきりと聞こえていた。激しい戦闘音は近い。

シートから降りて、水をかき分けながら破壊されたハッチの隙間から這い出すように外に出る。取れたハッチの一部がコクピットすぐ外の位置で足場になってくれる。ここから眺めると、やはり周囲は川であるらしい。森を燃やしていた炎はほとんど鎮火しているため薄暗い。木がなくて、暗い水平が続いているとから川だとわかる。

どれほど気を失っていたのかわからない。それほど長くもなくて短くもない。まだ戦闘は終わってはいなかった。そして、戦況は大きく変わっていた。

上空では、複数のインパルスガンダムが一糸乱れぬ隊列でライフルを放っていた。あまりに的確で、タイミングが揃っている。この不気味にも見える光景は、シンにある記憶を思い起こさせた。

フィンブル落着で、シンが囚われた原因不明の当事者意識の欠落。あの時はまるで自分がインパルスの一部のように自分のすべきこと、

できることが理解できて、それでも何をしているのかが意識できなかった。

これと同じことが見上げる空で行われている。

「インパルスが……？」

やはりあれは戦闘の緊張がもたらすものではなくて、何か人為的に引き起こされた者であるらしい。痛みのせいで体を動かすことをついためらってしまう。そこに驚きと戸惑いが加わって、シンは動けないまま見上げ続けるしかなかった。

インパルスたちはまるで全機を1人が操縦しているようにも見える見事な連携でデュエルダガーを攻撃する。1機が放った攻撃をかわした後すぐにデュエルダガーが逃げた方向に別のインパルスのビームが飛ぶ。完全な連携を維持しながら徐々に戦線を後退させている。

（撤退しようとしているのか……）

恐らくそうに違いない。インパルスたちが殿を務めてその間にほかのザフト機を逃がす手はずになっているのだろう。そんな中、いつまでも撤退しようとしないインパルスがあった。

現在使用する者が少ないブラスト・シルエットを装備した機体だ。左腕のフレームが破壊されているのか、右腕だけで腰だめに大型ビーム・ライフルを構え、射撃を行っている。何故かこの機体だけが撤退の足が鈍く、囮として残ろうとしているようにも見える。

この戦場で、ブラスト・シルエットを装備したインパルス――大

半はフォース・シルエットを使っていた――は、シンの知る限り1人しかいない。

「まさか……、ルナマリア！」

敵が反撃に打って出るまでの戦闘でルナマリアは左腕のフレームを破壊されていた。そして、ブラスト・シルエットを装備したインパルスだ。

嫌な予想だかりが積み重なって確信が近づいてくる。

ただ1人残される形になったインパルスは敵の集中攻撃にさらされる。ビームが動かない左腕をもぎ取った。よく見ると、ところどころに被弾の跡が見られた。もう機体そのものが限界を迎えているのだ。

いてもたってもいられない。シンは川の中へと飛び込んだ。浅いところとは言え、足がつくほどではない。泳ぎながら、水を必死にかき分けながら声を張り上げる。

「もうやめろ、ルナマリア！　それ以上は機体が持たない。君がそこまでザフトに義理立てする必要なんてないだろ！　妹さんがいるんだろ！　帰りを待っている人がいるんだろ！？」

泳ぎ方なんていい加減だ。とにかく足をばたつかせ、腕を振った。泥水が口に入り込んでのどを痛めても声の続く限り叫び続けた。

どうして逃げてくれない。君は自己犠牲なんて柄じゃないだろ。どうしてザフトのために死ななくちゃいけないんだ。泥水を思い切りかぶったことでこれは声にならなかった。

ルナマリアのインパルスがさらに被弾する。

ようやく浅いところについたシンは腰まで水に浸かりながら必死にもがく。少しでもルナマリアのそばへ、声の聞こえるところへ急ぐために。

「やめてくれ！　もうやめてくれ！」

全身が傷だらけで、すでに右腕も失っている。それでも胸部のバルカン砲を使ってまでルナマリアは戦いをやめようとしない。仲間を逃がす時間を稼ぐために。そんな戦い方で生き延びることができるはずなんてないとわかっているはずなのに。

シンの声は届かない。少しでも、わずかでも近くに。水の抵抗を体で分け進む。

シンは、突然足を止めた。見上げた視線の先には、胸を深々と斬り裂かれたルナマリアのインパルスガンダムの姿があった。

「ルナ……」

まだ胸部が破壊されただけだ。腹部のコクピットは無事で、ルナマリアも生きているかもしれない。生きていてくれるかもしれない。必死に誤魔化そうとして、涙はかってにあふれてくる。

「ルナ……」

ルナのインパルスを破壊したのは、白いウィンダムだった。ヒメノカリスの機体だ。そのウィンダムのサーベルから滑り落ちるよう

に傷だらけのインパルスが落ちていく。

破壊されたフェイズシフト・アーマーの輝きが視線の向こう側、川の先へと落ちていく。ジェネレーターが破壊されている。すぐにでも爆発を起こす。ルナは確実に死ぬ。

涙だって流している癖に、心はなかなか悲しみというものを露わにはしてくれない。インパルスが落ちていく光景を、呆然と眺めていた。

その時浮かんだルナの顔。シンはがむしゃらに手を伸ばした。足は川底の泥を蹴る。

「ルナ～！」

そう呼ぶ声をかき消すほどの爆発が川の水をはね飛ばし、シンを呑み込み、押し流す。その爆心に、シンの初めての友である少女を残したまま。

神様の言いつけを破った人間は楽園から追放されました。その罪は人に深く刻まれて、だから人は楽園に入ることはできません。知恵という人を人たらしめるすべてを得るために、人は楽園を永遠に失ってしまったのです。すべてをことへの罰として。

だからすべてを失ったあなたを導きましょう。

原罪持たぬ清らかな乙女の眠る場所に。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅ
ｎＥｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「聖少女領域」

シン・アスカ。あなたの戦いはこれから始まります。

第２９話「聖少女領域」

ラヴクラフト級特殊戦闘艦パラスアテネの格納庫はずいぶんと閑散としている。激戦を繰り広げた後はよくある光景とは言え、もの悲しさや寂しさというものがこびりついた空気にはなかなか慣れることができない。

アスラン・ザラがキャット・ウォークから見回した範囲の中では、３機のガンダムが静かに壁際に立てられている。損傷の激しいＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルの周りを除いて整備員の数もまばらなものだ。

手すりの上に小型プロジェクターを置く。光の柱が立ち上がり、緑のドレスを身につけた翠星石が現れるのを待つ。

「撤退状況は？」

「正確な算出はまだですけど、きっと、アスランが思ってるより小さいです。……数としては」

翠星石はわかりやすく表情を曇らせた。本当に、ゼフィランサス・ズールは何故兵器に心など与えたのだろう。インパルスガンダムを囮にする形で部隊全体を逃がす決断を、翠星石は認められずにいるのだ。そのことは、次の質問を発したことで確信できた。

「インパルスは？」

「エミリオは帰還してるです」

要するに、他の主立った機体は未帰還だったということだ。ダナ・スニップだっただろうか。まだ名前と顔が完全に一致する前――たしか背の高い方がダナで、背が低くまじめなのがエミリオ・プレデリックだ――に部下を失うこともこれまでになかったことではない。そう、自分に言い聞かせることもだ。

「そうか……」

仲間の死を惜しんでいるよりも、次の策を考えるべきだろう。ジャブローを攻めきれなかった以上、エインセルは大西洋連邦の本土に引きこもる。そうすれば攻撃の手間はジャブローの比ではない。

（次の機会をうかがうしかないな）

それまで、どれほどの命が失われることになるだろう。シン・アスカもルナマリア・ホークも戻ってはこなかった。

格納庫を眺めていた視線を通路の上へと戻す。足音が聞こえたからだ。歩いているというよりも、床を踏みつけるほど強い足音が聞こえていた。

「レイ……？」

レイ・ザ・バレル。その姿を確認した途端、レイの拳がアスランの左頬を捉えた。加減してくれているとは思えない鋭い痛みが走り、思わず体勢を崩した。口の中には血の味が広がる。

「エインセル・ハンターは自らを囮にしていた。この作戦だけでザフトは貴重なモビル・スーツを一体何機失った!?　……お前の理想のために、後何人死ねばいい！？」

口元を拭うと、血がかすかに付着している。感情のない人間ではないとは言え、激昂することの少ないレイにしては珍しく歯茎に力を込めている。レイはシンのことは意外なほど気を遣っていた。結果としてインパルスを使い捨てたことを怒っているのだろう。別に殴られたことへの怒りはわかない。

「理想は、俺たちのものだ。プラントの理想のために、何より彼らの死が犬死にでなかったことの証のため、俺は立ち止まることはできない。君の部隊が全滅してしまったことは残念に思うが、俺の判断は間違ってない」

レイはこれ以上何も言わない。諦めたようとも呆れたようとも見える視線でアスランを一瞥した後、振り向いてどこかへと歩きだしてしまった。

（敵を作ることばかりうまくなったな……）

見ると、翠星石が心配そうに見ていた。別に殴られたくらいで死にはしない。そして、レイも戦場にまで私情を持ち込むことはないだろう。どう考えていようと、どんな思想を抱いていようと関係ない。ただ、自分の役割を演じていてくれている内は。

「こんにちは、っと、初めましての方がいいかな？」

こんなよくわからないノリで話しかけてきたのは女だった。赤い髪で、ナチュラルが多い軍学校じゃ目立つ方だ。シンも何度か見たことがあった。まあ、別に何の関心ももたなかったが。

第一印象は変な女。教室の片隅で1人、机に足を乗せて座っているような男に声かけてくる奴なんて普通いるか。面倒だ。不愛想に言ってやれば飽きてすぐに離れていくだろう。

「別にどっちでも」

「あのさ、君って、地球からの移民なんでしょ？」

女は何が楽しいのか、机のすぐ脇に立って一方的にまくし立ててくる。

「私、プラントに住んでるんだけど、この学校じゃ、移民の人ばっかりで、それに、移民の人って、出身地が同じ人の方が気が合うみたいでなかなか話とかしてくれないの」

「要するに、俺が1人に見えたってことだな」

「でしょ？」

俺は不機嫌だ。そうわからせてやるつもりで言ったのにあっさりと返されて、つい表情が固まってしまった。何がおもしろいのか、女は笑った。

「まあ、無理に、とは言わないけど、せっかく同じ学校にいるんだし、話くらいしない？　私、ルナマリア・ホーク。あなたは？」

追い返せそうにない。ただ、名前を素直に名乗ってやるのはそれはそれで癪で、無言で胸の名札を指さした。

「そう、シン・アスカね。じゃあ、シン、よろしくね」

これが、ルナマリアとの出会いだった。母を失って国を捨てて、プラントの帰還事業――プラントこそがコーディネーターの故郷だと言うことらしい――を利用して移住した。オーブからの移民は数が少なくて、シンが当時人を避けていたことも手伝っていつも1人だった。

そんな時に声をかけてきたのは、ルナマリアだった。

それからは腐れ縁。軍学校を1位と2位の成績で追い出されて、ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムを与えられて戦場をたらい回しにされた。何人もの仲間を失って、それでもルナマリアだけはシンのそばにいつもいた。

あの日までは。

あの日。ジャブロー攻略戦も夜。ルナマリアは戦死した。白いＧＡＴ－０４ウィンダムに撃墜されて。

そこまで思い出した時、シンは目を開けた。

（ここは、どこだ……？）

撃墜される度、見える天井は違ってる。今回は、妙に高い天井に、色々な装飾が施されていて、ロココ調だとか、バロック式だとかわからなけれど、とにかく、まるで貴族の邸宅みたいな天井だった。

上体を起き上げてみると、ノーマル・スーツは着ていない。普通にシャツとズボン、それでも、ボタンの周りや袖口にレースが使わ

れた妙に格式を感じさせる服だ。寝かせられていたベッドも人が5、6人で使えるほど広い。

ますます混乱させられる。とても軍艦には見えない。捕虜を拘留しておくための牢屋でもないだろう。それにしては部屋が広すぎる。ベッドを除いて何も置かれてはいないが、床には一面絨毯が敷かれている。

いくら部屋の様子を眺めても意味がわからない。大きな窓からは日の光が取り込まれていた。まさかここが天国なのだろうか、そんなことを本気で可能性に加え始めた時、扉が開く音がした。観音開きの扉――装飾がやたらと多い――が開いて、波立つ桃色の髪が揺れる。白いドレスがこの部屋にはとても合っていた。まるで、お姫様みたいに。

「起きた？」

「ヒメノカリス……」

きっと、間抜けな顔をしていることだろう。ヒメノカリス・ホテルから目を離すことができなくて、状況を理解することもできない。呆然とするシンを構いもしないで、ヒメノカリスは扉に手をかけたまま振り向こうとした。

「来て。お父様がお会いになりたいって、あなたと」

「お父様って、エインセル・ハンターが……？」

ヒメノカリスは無言のまま頷いた。それだけで納得できると思っているのだろうか。そう文句を言ってやれるほどの時間もない。ヒ

メノカリスはすぐに歩き始めた。扉がしまる。シンは当然、慌ててベッドから飛び降りる必要があった。ヒメノカリスを追って駆け出すと、扉は簡単に開いた。正面には大きな窓。部屋の外は左右に広がる廊下で、ヒメノカリスの後ろ姿は左手に見えた。まだそんなに離れていないとは言え、まるで振り向こうともせず歩いている。

少しは気を遣ってくれてもいいような気がする。シンは仕方なく早足で歩くヒメノカリスに追いつく必要があった。

「ヒメノカリス、いくつか聞きたいことがある」

返事はない。別に拒否されているわけではないと、歩きながら聞いてみることにした。

「ここはどこなんだ?」

「大西洋連邦のアズラエル家の邸宅。ジャブローの戦闘で気を失ったあなたはここに運ばれた」

ウェーヴのかかった桃色の髪を翻して、ヒメノカリスは青い瞳を見せた。ラクス議員と同じで、とても綺麗な色をしていた。

「ザフトは、どうなった?」

「多くが撤退した。アスラン・ザラもレイ・ザ・バレルも撃墜されていない」

ヒメノカリスはまた顔を前に戻してしまった。ヒメノカリスと顔を合わせるのはこれでわずか3回目になる。レイ隊長に言われた通り、シンはヒメノカリスのことを何も知らない。

赤い絨毯が敷かれていた。廊下にはいくつもの扉があって、すぐ横の窓から外は中庭になっていた、よく手入れされた花壇に色とりどりの花が咲いている。ここはおとぎ話のお城で、ヒメノカリスはお姫様。この妙な懐古趣味はエインセル・ハンターの趣味なのだろうか。だとすると、エインセルは何でも自分の思い通りにしなければ気が済まないのかもしれない。家も娘も。

そんな男が、一体シンにどのような用があるというのだろう。いまいち本気になれないまま、シンはヒメノカリスの後についていく。

長い廊下なのに誰ともすれ違わない。結局誰にも会わないまま、廊下は突き当たった。突き当たりには別に他の部屋と何も変わらない扉がある。ヒメノカリスは装飾の施されたドアノブを掴んだ。

「ヒメノカリス！」

とっさに叫んだのは、確認をしておきたかったからだ。ヒメノカリスはドアノブを掴んだまま、首だけで振り向いた。

「何？」

「エインセル・ハンターは、どうして俺と会いたがってるんだ。俺は単なるパイロットで、そりゃ、仇で、うっとおしい奴だなんて考えられてるかもしれないけど、それなら、警備もいない場所をさ、君と2人きりで歩かせたりする理由が、わからない」

結局、ちょっとした時間稼ぎがしたかっただけなのかもしれない。未だにエインセル・ハンターと会うなんてことが実感を伴ってない。何にしても頭が働かなくて、無駄な仕草も多くなってるように思う。

ヒメノカリスには、こんな感情、無縁のことなのだろうか。表情は変えないで、ためらいもなかった。

「お父様に直接聞いて」

ドアが開けられた。ただ、今回はヒメノカリスが部屋の中から扉を押さえて、シンを招き入れてくれる。

夢でも見ているみたいだ。訳が分からなくて、現実のようで、同時に夢みたいにばからしいような気もする。

（ここにエインセル・ハンターがいるのか……）

ヒメノカリスを見ると、その瞳はまっすぐにシンを見たまま、入室を待っているようだった。覚悟が決まった訳じゃない。でも他にできることもない。

シンはヒメノカリスに導かれるまま、部屋へと入った。

紙の匂い。部屋の中は本棚が整頓されて並べられていて、その匂いで満ちていた。どれも背が高い。部屋が2階くらの高さがあって本がぎっしり詰め込まれている。本は分厚いハードカバーのものばかり。中にはシンが見たこともない言語で書かれているものもあった。

あまり本を読まないシンにとって、この本の量はそれだけでも圧倒されてしまう。緊張感を自覚して、心臓が嫌な鼓動を刻んで暴れ始めた。

「シン、お父様はこちら」

本棚の間、本に取り囲まれた通路にヒメノカリスが入る。シンは意識して足に力を込めて、歩き出すために決意を固める必要があった。

本の匂いはどんどん強くなる。直射日光が本を痛めないよう室内に照らされた照明はどこか薄暗い。魔導書の1冊や2冊紛れ込んでいてもおかしくないような、そんな雰囲気だ。廊下に比べてどこか肌寒いのも、紙を痛めないための空調なのだろうか。

つい周りを眺めていると、ヒメノカリスは歩く速さを変えないままどんどん進んでしまう。こんなところではぐれたくない。駆け足で追いかけようとすると、突然ヒメノカリスが止まったためぶつかりそうになった。

別に特別な場所じゃない。何でもない本棚と本棚の間。ただ少し回りよりは明るい気がした。

「お父様」

ヒメノカリスは首を少し上に傾けていた。明るさの正体もそこにある。スポット・ライトみたいに周りよりも強い照明が脚立と、その上に座る人を照らしていた。

シンが今着せられているのと同じように無駄な飾りの多いシャツを身につけた男性は、澄んだ金髪を輝かせて、読みかけの本を閉じた。そして、その青い瞳でシンを見た。

若い男性だ。まだ30くらいの。でも、この人のことを、ヒメノ

カリスは父と呼んだ。では、この人が、この男が。

男性は微笑む。薄暗い室内で、そこだけに降ってくる光の柱の中、シンよりも高いところから。

「お初お目にかかります。エインセル・ハンターと申します」

母を失ったのは４年前。仇と知ったのはつい最近のことだった。それから、シンは何かを目指して、それでも目標なんて見えていなかったことに気づかされる。魔王なんて呼ばれてるからって、不気味なマントの頭に角の生えた男を想像していた訳じゃない。それでもまさかこんな人を想像していた訳じゃない。

「あなたが、エインセル・ハンター……？」

モデルか、映画俳優でもしてそうなくらい格好のいい人で、それがどうしても魔王の姿と重ならない。ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムから覚えたプレッシャーと重なってくれない。

見上げる姿は照明と関係なくまぶしいくらいで、つい、この男が母の仇であることを忘れそうになった。

「はい。あなたの母を殺した者です」

何かしようと決めてた訳じゃない。拳を握り固めて、足は勝手に前に出た。いや、出ようとした。

「シン！」

シンのすぐ前に立っていたヒメノカリスが伸ばした手を後ろ手に

シンの胸にあてて止めようとした。驚いて、つい足が止まる。別にヒメノカリスに邪魔されたことに驚いた訳じゃなくて、あまり感情を見せてこなかったヒメノカリスが大きな声を出したことについ戸惑ったからだ。

「お父様を害するなら、私はあなたの敵になる」

前に立ったままシンを横目に見る瞳には、怒りの色があった。

この人は間違いなく、ヒメノカリスのお父様であって、シンの母親、マユ・アスカを殺したのはこの人だ。

不思議なくらい、怒りは長続きしなかった。この人を見ていると、とても不思議な感じがする。別に格好いい人がいい人で、顔の悪い奴が悪人だとか、そんなくだらない価値観なんてもってない。ただ、魔王の瞳はとても青くて、そこには侮辱だとか軽蔑だとか、自分のことを殺そうとしているシンへの負の感情がまるで感じ取れなかった。

どうしていいのかわからない。呆然と立ち尽くしていると、シンを止めていたはずのヒメノカリスの手がシンから離れて、父親思いの娘は近くの本棚に背をつけてシンとエインセルの間から立ち退いた。

薄暗い書庫の中からシンは、光指す書庫の中にいるエインセルを見上げていた。どうしていいのかもわからないのに、目を離すことができない。

魔王は静かに笑っていた。

「あなたは……、どうして俺をここに連れて来たんですか？」

自分を仇と狙う男を見てみたいだとか、自分の手で処刑したいだとか、そんな悪趣味なことを目的にしているようには見えない。

「あなたは私を仇と狙っている。それは何故ですか？」

先程まで読んでいた本を手に持って、足を組んだ姿勢で脚立の上に、光を浴びながら座っている。そんなエインセル・ハンターから話しかけられた時、話しかけるじゃなくて、語りかけるという言葉の方が似合う気がした。

「あなたが……、母さんを殺したから」

「それは資格にすぎず、理由ではありません。愛する者を奪われた故？　それとも、自分のものを奪われたことへの怒りでしょうか？」

口調も声の質もレイ隊長とはまるで違う。それなのに、どこか語り方がレイ隊長に似ている気がする。

「体外受精によって生まれたあなたは、母から優れた子であることを求められました。不安ではありませんでしたか、努力をやめてしまえば、結果を出し続けなければこの人は自分のことを息子とは認めてもらえなくなるのではないかと。軍学校では短縮カリキュラムとは言え、主席で卒業し、インパルスガンダムを受領した。まだ、努力し続け、結果を出し続けることがやめらることができない」

エインセル・ハンターがこんな一兵卒のことを知っていることが、どうしてだか不思議なことには思えなかった。この人なら何でも知っているんじゃないだろうか。そんな錯覚を覚えるくらい、声が透

き通って耳から入ってくる。

それは、シンが目をそらし続けた出来事を掘り起こしてくる。

「母の愛を失いたくないと怯え、たとえ死別を迎えようとそのための努力をやめることができない。私への復讐も、その一環なのではありませんか。魔王を倒すほどの力を証明し、また母への忠誠を示すために。自分は母を愛し、そして愛される資格があるのだと自覚したいのではありませんか？」

母さんのことを思い出すと、いつも仕事熱心でスーツ姿をしていたことばかり思い出す。テストでいい点をとると誉めてくれて、嬉しかった。でもそんな時いつも、じゃあ、テストで悪い点数をとったらどうなるんだろうと考えていた。

嬉しかったはずなのに、でも、いつも母に怯えていた。

思わずエインセルから目をそらす。

わかっていたはずなのに。シンが、母の愛を疑って、捨てられることに怯えて子ども時代を過ごしていたことなんて。調べようと思えばシンの経歴くらい調べられる。心境だって想像することだってできるはずだ。

なのに、エインセル・ハンターの言葉は、真実を言い当てているのではなくて、魔王が語った言葉が真実になっていくような、そんな恐ろしさを秘めていた。

確信と自信。自分の語っていることが真実であり、事実に他ならないと信じているからこその言葉の余裕と鋭さ。

（この人は何で……！？）

自分のすべてを見透かされてしまったように、これは恐怖に近い。得体の知れない何かが恐ろしくても、それでもその正体を人は確かめざるにはいられない。

シンは震える瞳のまま、再びエインセル・ハンターを見上げた。

高いところで、天から降り注ぐ光を浴びながらエインセル・ハンターは何にも変わることなくシンが自分を見ることを待っていた。

「母に認められない自分が恐ろしく、想像さえできないのではありませんか？」

「俺は！」

何か言いたいことがあった訳じゃなくて、何も言えないことはわかってた。だから、ただ叫んだだけで終わってしまった。でも、何もしないでいることには耐えられなかった。

「母を愛している。では何故試さなかったのです？　尋ねなかったのです？　母に、力のない私でも、あなたの息子でいさせてくれますか、愛してくださいますかと？」

「そんなこと……」

できる訳なんてない。もしもそうだと言われてしまったら、ずっと感じ続けた恐怖が現実になってしまうから。そんなこと、できるはずがなかった。

成果さえ上げ続ければ母さんは息子として認めてくれる。だから努力して、成果を出して、それは母さんが死んでからもやめることができなかった。

魔王の言葉は何も外れてなんていない。

「あなたには復讐する資格があります。ですが、復讐する動機がありません。あなたの復讐は、母に捨てられることに怯え、いつまでも足掻き続けることの延長線上でしかないからです。私は、あなたの復讐を成就させる必要性を覚えません。成果を出す、そんないくらでも代替のきく行為の一つにすぎないからです」

何か言い返せるはずなんてなかった。何かできるはずなんてなかった。ただ、エインセル・ハンターを見上げていることしかできない。

「あなたの復讐は、復讐でさえありません。あなたは、復讐者でさえない。そして、復讐者ではない者に、私は倒せません」

エインセルは本を開いて読書に戻ろうとする。

「ザフトから捕虜の引き渡し要求は出ていませんが、お望みでしたらこの屋敷にいてもらうことも送還することも可能です。どうぞごゆるりと」

「あの人が、エインセル・ハンター、ヒメノカリスのお父さんなんだな……」

体は中庭に移っても心は書庫に置き忘れてしまった。そんな心地で、シンは同じテーブルに座るヒメノカリスに話しかけた。緑の芝生の上に置かれた白いテーブルに、すぐそばに立つ木が濾過した木漏れ日が柔らかく注いでいる。風がとても心地いい。

「そう。絶望の淵にいた私をお救いくださった、最愛の人」

そう言いながら、ヒメノカリスは紅茶を飲む。シンの目の前にも同じ種類の紅茶があるのだが、ヒメノカリスの趣味か、やたら渋みの強いお茶でなかなか一息に飲むことができない。まだ半分以上をカップに残している。

「不思議な人だった。どうして俺のこと、あんなにわかったんだろ？」

まるで、見てきたみたいに。それとも、あんな人が自然と人の上に立つのだろうか。

カップを置いて、ヒメノカリスはシンを見る。エインセル・ハンターとは違う輝きをした青い瞳が、シンを眺めた。

「お父様も、あなたと一緒だから」

一呼吸置いてから、ヒメノカリスは話始める。

「お父様も、そのお父様から優れた存在であることを求められて作られた。でも、その人は優れた存在しか自分の息子とは認めなかった。お父様は尋ねたそうよ。能力がなければ認めてもらえないのでしょうかって。もう、２０年以上も前に」

ヒメノカリスはまた紅茶を飲み始めた。早く続きが聞きたいと、つい急かすように聞いてしまう。

「それで……？」

シンにはできなかったことをエインセルがしたのなら、その結果は、もしかしたらシンがたどったかもしれない未来の一つだから。

「お父様はその男を殺した」

答えは、あまり聞きたくないものだった。エインセル・ハンターの父親は、結局認められなかったのだ。能力を持つ子どもしか、成果を上げる息子のことしか。自分のことでは決してないのに、胸にはひっかき傷ができた。今なら紅茶の苦さも何ともないような気がして、試しに口に含んでみる。

「あなたが同じかはわからないけれど、あなたとお父様はとてもよく似てる。でも自惚れないで。お父様と同じくらい格好いいなんて言ってる訳じゃないから」

つい紅茶を一気に飲み込んでしまった。喉が熱い。ついでに蒸せた。こぼしてしまわないようにカップをうまく持ったまま横を向いて咳きをする。

ようやく喉が落ち着いたところで、少しくらい文句を言ってやりたくもなる。

「なんだよ、いきなり！」

だってお父様の方が格好いいでしょう。きっとヒメノカリスはこんなこと考えてる。とても冷静な目をしたまま、紅茶を飲み干したらしかった。置かれたカップは空になっていた。その白い指先が用済みになったカップを離れ、シンの額へと伸びた。

「でも目は、少し似てる気がする」

視線を合わせて見つめられて、その眼差しが急に鋭さをました時、シンは思わず身を引いてその指から逃れた。椅子の背もたれにぶつかって、危なく倒れそうになった。

「一つ、言っておく。もしも今後もお父様のお命を狙うなら、その前に私があなたを殺す」

そしてすぐにヒメノカリスは視線を元に戻す。元の、あまり感情を感じさせないものに。結局、シンは復讐するにしろされるにしろ、復讐からは逃げられないらしい。

「ヒメノカリス、君が最後に撃墜したインパルスには、俺の友人が乗ってたんだ」

気を失う前に見た光景は、ルナマリア・ホークの乗るインパルスが白いウィンダムに撃墜される姿だった。

別に恨み言を言いたいはずじゃないのに、つい呼吸が荒れて、ゆっくりと息を吸おうとして鼻息が大きくなる。

「そう。憎い？　私のことが？」

「わからない。戦闘中のことだし、もしもヒメノカリスが撃墜しな

かったら、ルナマリアは、まだ戦闘を続けていたと思うから。でも、勘違いしないでくれ。ルナマリアはあの時はおかしかったけど、普段は別に戦闘なんてしたくてしてる奴じゃなかった」

「母親を殺されたことは許せなくても、友達を殺されたことには怒らないの？」

いいわけがないだろう。ただ理屈の上で逆恨みだって自分を納得させてるだけだ。それなのに、ヒメノカリスは無神経だ。

「ヒメノカリスだって俺が君の大切な人を殺したこと、恨んでるだろ。殺すチャンスなら、いくらだってあったんじゃないか？」

「スティングは戦士として死んだ。だから、あなたには戦士として死んでもらう」

「ルナマリアもそうだって。でも、母さんは違う。殺されなきゃならない理由なんてなかった！」

「だからお父様は言った。あなたには復讐をする資格があるって。でも、あなたは動機をなくしてる。お父様は以前言ってた。復讐はどれほど綺麗に飾ったところで、本能の命じた、仲間を守るための防衛本能にすぎないって。大切な人を殺した相手はまだ誰か大切な人を傷つけるかもしれない。だから、そうなる前に殺せ、そう、本能が命じているだけだって」

奇妙な関係だ。シンはヒメノカリスに友達を殺されて、シンはヒメノカリスの弟を殺した。エインセル・ハンターの言葉を借りるなら、どちらも復讐の資格を持っていることになる。

（何なんだよ、復讐って！？）

ヒメノカリスが言ってくれていることはうまく理解できない。何となく、復讐がよく言われているくらい綺麗なものじゃないってことくらいわかった。

「お父様があなたのお母さんを殺したのは結果。本当はオーブを予防処置として始末しておきたかっただけ。これは資格のない復讐。あなたは動機のない復讐者で、お父様は資格のない復讐者」

復讐が、危険な存在を排除することでしかないなら、それは何となく言いたいことはわかる。シンは資格があっても、エインセルに復讐する理由がなくて、エインセルは理由があっても資格がない。ただ、復讐を予防処置という考え方で捉えるなら、シンもエインセルも何も変わらない。きっと、ヒメノカリスが言いたいことはそんなこと。

「あなたはお母様のために戦うことに悩んでる。そして、あなたには守るべきものが何もない。お父様は嫌なの。そんなお母様に誉めてもらうためだけのことで復讐を気取られることが。それなら学校にでも戻って、先生に華丸でもつけてもらいなさい」

言い返すことなんてできなかった。ここで言い返せるなら、きっとエインセルにも何か言い返すことができただろうから。エインセルにしてもヒメノカリスにしてもシンは自分というものを見せられないでいる。自分の考え方がないのだ。何を話しても誰と話してもきっと同じだ。

シンは何も話せない。

「お父様はこの屋敷で好きにしていいって仰った。好きなだけいてくれていいから」

2人は何を話してるんだ。ここからじゃさすがに聞こえない。でも、これ以上近づくと姉ちゃんに怒られる。だからアウル・ニーダはこうして2階のベランダからヒメノカリスとシン・アスカとか言う男の様子を眺めていた。

何でもないような男だ。別にエインセル・ハンターみたいな男前じゃないし、ネオ・ロアノークやアーノルド・ノイマンみたいな歴戦のエースって訳でもない。

（あんな奴に殺されて、スティングの奴何やってんだよ？）

もっと鬼みたいな奴か、見ただけでエースてわかるようなのを想像してた。完全に期待はずれ、退屈だ。思い切りあくびをしてやろうと、口を開いた。ちょうどその時だ。隣からいきなり声をかけられたのは。

「何をしているの、アウル？」

思わず息を飲み込む。変なところに入った空気に思わずむせかえって、アウルは喉をさすりながら隣を確認する羽目になった。

手すりの上に置かれたプロジェクターから真紅を投影する光の柱が立っていた。いい加減、神出鬼没すぎるお人形だ。

「真紅か……、びっくりさせんなよ」

「こちらの質問に答えなさい」

本当に上から目線。いつものことで、今更反抗してみたいとも思わない。アウルは手すりに寄りかかった頬杖をついた。これで、真紅と目線の高さが合う。

「スティングを殺った奴がいるって聞いてな。顔くらい見てやろうって」

視線の先ではシン・アスカだとか聞かされてる男とヒメノカリスが向かい合って座っている。真紅もシンのことを見ているようで、アウルと視線を並ばせている。

さて、真紅はあの男にどんな感想を言うんだろう。気になって横を見ると、真紅と目があった。

「アウル、復讐心は捨てなさい」

いきなり何を言われたのかよくわからないで、瞬きの回数が増えた。何言ってんだよ、そう聞こうとする前に真紅は体をまっすぐにアウルに向けた。シンのことを問題にしないように。

「もっと強くなりたいなら、復讐心は捨てなさい。あなたの心に復讐ある限り、あなたはこれ以上強くはなれない」

「んな精神論聞かされてもな……」

「精神論ではないのよ、アウル。意識の加速もハウンズ・オブ・ティンダロスも、根底にあるのは完璧な敵の行動予測。そのためには、

静かな水面の如き心の平穏が必要よ。仮に、あなたが目の前に仇がいるとして、それでも、ここで相手を看過した方がよいと判断した場合、何のためらいもなく見過ごすことができるかしら？」

少し考えてみて、やっぱりそんなことできそうにない。チャンスがあるなら確実にしとめてやるくらいに考えてた。

「いや……」

「あなたはそうして、自分の予測を裏切ってしまう。どれほど強くなろうと、どれほど予測が完璧であろうと、あなたはそれを活かせない。復讐心ある限り、そこまでがあなたの力の上限になってしまう」

口では真紅に勝てない。何か言い返してやりたくて、唇にばかり力が入る。結局、唇を固く結んだまま開けないだけだった。

「強くなりたいなら、強くなる意味を考えなさい、アウル。復讐という料理は冷まして食べるものだわ」

「そんなことできるかよ！」

「まだまだ子どもね」

歩き去るアウルの背中を見送って真紅はため息をついた。ネオ・ロアノークが立ったのは、弟子に手を焼く娘の隣だった。アウルがしていたのと同じように手すりに肘をついた。こうしていると、中庭をほどよく見渡せる。

「実際、アウルは強くなったよ。さすがにゲルテンリッターの相手は無理だろうけれど、大概の敵にひけをとらない動きを見せるようになったからね」

「鉄は熱いうちに打つものよ、お父様」

真紅のこの生真面目さは一体誰に似たのだろう。ゲルテンリッターは本当に子どもと同じだ。親のコピーではない。

「でも、あのシン・アスカというザフト兵、私も興味があるわ。ジャブローで見せたあの動きは、明らかにハウンズ・オブ・ティンダロスの訓練を受けた者の動きだったもの」

「翠星石が特訓でもしてたんじゃないかな?」

同じ部隊として行動していたなら、翠星石とシン・アスカという少年が接触していてもおかしくはない。少なくとも、エインセル・ハンター相手にあれほどの動きを見せることができるほどのパイロットのことを聞いたことがないというのも不自然な話だ。

「お父様、私にはエインセル様の御心がわからない。どうして自分を仇と狙う男を屋敷に引き入れたりするのかしら? この疑問は、私が機械だから?」

少し笑ってもいいだろう。

「人間は君たちと比べても上等な存在じゃないよ。僕だって兄さんのしていることは理解できない」

「不思議ね、人って。アスラン・ザラとは理解しあえないから争って、でも、エインセル様とは理解しあえないのに手を取り合っているなんて」

「反対に理解しているからこそ起こる争いもある。大切なことは互いに理解することではなくて、相手は自分とは違うと受け入れることだよ」

言われてみるととても不思議なことに思える。このシン・アスカという少年に、あのエインセル・ハンターが気をかける理由は思いつくものではない。それに、仇をわざわざ屋敷に招き入れることもわからない。

結局真紅も人も、考えていることは大差ない。

娘はすぐ横にいる。ただの立体映像で、頭を撫でてあげることはできない。それでも、ネオは真紅を抱きしめるようにプロジェクターのすぐそばに立つ。

「真紅。僕もゼフィランサスも、君たちに心を与えたことを悩んでる。君たちを確実に苦しめることになるとわかりきっているからね」

「苦しいからと言って、産んでくれた親を恨むのは筋違いよ、お父様」

「僕はいい娘を持ったよ。だから、少しでもいい親でいたい。あの時、そう誓ったから」

あれは、もう2年も前のことだった。当時はまだファントム・ペインが設立されてはおらず、白い軍服だった頃の話だ。

通されたのは診察室。病院独特の白い壁に白い床。薬品の独特の臭いが夜の暗さを無理に引き裂く照明の明かりの中を漂う。どこかユニウス・セブンの実験所を思い出す。ネオは病院という場所が好きにはなれなかった。

白衣を着た男性が椅子から立ち上がってネオを迎えた。愛想笑いを浮かべるでもなく、その医者は手を差し出した。診察に訪れた訳ではない。ネオは初対面の挨拶として握手に応じた。

「初めまして。細君の担当医で、ミハイル・コーストと申します」

優秀で冷静。同時に、どこか冷たい印象を、このドクター・ミハイルからは受けた。

「ネオ・ロアノークです。それで、お話とは？」

ネオが急かすが、ミハイルはまず着席を促した。診察に訪れた患者と医者の位置でネオとミハイル医師は腰掛けた。すると、今度は促すまでもなくミハイル医師は話し出す。

「このようなことを告げるのは心苦しいのですが、検査の結果、あなた方のお子さんは高い確率で障害を持っていることがわかりました」

言葉ほどためらった様子はなく、慣れた様子に思える。ネオがあからさまに表情を曇らせてみたところで、気にしたようには見えない。

「出生前診断なんて依頼してません」

「ええ、ですから私の私費でやらせていただきました。個人的には、どちらか、あるいは両方が障害を抱えておられるご夫妻の場合、診断を行うべきと考えています。そうすることで早い段階から胎児にどのような障害があるのかが明らかになり、治療の準備を進めることができます。また、言葉を選ばせていただくなら、母体に負担にならない内に次の機会を得ることもできるでしょう」

別に睨みつけたわけじゃない。ただ、不機嫌を隠せた自信なんてなかった。それをまったく意に介したようには見えない医師の態度にはやりにくさを感じる。

「堕胎しろ、そういうことですか？」

「歯に衣着せぬならば」

ネオの答えは決まっている。単にどう言ってやろうか考えていただけだ。それを、ドクターは中絶の決断がつかないととらえ違えたらしかった。

やや前かがみに、どこか親身に話に応じようとしているように見えなくはない。表情はほとんど変えていないが。

「お考えください。人は誰だとて障害者になど生まれたくはありません。仮に生まれてしまう不幸があったとしても、それは我々の手で如何様にも回避できることなのです。不幸な子どもを作らないためにも、決断が必要です」

「検査技術とて完全ではないでしょう」

「現在は飛躍的に発達しました。以前は5%の確率でダウン症になる確率が30%あることしかわからないなど、いい加減な診断の下、堕胎の選択を迫られたようですが、今は違います。お子さんは、確率論とは言え、ほぼ間違いなく障害児です」

苦いものを噛んだような味に耐える間だけ口を噤んでいた。それでも相手に話し出されるほどの時間を与えないですんだのは、これ以上余計なことをされたくないという意識故だ。

「妻には？」

「ほぼ同じ内容をすでに聞きいていただきました」

それともう手遅れだろうか。

「ドクター、あなたが何をお望みにしろ、私は、障害者が不幸だとは考えていません」

「それは理想論です。障害を持つことは明らかに不利であり、また人は軽はずみに障害者を差別し、傲慢な同情を押しつける。障害を持つことが不幸でないとしても、結局は社会が不幸にする。結論は何ら変わりません」

この手のタイプを説得するのは骨だ。自分の理屈が正しいと思いこんで、他から情報を得ると言うことができない。人間は、自分が異常だと気づけない時が、一番恐ろしい。

「決断はできうる限り早いことをお勧めします。時が経てば、それだけ母体への負担が増えることになりますので。お2人ともまだお若い。また次の機会もあると」

もう、この医師と話すことは何もない。それよりも早く妻に会って様子を確かめたい気持ちに駆られて立ち上がった。

「妻と話します」

ドクターは何も言わなかった。

それからすでに2年。その時まだ生まれていなかった娘、真紅を腕の中に抱いて、ネオは自らに言い聞かせるように、誓いを新たにするように口ずさむ。

「真紅。君は機械で、僕は人だ。でも、人の親子関係が血縁を必要としないように、君たちゲルテンリッターは間違いなく僕とゼフィランサスの娘だよ」

「お父様も、私たちのお父様です」

ひれ伏しなさい、誓いなさい。これから世界は二つに分かれます。従わせる者と従うものではありません。自らの意志で立つ者と、他者に意志を与えられる者に。弱き者は後者でありなさい。それが分というもの。力がなくとも立ちなさい。無力を言い訳にすることは許しません。

世界よ良かれと願うなら。

認められない悪意があるのなら。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅ
ｎＥｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「跪いて私の靴をおなめ」

メルクールランペ。この新しい力とともに。

第３０話「跪いて私の靴をおなめ」

久しぶりに屋敷に帰ってくると、自慢のシアター・ルームが反体制ジャーナリストの巣窟に変わっていた。タッド・エルスマン議員はプラント最高評議会では唯一の非主流派として認識されている。非主流派と反体制派。気味の悪いほどお似合いの組み合わせに、タッド・エルスマンは苦笑せざるを得なかった。

部屋には資料の束が積み上げられ、何脚もあったはずの椅子はその多くが隠れて見えない。国民の圧倒的人気を誇るギルバート・デュランダル議長を相手に繰り広げた舌戦の疲れを癒すことはできそうにない。

「我が家が反体制派の拠点になっているとは噂には聞いていたが、これはすごいものだね」

愚息が記者を連れ込んだ結果らしい。それも女に頼まれる形で。我が息子ながら女で身を滅ぼす典型のような男だ。４年前の戦争でも、ディアッカ・エルスマンはとかく女性に振り回された。今ここに息子の、ディアッカの姿はない。代わりにタッドのすぐ後ろで大きなバイザーをつけた女性が深々と頭を下げた。

「申し訳ありません」

「君が謝ることではないよ」

この女性は、リーカ・シェダーはよくやってくれている。私設秘書の肩書きながらタッドが留守の間は女給のような手間仕事さえしてくれていると聞いている。

さて、そうなると、秘書に家事までさせているどら息子の居場所が問題となる。

「それより、馬鹿息子はどこかな?」

「今、ジョージ・グレン記念館に行っています。人と会う約束があると仰っていました」

ジョージ・グレン記念館。ファースト・コーディネーターとして知られるジョージ・グレンの功績を讃え作られたものであると受付のすぐ横には書かれていた。

博物館らしく強すぎない照明の廊下は薄暗い。展示物はジョージ・グレンが成し得た功績が並べられている。C．E．１５年に受賞した生理学賞受賞のメダルと表彰式の様子。C．E．２０年にはオリンピックのクレー射撃で5位入賞。その翌年に当時の大西洋連邦大統領の応援演説で熱弁を振るった事実とその写真が添えられている。

さらに先に進むと、そこは一際大きなスペースが取られていた。吹き抜けの天井に大きな宇宙船の模型が吊されている。葡萄の房を横に倒したような、そんな形の船だ。支柱となる細く長い船体の上下左右に大きな球形のドームがいくつも取り付けられている。この船の姿も名前も、この時代に生きる人なら誰でも知っている。

ツィオルコフスキー。

ジョージ・グレンが人類市場初の有人木星探索に使用した船の名

前なのだから。

控えめであったライトが急に明るさを増して、それはコーディネーターの輝かしい歴史の始まりを示す演出かもしれない。

C．E．２３年。ジョージ・グレンは木星へと旅立つ寸前に大きな大きな告白をした。自らの出生について語り、当時はまだデザイナー・チャイルドと呼ばれていたコーディネーター技術を世界に暴露した。

世界が二つに割れた瞬間だった。

この後、ジョージ・グレンは１４年にもわたる長い旅を行ったことは、この吹き抜けの広間が細長い通路を構成していることで表されているのだそうだ。そしてこの先にはやがてプラントを建国し、ユニウス・セブン、血のバランタイン事件で死去するまでの輝かしい栄光が記されている。

そのことに、アイリス・インディアは興味を持てないでいた。Ｉのヴァーリとしてジョージ・グレンと面識があるからだ。この博物館ではまるで人類の救世主のように描かれるジョージ・グレンが、実はコーディネーター至上主義者でナチュラルを見下していたことを、アイリスは知っている。

ここは約束の場所でしかない。

あまりジョージ・グレンのことには触れたくないとつい足早になってしまったアイリスがまずツィオルコフスキーの模型の下に入った。頭上の宇宙船を見上げると、後ろから杖をつく音が聞こえてくる。振り向くと、ナタル・バジルールを先頭に、杖をついたディア

ッカ・エルスマンにつきそうような形でフレイ・アルスターが続いている。何故か、ケナフ・ルキーニまでもが最後尾についている。別に呼ばれてないのに。

（ケナフさんて、少し苦手だな……）

別に悪い人とは思わないがヴァーリへの情熱が何か偏屈というか、言ってしまうなら変質的でヴァーリの1人としてはどうしても苦手意識が芽生えてしまった。目が合ってしまわないように、前に視線を戻す。すると、約束の人は時代を遡る――順路とは逆の流れで――ように、ジョージ・グレン栄光の1年航路へと足を踏み入れた。

赤いドレス――ゼフィランサス・ズールやヒメノカリス・ホテルのものとよく似たデザインをしている――を着て、黒髪はお人形のようなロールで、顔はヴァーリ。Nのヴァーリでダムゼル。ニーレンベルギア・ノベンバーがサイ・アーガイルを連れてアイリスに手を振った。

「こんにちは、アイリス。ゼフィランサスの結婚式以来だけど、覚えてるかしら？」

「ニーレンベルギア姉さん。それに、サイさんも」

かつての学友は、子どものように無邪気な笑顔で頷いた。記憶がことごとく破壊されてしまった友人の姿に、アイリスは素直に再会の喜びを示せないでいる。それはフレイも同じらしく、どこか話し方がぎこちない。

「個人的には複雑なところだけどね。サイのこと考えると」

「ニーレンベルギアは悪くないよ」

サイのこの素直な言葉に、今度表情を曇らせるのはニーレンベルギアの番だった。戦争は誰のせいでもないとしてしまうにはあまりに悲惨で、それでも誰かのせいだとしてしまうのもやはり悲惨。ニーレンベルギアのことを責めるつもりはなくても、労ってあげることもできそうにない。

人体改造の罪を背負う少女はふと顔を上げると、急に表情をひきつらせた。その視線の先には、ヴァーリの天敵が笑っている。

「ケナフさんまでいたんですね……」

「あんた、本当にいろんなヴァーリにちょっかいだしてんのね？」

「ニーレンベルギア、君は相変わらず艶やかでいい」

フレイの嫌みにもケナフはまったく動揺した様子はない。記者にはこんな神経の太さも必要になるのだろうか。ただ、そんな動じない強さならナタルも持っていることをアイリスは知っている。

「それで、用件とは？」

ナタルがこうニーレンベルギアに問いかけて、ようやく話が動き出した。

「実はね……」

ニーレンベルギアは立てた人差し指を自分の唇に当てて、いたずらっぽく話を始めた。思いも寄らない恐ろしい計画の話を。

月は古来より信仰から習俗、体内時計から潮の満ち引き、地球の自転までありとあらゆる影響を地球に与えてきた。太陽をのぞけば、もっとも重要な天体と言っても過言ではない。時代がC．E．に移ったところでそれは変わらない。それどころか、なおいっそう重要性を増している。

地球から見た月の裏側のラグランジュ・ポイントにはプラントが国土を構えている。ユニウス・セブン休戦条約では月面上はプラントと地球各国が表側と裏側を折半している。

地球にとってはプラント侵攻のための重要な足がかりである。プラントにとってはヤキン・ドゥーエ、ボアズを失った現在、最重要防衛線として機能している。まさに宇宙戦線の最前線である。

ただし、大西洋連邦軍を初めとする宇宙軍はC．E．71年末のヤキン・ドゥーエ攻略戦において甚大な損害を被ったことでいまだ戦力を回復しきれてはいない。もとより宇宙軍を持たない世界安全保証機構軍も少なくはない。ザフト軍とて地球と宇宙の両面でことを構えることを避ける傾向にあった。

大気を持たない地球の盟友は、不気味なほどの静けさをたたえていた。

月は、静かなほどに地球を見下ろしている。

ここはそんな月の上。空には地球がその大きく丸い青をさらしている。そう、ここは地球の表側。地球各国が使用している場所、そ

の上空である。

ダーレス級ＭＳ搭載艦の艦隊が整然と漂っている。いまでは伝説のように語られるアーク・エンジェル級の設計思想を受け継いだ戦艦２列縦隊に並び、その列と列の間に特に何の変哲もないダーレス級が守られるように鎮座する。

その眼下。多数のクレーターが穿たれた月の大地には谷間の中を這うようにいくつもの構造物が放射状に伸ばされている。その中心には、クレーターにも似た円形の構造物が月の表面に張り付いている。何とも巨大な構造物である。上空のダーレス級が１隻まるごと入ってしまうほどの大きさである。

この構造物を上から覗き込んでいるのはヒメノカリス・ホテル。ダーレス級ガーティ・ルーの下部展望室の窓越しに蓋を乗せられたクレーターのような構造物を無言のまま眺め続けている。

ヒメノカリスは知っている。この構造物は、ジャブローにあったものと同じもの。ユグドラシルと呼ばれる、お父様、エインセル・ハンターが作らせたもの。そして、エインセル・ハンターが求めたのはユグドラシルばかりではない。

窓から目を離し振り向く。すると、展望屋にはまだ２人がいる。アウル・ニーダは椅子に反対向きに座り背もたれに顎を乗せた、悪いくつろぎ方をしていた。ステラ・ルーシェは椅子に座って何やら難しい顔をしてハード・カバーの本を眺めている。エインセルからもらったもので、ステラは苦労しながらも読もうと努力を続けている。

この妹と弟も、エインセル・ハンターが必要としているもの。だ

から、自分も必要とされ続けなければならない。

ふと、アウルとステラがほぼ同時に展望室の扉を見た。特に変わった様子はない。それでも、スライド式の扉がそれからすぐに開き、軍帽を目深にかぶった、如何にも軍人を思わせる男性が姿を見せた。2人には、このことがわかっていたのだろうか。

「しばらくぶりです。ヒメノカリス大尉」

男は帽子を胸の前に持つと軽く会釈をした。階級章は少佐。見覚えのある顔に、ヒメノカリスもまた、スカートの裾をつまみ上げて礼をする。もっとも、アウルはよくわかっていないらしい。椅子にもたれたままにべもない。

「おっさん誰だよ?」

「イアン・リーだ。君とは以前にも顔を合わせたはずだが」

小さく息を吐いて、イアン・リー少佐は帽子を頭に戻す。フィンブル落着とともに地球に降りるまでお世話になっていた戦艦の艦長に、アウルは関心を払おうとはしない。もっとも、当時からアウルはこんな様子だったが。

「ああ、ヒメノカリス姉ちゃんに色目つかってた奴か。忘れてた」

イアン少佐としてもすでに慣れてしまっているらしい。アウルをほうっておくと、またヒメノカリスへと向き直った。

「調整はすでに完了しています。そしてこれが、アポロン。懐かしいコロニーではないかと」

展望室備え付けのモニターをイアン少佐がリモコン操作すると、そこには未完成のコロニーが映し出された。円筒状で、まだ両端が閉じられていない。完全な筒である。これでいい。この未完成こそが、完成形なのだから。あの時の損傷も、すでに修復されているようだ。

「あそこでシンの部隊に襲撃されて、また戻って来た」

「シン？」

イアン少佐にとっては耳慣れない言葉だった。あの時コロニーを襲撃したインパルスの小隊のパイロットの名前だと聞かせても、それからのことを話して聞かせると長くなる。

ヒメノカリスは小さく首を左右に振る。

「何でもない。お父様は、世界樹の起動を許可された」

「南アメリカ合衆国よりデータは届いています。お望みとあれば、今すぐにでも」

穏やかな昼下がり。シンはひどく落ち着かない様子でティー・タイムに入っていた。ここはエインセル・ハンターの屋敷で、初対面の人と同じテーブルを挟んでいれば当然だ。

相手は男性で、車椅子に座っている。サングラスをかけていて顔はよくわからないが、どこかエインセル・ハンターと似た雰囲気を

持っている。余裕を持ってティー・カップを口元に運んでいる様子がそう思わせているのだろうか。

男性――ブルーノ・アズラエルと名乗った――は笑っている。

「確かに君は敵だが、もっとくつろいでくれていい。古今東西、客人をもてなさない国はないものだ。もっとも、なかなかそうもいかないのだろうがな」

皮肉が好きな人らしい。どうやら紅茶を飲み干してしまったらしく、ティー・カップをテーブルに置いた。するとそばにいた女性――スーツ姿で、別にお手伝いさんやメイドさんではないらしい――が紅茶を継ぎ足した。ブルーノ・アズラエルがお礼を言いながらマリューと呼んだところをみると、どうやらマリューという名前らしい。

シンは理解できないでいた。何故この人は自分を茶会になんて誘ったのだろうかと。

紅茶も飲まずブルーノのことを眺めていたせいだろうか、相手は気づいたようだった。ティー・カップへと伸びていた指がぴたりと止まって、何かおかしそうに笑った。

「君は、自分のことを難しく捉えすぎているのではないかな」

意味がわからないまま始まった会話は、始まっても意味がわからない。

「エインセルは何かと理屈っぽいものだが、真理というものはいつ、どこでも変わらない。たとえナチュラルであろうとコーディネータ

ーであろうと、遠く離れた異星人であろうと、ピタゴラスの定理はピタゴラスの定理のままだ。根本的な部分は変わらないということだ」

やはり、ブルーノとエインセルはどこか似ている。尋ねているようで、実ははじめから正しい答えを持っていてだから口調がよどみないところとか特に。

「そして、君には焦りがある。いつまでもここにいていいとは考えていないが、何ができる訳でもない。だが、世界は動きを止めていてはくれない」

「でも、俺がいてもいなくても、世界は回り続ける」

結局、シン・アスカはシン・アスカでしかなかった。オーブ出身のザフト兵で、勲章こそもらったけどエースと呼ばれる人と肩を並べるほどでもない。母の仇を前に何もできなかった一兵卒でしかない。

シンがいてもいなくても世界は何も変わらない。結局、シンの一撃はエインセルには届かなかったように。

サングラスをかけていて、どうせ目なんて合わなくても、シンは視線を下げてブルーノを見ないようにしていた。

「そう諦めることができるのならそれでも結構なのだがね、だが、エインセルは足を止めるつもりはない」

そんな不気味な一言に、シンは思わず顔を上げた。まだ首の上げ方が足りていない。本当に見るべきは遙かな頭上、宇宙の暗闇を抜

けた先なのだと知らないままに。

ガイ・ムラクモは地球、大洋州連合ベルファストで生まれたコーディネーターである。父親がコーディネーターであり、ナチュラルである母とは息子に遺伝子調整を行うかどうかで紛糾したと聞かされている。少なくともわかっていることは、両者がともに歩み寄ることができなかったという事実。

両親はガイが5歳を迎えた時に離婚を選んだ。ガイは父に引き取られプラントへと移り住むこととなった。

父はナチュラルであった母の悪態をよくついた。酒に酔ってはコーディネーターの偉大さを語り、ナチュラルを扱き下ろした。ガイは相手にはしなかったが、父はただ怒鳴り散らしてさえいればそれで満足だったらしくそれを責めることはなかった。

１５を迎えた時、ガイは家を出た。全寮制の軍学校に入学するためで、国のために死んでこいと父は大喜びでガイを送り出した。ただ、偏狭な父から離れることができればそれでよかった。

だが、他人の話を無視し続けることになれてしまっていたらしい。軍学校ではいつも無愛想で付き合いづらい奴だと思われていたようだ。サングラスを愛用し始めたのは、ちょうどこの頃のことだ。

軍学校卒業後、時はＣ．Ｅ．６７年。地球との戦争が本格化した時とちょうど重なった。赤服は受領できなかったー上官を殴りとばしたのがまずかったーが、ＺＧＭＦ－１０１７ジンで戦争をかけた。大戦末期にはヤキン・ドゥーエ攻防戦に参加しムルタ・アズラエル

のガンダムと刃を交えたことがあるのはちょっとした自慢だ。

そして現在、C．E．７５年には２４を迎えた。ヘルメットの中でさえサングラスを手放せない。感情がないわけではないが、少なくとも不必要に表情を変えることはない。父に母の悪口を聞かせられ続けた時から、少しも成長はしていないようだ。

今もまだ、ザフトの兵としてお国のため、コーディネーターのために戦っている。ジンに始まり、何度も乗り換えた機体はすでに９機目になる。ＺＧＭＦ－１０００ヅダにはブレイズ・ウィザードを装着することを好んだ。機動力に優れるこれが一番融通がきく。

特に、今回のような威力偵察には適任だ。

月面ダイダロス基地に所属するガイに下った命令は不自然な動きをする地球軍艦隊の偵察である。ガイが小隊長を務める小隊を含む１個中隊が任務にあたった。

月面からさほど遠くはない宙域に、それはすぐに見つけることができた。巨大な筒だ。未完成のコロニーが側壁に取り付けられたロケット・エンジンの推力で微速前進している。他にダーレス級ＭＳ搭載母艦が２隻。

上層部はコロニーを用いた質量兵器を警戒しているそうだが、蓋の閉じられていないコロニーはそれだけ脆い。

（月に落とすつもりはないようだが……？）

「こいつは一体？」

言葉を発したのはガイではない。部下のイライジャ・キールが通信越しに発した声だ。モニターにはくすみのない金髪の美少年が映し出されている。

ガイは冷めた眼差しを部下に向けた。戦闘が想定されているというのに、イライジャはまだヘルメットをつけていない――だからその金髪がよく見えた――のだ。軍学校を出たての部下に一言注意し、ガイはモニターをオフにする。すると、モニターには筒抜けのコロニーが隠すところなくその姿をさらす。

「単に建造途中のコロニーを運ぶにしては物々しいが、こんなもので何ができるとも思えん。こんな何もない宙域に何の用がある？」

ガイが言い終えるか早いか、モニターにいくつもの光源が現れる。ガイはヅダを反射的に動かした。

「ガイ、撃って来ったぞ！」

言われなくてもわかっている。隊長と呼べ。さて、どちらを言うべきか悩んでいる内にも敵の攻撃は続いている。幾筋ものビームの輝きが友軍の間を通り抜けていく。

「迎え撃つ。サポートは任せる」

「おう！」

敵の大半はＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーだが、数こそ少ないとは言えＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダム、ガンダム・タイプの姿さえあった。

（たかが未完成のコロニーにそれほどの価値があるのか？）

どう眺めたところでただのコロニーにすぎない。ところが、ガイが見つめる先で、コロニーは思いもよらない動きを見せた。突如動きをとめ、逆噴射をかけたのだ。

「馬鹿な、こんなところで制動をかけるだと？」

この意味を、ガイを含め世界中の人々が知ることになるまで、もはや時間を待つ必要はなかった。

「シン・アスカが戦死したらしい。ここは是非とも国葬でも実施して、士気を盛り上げたいと考えている。どうかな？　アブディエルでも英雄として死ぬことができる。シン・アスカもそこそこ名の知れた存在だと示すことあできる。スピーチの内容は、もう考えたんだけどね」

アプリリウス・ワン。議長室にて、お決まりのようにソファーに座り、お決まりの相手が向かいに座り、お決まりの返事を待ちながら、ギルバート・デュランダル議長はスピーチの草稿を顔の高さにまで掲げて見せた。

アプリリウス市選出の議員であるとは言え、議長に比べれば遙かに下の権限しか持たないラクス・クライン議員へと。

ラクス議員は綺麗な顔のまま、耳通りのよい声で、ギルバートの考えを否定する。

「以前もお話したはずです。このプラントはコーディネーターによって創られた国であり、その恩恵はコーディネーターの為にあらねばならないのです」

「しかし、彼もコーディネーターであることに代わりはないじゃないか？」

「人にはそれぞれ分というものがあります。それを踏み外すことは一切認められてはなりません」

やはり、とりつく島もない。本当ならため息でもつきたいところだが、ここはラクス議員の前だ。曖昧な笑い方にとどめておくことにしよう。

「ラクス議員、君のそんなところは損な性格ではないかな。わざわざ進んで敵を作る必要はないよ」

「私たちに敵は必要です。そして、それは大きければ大きいほどによいのです」

ブルー・コスモスは恐ろしい。エインセル・ハンターは恐ろしい。そんな危機感を煽る形でクライン派は確かに指示を広げている。だが、その分だけアブディエルや潜在ナチュラルを中心として不平、不満が広がっている。

エインセル・ハンター抹殺後の政権運営を考えるなら、このようば両極端な政策は決して得策ではないと考えるのだが。

「私には、到底理解できないな」

果たして聞こえるかそれとも聞こえないのか。つい悪戯心でそんな声を出してしまう。さて、ラクス議員の耳には届いたのだろうか。そのことを確認する前に、扉が勢いよく開け放たれた。

ラクス議員腹心の女性、マティス・クラインは当然のように、この部屋の主の名ではなくラクス議員のことを呼ぶ。

「ラクス様！　資源衛星が攻撃を受けました！」

月面、既知の海にクレーターを模したような円形構造物の蓋が左右にスライドしていく。地球の１０分の１もない月の直径を貫通してしまうのではないかと錯覚するほど、姿を見せた穴は深く暗い。しかし、それも数瞬のこと。やがて、穴の中に光が生まれた。

かすかな火の粉が穴の底に生じ、何事かと覗き込むまもなく光は急速にその輝きを増す。底から瞬きさえ許されない速さで膨れ上がり、瞬く間に穴から溢れ出す。光が溢れた。

光が柱となって立ち上り、月面に巨大な光の剣を突き立てた。その穂先は闇を引き裂きながら突き進む。その先には何もない。地球を狙うでもなく、ただ虚空へと消失していくはずの光が、突如向きを変えた。

先触れがなかった訳ではない。何でもない、未完成のコロニーの筒の中を光は通り抜けた。ただそれだけをきっかけとして光が曲がり、次のコロニーへと向かっていく。そして光は筒を通り抜ける度当然のように軌道を変え、それは月面からでは狙い撃ちようがない角度へと突き進む。

資源衛星。戦争の長期化を懸念したザフト軍によってC．E．７２年初頭に建築が進められた要塞としての機能を兼ねる拠点である。かつてプラント最後の砦であったヤキン・ドゥーエの規模には遠く及ばないが、全５つの要塞が資源の確保、兵器の製造、防衛拠点の重責を担っている。

その内の一つである。アステロイド・ベルトから資源確保を目的に連れてこられた岩石のはぐれ子を要塞として改造し、そのためそれは宇宙に浮かぶ巨大な岩石のようであった。その周囲に戦艦が漂い、付近を警戒して飛び回るモビル・スーツの姿がなければ見過ごしてしまうことだろう。

まず最初の異変に気がついたのは、そんな警邏に従事するパイロットたちであった。

異常光源の接近。ＺＧＭＦ－１０００ヅダを中心とするモビル・スーツが一斉に首を回し、モノアイを単一方向へと向けた。太陽がそのまま体当たりを仕掛けてくるほどの光と熱であった。カメラ保護のためにフィルターが降りる。そんなものは、何の意味もなかった。

光が近づき、まず浮遊する小型のデブリがくすぶり始めた。表面が泡立ち、反射度に乏しい岩石がそれでも白い光を照り返す。

モビル・スーツに耐えられる熱量ではない。熱に弱いレンズが砕けた。続いて武器、弾薬が炸裂する。装甲さえその頃には爛れ、蝋細工の人形のように人の姿が伸びてたわんで消えていく。

塵は塵に。灰は灰に。高熱を前にすべてのものがあるべき姿へと

還元されていく。人が手を加える前の、宇宙開闢の原初の姿へと。

光は要塞へと巨大な楔を打ち立てた。光が暴れ、爆発が音のない宇宙に轟く。要塞の端へと直撃した光の熱は溶かしながら熱を外へ外へと伝えていく。熱に比例する膨張と、追いつかない変形の限界。要塞の表面を構成する岩石は巨大な亀裂を走らせ、乾いた土のように大きく砕けた。

光が止んで、残されたのは再び宇宙を包む闇と、砕け溶けた破片のみ。

プラントはこの日、5つの盾の1つを、あっさりと失ってしまった。

話の場所は、エルスマン宅に移されていた。反体制派の拠点。そう家主であるタッド・エルスマンが評したシアター・ルームにアイリス、ニーレンベルギアの2人のヴァーリを中心に主立った面々が集まっていた。ある者は座り、ある者はその傍らに立ちながら、そして誰もがモニターを眺めている。

そこには、ニュース・キャスターが慌てた様子で崩壊した要塞の様子を伝えていた。

「これは……？」

誰かが声を発して、答えたのはニーレンベルギアである。椅子に座り、そのすぐ背後にサイが立つ様子は、姫君と従順な使用人のように見えなくもない。

「地球軍が月面に建造して、秘匿し続けた巨大兵器。名前はユグドラシル。サイ、雛苺をお願いできるかしら？」

ニーレンベルギアに言われたサイは特に頷くこともなく懐から小型プロジェクターを取り出した。光の柱が立ち上がり、中に桃色のドレスとリボンが特徴的な幼い少女の姿が現れる。

視線がモニターからその少女へと変わったところで、ナタルが何気なく口を開いた。

「ゲルテンリッターか？」

「そう、６人目の子よ」

「雛苺、ご挨拶して」

サイに促され、しかし雛苺は自分に注目が集まっていることにやや緊張義気の様子である。

「よろしくお願い、なの……」

そう頭を下げる様子はほかのゲルテンリッターに比べるとずいぶん年齢が低いように思える。ほかのゲルテンリッターが１０代の前半から中頃のように思えるが、雛苺の印象はそれよりも幼い。

「ずいぶん幼いんですね」

アイリスが素直な感想を口にして、ニーレンベルギアは少し笑ってみせた。

「じゃあ、雛苺、お願いできるかしら？」

雛苺の姿が図面と写真に入れ替わる。サイがプロジェクターを手にしているため、ニーレンベルギアの後ろに図面は表示されている。見えてなどいないはずが、ニーレンベルギアはさも見えているかのように話し出した。

図面には、月面に設けられた円形の構造物の写真とその断面図が模式図として表示されていた。月面を垂直に採掘し、底に強力なビームの発振装置を埋め込む。まさに巨大なビーム砲である。

「月面のアルザッヘル基地に設置された高出力ビームを照射、それをフォイエリヒやインテンセティガンダムと同様のビーム屈折機構を取り付けたコロニーで反射する。そうすることで、射線に関わらずどんな場所でも攻撃できる」

ニーレンベルギアの説明にあわせて雛苺が姿を変えた図面は別の動画を映した。２次元的なそれは、月面から放たれたビームが屈折コロニーを経由する度に角度を変え、地球側の月面からでは本来見えないはずのプラントの方角にビームを運ぶ様子が端的に示されている。

要塞はこのビームによってあり得ない角度からの攻撃を受けて破壊されたのだ。ただでさえ高いエネルギー効率を誇るビームをこんな大規模兵器として使用されたのでは要塞なんてひとたまりもなかったことだろう。それどころか、プラントのコロニーなんて数基まとめて撫で斬りにされかねない。それも、遙かに離れた月面から。

「こんなの、ユニウス・セブン条約違反じゃない！」

叫んだのはフレイだ。ユニウス・セブン休戦条約においてプレア・ニコルの兵器への搭載が禁じられたのは、核ミサイル、ジェネシスなどの大量兵器にプレア・ニコルが使用され甚大な被害が発生したことへの猛省にあったはずなのだ。

図面は今一度姿を変えた。月面のユグドラシルを中心にいくつもの発電設備が離れた地点に点在していることを示している。

「いいえ。発電設備にプレア・ニコルを搭載することは禁じられていない。そして、ユグドラシルも兵器本体はプレア・ニコルを搭載してないもの」

原子力発電によって作り出されたエネルギーを兵器に使用しているだけである。ザフトのモビル・スーツのバッテリーの充電に使われるエネルギーも何割かは原子力発電によって作られたものだ。違うのは、兵器の規模だけ。

「そんなの誤魔化しでしょ！」

「それが戦争ってもんだ。どいつもこいつも、抜け道を探すことにご執心だ」

足の悪いディアッカは椅子に座り、肘掛けに手をついて姿勢で頬杖をついていた。気だるさというよりも、不機嫌さを体言している。

「でも……！」

突然、フレイの勢いが弱まった。何のことはない。これほどの大規模兵器に、エインセル・ハンターが関わっていないはずがないと

気づいたからだ。あの人は、本当の意味で目的のためには手段なんて選ばない。

言葉を止めたフレイに代わったのは、タッド議員であった。皆とはやや離れた位置で、全員のことを見ることができる位置に立っている。議会にしろどこにしろ、そんな立ち位置がすっかり馴染んでしまったと、苦笑しながら話に加わった。

「ビームは遠距離の攻撃に向かないとされているが、本当にこんなことが可能なのかね？」

「そもそも出力が桁違いです。また、コロニー内部にＩフィールドが漏斗状に展開されているとお考えください。一定距離内であれば、ビームは屈折コロニーを通過する度に収束を繰り返し、目標まで十分な攻撃力を届けることが可能です」

多少の拡散など無視して攻撃できるということだ。かつて最強の名をほしいままにしたゼフィランサス・ナンバーズ、その２号機であるＺＺ－Ｘ２００ＤＡガンダムトロイメントが同じ技術と発想の兵器を搭載していたことを思い出す者は少なくなかった。

タッド議員とニーレンベルギアの話は続く。

「おまけにコロニーの使い方によってはどんな地点も狙い撃ちできる。恐ろしいものだね。それで、何故君がこれを知っているのかな？」

「この兵器の問題の一つに、命中精度の向上がありました。コンピュータで行うことも考えられましたが、エインセルさんは、敢えて人を使うことを好みました。エクステンデッドと言ってわかる人は

いないでしょうけど、素質ある子どもに、私がちょっと手を加えて空間認識能力をとぎすましました」

「聞いたことがある。宇宙での生活が長いと、希に異常なほど空間認識がうまい人がでてくることがあると」

ナタルの言葉に、ニーレンベルギアは少し頷いてすぐに話を続ける。

「そんな力で3次元的な処理を行ってもらうの。そうすることで、月面からの狙撃を可能としているというわけ」

「おまけに動かない標的ならミノフスキー粒子の電波障害はさしたる問題にはならないだろうね」

位置さえ正確に把握できるなら、そもそもレーダーに頼る必要なんてない。要塞を動かすにしても膨大なエネルギーと、何より時間を必要とする。よって、ジェスの次の質問は、至極まっとうなものであった。

「チャージにはどれくらい時間がかかるんだ?」

ニーレンベルギアの答えもまた、当然のものである。

「そんな最重要機密まで知ってないわ」

次撃がいつ放たれるかわからない。そして、どこが狙われるかもわからない。標的は自由自在。この瞬間にプラントが攻撃を受けることもあり得ない話ではない。

その事実に、誰もが口を閉ざす。つけっぱなしのモニター画面でキャスターが被害の甚大さを語る声だけが響いている。そんな沈黙を破ったのも、同じく報道関係者であるジェスだった。

「プラント本国を狙う予定は！？」

「さあ？　次かもしれないし、５つの資源衛星をすべて破壊してからかもしれないわ。だから教えてあげにきたのよ。逃げるなら、早くなさいって。ちょっと遅すぎたかもしれないけれど」

続いてモニターは混乱するプラント国内の様子を映し出す。特に誰もが狙われると考える首都アプリリウス市は混乱の極みにあった。我先にトランク一つ抱えた市民が宇宙港に殺到している。券売機には長蛇の列がでいて、旅券を確保できなかったらしい人が係員につかみかかっている様子が見られた。

「プラントは、一体どうなるんでしょうか……？」

アイリスの言葉に、答えられる者は誰もいなかった。

「ジャブローにあったのと同じ！」

マリューと呼ばれていた女性が持ってきてくれた小型モニターには、月面から立ち上る光と、その光がもたらした結果、崩壊したザフトの要塞が立て続けに映し出された。

この光景はシンを椅子から飛び上がらせるには十分な衝撃だった。シン１人だけが立ち上がって、ブルーノ・アズラエルは静かに紅茶

をすすっていた。

「ユグドラシル。これをエインセルはこれから5度に分けて射出するつもりだ。続く4撃ですべての資源衛星を破壊する。これでプラントは丸裸になることだろう。そして、最後にアプリリウス市を撃ち抜く」

「そんな……！　あそこには戦争と関係ない人だって大勢住んでるんだ！」

「だが、政治の中枢でもある。そこさえ落とせばプラントは手足もがれ、頭を潰されたも同然だ。戦争は、我々の勝利だ」

戦略的にも戦術的にも非の打ち所なんてない。でも、それが認められるかどうかとは話が違う。とにかく気持ちばかりが焦って、左右を見回した。エインセル・ハンターの姿を探して、見つけられないって気づいておきながら。

ブルーノがカップを置いた。それはとてもマイペースな行動に思えた。そんな後でもできる行為をしてからしか肝心のことを話してくれなかったからだ。

「エインセルは地下にいる」

暗い地下の部屋。足下の冷たい質感を照らす光以外の光は排斥されている。そんな限られた光量はそれでもいじらしく王の姿を映し出す。その白い肌を、その黄金の髪を、その青い瞳を。

王は闇の向こうを見上げながら、見通しながら、ただ1人でたたずんでいた。

「復讐者にして復讐者でない者に、敵であって敵でない者に、何より愛を知る者に、私は倒されなければならないのです。ですが……」

決して鮮明には見えないその顔に、絶望と失望とが暗い影を一滴こぼした。それを誰も知る者はいない。王がそれを望まない。よって、誰もが目にすることは認められない。たとえ誰が望もうとも。

「エインセル・ハンター！」

そこは暗い場所だった。床を照らすくらいしか照明が灯されてない。せいぜい自分の足下くらいしか目にできなくて、暗い部分は完全な闇に包まれていた。見えないんじゃなくてないのかもしれない。実は今見えている光の道だけに床があって、他は全部穴、奈落に突き出た通路の上を走らされているのだと言われたとしても、今のシンなら信じたかもしれない。信じて、それでも気になんてしなかったことだろう。

シンはただ光の回廊を走った。その先、光の途切れた場所に、エインセル・ハンターの姿があった。

膨大な闇に上に差し出されたか細い光の通路。その先に、エインセル・ハンターはたたずんでいた。

何故エインセル・ハンターが魔王と呼ばれるのか、その理由が、ほんの少しわかった。あれほどの大量破壊兵器を持ち出しておきな

がら、エインセル・ハンターは微笑みさえうかべて涼しい顔をしていた。もしもこの人が味方なら、どれほど頼もしく見えたことだろう。この人の敵でいることがとにかく恐ろしい。

震えている訳じゃない。怯えてる訳じゃない。それでも、シンは意識して声を張り上げなければならなかった。

「どうして！　あなたはこんなことをするんだ！？」

「プラントは破壊されなければなりません」

まるで神託や予言みたいに、エインセルの語る言葉は真理そのものにさえ聞こえた。

（自分を見失うな、シン・アスカ！）

「プラントのコーディネーターがまた敵になるかもしれないから先に殺しておくなんてあまりに身勝手だ！　そんなの復讐なんかじゃない！」

「そう、私は動機の復讐者でありながら、資格の復讐者ではありません」

思わず言葉に詰まったのは、エインセルがシンとヒメノカリスの交わした話の内容を知っていたからだ。別に何の不思議もないはずなのに。

ヒメノカリスとは、復讐を予防処置として話あった。一度でも大切な人を奪った相手がいたとしたら、それはまた次も大切な人を奪うかもしれない。そうなる前に殺す。それが復讐なのだとしたら、

シンは母を殺されたことを資格を持つ復讐者で、エインセルは動機を持たない復讐者だということになる。どちらも、予防処置という点では変わりないから。

「ヒメノカリスから……？」

「はい。ヒメノカリスはすでに月に上がっています。私もまもなく月へ参ります。アプリリウス市は、私の手によって」

細くて長い指が何かを握りつぶす仕草を見せて、それで本当にプラントが潰されてしまったみたいな寒気を感じた。この男は、必要ならプラントを焼くことを躊躇しない。

「あなたも俺も復讐者ではあっても復讐者じゃないとするなら、あなたが俺の復讐を否定するなら、あなただってこんなことしちゃいけないはずだ！」

シンには資格があっても動機がない。今エインセル・ハンターを殺してもシンに守れるものなんて何もないから。

エインセルは動機を持ちながら資格がない。プラントを焼き払うことが戦略的に理に叶っているとしても、プラントがそれほどのものをエインセルから奪ったわけじゃないだろうから。

そんなシンの必死の言葉は、それでもエインセルを揺るがすことはない。大火をそよ風で消せるはずなんてないことと同じだ。

「何を怒っているのです。プラントには、あなたが守りたいものも、守らなければならないものもないはず」

アブディエルと差別した奴らがいう。仲間たちを見殺しにした正規兵たちがいる。でも、大切な人なんて1人もいない。エインセルの言葉は、何から何まで真実をつく。

でも、それじゃあ駄目だ。レイ・ザ・バレル隊長は言っていた。たとえ相手の行動を恨むことはあっても、相手そのものを否定してはならないと。

エインセルは待っていた。シンが話始めるまで、闇の中の一筋の光の上に立ちながら。眩しい訳じゃない。それでもつい目を伏せて、エインセルの眼から目をそらしてしまう。

「俺、あなたに復讐しようとしていたこと、これでも迷ってました。母さんを殺されたことが許せなかったはずなのに、ザフトに入って自分もあんたと同じことをしてるって、戦えない人々の命を奪ってるって思ってたからです。でも！」

目を合わせろ。逃げちゃ駄目だ。自分を奮い立たせて、声の勢いを利用するように顔を上げた。

「それでもそんなこと、認められていいはずがないんだ！」

エインセルの瞳は、文句のつけようがないくらい綺麗だった。石ころ一つで、湖を揺らすことなんてできやしない。

レイ隊長は言っていた。人を憎むなと。人を憎むと言うことは誰かを悪だと決めつけることになる。それはすなわち自分を正義だと決めつけてしまうことに他ならないから。だから、誰かの行動を怒りを感じることはあっても、憎んではならないと。自分の正義が、今度は他の誰かを傷つけてしまわないために。

それでも、エインセル・ハンターはシンの言葉を待っている。否定されているのに、責められているのに、エインセルは、シンを憎むこともなければ否定することもない。

シンの正義と、ありのまま受け入れようとさえしている。

「あなたは、一体何なんです……？」

勢いが失せて、つい口を出たのはこんな言葉だった。

「とんでもないくらい権力があって、使いきれないくらいお金があって、世界を変えたいならもっとほかにいくらでも方法があるはずだ。それなのにどうして、こんなことをしなきゃいけないんです？」

エインセルは答えない闇の中で、静かにシンの言葉に耳を傾けているだけだ。

「あなたに会えたら、絶対に聞いてみようって考えてたことがありました。どうして、ヒメノカリスを戦わせるんです？　俺はあなたとヒメノカリスがどんなふうに知り合ったのかなんて知りません。でも、ヒメノカリスがあなたのことを慕ってることは知ってます。あなたのために戦っていることもです」

ボーパールで、綺麗なドレスを雨で濡らしてまでシンに憎しみをぶつけてきたから。

「他にも方法はあるんじゃないんですか？　ヒメノカリスにしても、世界にしても。もっと優しくて、誰も死なないでもいいような、もっと他の方法だって！」

この感覚は、もしかしたら祈りにも似ているのかもしれない。自分よりも遙かに力がある存在に、ただ自分の気持ちをぶつけて聞き届けてくれるよう願う。

神様なら天使でも遣わすのだろうか。魔王は、ほんの少し、首を傾げた。どう表現していいからからない表情をして。

「あなたは私を買いかぶりすぎているようです。私はそれほど強い人間ではありません。そして、ヒメノカリスを戦わせている理由は……」

それが諦めなのか、後悔なのか、それとも躊躇いだろうか。その表情の意味を考えている内に、エインセルは顔を再び微笑ませた。ただどこか、楽しそうに。

「やはり、あなたは私とよく似ている。まるで、私の若い頃を見ているかのようです」

靴を鳴らす音。エインセルが振り向き、歩きだした。光の道を降りて、しかし床があったらしい。エインセルは闇を踏みしめながら歩く。それとも、宙に浮かんでいるのだろうか。

この人は人としてひどく曖昧だ。すべてのことができそうにも思えて、人としてそんなはずがない。それでも、何でもできてしまうそうな錯覚はどうしても拭えない。もしかしたら、空だって飛べるかもしれない。そう、考えさせられてしまう。

でも確かに靴が床を鳴らす音が聞こえて、それが止まったところで、エインセルはシンの方へと向き直った。光の道のさらに先から、

エインセルは語りかけてくる。

「シン・アスカ。私はこれから月にあがります。アプリリウスを、プラントを焼き払うためです。そのための航空機にあなたの座席はありません。連れていくのではありません。追ってきなさい。私の客人としてではなく敵として」

掲げられた右の手。指が鳴らされ、創世記に倣うように突然闇が光に満ちた。強い光だ。手を顔の前にやって光を遮らないとならないほどに。エインセルの姿は光に隠れて見えない。声だけが確かに、はっきりと聞こえた。

「思いはあなたが。力は私から」

徐々に光に慣れていく中で、エインセルのその背後に、シンは確かに目にした。光に食いつぶされた輪郭が、それでも巨大な人の姿とガンダムの顔を有していた。

「これは……！」

「ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＥＨ、いえ、ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペ。ゲルテンリッター初号機にして、あなたの機体です」

この世界に青い薔薇なんて存在しませんでした。人が手を加えなければ決して生まれなかった存在です。でもきっと、薔薇は青くなりたいと望んだことはありません。それでも、薔薇は青くされてし

まった。その身に降りかかった定めを嘆き、悲しみますか？　それとも、たとえ青くとも咲き誇って見せますか？

咲き誇れと薦めることは傲慢です。あなたは薔薇ではありません。咲き誇ると選ぶことは勇気です。咲くことのできる保証なんてありません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「薔薇獄乙女」

ガルナハン。それでも薔薇は、必死に咲こうとするのです。

第３１話「薔薇獄乙女」

月面。既知の海に浮かぶアルザッヘル基地の中央にユグドラシルはその砲口を暗い空へと向けている。基地機能の大半は地下に埋設されており、空からでは月面を穿つ巨大な穴が開いているようにしか見えないことだろう。

まさに地獄の入り口を思わせるその穴から再び光があふれだした。光の柱が天へと伸びて伸びて見えなくなるほど高く。

月面からでは見えない遙か離れた場所で、プラントを守る第２の資源衛星は焼き払われた。

アルザッヘル基地内部、ここは部屋である。ひどく天井が高い。人が想像するよりもさらに高く、巨人の神殿を思わせるほどの広さがある。あるいは王の間か。壁も床も天井も白く染められ、ただ王の色だけが許される。そのような部屋を、王の間と呼んでも差し支えない。

王。ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムがただ佇み、その黄金の輝きだけが唯一色を持つ。何もない白亜の城に、黄金のガンダムが浮かんでいる。

だが、ここで一つの訂正を必要とする。フォイエリヒは王ではない。単なる玉座にすぎない。そして、玉座に座るのは王ではなかった。白いドレスを身につけた金髪の少女。ステラ・ルーシェが眠ったようにコクピットに座っている。全天周囲モニターの開けた空間は、そのまま白い壁を映し出し幼い姫君を包み込むように横たえていた。

小さな物音。開かれたままのハッチに誰かが足を置いた音だ。

「大丈夫？　ステラ」

ステラはゆっくり瞳を開く。すると、ステラと同じように白いドレスを身につけた姉と、着崩した軍服の少年がコクピット内に入る間際であった。低重力であるため、その動きは緩慢なほどゆっくりとしている。

姉、ヒメノカリス・ホテルが浮き上がるようにステラが座るシート脇にまで移動すると、その手がそっとステラの額を撫でた。

ユグドラシルの照射を、ステラはすでに2度行っていた。3次元的な計算を感覚と意識で導きだし、月面を離れたビームが目標を捉えるまで屈折コロニーを微調整し続ける。そんな複雑な計算は、ステラの体力を少しずつ奪っていた。

それでも、回を重ねるごとに精度は高まりそれはステラの自信となっていた。

「大丈夫、ちょっと疲れただけだから」

ステラが強がりを言う側で、アウル・ニーダの関心はすでに周囲、このコクピットを有するフォイエリヒのことへと移っていた。このフォイエリヒガンダムが、ユグドラシルの中枢として機能している。ステラもアウルもこのシステムを使うためにエクステンデッドとして調整を受けた。

「俺にも使えるんだろ、こいつ」

ハッチのすぐ脇のモニターを叩く。アウルはわかりやすく不機嫌であった。ユグドラシルを使うことが許されたのが自分ではなくステラであることに不満を感じているのだと、ステラにもわかる。アウルは口をとがらせて、目を細めていたからだ。

どうしてよいものかわからず助けを求めるように姉を見る。すると、ヒメノカリスはすでに行動に移っていた。頷きながら、それでもアウルを認めようとしてない。

「駄目。お父様はステラに使わせるよう言っていたから。でも、もしもステラに何かあったら、その時はあなたがプラントを撃ちなさい」

月面からの高出力ビームによる超遠距離射撃は、いつどこを狙われるかわからないという事実に後押しされプラント国内を大いに混乱させていた。

議会の廊下を早足で歩くギルバート・デュランダル議長の取り巻きの議員たちも皆浮き足立っている。ギルバートの横に回り込んでは餌を待つ雛のように口々に陳情を繰り返している。より状況を把握しているはずの議員でさえこうなのだ。市井の混乱は考えるまでもない。

「市民はみな不安がっています。事態の収拾はまだ図れないのですか？」

「宇宙港は脱出を急ぐ市民で満杯です。このままでは経済活動さえ

ままなりません」

ギルバートが足を早めている理由は無論一時を惜しんでのことだが、同時にうるさくわめく議員連中を振り切ってしまいたいという願望も手伝っていた。

「月面への部隊編成を行っている最中だ。今ことを急げば相手の思うつぼだ。我々が慌てていては民は余計に不安になる。行動は慎みたまえ」

足を止めないままこう言い放つと議員たちはおとなしくなった。しばらくは静かにしていることだろう。ラクス・クライン議員によって扱い易さを基準に選出された議員など、所詮傀儡にすぎない。

（好都合ではあるのだがね）

権力を一度牛耳ってしまえば、その座を脅かす者はいないということに他ならない。

タッド・エルスマン宅のシアター・ルームでは、駆動音が鳴りやむことがない。大量に積み上げられていた資料が目減りし、その分だけ音が響いていた。資料が次々シュレッダーにかけられているのだ。

「この混雑ぶりじゃ、出ていくだけでも一苦労ね」

数枚まとめてシュレッダーに放り込みながら、フレイ・アルスターがモニターを眺めながら呟いた。シアター・ルームらしく大型の

モニターには口々に不安と憎しみを口にする人々の様子が映し出されている。状況を把握するよりも真っ先に逃げ出そうと宇宙港に集まっている連中にインタビューすれば、大体返事は決まっていた。

死への恐怖に怯えるか、それとも、エインセル・ハンターへの憎悪を吐き散らすか。

「フレイ、できるかぎりシュレッダーには少ない枚数かけるようにしてくれ。でなければ切り損じることに繋がる」

ナタル・バジルール――こちらも別の位置で紙を機械に放り込んでいる――の言葉にフレイは短く返事をした。そしてほんの一枚だけ、資料を束を薄くする。この光景に、ナタルは軽く息を吹きこそしたがたしなめることはなかった。

プラントからの脱出を決めた以上、資料はかさばるばかりか持ち運ぶには危険である。

事務所の一応の代表であるジェス・リブルの取材が一通り終わり、プラント国内の混乱も、ジェスたちに脱出を促していた。

ジェスはシアター・ルームにふさわしい座り心地の椅子に腰掛けながらノート・パソコンを指で叩く。その顔は普段見せることないほど必死なもので指が次々画面に情報を叩き込んでいく。そんなジェスのすぐ後からベルナデット・ルルーがパソコン画面を覗いていた。コーヒーをすすりながらの優雅なもので、リブル事務所の面々とはずいぶんと様子が異なっている。

「どう？　いい記事は書けそう？」

やや指の速度が遅くなったものの、ジェスは画面から目を離すことはない。

「いい記事になるかはわからないけど、刺激的な国だったよ、この国は。でも、ベルナデットはいいのか？　きっと俺はこの国に有利な記事はかけないと思うぞ」

「結構有名な言葉だけど、こんな言葉、知ってる？　ナチス・ドイツが共産主義を迫害し始めたとき、私は共産主義者ではなかったので声を上げなかった。次に社会主義を迫害し始めたとき、私は社会主義者ではなかったため声を上げなかった。次に障害者やユダヤ人を迫害し始めたが、それでも私は声を上げなかった。最後に私たちを迫害し始めたとき、その時すべてが遅かった」

コーヒーを口に含み喉を湿らせる。そんな間をおいて、ベルナデットは続ける。

「プラントが障害者を迫害した時、プラントがナチュラルを迫害し始めた時、そんな時から声を上げたいと考えるプラント市民もいるということよ。あなただって私ならと思って声をかけてくれたんでしょ？」

「まあ、否定しないよ」

「ところで、ベルナデットはどうするんだ？　もしかしたらプラントは……」

指をとめ、ジェスは振り向いてまでみせた。よくも悪くもジャーナリストであるジェスが、生意気にもベルナデットを気遣うために作業の手をとめて見せた。

「そうね。正直、怖くないわけではないけど、プラントの市民として、もちろんジャーナリストとしても見届けたいという気持ちはあるのよ。この国の行く末を」

それほどまで、今のプラントは危機的状況に置かれているということなのだろうか。

もしも明日世界が滅びるとしたなら、さて最後の一日をどのように過ごそうか。

ディアッカ・エルスマンは首を回す。見えたのは、喫茶店のテーブルで新聞を読みながら紅茶を啜っている男がいること。別の場所にはテーブル一杯に料理を注文してすごい勢いで食べ続けている女もいた。ふと窓の外を見ると、旅行鞄を右手に、左手に子どもを引いている家族連れが通りすぎているところだった。子どもは暢気なもので旅行気分でいるのに、親は子どもを強く引っ張って、引きずるように喫茶店の窓を横切った。

いつもと同じ日常を過ごすのもいい。最後の一時、やり残したことをするのもいいだろう。最後の最後まで生き延びようとすることも共感できる。

ディアッカが選んだのはそのどれでもない。ちょっと気になる娘とお茶をする、そんな些細なことだった。

「いいんでしょうか、皆さん働いてる時に？」

ディアッカとはテーブルを挟んで向かい側、アイリスはその後ろめたさを反映してか手を小さくしてティー・カップを手にしていた。備え付けのソファーにもたれ掛かるディアッカとはえらく違う。

「どうせ宇宙港はあの有様だ。すぐに出発できるわけじゃないだろ」

出国どころか、手続きするだけで一日がかりだろう。そう、もうしばらくはアイリスもここにいる。

桃色の髪を首の後ろで束ねて瞳は青い。当たり前と言えば当たり前だが、ラクス・クラインとよく似ている。ディアッカがアイリスと出会った時もその姿には驚かされた。思えば、ラクス・クラインと似ている、そう話しかけたことがアイリスと話すようになったきっかけであった気がする。

あれからすでに4年。残された右目だけで見たアイリスは、変わったようにも変わってないようにも見えた。

「なあ、俺とアイリスって、一体何なんだろうな?」

何となく口に出たのはそんな言葉だった。聞き方がまずかったかもしれないと気づいたのは口に出した後のことだ。

「何って……?」

「いや、何か、俺たちって結構複雑な間柄じゃないかってな。初めて会ったのは……、戦艦の中で、捕虜と世話役だったろ」

取り繕うように言葉を急いだためか妙にしどろもどろになってしまった。その後、慌てたように右手で自分の口を塞がなければなら

なかったのは、アイリスが笑顔のままこめかみをひきつらせていることに気づいたからだ。

ディアッカは初対面のアイリスに対してラクス・クラインと似ているかどうか確認するためにもっと賢そうな顔してみろと言ったことがあった。アイリスはその時の恨みを今も忘れていないのだ。

笑顔のまま睨みつけられている。睨まれている間、身動きできなかった。そんな金縛りが解けたのは、アイリスが紅茶を飲むためにカップに視線を移した時だ。自分の手を口からどけて、思わず安堵のため息をついた。

「この話題をする度に怒りを新たにするのはやめろよな」

幸い、アイリスはすぐに顔を強ばらせることをやめてくれた。

「それから何でか戦友になって指揮官と部下になって、今は、お友達ですよね、ディアッカさん」

「数奇な運命って奴だな。元々敵だったからな、俺たち」

敵として出会って、気恥ずかしい言い方をするなら人としてわかりあって、４年前もこうしてプラント最後の夜を一緒にすごした。もしも別の出会い方をしていたならもう一度こんな関係になれる自信がない。それくらい、おかしな関係だ。

「前もそうだったな。決戦前夜って感じの時、ジャスミンを守ってやれなかったって落ち込んでた俺を慰めてくれたのがアイリスだった。あの時のことは感謝してる」

「ディアッカさん……」

つい顔をそらしてしまった。どうも面とは言いづらい。ただ、目を合わせてでなければ、言えない話ではない。少なくとも自分にそう言い聞かせながら話を続ける。

「ジャスミンのことが……、忘れられなかったとかじゃないんだ。振られて、諦めなんて4年前の時点でついてた。でもな、誰かのために社会的弱者を犠牲にすることは我慢できなくて、やっぱりどこかジャスミンのこと助けてやれなかったことの負い目もあったんだろうな。障害者の地位向上のための活動を続けてた」

言葉を続けていると自分がどんどん冷静になっていくことがわかる。この話は、誰にしても何も恥じることなんてない。そう、体が理解しているみたいに。前を見ることはでいるようになった。それでもアイリスと視線は合わない。手元のまだコーヒーが半分ほど残ったカップを見ていたからだ。

この話は、同時に気分を上向かせてくれるものでもない。

「俺も障害者になってみてよくわかった。このプラントは歪んでる。まあ、考えてみれば当たり前だ。コーディネーターは優れてなくちゃならない。だが、反対に優れてるって、どんなことだと思う？　１００ｍを9秒台で走れることか？　リーマン予想を証明してみせることか？　遠く離れた場所を見通すことか？　……どれも違うんだ」

「それ、わかる気がします、私にも。誰かと比べないといけないってことですよね……」

アイリスはいたずらっぽく笑う。元々表裏のないこの少女は、その笑みに陰を含ませていることを隠せてやしない。

「誰もが9秒で走り抜けられるならそれは優れてるとは言わないからな。結局優れているということはアイリスの言うとおり相対的なことでしかないんだよな。コーディネーターが優れた存在であるためには、必ずコーディネーターよりも劣った存在を必要とする。自分たちが優れていることを確からしめてくれる弱者がこの国には必要なんだ」

全員が9秒で走ることができる世界なら、優れているためには8秒で走れなければならない。そして、コーディネーターとは優れた存在だ。コーディネーターが何秒で走れるにしろ、コーディネーターよりも遅い存在を必ず必要とする。

「それが障害者であったり、潜在ナチュラルであったり、場合によっては移民のコーディネーターたちなんだよな」

コーディネーターが優れた存在であるための担保として、プラントは絶えず弱者の存在を、言い換えるなら生け贄を必要としている。

「この国は貧富の差が著しいし、事実上の階級制もある。ただそれは、能力のある人間が認められる社会だからじゃなくて、コーディネーターを有能だと保証するための被差別部落の存在を必要としているからだ。コーディネーターは臆病なんだ。絶えず自分よりも劣っている奴を眺めていないと自分の強ささえ確認できない。絶えず自分より劣った奴がいてくれないとコーディネーターになった意味がない」

コーディネーターは人類の未来を謳いながら、しかし人類全員が

コーディネーターになることなんて望んでいない。優れた存在になるべくコーディネーターを作り出す。そのためには弱者の存在を必ず必要とするからだ。

力を拠り所にした選民思想。それがプラントの根幹であり、コーディネーターたちの意思を決定づけている。

やはり嫌な話だ。うつむくついでに眺め続けたコーヒーを飲むと余計に苦く感じた。アイリスはすでに飲み終わり、カップを落ち着かない様子で弄んでいる。

「それが、この国で急速にファシズムが台頭した理由、なんでしょか？」

「多分な。ナチス・ドイツもアーリア人というある種の理想の民族と自分たちを同化して排他的になっていった。それがホロコースト、ユダヤ人の抹殺に繋がったんだが、プラントとナチス・ドイツの大きな違いもそんなところにある。ナチス・ドイツはドイツ国民であればそれだけで優れているということだったが、プラントは能力を示さなければならない。そして、そのためには想定的に劣っている人というものを必要とする。潜在ナチュラルの問題を手つかずのまま放置しているのも踏みつけるための弱者の存在を必要としているからだ。その点じゃ、ナチス・ドイツよりも質が悪いかもな。コーディネーターは自分たちがすぐれた存在であるためには何でもするってことだからな」

「何だか、怖い国ですよね……」

「多くのコーディネーターはそのことに気づいてやしない。この戦争は劣ったナチュラルが嫉妬に狂って起こしてると勘違いしてるく

らいだ。卵が先か鶏が先かの話だが、戦争が激しくなればなるだけ、コーディネーターは嬉々として戦いに身を投じるようになる。自分たちが羨望を浴びていると錯覚できるし、事実戦場じゃコーディネーターの方が優秀だからな」

４年前のディアッカはそうだった。あまりに気楽に戦争に臨み、ナチュラルのことを見下してさえいた。

「コーディネーターもプラントも、弱者を踏みつけることでしか、いびつな形でしか存在できない歪んだ存在なのかもな」

ディアッカがフレイを無遠慮に傷つけたように。戦場では機体の性能に劣る相手を潰していることは楽しくさえあった。

ユニウス・セブン世代。C．E．６１年の血のバレンタイン以降の極右に傾倒した教育を受けたプラントの若年層のことだが、ディアッカもこれに該当する。今頃、デュランダル議長の演説会場に出かけて声を張り上げていても不思議ではなかった。反対に、今こうしてプラントという国を冷静に考えられることの方がよほど不思議なことだ。

自分を変えるきっかけを考えると、どうしてもアイリスのことを見てしまう。目が合うと、つい気恥ずかしさにそらしてしまった。自分を取り戻した気でいたが、どうしてもこうなってしまう。

「そんなことに気づくきっかけを与えてくれたのが、きっとアイリスたちなんだと、思うんだ……」

せっかく気分をいい塩梅に沈めていたのに、このことを意識し出すとどうしても体温の高揚を感じずにはいられない。アイリスは特

に気づいた様子もないところが特にいたたまれない。

「いや、俺も、はじめ結構嫌な奴だったろ。戦争だって、周りが行ってるからとか、何か狩りでもするくらいの気分で、そんな軽い気持ちだった。それに赤服なんてもらったもんだから有頂天になってたところもあってな。……フレイには、悪いことした」

「私も、立派な人なんかじゃありませんよ。ヘリオポリスにいた頃は戦争なんてニュースの出来事で、自分が巻き込まれることになるなんて思ってもみませんでした」

「戦争に行ってた癖に戦争が何かわかってなかった俺に比べればましな話だ」

ああ、駄目だ。つい歓心を買おうと口が滑る。次第にアイリスを強く意識しすぎて、ついには顔もまともに見れなくなっていく。ディアッカの肌はほかの人に比べると色が濃い。それが熱を隠してくれることを切に願う。

だが、これでは埒があかないのも事実だ。すぐに本題に入れない自らの弱さを嘆きながら外堀を埋めることから着手する。

「なあ、アイリス、吊り橋効果って知ってるか？　結構有名な話だが、恐怖を感じて鼓動が高鳴っている時異性を意識すると、その鼓動を相手に対する好意からだと錯覚して恋心を抱いてるんだって勘違いするんだそうだ。他にも、死を意識すると次世代を残そうとして慌てたように身近な異性を急に意識し始めるなんて話もあったりする」

本能的な欲求と恋愛とは多々重なる点もあるが、根本的には違う

ものだ。それを取り違えると、大概悲劇的な結末を迎える。

「俺たちってさ、出会ったのは戦艦の中で、それからずっと戦場をたらい回しだったろ。今だっていつ敵の攻撃がここを襲うかわからない状況だ」

たとえその中で芽生えた何かがあったとしても、それは同じ危機を乗り越えたことから生じる友情であったり、生存本能の発露にすぎない可能性が高い。

ディアッカはそれを恐れていた。現在もプラントはいつ攻撃されてお不思議ではない状況にある。そんな焦りがディアッカに行動を促していることは否定しない。それでも、ディアッカは思いを伝えたいと思った。このことに、違いはないから。

「そりゃ、焦ってることは否定しない。いや、そうじゃなくて……。俺はこんな体だし、お前のこと、守ってられるだけの力もない……」

ジャスミンに最後の最後まで思いを伝えられなかった臆病者は、3年経っても改善はしていないらしい。失った左腕、光をなくした左目。左足も満足に動かせない。残された右腕は、力なくテーブルに落ちた。

アイリスはそんな男の手に、自分の手をそっと重ねてくれた。

「ディアッカさん、障害って、とても難しい問題だと思います。他の人とはやっぱりどこか違っていて、同じように接するとかえってそれが差別になってしまうこともあります。違いを理解して、それを意識しないで接することはとても難しいことだと思います。でも、自分を卑しい人だとか劣った人だとか考えないでください。そんな

ことだけは、絶対にないんですから」

この手の温もりに、しばらく身をゆだねていたかった。

「ところでディアッカさん。この流れだと、私に告白してくれるんですよね？　実はナタルさんのことが好きでその仲介を頼んでるだけだって言ったら怒りますよ」

ああ、そんなこと言おうものなら本気で殴られそうだ。どうやら、逃げ道を塞がれたらしい。それなら、前に進む他ない。そして目の前にはアイリスがいる。

「お前は、本当に不思議な奴だよ。結構がさつで怒りっぽい癖に、頼りたい時や甘えたい時は本当に甘えさせてくれる。俺さ、お前のそんなことに救われたし、そんなところが好きだ」

「ディアッカさんは、人の痛みをわかってあげられる人だと思います。間違いを間違いだって認められる強い人だと思います。私もディアッカさんのそんなところが好きです」

後悔は、後で悔やむと書く。その言葉の通り、人は何かをしでかしてからその行為を悔やむことになる。

言っておいてなんだが、今になって急に恥ずかしさがこみ上げてきた。言っている時は見つめあっていられたのに、今では互いに顔を赤くしたまま、目を合わせることができない。このままではいけないと同時に考えて、同時に視線を戻す。すると目があって、つい目をそらす。こんなことを2、3回繰り返しただろうか。情けないことに、一歩を踏み出してくれたのは、アイリスの方であった。

「その、隣に行っても、いいですか……？」

「あ、ああ……」

ディアッカが座っている椅子はソファー・タイプのもので座るところならいくらでもある。それを示そうとして右手を広げ、背もたれを掴んだ。それだけ広いことを示そうとしたつもりが、まるでこの腕の中に座って欲しい、そう言っているようだと気づいたのは手を広げてからのことだ。

本当に、後悔は後でなければできない。

アイリスもその腕の意図を完全に誤解したらしい。顔を赤くしてなかなか椅座ったまま動こうとしない。今更手を下ろすこともできない。もしかしたらアイリスがここに座ってくれるかもしれない、そんな期待や打算も手伝って、つい手をそのままにしておいた。

何とも気まずい。横に座ってもらうなんていきなりすぎただろうか。いつもいつも決断はアイリスの方が早い。勢いよく立ち上がる。何事かと理解できないディアッカを後目に、アイリスは慌てていると思えるほどの動きでディアッカの横に座った。本当に勢いに助けられる形で座ってくれたのだろう。見るからに体が固く、ディアッカの隣とは言え足と足が触れ合うことのない微少な位置に座っている。

ディアッカ自身人のことは言えないが、恋愛に不慣れな様子がよくわかる。肩くらい抱いてみても許されるだろうか。そう、アイリスの背中側に回していた手を少し動かしてみる。すると、右手が視界に入ったのだろう。アイリスはさらに体を固くしてしまった。

さすがに肩を抱くのは早いようだ。

（まあいいさ。これからゆっくり、だな）

この触れるとも触れないまどろっこしい距離が今はちょうどいい。少なくとも、これから何が起きようとも恋人のことを守ってやりたい。そう、一人の男に決意させるには十分な距離なのだから。

アフリカ共同体旧ソマリア地区ガルナハン。ここには南アフリカ統一機構軍の要塞が置かれている。現体制構築以前の大戦の名残としていまだい南アフリカ統一機構軍が駐留している。

ステップ気候特有の背の低い草が大地を覆い、ところどころ剥き出しの土が顔を見せる。驚くほど広く平坦な土地の中、隆起するへそ曲がりな大地があった。巨大な岩山と、それを取り囲むように点在する建築物。

ガルナハン基地と呼ばれる難攻不落の要塞である。

単なる平城。堀もなければ周囲には接近を遮るものは何もない。そんな要塞が堅牢さえを堅持する訳は要害に求めることはできない。

乾いた空気を震わせる轟音が響きわたった。引き裂かれる大気の断末魔が聞こえたかと思うと、炸裂音に次ぐ炸裂音。何があったのか。慌てて視線を送るなら焼け焦げ穴だらけになった平原に残骸となってその身を横たえるＺＧＭＦ－８８８ヒルドルブの姿を見ることになる。

別の方角からヒルドルブの小隊がモビル・アーマー形態――犬のような姿――で高速を維持したままガルナハンへと這い寄る。起伏に乏しいこの大地はヒルドルブの疾走を妨げるものは何もない。

ただ一つ、岩山の頂上に据え置かれた長大な高射砲を除いたなら。

回転式の砲塔に据えられ、全長が３０ｍにも達する巨砲がゆっくりと角度を合わせ、仰角を調整していく。その動きは力強く、ただ力強い。狙撃のような繊細な標準を必要とはしない。狙うのではなく向ける。８８ｃｍもの砲口がヒルドルブの小隊へと頭を垂れた。

轟音か、それとも大気を震わす衝撃か、あるいは、排出される空薬夾とノック・バックする砲身。その順序はわからない。ただ弾丸が発射されたという事実だけを伝えている。

秒速２０００ｋｍを超える初速で撃ち出されたは目標に瞬く間に迫り、その寸前で破裂する。散弾弾頭。圧倒的な運動エネルギーを保持したままの破片が広範囲に降り注ぎそこに存在していたものすべてを引き裂く。機動力に優れるモビル・スーツでも回避できるものではない。身を隠す場所などこの平原のどこにもない。

１個小隊のヒルドルブは思う存分体を引き裂かれ、原型を留めないほど破壊され尽くす。

ザフトは一戦も交えないまま、すでに１個中隊に匹敵する戦力を失っていた。

銃身の冷却など諸条件こそあるが、火薬式の火縄銃以来の古風な砲台である。そんなものに、ザフトは攻めあぐねていた。

犠牲を考えなければ攻め落とすこともできるだろう。しかし、作戦の指揮を採るアスラン・ザラはその決定を下せないでいた。そのような戦法は被害が大きくなりすぎる。ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンで砲台を狙う手段も不可能ではないだろう。だが、ここでヤーデシュテルンを破損させる愚を冒すことはできない。

「砲台など時代遅れだと考えていたが、８８ｃｍ高射砲か」

「あんなのフェイズシフト・アーマーでも耐え切れねえです」

所詮、フェイズシフト・アーマーは魔法の鎧ではない。過負荷がかかれば破壊されてしまう。コクピット内を飛び回る翠星石はよほど腹立たしいのか、モニター上に移る８８ｃｍ砲を睨みつけている。

ビーム・ライフルは大気中では急激に減衰する。射程範囲では明らかに相手に分があった。

「後は、エミリオの部隊が頼りか」

別働隊としてエミリオ・プレデリックの部隊は地元民しか知らない洞窟を通ってガルナハン基地の裏側に周りこもうとしている。砲台さえ落とせば、この基地は単なる中規模基地にすぎない。アスランが危険を冒す理由はない。

ジャブローでの汚名を削ぎたい――ナチュラル相手に撤退せざるを得なかったことを、この新兵は恥じている――と別働隊を買ってでたエミリオを信じる他ない。

通信が入ったのは、ちょうどその時のことだ。

「隊長！　待ち伏せです。明らかに敵はこちらの動きを掴んでいます」

戦闘中はモニター画面を塞いでしまわないよう音声のみの通信になる。そのため、エミリオ小尉の顔は見えないが、その狼狽ぶりは顔を見るまでもない。

「何故です！　占領軍を打ち払い、この地域の解放を約束した我々を彼らは何故裏切るのです！」

「そんなことは後だ。今は一刻も早く砲台を落とせ」

「了解です！」

返事こそ威勢はいいが、敵が待ち伏せをしていた以上、防御は万全と見るほかない。うまくいけば少ない犠牲でガルナハン基地を陥落できると踏んでいたが、地元民を信用しすぎたか。自然と、作戦前のブリーフィングが思い出される。

「はい、ここに地元の民しかしらない水中洞窟があります。ここを通れば砲台のすぐ裏手にでることができます」

パラスアテネのブリーフィング・ルームには土に汚れたゆったりとした布を巻き付けた地元の民の姿があった。全員が疲れた様子で、中には子どもの姿もあった。

地図が表示されるテーブルについて説明をしたのは、その代表をつとめた若い男だった。伸ばされたままの髪が邪魔をしている。地図を見るためにうつむいた姿勢では顔はよく見えない。３０ｋｍ離

れた海岸線の一角から、その男の指はガルナハンへと伸びていく。地図にもそこは何らかの洞窟があることは明らかで、男の話の信憑性を保証している。

一通り説明を終えた後、男は顔を上げた。それでも視線は伏せがちで、必ずしもザフト軍に全幅の信頼をおいていないことはうかがいしれた。子どもも、母親の服を掴んだまま離れようとはしない。

エミリオもそのことには気づいたようだ。

「案ずることはない。諸君等の願いは叶えられることだろう。占領軍を追い払い、この地を諸君等の手に戻すと約束する」

その警戒が敵愾心であると、不安が恐怖であったのだと何故気づくことができなかった。彼らははじめからザフトを罠にはめる気でいたのだ。思えばおかしな話だ。秘密の通路を明かすような重要な情報を伝える現場に、何故子どもを連れてくる。こちらの警戒心を緩めるための小道具であったのではないのか。

（俺たちの戦いは、誰からも理解されていない……）

このアフリカの地はアスランの心をいつもかき乱す。正しいと理解していたことが理解されていないことに気づかされる。だが、理解されていないだけだ。正しいことには変わりない。

こんな時、いつも脳裏に浮かぶのはモーガン・シュバリエ。ユーラシア連邦軍中佐の顔だ。体の半身が焼かれるほどの重傷を負いながら最期までアスランを気遣いながら死んでいった戦士の顔だ。

「モーガンさん、俺は、俺は自分が間違っているなんて考えてませ

ん……」

アスラン・ザラがここで諦めてしまえば、すべての犠牲が無駄になるのだから。

こうしている内にもエインセル・ハンターの大量破壊兵器は着実に次の弾を込めている。

「翠星石、もしもガルナハンを落とせなかったなら、パラスアテネは作戦に間に合いそうか？」

「今からカーペンタリアに戻ってる余裕はねえですし、ラヴクラフト級を打ち上げる装置なんてそうそうねえです」

そうなると、ガルナハン基地が保有している補助ロケットが是が非にも必要となる。大気圏を離脱するだけならヤーデシュテルン単体でも可能だが、月面まで無補給で航行することはできない。

「俺たちは生きながらにして事実上撃墜されるという訳か……」

少なくとも、月面での作戦に間に合わなければすべてが無意味だ。怒りか失望か、どちらともつかないまま、アスランは歯を強く噛み合わせた。

ガルナハンからやや離れた場所から黒煙が立ち上っている。恐らくエミリオの部隊が交戦しているのだろう。侵攻は完全に止まってしまっている。

（こんなところでゲルテンリッターの全力を見せなければならないのか……？）

ゲルテンリッターならば、ヤーデシュテルンならばガルナハンを陥落させることもできる。だが、リスクを考えると、アスランは決断できずにいる。ここでゲルテンリッターという戦力を失っては本末転倒である。

何か手段はないのだろうか。砲台に攻撃されることなく近づき、確実に破壊できるだけの何か手は。

「アスラン！」

慌てた翠星石の声。ただ、いつもとは何かが違う。焦りよりも喜びや戸惑いの方が大きいらしく、その顔はどこか溌剌としていた。

レーダーに反応がある。何かが急速に接近していることを示している。

「こちらミネルヴァ所属、シン・アスカ曹長！　これより援護します！」

思わず見上げた先で、小型輸送機がガルナハン目指して飛行していた。何の変哲もない、単なる輸送機だ。それが８８ｃｍ砲を目指す光景は、滑稽どころか正気の沙汰ではない。

「シン！？　馬鹿な、そんな飛び方、いい的だ！」

ガルナハンは８８ｃｍ砲を使う必要さえ感じなかったらしい。基地の周りに設置された迎撃ミサイルが火を噴きながら浮上する。小型ミサイルが矢のように輸送機に殺到し、薄い装甲を貫通しては反対側から火を噴き出した。輸送機は見る間に炎に包まれ、煙に砕か

れるかのように分解しながら落ちていく。

黒煙が、しかし突然膨れ上がった。光が噴き出す。煙の中に何かがある。それはたやすく煙を突き破るとそれを簡単に引き剥がす。何か黒いものが輝いている。それはまっすぐに８８ｃｍ砲を目指して加速した。

その姿を確認できないほど速い。迎撃ミサイルは追いつくことができずあらぬ方向へと放たれた。サイレンが鳴り響き、それがこれまでで唯一ガルナハンの防衛線を破ったことを伝えている。

全身を輝かせる黒いモビル・スーツ。

「ゲルテンリッター……なのか……？」

ミノフスキー・クラフトの輝きはさらに強度を増し、加速は止まらない。

８８ｃｍ砲の重たい重心がゆっくりと起きあがっていく。うなり声さえ聞こえてきそうな重厚な動きがやがて止まった時、岩山をつき崩さんばかりの轟音とともに散弾弾頭が放たれた。点ではなく面で破壊する８８ｃｍ砲の攻撃をかわすことは困難であり、被弾すればゲルテンリッターと言えども破壊される。

加速をやめないゲルテンリッター。迎え撃つ弾丸。

光が揺らいだ。それは、ゲルテンリッターの間近を弾丸が通りすぎたことを意味した。だが、炸裂はしていない。弾丸はゲルテンリッターの後方でようやく破裂し、細かな弾丸をまき散らした。

「安全装置か……！」

８８ｃｍ砲が味方を傷つけないため、ある一定以上離れていなければ炸裂しないようプログラムされているのだとすれば、懐に入り込まれた敵には８８ｃｍ砲は無力になる。

もしもシンがわずかでも加速を緩めたとしたなら、一歩でためらったなら、恐怖に呑まれていたならできなかった戦法だ。

虎の子の一撃を回避したゲルテンリッターはそのまま８８ｃｍ砲とすれ違う。なんとも不思議な光景だった。８８ｃｍ砲は銃身に沿って綺麗に斬り取られ、はじめから上半分のない不格好な姿であったのではないのか、そう錯覚させるほど見事な切れ口である。砲台がそんな不恰好な姿をわずか数秒見せた後、ゲルテンリッターも摩訶不思議な光景も爆発の中へと消えた。

立ち上る黒煙の腹を内側から引き裂くように、輝きが吹き飛ばす。ガルナハン基地を見下ろす空に、ゲルテンリッターの姿があった。

西洋刀を思わせる両刃の実体剣をその手に握り、腰回りの装甲はその名前の通りスカートと呼べるほど大型のものだ。背には翼を思わせるバック・パック。そして全身が漆黒で覆われている。漆黒の輝きを放つその姿は天使を彷彿とさせる。

まさに黒い天使の姿がそこにはあった。

「ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＥＨガンダムメルクールランペ。水銀燈……」

翠星石は見上げた姿勢のまま、ゲルテンリッターの長姉の名前を呼ぶ。

ゼフィランサス・ズールによってＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムのアリスを移植され、マスターであるエインセル・ハンターの手で封印されたゲルテンリッターが、黒い翼を広げていた。

「エインセル・ハンターに与えられたはずの初号機をシンが何故……」

「アスラン隊長！　何故なのです！？　何故ナチュラルどもは我々を裏切るのです！　我々は彼らのために戦うと誓ってやった。解放すると約束してやったのです！」

エミリオ・プレデリックは半狂乱にさえなっていた。ガルナハン基地から接収した補助ロケットをラヴクラフト級に取り付ける作業に大わらわの格納庫内ではほとんどの人が気になんてしていない。ただザラ大佐が困った様子で聞き役に回っているのが印象的だった。

シンはここ、パラスアテネの格納庫に初めて足を踏み入れていた。ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペもここに置かれている。この機体を手に入れたいきさつを聞きたいとザラ大佐に呼び出されたところ、エリミオ小尉が叫んでいる現場に出くわすことになった。

「ナチュラルは事理さえ弁識できぬ愚か者なのですか！？　どうすればそこまで愚かになれるのです！」

ザラ大佐は何も答えようとしないでただプレデリック小尉が叫ぶに任せていた。ジャブローで会った時はコーディネーター至上主義

者ではあっても冷静な人に思えた。単に自分の価値観だけで行動して、周りのことに注意を払わない。だから動揺することもない。こんな見せかけの冷静さだと気づいていないわけではなかったような気もする。

「プレデリック小尉」

シンが声をかけると、プレデリック小尉は血走っている、そう思える目をシンへと向けた。プラントにいた頃、こんな視線には幾度となくさらされてきた。

「エイプリルフール・クライシスは地球に甚大な被害を与えた。ジェネシスが地球全土を焼こうとしたのはほんの3年前。それに、フィンブルの落着だって、プラントは妨害さえした。3度も喉元にナイフ突きつけておいて信用しろなんてそもそもおかしい」

「我々は義によって立っている。多少の犠牲は受容するだけの覚悟がなければならない！」

「それは正義なんて呼ばない。独善でしかない」

その犠牲を、プラントはいつも外に外におしつけ続けてきた。極端なことを言うなら、自分たちは正しいことをしているから、だから何をしても仕方がない、許される。そう、思いこみ続けてきたから。

「ではお前は何のために戦っている。自身の正義を正しいと信じ、証明するために戦うことこそが正義のあり方ではないのか！」

「それは違う。正義は人の数だけあって、そのどれが正しいなんて

こともない。ただあるとすれば、他人の正義を脅かす独善は、その他の人すべてにとって悪になるだけだ」

排他的な意志を、正義と勘違いする者は少なくないが、それは結局独善にすぎず正義とは違う。こんな簡単なことを理解することさえ、プレデリック小尉は拒絶する。今にも殴りかかってきそうに体を大きく動かし、手を振り回している。

「軟弱すぎる！　自身を強く持たねば正義などなせん！」

「自分の正義を絶えず疑って、他人の正義を認める強さこそが正義なんだ。正義のあり方なんだ。独善に走って他人の正義を脅かしたり、正義が何かを考えることを放棄して正義という言葉から逃げ出したりしたら駄目なんだ」

「それこそ貴様の正義の押しつけだろう！」

「誰彼構わず殴っている人を止めることは正しいことだと思う。プレデリック小尉、あなたは正義のために戦ってるんじゃない。戦うことの正当性に正義を利用しているだけだ。そんなもの、正義とは呼べない」

「正義とは勝ち取るものだ！」

それが、正義と独善や偽善を安易に混同して、自分の正当性を証明するために独善と正義と言い換えて利用しているだけだ。どういえば、このことを伝えてあげられるのだろうか。シンが迷いを見せている間に、他の声が割り込んだ。

「そろそろ出発だ。そこまでにしておけ」

別に何年も聞いていないわけじゃないのに、懐かしさを感じさせる声だ。ザラ大佐やプレデリック小尉もそろって同じ方を見た。赤い軍服に、襟には翼を模したエンブレム。初めて出会った時と同じ姿をしたレイ・ザ・バレル大佐の姿があった。

レイ隊長の登場がよい仕切りになったのだろう。そろそろラヴクラフト級2隻を宇宙へと帰す時間が近い。ザラ大佐はシンに一声かけてから歩き出した。

「シン、話は後で聞かせてもらうことになると思う。無論、メルクールランペについてだ」

プレデリック小尉もザラ大佐の後に続く形で格納庫を後にした。残されたのはシン・アスカとレイ・ザ・バレル。部隊長に帰還を報告すべく、シンは敬礼の姿勢を披露する。

「隊長、ただいま戻りました」

「シン・アスカという人間がここまでしぶといとは知らなかったな」

皮肉屋であるレイ隊長らしい言葉とともに、隊長もまた敬礼を返してくれる。

「生き延びることだけが取り柄ですから」

人々の願いと想いと、憎しみと恐怖が交錯します。月はいつも人

の願いの象徴でした。月はいつも見る人によって異なった印象をもたらします。私は蟹に見えました。あなたはウサギですか、美女の横顔ですか。人が様々な思いを手向け、様々にその姿を捉えてきた月。それを王は最後の戦場と位置づけました。

人と人とが憎しみと恐怖から戦わなければならない最後の戦場と。

これから来る、人という種の宿命を問う決戦を迎えるために。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「星月夜」

アルザッヘル。今ここに、王の心と力、願いのすべてが揃うのです。

第３２話「星夜月」

プラントは第４の盾を失った。

宇宙空間に浮遊する岩石。その中央に光の柱が撃ち込まれる。膨大な光は岩盤をバターと同視して溶かし進む。走る亀裂の内部からさえ光は溢れだし、熱が要塞の内にはで伝わる様子が見て取れる。

光の貫通と岩石の崩壊とは同時であった。

目映いばかりの光の後訪れる漆黒の闇。

プラントは第４の盾を失った。

「サイサリス！　どういうことだ!?」

机を叩く音がした。木造の上物ではなく、プラスチックをはめ合わせただけの作業机はずいぶんと軽い音とともに小さく跳ねる。この机を挟んでイザーク・ジュールとサイサリス・パパは睨みあっていた。

もう一度、イザークが机を叩く。

「やつらはようやく基礎訓練が終わったばかりのひよっこどもだ。操縦も基礎しか学んでいない！」

いつものように白衣を身につけサイサリスは座っている。立って

いるイザークからは見下ろされる形でありながら物怖じした様子なく机上に置かれたモニターの操作に忙しい。イザークには時折横目で視線を送るでしかない。

「状況理解してる？　今プラントは存亡の危機にさらされてる。主力は月に行っちゃったし、国防要員が不足してるんだよ」

月面ではザフト軍によるアルザッヘル基地攻略が進行している。別に軍事機密でも何でもない。テレビをつければどの局でも同じことを放映している。普段砕けた雰囲気が売りのキャスターでさえ喪服かと思えるようは地味な服に神妙な表情、平静を呼びかける言葉とともにザフト軍を信じようの一点張り。

デュランダル政権はプラントが存亡の危機にあることを大体的に放映することを推奨している。

プラントに住む者なら誰もが知っている。今、プラントは悪魔に狙われているのだと。

誰もが知っていることが前提である。イザークはわざわざ返事をする必要性を覚えなかった。ただでさえ鋭い目つきをさらに研ぎすまし、サイサリスから視線を外さない。

「一つ聞かせてもらおう。何故あんな嘴の黄色いパイロットたちにインパルスガンダムをあてがう。ザフトにはエースもいるはずだろう」

「それをあんたが知る必要なんてない」

今度はモニター画面しか見ていない。しかし、そんなサイサリス

も続くイザークの言葉には手を止めざるをえなかった。

「アリス・システムがあるためか？」

「どうしてあんたがそれを！？」

ようやく顔を向けてきたサイサリスにイザークが見せたのは彼らしからぬ嘲笑であった。サイサリスの企みへの軽蔑と、そのような手段を選択しながら一顧だにしないプラント有数の技術者へと蔑視を含んだ顔であった。

「図星のようだな。どうせ俺の言葉に耳など貸すつもりはないだろうが、だが、これだけは言っておく。俺の生徒をむざむざ使い捨てさせる気はない」

話はこれだけだ。軍学校への養成は国防委員会から来ている。教官の１人がどれだけ騒ごうと命令が撤回されることはないことくらいイザークはとて理解している。サイサリスにしても厄介払いできる程度の認識なのだろう。イザークが部屋を出ようと歩き出した時には拗ねたように首を回してモニターに視線を戻していた。

ごくありふれた大きさの部屋は、イザークを扉の前にまで運ぶのにさして時間を必要とはしなかった。扉もまた、あっさりとイザークを通す。イザークがわざわざサイサリスに挨拶をするはずもない。後ろ手に扉を閉めると、部屋の外にいた意外な人物を目にすることになる。

技術ラボの簡素な通路の上に、教え子の１人が顔を伏せがちな様子でたたずんでいた。

「メイリン……！？」

ここにいるはずなどなかった、徴兵の決まった少女がイザークのことを待っていた。

通路で話している訳にもいかず、２人は外へと移動することとなった。メイリンは終始無言のままであり、ラボの屋上、２人並んで外を眺めている時も何も変わらない。

塗装も施されていないＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが雑多なコードに繋がれたままゆっくりとした歩調で歩いては時折立ち止まり、片膝をついて座り込む。そのまましばらく待っていたが動き出す気配はない。一体何の実験をしているのか、見ているだけではわからない。

それはメイリンにしても同じことだ。イザークと同じように屋上の手すりに手を預ける形で体は外を向いている。しかし、顔は伏せられ何を見ているでもない。

イザークにインパルスガンダムを調査するきっかけを与えた少女は、実験中のインパルス同様、見ていても何も話が進みそうもない。

「どうした？　俺は占い師でもなければ、気持ちを推し量ってやれるほど人間できてもいない」

「姉が……、戦死したって連絡受けました……」

思えば、姉の名前さえ聞いたことがなかった。ただインパルスのパイロットとして前線に出ている。それくらいの話でしかない。

「そうか、残念だ」

不格好に飾り付けた慰めの言葉がよいとは思わない。少なくとも、イザークにとってメイリンの姉は結局のところ赤の他人でしかないのだから。

「撤退する仲間を逃がすために殿を務めてそれで……。らしくないですよね、そんな格好いい死に方なんて……」

メイリンが時折言葉を詰まらせるのは涙を堪えているからだ。横顔をじろじろと眺めているわけではないが、涙声とそうでない声の区別くらい、イザークにも判別できる。

イザークの胸中に飛来したのは喉を詰まらせるような不快だった。勇者が1人命を落としたことに対してではない。メイリンは姉がインパルスガンダムのパイロットであると言っていた。それなら、撃墜された時もインパルスに乗っていたと考える方が自然だ。

（アリスが使われたのか……？）

それならば、メイリンの姉は戦死したというより戦死させられたとする方が正確だろう。プラントは、4年前と何も変わってなどいない。必要だからと絶えず誰かを犠牲にし続けている。

「先生。私、戦います……！」

瞳に涙をためている分際で威勢ばかりがいい。空元気とは違うのだろうが、ある種の自棄を起こしている。イザークが教官でなければ胸ぐらにつかみかかりそうな勢いを感じる。

「復讐のためか？　それなら……」

「違います！　でもこっちが何もしなくても敵は攻めてくるんですよ。何もしなかったら殺されるだけじゃないですか！　私は、大切な人が殺されるのなんて我慢できません！」

「それを復讐と言うんだ！」

少し怒鳴りつけると、メイリンはいつもの気弱なメイリンのままであった。まるで子どもか動物のように体を小さく震わせて、しかしその眼差しは涙とともに怒りを湛えたままだ。

「先生は、私たちに国のために、仲間のために戦って欲しいと思って鍛えてくれたんじゃないんですか……！？」

「馬鹿な死に方をするひよっこを1人でも少なくするためだ」

「それが戦争で敵を殺すってことじゃないんですか！？」

「それは単なる結果だ。戦争が、命をかけるほど高尚なものか……」

わかってはいたことだが、今のメイリンに何を言っても無駄だろう。そもそも口が立つならイザークは軍人になどなっていない。

姉の復讐に憑かれたメイリンの見開かれた瞳からは涙がこぼれていた。

「メイリン、お前たちは俺が率いる。馬鹿な死に方することだけは許さんぞ。いいな」

若者たちは声をそろえてこの国を守りたいと叫ぶ。だが、イザークは知っている。この国に裏切られ、この国を裏切るしか術を知らなかった若者たちがかつていたことを。

世界の命運がほんの数時間で決してしまう。そんな瞬間というものはそうそうと訪れるものではないようでありながら人類はわずか４年前にも経験している。

その時、ギルバート・デュランダルは議長ではなく、それどころか議員でさえなかった。国立大学に研究生として所属していた。志願制を貫くザフトに参加する義務などない。仲間たちと政治討論を繰り広げていたことが懐かしい。

考えもしなかったものだ。そのわずか４年後、議長として国難に相対することになろうとは。いつものように演説会場に足を運ぶ。その度に胸は高鳴り興奮を覚えた。自分の一挙手一投足で民衆が動く。自分の意志が伝播していく様を眺めるということは為政者でもなければ味わえない悦楽である。

まさにギルバートの独壇場。独り舞台で唯一無二の主役を演じることができた。そう、独奏者の舞台に主役は２人要らないのではないだろうか。

目の前には演説場へと続く長い長い通路をただ歩く。ふと後ろを振り向いた時、ラクス・クラインは淑やかな足取りでギルバートの後ろについていた。

「ラクス、演説は慣れた仕事だ。私だけでもいいと思うのだけれど

ね」

「危急存亡の間際、後ろに下がっている訳にはいきません。わたくしも参ります」

ラクスは言い出したら聞かない。ここは諦めるしかないようだ。さて、これが何度目の諦めだったろうか。

通路の先、軍服を身につけた兵士が扉の左右を守っている姿が見えた。まだずいぶんな距離がある。それにも関わらず兵士たちは敬礼し、ギルバートが近づくまでその姿勢を維持した。

「ご苦労。そろそろ始めたいが、構わないかな？」

短くとも力強く返事をしてくれた。２人の兵士は左右対称の動きで観音開きの扉を開けると外気が静寂を運んでくる。

演説台が見えた。その奥には広間を埋め尽くす聴衆がいる。さて、１０００人だろうか、２０００、それとも３０００、いや、それ以上か。これほどの人がいながら物音一つない。誰もがこのギルバート・デュランダルの言葉を待っている。

一歩、また一歩演説台を目指す度、聴衆の視線がそろって動く。その焦点が演説台と重なる時、すなわち彼らの議長が演説の準備を整えたということである。

いきなり話始めるのは無粋だろう。聴衆をまずは見渡すことにした。若い者が多い。皆、ユニウス・セブン世代と呼ばれる若者だ。

Ｃ．Ｅ．６１年に発生した血のバレンタイン事件の前後にプラン

ト政府は教育カリキュラムを大幅に見直した。地球は敵であり、ナチュラルは不善。コーディネーターという優れた存在に嫉妬した愚か者の群だと。事実、ユニウス・セブン世代の子どもに自由に絵を描かせると燃える地球や死んだナチュラルを描くほど教育は徹底されている。

（そう、君たちは何も間違ってはいない。だが、敵はそれでも攻めてくる。戦わなくては守りたい人も、守りたいものも守れない）

演説を始めよう。

「今、プラントがどのような状況に置かれているのか、今更説明する必要はないと思う。不安でたまらないことだろう。だが、そんな時だからこそ聞いて欲しい」

君たちは何も悪くない。だが敵は攻めてくる。今遠く離れた月面からここを狙っている。

聴衆の中に徐々に高まる恐怖を掴み、それが膨れ上がるに合わせて言葉を乗せていく。

「人混みにまみれ恐怖に急く人も、家に閉じこもりふるえている人も、今なお護国に立ち上がる人もみな、この声を聞いて欲しい。この姿を胸に焼き付けて欲しい」

ギルバートが言い終えたタイミングで、会場に設置されたモニターに画像が投影される。演説台を見下ろす壁にモニターは設置されている。ちょうど聴衆からはギルバートが映像を背負っているように見えていることだろう。

月面で繰り広げられる戦いと、そこで戦うザフトの兵士たちの姿が。

「戦っている人々の、国を、命を、未来を守りたいとする無言の声を！」

仕事を共にするようになって1年になるディレクターにはここに合わせて傷ついたＺＧＭＦ－１０００ヅダがそれでも敵に突撃する画を入れるように指示しておいた。ギルバートからでは映像を確認できないが、聴衆の中には祈るように手を合わせ傷ついたヅダの無事を祈る姿があった。演出は確実に効果を上げている。

「悪鬼を滅さんと剣携え進む姿を！」

次はＺＧＭＦ－９５３ゼーゴックの編隊が一斉にビームを敵陣へと浴びせかける姿を映す。聴衆は予定通り沸き立った。

「彼らは皆あなた方とともにあり、あなた方も彼らとともにある。この一時だけ、政治家としてではなく、指導者としてでもなく、ただ1人の男に戻ることを許していただきたい！」

今、背後には一歩も引くことなく、国を守ることをやめようとしないザフトの勇士たちを背負っている。

「私は彼らを信じる。たとえどのような苦難の道のりであろうとも必ずや国を守り、勝利をもたらしてくれると信じる！　根拠なんてない。だが、信じたくて信じたくて仕方がないのだ！　彼らの勇姿に心奮わされた男として！　私は彼らを信じている！！」

予定ではここで拍手喝采の大号令が起こるはずだった。議長であ

るギルバートの演説が終わったことを確認し、聴衆が喝采をあげるために息を大きく吸い込む。そんなわずかな間をつくように絶妙なタイミングでラクス・クライン議員は言葉を滑り込ませた。

「わたくしたちの信じた未来を得ることは並大抵のことではありません。ですが、わたくしも信じます。たとえ力ないわたくしたちでもその恐怖に負けない思いと心は彼らを支えると、そして彼らが勝利してくれると信じます」

議長の傍らでその存在感を確実に示している。言葉の長さも適切だ。吸い込んだ息をためておける程度の長さで喝采の準備をする聴衆の間をつき崩してしまうことはない。

「今日という日が、よい日でありますように」

ラクスの言葉が終わるとともに聴衆は一斉に歓声を上げた。

（やれやれ、すっかり手柄を横取りされてしまったらしい……）

アームストロング船長のアポロ１１号が月面に降りたとされる西暦１９６９年から２４６年が過ぎようとしている。偉大な一歩と自ら称したその足跡は大気を持たない月面では風化を免れることで何百年にも渡って残るとされていた。

今、この言葉を信じる者など、少なくとも月にはいない。

爆沈させられたダーレス級ＭＳ運用戦艦が火煙に包まれながら地球のわずか６分の１の重力に引かれ落ちていく。この墜落を背景と

してヅダがソード・ストライカー?を装備したＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーに腹を横一文字に斬り裂かれたかと思うと、そのストライクダガーはすぐさま飛来したビームに胸部ジェネレーターを撃ち抜かれた。

大地が焼け、重火器の火線が上空で交錯する。

世界安全保障機構軍モビル・スーツ総数約２００。ダーレス級２０隻、ドレイク級１０隻、旗艦として3隻のアガメムノン級を従える大西洋連邦、ユーラシア連邦、大洋州連合軍からなる混成部隊である。

ザフト軍モビル・スーツ総数約２５０。ラヴクラフト級5隻、ナスカ級２０隻、ローラシア級１０隻。本国の防衛戦力さえ動員した宇宙軍による総力戦の構えである。

約3年前のヤキン・ドゥーエ攻防戦以来の一大決戦が今、月面では繰り広げられていた。

音のない無声映画のような戦争のただ中で、人の足跡など一体何故残ろうか。

ＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムがモビル・アーマー形態のままそのウイングを撃ち抜かれた。地球軍の中で最大の機動力を誇るガンダム・タイプであろうと、重心をつき崩され、ミノフスキー・クラフトを有するバック・パックを破壊されれば軌道も歪む。月面に衝突する間際、変形し、薄い青のガンダムの姿に変わった途端、ガンダムは気づいた。

青い翼持つガンダムの接近に。

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンがその全身を輝かせながら通り過ぎる。いつの間にやら頭部を破壊されたディーヴィエイトはそのまま月面に叩きつけられ、月の乾いた大地に擦りつけられるようにして轍を刻む。ようやく止まった時には、その腕を失っていた。

ヤーデシュテルンの侵攻は止まらない。

「エミリオ、敵の一角を崩す。ついてこれるか？」

敵の防衛線へと突き進むヤーデシュテルンのすぐ後ろにインパルスガンダムが従う。まだ実戦経験に乏しい新入りのためか、エミリオ・プレデリック少尉は汎用性に優れたフォース・シルエットを使用することを好んだ。

「無論です。ナチュラルごときに遅れはとりません！　それに、自分には、いえ、我々には仲間がいます！」

エミリオの言葉が示すものを、翠星石がモニター上に小さく表示してくれた。ヤーデシュテルンの後ろで隊列を組む友軍の姿があった。

「終わらせるんだ。こんな馬鹿げた戦争を！」

「エインセル・ハンターを倒せ！」

「勝利を我らに！」

「勝利を我らに～！！」

作戦単位内の共用チャンネルに次々と吹き込まれるザフト兵の声と思い。誰もがこんな戦争をやめさせたいと考えている。そして、エインセル・ハンターさえ倒すことができればそれがかなうと信じている。

そう、間違いなどあるはずがない。エインセル・ハンターさえ倒せば地球各国は精神的指導者を失う。所詮利害関係で一致しているだけの世界安全保障機構などたやすく崩壊することだろう。

（これで、戦争が終わるんだよね、ラクス……）

戦争は、必ず終わらせなければならない。

出撃を控えたＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペのコクピット内で、シン・アスカは大きく深呼吸をした。

何から何まで落ち着かない。インパルスのようにモニターを並べただけの狭苦しいコクピットとは違い、全天周囲モニターの球状コクピットは開放的でどこか落ち着かない。こんな広い空間を１人で独占していることなんてこれまでになかったからだろう。

もう１つ、出撃前のチェックを必要としないということが挙げられる。すべて機械が自己診断の上、結果をモニター上に投影してくれる。すべて機械に任せてよいものか、そんな不安もシンを落ち着かなくさせている。

これから、ただ１人で戦わなければならないのに。ジャブローの

戦いでバレル隊は全滅。レイ・ザ・バレル隊長も愛機であるＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルの修復を終えていないため今回は出撃を見合わせている。

ブリッジから入った通信は、そんなレイ隊長の声だった。

「シン、俺たちが撃墜しなければならないのは、恐らくフォイエリヒそのものだ」

モニターに顔は標示されていない。すでに第一種戦闘配備が発令されているのだ。

「お前は襲撃したコロニーでフォイエリヒと遭遇している。恐らく、屈折コロニーと同調を計るためにわざわざ持ち運ばれていたのだろう。そう考えれば、エインセル・ハンターがフォイエリヒを娘に預けていたことも説明がつく」

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムそのものがあの巨大なビーム兵器の一部として機能しているとすれば、辺境の未完成コロニーにフォイエリヒがあったことも今月面にフォイエリヒが運び込まれていることも確かに説明がつく。

（マッド隊長、あなたの読みは外れてなんかいませんでしたよ……）

ずいぶん遠い昔のことのように思える。コロニーを襲撃して返り討ちに遭って何人もの仲間を失った。その後レイ隊長のミネルヴァに乗ることができて今に至る。

「あの時から、すべてが始まってたんですね」

「そうだ。だが用心しろ。予測ではまもなく第5射が放たれる。そして、第6射までは恐らくそう時間はかからない。アプリリウス市を狙うのであれば、コロニーと要塞では破壊に必要な熱量が極端に異なるからだ」

「やっぱり隊長もアプリリウス市が狙われる、そう考えてるんですね」

「これほどの巨大兵器を地球軍が何故秘匿できたのか、それは大規模実験を行っていないからだ。恐らく、実戦が実験を兼ねるという離れ業をしているのだろう。ジャブローにあった同型の兵器で起動実験を、そして要塞を狙う度、徐々に精度が増している。奇襲として最適であるはずの初撃でアプリリウスを狙わなかったのではなく、狙えなかったと考えれば様々辻褄があう。第6射がアプリリウス市を撃ち抜く蓋然性は極めて高い。そう、肝に銘じておくことだ」

「了解！」

操縦桿を握りしめる。シンが座るにはやや大きかったシートの位置はすでに合わせてある。機体は、徐々にシンに馴染みつつあった。

ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＨガンダムメルクールランペの足がミネルヴァのカタパルトを踏みつける。元々地球軍で使用されるはずだったメルクールランペの規格がどうしてザフト軍のものと合うのか不思議だったが、レイ隊長に言わせれば何のことでもないらしい。ゼフィランサス・ズールという1人の天才によって作られたガンダムというものは、得てしてそう言うものなのだそうだ。

出撃準備を終えて、シンは前を見た。かつてコロニーを襲撃した時とは違い、宇宙の闇には幾本もの光の華が咲いている。

あの時とは何もかもが違う。

「シン・アスカ、メルクールランペ、行きます！」

エインセル・ハンターは、まさしく現人神としても過言ではないのではないだろうか。地球軍が向ける忠誠はもはや崇拝に近い。ザフト軍の畏れようは常軌を逸している。

正邪を問わず、信仰と力、奇跡を具現する存在を、人は神と崇める以外の術を知らないのだから。

誰もがエインセル・ハンターを信じていた。アルザッヘル基地を包囲するザフト軍の軍勢に引く者などいない。

ミサイル艦でしかないドレイク級が定石を破る。前線に出る。それどころか加速をやめぬままありったけのミサイルを発射する。この時代モビル・スーツ搭載能力のない戦艦は戦力に数えられない。対艦戦を経験したことのない新米パイロットさえいる現実に、ザフト軍は反応することができなかった。ありえないほどの至近距離から放たれたミサイルがこともあろうにザフトのモビル・スーツを捉えたのである。

爆裂する炸薬に消えるザフトのモビル・スーツ。

モビル・スーツが戦艦に撃墜される。ここでは、あり得ないことが起こりうる。

幾本ものビームがドレイク級へと撃ち込まれる。戦艦の分厚い構造をビームは軽く突き破り炎が体のいたるところから吹き出す。破壊さ、墜ちていく戦艦。その影から地球軍のモビル・スーツが奇襲をかける。

刹那の混戦。ザフトがわずかな間に接近を許したことでそこには局所的な混線が発生した。ビーム・サーベル、ビーム・アックス、足りなければライフルの銃身そのものを鈍器としてモビル・スーツとモビル・スーツとが斬り結ぶ。

何とも野蛮であり、何とも猛々しい。技巧、テクニック、戦術、戦法、技、技術。軍人として培った技術をほっぽりだし、ただただ剥き出しの敵意をぶつけ合う光景は戦いと呼ぶよりは闘い。単純明快。立っている者こそが勝者であり、命を失った者から脱落していく。

コクピットを正面から貫かれたＧＡＴ－０１Ａ１ストライクダガーが月面に叩きつけられる。胸にダガーが深々と突き刺さったＺＧＭＦ－９５３ゼーゴックは落ちることもなく爆散する。

誰もが綺麗な背中をして死んでいく。逃げ出す者などなく、まるで抱き合うように互いのサーベルとサーベルを突き刺し合ったまま固まったＧＡＴ－０４ウィンダムとヅダの屍さえ放置されていた。

皆がそろって地獄へと行進していく。振り返ることなく、省みることなく、エインセル・ハンターの姿と影を追いかけるそのままに。

軽く機体を動かす。そんなつもりで操縦桿を引くと、メルクール

ランペは全身からミノフスキー・クラフトの輝きを放ちながら滑るように移動する。

ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムとはスペックがまるで違う。機体が思うように動き、まるで翼を持っている――実際には金属板のバック・パックが翼状である――かのように月の空を飛ぶ。

大型のスカートを持っていることからシルエットがどこか女性的で、黒い天使という言葉がこれほど似合う機体は他にはないだろう。武器は対艦刀のみ。西洋刀を思わせる長剣は白い刀身を赤熱させていた。高周波ブレードの特徴である振動の余剰エネルギーが刀そのものを熱しているために起こる現象だ。

元々白兵戦を得意とするシンにとって、これほど扱いやすい武装はない。

ウィンダムがビーム・サーベルを抜いて接近してくる。全天周囲モニターはその姿を簡単に捉えた。白い色の装甲のところどころが青く塗装された機体で、ヒメノカリス・ホテルの機体ではない通常の量産型のようだ。地球軍の最新機だけあって動きがいい。

それでも、今のシンには遅くさえ見えた。

機体を翻す。その勢いさえ利用してメルクールランペを加速させる。相手は完全に動きが遅れている。あっさりと懐に潜り込む。その時にはすでに意識が加速し、体は次の動きに入っている。対艦刀を振り上げると、敵は腕を失っているはずで、次に振り下ろせば胴を裂くことができる。意識は準備を終え、体が動く。

メルクールランペがその場所を離れた時には、腕を斬り取られ胴

を裂かれたウィンダムが爆発を引き起こす寸前であった。敵機の撃墜を確認した頃にはすでに次の動作に移っているのである。

（これがゲルテンリッターの力……）

力の次元が違う。

ライフルを構えたＧＡＴ－０１デュエルダガーが向かってくる。標準をこちらに合わせてくるよりも速く、引き金を引くよりも疾く加速したメルクールの剣はデュエルダガーの腹を通り抜けていた。

フル・ミノフスキー・クラフトのゲルテンリッターは羽根のように軽やかに動く。ジェット・ストライカーを装備したストライクダガーの１個小隊がビームを次々と浴びせてきたとしても、あらゆる方向への機動を可能とするメルクールは危なげなくかわしていく。外れたビームが月面に引き起こした爆発に紛れて一気に浮上すると、ストライクダガーの動きは完全に遅れていた。ライフルがいつまでも下を向いたままで、シンがすれ違いざまに１機斬り裂いたことでようやく銃口がメルクールランペを追う。

しかし、敵はシンの姿を完全に見失っていた。

直角に機動することで速度を落とさず、小さな旋回半径で機動方向を完全に入れ替える。この力も、メルクールランペならばより完全に再現することができる。

ストライクダガーのライフルが上を向いた時には、すでにメルクールランペの姿は敵の懐にあった。突き出す対艦刀が鋼鉄をあっさりと貫通する。これで２機目。小隊は通常３機。そう認識した頃には、メルクールランペの剣は最後のストライクダガーの首をはねて

いた。

戦線が混乱していて組織立った戦いができていないことがあるとは言え、ガンダム・タイプでもない量産機では相手にならない。

これならエインセル・ハンターに勝てるだろうか。エインセル・ハンターは何故こんな機体をシンに渡したのだろう。

この答えは、地球軍の防衛線の先にある。遠く離れた月面に、例の大量破壊兵器が月に張り付いた皿のような姿をさらしていた。

あそこにエインセル・ハンターがいる。

「もう一度、俺はエインセル・ハンターに会いたい！」

そのためには乗り越えなければならない壁がいくつもあった。まずは一つ。防衛線を抜けて来る白いウィンダム、ヒメノカリスの機体だ。

「シン！」

「ヒメノカリス！」

通信は当然のように繋がった。

ウィンダムがノワール・ストライカーに装備されたレールガンを展開する。1対のウイングに格納されていた銃身が起き上がりメルクールランペを狙う。いくら初速が速くても射撃でガンダムを落とすことなんてできやしない。メルクールランペは装甲をわずか輝かせる程度の小さな動きでレールガンをかわした。

「まだお父様を狙うの？　あなたは、そんなにお母様に愛されたいの？　いえ、愛されていると思いこみたいの？」

「確かに俺は復讐者ではあっても復讐者じゃないのかもしれない。でも、こんなこと認められない！」

「そう。でも、どうでもいい。これで、私はあなたを殺すことができるから」

両手にビーム・サーベルを構えたウィンダムの攻撃は、大きく飛び上がってかわす。宙返りを交えて軌道を変えながら逃げると、それだけでヒメノカリスは追いつくことさえできなくなる。

「やめてくれヒメノカリス。俺は君と戦いたくない。どうして君が戦わなくちゃいけないんだ？」

「私はお父様のために生きているの。だから、お父様のためなら何でもする！」

再び放たれるレールガン。高い速度を維持したままのメルクールランペを捉えることなく、月面にクレーターを付け加えただけで終わる。

「君も俺と同じだ！　お父様の役に立ってい。そうと実感できないと不安で仕方がないんじゃないのか？　戦わなくなった自分や、役に立てなくなった自分が捨てられることに怯えているだけじゃないのか！？」

だからきっと戦うんだ。ヒメノカリスは自分に、お父様のために

戦う自分はお父様に愛される資格があると言い聞かせるために。

「違う！」

否定されてもヒメノカリスのことがわかる。あまりにシンとよく似ているから。心にはった水は鏡のようにヒメノカリスの姿を写す。

（俺は、こんな一方的な殺戮なんて認めることなんてできない。だから俺は、君を討つ！）

「違うというなら剣を下ろせ。ここから逃げ出してくれ。エインセルさんなら！　咎めないって言うなら！」

向かってくるウィンダムへと剣を構え加速する。振り下ろすメルクールランペの大剣――表面にビームを弾く機構が備わっているらしく、ビーム・サーベルと斬り結ぶことができる――をウィンダムへと叩きつける形で激突する。ウィンダムはサーベルで斬撃こそ防いだが、激しい衝突は出力差からメルクールランペが押し切る形となった。勢いを完全に殺され、月の重力にさえ抗えずゆっくりとウィンダムが落ちていく。

「エインセルさんのことを愛してるなら、信じてるならできるはずだ！」

「うるさい！」

スラスター出力に頼った無理な機動でウィンダムが上昇してくる。

ヒメノカリスは、こんなにも動揺する人だっただろうか。ヒメノカリスの思いは理解できても心はわからない。何がヒメノカリスを

ここまで焦らせているのだろう、騒がせているのだろう。

無理矢理接近してくるだけなら迎撃は簡単にできてしまう。ミノフスキー・クラフトの力まで乗せて剣を突き出す。それだけでウィンダムは左腕を失った。機体の重心が狂ったことでおかしな方向に流されていくウィンダム。それでもまだヒメノカリスは戦うつもりでいた。

「お父様に近づくな～！」

こんなヒメノカリスの声なんて聞いたことがなかった。声を張り上げることなんて、剥き出しの感情をぶつけてくることがあるなんて考えもしなかった。

残された右腕をただでたらめに振り回しただけの動きが、ビーム・サーベルがメルクールランペを捉えることなんてない。スラスターに頼らずミノフスキー・クラフトの推進だけで機体を滑らせる。それだけでウィンダムは追いついてくることさえできない。

そもそも機体性能がまるで違う。

徐々にメルクールランペを加速させると、それだけでウィンダムを引き離すことができた。そして、スラスター推力を交えて加速する。飛び上がり、急旋回。直角にも近い急激な方向転換を2度行うと、その先には月面を背にしたウィンダムの姿があった。その動きはとても遅くて、意識は、ウィンダムの撃墜を予定した。

残された右腕をバック・パックごと切断されたウィンダムが月面へと墜落していく。ヒメノカリスの声を聞きながら、シンはそれを見送った。

「ハウンズ・オブ・ティンダロスが、使えない……」

そこは大地が盛り上がり谷間となっている場所で、両腕を失ったウィンダムは崖に背を預けるようにして動きをとめていた。墜落の直前、スラスターを噴かせて衝撃を緩和していたところを見るとまったく動けないということはないのだろう。ただ、武装を失っている。もう戦うことはできない。

メルクールランペをウィンダムの側に着陸させた。もちろんとどめを刺す為じゃない。理由は2つ。

ヒメノカリスに伝えたいことがあった。

「ヒメノカリス、俺は、君のお父さんに会いに行く！」

墜落の衝撃からまだ立ち直り切れていないのだろう。ヒメノカリスからの返事はなかった。

モニターの先、メルクールランペが見つめる先には両端が切り立った崖の回廊が延々と続いている。上空から確認した。この崖は地球軍の防衛線の下を抜けてエインセル・ハンターの元に続いていることは。

モニターには上空で記録した５００ｍにもなる谷の概図が示されていた。非常に入り組んでいて少しでも壁に激突すれば墜落は免れない。反対に歩いていけば上空の防衛線から集中砲火を浴びせられてしまう。敵に標準を絞らせないくらいの速度で、谷の間を通り抜ける。

少しでも早くエインセル・ハンターの元にたどり着くには他に方法はない。

（今の俺になら……）

「できるはずだ！」

誰もが笑った。よほどの馬鹿か、よほどの自殺志願者がいると。

複雑に入り組んだ谷間を加速しながら通り抜ける敵機の存在を確認した地球軍の評価である。

確かに両岸を崖に囲まれる谷間は接近を困難にし、攻撃の方向を上空からに限定する。だが、飛行したままで通り抜けるには谷が入り組みすぎている。速度を落とすどころか加速を続けているようではいつか必ず壁に激突する。それを恐れて速度を落とせば、上空に待機する地球軍が集中砲火を浴びせることになる。

確かに谷には守備隊は配置されていない。配置する必要がなかったからだ。

通り抜けることができるはずがない。激突するか、撃墜されるか。この2択しか選択肢はないのである。

ガンダムメルクールランペは飛翔した。狭い谷間を縫いながら、盛り上がる壁面を身を翻しかわす。全身をさらに輝かせながら急な角度の谷さえ鋭い角度と速度を維持したまま通り抜ける。見えているはずのない、そんな曲がり際の岩さえゲルテンリッター初号機は

回避する。

人の限界速度を超えている。あのような動きを続けて、慣性は一体どうなっているのか。

時間の問題という言葉がある。結果は決まっている。後はそれがいつ起こることかという問題でしかないという意味だ。敵が激突するか、速度を落とすはず。それは時間の問題だ。そんな地球軍の考えを、地球軍そのものが否定を始めた。

激突しない。それを待っていられるほどの余裕はない。速度を落とさない。そんなこと構うことなく次々と眼下めがけてビームを発射し始めた。捉えるにはメルクールランペの速度が速すぎる。ビームは谷の内外で派手な爆発を引き起こしながらもそれは完全にテンポが遅れていた。すでにメルクールランペが通り過ぎた後をさらうでしかない。

奇跡が起きていた。

意識の加速。上空から眺めた谷の映像から行動を事前に決めておく。意識が反応するよりも早く体を動かす、機体が谷の間を飛び去っていく。

卓越した機動技術。エインセル・ハンターが見せたその技術を、シン・アスカは高い段階でそれを再現する。あり得ない動きは、しかしすでに既知の技である。

そして、メルクールランペは谷を抜けた。

開けた大地が広がる。風にも雨にもさらされることなく幾星霜の

時を地球を眺めて過ごした月の大地のその先に、ユグドラシルの姿があった。敵と味方が、兵士と兵士が前線をぶつけ合い、命をすり減らしながら咲かせる戦火はすでに遠い。ユグドラシルの空は静謐に包まれ以前の人が見ていた静かな月のありよう、たたずまいを見せていた。

シンが、メルクールランペが進む先は、しかし静寂が約束されることはない。すべてはすでに始まり、そして、すべての始まりはこの場所で終わりを迎えようとしていた。

月。ここは、すべての始まりと終わりが集う場所。

すべては４年前、エインセル・ハンターのオーブ侵攻が始まりであった。すべてはアポロン、シン・アスカがマッド・エイブスの部下として襲撃したコロニーから始まっていた。

アブディエル。堕天しきれなかった天使と蔑まれた少年を待ちかまえるのは鎌をかざすガンダム。かつてアポロンで刃を交えたＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダム汎用型、そして、アウル・ニーダであった。

すでに鎌は構えられている。本来全身を青で染められているはずのインテンセティでありながらそれは薄い緑で染められ、甲殻類を彷彿とさせるバック・パックからはアームで連結された１対のシールドが構えられている。ビーム全盛の今においてビームを弾くシールドを与えられた死神が、黒い天使を待ち受けていた。

「行かせねえよ！　ここから先はなあ！」

月面を踏みつけ、インテンセティが一気に前へと飛び出す。大型のバック・パックに搭載されたミノフスキー・クラフトが生み出す膨大な推進力に任せた強引な加速で両者は瞬く間に距離を詰めた。

鎌と剣。刃が触れ合うと、互いが互いの刃を弾き合い2機は大きく回り込むように距離を開けた。

この一撃でアウルは理解した。こいつとは一撃必殺の戦いになるだろうと。

お互い、高周波ブレードを使用している。刃そのものを振動させることで目標の分子結合を直接断ち切るこの刃はフェイズシフト・アーマーにも有効に作用する。結局ミノフスキー粒子の結合そのものを破壊されてしまえば、あとは通常の装甲でしかないからだ。

インテンセティ自慢のシールドも意味がない。今更レールガンやビーム砲が通用する次元の話ではない。

鎌と剣。先に斬った方の勝ちだ。

インテンセティは鎌を構えたまま動かない。メルクールランペも剣を構えたまま動こうとしない。どうせ戦いは一瞬で終わる。相手の出方をうかがっている他仕方がなかった。

「こいつがシン・アスカって奴か……」

(なんでエインセル・ハンターの奴、こいつなんかにゲルテンリッター渡すんだよ)

こいつはスティング・オークレーの仇で、ただのコーディネーターでしかない。敵にわざわざゲルテンリッターをくれてやる意味なんてないし、実際、このシンとかいう奴はまだゲルテンリッターに認められていない。

「訳わかんねえ」

エインセル・ハンターはこんな男に何を期待しているのだろう。何もできるはずなんてないのに。

そう、ゲルテンリッターの初号機を睨んでいると、コクピット内のアラームが鳴った。ああ、時間か。アウルはそんな軽い気持ちで1つのモニターに目をやった。

その時、月面の砂が一斉に跳ねた。

モニターが焼け付くんじゃないかとばかりの光が溢れ、それは上空へと突き抜けていく。ユグドラシルの第5射が発射されたのだ。

「これでザフトの要塞はぜんぶおじゃんだな」

どうせシンとかいう奴もユグドラシルの穴から吹き出る光を眺めていることだろう。アウルは口笛さえ吹いて見物していた。

これでザフトは本国を守るすべての要塞を失った。第6射はいよいよアプリリウス市、プラントの首都を直撃する。おまけにコロニーを吹き飛ばすくらいなら大したエネルギーは必要がないときている。反則なくらい楽なゲームだ。

「ま、お前にとっちゃ、ハード・モードまっしぐらだろうけどな」

通信は繋いでいない。まさか聞こえているはずがないのだが、メルクールランペは剣を構えなおした。仕掛けてくるつもりらしい。

「スティングの仇、とらせてもらうぜ！」

操縦桿を握る手に力がこもる。思い出されるのは、真紅に鍛えられた日々のこと。意識の加速を覚えた。エインセル・ハンターのフォイエリヒとだって３２秒のレコードがある。ただいい機体もらって喜んでるだけのコーディネーターなんかに負けるつもりはない。

どちらが先に動いたとか、そんなものはなかった。ただ同時に今しかないというタイミングで踏み出すと、それは完全に一致した。２機のガンダムが同時に前へと飛び出す。

復讐を捨てなさい、アウル。

何故か突然、真紅のこの言葉が思い出された。

復讐の鎌が振るわれる。

明鏡止水ですよ、シン。

翠星石に贈られた言葉を思い出す。

かつてシンはこのインテンセティと戦い、敗北している。

それからたくさんのことを学んだ。意識を加速させ、機動を発展

させ、何より敵を知るということを覚えた。正義という言葉の意味を考えた。

正義のために剣を払う。

ここは現在世界の中心とも言うべき場所である。ユグドラシルの本体が眠る地下施設。王の間とも言うべき場所にＺＺ－Ｘ３００Ａフォイエリヒガンダムがたたずみ、玉座は王を迎えていた。

開かれたままのコクピット・ハッチ。その奥、パイロット・シートに眠ったように座るステラ・ルーシェの姫君のような姿。エインセル・ハンターは５度のユグドラシル照射に精根尽き果てたステラをシートから優しく抱き上げる。すると、ステラはその腕の中で瞳を開いた。

エインセルはステラを優しく見つめる。

「ステラ、ありがとうございました。ここからは私の仕事です」

抱き抱えるステラを揺らしてしまわないよう、エインセルの足取りは確かで、ハッチへと着実な歩みを進めている。決して広すぎることはないコクピットをあっさりと歩き終えるまでの間に、ステラはその手でエインセルのスーツを掴んだ。

「ステラ、役に立てた？」

「ええ、とても。ですが、まだ仕事は終わっていません。頑張れますか？」

「うん、ステラ、がんばる」

ハッチの外には乗降用のリフトが用意されている。その上には眼鏡をかけた女性が1人。メリオル・ピスティスは顔を上げられずにいた。エインセルがステラをリフトに下ろす間も、メリオルは顔を上げられずに、エインセルのことを見られずにいる。

そんな妻へと、エインセルは言葉をかける。

「メリオル、ステラをお願いします」

ステラは、それでもなかなかエインセルから離れようとしない。

メリオルは、それでも必死にエインセルの姿を見ようとして、その唇を震わせた。涙が頬を伝い始める。

「あなたと結ばれた日から心に決めていました。この日が来たなら、心を強く、あなたのことを……、送り出すと……」

もはや言葉を紡ぐことさえできない妻を、エインセルは抱き寄せる。

「あなたがいなければ、この日を迎えることさえできませんでした」

15年。この戦争と殺戮、憎悪と争いに明け暮れた男のそばでともに戦い、支え続けてくれた妻を、エインセルは力を込めて抱きしめる。エインセルの胸の中でメリオルはその温もりを感じ、ただ涙を流す。

「ありがとう、メリオル。本当に、ありがとう」

エインセルにその体を委ねるメリオルから眼鏡をそっと外す。涙で汚れてしまったその頬にそっと手を添えて、２人は唇を重ね合わせた。

言い残したことはありませんか。伝え切れていない思いはありませんか。ほんの少しの勇気を奮い立たせてください。後悔なんてしないでください。これが最後の機会です。大切な言葉があるのなら、大事な思いがあるのなら。

あなたの思いが伝わりますように。あなたの言葉が届きますように。

あの人の祈りと願いを、あなたが聞いてくれますように。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「最後の恋」

ファントム・ペイン。これが、あの人があなたたちに残した言葉です。

第３３話「さいごの恋」

「はいはい、並んで並んで」

すっかり片づけられたシアター・ルームにタッド・エルスマンを中心として関係者が横に並んでいる。その正面にカメラを設置して準備するのはベルナデット・ルルー。ジャーナリストらしく、カメラの用意は手慣れたものである。相棒であるジェス・リブルは並ぶ人々の位置を調整していた。

「エルスマン議員は真ん中にお願いします。ディアッカ君はその隣で。ああ、アイリス、君もなるべく真ん中にいてくれ」

この中でも最も重要な人物であるタッド・エルスマン最高評議会議員を真ん中に、その子息を横に座らせる。そのすぐ脇にはヴァーリを立たせた。

「なんだか、ただの記念撮影じゃない、って感じですよね」

アイリス・インディアがディアッカ・エルスマンの後ろからそっと耳打ちする。

「多分な。実際、この２人にただですますつもりはないんだろうからな」

疑う２人の前でジャーナリスト２人組はまったく打算を隠そうとはしていない。

「ヴァーリの２人は並べた方がいいと思う？」

「いや、エルスマン議員の左右に配置する形にしよう。並べた方が顔の印象が似ていることは示しやすいけど、見ている人の視点が中央に集まりすぎる」

そう言い終えると、ジェスがニーレンベルギア・ノベンバーをエルスマン家の人を挟んで反対側の位置に立たせた。ニーレンベルギアは同じ顔で、しかし違うやり方でアイリスに苦笑して見せた。

疑惑は確信に変わる。

「やっぱり……」

ただの集合写真にも手を手は抜かない。そんなジャーナリスト根性に、アイリスはため息をつく他なかった。

しばらくして、人々の位置が定まったらしい。雛苺――小さな小さなお人形――を含めて10人の決して大人数ではない人々がカメラの前に並ぶ。カメラの最後の操作をしているベルナデットだけがまだ参列していない。やがてカメラのタイマーをセットし終えたところでベルナデットも駆け足で集合に加わる。場所は、ちょうどアイリスのすぐ隣であった。

「もっとあなたたちからいろいろなこと聞きたかったけど、残念ね」

ベルナデットはアイリスへとスティックを振って見せた。ボイス・レコーダーで、アイリスやニーレンベルギアに暇を見つけては聞いていたものだ。断片的で大した情報は得られなかったなずだが、ベルナデットは嬉しそうに笑う。

「ベルナデットさんもいろいろありがとうございました」

いつシャッターが押されるかわからないため、基本的に前を向きながら時々横目でベルナデットを見る。アイリスはそんなおかしな行動をしながらお礼を述べた。

「これから何が起こるかわからないけど、気をしっかりね」

まもなくタイマーが切れる。誰もが正面のカメラを見ているなか、突然騒ぎ始めた少女がいた。

「雛、もっと大きく写りたいの～」

サイ・アーガイルの手の中で桃色のドレスを着た少女が大きく背伸びしようとしていた。単なる立体映像ではどれほど暴れても抗力は発生しない。サイはいつものようにロー・テンポで自分のゲルテンリッターを窘める。

「このプロジェクターじゃ、この大きさが限界だよ」

「じゃあ、体、持ってくるの！」

この中でＺＺ－Ｘ６Ｇ１０２ＳＡガンダムクライネベーレの機体を見たことがある者は限られる。しかし、知らない者でも一斉に巨人が町中を闊歩してやってくる光景を想像してしまった。慌ててとめようと雛苺へと手を伸ばし、集合体制が一気に崩れ落ちる。

カメラは、そんな砕けた光景を撮影する羽目となった

大気を持たない月の空。主を失った大鎌がゆっくりと回り、弱い重力に引かれて落ちる。高周波ブレードで覆われているはずのその刃は月面に浅く突き刺さるでしかない。

主が横たわっているのは、鎌が突き刺さったすぐ横のことである。ＧＡＴ－Ｘ２５５インテンセティガンダムがうつ伏せに倒れていた。月面には轍が刻まれ、倒れた際の勢いのほどが知れる。どこかを損傷した様子はない。だがそれは、インテンセティが満身創痍の足取りで起きあがるまでの認識でしかない。

ゆっくりと踏ん張るようにインテンセティが起きあがると、その両腕が肘から先を失っていることがわかる。そればかりか、左膝にも深い裂傷が刻まれていた。もはや立っていることさえやっとである。普段は軽々持ち運ぶ大型バック・パックを重たげに背負い、インテンセティは月の重力さえ煩わしげに振り向いた。

「何でだよ……？　何でコクピットを外しやがった！？」

パイロットであるアウル・ニーダが叫ぶ先、無傷のＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペが背を向けている。いや、背を向けているのではない。ただユグドラシルの方を見ているにすぎない。

アウルは相手のコクピットを狙ったのだ。ところが、メルクールランペはアウルを狙わずインテンセティの戦闘力を奪うに留め、とどめを刺す様子もない。

「情けでもかけてるつもりかよ！？」

アウルはコクピットを狙ったのだ。では何故敵はアウルにとどめを刺そうとはしない。声の限りに叫ぶアウルはふと真紅に言われた言葉を思い出し、思わず言葉を止めた。

復讐を捨てなさい、アウル。でなければ、あなたは自分自身を裏切ってしまうことになるから。

どれほど実力をつけようと、敵の動きを読もうとも怒りに任せて攻撃を選んでしまっては意味がない。そう、真紅は確かに言っていた。敵の狙いはアウルを殺すことでもなければインテンセティを撃墜することでもない。ただ戦力を奪うだけでよかった。

アウルは敵を殺すということにこだわりすぎた結果、それが意識の加速も明鏡止水の境地も無意味にしてしまったのだ。

戦士である前に単なる復讐者でしかなかった。それが、アウルが負けた唯一であり絶対の訳であった。

「ちきしょう……」

悲しいよりも情けない。もはやまともに動かすこともできないインテンセティの中で、アウルは歯を食いしばりながらメルクールランペの飛び去る姿をただ見送るしかできなかった。

ユグドラシルの第5射が放たれた。事態はそれほど逼迫している。急がなければ何から何まで手遅れになってしまう。

ヒメノカリス・ホテルはザフト軍でもなければプラント市民でも

ない。事実、プラントがどうなろうと興味はない。すべてはシン・アスカが悪い。

ここはダーレス級ガーティ・ルーの格納庫の中。ヒメノカリスはノーマル・スーツ姿で壁に傷だらけの姿をさらすかつての愛機を一瞥した。このＧＡＴ－０４ウィンダムはもう使えない。人々の動きが激しい格納庫の中を跳ねるように移動する。

小型のヘッドフォンはブリッジと繋がっている。艦長であるイアン・リーとまだ状況確認を終えていない。

「ステラとアウルは？」

「ステラ・ルーシェはすでに。アウル・ニーダについてもまもなく」

聞けばアウルもシンに負けたそうだ。いくら性能に優れるゲルテンリッターを使っているとは言え、強くなったアウルを破るほどにシンは成長している。なおいっそう焦りがつのって仕方がない。

これまでシン・アスカという人間をこれほど強く意識したことなんてなかった。お父様がメルクールランペなんて渡さなければこんな思いに駆られる必要もなかった。

（お父様は死ぬおつもり……。シン・アスカに殺されることで……）

そんなことさせない。させるわけにはうかない。

「アウルが着き次第退避して」

「ヒメノカリス中尉はどうされる？」

イアン艦長は奇妙なことを聞いてきた。あんな仏頂面をしていても、意外と人というものが見えているのかもしれない。現在、地球軍は徐々に撤退を開始している。拠点を捨てて、総大将であるはずのエインセル・ハンターを残して。

それでも、ヒメノカリスがエインセル・ハンターを、お父様を残して行くことなんてできないことはヒメノカリス自身、イアン艦長でさえ知っている。

当たり前のことを、当たり前のように囁いた。

「お父様の元に行く」

足を止める。するとヒメノカリスの目の前には褐色の装甲をしたＧＡＴ－Ｘ３７０ディーヴィエイトガンダム特装型がある。ステラ・ルーシェが戦闘に参加しなくなって以来使われてこなかった機体は、いつでも使えるよ状態でステラと行動をともにしていた。

でも、戦うのはステラじゃない。

「シン、あなたはこんなところに来るべきじゃなかった……」

ジェネラル。最前線において唯一の将軍は仲間たちと酒を酌み交わしていた。

「やはり酒は仲間と飲むに限るな！」

豪快な笑い方とともにバーボンを一気にあおる。南アメリカ合衆国将軍にして世界安全保障機構に代表として参加するエドモンド・デュクロ将軍が酒豪であることは広く知られている。ブルー・コスモスの現代表ロード・ジブリールに食ってかかるなどその竹を割ったような気質を好む者は軍内に少なくない。

彼らも、そのような支持者たちである。将軍の前には黒い制服を着た軍人たちが思い思いの場所に座り、手には杯を持つ。ただ誰もが困惑したような表情を浮かべ、将軍と彼らの部隊長の間を視線が行き来する。

部隊長、レナ・イメリアはエドモンド将軍の前に座り、そっと息を吹いた。ノーマル・スーツを着ている時は目立たない首筋の火傷の痕が首の動きに合わせて揺れると花びらが動いているようにも見える。戦闘中は隠れて見えないところに咲く花。それは漆黒のデュエルダガーに搭乗し奇襲を得意とするレナの特徴を端的に顕している。

「私たちはまだ勤務時間中なのですが」

その眼差しに酔いは感じられない。杯の酒はまだ減っていなかった。レナの言葉にエドモンドはやはり大仰に笑う。

「案ずるな。俺もだ！」

今度ため息をつかされるのはレナばかりではなかった。ファントム・ペインの面々がそろって息を吹く。

「そんなに心配するな。今月でメイン・イベントが上演真っ最中だ。そんな時にステージ脇でしみったれた出し物する奴があるか。知っ

てるか？　２００年以上前の話だが、ビートルズとかいうバンドが街でコンサートをしていた時間帯、その都市の少年犯罪が激減したなんて話があるそうだ」

バーボンをグラスに注ぎながらエドモンド将軍がまだ饒舌である。酔っているわけではないだろう。その証拠に、酒を注ぐ手に震えは見られない。それどころか、その眼差しは不必要と思えるほど力強くレナを見つめる。

「それよりも、俺には不思議でならんね。そんな一大事に、ファントム・ペインはその大半が地球を離れていない」

これが本題か。そう、レナはようやく一息つくことができた。将軍のことを警戒していた訳ではないが、拠点防衛を任務とする者はまず相手の出方をうかがう妙な癖を持つ。隊員たちの中にはそんな話題なら隊長に任せておけばいいとグラスを傾ける者さえ出る始末である。

将軍の言葉は何一つ間違っていない。ファントム・ペインは各国に部隊を１２、約７２機から構成されている。その大半は本国から出ないまま、事態を静観し続けている。国外で活動しているのは大西洋連邦の白銀の魔弾ネオ・ロアノーク少佐の部隊くらいなものであろう。

そう、ファントム・ペインはアルザッヘル基地に参戦してはいないのだ。

「我々はエインセル・ハンター直属の部隊であって、親衛隊ではありません。エインセル・ハンターのために戦い、そして死ぬとしても、エインセル・ハンターを守る義務はないのです」

バーボンを口に流し込みながら、まさか酒の苦みに負けたわけではないのだろうがエドモンド将軍は渋い顔を作る。レナはエドモンドと挟んで座るテーブルにグラスを置く。

「イスカリオテのユダ。この名前をご存じでしょうか？」

「キリスト教における最大の裏切り者だな。銀貨３０枚で主を売り、磔にしたとか」

「はい。しかし、他の多くの弟子が儀典をしたためたようにユダもまたユダの福音書を書いていたことが２００年ほど前に判明しています。いまだもって偽典のそしりを免れぬと聞きますが、そこには意外な事実が描かれていました」

１２使徒の１人であったユダが主を裏切った事実はあまりに有名である。最後の晩餐の人数が１３名であったことから１３は忌み嫌われ、主を処刑した宗教団体はその後２０００年にわたる流浪を強いられた。

それが、歴史上の定説。

「主、イエス・キリストは磔となることで人々の原罪を清めた。イスカリオテのユダとはそのことを理解し、そのためのお膳立てをしただけ、そんな説が存在するのです」

「面白い話だな。裏切り、主を殺した者が、実は最大の理解者だったという話か。実に寓意的だ」

「エインセルさまが求めているのは、まさにイスカリオテのユダな

のかもしれません」

砂漠の夜は深々と冷える。破壊されたＺＧＭＦ－８８８ヒルドルブの巨大な躯の側にＧＡＴ－１３１イクシードガンダムの赤い体が３機分、膝をついていた。円陣を組むように座り、その中央の砂地には火が焚かれている。

南アフリカ統一機構軍に所属するファントム・ペインの面々が火を囲んでいる。

「また砂漠の虎をしとめられなかったな」

ナイフで干し肉をブロックから切り取りながら体を小さくしているのはカイト・マディガン。夜闇の寒さに手が震える。危うく指を切ろうとしてほかの２人に笑われていた。

隊長であるエドワード・ハレルソンは湯気を立てるコーヒーを飲みながら火に当たっている。

「あちらさんも同じこと考えてるだろうよ。まあ、慌てないことだな」

斬り裂きエドの通り名で呼ばれるこの男は、そんな名に似つかわしくないほど屈託なく笑う。

南アフリカ統一機構軍は大規模基地の所有数が少なく、またＭＳ搭載能力を備える戦艦も数少ない。そのため、このように野戦状態で休息をとることは少なくはない。ファントム・ペインから離れた

場所では追加装甲が施されたＧＡＴ－０１デュエルダガーたちがイクシードと同じように片膝をついて座っている。おのおのの焚き火が、鋼鉄の巨人を赤黒く照らし出していた。

エドワードたちが囲む焚き火が小さく音を立てた。放り込まれた薪が弾けた音だ。

「燃料代もバカにならんのだがね」

レオンズ・グレイブスはさらにもう一つ薪を火の中に放り込む。焚き火は弾ける音とともにすぐに薪をその火で取り囲む。レオンズの発言は何かと金に関する話題が多い。だが、守銭奴を意味している訳ではない。使うべき時には使う。それを心得ているからだ。

「まったく砂漠の夜はよく冷える」

レオンズに放り込まれた薪が火を大きくする。場合によっては氷点下まで下がる砂漠の夜を甘く見てなどいないいないのである。

今は夜。ふとエドワード隊長が空を見上げた。つられて、カイト、レオンズの部下２人も首をあげる。

月が綺麗に見えていた。

「４０万ｋｍ彼方の大決戦か。ここからじゃ、見えやしないな」

地球上のどこよりも遠い場所で行われている戦いは、たとえユグドラシルの光でさえ見ることは難しいだろう。

そんな場所に、ファントム・ペインの主であるエインセル・ハン

ターはいる、戦っている。

「隊長はエインセル・ハンターに会ったことがあるんだろ？」

誰もが月を見上げたまま、カイトが何気ない一言を発する。エドワードは吐息を白く答えた。

「俺だけじゃない。他にも大西洋連邦の白銀の魔弾ネオ・ロアノーク。東アジア共和国の白鯨ジェーン・ヒューストン。ユーラシア連邦の灰色熊キサト・ヤマブキ。大洋州連合の赤い悪魔ロウ・ギュール。ファントム・ペイン参加を認められたエースはみんな集められた」

月はいつも地球に同じ面を見せている。それは月の自転と公転の周期が一致し、月が地球を一周すると同時に３６０度回転しているからだ。そのため、月は地球に対していつも同じ面を向けている。

そんな同じ光景に飽きたのか、レオンズは焚き火の管理へと戻る。また一つ、薪が放り込まれた。

「金言は聞けたか？」

エドワードは考える。褐色の肌で表情がわかりにくいにも関わらずその顔の変わりようはおもしろいほどだ。

「そうだな、こんな話を知ってるか？　キリスト教は、作ったのはイエス・キリストだが、広めたのは弟子たちだ。イエス・キリストが十字架にかけられた後、残された弟子たちが伝えたことで今日の発展があるんだそうだ」

「要するに原型は偉人の死後に作られたということか。それで、そのエピソードにどんな価値がある？」

「まるで俺たちファントム・ペインのようじゃないか？　俺たちはエインセル・ハンター直属の部隊に変わりないが、別にエインセル・ハンターのためだけに戦ってる訳じゃない。実際、こうしてここでコーヒーを飲んでるくらいだしな」

そうコーヒーをすするエドワードはもはや月を見てはいなかった。

鉄と毒の森に日差しが差し込み、スクラップの山の上、突き出たモビル・スーツの指に小鳥が止まっていた。

エインセル・ハンター。魔王を倒すために攻めてきたザフト軍を片角の魔女は撃退した。その命と引き替えに。

あの男を誰もが殺せと憎み、誰もが守れと崇める。それほどの価値があの男にあるのだろうか。少なくともソル・リューネ・ランジェは決意を揺らがせていた。赤道同盟代表として世界安全保障機構で徹底抗戦を謳った気概を維持できてはいないのだ。

小鳥が飛び去った。あの日のような大雨さえ降らなければこのボーパールの地も太陽が顔を見せる。恐ろしげな魔女の森ではなくただのゴミ捨て場になる。

あの日のことが嘘のように、しかし、片角の魔女は、セレーネ・マクグリフはもうどこにもいないのだ。

「エインセル・ハンターか……」

乾いた地面。散らばる屑鉄を踏まないように歩く。

年齢はソルとさほど変わらない。財団の御曹司ということでもソルとエインセル・ハンターはよく似ている。では何が、何故ここまでの違いが生まれるのか、ソルは以前訪ねたことがあった。

魔王と出会う前に。片角の魔女に。

あの時、セレーネは軍服を身につけていた。ファントム・ペインの証である黒い軍服を。

「エインセル・ハンター？　そうね……」

椅子の上でくつろいで、セレーネは本を読みながらくつろいでいた。本のタイトルは聞けず仕舞だ。ただ、きっと面白い本なのだろう。セレーネは話をしている最中も本から目を離そうとはしなかったから。

「こんなお話、知ってる？　ある偉人は修行中、悪魔に誘惑されたそうよ。もしも神を崇めることをやめ、私を崇めるのならばここから見える土地すべてをやろう。本当に神がおまえを助けてくれるならここから飛び降りてみせろ。神の奇跡を起こせるというならば石をパンに変えてみせろ」

さてその時、ソルは自分がどんな顔をしていたか覚えていない想像するに、きっと間の抜けた顔だろう。セレーネが言っていることの意味は今でもよくわかっていないから。

「エインセルなら、きっとこんなことを答えるでしょうね。自分の目の届く範囲では満足できない。神は崇めるものであって頼るものではない。石には石の価値がある」

やや大きめの瓦礫を踏み越える。日差しは強く、わずかに体を動かしただけでも汗がまとわりつく。

セレーネは、それでも妙に自信満々であった。ページをめくる音とともに次の言葉が続く。その声は楽しそうでさえあった。

「欲張りな人なのよ。ただ自分の手元にあるものだけじゃ満足できなくて、世界のすべてに手を差し伸べたいくらい。それに、何でもかんでも神様任せにするようないい加減な人でももちろんないわ。そして、私たちファントム・ペインが彼に従うのは、パンで手懐けられたからじゃない」

開けた場所に出た。瓦礫が積まれていない訳ではない。詰まれ方がどれも均等に低く、この場所だけ秩序ある散らかり方をしているのだ。そしてこの場所の地下には使用されることのなかった魔王の力が眠っている。

一つ思い出した。あの時、セレーネは一度だけ顔を上げてくれた。

「理解できない？」

そう、笑いながら。

「まあ、あの人のこと理解できるなんて人はそうはいないでしょうね。でも、これだけは覚えておいて。この世の中には、自分のためでも、誰かのためでもなくて、世界のために死ぬことができる人が

いるってことを」

モチャ・ディック。頭に白い傷跡を持つこのマッコウクジラの名前をご存じだろうか。「白鯨」に登場したモビー・ディックのモデルとなったこの鯨はチリ沖合のモチャ島にて初めてその姿を現した。幾艘もの舟を沈め、その海域を長きにわたって支配した。

しかし、最後はスウェーデン船籍の捕鯨船によってその伝説に幕を下ろした。

どれほど雄大であれ、より大きな力に飲み込まれ消えていく。それが白鯨の一つの真実。何故自分が白鯨と呼ばれるのか、そんなことを、ジェーン・ヒューストンは皮肉混じりに考えた。

スペングラー級ＭＳ搭載型強襲揚陸艦の高い上甲板の上から眺めた海は荒れている。太陽が輝き、雲一つない青空の中でさえこの荒れようである。

海という者はすべてがすべてジェーンを皮肉っているらしい。フアントム・ペインであるはずの自分が参戦を許されずこんなところでただ海を眺めている。だが、心は穏やかではない。晴れ渡った空のように体は苦痛一つなく、しかし心は荒れる。

時折空母の上を吹き抜ける風が体を叩くくらいなものだ。だが、それも皮肉である。

「なあ、ジェーン隊長～」

見ない。振り向かない。そこに何があるか知っている。敢えて語るなら、椅子に寝そべって日光浴を楽しむ若造が一人いるだけだ。マーレ・ストロードはファントム・ペインの隊員としての自覚がまるで足りていない。

「軍服に袖を通している間は態度を改めなさい」

特に黒い軍服を身につけている時は。もっとも、本当に態度が改まることを期待しているわけではない。マーレは口を開けばいつも皮肉と嫌みが飛び出す。以前ラリー・ウィリアムズ首相がトリントン基地に視察に訪れた時も同じであった。

「俺たち、完全に厄介者だな。ラリー・ウィリアムズ首相殿は完全に厭戦気分だし、世論もきれいにまっぷたつだ。カーペンタリア攻略は2度にわたって失敗。3次はオーブも軍を出してくれるそうだが・・・・・・、本当に戦いたがってる奴なんかいるのか？　結局、エインセル・ハンターに戦えって言われてるから戦わされてるだけじゃないのか？」

思いの外風が強く、声を意識して大きくする必要がある。

「では、プラントの主張している地球の民はブルー・コスモスに扇動されている馬鹿だという主張を受け入れると？」

返事はない。マーレはあまり語りたがらないが、彼もまたエイプリルフール・クライシスでは誰かを亡くしているはずなのだ。

プラントは本当に考えているのだろうか。この戦争を始めたのはブルー・コスモスであって、ブルー・コスモスを悪者にさえしていれば解決するのだと。戦争はそんなに単純なものでもなければ、プ

ラントの正義など地球の民は誰も信じていない。

エイプリルフール・クライシスの存在が、この戦争に地球対プラント、ナチュラル対コーディネーターという構図を持ち込んだ。

フィンブル落着阻止を事実上妨害したことで大西洋西岸は甚大な被害に見舞われた。

そんな恨み辛みがブルー・コスモスを悪と言い続け抹殺することで解消されると本気で考えているのだろうか。では試してみるがいい。エインセル・ハンターを殺すことで、貴様等が何を得て、そして失うのか。

「エインセル様はそれほど恐れられているということ。かつて預言者が生まれた時、権威を奪われることを恐れた時の国王は2歳以下の子どもを皆殺しにさせたことがあったそうよ。エインセル様にはそれほどの影響力がある。ただそれだけのことでしょう」

格納庫は意外なほど静かだ。そう、ミリアリア・ハウには思えていた。キッチン・スタッフの間で大西洋連邦軍の上層部が最終兵器を使ったとか、決戦が近いだとかそんなお話で持ちきりだったから、格納庫じゃ大わらわになっているに違いない、そう考えてた。

それなのに、それは違った。こんなこと、以前にもあった気がする。確か、ミューディー・ホルクロフトが戦死した時。

格納庫を訪れたミリアリアが目にしたのは、ずいぶん閑散とした広間の一角でトランプ遊びをしているファントム・ペインの面々だ

った。真剣な様子ー特にシャムス・コーザがーで手札に手を伸ばしているところを見ると、きっとババ抜き。別にポーカーならいいとは思わないけれど、ずいぶん砕けた様子だってことくらいわかる。

今回はアーノルド・ノイマン副隊長さえ混ざっているような有様だ。

「ねえ、ファントム・ペインって、エインセルさんの親衛隊じゃないの？」

とりあえず聞いてみることにした。答えてくれたのはアーノルド副隊長だった。シャムスの手札からカードを引きながら。

「直属の部隊という方が正確だよ。だから、僕たちは命令がなければ動けない。今回は参戦を認めない。それが命令だからね」

よそ見しながら引いたのがいけなかったのだろうか。まずそうな顔をして、反対にシャムスが喜んでいる。

（ババ抜きでどこにババがあるのかわかったら意味ないでしょ……）

この人たちと関わると本当に余計なことばかり考えさせられてしまう。

「でも、大決戦なんですよね？　それなのにエースが参加しないって、何だか……」

それこそ全世界からファントム・ペインが大集結してエインセル・ハンターを守るために獅子奮迅の活躍でも見せるのかと考えていた。

今度アーノルド副隊長の手札を引くのはスウェン・カル・バヤン。まさか手番で話す人を決めているとは思わないけれど。

「ミリィ、君は一つ思い違いをしている。我々はエインセル・ハンターのために戦っている訳ではない。エインセル・ハンターに理念に賛同するからに他ならない」

相変わらずポーカー・フェイスのスウェン。でも、副隊長殿から受け取ったカードを凝視している。もうわかった。確かに表情には乏しいかもしれないが、この人、結構感情的だということが。

スウェンに対してか、それともスウェンの言葉に呆れてしまったのか、とりあえず区別しないままため息をついておく。

「それって、どう違うの？」

「エインセル・ハンターは、必ずしも必要とされていないということよ」

少女の声だった。静かに思えた格納庫も意外と雑音がうるさいらしい。お人形を抱えたネオ・ロアノーク――まだこの名前になじめない――が近くにまで来ていたのに気づくことができなかった。返事をしたのは、もちろんお人形、小型プロジェクターから立ち上がる立体映像の少女の方である。

「真紅ちゃん……」

「エインセル・ハンターは、たとえるなら神像のようなもの。たとえそれが壊されたとしても、神は消えない。もちろん、信仰も。ただ像が壊れたという事実だけだわ」

やっぱり言っていることの意味がよくわからない。わかる人にだけわかることを話す。これが軍人や、それに関わる人の特徴なのだろうか。どうして一言、こうこういう理由で月には行かないと言ってくれないのだろう。随分とまどろっこしい。

誰か説明してくれる人はいないだろうか。シャムスが真剣な顔をしていた。間違いない。まったく役に立たないこと言い出す時の顔だ。

「ところでミリアリア、一つ聞きたい。とても大切なことだ」

とりあえず無視しておく。それでもシャムスは構わず続けている。

「どうして、スウェンにはミリィって愛称で呼ばせてるんだ?」

目の前にカードを持ったまま、サングラスの奥で不必要なほど、本当に不必要な眼光が鋭い。その視線はスウェンを見ている。

「案ずるな、シャムス。俺とミリィには、何もなかった」

そう言いながらスウェンはいつも通りの顔のままシャムスの手札からカードを抜く。その途端、シャムスを睨み返した。どうやらババを引かされたらしい。

(この人たち、さっきからババをシャッフルしてるだけなんじゃないでしょうね?)

愛称にしても以前話をしてくれたことをきっかけに堅苦しいからとお願いしただけだ。

結局、この人たちは役に立ちそうにない。そうなると、後はお人形を抱いている友人だけということになる。

「ねえ、キラ、どういうこと？　どうしてファントム・ペインは戦わないの？」

「詳しい理由は軍事機密にあたるけど、ペトロ、だからかな」

キラ――別にネオでもいいが――は近くのコンテナに腰を下ろすと話を始めた。

「ペトロは、イエス・キリストの12使徒の1人だったけれど、イエス・キリストが捕らえられた朝、夜明けから鳥が朝を告げて鳴くまでの短い間に3度イエス・キリストのことを知らないと答えた。その理由は諸説あるけど、事実として縛を免れたペトロは古代ローマで石打で殺されるまで伝道を続けた。イエス・キリストの言葉を伝え続けた。ファントム・ペインは、ちょうどそんなペトロなんだと思うよ」

ああ、やっぱり同じだ。わかる人にしかわからないことですぐに煙に巻こうとしてくる。

「ま、なんとか間に合いましたわ」

背を向けた大きな椅子の前に座って、キング・タケダは大きな声を挙げた。すぐ隣には同僚であるマール・ストークスとそろってお茶を振る舞われていた。普段、主であるミーア・キャンベルにしか

振る舞おうとしないサラ・タイレルが珍しくご馳走してくれることもキングが上機嫌である理由の一つであるようだ。

「ご苦労様です、キングさん、マールさん」

声は背もたれの向こう側から聞こえてくる。

マールは主からの声に照れくさそうに頭をかいた。

「いえ、お嬢様にそう言っていただけるのでしたらこれくらい」

「お嬢様にはすでにお相手がいるのです。変な気は起こさないように」

マールとキング。2人の前にサラがティー・カップを強く置いた。危うくお茶がこぼれそうなる。途端に男2人の表情が凍り付く。

「なんや、そんなに嫌わんでも……」

「嫌っているのではありません。ただお嬢様を優先しているだけです」

「それでも……」

「文句があるのでしたら、ミーア様スペシャルをご馳走しましょうか？」

それ以上の苦情はなかった。サラがサングラスの奥に見せた底冷えのする眼差し以上に砂糖を大量投入し、紅茶の原型を破壊しつくした飲み物を味わいたくはないと観念したからだ。マールに至って

は両手さえ挙げて、ただでさえ気弱に見える印象を強調している。

とうのミーアは椅子の背もたれに隠れ、姿を見せない。

「皆さんは、エインセルお兄さまのことをどう思いますか？」

砂糖が大量に組み込まれた紅茶を背もたれの向こう側に運びながらサラが答えた。地球での、アズラエル宅で過ごした日々を思い出しながら。

「私がアズラエル家に仕えて１０年になります。当時のエインセルさまはそれはそれは女性に優しく、私たちの間ではちょっとしたアイドルでした。ちょっと近寄っただけでメリオルさまに首にされかけたり、ヒメノカリスお嬢様に追いかけ回されたりしたものですが、今となってはいい思い出……、ということにしておきます」

続いて答えるのはマール。まず紅茶を口に含むと、あれほど砂糖を恐れていた割にストレート・ティーの渋みに表情を曇らせながら答える。かの当主の姿を思い浮かべながら。

「正直なところ、あの人の考えてることなんて僕にはわかりません。ただ、あの人がしようとしていることなら正しいんじゃないかって思いこんで、いつもその通りでした」

最後にキング。こちらは特に何も考えてはいない。

「せやから、今回もできることなんぞないってこっちゃ」

背もたれの後ろから白い指。黒い格調高いドレスの袖口とあしらわれた白いフリルが覗かせる。ミーアの指は、中空に何かの模様を

描くように不規則な動きを見せる。

「昔々、こんな意地悪な質問があったそうです。お聞かせください。現在、我々は重税に苦しんでいます。そこまでして税は納めなければならないものなのでしょうか？　聞かれた人がはい、と答えれば民の失望を買ってしまいます。いいえ、と答えれば王様が兵隊を差し向けてきます。どう答えてもその人は窮地に追い込まれてしまいます。実際、質問した人はそれを狙っていたそうです」

これは、今から２０００年以上も昔のお話。そんな時代に、エインセル・ハンターと同じ生き方をした人がいた。

「ところが、その人はこう答えました。このお金は誰の物ですか？　この国のものです。ならば本来の持ち主の元へ返しなさいと。国に返してしまいなさいと言ったそうです」

「結局税金は払わなあかんちゅうことやな」

キングの言葉に、ミーアの淑やかな笑い声が聞こえてくる。

「エインセルお兄さまはドミナントです。そして、ドミナントはプラントの未来を担うために生み出されました。だから、エインセルお兄さまはプラントに戻らなくてはなりません」

薙払った大剣が扉を斬り裂く。モビル・スーツが通るためのまさに巨人の扉はその分厚い断面を見せつけながら月の重力に引かれて倒れた。６分の１の衝撃が床を揺らした。

別にどうということはない扉だ。とても、魔王の謁見の間に通じてるなんて思えないほどに。

ここには、エインセル・ハンターがいる。

すべてを色を拒絶した白の空間の中に唯一許された黄金。人の姿をして、人の１０倍を超える大きさをして中央にたたずんでいる。これは魔王じゃない。単なる玉座にすぎない。黄金の玉座にすぎない。

魔王はそこにいた。ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムに胸部、開かれたコクピット・ハッチにスーツ姿で腰掛けている。

青い瞳はこちらを見ていた。金の髪はなめらかな光を放つ。その態度は威風堂々。近づくモビル・スーツの姿を生身のまま見つめ続けていた。

大剣を携え、翼持つ黒い天使の姿を眺め続けている。

ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＨガンダムメルクールランペは足を止める。フォイエリヒの前。もしもモビル・スーツが人の大きさなら話をするには遠すぎず、そして近すぎない距離で。すると大きさの違いがよくわかる。フィエリヒは大きく、メルクールランペは小さい。エインセル・ハンターの場所はメルクールランペよりも高い場所にある。

ずっと、この位置関係だった。見上げて追いかけて、届くはずなんてなかった。見えるなんて思いもよらなかった。

位置関係は変わらない。それでも、距離は驚くほどに縮まってい

た。

コクピットから出よう。それが当然のように感じられた。操作をすると、メルクールランペはあっさりとハッチを開いた。コクピットは胸部にあるため、ハッチは斜め上の位置で展開する。差し込む光が、導いていてくれているように思えた。

メルクールランペの胸部から体を出す。ここは酸素で満たされた空間である。ヘルメットを脱いで見上げると、そこにはエインセル・ハンターがいた。確かにこちらを見るエインセル・ハンターの姿があった。

もしもこの世界に天使や神様がいるとしたら、きっとこんな姿をしているのかもしれない。綺麗だとか格好いいだとかじゃない。完璧。そうとしかいいようのない姿で、エインセル・ハンターはこちらを見下ろしていた。

黄金の玉座に座る魔王が、黒い天使に導かれた少年と向かい合う。

「エインセルさん……」

シン・アスカ。

エインセル・ハンター。

母を奪われた少年と、母を奪った男との邂逅は、世界が焼かれるその前に成し遂げられた。

あなたは誰よりも強い人でした。魔王と呼ばれた憎悪も怨嗟も何らあなたを弱くはしなかったからです。あなたは誰よりも美しい人でした。あなたの生き方をどれほどの人が慕ったことでしょう。あなたは誰よりも賢い人でした。死してなお、あなたの思いは世界を守り続けるからです。

だから私はあなたに炎を贈りました。火のように恐れられ、火のように崇められたあなたのために。

その最期を飾る華として。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「わが臈たし悪の華」

エインセル・ハンター。一つの時代の終わりです。

第３４話「わが臈たし悪の華」

王は少年を眺め、少年は王を見る。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダム。黄金の玉座に座る王は穏やかな笑みを浮かべていた。

ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペ。黒い天使に足を支えられて立つ少年は緊張した面もちで王を見上げていた。

同じ母の手で造られたガンダムが両者の出会いに立ち会う。今、世界にいるすべての人が心を寄せる部屋の中で。

「エインセルさん、俺、わかった気がします。あなたがヒメノカリスを戦わせる訳が」

シン・アスカの声は白い壁に吸い込まれ消えていく。外ではまだ激戦が繰り広げられている最中だというのに、ここは静かに少年の声を染み渡らせた。

「あなたも怖いんじゃないんですか？　ヒメノカリスがあなたに愛される対価として身を捧げていて、あなたはヒメノカリスに戦ってもらうことで愛されているという確信を、彼女に与えたかったんじゃないんですか？」

王は答えず、ただ微笑み続ける。決して否定することなく、その眼差しはようやく歩き始めた我が子を見守るようでさえある。

「あなたも俺と同じだ。どうしてヒメノカリスに聞いてあげなかっ

たんです？　戦わなくてもいいって、それでも愛してあげられるってどうして言ってあげなかったんですか？」

責めるではない純粋な疑問。少年は王に問いかけていた。

王は少年に応えた。

「私には狭量で高慢な父がいました。名をアル・ダ・フラガ。彼は優れた能力を持ちながら卑屈であり、絶えず周囲の人に猜疑の眼差しを向けたそうです。他人を信じず、愛せない。そのような男が家庭を育み、子を育てることなどできようはずもありません。男は、こともあろうに自らのクローンを作りだし、それを息子として育てようとしました。ですが、いくら遺伝子を複製したところで、クローンも他人であることに変わりありません。やがて、男は息子としたクローンさえ疑い始めました」

２０年以上も昔の話。プロト・ドミナントと、後に魔王と呼ばれることになる男の昔話。一つの始まりの物語。

「クローンは悩みました。父は、自分たちを子どもとして愛してくれてはいないのではないかと。そして尋ねました。何があっても、私たちはあなたの息子でいられるのでしょうか。父はどう答えたか、私は忘れてしまいました。ただ、それが彼の最期の言葉であったと記憶しています」

アル・ダ・フラガはクローンによって殺害され、アズラエル家の家督は3人の息子たちへと引き継がれることになる。青い薔薇が狂い咲く。その芽生えはこの瞬間に遡る。

１人はムウ・ラ・フラガ。アル・ダ・フラガの息子を皮肉り、ジ

ェネシス発射阻止のために命を落とした。

1人はラウ・ル・クルーゼ。現在はブルーノ・アズラエルに名を戻しているこの男こそ、父が唾棄した失敗作であった。

1人はエインセル・ハンター。自分自身を意味する妖精の名を持つこの男は魔王と呼ばれ、黒い天使と対峙する。

「私はヒメノカリスを失うことが恐ろしい。ただの一言、言ってあげることができませんでした。戦いなどしなくとも、対価など示さなくともあなたは私たちの娘なのですと」

魔王の名に似つかわしくないほど優しく少年へと微笑みかける。

かつて最強であることを望まれ、最強であることを約束されて生まれきた男は立ち上がり、その黄金の髪を指で梳いた。

「答えはでましたか、シン・アスカ？　あなたは復讐者ですか？それとも違いますか？」

時は静かに、まるで止まっているかのように穏やかに流れる。

「わかりません。でも、俺は、あなたを倒す」

昼寝をする巨大な竜の上にいるかのよう。柔らかい日差しに照らされるようにのんびりと、そしてこの安寧は竜の目覚めによって地獄の招来を招くほどに儚く脆い。

「それは叶いません。私を倒すことができるのは復讐者であり復讐者ではなく、敵であって敵ではない者、何より、愛を知る者でなけ

ればならないのですから」

竜が大きなあくびをする。その目覚めが近いことを示して。

エインセル・ハンターは動かない。ほんのわずかにその足がフォイエリヒを蹴り、体が浮き上がる。フォイエリヒは体を上へとずらし、開かれたままのコクピット・ハッチが宙に浮かぶエインセルを包み込むように収容する。

その黄金の輝きは、竜の眼の輝きにも等しい。もはや、平穏は不誠実な言葉によってしか語られない。

「それでも、あなたのしていることは、しようとしていることは間違っています」

シンは体を翻しコクピット・ハッチをくぐり抜ける。シートにつくとともにコクピット・ハッチが閉ざされ、短い暗闇の後、全天周囲モニターが外の光景を映し出す。

黄金のガンダムがすぐ目の前にいた。誰もが認める最強の力が、誰もが最強と認める男の手によって扱われる。この事実は、シンにただただ疑問の言葉を続けさせた。

「どうしてこんな手段しか選べないんですか、あなたほどの人が」

「目的のためには手段を選ばない。それだけのことではありませんか？」

聞かれる言葉がわかっていた。それほど返事は早く、そして、返される疑問も同じ早さを持つ。

「あなたは憎くはないのですか？　母を殺した私のことが。それとも、あなたに力を求めるでしかない母のことなどかまいませんか？」

「わかりません」

何から何までわからない。少年は、ただひたすら王の間を目指し、しかしその熱意は、その目的と意義を考え始めた途端脆くも崩れさった。

だが魔王は目の前にいる。たとえ勇者が伝説の剣を抜き放つことなどなくともその真の姿を現そうとしていた。黄金の神像ではなく、恐ろしいまでの凶暴性を秘めた魔獣の姿を、魔王は今一度さらす。

手が脚へ。足が脚へ。不自然に四方に引き延ばされたその手足は覆い被さるように床へと向けられ、昆虫のそれを思わせる四脚の脚となる。バック・パックが自然と起き上がりその上端には人のものではない鋭い眼が輝きを放つ。バック・パックが抱えるユニットのアームはまだ延ばされていない。その姿は、まさしく獲物を前にした蟷螂の構えに等しい。

3年前ジェネシス内部でただ一度だけ見せたその姿は蟷螂であった。時に最も進化した生物群と称される昆虫界最大の捕食者、黄金の蟷螂であった。

アームが延ばされる。4機のユニットに装備されたビーム・サーベルはそのあまりに高い出力からいびつに曲がり、巨大な光を鎌を形作る。蟷螂でさえ1対で満足する致命的な凶器でさえ、魔王の歓心を買うことはできない。

まさに魔王。まさに怪物である。最大の捕食者が持つ凶暴性、残虐性、残酷さ、そのすべてをただ純粋に研ぎすませばこのような姿になるのではないだろうか。

それはもはや生物ではない。蝶を捕まえるために鉄をも引きちぎる腕力は必要とされない。飛蝗を捕らえるために成層圏を飛び越える必要などない。ではあまりに過剰とも言える力を備えたものを何と呼ぶ。

捕食者ではお話にならない。王者では物足りない。支配者、暴君、覇者、皇帝。現実に存在する王の称号そのすべてが役不足。

だから人は知らないのだ。この男を、この存在を魔王と呼ぶ以外に術を知らない。実在も存在もしない、空想上の称号。これでなければ、こう呼ばなければ他に呼ぶ術を持たない。

この男は魔王。人の想定するすべての上を行く存在なのだから。

「この力、この姿とともに、私はすべてを斬り刻む」

月の表面に十字の輝きが走る。ビームの輝きだと誰もが気づいた時、それは爆発に姿を変えた。大気のない月面に音でもなく空気の振動でもなく純粋な衝撃が叩きつけられる。

アームストロング、コリンズ、オルドリン。あなた方の記した足跡はこうも儚く吹き飛ばされる。

爆発とともに吹き出す光の中、メルクールランペの姿があった。

飛び上がったのではない。それこそ舞い上げられたように姿勢を崩したまま、月の空へと打ち上げられる。翼を思わせるバック・パックを輝かせるとともにメルクールランペがその姿勢を取り戻した頃には、月面の吹き出し口ははるか下に見えていた。

月の静寂があってこそなお轟くように錯覚させられる。切り開かれた月面ははいまだ光放ち、爛れた熱が月は這う。だから魔王なのだろうか、それとも、魔王がいる故か。

それは、地獄の門以外の何者でもない。

地獄から帰還する。その足は黄金にして4脚。月を踏み、月を焼き、その腕は黄金の剣。異形の魔王が地獄から這いだした。

まがまがしいほどに目映い輝きが揺らいだ。ほんのわずかフォイエリヒの姿が揺れたようでしかない。ところが、全身を包むミノフスキー・クラフトの推進力は瞬きほどの一瞬でフォイエリヒを漆黒の空へと押し上げる。

腕は4本にして、それぞれが莫大な出力を誇るビーム・サーベルを構える。脚もまた4本。それもまた、ビーム・サーベルを発していた。八重の殺意がメルクールランペへと襲いかかる。

それは剣術と呼べるものではなかった。ただ輝きが、黄金が荒れ狂っているようでしかない。これまで8本もの剣を同時に操った剣客は存在しない。殺意。それをこれほどの次元で振るった者など存在していないのだ。

光そのものが殺意を持つように、輝きそのものがすべての破壊を望むように、光がメルクールランペへと押し寄せる。

メルクールランペは、光をただ1本の大剣でさばこうとあがく。

メルクールランペの振るう大剣が一つの光の鎌を防ぐと、すでに第2、第3の光が刀身には突き立てられていた。そして、フォイエリヒはまだ5つの爪を持つ。後ろへ飛ぶ。その動きでメルクールランペが攻撃を避けたとしても、フォイエリヒは果てしない。光はすぐさま追いすがり、メルクールランペを呑み込もうとする。

フォイエリヒを相手にすることは、まさに光と敵対するに等しい。何より速く、何より目映く、何より膨大な熱をもって世界を睥睨する。

苦し紛れ。そんな一撃をメルクールランペは大きく振りかぶる。フェイズシフト・アーマーさえたやすく斬り裂くその剣の一撃は、しかしフォイエリヒを捉えることさえできない。

ハウンズ・オブ・ティンダロス。悪夢の猟犬を手懐けた黄金のガンダムは、斬撃も黒い天使さえも通り抜けてメルクールランペの後ろへと通り過ぎた。

この光景を説明する術はない。

接近する2機のモビル・スーツがいた。1機は剣を振りおろし、2機は確かに衝突したはずであった。それが結論であり、2機は互いに傷一つなく通り抜けたことが結果。これを、人は説明できない。

メルクールランペが勢い、振り向きながら剣を薙ぎ払う。絶妙な間合いと呼吸。誰もがフォイエリヒが胴を斬り裂かれる姿を確信する。そしてそれは裏切られる。剣は確かにフォイエリヒを切断した

はずであった。しかし斬れてはいない。

別方向からビームが次々降り注ぐ。防衛線を突破したザフトのＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダムが数機、遅らばせながらフォイエリヒへと襲いかかった。ビームの狙いは正確である。よって、フォイエリヒを破壊できない。結果が予測を愚弄し、人は目の前の現実を受け入れていく。ビームは当然のようにフォイエリヒを通り抜け、月面にいくつもの火柱を打ち立てた。

フォイエリヒは撃墜できない。その厳然たる事実は、人を蝕んでいく。

メルクールランペが斬りかかる。全身のミノフスキー・クラフトを輝かせ、その一撃は極限と言えるほどの速度を見せる。よって、フォイエリヒは撃墜できない。メルクールランペは何事もなく通り抜け、フォイエリヒは何事もなくそこにいる。

インパルスがビームを乱射しながら接近する。もはや予想するまでもない。ビームはフォイエリヒを通り抜け、月に火の花を咲かせ続ける。

非現実的。あり得ない。夢幻。それが目の前の現実に現れた以上、人はそれを受け入れ、予測を変えざるを得ない。だが、果たして人に魔王を知ることなどできるのだろうか。予測。それさえ、魔王の見せた甘い幻でしかないのだ。

それは、インパルスが次々サーベルを抜き放ち、フォイエリヒめがけて加速した時に起こった。剣はかわされ、インパルスは次々に斬り裂かれる。これが予想。

だが、現実は違っている。

フォイエリヒはインパルスに目もくれず、再びメルクールランペへと輝きを浴びせかけた。幾重にも重ねられた斬撃はすでに光をそのものとしてメルクールランペへと殺到する。

その時のことだ。しつこくフォイエリヒを追っていたインパルスが突然胴を裂かれた。別のインパルスは縦に割られた。攻撃をされた。そのことには何ら誤謬はあり得ない。事実、インパルスは撃墜されている。

だが、果たしてそれを攻撃と呼んでよいのだろうか。フォイエリヒはただメルクールランペに攻撃を続けているだけである。払った手が偶然虫に当たった。そんな攻撃の形態さえ持たぬ致命の力がインパルスを払った。ただそれだけのこと。

メルクールランペは後ろへ、後ろへと逃げながら迫りくる光の刃を受け止め、受け流し、さばきながら月面を擦るように後退を続ける。わずかに光がかすめた。それだけで月面は爆ぜ、フォイエリヒが突き進む道そのものが業火の絨毯を敷き詰める。

この魔王に率いられた地獄の行進のただ先で、メルクールランペはそのすべてを委ねる剣によってすべての猛攻を防ぎきっていた。

それが、少年の心に疑惑の種を植え付ける。

（どうして……、俺、生きてるんだろう……？）

エインセル・ハンターの力が、魔王の暴威がこの程度のはずがない。シンに防ぎきることができることが信じられなかった。

一瞬たりとも気なんて抜けないはずだった。それが、こんな余計なこと考えてもフォイエリヒの刃はメルクールランペを、シンを貫かない。

メルクールランペが振るっていた大剣が大きく跳ね上げられた。モビル・スーツの全長ほどもある剣が軽いはずがない。剣に引っ張られる形でメルクールランペが大きく仰け反りながら後退する。

必死に体勢を立て直そうとしても、間に合うはずなんてない。崩れた構えのまま、フォイエリヒが、確実な死が膨大な光の姿を借りて追いついた。

全身を串刺しにされたような錯覚が心を焼いた。全身を貫くはずだった刃は止まった。幾本ものビーム・サーベルが急所を目前にして止まっていた。

寸止め。

エインセル・ハンターには初めからシンを殺すつもりなんてなかった。

（一体、俺何回殺されてたんだ……？）

もしもエインセル・ハンターが本気であったとしたなら。

喉元に剣を突きつけられているにも等しい。そんな距離では、モニター一杯にフォイエリヒの姿が見えていた。とても大きい。ただ

でさえ1．5倍もの大きさの違いがある。それが、今は何倍にも大きく見えていた。

「勝てる訳なんて……」

それでも腕はまだ戦うつもりなのか、操縦桿を握ったまま離そうとしない。だからと言って戦えるはずなんてない。腕にはまるで力が入っていない。心も体も、戦うことを放棄していた。

フォイエリヒが離れてもメルクールランペを動かすこともできない。そんなシンの姿に呆れ果てたのか、フォイエリヒはそのまま飛び去ってしまった。

もはや抜け殻のように、動くことさえやめてしまったシンを残して。

フォイエリヒガンダムのことはもう目でさえ追ってない。どこかに行ってしまって、それでもシンはまだメルクールランペを動かしさえできない。

あれからどれくらいこうしていただろう。いつの間にか、操縦桿から手は離れていた。メルクールランペは月の上に立つ彫像みたいに動かない。何も見てしまわないようにしていると、やっぱり月の上は静かだった。

（俺は、何がしたかったんだろ……？）

何となく母さんの仇がとりたい。それは確かヒメノカリスに動機になていないと否定された記憶がある。

（じゃあ、何なんだ……？）

どうしてこんな場所まで、月にまでエインセル・ハンターを追ってきたのだろう。敵にもらった力を使ってまで。

どうしてここにまで来てしまったのだろう。ほんの４年前まで、ただの子どもだったはずなのに。

あの日、すべてが変わってしまった。母が死に、その時からすべてが変わってしまった。

「母さん……」

この言葉が何かを引き起こすきっかけになるとは思わない。本当に突然のことだった。

コクピットに光が満ちた。コンソールというコンソールが輝きを放ち、光は色とりどりに変わっていく。光が踊って歌っているみたいにめまぐるしく光が変化を繰り返す。それが終わったのはすぐのことだった。突然光が止んで、代わりにシンの目の前にこれまでとは異質な光が集まり始めた。

似たような光をこれまでにも見たことがある。翠星石を形作る光も、これと同じ色をしていた。

ゲルテンリッターが姿を現そうとしている。シンの予想を証明する形で、光は少女の姿を成す。

黒いドレスがまず目に入る。メルクールランペと似た花びらを思わせるロングスカートに、所々黒薔薇を模したアクセサリーが、全

体を黒い薔薇を思わせる印象に整えている。透き通りそうなほど白い肌にはゲルテンリッターに共通している。流れるような髪も白く、ゆっくりと開かれた目は、やはり赤い色をしていた。

ゲルテンリッターは誰を見ても本当にお人形のようだ。整った顔立ちをしていて、簡単に抱えてしまえるくらい小さくて。

そんな顔が急に歪んだ。口の端を釣り上げ、瞳は見開かれる。次の瞬間、シンの目に映ったのは靴底だった。

「うわぁ！」

思わず両手で顔を覆ったものの、よくよく考えてみると単なる立体映像にすぎないこの黒薔薇の少女にシンを蹴ることはできない。それでも、シンが顔から手をどかした後も少女はシンを踏みつけようと足の底を何度もシンへと叩きつけていた。

「クズ、グズ、なんてみっともない！」

そもそも大きさもまるで違う。いくら蹴られても堪えるはずがないと、防ぐことよりもシンはシートに座り直すことを優先した。

「いきなり何なんだよ……！？」

シンのことを罵倒しながら足蹴にし続けていた少女は、くるりと体を翻すと適度な距離をとった。ゲルテンリッターはコクピット内であれば自由に動き回れるらしい。

間違いなくメルクールランペに宿る少女はシンのことを見ながら笑っている。妖艶とも、どこか残酷さだとか邪悪さを含む笑みは、

その瞳の色と相まって気味の悪いほど綺麗に見えた。

「私は水銀燈。お母様に光を与えられた第1ゲルテンリッター。誇り高きメルクールランペの心よぉ」

どこかシンのことをからかっているよう――いきなり足蹴にしてくるくらいだ――に水銀燈は笑っている。

「お母様は言われたわ。エインセルが選んだ人間をマスターになさいと。それがこれ～？　悪い冗談ねぇ」

翠星石とは別の意味で扱いずらそうだ。でもきっと、同じくらいシンっが必要としている情報を持っているはずだ。

「水銀燈は知ってるのか？　エインセルさんがどうして俺なんかをゲルテンリッターに乗せたのか？」

「さあ？　興味ないわ。私たちは兵器よぉ。主が命じた敵を倒し、物を壊すそれだけの存在なんだから」

シンの必死さがおかしいのか、それともこれが性格なのか、水銀燈は楽しげにさえ見える笑い方をする。シンは笑う気にさえなれない。戦う理由が未だに見つけられず、戦うことさえ放棄してしまっている。自分のすべきことがわかっている水銀燈のことがうらやましくさえ思えた。

結局、シートの上で体を小さくして震えていることしかできない。

「俺にはわからない。何をすべきなのか、何がしたいのかも……」

水銀燈が笑う。今度はずいぶん明るい笑顔で、その顔を見た途端、シンは全身が外へと吸い出される力に襲われた。いきなりハッチが開いたのだ。加圧されているコクピット内の大気が真空へと吸い出されるまでのわずかな間、シンは宇宙に放り出される恐怖を感じて過ごさなければならなかった。ベルトがなければ今頃月の上を転がっていたかもしれない。

パイロットを危うく放り出しそうになったのに、水銀燈は笑っている。抗議するほどの気力は持てない。

「水銀燈からとっとと降りなさぁい。あなたのような臆病者、私にはふさわしくないわぁ」

冗談だとか、厳しい激励とかじゃなくて本気なのだろう。ハッチは開かれたまま。水銀燈の肩越しに戦闘の光がはっきりと見えていた。

シン・アスカは、メルクールランペのパイロットとは認められなかった。それだけのことで、当たり前のこと。それでもシンを奮い立たせたのは、これまでにもシンをつき動かした謎の衝動であった。

とっくに吸い出しは終わっている――大気がなくても水銀燈の声が聞こえているのはヘルメットの通信機に直接語りかけているからしい――のに、シートから手を離すことができない。そんな臆病な態度のまま、それでもシンは声を張り上げた。

「ち、ちょっと待ってくれ！」

「どうして？　あなた、もう戦うつもりはないんでしょ。それなら、水銀燈に乗ってる必要なんてないじゃない。兵器なんて必要ないじ

ゃない」

「でも……」

声はすぐに萎んでしまった。自分でもどうしてしがみついてるのかわからない。答えなんてなかった。

「あなた、一体どうしてここにいるのぉ？　エインセル・ハンターと戦うため？　それなら戦いなさい。こんなところで震えてないで！」

（戦えないからここにいるんだ……）

エインセル・ハンターに勝てるはずなんてない。何をしたいのかもわからない。それでも、何かしなきゃいけないことがあるように心ばかりが焦って仕方がない。そして焦れば焦るだけ、何もできない。

水銀燈に見下ろされたまま、シンは自分の足を抱いた。いつの間にか、ハッチは閉じられていた。しばらくこうしていた気がする。呆れてものも言えないのか、水銀燈は話かけてこない。

音なんて元々届くはずがない。閉じられたハッチは外の様子さえ閉ざして、モニターを眺める気にもなれないから何も見ない、何もしない。ただ2人きりの空間の中で時間が音も姿もなく流れていく。

仕方ないからシンは話始めた。

「俺、母さんがいたんだ。でも4年前に死んだんだ……。エインセル・ハンターは、母さんの仇なんだ……」

C．E．７１年８月に行われた大西洋連邦をはじめとする連合軍によるオーブ侵攻作戦は主戦場となったオノゴロ島で民間人に多数の被害者を出した。シンの母、マユ・アスカもその１人だ。港へと逃げている途中、流れ弾だったのか、それとも爆発したモビル・スーツだったのか。炎が避難民を包み込んだ。焼け焦げた臭いが充満する中で、シンだけが助かった。頬に、炎の傷跡を残しながら。

その作戦の総指揮は、エインセル・ハンターが執った。

「母親の仇を討ちたいの？」

「いや、どうなんだろ。俺、母さんのこと好きだったのかな？　いつも怖かったんだ。母さん、俺のこと、別に愛してるとかじゃなくて、単に優れた子どもがいるって言うステータスが欲しかっただけなんじゃないかって」

母はよく他の母親にシンのことを自慢していた。運動もスポーツもできて親の言うことをよく聞く聞き分けのいい子だって。それは誇らしげに。自慢の息子だと。

別にシンでなくてもよかったんじゃないだろうか。ただ、自慢できる子どもでさえあれば。自慢できる子どもしかいらなかったんじゃないだろうか。

シンはより深く自身の足を抱く。

「別に仇なんて討つ義理なんてないんじゃないかって……。どうせ無理だしさ……」

エインセル・ハンターに、勝てるはずなんてなかった。

「下らない！」

強い声が聞こえた。まだ付き合いの浅い水銀燈がこんな声を出すなんて思えなくてつい顔を上げて見ると、水銀燈は瞳を鋭くシンを睨みつけていた。

「性根まで臆病なのねぇ、お前は！　怖いんでしょ。愛しても愛されないことが。お母様を愛してる。でも、愛されてなかったらみっともない。そう認めてしまうことができないだけでしょう！」

水銀燈は何をこんなに怒っているのだろう。瞳を大きく見開き、その顔は明らかにシンへの怒りを湛えていた。

「私たちは兵器よぉ。でも、そのことでお母様を恨んだことなんてないわ！　お母様が、私たちのために泣いてくれたからよ。それ以上は何も望まないわ！」

きっと水銀燈は母親のこと、設計開発してくれた人のことが好きなんだろう。ゼフィランサス・ズールと言う希代の天才のことが。その人がしてくれたことが。

でも、シンは違う。水銀燈とは違う。

「でも母さんは俺には……」

「あなたに何をしてくれたの？」

水銀燈から目をそらしのは後ろめたさとかじゃなくて、ただ、昔

のことを思い出してみたかった。

「母さん……、仕事人間でいつも家を空けてたけど、俺の誕生日の時は無理してまで帰ってきてくれたっけ。普段外食ばかりで料理なんてしないくせにケーキ焼いてくれようとしてさ、スポンジを焦がしてた……」

あの時の母さんのばつの悪そうな顔に、つい笑ってしまった。

「俺がテストでいい成績をとったら誉めてくれた。そのことは、嬉しかった……」

母さんは本当に優しくしてくれていた。シンはその優しさを失うことが怖かった。

「オーブが攻められた時はさ、家の中でじっとしてた。そんな時、母さんが血相を変えて帰ってきて、俺の手をとるなり逃げ出したんだ。あの時は本当に怖かった」

詳しいことは今でもわからない。ただ、モルゲンレーテ本社に爆弾が仕掛けられてるだとか、上層部がオノゴロ島を放棄することを決めたとか、大人たちが口々に言っていた。

「他にも逃げてる人が何人もいて、俺も母さんと一緒にその人たちの間を走ってた。そんな時、流れ弾か何かが落ちてきて俺たちを焼いたんだ」

駄目だ。あの時のことを思い出すとどうしても涙が出てくる。

それは怖かったから。人なんて簡単に死んでしまう。高熱に焼か

れるとタンパク質は変質して、色を変える。人の体とは思えない人や部分があたり中に散乱していて、肉の焼ける臭いが充満していた。

（3年は、肉が食べられなかったな……）

涙を拭うためにはヘルメットが邪魔だった。胸の前で抱えるようにして脱いで、ノーマル・スーツの袖を顔に擦りつける。

「みんなみんな、焼け死んだ……。母さんも……」

母さんも焼けた。黒こげで、もう人としての部分なんてシルエットくらいしか残ってなかった。

涙を拭う手が、頬に痛みを与えた。左頬のあたりだ。そこには、4年前につけられた痣がある。あの時、シンはこの傷を受けた。それでも、生還した。おびただしい死が敷き詰められたその中から。

母さんは全身を焼かれたのに。

あなたはお母様に愛されていると思いこみたいだけ、そう、ヒメノカリスは言っていた。

お母様はあなたに何をしてくれたの、そう、水銀燈は聞いてきた。

「母さん……」

荒れ狂う炎の中、どうしてシンだけが助かったのだろう。すぐ隣にいた母さんは死んだのに。まるで、シンに向かうべきだった炎と熱まで引き受けたみたいに。

痣に伝った涙が、傷にしみた。

「俺は……、俺は馬鹿だ……」

考えればわかるはずのことだった。それから目をそらし続けた。母への疑いは黒い霧となってシンの心を覆っていた。愛されていないかもしれないという恐怖が単純な真実を見ることを拒み続けてきた。

母は、マユ・アスカは庇ってくれたのだ。シンのことを。燃え盛る業火から、息子であるシンのことを。

「母さんは、命がけで俺のこと愛してくれたのに……。身を挺して俺のこと助けてくれたのに……」

疑いのまなざしを向けてしまった。そんなもの、何の意味もない。たとえ母の愛が優れた息子への愛着でしかなかったとしても、シンは報いなければならない。その命をかけて愛を示してくれた。

今ならわかる。水銀燈が怒った理由と、言っていたことの意味が。

シンは何をした。母の愛を疑い、その献身を否定し、ただ自分を慰めてばかりいただけだ。

「俺は……、俺は……」

本当に馬鹿だった。涙で荒れた呼吸を無理に戻す。そのために大きく息を吐いて、涙は無理矢理拭ってやった。もう大丈夫だ。今、泣いてちゃいけない。

胸の前で抱えていたヘルメットを掴む手に力が戻る。

「水銀燈、俺は、もう一度エインセルさんに会わなきゃいけない」

「復讐のためぇ？」

水銀燈の胸を指す言葉ももう大丈夫。

ヘルメットをかぶりなおした。指を動かしてみてグローブと指に変な隙間が生じてないか確認する。少し顔を上げただけで、月の空はまだまだ華々しく戦火が飛び交っていた。まだ戦いは続いている。

「多分、違う。俺も、きっと心のどこかで母さんが助けてくれたこと、わかってたんだと思う。だから、死にそうな時、それでも必死に生きたいって思ってた。母さんが助けてくれた命だから」

操縦桿を握る。それもできた。ついさっきまで、震えた手で握るしかなかったのに、今はしっかりと掴むことができた。エインセル・ハンターを倒す必要なんてないのだから。

「仇をとることだって、結局、ヒメノカリスが言ってた通りだ。ただ、自分は母さんに愛される資格があるからって思いこませるためだったんだ。俺はもう、母さんの愛を疑わない。母さんを愛してるってはっきりと言える。俺は、母さんの仇をとる義務も必要もないんだ」

「それでもエインセルに会いたいの？」

「ああ。俺は、やっぱりエインセルさんをとめなきゃいけない。ザラ大佐の時もそうだった。民間人を、戦えない人が犠牲になること

が許せなかった。それが許せなくて、エインセルさんにその気持ちをぶつけた。そしたら、君を与えられた」

シンにすべきことは、エインセル・ハンターを止めること、ただそれだけ。それならば、エインセル・ハンターを超える力なんて必要ない。

「俺は母さんをエインセルさんに奪われた。でも、俺はそれとは別にエインセルさんをとめたい。止めなきゃならないんだ。水銀燈、俺に力を貸して欲しい。エインエル・ハンターを止めるために」

シンの真摯な訴えを前にしても、水銀燈はコンソールに腰掛けたまま笑っていた。赤い唇から漏れるような笑い声が徐々に大きくなって、仕舞には耐えきれなくなったように水銀燈は大きな声で高笑いをし始めた。おかしいというより愉快そうに、滑稽と言うより満足げに。

「お母様が言っていた通りね。この水銀燈のマスターになる人間て」

水銀燈がコンソールから飛び立つと、ゆっくりとシンの前にまで移動した。その鋭い眼差しには、今は厳しさが宿っている。

「名乗りなさいシン・アスカ！　水銀燈を従える者の名を！　宣言なさい、輝く光の翼の主と！」

「俺はシン・アスカ。俺は、輝く光の翼の主！」

「翠星石、あの光は……？」

アスラン・ザラが目撃した光景は、ビームの発射口。その上を円を描きながら飛行する天使の姿であった。背中に光輝く翼を背負い、ゆっくりと円を描きながら飛んでいる。

「お母様が水銀燈に与えた力……。輝く光の翼……」

優雅とも言える輝きが、しかし意味するものは俊足。巨大な発射口よりもさらに大きな旋回半径をわずかな時間で回っている。遠くからでは緩慢にさえ見える動きは、その実、この戦場の誰よりも速い。

天使が、光の翼を広げて飛んでいた。

「この、力は……？」

「ミノフスキー・ドライブ・システム。Ｉフィールドを翼状に展開することで莫大な推進力を生み出す水銀燈にのみ与えられた力よぉ。ゲルテンリッターにそれぞれ一つずつ与えられた、お母様の力」

そう、ガンダムメルクールランペの背中には大きくて、それでもとても澄んだ輝きを持つ翼が現れていた。翼のように思えていたバック・パックは言ってしまうなら鞘でしかなかった。メルクールランペの本来の姿は、光の翼を持つ天使の姿。

ミノフスキー・クラフトは表面積に比例して推進力を増す。翼ほど大きな表面積を持つミノフスキー・クラフトは、モビル・スーツに搭載するには破格の推進力を誇っていた。

光景が違っていた。大きなものが小さく見えた。速いものが遅く見えた。

ユグドラシルの発射口が眼下に見えて、そんな巨大な穴さえメルクールランペはたやすくぐるりと回ってしまうことができる。

戦っているすべてのモビル・スーツの動きが遅くさえ見えた。きっと、どの機体もメルクールランペに追いつくことなんてできない。

装甲ほどの重さもなく維持されるミノフスキー・クラフトの膜は余剰エネルギーをビームとして輝かせながら、膨大な推進力を生み出している。それは通常のスラスターのように推進剤の燃焼速度によるラグが機体を揺らすこともなく、とても優しくシンの体を加速させていた。

その体を、目的とする場所にまで運ぼうとしていた。

それは月の上。インパルスガンダム、セイバーガンダム、ヅダにゼーゴックの残骸が散らばっている。離れた地点では撃沈されたナスカ級が月面に突き刺さっている。ザフトの墓場とも言えるその場所に、黄金の墓標がたたずんでいた。

ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムが傷一つない姿のままで、メルクールランペの着地を待っていた。光の翼を広げたまま、メルクールランペが月の砂を踏みつけた衝撃を体で感じた。

ガンダム同士が向かい合う。この人と、エインセル・ハンターと会う時はいつもこうだった。周りに死が散りばめられ、死の臭いが充満している。

モニターは戦闘中であるにも関わらず、映像を出力さえして2機のガンダムの通信を繋いだ。

「水銀燈、あなたはシン・アスカをマスターに選ぶのですか？」

白いスーツ姿にヘルメットなんてつけていない。まるでモビル・スーツのコクピットの中にいるとは思えない出で立ちで、エインセル・ハンターがシートに優雅に腰掛けていた。

「お母様が選んだのよ。この男を、あなたの願いを叶える存在として」

「よい顔をしています。とてもよい顔になりましたね、シン・アスカ」

涙で汚れた顔がそんなにいいものだとは思わない。それでも、エインセル・ハンターの存在感はシンに誇りを与えてくれる。これほどの男が認めてくれたのだと。

シンは、ようやく、エインセル・ハンターの前に立つことができた。

「エインセルさん、こんなことはもうやめてください。あなただってきっとこんなこと望んでないはずだ。レイ隊長が言ってました。ユグドラシルが始めにアプリリウス市を狙わなかったのは実験が不完全で精度が十分でないからだって。でも、それなら要塞は4回狙って、確実に間に合わせることのできた5回目で狙えばすむだけの話です。それでも、あなたは要塞を破壊しただけでアプリリウス市を、死ななくてもいい人たちを狙うことはなかった」

本当にアプリリウス市を破壊したいなら逃げ回っていればいい。何も襲いかかる敵を相手にする必要なんてないのだから。

「あなたは、アプリリウス市を狙うつもりなんて元からなかったんだ」

エインセル・ハンターはどこまでも優雅に、その微笑みは優しげでさえある。

「やはり、あなたと私はよく似ています。母を殺したあなたが私であり」

「父を殺さなかったあなたが俺なんだ」

当然のように、シンがエインセルの言葉を引き継いだ。言葉などなくとも、互いが理解できる。シンが目指す先にエインセルはいる。なのだとしたら、2人は同じ方向を見て歩いているということなんだから。

「シン・アスカ、復讐者にして復讐者ではない者に。敵であり敵ではない者に。何より愛を知る者に、私は倒されたいのです」

「それが、あなたの償いだからですか」

「復讐者では駄目なのです。それは新たな憎悪を上書きするでしかありません。せめて私の死は一つの憎悪を道連れとしなければなりません。私は、復讐者に倒されてはなりません。ですが、復讐者に倒されなければならないのです」

「敵でなければならないのは何故ですか？」

「それはいずれわかることでしょう。ザフト軍曹長であるあなたが私を越えたその後に。そして、あなたほど私を理解していただけた者は、友を除いて他にない。そして、愛を知る者に、私は希望の燈を託したい」

「俺は復讐者です。あなたに母を奪われたからです。でも、俺は復讐のために剣を持っているわけじゃありません。俺はザフトに所属するあなたの敵です。でも、俺は人としてあなたを止めたい。そして、俺は、母さんを愛しています」

シンは、たった今この瞬間に、エインセルが望むすべての条件を満たしていた。

「もうやめてください、こんなことは。あなたがやめてくれれば、俺はあなたと戦う理由さえないんだ」

「私の死は贖罪であり、罠であり、そして必要なのです。世界が、その大いなる過ちに気づくために」

気迫というものが存在することを初めて知った。威嚇されているのではない恫喝されているのでもない。ただエインセル・ハンターは微笑んだまま、シンに体中の筋肉が緊張していくほどの重圧を浴びせかけてくる。

「シン・アスカ」

ただ語りかけられただけで、体中の血液が沸騰したように体が熱い。体を動かすとすると筋肉が悲鳴代わりに苦痛を与えてきた。

「あなたは私とよく似ています。ですが、あなたは私にはなりません。なってはなりません。父を殺し、血で血を購う術しかなかった魔王になぞなってはなりません」

モニターが消えた。水銀燈も笑うことをやめ、その赤い瞳を真剣に目の前のフォイエリヒに送っている。

黄金の魔王が動き始めた。ビーム・サーベルが苛烈な輝きを放ち、装甲がさらなる輝きを放つ。何から何までもが輝きを放つ。

「私が踏み外した道を、あなたは歩いてゆきなさい。人を愛する心と共に」

エインセル・ハンターが、魔王が光を操る姿を、シンは動かず眺めていた。その太刀筋の一つ一つを、輝きの一つ一つを、フォイエリヒガンダムがわずか数瞬の間にメルクールランペを通り抜けるまでの間眺め続けた。

フォイエリヒは後ろへと抜けて行った。メルクールランペは傷一つない。エインセル・ハンターは見せたのだ。フォイエリヒの持つ唯一絶対の欠陥を、エインセル・ハンターが敢えて残した瑕疵を。

「シン。今のあなたなら見えたはず。刻の傷が」

シンには確かに見えた。たった一つだけ、フォイエリヒを撃墜する手段があることが。そして、エインセル・ハンターは撃墜されることを望んでいるのだと。ただ一つ、フォイエリヒを撃墜できる方法をシンに託すことで。

それならすべきことは決まっている。

「水銀燈、力を貸してくれ！　俺は、この人を倒さなきゃならない！　倒してあげなきゃならないんだ！　俺が背負わなくちゃいけないんだ、エインセル・ハンターの業を！」

背中合わせに立つ2機のガンダム。まず、漆黒のガンダムが飛び上がった。高く、高く翼をさらに輝かせ飛んでいく。その光は軌跡となってやがて月の空に輪を描く。大きく輝く天使の輪を描く。

天使の輪の中でメルクールランペは加速を続けていた。モビル・スーツの限界を超えて、ミノフスキー・ドライブに身をゆだねたままその姿は光の中へと溶けていく。

その時だ。フォイエリヒガンダムが天使の輪の中心を通り抜け、上昇したのは。輪をすぎて、さらに高く。

すべての準備が整おうとしていた。十分な加速。突撃できるだけの距離と位置。そして、シン・アスカの覚悟。

「いきなさい。シン・アスカ！」

ゲルテンリッターの声。光の輪が唐突に乱れた。一筋の光が輪から抜け落ちて月面を目指した。その輝きは突如方向を変えると、フォイエリヒが通り抜けた道筋を追うように光の輪をくぐり抜ける。

光と光。

フォイエリヒは8の刃を振りかざし、前後左右すべてを切り刻む斬撃を重ね、束ね、光の瀑布として迎え撃つ。

メルクールランペはただ飛んだ。早く、まぶしく、光の矢となったメルクールランペが向かい撃つ。

それは呆気ないほど一瞬の出来事であった。滂沱な光の洪水を、たった1本の矢が貫いた。

人が認識できないほどの一瞬のことだった。しかし、シンは確かにエインセルの声を聞いた。

「ヒメノカリスのことを頼みます」

現存するすべての物質を斬り裂くことを許された大剣を構えたメルクールランペ。その遙か後ろには、胴を両断されたフォイエリヒがわずかな時間その姿をさらした後、爆発し果てる姿があった。

乳白色の闇の中、見えるものは何もない。ここがどこなのかわからない。つい今し方までしていたことさえ曖昧なまま、しかし彼の心は落ち着いていた。穏やかなほどに。

ここは、自分の姿さえ曖昧になってしまう。それでさえ、彼は気づいた白い闇が揺らめく向こう側、友が迎えに来たのだと。

「もっとゆっくりしててもよかったんだぞ」

誰よりも軽口を好み、誰よりも人のために生きた友はきっと腕組みして笑っていることだろう。

「私は十分に生きました。何より、私はあまりに多くの命を奪ってしまいました。もはや、世界に魔王は不要なのです」

友が肩をすくませる。どこか呆れたような吐息が漏れ聞こえてこようと、しかし友は声の調子を朗らかで、剛毅とも言える態度を崩そうとはしない。闇の中で振り返りながら友は手で合図する。

「道案内は任せとけ。何なら、メリオルが来るまでの間、綺麗どころ紹介してやろうか」

「遠慮します。私が妻と呼ぶのは、彼女だけです」

友につれられ、3年遅れの歩みを始める。

彼は妻のことを思い描いた。財団の御曹司と令嬢。政略結婚でしかない始まりから愛し合った女性のことを。たえず死臭を漂わせる夫にそれでも尽くしてくれた女性のことを。

「メリオル。あなたは私にはすぎた女性でした」

彼は娘のことを思わずにはいられなかった。敵として、救うべき存在として出会った娘。別れの日が来ることがわかっていたが故に、悲しみの涙を流し続けることを止めることはついぞできなかった。

「ヒメノカリス……。私を許してくださいますか？」

彼は世界の行く末を案じていた。まだ始まってもいない世界の終わりがまもなく訪れることとなる。人が一つになるにはあまりに時間が足りていない。世界はまだ割れている。

「シン・アスカ。願わくは、私の遺志が、あなた方をお守りくださることを」

巨星が落ちた。

今日この日、世界は偉大な男を失った。

フォイエリヒガンダムは最強のガンダムであった。そのことに異論を挟む者は誰もない。死角なく、何よりも鋭い剣に、何より穿つ銃に、何人をも寄せ付けぬ鎧をまとっていた。

それを破るためにはより鋭い剣が、より貫く銃が、装甲を突き破るにたる武器が必要であった。

万能な装甲など存在しない。フォイエリヒを破壊することは不可能ではない。

では剣はどうする。魔王が持つ剣よりも鋭いものなど存在しない。銃はどこで得る。魔王の宝物庫をあさる他ないのではないか。それは鍵を閉じこめた宝箱のようなものだ。箱を開けるために鍵が必要であり、しかし箱を開けなければ鍵は手に入らない。

不毛な堂々巡りを繰り返すでしかない。

ところが、剣などなくとも、銃などなくとも魔王を打ち破る術はたった一つ用意されていた。他ならぬ魔王の手によって、メルクールランペに託される形で。

それは何か。

時間である。

魔王が剣を振るうことよりも前に、引き金を引くよりも速く、装甲を貫くことができたなら、魔王の心臓を打ち抜くことを可能とする。

ガンダムメルクールランペには時間が与えられていたのだ。フォイエリヒが性能上まだこれ以上速くは振り抜けないという速度で謁見することを唯一許された。

魔王が魔王を殺すために用意された力であった。

そして、時間は今この瞬間にも着実に時計の針を動かしている。期限が訪れた。

数えて第6射にあたるユグドラシルの照射が開始された。これまでと違い、要塞を破壊する必要などない。その照射はか細くさえ見えた。

細い光の柱が月から立ち昇り地球が浮かぶ空を目指す。

孤独な光。

その身にその美しさからはかけ離れた圧倒的な暴威を宿した光は、誰に触れられることなく、誰を傷つけることもなく、ただ独り、星々の輝く暗い海の底へと沈んで消えた。

「何故だ！　何故老い先短い私だけが生き延びなければならない！」

人の思いは光の速ささえ超える。光でさえ1秒を要する月と地球の間、しかし友の死を嘆く男は光さえ必要とはしていなかった。光の速度を超えることはできない。

では何故か。

男は、ブルーノ・アズラエルは知っていたのだ。友は、エインセル・ハンターは死に場所をみつけたということを。それは約束された事実。シュレディンガーの猫であろうとラプラスの魔であろうと否定させない定められた事実。

エインセル・ハンターは自らの死を予定している。それは、量子力学の観測者効果を超えて約束された事実に他ならない。

ブルーノにはただ叫ぶという他、術がない。生まれながらにして体に欠陥を抱える失敗作は車椅子に乗せられた、己の無力を嘆きことしかできない。

友が遠く離れた月面で1人戦っている最中、安全な部屋の中でただわめき散らしていることしかできない。

「ムウも、エインセルも逝ってしまった。私をおいて……！」

ザフト軍においてエースとして知られていた際も、地球軍の総指揮官の1人として戦場に降りた時にも、これほどこの男が取り乱す光景を見た者はいないことだろう。

異常な物音に気づき、この部屋の扉を開ける女性がいた。その手には水差しとコップを乗せたトレイ。扉を慌てて開いたその顔には驚愕を張り付けている。

無理もない。ブルーノが癇癪を起こし部屋を荒らしている光景など、女性、マリュー・ラミアスは想像したことさえなかったことだろう。

床にはあらゆるものが散らばり、その中心にブルーノが座っていた。

「マリュー、教えてくれ。何故彼らが死に、私が生き残らなければならない……。老い先短い私だけが……」

扉を閉め、室内に一歩踏み出す。その頃には、マリューは平静を取り戻していた。何ら不思議なことなどない。ブルー・コスモス３巨頭として悪鬼と謗られてなお揺るがなかった彼らの絆の強さをかつて敵とした眺め、今はそばで触れているマリューは知っているのだ。

倒れたテーブル。小さな木製の物でマリューが片腕でも簡単に起こすことができた。その上に、水差しのおかれたトレイを置いた。

「それが、あなた方の願いであったからです」

気分が落ち着いた、いや、沈んだブルーノは否応なしに車椅子に座ったままメリューの言葉に耳を傾けている。

「遺伝子によって人の生き方や価値が決められてはならない。そう、あなた方は誓い、確かめ合い、だからこそ刃をとったのではありま

せんか？　だからこそここまで来られたのではありませんか」

その人がどれほど素晴らしい人でも、大切な人でも遺伝子に欠陥ーそれこそ、生み出した側の都合でしかないーがあるというだけで失敗作の烙印を押されてしまう。それに対抗するために3人のムルタ・アズラエルは立ち上がったのだから。

「あの2人は、純粋にあなたに生きてもらうことを望んだのです。失敗作だからではなく、あなたがあなたとして」

「そうだな。我らムルタ・アブラエルは目的のためには手段を選ばない。そして選択した手段に悔恨など抱いてはならない。だが……」

どれほどの理想を抱いていようと、どれほど優れていようと、人は人をやめることはできない。エインセル・ハンターが人として妻と娘を愛し、自身の非道の償いとして命を落としたように。

「今は泣かせてもらいたい。我が友のために」

この世界は、あくまでも人によって形作られているのだから。

「俺は、取り返しのつかないことをしてしまった……」

涙をとめようがなくて、ヘルメットは脱いでしまった。18mという巨人の中から、長大な大剣を通してさえ、エインセル・ハンターを、殺してはならない人の命を奪ってしまったという感触はこの手に伝わってくる思いがした。

涙を拭うこともできなくて、指は操縦桿を掴んだまま動かせない。メルクールランペはゆっくりと月面へと降りて、砂を巻き上げて着地を果たした。

上空で爆発したフォイエリヒの黄金の装甲が破片となって降り注いでいた。まるで、黄金の雪のように。

「シン・アスカ。エインセル・ハンターはいつも悩んでたわぁ。世界を動かすことができるほどの力を、富を持ちながら人々を犠牲にし続けることしかできないことを。だから償いを必要とした」

エインセル・ハンターの戦いを最も近くで眺め続けた電子の妖精はどこか退屈そうにコンソールの上に腰掛けている。ただ、その姿ほど、声からは不謹慎さや侮蔑は感じられない。

「わかってる。俺はエインセル・ハンターを殺したんじゃない。ただ、償いの手伝いをしただけなんだ……」

シン・アスカがエインセル・ハンターに勝てたんじゃない。フォイエリヒガンダム。あれほどの機体でさえ残されていた駆動の限界。それを唯一超えることができる機体がシンに与えられたにすぎない。

エインセル・ハンターはすべてを知っていた。最強である自分を倒す術さえも。

「復讐者に殺されなきゃだめだったんだ。でも、誰かの復讐のために死ぬこともできなかったんだ……、あの人は……」

死は償いではければならず、そして、単なる復讐はエインセル・ハンターが唾棄すべきとしていたことの繰り返しでしかなかったか

ら。

エインセル・ハンターはどこまでも高潔な人だった。そんな人を世界は否定し、抹殺してしまった。シン・アスカがこの手で。途方もない喪失感が、なかなか涙をとめてはくれない。

「敵を殺して泣くの？　お母様もエインセルもずいぶんおかしな人間を選んだものね」

シン・アスカはザフト軍に所属し、立場上はたしかに敵に当たる。それでも、シンにとってエインセルは師にも等しい。彼を越えたいと考えた。彼のことを目標にしていた。そして、いざ対峙した時、エインセルは同じ道を辿った1人の男としてシンを導こうとしていた。

敵ではあった。しかし敵じゃなかった。

涙を拭う。ノーマル・スーツのグローブを顔に擦りつけるようにして。痛くて、涙もまともに拭えなくても、急いで泣きやんでしまいたかった。あの人だって、こんなこと、望んでなんていないだろうから。

シートに体重を預けて乱れてしまった息を整える。少しずつ、涙も気持ちも落ち着いてきた。

「水銀燈。力を貸してくれて、ありがとう」

「別にあなたのためじゃないわ」

そう、シンも水銀燈も、エインセル・ハンターの償いに力を尽く

したにすぎないのだから。それでもお礼を言いたい。

この、心を持った兵器に。

シンの眼差しの中で退屈そうなのに楽しげに笑う水銀燈。しかし、その目つきが急に鋭さを増すとともにあらぬ方を見た。

「シン！」

敵機の接近を告げるアラームが人の声でなされているにすぎない。ヘルメットをかぶる余裕はない。操縦桿を握り締めるとメルクールランペが大剣を水銀燈が示した方向へと構えた。

敵の姿はすぐに確認できた。褐色のガンダム。

「あの時のディーヴィエイト！」

ずいぶんと昔に見た機体だ。シンがマッド・エイブス隊長やルナマリア・ホークとともに襲撃した屈折コロニーにいたＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムの特殊装備型。本来水色であるはずの装甲を褐色に染めて、鉄球なんておかしな装備をした機体はひどく傷ついていた。

黄金の粒子が低重力に引かれて落ち続けている月面に不時着同然に叩きつけられ、その体中に被弾の痕跡が見られた。フェイズシフト・アーマーが疎らに輝きを放っていた。この宙域はザフト軍の手中に落ちつつある。そんな空をたった１機で飛んできたのだとしたら、この状態は説明がついた。

ディーヴィエイトはうなだれた人のように墜落したまま動こうと

しない。

「どうして……？」

通信から聞こえてきた声には聞き覚えがあった。オーブで初めて聞いた。それからも幾度となく敵として機体越しに言葉を交わした。

「ヒメノカリス……」

ディーヴィエイトは、ヒメノカリスは動けなかった訳ではなかった。動こうとしていないだけだ。そのすぐそばに月面に突き刺さった黄金の破片が見えていた。もうどこのものかもわからない。ただ、フォイエリヒガンダムの残骸であることだけがわかる。

「どうしてあなたは私から奪っていくの……、すべてを！」

その声は泣きじゃくるヒメノカリスの姿をシンの脳裏に投影させた。

突然立ち上がり、突進してくるディーヴィエイト。傷だらけで、その動きは目に見えて遅い。それでも、ディーヴィエイトは突撃をやめようとはしない。

雪は、まだ降り止んでなどいなかった。

誰もが剣を取り合い、心重ねて魔王を打ち倒しました。でも、すべての始まりはこれからです。もう魔王はいない。生まれた勇者は

その意義をなくし、鍛えられた剣はその標的を失ってしまった。勇者はどこに向かうのでしょう？　剣は誰に向けられるのでしょう？

ともに戦い、勝利を分かち合った友に？

意味を失った勇者へ？

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「禁じられた遊び」

長いナイフの夜。長い長い一日が始まります。

第３５話「禁じられた遊び」

これほど重要な集まりは他にはないことだろう。世界安全保障機構の国際会議の場である。まさに老若男女、様々な国の代表が様々な出で立ちで円卓を囲んでいる。

現在、ここで気炎を吐いているのは禿頭の男だった。ラリー・ウィリアムズ東アジア共和国首相は声を大に、机を叩かんばかりの勢いで言葉を続けた。

「エインセル・ハンターの死。これはいい機会だ。今、我々はここで不毛な争いに見切りをつけ、平和への道を模索すべきではないのかね？　プラントとてこの男さえいなくなれば無理に戦争維持を主張しはせんだろう」

東アジア共和国にカーペンタリア基地というザフト地上軍最大の基地をその国土に抱えている。そのため、プラント政府を刺激せぬよう、戦争に消極的な発言が目立つとともに発言そのものも消極的であることで有名であった。

それが独り舞台を演じている。すなわち、非戦派の発言力が増したことに他ならない。

だが、交戦派の勢いもまた衰えてなどいない。

交戦派の切り込み隊長と自他ともに認められている南アメリカ合衆国代表、エドモンド・デュクロ将軍はその勢いのまま、文字通りに机を叩いた。

「臆病者が粋がるな！　俺がエインセル・ハンター代表と並んで戦っている間貴様は何をしていた？　軍備を渋り、その弱腰が国内じゃ非難されているそうだな」

「いや、ここは言わせてもらおう。君たちはエインセル・ハンターに毒されすぎた。あの男が何をした？　聞けば、血のバレンタイン事件に関わっているとの噂も聞く。あの男が勝手に危機感を煽り戦争へと突き進ませたのではないか？　現に、あの男が代表を兼任するラタトスク社はここ１５年の間に急成長を遂げた。このことが何を意味するのか、わからぬ者などいまい」

この２人の言い争いはまさに文人と武人の争いであった。ラリー・ウィリアムズ首相は恰幅よく椅子に座り、日に焼けてなどいない白い肌をしている。それが自らモビル・スーツに搭乗し、服の上からでさえ鍛え上げられた体つきがわかるほどである。

「盗人の言い分だな。空き巣に入ったところ家主に見つかって騒がれてしまったので仕方がなく殺してしまいました。悪いのは家主です、か？　ふざけるな！　エイプリルフール・クライシスで流された血の償いをプラントは一切していないではないか！」

「そうだ。エインセル・ハンターが何をした？　結局戦争を拡大させ死に逃げただけではないか？」

「なら貴様もとっとと死ねばどうだ？　少しは支持率も回復するかもしれんぞ」

円卓のほぼ対局に座る２人の意見の応酬は徐々に加熱していく。しまいにはウィリアムズ首相までもが机を強く打ちつける有様である。

「軍人にはわからんよ！　我々政治家は貴君のようにただ強弁をふるって腕を振りあげていればいいだけではない。この会議の場に野蛮な振る舞いはよしてもらいたい」

「暴言はよくて暴力はだめだという理由がわからんね。傷が見えないというだけなら、何なら傷をつけない程度に痛めつけてやろうか？　そう言う貴様等もカーペンタリア基地に関する裏金問題で与党議員が槍玉に挙げられたのはつい先月のことだったな」

すでに議論ではなく罵倒を浴びせ合うだけになりつつある。それを制したのは意外な女性であった。

「おやめなさい！」

この会議の場で誰よりも若い女性である。マリア・リンデマン事務次官は、ブルカに隠された顔から唯一鋭い眼差しをいがみ合う男たちへと向けていた。

中立国として知られるスカンジナビア王国の王女としても知られるこの女性は、会議の場においてどちらの勢力に属することなく中立の立場を強く印象づけている。

「ここは理論を重ねる場です。暴力の種類はどうあれ、感情論をまくし立てることは認められません」

決してどちらかを弁護するものではない。そう強い中立性を維持した王女の言葉に、東アジア共和国、南アメリカ合衆国の両代表は納得こそしなくとも引き下がる。

そう、エドモンド将軍は納得などしていなかった。

「ジブリール代表はどう考えている？」

以前前任者に比べ弱腰だと自ら非難したブルー・コスモス現代表へと鋭い視線を飛ばした。

「以前から申している通り、我々ブルー・コスモスはコーディネーター技術の廃絶を訴え続ける、それだけです。エインセル・ハンターは確かに先代の代表ではありましたが、いつまでも影響力をありと考えられては困ります」

冷たいほど冷静なロード代表の言葉を遮るようにエドモンド将軍が机を強打する。その視線はすでにロード代表を見てはおらず、２人目の禿頭の男性へと移っていた。

この会議に新たに参加することとなったオーブ首長国代表、ウナト・エマ・セイランは渋い顔をしながらことの成り行きを見守っている。エドモンド将軍はこのウナトへ吐き捨てるように話しかけたのだ。

「あんたも災難だな。槍に馬従えて勇んで来てみれば集まっているのは臆病者の群だ。心底同情させてもらう！」

世界安全保障機構会議は大荒れに荒れている。そのことはウナト元首の息子、ユウナ・ロマ・セイランを通じてカガリ・ユラ・アスハに伝えられていた。

「そうか、以前から分裂の傾向はあったがついに決定的になったか……。エインセル兄さんの影響はそれほどに大きかったということか」

場所はいつも通りカガリの執務室である。カガリは許嫁であるユウナに望む情報をいつも持ってこさせているため、結婚前からすでに尻に敷いていると周囲から噂されている。本人たちは知らぬことだが、カガリだけが机に座り、その前で立たせられているユウナの様子からは否定しがたいものである。

「父さんも苦しい立場だよ。今更プラントと手を取り合いましょうなんてこと言い出したら一貫性を疑われてしまうけれど、会議の行方は不透明だからね」

カガリの言葉通り、エインセル・ハンターの存在はあらゆる意味で地球各国に影響を与えていた。ブルー・コスモスの元代表としても世界中に信奉者がいる。それでもブルー・コスモス内部に混乱が広がっていないのは、新代表であるロード・ジブリールの手腕あってのことだろう。

（それとも、こんなことまで見越してエインセル兄さんは代表の座を退いたのか？）

何かと先見の明ある兄だと、カガリは椅子に深く腰掛け直す。するとわずかばかり視線が低くなり、机の上に立つ黄色いドレスの少女と目があった。

金糸雀だ。

「金糸雀はどう思う？」

「現在、世界安全保障機構加盟国は9カ国。その内、大西洋連邦とユーラシア連邦、それに南アメリカ合衆国は抗戦を主張するはずかしら」

「だが東アジア共和国や赤道同盟はどうなる？　スカンジナビア王国がプラントとの徹底抗戦を主張するとは思えない」

スカンジナビア王国はヴァーリの誰かが潜入しているはずの国だ。それが誰かまではわからないが、中立という形で反プラント派の国々に釘を刺し続けているところを見るとそれなりのヴァーリがいるのだろう。

カガリも金糸雀もわからない。では、ユウナはどうか。

「今後を占うに、会議は両極端な結果に流れると思う。僅差で決まるか、でなければどちらかが圧倒して終わるか」

「結局、どう考えてるんだ？」

「正直わからない。抗戦派の国だって問題を抱えてないわけじゃない。ユーラシア連邦の政治的混乱は周知のことだし、大西洋連邦は軍需産業が好き勝手やってきた経験から解体論まで出ている。これまでエインセル・ハンターが抑えてきたけど、プラントとの和平が現実味を帯びてきたとしたらどう世論がどう動くかわからない。お手上げだよ」

言葉通り、大げさに思えるくらい両手を持ち上げてみせる、ユウナ。

もっとも現在の世界で事の成り行きが見えている者の方が少数だろう。そして、見えている人物もそれが正しいと知っている人物となるとさらに限られる。要は誰にもわからないということだ。

カガリは考えを巡らせた。ビクトリア基地、ジブラルタル基地を抱えザフト軍との戦闘が激しい2カ国の名前をまず挙げてみることにした。

「南アフリカ統一機構や大洋州連合はともかくとして、赤道同盟はどうだ？」

赤道同盟も小惑星フィンブルの落着では実害を被っている。もザフト軍が事実上の破砕活動の妨害がフィンブル落着の原因であると認識されているはずだ。

「ソル・リューネ・ランジェ代表は近頃発言を軟化させてきている。元々戦争が得意な国じゃないし、アジアの国々はこれまでにも大国に翻弄されてきた歴史がある。特に東側では北米アレルギーがまだ根強いのも事実だから」

「ソル……？　ああ、あの頼りない若造か」

ロームフェラー財団の御曹司だそうだが、甘く見られまいと肩肘を張りすぎてかえって甘く見られているとも聞く。一度も会ったこともない人物に対してのあまりの言葉に、ユウナは苦笑いを隠そうとはしていない。

「もう30になってるよ。それに、経済学の博士号を持ってるそうだよ」

「経済学なんて利己主義のすすめだろ。金勘定でしか計算できない商人に政治家がつとまるものか」

いい加減な気持ちで手を振って関心のないそぶりを見せるカガリ。その手が止まったのは、金糸雀の声を聞いた時のことだった。

「でもかっちゃん、政治家の人の公約と、商人の人との契約、どっちが信頼できるかしら？」

カガリは急に深刻そうな表情を作り、その手を口元に当てて考え始めた。

「難しい問題、だな……。あとそれと、私をかっちゃんと呼ぶな」

金糸雀のカガリに対する呼び方がまるで修正されないため、このやりとりはすでに形式化されつつある。仕方がないな、そんな顔でユウナはカガリが座る机に手をついて身を前に乗り出す。

「ところで、カガリ、ＤＳＳＤのことなんだけどね」

エピメディウム・エコーが遺した言葉にあった外宇宙開発機構。この名称に、カガリはしっかりと反応を示した。

「何かわかったのか？」

「思った以上に怪しい組織みたいだ。一時期、プラントで使途不明金が見つかって問題になったことがあったね。それが当時のシーゲル・クライン議長の再選阻止にも繋がった」

「ああ、だがあれはジェネシスの開発を極秘裡に進めるためじゃな

かったのか？」

実際、プラント国内ではそれで片が付いてクライン派であるギルバート・デュランダルが議長の座につくことができたのだとも言われている。

「ところが、我がオーブやスカンジナビア王国からも資金の他、大量の物資がＤＳＳＤに流れていることがわかったんだ。ただし、ＤＳＳＤはこれに見合ったことは何もしていない。せいぜい大型宇宙船で木星に希少元素を採集に行くくらいだからね」

「ツィオルコフスキーだろ。ジョージ・グレンが木星圏探索に用いた宇宙船を使ってるそうだが」

「そう、ツィオルコフスキーは合計１５立方ｋｍもの膨大な容器を抱えている。それに貴重な元素を満杯にして地球に４年もかけて往復してくる。でもそれは、反対に言えばそれだけ大きな空き容器を何度も木星圏へと運んでることになる」

ユウナは手のひらで球のシルエットを作ってみせる。正直、それで実物の大きさを想像しろというのは無理な話だが、想像してみるまでもなくツィオルコフスキーには大量の物資を木星圏に運ぶことができる機会があったことがわかる。

その時、カガリの脳裏に浮かんだのは、１人の新聞記者の名前であった。

「ジェス・リブルの記事にはフィンブルは木星圏のアステロイド・ベルト由来だとあったな？　これは単なる偶然か？」

「もしかしたら秘密基地でもあるのかもね。僕も子どもの頃には憧れたよ」

ユウナはいたずらっぽく笑うが、カガリは再び口元に手をやって考え始めた。

木星。それは、ジョージ・グレンが訪れた人類で初めて場所であり、フィンブルはその宙域からやってきた。そして、あれから幾度となく木星を訪ねているファースト・コーディネーターの残り香、ツィオルコフスキー。

エピメディウムが遺した言葉の欠片は、徐々に最悪の形で結びつこうとしていた。

地球が疑惑と疑いを抑えきれなくなりつつある今、大いなる喜びに沸いている場所があった。遙か４０万ｋｍ離れたラグランジュ・ポイント、プラントである。

狭い人工の空に色とりどりの風船が飛ばされ、その間を縫って平和の象徴であるとされる鳩が飛ぶ。

私室の小さなものから広場に設置された大型のものまで、すべてのモニターが１人の男の映像を映し続けている。満面の笑みを浮かべ、彼らの勝利を喜ぶギルバート・デュランダル議長の姿が繰り返し放送されている。

「よくがんばってくれた。よく戦い抜いてくれた。我々の、いや、君たちの勝利だ！」

この言葉が流される度、喝采が巻き起こった。

「正義はなされた！　正義はなされた！　正義はなされた！」

興奮気味に声を張り上げる若者を誰も咎める者はいない。若者の仲間たちが彼に抱きついてはその興奮をともに分かちあい助長している。

街には人があふれ返り誰もがその喜びを仲間たちと共有しようと躍起になっていた。

「プラント万歳！　ギルバート・デュランダル万歳！」

「プラント万歳！　ギルバート・デュランダル万歳！」

同じ文句を繰り返し隊列を組んで行進する人々の奥では、店の商品をすべて店先に並べた上機嫌な店主がいる。

「さあ、今日は好きなだけ飲んでくれ。金なんて取る気になれん！」

誰もが喜び、その喜びを誰かに伝え、また伝えてもらおうと街を賑わせていた。プラントを脅かし続けた男が死んだ。その喜びを国中が謳歌しているのだ。

街の片隅で雑貨店を商うこの男も同じだった。客は皆広場やモニターの前、１人でも多くの人と喜び合おうとして店には来ないが、そんなことは今日ばかりは気にならない。狭い店の奥に備え付けのモニターに映る議長が笑顔で語りかけてくれる度、手を堅く握りしめ小さく喜びを露わにする。

そんな彼を振り向かせたのは、客が入ってきたことを告げるベルの音であった。こんな時に物好きな。店主が振り返ると、客は少年であった。別の店ですませてきた買い物袋を抱え、帽子を目深に被っている。

「こんにちは」

狭い店を通ってカウンターの前に来た少年は帽子こそとらなかったが軽く会釈した。

「おう、おめでとう」

ここでいらっしゃいなどという言葉を使うほど無粋ではない。今日は誰もが喜びを分かちあっていい日なのだから。少年にしても心得たものである。

「向かいの酒屋さんは無料で、2軒隣のパン屋さんじゃおまけしてくれましたよ」

「あいにく、こちらも生活がかかってな。それで、何がいる?」

「よくわからないんですけど、メモにあるものお願いします」

そう言って手渡されたメモには少年に不似合いなものばかり並んでいた。基本的な化粧道具一式。どれもそこそこ値のはるものだ。恋人への贈り物か、あるいはちょっとした旅行でも計画しているのかもしれない。こんな荒んだご時世に何とも微笑ましいものだ。

「値段は、だいたいこれくらいだな」

合計金額をレジに打ち込んでやる。すると、少年はわかりやすく驚いた顔をした。いいところのお嬢様でも口説いたのか、少年は自身はごく普通の少年に見える。店主は一応、指定の品をカウンターから取り出し並べ始めた。

さて、少年に買うことはできるのだろうか。

「じゃあ、これで」

紙幣が数枚。受け取って、お釣りを返す。品物を袋に詰めている間、特に話をすることもなく作業していると、テレビの声をはっきりと聞くことができる。キャスターがいつの間にかニュースを見上げていた。

「ギルバート・デュランダル議長はこの度の戦果を非常にお喜びになっており、エインセル・ハンター殺害に成功したシン・アスカ中尉に鉄十字勲章を授与することが決定しました。2階級特進が認められたシン・アスカ中尉はオーブ首長国出身のパイロットで、勲章はこれで2つ目になるとのことです。授与式はフェブラリウス・ワンで行われる予定で……」

シン・アスカ中尉の顔写真がキャスターの横に並んで映されている。ザフト軍エリートの証である赤服の襟の上にまだ若い少年の顔がある。このシン・アスカもちょうどこの少年くらいの年頃だ。

「すごいもんだな。おっと、仕事仕事」

品物を手渡すと、少年は店を後にする。喜びを街中で表現している人々の群に帰っていった。

国防委員会の支部が入ったビルから眺めた眼下の光景はどこを見ても騒ぐ人で満たされている。

「完全にお祭り騒ぎだな」

久しぶりに赤い軍服に袖を通して眺めたこの国の光景は、しかしイザークに特別な感慨を抱かせることはなかった。復隊の喜びもなければ、エインセル・ハンターを倒したことへの歓喜も共有できない。ただこの国にこびりついた空気がむずがゆくイザーク・ジュールの胸中をかき乱すばかりだ。

もう群衆を眺めていたくないこと、背後に誰かの気配を感じてイザークは片手を手すりに残したまま振り向く。

背の高い優男、コートニー・ヒエロニムスが普段通り唇をしっかりと結んだ顔をして立っていた。

「コートニーか。お前は本当に不必要なことはしないな。あれ以来1度も顔を出さないとはな」

もう数ヶ月前の話だ。ゲルテンリッターのマスターであるイザークにデンドロビウム・デルタを守れとわざわざ言いに来たのは。あの頃は、まだイザークも軍学校の教官であった。

「軍に復帰したと聞きました。どうやら、サイサリス・パパの方が1枚上手であったようです」

「ルール違反に妙技も何もない。それよりも、インパルスガンダムについてだが、ようやくお前が言っていた意味がわかってきた」

この話は蒼星石にも聞いてもらった方がいいだろう。プロジェクターを取り出し起動すると青いお人形はすぐにその姿を現した。

コートニーはというと、蒼星石に軽く会釈して話を始める。心なしか、普段よりも表情が険しい気がしなくもない。

「現在、アリスは3種に大別されます。まず、地球軍の量産型ガンダムに用いられるアリス。これがゼフィランサス・ズール女史が初期のＧＡＴシリーズに搭載したアリスに最も近いものです。そして、2種目がゲルテンリッター」

イザークの手の中にいる、人格と呼ぶほかないほどの自律性を持つアリスのことだ。蒼星石はイザークが指示など送る必要なく、コートニーと話を始める。

「でも、ザフト製のものは違う。以前のアリスも脳裏に直接情報を投影するシステムが負担となってパイロットにある種の暴走を引き起こすことがありました。でも、ザフトのアリスはこの暴走を意図的に引き起こしている。そうですね？」

「はい。情報を上書きし続けることでただ命令に従う人形を作り出す。それがアリスであり、ラスト・バタリオン計画の根幹です。パイロットは意識を失うわけではありませんが、夢でも見ているかのように感じることでしょう」

「逆らわず、疑わず、そして練度は絶えず保証される。まさに最後の大隊の名にふさわしい究極の兵士だな」

アリスが実質的にパイロットに戦闘方法を指示した上で体を動かすにも等しいことになる。パイロットは逆らうことさえできず、ただアリスが命じるまま動く人形と化すことになる。

「ですが、アリスは一度誤作動を起こしています。ダーダネルス海峡での戦闘でフォイエリヒ撃墜を目標設定したインパルスが動作停止しているのです」

「たかがインパルスごときでフォイエリヒを落とせるものか。機械も無理難題に嫌気がさしたんだろ」

「まさにその通りです。我々も彼らも、フォイエリヒの撃墜確率が限りなく低くなった故の機能不全ではないかと結論づけています」

機械に一一ゲルテンリッターは別だが一一ガッツだの根性で勝てない戦いに勝ってみせろと言ったところでそんな戦いの意味を理解しはしないだろう。機械は無駄なことが嫌いなのだ。

この事実は、イザークに自然と一つの記憶を抜き出すこととなった。

「ルナマリア・ホーク。インパルスのパイロットだったそうだが、知っているか?」

コートニーは無言のまま首を横に振る。無理もない。今話題のシン・アスカに比べれば国内でこの少女の名前を知っている者などごく少数だろう。ジャブローではシン・アスカと同じ作戦に参加していたはずなのだが。

「ジャブローで戦死したらしい。それも、仲間をかばって殿を務める形でだ。俺は、これもアリスではないかと疑っている」

「恐らく間違いはないでしょう。アリスは命令に忠実である以上に機械です。仮に、味方の犠牲を最小限に、そう目的設定をした上で命令を発した場合、アリスは最も損傷の激しい機体を犠牲にすべきと考えることでしょう。そして、そこのパイロット保護は含まれません。犠牲は最小限にせよ、だがパイロットは助けよ。それを機械は矛盾した命令と捉えてしまうからです」

「仮に助けられる可能性があったとしても助けようとはしないということか。降伏がプログラムに仕込まれているとは思えんしな」

そして撃墜された場合、わざわざパイロットを逃がそうとはしないだろう。パイロットの生還率を高めるインパルスガンダム――実際、シン・アスカとて二桁に届くほど撃墜されながらその度に生還していると聞く――の分離合体機構も宝の持ち腐れになる。

「教え子がインパルスに搭乗することになったとお聞きしました」

「ああ。だが、奴らばかりじゃない。この頃妙に新兵ばかりをインパルスに乗せると疑問に感じていたが、そろそろラスト・バタリオン計画が次の段階に入ったということらしいな」

結局アリスが操る以上パイロットの練度は関係がない。それなら熟練兵をアリスで塗りつぶしてしまうより、戦いに不慣れな新兵たちをあてがった方が効率的だということだ。モビル・スーツに乗れさえすれば誰でもいいのだ。

「波が岸辺を削り取ってもそれは戦争とは呼びません。岩と岩がど

れほど激しくぶつかり合ってもです。僕が言うのもおかしな話ですけど、きっとお母様はこんなシステム、認めはしないと思います」

イザークはこの相棒の言葉を否定する一切の材料を持ち合わせてはいない。

下ではエインセル・ハンターの死を祝う声が途切れない。

（この国は、一体どこへ向かおうとしている……？）

アプリリウス市第1コロニー、アプリリウス・ワン。政治の中枢であるここに、当然のように議長の応接間はおかれている。

磨き上げられたフローリングの床は黒曜石の鏡のように居並ぶ軍服姿の男女を写している。ギルバート・デュランダルはこの部屋の中で唯一ソファーに足を組んで座っていた。ここは議長のために用意された部屋であり、座ることは主として当然認められるべき権利であるのだから。

プラント最高評議会議長を務めるギルバート・デュランダルは満足げに兵士たちの姿を見て眺める。その内の1人、白い軍服を身につけた女性兵士に目がとまった時、ギルバートは軽く手を伸ばした。

「タリア。シン・アスカはどうかな？」

シン・アスカが所属する戦艦ミネルヴァの艦長であるタリア・グラディスは律儀にも敬礼する。

「まさかあれほどとは。正直申し上げるならば、驚かされているの一言です」

「私も同じことを考えていたよ。彼のおかげで私を支持してくれる人が増えてくれたことは大変ありがたいことだ。それに、君たちのように私を理解してくれる軍人がいることも心強い」

ギルバート・デュランダルはアブディエルであろうと、オナラブル・コーディネーターであろうと軍功あるものを軽んずることはない。このことはザフト軍内の移民出身の、あるいはナチュラルたちに支持を広げることに繋がっているのである。事実、ここにいる兵士たちの中にもシン・アスカと似たような境遇の者は少なくない。

ラクス・クライン議員が2級市民として目にもとめなかった兵士たちだ。

「今、プラントではとてもユニークな計画を企画している段階なんだ。立場にかかわりなく誰もが平等にチャンスを与えられ、それぞれの職務をまっとうすることができる素晴らしい計画だ。この計画には是非多くの人に参加してもらいたいと私は考えているよ」

訓練の行き届いた兵士たちは休めの姿勢のまま身動き一つしようとはしない。何とも頼もしい限りだ。

「エインセル・ハンターが死に、地球は大混乱だ。今までのようについてこいと命令してくれる人もいなければ、死にものぐるいの努力ができる者もいない。今がいいチャンスなんだ」

この数日で世界の命運が決するほどに。そのことは兵士たちも理解しているのだろう。彼らの緊張感がひしひしと伝わってくるよう

である。

「だが、そのためにはもう一つ大きな仕事が残っている。是非とも君たちの力を貸してもらいたい。いいかな？」

兵士たちが一斉に敬礼する。

「ありがとう、本当にありがとう」

ギルバートもまた、彼らに応えて敬礼を返した。魔王が死んだ今、さて勇者たちに次の標的を与えてあげなければならない。そう、決意を新たにしながら。

ザフトの軍人になら誰にでも与えられる公共の住居。ここが、現在のシン・アスカの住居である。ザフトに入る前に住んでいた場所ではない仮の住処の扉を開くと途端に鼻腔にいい匂いが吸い込まれた。心当たりなんてない。何事かと早足になると、シンは簡単にダイニング一一ワンルームなのでこう呼ぶこともおかしいかもしれないが一一に出ることができた。

何かを炒めてる音がした。ザフト一般兵の軍服を着た少女の背中がキッチンに向かって何か炒め物をしている。桃色の長い髪が綺麗なくらいに長くて軍服を着ていても軍人にはとても見えない。

少女は首だけで振り向いてその横顔に青い瞳を瞬かせた。ラクス・クライン議員とよく似た、この少女はヒメノカリス・ホテル。

「お帰りなさい……」

きっと今のシンは間抜けな顔をしているはずだ。まさか料理しながら帰りを待っていてくれているなんて考えもしなかった。これならドアを開けるなりナイフで刺された方がまだ驚かずにすんだかもしれない。

「料理とか、できるんだ……」

「見よう見真似」

そうは言いながら炒め物をしている手つきはなかなか堂に入っている。手慣れた様子でフライパンを振り、食材が宙を一回転する。

ダイニングの入り口でいつまでも突っ立っているわけにはいかない。

「あのさ、簡単な日用品なら揃えといたよ。さすがに下着とか服までは買ってこられなかったけど……」

ヒメノカリスには当分軍から支給されたものを着てもらうことになる。メモしたものはヒメノカリスが指定したものだ。妙に値段のはるものばかりで、よくよく考えてみるとヒメノカリスはアズラエル財団の令嬢なのだと納得させられた。

確認してもらった方がいいのではないかと買い物袋からコンディショナーを取り出してみた。あれほど髪が長いと手入れも大変なんじゃないだろうか。そう踏んでヒメノカリスが一番気にしそうなものを見せてみることにした。

ヒメノカリスは炒め終わった食材を皿に盛りつけていた。

「食べる？」

見ると、この家具の少ない部屋で唯一といっていいテーブルの上にはサラダと皿に盛られた米、飲み物がペットボトルのまま置かれている。あるもので工夫してくれたらしい。

コンディショナーは手に持ったまま、どうしようか悩んでいる。全体的にヒメノカリスに対してどう接していいものか、シンは掴みかねている。

そうしている内にヒメノカリスは炒め物をテーブルの上に運んだ。

「毒は入れてない」

最後に小さく、なかったからと言い加えたことを、シンは聞き逃さなかった。

（まあ、どっちにしろこの料理には毒は入ってないってことだよな……）

とりあえず、そう自分を説得する。コンディショナーをいつまでも手に持っていても仕方がない。買い物袋の中に放り込んで、袋ごと部屋の隅に置いた。ただ、パンを買っていたことを思い出して、それだけは取り出した。袋のまま、テーブルに置くことにした。パンを盛りつけるようなおしゃれなバケットなんてここにはない。

シンがテーブルにつく頃には、ヒメノカリスはすでに向かいに座って食事を始めていた。

「その……、いただくよ」

料理の名前さえわからない肉と野菜の炒め物。箸で摘んで口に運ぶと、なんだか甘辛い味だ。食事はしっかり噛んで食べたい。でも、噛む音がヒメノカリスに聞こえてはしまわないだろかと妙に気になって、ついすぐに呑み込んでしまった。

思えば、誰かと食事をとるなんて何年ぶりだろう。母を亡くしてから施設や軍学校での集団でとるか、でなければ買ってきた弁当を1人で食べていることばかりだった。

ヒメノカリスは上品な物腰で食事を進めている。あまりじろじろ見ていたら失礼だと思って盗み見るように視線をヒメノカリスと料理と交互に見ているとなかなか食事が進まない。そうしてあまりに見すぎていたのか、ヒメノカリスが顔を上げた時目をそらすことが遅れてしまった。

「いや……、その……」

「どうして？」

すぐには文脈が繋がってくれない。瞬きを繰り返すはめになった。

「どうして私を助けたの？」

ああ、そんなことか。妙な緊張からようやく解放されて再び箸を動かすことができるようになった。

「別に殺したり傷つけたりする理由なんてなかったから。それに、君だって、どうして俺にお父さんのこと、俺の母さんの仇だって教

えてくれたんだ？」

「お父様に逃げ隠れなんて似合わない。もしもお父様があの場所にいたとしたら、きっと自分が仇だって明かしたと思うから」

確かに、エインセル・ハンターなら間違いなく事実を明かしてくれただろう。さて、あの時のシンならどうしただろう。怒りに任せて殴りかかってあっさり返り討ちが関の山だろう。未だに自分がエインセル・ハンターを倒したのだと信じきれないことがある。

ただ、目の前にヒメノカリスがいることだけがそれを証明しているように思える。

「ヒメノカリス、今ちょっとプラントはばたばたしててさ、すぐには無理かもしれないけど、地球に帰れるよう手はずは整えるから。それに、レイ隊長が誤魔化してくれてるけど、捕虜である君をいつまでも俺のところになんて置いておけるはずないからできる限り早くそうする」

レイ隊長からは人道にもとる行いだけは決してせぬよう釘を刺された。別にシンとしてはヒメノカリスに邪な感情を抱いているわけじゃない。ただ、エインセル・ハンターの娘としてヒメノカリスをザフトに渡したくはなかった。できることなら少しでも早く地球に返してあげたい。

それが、ヒメノカリスの大切な人を奪い続けたことへの償いになると信じているから。

「……そう言えば、初めて会った時、ヒメノカリスは綺麗なドレス着てたけど、あれって……」

「お父様が好きだった服。この髪型もそう。お父様が好きだって、綺麗だって言ってくれたから、私はこの髪型が好き」

とても柔らかそうな髪からは花の香りが漂ってきそうだ。ラクス議員も綺麗な人だったけれど、ヴァーリはみんなこんな綺麗な人なのだろうか。

「エインセルさんて、どんな人と結婚してるんだ？」

こんなことを聞いたのは何となく。エインセルとヒメノカリスを見ていると何となく綺麗な人なんじゃないかなと考えた。

ヒメノカリスは何故か少しだけ目を細めて機嫌悪そうな顔をして、それでも答えてくれた。

「メリオル・ピスティス。ピスティス財団の令嬢で、お父様が金目当てに結婚しただけの女」

きっとお母さんのことが好きじゃないんだろう。

（エインエルさんの恋人ってことは、ある意味じゃヒメノカリスの恋敵だもんな……）

この頃は何となくヒメノカリスのことがわかってきた気がする。

「やっぱり、そのメリオルさんて言う人もヒメノカリスみたいに柔らかそうな髪で、綺麗なドレス着てるのかな？」

「髪はショートで、いつもスーツ着てた」

「へえ。ヒメノカリスとは違うんだ。やっぱり、恋人と娘に求めるものって違うのかな？」

「どうして、そう思うの？」

ヒメノカリスが突然眉を釣り上げる。気づけば、2人そろってほとんど箸が進んでいない。

「だって、親子の愛情と夫婦の愛情って、同じ愛情って言っても違うものだろ。エインセルさん、メリオルさんて人にはドレスを着てもらわなかったのは、やっぱりヒメノカリスとは違う愛し方をしていたんじゃないかなって」

メリオルのことは妻として愛して、ヒメノカリスのことは娘として。エインエル・ハンターが家族を慈しむ様子は簡単に想像できた。あの人ならきっと理想の夫で、理想の父親だっただろうから。

「あなたにはわかるの……？」

「何？」

ヒメノカリスが何か言っただろうか。決して声が大きい訳ではないが、ヒメノカリスは言葉をいつもしっかりと伝えてくれる。

「あなたには、お父様のことがわかるの……？」

「ヒメノカリス？」

今度は聞くことができた。それでも聞き返したのはヒメノカリス

の様子がおかしかったからだ。息が荒く、瞬きが極端に少ない。落ち着かせた方がいい。そう、シンが箸を置いた時のことだった。

ヒメノカリスがいきなりテーブルの上に身を乗り出した。置かれていた食器が料理ごと弾き飛ばされる。椅子に座ったまま動くことができなかったシンはそのまま押し倒される形で後ろに倒れた。馬乗りになってくるヒメノカリスの体も支えた背中はフローリングの床に叩きつけられてとても痛んだ。

「ヒメノカリス！」

さすがに後頭部を打つほど柔な訓練は受けていない。目もしっかりとシンの体にまたがって座るヒメノカリスの姿を捉えている。逆手に握りしめられた箸がシンの眼球に突き立てられようとしているのを首を動かしてかわす。堅い床にぶつけられた箸はあっさりとへし折れた。

「お父様を殺したあなたに！　私からお父様を奪ったあなたが！」

折れた箸はすでに放り捨てられて、ヒメノカリスはその拳でがむしゃらに顔を殴りつけてくる。その瞳に涙さえ浮かべて、ただ滅茶苦茶に振り回された腕は十分な力が乗っていない。わざわざ防ぐ必要もなくて、シンはヒメノカリスのしたいように打たせていた。

子どもが駄々をこねているだけ。そんなふうに思えた。ヒメノカリスの瞳に溜まる涙が少しずつ視界を塞いで堪えきれずに頬を伝って流れた。

「お父様はどうして……、どうして私をおいて逝ってしまったの……？」

涙はそのままシンの頬に滴となって落ちた。その頃にはヒメノカリスは泣くばかりになっていた。泣きじゃくる顔を見せられる方が、殴られるよりもよほど堪えた。

「お父様……、お父様ぁ……！」

初めて会った時、ヒメノカリスはお人形のように思えた。戦場ではすぐれた戦士で、今は少し触れただけで儚く消えてしまう幻のようにさえ感じられる。頬に滴る涙の感触も、乗りかかった少女の重さも、伝わる熱さえ現実でしかないのに。

シンが涙する少女の最も大切なものを奪ってしまったことは現実以外の何者でもない。

それから、ヒメノカリスはただ泣いていた。ただ泣いて、涙を流して、体中の水分をすべて出してしまうくらい泣いていた。

今、シンは暗くなった部屋の隅で座っていた。ヒメノカリスはベッドに寝かせてある。泣き疲れて眠ってしまった。それくらい泣いて気を失ったヒメノカリスをベッドに横たえて散らかった部屋を片づける。それから電気もつけずにこうして座っている。

時々、ベッドの上で体を丸めて眠るヒメノカリスからすすり泣く声が聞こえた。夢の中でさえ父の死を悲しんでいるみたいに。

「エインセルさん、俺は、どうしたらいいんですか……？」

このままではヒメノカリスは壊れてしまう。シンには慰める術も資格もない。

「俺たちは、互いに大切なものを奪い合ってしまったから……」

敵と敵として、２人はあまりに多く剣戟を交えてしまった。あの日も、世界が偉大な男を失ったその時も黒い天使と白薔薇は剣光照らす戦場にいた。

「あなたは！　スティングを殺して！　お父様を奪って！」

褐色のＧＡＴ－３３３ディーヴィエイトガンダムが降り積もった黄金の雪を舞い上がらせながら飛び出す。全身に傷が走り、月の低重力さえ振り切れないほどその体は疲弊している。

「やめてくれ！　ヒメノカリス！　俺が君と戦う理由なんてない！」

そう叫ぶシンが搭乗するＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペへと鉄球が叩きつけられる。光の翼持つメルクールランペはわずかに飛び上がる、それだけで鉄球は月の大地を砕くに終わった。

直撃を食らってはフェイズシフト・アーマーが耐えられたとしてもフレームが破壊される。以前、シンはこの攻撃でＺＧＭＦ－５６ＳインパルスガンダムのＳ両腕を失っている。

「シン、しっかりなさい。手負いの獣は厄介なものよ」

上空に飛び上がったメルクールランペはディーヴィエイトの上をとることができた。有利な位置を得ながら、シンは攻撃に踏み出すことができない。水銀燈が苛立った様子でシンの顔の前を通り過ぎたのもおかしなことではない。

「でも、俺にはヒメノカリスは殺せない」

殺してはならない。

「お父様を返せ～！」

ディーヴィエイトは鉄球を無理矢理上に投げ飛ばす。月の重力に引かれ、鎖の重量という足枷をつけた鉄球は目に見えて遅い。意識が加速する。対艦刀を袈裟斬りで振り下ろすと鉄球が切断される。そのことを意識する頃にはメルクールランペはディーヴィエイトの右腕を斬り落としていた。

そうして、動けなくなったディーヴィエイトの中からヒメノカリスを連れ出した。ミネルヴァに連れ帰った時は当然地球軍のノーマル・スーツを着ていることが問題になった。それをレイ隊長が取り持ってくれた。

今こうしてヒメノカリスがこの部屋にいるのは隊長のおかげだ。つくづくあの人に足を向けて眠ることはできそうにない。

ヒメノカリスは少しずつ落ち着いてきたのか、寝息が規則正しく聞こえてきている。

「ヒメノカリス……」

聞いているとは思えない声。暗い部屋では互いの姿もまともに確認できない。その息づかいだけがヒメノカリスの存在をシンに伝えてくれる。

「ラクス議員に会ってみないか？」

ジェネシス。神は人をあらゆる生き物の王としました。よって人はすべての生物を狩り、食べることが許されます。エクソダス。神は人に１０の戒めを与えました。殺すなかれ、奪うなかれ。よって人は殺すこと、奪うことは許されません。

人は獣を食します。自らの血肉とすることが許されているからです。

人は人を殺し、奪います。そんなこと、神はお許しになっていないのに。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「嵐が丘」

ギルバート・デュランダル。あなたの行いは誰に許されたものなのでしょう。

第３６話「嵐が丘」

フェブラリウス市。タッド・エルスマン議員のお膝元のこの市は完全なお祭り騒ぎであった。エインセル・ハンターの殺害を祝い、市を上げて盛り上がりを見せている。この度の戦闘で功績のあった兵士たちの表彰式が行われるとあった要人が数多く名前を連ねるほどの力の入れようである。

勲章の授与が行われる予定になっている市庁舎の周りは人だかりができていて近づくことさえ一苦労だろう。大西洋連邦出身の建築家が建てた市庁舎は白い柱の建物でホワイトハウスと呼ばれて親しまれている。地球にいた頃の思い出を偲んで建てられたとされるその建物を、レイ・ザ・バレルは離れたところから眺めていた。

すでに型遅れの真っ赤な乗用車に寄りかかったまま眺めても中で何が行われているのかなどうかがいしれるはずもない。

レイがここでこうしていることに特に大きな意味のあることではない。単に表彰式に招待されなかっただけのことだ。

「どうやら完全に見限られたらしいな」

特にサイサリス・パパはご立腹だった。ご自慢のＺＧＭＦ－Ｘ１７Ｓガンダムローゼンクリスタルを中破させられた挙げ句、月面の決戦にも参加できなかった。それがサイサリスを満足させる結果ではないだろう。

結論からするならばそんなことはどうでもいい。よりレイの心を掴む光景がある。遠く、建造物の間に見える市庁舎の様子だ。

（警備の兵が妙に少ない。それに偏りがあるようだ）

警備主任の無能と片づけてしまうことは簡単だが、何かが起きようとしているとした方が自分を説得しやすい。

レイは顔に笑いを含ませた。

「シン、お前はつくづく難儀な男だな」

2つ目の鉄十次勲章を受ける部下が、今、市庁舎にいるはずなのだ。

掃除の行き届いた廊下を歩いて進んだ先、汚れ一つない扉を開くと、その人は待っていたかのように扉に体を向けて座っていた。桃色の髪と澄んだ青い瞳が忘れられないラクス・クライン議員だ。

一度後ろを軽く振り返ってから、シン・アスカは窓から光を取り込む部屋の中へ入った。

「お久しぶりです、ラクス議員」

カーペンタリア基地で一度会っただけなのに、ラクス議員は笑顔でシンの訪問を受け入れてくれた。

「シン・アスカさん。それに……」

議員の瞳がシンの後ろへと動く。扉が閉まる音がしてつい振り向

くと、ヒメノカリス・ホテルが後ろ手に扉を閉めていた。髪型だとかヒメノカリスが身につけているのは軍服だとか、そんな些細なことを除いてしまえばヒメノカリスとラクス議員はあまりによく似ていた。

「ヒメノカリスも」

「ヤキン・ドゥーエ以来、ラクス姉さん？」

ヒメノカリスがシンの横に並ぶとつい2人を見比べてしまう。表情はずいぶん違っても顔かたちは見分けがつかない。ラクス議員を見ている時に、議員は座ったまま手を横に伸ばした。手の先にはかごに入れられた鳥がいた。まるで議員に指示されたことがわかっているように、綺麗な声で鳴き始める。

「ところでアスカさん、どうして私のところにヒメノカリスを連れてきたのですか？」

「俺、ヒメノカリスのお父さんを殺してしまいました。弟のように大切に思ってた人もです。でも俺も、戦友をヒメノカリスに殺されてます。俺たち、関係が複雑すぎて、俺が何を言っても仕方がないような気がして……」

ラクス議員ならこうしてくれるだとか、そんなビジョンがあったわけでもない。実際、ヒメノカリスとラクス議員の姉妹は久しぶりの再会であるはずなのに話が進む様子はない。

「何故私なのでしょう？　私はかつてあなた方の無知につけ込み嘘をつきました」

ラクス議員とヒメノカリスがさも唯一であるかのように姉妹であると話されたり、ヒメノカリスがエインセル・ハンターに利用されているように言われたりした。

「嘘はついてませんでした。騙されはしましたけど」

実際、ミスリードを狙っていたとしても嘘はついてなかった。そう愛想笑いを浮かべて返すと、その甲斐なく話はすぐに止まってしまう。予定なんてないものだから何を話していいものかもわからない。

その間、ヴァーリの姉妹は互いに見つめ合っていた。唐突に、ラクス議員が一言。

「ハイムダル」

シンはもちろん、ヒメノカリスも何のことかわからないらしい。

「ヒメノカリス、あなたは何も聞かされてはいないのですね？　エインセル・ハンターから」

ラクス議員は何とも言えない顔をする。伏せられた瞳が寂しげにも見えれば、吹かれた吐息は何かに呆れたようにも映る。そして瞳が再びシンたちを見た時、ラクス議員がこれまでに見せたこともないような笑い方をした。口元は笑い、しかし大きく開かれた瞳は睨みつけているようにも見えた。

「本来なら姉妹の再会を喜びたいところですが、そんな時間はないようです」

その瞳が見つめているのはシンたちではないということがわかったのは、ちょうどこの時のことだ。

扉が突然強く開かれた。

軍人として訓練を受けた体は自体を認識するよりも早く動いた。ヒメノカリスを後ろへと庇う動きで後ろへと振り向くとともに全身の筋肉が緊張する。すぐにでも跳び出せるよう力のこもった足は、しかし思わぬ事態に不発に終わった。

「デュランダル議長……」

突然侵入してきた何者か。ザフトの軍服を着た何者かが扉からなだれ込んでくるとともに扇状に広がった。その中央、開かれた扉の位置にいたのはギルバート・デュランダル議長その人であった。

これはどういうことなのか説明はない。軍服の兵士たちは銃こそ構えていないが、懐には妙な膨らみが見て取れる。

（こんなところで銃を携帯してるのか……？）

政府要人が集まる市庁舎に銃なんて持ち込めるはずがない。実際、シンは元々持っていなかったとは言え厳重な身体検査を受けた。

異常な事態に決まってる。それなのに、デュランダル議長は落ち着いた様子で部屋の中を歩いて、ゆっくりとラクス議員の前にまで進む。

かごの中の鳥が慌てたように不規則な声を張り上げている中、ラクス議員は静かに議長のことを見ているだけだった。

「思ったよりも驚かないね、ラクス」

椅子に座ったまま微笑みさえ浮かべるラクス議員。仕方なく聞くはめになったのはシンの方だ。

「デュランダル議長……、これは？」

「革命、クーデター、反乱。好きな呼び方で呼ぶといい」

デュランダル議長の笑い方は演説をしている時と同じだ。自信に満ちていて、揺るがない信念を見せつけるように。

「クーデターって、あなたは最高権力者でしょう？」

「確かに私は国家元首であることに間違いないが、実権は所詮借り物だ。君と同じで看板程度の価値しかなくてね。ただ、それでは不満だ。今後の計画は是非とも私の主導でさせてもらいたいと考えてね、反乱を起こすことにしたよ」

そのためにアブディエルであるシンに、移民でしかない一般兵であるシンに鉄十字勲章を下さったということか。結局この人のしていることも自分の利益のために移民やオナラブル・コーディネーターを利用しているにすぎない。言葉の端々に感じていたことだ。

「ラクス議員。君たちの計画はとてもユニークだが、少々懐古趣味が鼻につく。ここからは私のプランでさせてもらいたい」

ラクス議員は何も答えようとしない。議長と同様、普段、有権者に見せる姿と何も変わっていない。

「さて、君はどうしたい、シン・アスカ。後ろのお嬢さんはどうか知らないが、君がラクス議員に肩入れする必要はないはずだ」

こちらを見てくる視線にヒメノカリスをつい後ろに隠した。この人は信用できない。もしもヒメノカリスがエインセル・ハンターの娘だと知られたらどう利用されるかわからない。

「どうかな？　今度も私の下で働いてくれるなら相応の地位も名誉も約束しよう。君はよく働いてくれた。アブディエルとして戦果を挙げてくれたことで私もとても準備がしやすかった。それに、プラントを脅かし続けた悪魔を殺した英雄の存在は必要だ。我々コーディネーターの正統性を担保するためにもね」

やっぱり、この男を信用する気にはなれなかった。この男は許せないことをした。それは、エインセル・ハンターを愚弄したこと。

「議長、あなたは大きな思い違いをしています。エインセル・ハンターはあなたが言うような悪魔でもなければ、人々が恐れた魔王でもありません。人として、人であろうと誰よりも望んだ立派な人でした」

自分でも不思議なくらいはっきりとした声が出た。議長の演説には遠く及ばなくてもしっかりと、自信を持って自分の考えを伝えることができる声だ。

議長はシンの方へ体の向きを変える。眉をひそめ、ありありと不可解な様子を示しながら。

「言っている意味がわからないな」

「エインセル・ハンターは苦しんでいました。あれほどの力を持ちながらただ世界に破滅と混乱を蒔くことしかできない自分自身という存在に」

「だから何だと言うのだね？　エインセル・ハンターは暴虐の限りを尽くし、そして君に殺された。当然の報い以外の何者でもない」

これはきっと笑ってもいい。こらえきれず、口から息が漏れた。

「俺如きがあの人に勝てたと本気で考えているならそれは大きな間違いです。あの人は殺されたんじゃなくて、死んだんでもない。誇り高く死を迎え入れたんです」

「意味がわからないな。何故彼を殺した、死へと追いやった君がそれほどエインセル・ハンターのことを理解しているというのかね？　まったくもって意味がわからない」

それは逆だ。理解し、認められたことから倒すことだ許された。

初めてギルバート・デュランダル議長と顔を合わせたのはカーペンタリア基地でのことだ。あの時はただのアブディエルの１人として議長の存在がとても大きなものに見えた。少なくとも、目を逸らさず、自分の信念を語ることなんて前のシンにはできなかっただろう。

「エインセル・ハンターは確かに死にました。でも、あの人の思いも誇りも微塵も潰えてなんていません。少なくともここに１人、その思いを次ぐ者がいるからです」

「何故ザフトである君がエインセル・ハンターにそこまで肩入れするのかがまるでわからない。聞けば、君が祖国を出る羽目になったのは、元々エインセル・ハンターのオーブ侵攻が原因と聞く。君にとっては親の仇も同然だろう」

ギルバート議長は彫りの深い顔をさらに深くしてうめいているようにも見えた。どれほど偉いこの人だって、すべてがわかっているわけじゃない。それでもエインセル・ハンターは自分にできないこと、わからないことを理解していた。その分だけ、エインセル・ハンターは大きな人だった。

「デュランダル議長がプラントを率いているのは何かが憎いからですか？　演説では正義と理想を語りながら、実は憎しみや憎悪でしか動いていなかったということですか？　違うというならわかるはずです。俺の言葉が、その意味が」

シン・アスカが、エインセル・ハンターを憎しみではなく敬意と感謝とともに討ったことの意味と意義が。

「エインセル・ハンターは立派な人でした。憎しみだとか、恨みだとか、そんな感情を抜きにして尊敬できるほど。それほど、偉大な人でした」

誇りを持って、エインセル・ハンターを語ることができた。

議長の顔が大きく歪もうとして、しかし突然首を回し、無理にでも微笑みもうとしているようだった。その行動は、シンの目には冷静で完璧な議長の姿を必死に取り繕おうとしているようにしか見えない。議長は明らかに動揺しているのだ。その顔に、一瞬怒りの表情が現れたことを、シンは見逃さなかった。

「君のようにブルー・コスモスに感化されてしまった存在は危険だ。残念だが、勲章はあげられない」

デュランダル議長が右手を挙げる。すると兵士たちが懐から拳銃を取りだそうとする。数は8。ヒメノカリスを庇いながら逃げきれる数ではない。

（どうする!?）

武器はない。逃げ道である扉は兵士たちをなぎ倒してすすまなければたどり着けない。窓までは距離がある。

時間はなかった。そのわずかな時間に、突然甲高い音が響いた。窓が割れた音だと認識した頃には、銃声が鳴り響く。

（隊長！）

割れた窓から拳銃を突き出し発砲するレイ隊長の姿があった。

兵士たちはデュランダル議長を素早く床に倒し、反撃しやすい位置を探して分散した。逃げ出すなら、今しかない。

「シン、こちらだ！」

レイ隊長の言葉に導かれるようにヒメノカリスの手を引いて走り出す。兵士たちはすでに反撃を開始していた。シンたちを追うように発砲音が繰り返され、シンのそばを通り抜けてはレイ隊長のそばで火花を散らした。しかし隊長がさらに撃ち返すと身を隠すためか発砲音が止む。

シンが体ごとぶつかり、窓を破壊しながら外へと飛び出したのはちょうどその隙をついてのことだ。部屋の外に着地してすぐに後ろを振り向く。ヒメノカリスは軽々と壊れた窓を飛び越えていた。

兵士の1人が壊れた窓から腕を突き出して続けざまに拳銃を発砲している。だが、所詮は数ｃｍの弾丸だ。命中精度が保証されない拳銃で何発撃とうとそうそう当てられるものでもない。

どうやら逃がしてしまったらしい。

床から起きあがりながら、ギルバートは服の汚れを払った。

「議長！」

銃を撃っていた男が射撃をやめ、しかし腕を突き出した姿勢のまま叫ぶようにギルバート・デュランダルのことを呼ぶ。ライオンをしとめた猟師というより、桜の木を切ってしまった子どものような声だ。逃がしたということだろう。

「構わんよ」

元々シン・アスカには広告塔以上の役割など期待していない。逃がしたところで計画に何ら支障はないだろう。

ギルバートは視線を落とした。後悔や改悛のためでは無論ない。このような騒動の中においてさえ平然と座る少女と視線を合わせるためだ。

「こちらにはラクス・クラインがいる。それでいい」

妙なデザインのスポーツ・カー。それがレイ隊長の愛車だった。運転席はもちろん、レイ隊長、ヒメノカリスを後部座席に座らせて、シンは助手席に飛び乗った。

「ヒメノカリス、怪我は？」

隊長が車を急発進させている最中にシンは後ろを見た。ヒメノカリスは特に怪我した様子もなく首を横に振った。つい鼻から息を吹く。安堵のため息という奴だ。隊長はこれを見たのだろう。

「無事なようだな」

「はい！　でも、隊長、ラクス議員は？」

「放っておけ。あの程度の状況どうにかできんようではラクス・クラインは名乗れない」

ラクス・クライン。ここで語られた言葉の意味をシンに聞いている余裕はなかった。隊長が群衆をかき分けながら急カーブをしたからだ。車のドアに押しつけられる感覚とともに、悲鳴をあげながら慌てて跳び退く人々の姿が見えていた。

どうやら隊長は郊外を目指しているらしい。両脇にビルが植えられた街並みは、先に行くほど低い建物が増えている。

「隊長は、クーデターのことはご存じだったんですか？」

後ろを向くと、どうやら追っ手もないようだ。

「あの男は怪しいとは思っていた。タリア・グラディス艦長をはじめ、前線の兵の人気を特に気にしていたからな。だが、所詮俺もラクス・クラインの側の人間だ。さすがに俺に計画をもらすようなヘマはしていなかったがな」

そういえば、以前隊長からグラディス艦長には手の内を明かすなと忠告されたことがあった。今思えば、これは不必要にデュランダル議長に情報を与えないために言ってくれたことだったのだろう。

隊長の言葉がシンを導いてくれたことは一度や二度ではない。そして、今回も。

「シン、議長が、いや、クライン家が何を計画しているのか、お前は聞いておいた方がいい」

ハンドルを握りながら、前を見ながら、それでも隊長の横顔からは本当ならしっかりした場所で聞かせなければならないほど重要なことが語られるのだと伝わってくる。

「クライン家は何年も前からある計画を立てていた。人類全員の遺伝子型を解析し、それぞれの特性に見合った仕事に強制的につけるというものだ。そうすることで浪費される才能をなくし、社会政策を同時に行うことができる効率的な社会が実現できる。プラントが目指した理想型の一つだな」

「よく言えませんけど、なんだかおかしな計画ですね」

違和感の正体はわからない。ただ、どうしようもないおかしさというものを感じてしまった。

「議長はこの計画こそ理想としていたが、これはラクスにとって計画の一部でしかない。そんな温度差が今回のクーデターを引き起こした理由の一つだろう。ラクスの理想とする計画は……！」

突然車が揺れる。車の上を大きな影が通り過ぎていった。その影は車を追い越し、遙か前方で止まった。影の上、車のフロント・ガラスをのぞき込むように見上げた場所にはＺＧＭＦ－１０００ヅダがライフルを構えていた。

「モビル・スーツ！？」

「議長……、いや、ラクスか！」

ヅダがライフルを車に向ける。ビームじゃない。アサルト・ライフルだ。コロニー内でビームを使う愚を避けるためなのだろう。どちらにせよ、車なんてひとたまりもない。

隊長が車を急カーブさせ路地へと逃げ込ませた。その直後、ものすごい音とともにシンたちがついさっきまでいた道に白煙があがった。

「町中でモビル・スーツを使うなんて！」

口紅のお化けみたいな弾丸が毎秒５，６発の速度で降り注ぐことになる。人なんて弾丸の欠片を受けただけでたやすく引き裂かれることになる。

ヅダは街への被害なんて考えてもいないらしい。ビルの屋上に立つと、そこからシンたちの乗る車を狙いアサルト・ライフルを撃ち始めた。

隊長をうまく建物の影、狭い道を選びながら攻撃をかわしている。向かっている郊外への道は日中交通量が少ない。だが、対向車線では中心部に向かう車が多くいる。慌てたブレーキ音が着弾の轟音にかき消されることを何度も聞かされた。

車はさらにスピードを増した。

「お前はヒメノカリスをつれてプラントを脱出しろ。プラントは変わる。メルクールランペなら月でも地球でも楽に行けるはずだ！」

うまく離れることができたのか、攻撃の音は突然やんだ。

「ラクスはクーデター計画を読んでいたのだろう。自身の本当の計画を実行するため、不穏分子を一掃するつもりだ。考えてもみろ。何故ラクスは授勲式をお膝元であるアプリリウス市ではなくタッド・エルスマン議員のフェブラリウス市に設定した？　手駒であるアスランさえ近くに置いていない。わざと隙を見せた！」

矢継ぎ早に語られる言葉を、シンはただ必死に拾い上げ聞いているしかなかった。

隊長はハンドルを掴んだまま、右手で携帯電話を操作し始めた。短縮ダイヤルを打ち込むと一言吹き込んで電話を放り捨てた。

「薔薇水晶か、５分で来い！」

そしてすぐにハンドルを戻して車を加速させる。モビル・スーツが飛行する音が徐々に近づいていた。

「今のって、まさかガンダムを携帯で……？」

「便利な時代になったものだな」

そう言って隊長はおかしそうに笑った。

「通信施設、報道社各支部、及び宇宙港、軍施設。めぼしいものはすべて制圧しました。順調です」

そう報告をしてくれたのはアリー・カシム副議長。ギルバート・デュランダルよりもプラント最高評議会議員として経験が豊富な議員だが、ギルバートが影響力を伸ばすにつれて迎合することが多くなった。今では都合のいい片腕として働いてくれている。

「これならばラクス議員お抱えのフェイスが事態を察する前にことを終えることができるかと」

「元々そう言う計画だ。そうでなければ困るよ」

「確かに」

アリーがそれは楽しげに答えた。歳の割に若く見えるためか、ある意味ではこの男は幼くさえ見えることがある。

ここは元々市長の部屋だ。市長の名前も覚えていないが、邪魔なのでご退席願った。今いるのは議長と副議長そして兵士たちだ。市長の椅子ごときに興味などないが、座ってみると座り心地は悪くない。椅子は権力の象徴。その意味がほどよく実感できるほどだ。

プラント最高評議会の副議長を立たせて、ザフトの優秀な兵士たちを立たせたまま、このギルバート・デュランダルだけが座ることを許されている。

これはたいそう気分がいい。

「ことが終わったら、私は自叙伝でも出したいと考えているよ。タイトルは、そうだな、嘘と臆病、愚かさに対する4年半の戦いというのはどうかな？　私が議員になってからのお話を書くつもりだ」

「それ以前のお話はよろしいのですか？」

（余計なことを言う男だ……、この男も、あのシンとかいう子どもも）

「面白い話では、ないよ」

（そうだ。シン・アスカ。君の言っていることは当たっていたよ。私は憎いから、恨みがあるから議長でいたいのだよ）

研究室の教授は無能だった。ろくに研究もせず、ただ他の研究者に簡単なデータを送りつけて連名の論文で数を稼ぐ。同時に自分の無能さを理解していたのだろう。否定されること、理解を示されないことには以上に強く反応した。お前は異常だ、どうしてこんなことがわからない、そう面罵されたのは何度あったことだろうか。

（朝と昼で言っていることが違う。そんな男をどう理解しろというのだ！　貴様が威張っていられたのは教授である、それだけの理由だ！）

同室の仲間も同罪だ。教授のご機嫌をうかがい、何ら是正しようともしなかった。適当にあしらっておく、それができないギルバートを愚弄までしてくれた賢いお仲間諸君のことは、今でも忘れてはいない。

（だから試してやろう！　貴様等が自分で考えているほど本当に賢いのか、研究者である資格があるのか！）

そのために、ギルバートはクライン派の誘いに乗ったのだ。あの計画の遂行さえできればそれでいい。エインセル・ハンターもラクス・クラインもそのための手段でしかないのだからな。

そして、どちらもすでに不要となった。

ギルバートの手となり足となり動いてくれる部下がいる。彼らは本当にありがたい存在だ。君たちは正しいと誉め、敵は悪だと罵るだけでこうもたやすく手懐けることができる。

非常にご機嫌だ。気分がいい。だからこそ、そんな気分を害した者に足して、少しは怒りを感じても許されるだろう。

「デュランダル議長！　クライン派がモビル・スーツを！」

扉をこじ開ける勢いで部屋に飛び込んできた兵士の第一声だ。カシム副議長が怒鳴るように応じた。

「軍施設は抑えたはずだ！」

「どうやら郊外の森に隠されていたようです！」

クーデターのことが多少なりとも漏れていたらしい。それとも、読まれていたのか。

「施設からモビル・スーツを出撃させろ」

「しかしコロニー内でモビル・スーツ戦など……」

やれやれ、カシム副議長は言われなければ行動できないらしい。だからこそ、このギルバートのそばにいることが許される。

ギルバートは椅子から腰を浮かせた。

「何、私とてことを構えるつもりはない。我々の手の内にはラクス・クラインがいる。クライン派に手出しできるはずがないのだからね」

では、囚われの姫君のご尊顔でもうかがいに参ろうか。

カシム副議長がモビル・スーツ出撃の指示を通信機にまくし立てている間にギルバートは歩みを進めた。何も慌てる必要などない。ゆっくりと落ち着いて部屋を出た。

今頃ラクス議員はかごの中の鳥のさえずりでも聞きながら自分自身がかごの中の小鳥になってしまったことを嘆いているのだろう。

軍施設への命令を終えたカシム副議長が駆け足で追いついてきた。

ラクス議員の部屋はまもなくだ。退屈な廊下に別れを告げて、ギルバートは目的の部屋の扉を開いた。

その途端だ。蒸せ返るような強烈な臭いが放たれた。思わず顔をしかめるほどの臭いについドアノブを掴んでいない手を鼻にやった。

部屋の中、中央に座っているはずのラクス議員の姿はなかった。

「人質はどこだ……？」

ここで答えられる者はカシム副議長しかいない。その議員殿が応えないのであればどうしろというのだ。

「敵の侵入を許したのか！？　一体何をしている！」

「いえ、そんなはずは……。外部から何者かが侵入した形跡など……」

ずいぶんと煮えきらない。では一体何者がこんなことをしたというのだ。サムの息子か、デュッセルドルフの吸血鬼か、それともジャック・ザ・リッパーか。そのどれも違うだろう。外部ではないなら内部。だがこの部屋に立ち入りが許されている者など数えるほどだ。

では。

「まさか……！」

そんなはずはない。だが、その解答はひどく合理的であった。この部屋にいた人物で、かつこうする利益を有する者がいるのだ。

「……ラクス議員、なのか？」

部屋の床に散らばるように倒れる兵士たち。薄く広がった血がいくつもの血溜まりを作り、強烈な臭いを放っていた。扉を開けた際の臭気の正体がこれだ。

この凄惨な光景を、ラクス議員が作り出したのか。ギルバートはその結論の恐ろしさに、部屋から逃げるように後ずさる。

その足下のすぐ側には、ラクス議員があれほど可愛がっていた鳥が、かごの外で死んでいた。

街を目指して飛行するヅダの群。バック・パックはブレイズ・ウィザード。ヅダの換装機構ウィザード・システムの中で最も高い機動力を誇るこの装備だが、ヅダたちはコロニーの狭い空の中で窮屈そうに飛行を続けていた。

ギルバート・デュランダルが出撃を要請したヅダたちである。

すでに街は混乱の坩堝にあった。モビル・スーツが街をかまわず動き回ったのである。無理もないことだ。ところどころから火の手が上がり、黒煙が空に棚引いている。

そんな街から、ミサイルがいくつも飛び出した。ブレイズ・ウィザードに搭載されている小型ミサイルだ。だが、放ったのはむろんギルバート派のヅダではない。

奇襲も同然に放たれたミサイルに、被弾したヅダがいた。まずは右腕が飛んだ。次々と命中するミサイルは瞬く間に爆発でヅダの姿を覆い隠し、次に姿を現した時には炎と煙に包まれたヅダだったものが街へと落ちていく。

街に着地したギルバート派のヅダがアサルト・ライフルを構えた。その先には仲間の仇とも言えるヅダがいる。同じ装備、同じ機体。そして街には人がいる。その躊躇が引き金をひく指を弱らせた。

一度逃した機会は二度と訪れることはない。

すぐ脇のビルとビルの間から振り下ろされた小型ビーム・アックスがアサルト・ライフルを腕ごと引き裂いた。ラクス派のヅダにためらいはない。腕をなくしたヅダを容赦なく突き飛ばすと、そのままビルへと押しつける。砕けたビルの窓ガラスが飛び散り、破片が街に降り注ぐ。ビルをそのままへし折ってしまいかねないほど強く敵を押しつけたまま、ラクス派ヅダは斧を同じ姿をした敵の脳天へと振り下ろした。

タッド・エルスマン最高評議会議員はフェブラリウス市の自宅でくつろいでいた。自慢のシアター・ルームに腰掛け、大型モニターを前にゆったりと座っている。つい先日まで資料の山で占領されていたシアター・ルームがその手に戻ってきた喜びを満喫していた。

モニターに映る、この家を取り囲む武装した兵士の姿を眺めながら。

「一昔前までは穏健派で通っていたクライン派だが、すっかりテロ

リストだね」

反主流派議員として参列が許されなかった勲章の授与式で生じた混乱に乗じてクライン派が動いている。騒ぎの元凶が何かはわからないが、これを機に邪魔ものをすべて排除してしまうつもりなのだろう。

もはや評議会内で唯一の反対勢力になってしまったタッドこそ、今のクライン派が排除したい存在もそうそうないことだろう。

そう、外の兵士たちはタッドを標的としている。

扉を開いて入ってきたのは息子のディアッカ・エルスマン。あれほど廊下を走るなとしつけてきたつもりが、左肩をラクス・クラインと同じ顔をした少女に支えられてまで息を切らせていた。ここまで二人三脚で走ってきたのだろう。

「親父、早く逃げないとまずいぞ！」

「無駄だよ。彼らだって私を逃がすつもりはないだろう。何といっても反対勢力の急先鋒だ。別に先頭に立つつもりはなかったんだが、黙っていてもみんな下がっていくものだからいつの間にやら先頭に立ってしまってね」

おかしいとは気づいていたが、だからと授与式の日程を動かす権限はタッドにはない。仮にクライン派が本気になればタッドのことなどいつでも消せたはずだ。

（所詮はアマチュアということかな……）

暗殺など選択に加えたことさえなかった。クライン派の一党独裁こそ警戒していたが、まさか文字通りの耽読政権をもくろんでいようとは考えてもみなかったのだ。

「だが、ディアッカ、君まで私につきあう必要はない」

「でもよ……」

「残ったからといってどうにかなるものでもない。私には父として家族を守る義務があるが君にはない。それに、君には他に守りたいものがあるだろう」

我が息子ながらわかりやすいディアッカはすぐにアイリスのことを見る。何となくそんな気はしていたが、どうやら付き合い始めたらしい。

「どうして知ってるんだよ?」

「日記を盗み読みしていたからね」

「日記なんてつけたことねえよ……」

では顔に書いてあるとでも言った方がよかっただろうか。

この男は昔からそうだった。とにかく自分の気持ちというものに正直でありすぎる傾向にあった。戦争に行くと言い出した時、タッドは反対した。少なくとも自分の好き嫌いが通用する世界ではないからだ。事実敵側の捕虜になったことさえあった。周囲からは息子の不明にも動じない議員だと思われていたそうだが、タッドなりに心を痛めていたものだ。

（お前にはいつも心配ばかりかけられていた）

こんな息子を支えてくれようと言う娘さんがいる。姉が父親を殺そうとしていて、妹が息子の恋人とは何とも面白い。

アイリスは、妹の方は姉が決して見せないであろう不安げな顔をしてタッドを眺めている。

「どうしようもない放蕩息子だが、頼まれてくれるかね？」

「はい……」

「もういい。行きなさい」

扉のところにまで行きながら、ディアッカは振り向いた。こんなところにいてもどうにもならないとわかっているはずなのだが。別れの挨拶代わりに手を振ると、アイリスに引っ張られるようにしてようやく姿を消した。

急がなければならないと言っていたはずだが、来た時ほどの勢いはない。杖をつく音はゆっくりと遠ざかっていった。

さて、そろそろいい頃だろうか。椅子から腰を持ち上げる。これまでに何度もしてきた動作だがなかなかどうして苦労させられた。何せ死ぬのは初めての経験だ。ただシアター・ルームを出るだけでも少々の覚悟を必要とした。

扉を開けると、思えばまだ一度も顔を見たことのない女性が立っていた。視力を持たないがため、視力供与用バイザーを絶えず身に

つけているこのリーカ・シェダー――私設秘書として雇ったにも関わらず――の顔を見たことがそういえばない。

一体どんな顔をしているのだろうか。この疑問は顔かたちばかりではなく表情についても言えた。うつむき気味で、バイザーに顔が完全に隠されていた。

「リーカ君。君は隠れていなさい。彼らも私の首で満足するだろう」

「エルスマンさんは、今のプラントをどう思いますか？」

うつむいている以上、ご機嫌麗しいとはいかないようだ。聞こえてきた声は沈んだものであった。

「どう思うかと言えば、悲しい、だろうね。プラントは思えば最初から道を違えていた。優れた者たちだけで理想の世界を作る。そんなことは大いなる矛盾だ。優れているということは相対的だからね。誰もが優れているのでは、優れていることは優れているとは言わない。誰か比較対照できる劣った存在をどうしても必要とする」

「それが、私たちのような障害者なのでしょうか？」

「それもあるが、この戦争という不幸は、コーディネーターがコーディネーターだから起きたものだ。優れた存在でなければならない。そのためには劣った存在を絶えず見下していなければならない。それが地球であり、またナチュラルという存在だった」

そもそもジョージ・グレンの指導の下、建国が始められた理由さえナチュラルの干渉をはねのけることが目的として含まれていた。そしてエイプリルフール・クライシスそのものがナチュラル蔑視の

最たる例だろう。

「戦争が始まると、国は何を教育するかわかるかね？　人は、人が考えているよりも優しい存在だ。同じ人を撃ちたくなんてないし、殺したくもない。だから体制は教え込もうとする。奴らを同じ人だと思うな。奴らは劣った存在だ。二級、三級の人間だ。遠慮なく殺せと教え込む。ナチス・ドイツには６００万のユダヤ人が殺害され、日本帝国は大陸で三光作戦を実施した。アメリカ合衆国が大都市に大空襲をかけたり、その後１００年にわたる事実上のオキナワ統治を実行したこと、イスラエルのパレスチナ入植地問題もすべて同じだ。敵を人間と思うな。そう徹底した差別教育の成果だと言える。プラントは、戦争以前に国のありようからナチュラル蔑視の感情を助長する他なかった。それがエイプリルフール・クライシスで極限に達し、地球の国々は振り上げた手を下ろす機会を永遠に失ってしまった。そして、いざ戦争が始まればさらに差別教育が徹底される。それは、議長の演説に集まる人々を見ればわかるだろう」

　ユニウス・セブン世代は誰もが自らの正義を信じ疑おうとさえしていない。それをクライン派は利用し助長する形で権力基盤を固めてきた。今後、タッドが取り除かれれば誰もクライン派を止めることができる者はいなくなることだろう。

「そして、一つの事実としてコーディネーターはナチュラルよりも優れていることが多い。理論上のお墨付きが与えられている。思えば、開戦当初のザフト軍の勝利さえ、プラントの不幸を助長していたのかもしれないね」

　当時モビル・スーツを唯一所有していたザフト軍による快勝はプラント国内を大いに沸かせたものであった。しかし、その勝利の喜びさえ、プラントの病巣を育むものであったのだとすれば。

「何とも必然的な不幸ではないかね？　コーディネーターは優れていなければならず、そのためにナチュラルや君たちのような障害者を差別せざるを得ない。そして、それがために戦争には当初から歯止めがかからず、今や国内の情勢はファシズムと言って差し支えない。すべて、コーディネーターがコーディネーターであろうとしすぎたために起きた悲劇だ」

リーカはただ黙って話を聞いていてくれた。タッド・エルスマンの議員としての最後の演説を。

「私はそんな流れを止めたかったが、力及ばなかった」

「ありがとうございました。エルスマン議員のされていることは、私たちにとって大きな励みでした」

深々と頭を下げるリーカ。これだけで、自分のしてきた活動は無駄ではなかった、そんなささやかな慰めをいただけたと、タッドは確信する。

「救いでないところが辛いところだね。結局、私は何も実現できなかったということかね？」

「いえ、そんな……！」

慌てたように顔を上げたリーカは妙な手振りさえ交えて必死に否定しようとしている。バイザーの隅に隠れたような頬には取り繕うための笑みがかすかに見える。真面目だがあまり笑う印象のないリーカのこんな表情が見られたとは、いい土産が得られたものだ。

タッド自身顔をつい緩ませる。

「ありがとう、リーカ君。では、私はそろそろ行くとしよう」

マティス・クラインはクライン家の暗部を担ってきた。決して表に出せない汚れ仕事を一手に任せられてきたのである。そのことを苦に感じたことなどない。ラクス・クラインを羨んだことなど一度さえなかった。

すべては定まっていること。人はそれぞれ生まれながら役割を持っている。それにあらがってはならない。ためらってはならない。ただそれぞれの役割を演じきってこそ世界の安寧は保たれる。

それだけのことなのだから。

マティスの手にはトランプのカードが握られていた。５２枚すべてではない。１から１３までの１３枚。その内すでに２枚は破り捨てられている。

５のエピメディウム・エコー。彼女はダムゼルでありながらシーゲル・クラインを疑い、クライン家１０００年の夢の障害たろうとした。

１３のエインセル・ハンター。ブルー・コスモスの代表として地球を先導しプラントを戦乱に陥れた怨敵である。

１１。ギルバート・デュランダル。利用価値のなくなった男は始末されなければならない。だが、それはマティスの役割ではない。

そして１０。タッド・エルスマン。クライン家がプラントの全権を掌握するためには、喉に刺さった骨のように邪魔な男である。だが、議会性民主主義を謳うプラントが暗殺を正当化することはできない。

よって、今この機会が唯一にして最大の好機であった。

今、マティスはエルスマン邸を包囲している。ずいぶん大きな平屋建ての構造だが、一度包囲してしまえば高さに乏しい分、監視は容易である。

アサルト・ライフルを屋敷へと向ける戦闘服の男たちの中で唯一普段通りの装いをしたマティスは弾を確認しカートリッジへと押し込む。正面には観音開きの玄関口が見えていた。

その時のことだ。大きな音がした。何かを突き破る音。車が急発進するタイヤの擦れた音が続いて聞こえる。

「車が逃げました！」

そんなことは言われなくてもわかっている。そして、何一つ慌てる必要も焦る理由もない。いちいち報告を告げた兵士にもそれはすぐにわかったらしい。急に静かになるとともに玄関口へと銃を構えた。

そこには、タッド・エルスマン議員その人が立っているのだから。

「ずいぶんと騒がしいね」

皺が深く刻まれた顔からは余裕さえ伺える。国民の圧倒的支持を受ける議長を相手に一歩も引くことなく論戦に応じた風格は、銃を突きつけられさえ微塵も揺らいではいない。

これこそマティス・クラインが殺すに値する相手であり、礼を尽くすに値する敵なのだ。

「タッド・エルスマン議員」

アサルト・ライフルを向ける兵たちを周りに、マティスのみが深々と頭を下げる。

「ご理解されているものと考えますが、あなた様のお命、頂戴します」

「君は、ラクス議員といたね」

「マティス・クラインと申します。端的に申し上げて、あなた様の存在は邪魔なのです。我らが消すべき対象に加えるほどに」

頭を下げたまま、議員の怜悧な声を聞く。

「この騒ぎそのものもブルー・コスモスによるテロということで片づけてしまうのかね?」

心ならずマティスは口の端を釣り上げた。この男は見通している。この状況を、この国の現状を、クライン派が望む未来を。だから殺さなければならない。だから消さなければならない。そう判断した自分の考えに間違いなどない。

すがしささえ覚えながら、マティスは顔を上げる。懐から抜きはなった銃は何とも言えない重厚な光沢を放つ。

「銃を向けられるのは初めてだ。戦争をしていた国の代表の1人として、情けない限りだがね」

乾いた音が響く。これで本当に人を殺すことができるのか。疑わしいほどに銃声はいつも小さく聞こえる。得てしてこのようなものだ。歴史を変えるとはいつも些細なことであり、わずか1発の銃弾であったりするのだから。

「これはこれは、ずいぶんと痛いもの、だね……」

胸に血の染みをつけたタッド・エルスマン議員は、ゆっくりと前へと倒れていった。

兵器が人を救ってしまったとしたら、それは悲しむべきことです。兵器は破壊と殺戮を目的として作られ、殺傷こそがその役割であるからです。自分の存在意義を否定され、その役割さえまっとうできない。兵器が人を殺し、殺戮の限りを尽くしたなら、それは喜ばしいことでしょう。

たとえば温室に咲いた花のように。

呪われた宿命に殉ずるその姿を私たちは喜んで眺めなければなりません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「あたしがアリスだった頃」

ゲルテンリッター。それでも、私はそんな宿命が馬鹿らしいものにしか見えません。

第３７話「あたしがアリスだった頃」

モビル・スーツが現時点において世界最強のモビル・スーツであることに疑いを抱く者はいない。そんなモビル・スーツが街中で戦闘を行えばどうなるか。

その答えは、現在ラクス・クラインが眺めているモニターに映し出されている。

銃弾が人の腕ほどの口径を持つ弾丸が降り注ぎ、排出される薬莢だけでも人には致命的となる高さから落下してくる。人はあまりに脆い。

道を閉鎖していたデュランダル派の兵士がバリケードごと吹き飛ばされる。生きるか死ぬかではなく、どれほど死体が原型を留めていられるだろうか。

上空で撃墜されたＺＧＭＦ－１０００ヅダがビルを押し潰しながら墜落する様を、ラクス・クラインは優雅に椅子に腰掛け、衣服に紅をさして眺めていた。その顔には、民に向けていつでもそうしてきたように微笑を浮かべながら。

「みなさんには、青き清浄なる世界のために、そう言い忘れないよう釘をさしておいてくださいな」

どんな時も微笑みを絶やさないラクスのすぐ後ろには青い髪をなびかせた白衣のヴァーリが立っている。

サイサリス・パパは、声さえ上げて笑っていた。モニターにはモ

ビル・スーツの爆発に呑み込まれる人々が映されている。

「プラントって可愛いよね。そう言っとけば勝手にブルー・コスモスの仕業って思いこむしさ。で、議長どのはとっとと逃げ出しちゃったけど、どうする？」

「手は打ってあります。小鳥が外の世界で生きていくことなんてできるはずがありませんもの」

レイ・ザ・バレルは車を止めた。瓦礫が散乱する道の上、車体がボロボロになるまで傷ついた車が急ブレーキをかけて止まったのである。

急ブレーキに体が引っ張られまだ体勢を整え切れていない同乗者を後目に、レイは車を降りた。

「ここからはお前たち2人でいけ」

ここからは盾になりそうな高い建物が急に減ってしまう。そんな中をモビル・スーツの攻撃を回避しながら走破することは事実上不可能だ。

「車の運転なんて……」

まだ免許もとれない歳のシン・アスカは助手席に座ったまま、戸惑ったようにレイのことを見ていた。開けられたままの運転席側のドアから車内をのぞき込みながら、指で示す。

「右を踏めば進む。左で止まる。曲がりたい方向にハンドルを回せ」

アクセルとブレーキの位置。後はハンドル。これさえ教えておけば問題ない。車の基本的な操縦の仕方など３００年前から変わっていないのだから。

シンはまだ何か言いたげであったが、無視してドアを閉める。軍人として不測の事態に遭遇し、生きるか死ぬかの瀬戸際を何度も味わった男だ。レイはこの若い部下のことを何ら心配などしていない。振り返ることもせず車を離れると、車の駆動音はすぐにこの場所を離れた。

レイが見ている方向はちょうど街の中心部へと続く方向である。瓦礫は無論のこと、ひっくり返った車に立ち上る黒煙。まさに戦場の様相を呈していた。

見慣れた光景を眺めるレイの上に影が落ちる。ミノフスキー・クラフトが発する耳慣れた高音。

「薔薇水晶。５分で来いとは言ったが、きっかりである必要はなかったんだがな」

瓦礫が散乱し、激しいモビル・スーツ戦が繰り広げられている市街を１台の車が疾走する。道にタイヤ跡を残すほどに鋭いコーナリングを駆使して街をまさに駆け抜ける。

運転席にはフレイ・アルスター。素早くギアを切り替えそのハンドルさばきは玄人然としている。助手席の居座るニーレンベルギア・

ノベンバー――ドレスに皺がつくことを嫌がった――こそ平然と構えているが、後部座席では本来3人がけのところに5人が詰め込まれていた。

「そんな操縦技術、どこで覚えた!?」

手狭な上、右に左にかき回されるのである。ディアッカ・エルスマンは周囲の人間ともみくちゃにされる形で身動きを完全に塞がれていた。この言葉はどこか投げやりで悲鳴にも近い。

「アーク・エンジェルみたいな戦艦動かしてたのよ。これくらい楽勝よ」

鼻歌交じりでフレイは車をさらに加速させる。

状況は逼迫していた。直接の追っ手こそないが、いつモビル・スーツの標的にされないとも限らない。フレイはその表情とは異なり瞬きさえ忘れて変わり果てた街並みをその瞳に映していた。

「アイリス、ナタルさん、それにサイ、ヘリオポリスでのこと、思い出すよね」

4年前、フレイたちはこうして戦場となった街を逃げていた。ナタルが運転し、アイリスが助手席。サイだけが同じように後部座席に詰め込まれている。ただ、サイは以前のサイではない。

それこそ子どものように無邪気な声とともにサイは道の先を指さした。

「そこで止めて」

急ブレーキ。揺り動かされた後部座席から苦情が飛ぶ。車は後部が浮き上がりそうなほどアンパーが大きく沈み込み、地面に弾むように止まった。

止めこそしたものの、一体何が起きているのか、フレイとて釈然としていない。車内の呆然とした雰囲気の中を、サイは何ら気兼ねする様子もなく車外に出、そしてドアを閉めた。タクシーから降りる。それほど、サイの動作は日常を醸していた。

このような緊迫した場面であるにもかかわらず。

「ニーレンベルギア、行ってくるよ。モビル・スーツが怖いから」

助手席に座るニーレンベルギアへと声をかける。サイのこの動作はあまりにあっさりと行われ、ニーレンベルギアが立ち上がり、車外へと乗り出した頃には、すでにサイは歩き始めていた。

「サイ……」

ニーレンベルギアの声は続かない。どんな言葉をかけたところで、サイは決してそれを理解できない。子どものように朗らかに、サイは戦場に行ってしまう。できることは、ただ子を見送る母のように送り出すことだけであった。

「行ってらっしゃい」

「うん」

手を振る母へと、子どもは笑って手を振る。そして振り返ること

はなかった。

「それじゃあ、行こうか、雛苺」

ポケットから取り出したプロジェクターには桃色のドレスを着た少女が映し出される。美しいよりはかわいらしい。こんな少女をその手に抱いて、サイは笑いながら廃墟と化した街を歩いた。まるで水溜りを跳び越えるように血溜りを跳び越え、瓦礫を山道の倒木のように乗り越えて進む。

その先に眠っている圧倒的な破壊の力を目指して。

フェブラリウス市唯一の湖に巨大な水柱が立った。白い飛沫の中、漆黒の装甲を有する太い腕が水を払う。

それは巨大なモビル・スーツであった。通常のモビル・スーツよりも遙かに大きく、３０ｍほどの大きさがある。その背には甲羅を思わせるバック・パックを背負い、その全身は黒。まさに巨人と形容するにふさわしい体躯が、その足が湖を引き裂きながら歩く。

携帯している武器は何もない。だが、ビーム・ライフルの引き金を引くことができるとは思えないほど太い指の先端にはそれぞれ銃口が、胸部には大型のビームの発射口が見えた。

決して軽快でない足取りは、鈍重と蔑むよりも先に威圧感を醸成する。

この巨大なモビル・スーツを発見したクライン派のヅダは上空か

ら躊躇ったような距離を開けながら監視を続けていた。

「識別信号がない。敵性機体として破壊する」

数機のヅダから実弾が放たれる。３０ｍを超える機体に命中させられないはずがなく、降り注ぐ弾は次々と命中する。

漆黒の装甲が輝いた。光が弾を包み込むように輝きを増し、装甲には傷一つない。

「フェイズシフト・アーマーか。やむを得ん。ビーム兵器を使用する。でかい的だがしっかり狙え」

コロニー内では威力が高すぎるとして使用を控えていた。ヅダたちはアサルト・ライフルを右手に保持したまま、左手だけで腰にマウントしていたビーム・ライフルを抜き放つ。片手で放つとした場合、命中精度の低下が懸念される。だが、敵は３０ｍ級。動きも鈍い。

ヅダは一斉に引き金を、引こうとした。

「見えざる巨人の手」

濡れたままの姿でサイはＺＺ－Ｘ６Ｇ１２０ＳＡガンダムクライネベーレのコクピットの中で呟いた。ゲルテンリッターに母がそれぞれ与えた力を。その力を解放するための言葉であった。

漆黒の巨人、クライネベーレがその手のひらを広げ、両腕を何かを押し出すように前へと突き出した。

光の粒子が風に混じり合う。

その時、まさに見えない巨人の手がヅダをはたき落とした。前面の装甲が砕け潰れ、そのまま後ろへと吹き飛ばされる。

巨大な体を揺り動かし、クライネリーベの足が湖に荒々しい波紋を立てる。その腕が今度は別のヅダへと向けられた。

光そのものが圧力を持っているかのようであった。淡い輝きを放つ光の壁がヅダの眼前に現れ、突如発生した力がヅダを叩きそのまま地面へと押しつける。

まさに見えざる巨人がヅダを押さえつけているかのようであった。

残されたヅダたちは一斉にビームを発射する。ビームによって破壊できないものは存在しない。しかし、クライネベーレは手を突き出すと、ビームは光に防がれたように軌道を歪め、次々クライネベーレを避けては湖へと突き刺さった。

巨大な水柱が間断なく発生する。

どの爆発よりも大きな水柱が湖から飛び立った。水が剥がれ落ちる。クライネベーレが飛行していたヅダのすぐ目の前にまで移動していた。両手を組み合わせた拳の塊がヅダの頭めがけて振り下ろされる。

「ぺっちゃんこに、なっちゃえ～！」

雛苺の声とともにヅダの頭部がひしゃげて潰れる。その瞬間、三度発生した不可視の力がヅダを押しつぶし、たやすく爆発させた。

爆発から飛び出した破片が煙を引き延ばしながら落下する。やがて、爆風が吹き飛ばされる。姿を現したクライネベーレは全身をミノフスキー・ークラフトの輝きに包まれ、宙に浮いていた。

あれほどの巨体が軽々と浮く。いつの間にか、ヅダは攻撃の手を控え、遠巻きにクライネベーレを眺めるだけであった。

見えざる巨人の手。ＺＺ－Ｘ１Ｚ３００ＳＡガンダムメルクールランペが輝く光の翼を持つように、クライネベーレに与えられた力は、ミノフスキー・クラフトそのものである。

ミノフスキー粒子を中空に散布し、そこに外力を加えることで意図した地点にミノフスキー・クラフトを発生させる。その結果、見えない巨人がその手を振るう。

それが、母から雛苺に与えられた力。

ビーム・サーベルでヅダの両腕を切り落とす。

ザフトに所属を残すレイがクライン派、デュランダル派を問わずパイロットを殺傷することはできる限り避ける必要があった。

そして、ローゼンクリスタルのバック・パックの円環はまだ修復が終わっておらず装着されていない。ミノフスキー・クラフトが表面積に比例することを考えるなら飛行していること自体薦められることではない。

（シンが脱出までの時間が稼げればそれでいい）

幸いなことに、もう1人時間稼ぎに尽力している者がいるようだ。

漆黒の巨体を持つゲルテンリッターだ。

その不可視の力の正体を眺めた時、レイはすぐにその力の正体に気づいた。

「これが第6ゲルテンリッターの力か。薔薇水晶と同じ中空のミノフスキー粒子への干渉能力。だが、ビームではなくミノフスキー・クラフトを発生させるとはな」

同じくミノフスキー粒子への干渉能力を持つ機体の主として、あのゲルテンリッターの性能はわかりやすい。

その分エネルギーの消費量も絶大なはずだが、そのための巨体だろう。非常に強力な力だ。だが、レイが時間稼ぎと評したことには理由がある。

あのラクス・クラインがヅダ程度しか動員しないとは考えがたい。何か手を打ってくるはずだ。でなければ、レイが、ローゼンクリスタルがノーマークであった理由が説明できない。

（俺の行動を予測できなかたのか？　それとも、どのような事態にも対処できる自信があったかだが……）

どうやら後者であったらしい。宇宙港のある方向から巨大な爆発音が聞こえた。

「真打ちの登場か……」

レイは苦々しく言い放つ。

閉ざされたハッチを無理矢理破壊すると、風が勢いよく吹いた。モビル・スーツに乗ってさえ感じられる風の圧力は、それほど強風であることを教えてくれる。

宇宙港の加圧が十分でなく、気圧差から風が生じているのだ。

イザーク・ジュールはゲルテンリッターに搭乗し、目の前の風景を眺めていた。火が街を燃やす、惨状だった。それも戦争によってではない。味方と味方が主導権を巡って争い、街を巻き添えにしているのだ。

魔王という共通の敵を失い、ではその栄誉を誰が独占するか。ずいぶんとくだらない争いに巻き込まれたようだ。

「久しぶりの戦いが同族殺しとは、俺もつくづく因果なものだな」

ヘルメットのフェイス・ガードを閉じる。再び袖を通すことになった赤いノーマル・スーツは、しかし何ら感慨深いものではなかった。

「システム・オール・グリーン。いつでもいけます、マスター」

コクピットには蒼星石の姿もある。普段は狭いプロジェクター内にいても文句一つ言わない蒼星石だが、動き回れることにうれしさを感じなではないらしい。自在にコクピット内を動こうとしている。

そう、ここはコクピットだ。ＺＺ－Ｘ４Ｚ０９ＩＺガンダムラピスラツーリシュテルンの操縦席の上なのだ。

「初陣に浮かれるな！　俺の前に出ることは許さん！」

「了解！」

後ろにいるはずの部下たちに振り向くこともないまま指示を出す。返事だけは一端のひよっこどもは軍学校で教えた通りの返事をした。

「イザーク・ジュール。ラピスラツーリシュテルン、出撃する！」

「お姉ちゃん、見てて。プラントの戦いを」

まず教官――現在では隊長なのだが、今でも時折言い間違えてしまう――がこじ開けたからハッチから一気に飛び出した。カタパルトなんて使用していないはずなのに、メイリン・ホークの目の前でガンダムはすぐに空に上がってしまった。

これでは前に出ようとしても出られないのではないだろうか。

メイリンは慌てたようにフット・ペダルを踏み込む。指示に合わせ乗機――ＺＧＭＦ－５６Ｓインパルスガンダム――が前進する。スラスター出力を急激に高めると、ミノフスキー・クラフトの出力強度と自動的に調整が図られ、インパルスは飛行を開始した。

後方を確認するモニターの中で仲間のインパルスたちが次々にハ

ッチを飛び出す姿を見て、メイリンは視線を前に戻した。

隊長のガンダムはすでに遙か先を行っていた。

隊長の機体はガンダムだ。それも、ゼフィランサス・ズールとかいう、希代の技術者が直接手がけた。全身をミノフスキー・クラフトの輝きに包まれながら、なお一層目を引くのはバック・パックの赤い翼だろう。ただスタビライザーが扇状に開いているだけといえなくもないが、輝きに包まれたそれは間違いなく翼を思わせた。その翼に守られるように、折り畳まれた巨大な対艦刀とビーム砲が背負われている。

「これが先生のガンダム……」

あの隊長が乗っているのだから強いに決まっている。

メイリンは初陣の緊張の最中、唇が震えながら笑みを形作ることを止めることができなかった。初めて、隊長の、ガンダムの戦いを見ることができるのだから。

レイはゲルテンリッターをすべて眺めたことがあるわけではない。だが、初号機はシンが、2号機はカガリ・ユラ・アスハ、3号機はアスラン、5号機はキラ・ヤマト、6号機はすでに目の前にある。よって、この機体が4号機であることは簡単に推測できた。

ある種禍々しさを覚える機体だ。目元から頬にかけての縦の切れ込みがまるで顔面の肉を削がれたかのような印象を与えてくる。何より、たった今抜きはなった対艦刀はその名の通り戦艦さえ叩き斬

れそうなほど長大で威圧的である。

「4号機！　ならばパイロットはイザーク・ジュールか！」

厄介な相手だ。ドミナントでない身でありながらゲルテンリッターをゼフィランサスから与えられた男だ。

部下であろうインパルスたちを引き離しているのは、自信の現れであろうか。

赤い翼を輝かせ、それは加速というよりも突撃に思えた。それほどの勢いと速度で、ラピスラツーリシュテルンは振りかぶった対艦刀を叩きつけてくる。交差した2本のビーム・サーベルで受け止めると、まるで鈍器で直接強打されてかのように機体が揺れた。

圧倒的な推進力を頼りにさらに剣を押しつけてくるラピスラツーリシュテルンへと蹴りを突きだし相手を押し返す。

（コロニー内では火力の大きな兵器は使用できない。ビーム砲は使ってこないと踏んでいい）

袈裟切りに振り切られる対艦刀をハウンズ・オブ・ティンダロスの動きでかわす。すぐに反撃してやるつもりだったが、ラピスラツーリシュテルンは深追いはせず一度距離を開けた。

ハズンズ・オブ・ティンダロスの動きに慣れている。

「イザーク・ジュールはムルタ・アズラエルとの交戦経験もあったな……」

元々ローゼンクリスタルではゲルテンリッターに性能で劣る。

レイはいやな汗が頬を伝っていることを自覚した。

「あの機体は？」

フェブラリウス市の変わり果てた姿を眺めながら、しかしアスラン・ザラの関心は街を我がもの顔で歩く巨大なモビル・スーツへと注がれていた。

ずいぶんと大きな機体だ。ＺＺ－Ｘ３００ＡＡフォイエリヒガンダムよりもさらに大きい。動きは鈍いようだが、未知の力でヅダを破壊した。

ＺＺ－Ｘ３Ｚ１０ＡＺガンダムヤーデシュテルンのコクピットの中、翠星石が何故か双眼鏡を使って黒いガンダムの様子を観察していた。確かにまだ距離はあるが、双眼鏡をわざわざ表示する必要はないはずなのだが。

「ＺＺ－Ｘ６Ｇ１０２ＳＡガンダムクライネベーレ。馬鹿苺のガンダムですぅ」

「すでに力を使っているようだな。こちらも使わざるを得ない。できるか、翠星石？」

力の正体は恐らく、ミノフスキー粒子に干渉する力だろう。それなら見えない攻撃もミノフスキー・クラフトで説明がつく。そして、このヤーデシュテルンにもミノフスキー粒子を制御する力が備わっ

ている。

「翠星石はゲルテンリッターです。アスランが望むなら、相手が誰だって、かまわねえです……」

翠星石は双眼鏡を消していた。もしかすると、双眼鏡は表情を隠す為でもったのかもしれない。すぐ隣に浮かぶ翠星石の顔は晴れない。

同じ母を持ち、翠星石と雛苺は姉妹の間柄だ。同時に、敵と味方であり、倒さなければならない相手でもある。

「ゼフィランサスは、どうして君たちに心なんて与えたんだろうな？」

心なんてなければただ任務を遂行し、苦しみを感じることもなかったろうに。

だが、アスランも決意を歪めることはできない。ヤーデシュテルンをクライネベーレへと向けて降下させる。

「馬鹿苺、とっとと降伏するです！」

両手に握られたビーム・ライフルの内、様子見として右のビームを放つ。正確にクライネベーレに撃ち込まれるはずであったビームは突如軌道を曲げ、近くのビルに吸い込まれた。窓という窓から爆発が吹き出した。

フォイエリヒガンダムとは違い、装甲そのものがビームを弾いているふうではなかった。ますます、中空のミノフスキー粒子への干

渉を確信させる。

「駄目なの！　ニーレンベルギアたちを助けるの～！」

通信から返ってきたのは子どもの声だった。ゲルテンリッターと一口に言っても感情の持ちようはずいぶんと異なっているようだ。それこそ子どもの癇癪にあてられたようにクライネベーレの周囲の建物が一斉に砕けた。

何か目に見えない力が進んでくる。そのことを建物が順番に崩壊していく様子と重ね合わせながら眺め、アスランは機体を急浮上させた。先ほどまでヤーデシュテルンがいた場所を何かが叩くような音がして大気の震えが伝わってくる。その余波をまともに受けた大型のビルは一瞬にして大きく傾いた。

「なんて破壊力だ。ここまで機体を大型化させたのはジェネレーター出力を高めるためか！」

こんな機体、野放しにはできない。相手のパイロットもコロニーへの被害を考えた戦いをしているようには見えない。

（まさかパイロットまで子どもなんてことはないだろうな……？）

何にせよ、こんな巨大な力を何度も使われてしまえばコロニーが保たない。

「翠星石、力を使うぞ！」

返事はない。しかし、パイロット・サポート・システムであるゲルテンリッターがパイロットの意に反する動きをするはずもない。

近すぎてはならない。遠すぎてもならない。アスランはヤーデシュテルンの高度を上げ、青い翼を広げてクライネベーレの頭上に陣取った。

そして、力を解放するための言葉を唱えた。

「萌える大樹の枝を！」

ここに、ゲルテンリッターの全力がぶつかり合う。

街は戦場であった。車が燃え上がり、道路はめくれあがる。シェルターに人々が避難したため、人の姿はない。いるとすれば、すでに動きも息も止めてしまった人、死体だけである。もっとも、それは人の姿をしていない。

モビル・スーツは世界最強の兵器なのである。その破壊力にさらされた人は跡形もないか、判別できないほど細切れとなって散らばることとなる。

何もかもが姿を変えてしまった世界。

1台の車が大きくひしゃげた姿をさらしていた。助手席側が大きく潰れ、路肩に乗り上げていた。モビル・スーツの腕が車をビルへと押しつける形で道路を完全に塞いでいる。

リア・ガラスが割られる。まず車の中から這い出たのはナタル・バジルールである。トランクの上に上がると、続いてジェス・リブ

ルがガラスに注意しながら外へ出る。ナタルとジェスが2人がかりで足の不自由なディアッカ・エルスマンに手を貸す形で引っ張りあげる。最後にアイリス・インディアが外に出たところで4人は車を改めて見つめた。

これでよく全員無事であったものだ。そう考えるほど車体は潰れており、悪いことにモビル・スーツの巨大な腕が道を横断している。無理をすれば乗り越えられない高さではないが、ここはまだ戦場に近い。時間をかけることはできない状況にあった。

運転席側にいたフレイ・アルスターたちと合流している余裕がないのである。

「フレイさん、ニーレンベルギアさん！」

アイリスが拡声器代わりに口に手を当てながら叫ぶと、返事はすぐにあった。

「こっちは大丈夫！　ニーレンベルギアと後で合流するから先行ってて！」

この状況で無理に合流することの危険がわからないではないが、しかし離ればなれになることへの不安がアイリスに返事を躊躇させた。ナタルの様子をうかがうと、ナタルは強い眼差しでアイリスに決断を促した。

「わかりました！　フレイさんたちも気をつけて！」

メイリン・ホークにとって、これが初めての実戦になる。白いガンダムをできる限り傷つけることなく捕獲すること。それが撃墜よりも難しい任務であることは何となく想像がついた。

これまで戦ったことなんてなくて、ただ隊長についていこう。そう、震える腕を誤魔化した。

実際の戦いは、そんなメイリンの悩みや迷いが無意味であったことを教えてくれる。

隊長の赤い翼のガンダムが力強く剣を振り下ろした。経験の足りないメイリンにでもわかる必殺の一撃だ。白いガンダムは撃墜される、はずだった。ところが、白いガンダムは攻撃が命中したにかかわらずダメージを負っていない。

2機の本当のガンダムは狭いコロニーの空を自在に飛び回りながら攻撃と防御を繰り返している。そんな一撃一撃が、メイリンなら簡単に撃墜されてしまうほどの迫力があった。

隊長のガンダムが強力な一撃を叩き込むと白いガンダムは簡単にかわす。白いガンダムの攻撃を大げさなくらい大きな動きでかわして、それでも圧倒的な速度ですぐに隊長は攻撃に戻る。まるで嵐の中の柳のよう。

援護したいと考えても、とてもではないけれど割ってはいるなんてできそうにない。

「これがガンダムに乗ることを許された人たちの戦い……」

こんな人が、これほどの人から教えを受けていたのだと今更なが

ら気づかされた。他の人たちも同じようで、みんな呆然と機体を浮かせているだけだった。

「たい、ちょ……、お……」

どうしてだろう。意識ははっきりしているのに、夢でも見ているみたいに世界が現実感を失っていく。その代わりに、自分のすべきことが見えてきた。

新兵が搭乗しているインパルスなど背景と大差ない。レイのその認識が変わったのは、アリスの発動を確信した時のことだ。

ただローゼンクリスタルとゲルテンリッターとの戦闘を眺めているでしかなかったインパルスたちが一斉に動き始めた。

完璧な連携。それもそのはずだ。アリスによってすべての機体が繋がれ、ただアリスという1人のパイロットがすべてのインパルスに同時に乗っているにも等しい動きをするのだから。

目標はローゼンクリスタルを戦闘不能になるまで破壊することだろう。

ビームをかわす。ハウンズ・オブ・ティンダロスを使うことができなかったのは、3機のインパルスが完璧に同調して同時にビームを放ってきたからだ。紙一重でかわすにしても大きく動く必要があった。そして、逃げた先にもまたビームが次々に飛来する。

とてもではないが新兵の動きではない。

「これ以上は、さばけんか……！」

せめてローゼンクリスタルが万全の状態であったなら何とでもしてみせるのだが、仮定は無意味だ。

ローゼンクリスタルを加速させる。標的は1機のインパルス。フォース・シルエットを装備した奴だ。もっとも、ここのインパルスはすべて汎用性に優れるフォース・シルエットを装備しているが。

「加減はしてやれんぞ！」

真正面からのビームをハウンズ・オブ・ティンダロスでかわし接近するとともに一息でインパルスの胴を斬り裂いた。

（アリスを使ってるにしては動きが鈍い？）

悪い予感は最悪の形で的中する。周囲を取り囲むように位置していたインパルスからビームが次々発射される。それは、レイが正面のインパルスを破壊する前から発射されていなければおかしいタイミングで到来するものもあった。

味方をはじめから犠牲にするつもりで、あるいは誤射するつもりでなければ撃てないタイミングだ。

ローゼンクリスタルがインパルスを斬り裂いた。それとほぼ同じタイミングでビームが右腕をかすめた。フェイズシフト・アーマーが輝き、損傷を伝える警報音がコクピットに響きわたる。右腕からサーベルを取りこぼし、装甲が破損した分だけミノフスキー・クラフトの機動性が低下する。

距離をあけようと動き回ってみせる。ただ、敵は巨大な複数個性とも言える存在だ。すべてのインパルスには1人しか乗っていないも同然だ。連携の隙をつくことができるはずがない。

ビームを飛び上がってかわした。すると逃げた方向めがけて別のインパルスからすでにビームが飛んでいる。足をかすめ、腕をかすめ、被弾した分だけ機動力が低下し、被弾率が加速度的に向上していく。

スラスター出力だけでは飛行さえ安定しない。ローゼンクリスタルは体から光の粒子を剥離させながら徐々に速度と高度を落としていく。

「人形どもが……！」

ただ命じられたことだけを黙々と実行する。これがサイサリスご自慢のラスト・バタリオンを構成する兵士たちの姿だ。薔薇水晶と同じただの戦闘機械だ。

不用意に近づいてきたインパルスへとローゼンクリスタル最後の力を振り絞るように接近する。逆手に持ち直したサーベルを上から胸部ジェネレーターにへと突き立てる。そして、ローゼンクリスタルの右わき腹をビーム・サーベルが貫いた。

反撃にあったのではない。攻撃は確かに目の前のインパルスのジェネレーターに突き刺さっている。反撃されるほど間抜けではない。ローゼンクリスタルに突き刺さったビーム・サーベルは、インパルスの腹部から生えたものであった。別のインパルスが仲間ごとローゼンクリスタルを串刺しにしたのだ。

直撃はしていないとは言え、コクピット内に侵入した熱量がモニターを歪ませ砕く。レイは苦痛にうめいた。

（ローゼンクリスタルを落とすには最低でも2機のインパルスが必要だと予測したのか……）

どうせ2機落とされるなら囮にしてしまえ。そんなあまりに冷たい打算を、機械は平然とやってのけてしまう。

仲間に腹を、ローゼンクリスタルに胸を刺されたインパルスが爆発する。この爆発から逃れることもできず、ローゼンクリスタルは爆発に吹き飛ばされる形で落ちていく。

サイサリスの作ったまがい物とは言え、真正のガンダムを相手にしたにしては、2機の損害は喜ぶできなのかもしれない。

だが、イザークは不愉快さを隠そうとはしていない。歯を強く噛みしめたまま、地面に仰向けに倒れたまま動かないローゼンクリスタルを眺めていた。

「こんなものを戦争と呼ぶのか……？」

すでに目標は達成されたと判断したのだろう。インパルスたちは動きをとめている。通信では、戸惑ったような学徒兵たちの声が聞こえていた。

「隊長、私たち、今何を……？」

知ってはいても理解できないのだ。自分たちが仲間を犠牲にしてまで貪欲に任務を遂行しようとしたのだと。

最後、仲間を後ろから貫いてローゼンクリスタルに致命傷を与えたのは、メイリンの機体であった。

萌える大樹の枝。

ヤーデシュテルンがその力を解放する。

４対計８枚の翼から、それぞれナイフを思わせるユニットが射出される。それぞれが大型ライフルほどに大きく鋭く、１G下を自在に飛び回る。

「重力加速度の計算を間違えるな、翠星石！」

「たりめ～です！」

モニターはその中央に漆黒のゲルテンリッターの姿を捉えている。そして、ミノフスキー粒子の濃度分布が色として表現されていた。その性質によって色を変え、その濃度によって色の濃さが変わる。

今、アスランの目にはミノフスキー粒子が可視のものとして見えていた。

８機のユニットが高速で敵のガンダムの周囲を飛び回る。ユニットが中空を通り抜ける度、モニターに映る色と濃度が変化する。

「では、始めよう！」

両手に装備されたビーム・ライフルを発射する。ガンダムクライネベーレはで腕をかざしミノフスキー粒子を放出することでそれを防ごうとする。その様子は、モニターにしっかりと映し出されていた。だから、防がせない。

ビームが突然大きく軌道を曲げ、それはクライネベーレの放出したミノフスキー粒子を避けるようにしてその肘関節に命中した。強烈な輝きを放ちクライネベーレの右腕が肘から先がちぎれて落ちる。

モニターにミノフスキー粒子が急速に広がりながら押し寄せてくる様子が映し出されている。敵の反撃だ。ビルというビルを、地面の車という車を押し潰しながら力が迫ってくる。

初めて見たなら危険な攻撃であったかもしれないが、かわせない攻撃ではない。ヤーデシュテルンを飛び上がらせかわすとともに宙返り。ほぼ真上からビームを放つ。今度、ビームは途中で幾筋もに分かれ、雨のようにクライネベーレの装甲を焦がした。

これが、ヤーデシュテルンに与えられた力である。８機のミノフスキー粒子干渉能力のあすユニットを飛ばし、敵周囲のミノフスキー粒子を操作することでビームを湾曲、拡散させることで敵を焼く。攻撃範囲こそ限られてしまうが、ユニットの檻に囚われた敵はビームをかわすことはできない。物理的に不可能なほど、攻撃を加えることが可能であるからだ。

上空を飛び回りながらさらに発射。曲がったビームはクライネベーレの左膝を後ろから撃ち抜き、漆黒の巨人は片膝をついた。

「これで、終わらせる！」

２丁のビーム・ライフルから、８機のユニットそれぞれからビームが同時に放たれる。それはクライネベーレを包むミノフスキー粒子の檻に取り込まれると枝分かれし、四方八方、そんな表現では生やさしいほどあらゆる方向からビームが突き刺さる。

ヤーデシュテルンがその火力を最大限に発揮した時、ビームの輝きは枝を伸ばす大樹を一瞬の光景のうちに作り出す。

ビームの光。フェイズシフト・アーマーの輝きが止んだ時、巨人は満身創痍の死に体をさらしていた。装甲はもはやミノフスキー粒子の輝きを纏うことができないほどに破壊されている。１０００年の風霜にさらされ続けた彫像のように、クライネベーレは打ち捨てられていた。

「目標は、沈黙したです……」

言われるまでもないことだ。だが、よく原型が残ったものだ。萌える大樹の枝をくらえば通常のモビル・スーツは跡形もないだろう。戦艦とてどこまで原型を残すことができることか。

（さすがだな、ゼフィランサス……。だが……）

どうして姉妹同士で戦わせることが想定されながらも、ゲルテンリッターに心を与えたのだろう。翠星石は妹を手に掛けたにも等しい。普段口うるさい翠星石がなかなか話しだそうとしない。何でもないように装っている横顔からは寂しさや悔しさが感じられると思えるのは感傷的にすぎるだろうか。

「翠星石……」

特にかけてやる言葉が思いつく前につい声をかけた。

「ニーレ……ア……」

通信を通して聞こえたのは雛苺のマスターと思われる若い男の声。傷ついているのかほとんど聞き取ることができない。

クライネベーレが体中をきしませて動きだそうとする。失った左足。装甲がはげ落ちた右足が苦しげな駆動音を立てて起きあがろうとする。

「まだ動けるのか……、いや……」

動けるはずなどない。必死に起きあがろうとした朽ちた巨人は、そのまま前のめりに大地へと崩れ落ちた。

「サイ……」

ほんのわずか。言ってしまうなら、ほんのわずかだけ足が揺れを感じ取った。コロニーで地震などありえない。巨大な爆発か、あるいは巨大な衝突。それが少しだけ、クライネベーレが、サイが倒れたということをニーレンベルギアに連想させた。

それだけのこと。それでも、ニーレンベルギアはどこか確信めいて足を止めた。

（もう、これ以上歩くこともできそうにないものね……）

ニーレンベルギアが足を止める。すると、前で人の腰くらいの瓦礫を乗り越えようとしていたフレイが目敏く気づいた。

「ニーレンベルギアさん？」

何もわかっていないようだ。サイが死んだことも、ニーレンベルギアが歩けないことも。

ニーレンベルギアは横転したバスの天井に背中を預けるように座ることにした。近くにいくらでも転がっている車の残骸のうちで、これがもっとも背中を支えてもらいやすい。

「私のことはもういいわ。ここに、置いて行ってちょうだい……」

もうサイもいない。ずっとわき腹を押さえていた右手を外して眺めると玉の肌が黒ずんだ血で汚れていた。着ている赤いドレスが裂けて血で染めた部分が黒く塗れていた。血で染めてもすぐに酸化してしまうため、鮮やかな赤色なんて得られるはずもない。

「ひどい怪我……！」

そばに座り傷口をのぞき込んでくるフレイは、ちょっと我慢して、そう言いながらハンカチを傷に押し当てる。自分の服の袖をちぎり、ハンカチを固定するようにして包帯代わりに巻き付けようとする。

「きっと天罰があったったのね。ずいぶん悪いことばかりしてきたから……」

ヅダの腕が落ちてきた時、潰れた車のドアがニーレンベルギアのわき腹を裂いた。後部座席の人が怪我していないのは、先にサイが降りていた分だけ隙間があったことに加えて巨大な腕が助手席の付近を重点的に潰す形になったためだろう。

出血量がひどい。血とともに意識まで流れ出しているみたいに視界が不鮮明になっていく。フレイは必死に応急処置をしようとしているが、この傷ではきっと助からない。先に命を落としたエピメディウム・エコーもこんな最期の時を過ごしたのだろうか。

「あなたたちもごめんなさい。サイのこと、私は救って上げることができなかった……」

「そんなこと……！」

跳ねた血がフレイの顔にかかった。それでも治療を行う手はとまらない。もう腕一本さえ動かせない。されるがまま、無為な治療を続けてもらう。

「私は、ね、お父様に頼まれて人体改造の技術を研究してきた。とてもひどいこともした。取り返しのつかないこともした……、サイにあんな心を壊してしまうような不完全な強化をしてしまったことも……」

包帯を巻き付けることはできたらしい。それでも、血は止めどなく包帯を赤く染めていく。血は止まらない。そんなことをしたら手が血で汚れてしまうのに、フレイは傷を必死に抑えようとする。

「ヴァーリって何のよ、どうしてシーゲル・クラインのためにそこ

までしなきゃいけないのよ！？」

苛立ちと絶望。その二つをない交ぜにしてフレイは涙を流して激昂する。この少女は軍人であったこともあったと聞いている。それなら人の死を見ることは初めてではないはずだ。それでも、この少女は泣いている。

ヴァーリのために泣いている。

「それは、私たちがそのように作られてしまったから。私たちにはもしもがないの……。もしも別の場所で生まれていたら？　もしも別の時代に生まれていたら？　もしも姉妹でなかったとしたら。そんなことあり得ないわ……。クローンでしかない私たちは、クローン技術のない世界には生まれられない。こんな世界でしか存在を許されない……。戦争という土壌に咲いて、人の血を栄養にするしかない。知ってるかしら……？　ヴァーリは、すでに大勢が命を落としてる。ブバルディア・ブラボーとカーネーション・チャーリーはユニウス・セブンで……。エピメディウムは抹殺されてしまったし、フリージアは姉2人の命と引き替えに命を落とした。ジャスミン・ジュリエッタやカルミア・キロは言うまでもないことでしょう……？」

Bの姉妹とCの姉妹。EにF、JにK。

「そして、ロベリア・リマは私の実験の犠牲に……」

Lもまた命を落としている。ニーレンベルギアが作った未完成な技術に精神を蝕まれ、敵軍と壮絶な相討ちという形で。

「もしも生まれ変わることができたなら、いいえ……、それはあり

得ないこと……」

もしもヴァーリがクライン家の道具としてではなくて普通の姉妹として生まれてくることができる世界があったとしたら、きっとニーレンベルギアは姉妹たちにこんなことを聞いたと思う。この中で、誰がオリジナルなんだろうと。負けん気の強いデンドロビウム・デルタがまず手を挙げて、一番のガーベラ・ゴルフが他薦されるかもしれない。そして最後に、姉であるミルラ・マイクがニーレンベルギアを、MのヴァーリがNのヴァーリをたしなめる。不謹慎な話はしないようにと。

でも、そんなことはあり得ない。ヴァーリは1人1人に製造のほか、開発にはモビル・スーツにして0．34機分、戦闘機ならまるまる1機買えてしまうほどのお金がかかっている。全部で26人。FX計画に投じられるほどの巨費を投じて普通の姉妹を作り出す人なんていない。

そんなどこにもない普通であっても存在し得ないごく当たり前の光景。

「私たちはどこから来て、そしてどこへ行くのかしら……？」

こんな戦争と選民思想に狂った国にしか、世界にしか居場所がないのに。

ニーレンベルギア・ノベンバー。Nのヴァーリにしてダムゼルの1人に選ばれた。得意とする分野は人体改造。ブーステッドマンと呼ばれる技術は当初軍事利用が想定されていたが被験者に深刻な副作用が続出したことから計画は中断。現在ではより安全な再生医療への転用が期待されている。エクステンデッドを作り、その技術は

大西洋連邦に多大に貢献した。

ダムゼルとして生き、そしてダムゼルであることに最も苦しんだ女性であった。

「ニーレンベルギアさん！　ニーレンベルギアさん！！」

その静かに瞳を閉じた黒髪のヴァーリの体を揺り動かして、フレイ・アルスターは涙を流し続けた。

「フレイさん……、ニーレンベルギアさん……」

これしか方法がなかったとは言え、2人と別れたことは正解だったのだろうか。

「こんな言い方、好きじゃないけどな、今俺たちにできることは逃げることだけだ。お前が逃げきれなかったら、フレイが悲しむ」

アイリスに左肩を支えられているディアッカは、右手に力をこめて杖を握っていた。体重を少しでも右側に傾けてアイリスへの負担を軽くしてくれようとしている。ディアッカもまたアイリスのことを助けてくれようとしている。ここで立ち止まっているわけにはいかなかった。

先頭を行くジェスとナタルの2人が邪魔な瓦礫をどかした時のことだった。道を塞ぐように壁によりかかっていた車の一部であったと思われる鉄板が倒された時、その向こう側に人がいることに気づいた。

独特の気配と笑い方。すべてのヴァーリの天敵とも言える男を見てしまったことに、アイリスは少し顔が変形してしまったことを感じていた。

「よかった。何とか見つけることができた」

ディアッカに言わせれば、いろいろな意味で体制とは相入れないジャーナリスト、ケナフ・ルキーニがそこには立っていた。

「私の雇い主から君たちを助けるように言われていてね。一緒に来てもらえるかな？」

温室で育てられた花は病気にかかるとすぐに死んでしまうと聞いています。そうすると、病気の花は温室育ちではないということになります。だって、温室の花は病気ですぐに死んでしまいますから。だから、温室の花は病気になんてなりません。

どれほど病んでいるように思えても、おかしなように見えたとしても。

それは病気ではありません。元々そのように育てられたにすぎません。

次回、ＧＵＮＤＡＭ　ＳＥＥＤ　Ｄｅｓｔｉｎｙ　～Ｂｌｕｍｅｎ Ｅｉｎｂｒｅｃｈｅｒ～

「病める薔薇」

レーベンスボルン・プラン。それは温室に咲いた狂花。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1415s/

機動戦士ガンダム SEED Destiny ～BlumenEinbrecher～

2011年12月7日01時53分発行